ISSN 1882-9775

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 19 （2007）年度

奈良市教育委員会

2010

1：平城京跡（右京一条南大路）の調査
第 578 次　唐三彩【本文 35 頁】

2：平城京跡（右京一条南大路）の調査
第 587 次　線刻石【本文 37 頁】

3：平城京跡（右京一条南大路）の調査
第 578 次　塼仏 1【本文 37 頁】

4：平城京跡（右京一条南大路）の調査
第 587 次　塼仏 2【本文 37 頁】

5：西大寺旧境内の調査　第 23 次　土坑墓ＳＸ 71【本文 38 頁】

6：西大寺旧境内の調査　第 23 次　土坑墓ＳＸ 71 出土青磁椀・小皿【本文 38 頁】

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 19 (2007) 年度

奈良市教育委員会

2010

例　言

1．本書は、平成 19 年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財に関する各事業の概要と埋蔵文化財調査センター紀要を収録したものである。ただし、平成 19 年度に実施した調査のうち、平城京跡第 579 次、黄金塚古墳第 1 次調査については次年度報告の予定であるため、本書には収録しない。平成 18 年度に実施した平城京跡第 553- 1 ・ 2 次調査については、平城京左京五条四坊十五坪に係わる部分を平成 19 年度分と併せて報告し、平城京跡第 549・569 次調査についても隣接箇所を調査した平成 19 年度調査分と併せて本書に収録した。さらに、平城京跡第 596 次調査の近接地で平成元年度に実施した市試掘 89-23 次調査の調査成果も付載として本書に収録した。

2．平成 19 年度の埋蔵文化財調査に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局　生涯学習部（当時　平成 20 年度より教育総務部に名称変更）
文化財課
課　　長　　塩津利治
課長補佐　　西崎卓哉

埋蔵文化財調査センター
所　　長　　森下惠介
所長補佐　　中島宏一
調査第一係　係長　森下浩行　技術職員　　秋山成人　松浦五輪美　宮﨑正裕
原田憲二郎　久保清子　山前智敬
池田富貴子
嘱託職員 大原　瞳
調査第二係　係長　鐘方正樹　技術職員　　安井宣也　武田和哉　中島和彦
池田裕英　原田香織　大窪淳司

庶　務　係　係長　藤井雄二　事務職員　　酒井真弓

3．発掘調査、出土遺物整理、保存活用等の各事業に関しては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、田原本町教育委員会、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。

4．各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。
遺跡の略記号は下記のとおりである。
ＨＪ　平城京跡　　ＤＡ　大安寺旧境内　　ＧＧ　元興寺旧境内　　ＳＤ　西大寺旧境内
ＴＩ　東市跡推定地　　ＫＩ　紀寺推定地　　ＫＧＺ　黄金塚古墳　ＭＫ　南紀寺遺跡
ＮＲ　奈良町遺跡　　ＴＫＪ東九条平城

5．古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものがある。

6．本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。
ＳＡ（柱列・塀）、ＳＢ（掘立柱建物）、ＳＤ（溝・濠・溝状遺構・暗渠）、ＳＥ（井戸）、ＳＦ（道路）、ＳＫ（土坑）、ＳＸ（その他）
また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

7．本文中で示した過去の調査の実施機関は、調査次数の前に下記の略記号を使用し表記した。
国　―　独立行政法人奈良文化財研究所（旧奈良国立文化財研究所含む）
県　―　奈良県教育委員会　および　奈良県立橿原考古学研究所
市　―　奈良市教育委員会

8．本書で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。
奈良時代　軒　瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』 奈良市教育委員会　1996
　　土　器：『平城宮発掘調査報告書ＸＩ』 奈良国立文化財研究所　1982
古墳時代　須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
　　埴　輪：川西宏幸「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』塙書房　1988
　　小浜　茂「円筒埴輪の観察視点と編年方法―畿内円筒埴輪編年の提示に向けて―」『埴輪論叢』第４号　埴輪検討会　2003
弥生時代　土　器：奈良県立橿原考古学研究所『奈良県の弥生土器集成』2003

9．発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」（1/2,500）を、また調査地位置図については、国土地理院発行の1/25,000の地形図（1/25,000）を利用した。

10．本文中において示した位置の表示値は、平面直角座標系第Ⅳ系（世界測地系）の数値である。なお、座標値の表・図中の標記については単位（m）を省略した。

11．この報告に関する調査記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

12．第1・3章の執筆は、当該調査と遺物整理を担当した奈良市教育委員会教育総務部文化財課職員が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。第2章は分析機関の報告を再編集して構成した。第4章は文化財課職員が執筆した紀要を掲載した。

13．本書の編集は平成21年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長 森下惠介、同主任 森下浩行・鐘方正樹の助言を得て、久保邦江が担当した。

目　次

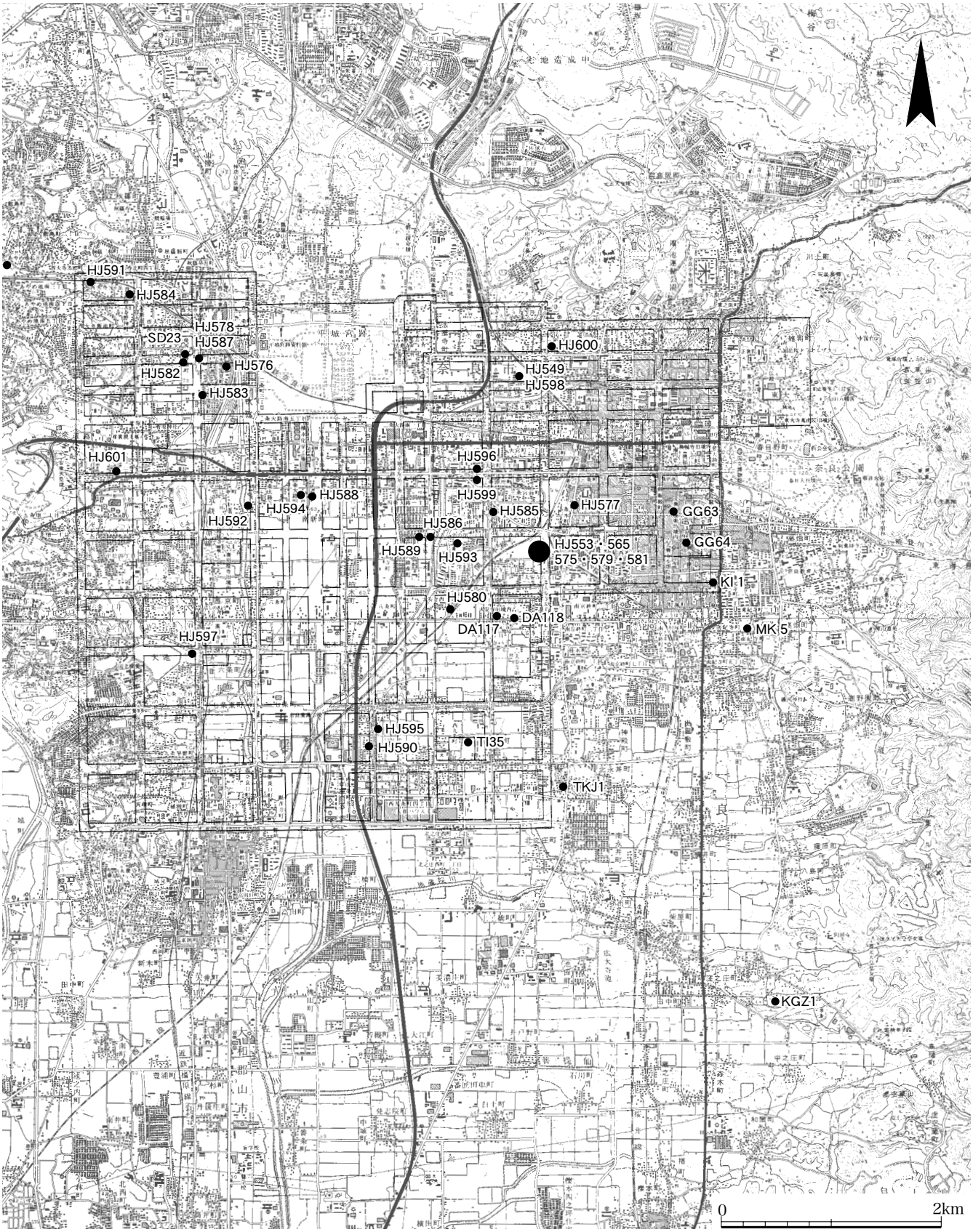
巻首図版…… Ⅰ～Ⅱ
例言・目次…… i ～ v

第１章　平成 19 年度埋蔵文化財調査概要報告 …… 1
１．ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査 …… 2
平城京跡（左京五条四坊十五坪・東四坊大路）の調査 第 553・565・575・581 次 …… 3
２．近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る発掘調査 …… 32
（１）平城京跡（右京一条南大路）の調査　第 578・587 次…… 33
（２）西大寺旧境内の調査　第 23 次 …… 38
３．平城京跡（右京二条二坊八坪・九坪）の調査 第 576 次…… 41
４．平城京跡（左京四条五坊六坪）の調査 第 577 次…… 46
５．平城京跡（左京六条三坊七坪）の調査 第 580 次…… 48
６．平城京跡（右京二条三坊一坪）の調査 第 582 次…… 50
７．平城京跡（右京二条二坊十四坪）の調査 第 583 次…… 51
８．平城京跡（右京北辺四坊二坪）の調査 第 584 次…… 52
９．平城京跡（左京四条四坊三坪）の調査 第 585 次…… 55
10．大安寺西遺跡・平城京跡（左京五条三坊一坪・東二坊大路）の調査 第 586 次…… 56
11．平城京跡（朱雀大路）の調査 第 588 次…… 57
12．大安寺西遺跡・平城京跡（左京五条二坊十六坪）の調査 第 589 次…… 59
13．平城京跡（左京八条一坊十四坪）の調査 第 590 次…… 62
14．平城京跡（右京北辺四坊八坪）の調査 第 591 次…… 64
15．平城京跡（右京四条二坊三坪）の調査 第 592 次…… 65
16．平城京跡（左京五条三坊八坪・東三坊坊間路）の調査 第 593 次…… 67
17．平城京跡（右京四条一坊二坪）の調査 第 594 次…… 72
18．杏遺跡・平城京跡（左京八条二坊二坪）の調査 第 595 次…… 77
19．平城京跡（左京三条三坊十二坪・東三坊坊間東小路）の調査 第 596 次…… 78
付載　市試掘 89-23 次調査（左京三条三坊十二坪） …… 82
20．平城京跡（右京七条三坊一坪・西二坊大路）の調査 第 569・597 次 …… 83
21．平城京跡（左京二条四坊十坪・東四坊坊間路）の調査 第 549・598 次 …… 86
22．平城京跡（左京四条三坊九・十六坪・東三坊坊間東小路）の調査 第 599 次 …… 90
23．平城京跡（左京二条五坊北郊）の調査 第 600 次…… 94
24．平城京跡（右京三条四坊五坪）の調査 第 601 次…… 100
25．平城京跡東市跡推定地・東堀河の調査 第 35 次 …… 104
26．史跡大安寺旧境内の調査 …… 107
（１）禅院食堂并太衆院地区の調査 第 117 次 …… 108
（２）北東中房地区の調査 第 118 次 …… 109
27．元興寺旧境内・奈良町遺跡の調査 …… 111
（１）食堂・食殿地区の調査 第 63 次…… 112
（２）東塔院地区の調査 第 64 次…… 116
28．紀寺推定地の調査 第１次 …… 121
29．南紀寺遺跡の調査 第５次 …… 122
30．平成 19 年度実施小規模調査一覧…… 126
31．平成 19 年度実施試掘調査一覧…… 126
32．平成 19 年度実施工事立会一覧…… 127

第２章　自然科学分析報告…… 137
１．柏木遺跡・平城京第 338 次調査の植物遺体分析 …… 139
２．芝辻遺跡・平城京第 375 次調査の自然科学分析 …… 146
３．平城京第 581 次調査の放射性炭素年代測定 …… 155
４．大安寺西遺跡・平城京第 589 次調査の花粉分析 …… 156
５．平城京第 593 次調査の花粉分析 …… 159
６．奈良山第 51 号窯の熱ルミネッセンス年代測定 …… 163

第３章　平成 19 年度保存活用事業報告 …… 167

第４章　紀要…… 173
平城京左京一条三坊五坪の井戸と出土土器 …… 174



平成 19 年度　発掘調査位置図（過年度調査で本書報告分を含む　1/50,000）

平成 19（2007）年度　奈良市教育委員会実施　埋蔵文化財発掘調査一覧

No.	調査次数	遺　跡　名	調　査　地	調査期間	調査面積	担当者	事業者	事業名	事業区分	届出（申請）番号
1	HJ575 次	平城京跡（左京五条四坊十五坪）	大森町 86-1 他	H19.5.1 ～ H19.12.26	3,430 ㎡	宮崎・山前	奈良市長	ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理連続立体交差関連公共施設整備事業	公共	H12.3145
2	HJ576 次	平城京跡（右京二条二坊八・九坪）	西大寺国見町一丁目 2137-53 他	H19.5.7 ～ H19.6.8	582㎡	中島	ハウス興産（株）	マンション・事務所新築	原因者	H18.3224
3	HJ577 次	平城京跡（左京四条五坊六坪）	三条川崎町 321-3 他	H19.5.9 ～ H19.5.29	233㎡	武田	奈良活性化ホールディングス	ホテル新築	原因者	H18.3115
4	HJ578 次	平城京跡（右京一条南大路）	西大寺南町 2266-3、2268 他	H19.5.21 ～ H19.7.26	560㎡	秋山・松浦	奈良市長	西大寺南土地区画整理通常事業	公共	S63.3056
5	HJ579 次	平城京跡（左京五条四坊十坪）	大森町 93 ～ 96、98-1、99 ～ 101	H19.6.11 ～ H19.12.19	2,700 ㎡	原田憲・池田富・大原	奈良市長	ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理連続立体交差関連公共施設整備事業	公共	H12.3145
6	HJ580 次	平城京跡（左京六条三坊七坪）	大安寺西三丁目 183-1 他	H19.6.12 ～ H19.6.22	85㎡	安井	（株）天礼社	店舗新築	原因者	H19.3061
7	HJ581 次	平城京跡（左京五条四坊十五坪・東四坊大路・左京五条五坊二坪）	大森町 76、77、78-1	H19.6.18 ～ H19.10.5	900㎡	久保清・大原	奈良市長	ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理都市再生事業	公共	H12.3145
8	HJ582 次	平城京跡（右京二条三坊一坪）	西大寺南町 2386-2	H19.6.19 ～ H19.6.27	60㎡	大窪	個人	共同住宅新築	原因者	H18.3427
9	HJ583 次	平城京跡（右京二条二坊十四坪）	横領町 334-6、-7	H19.6.19 ～ H19.6.27	98㎡	武田	個人	共同住宅新築	原因者	H19.3054
10	HJ584 次	平城京跡（右京北辺四坊二坪）	西大寺宝ヶ丘 643-1 他	H19.7.4 ～ H19.8.10	432㎡	中島	個人	共同住宅新築	原因者	H19.3001
11	HJ585 次	平城京跡（左京四条四坊三坪）	三条大宮町 376-1	H19.7.9 ～ H19.7.27	199㎡	武田	個人	店舗新築	原因者	H19.3010
12	HJ586 次	大安寺西遺跡・平城京跡（左京五条三坊一坪・東二坊大路）	四条大路南町 439-6 の一部他	H19.7.9 ～ H19.7.19	14㎡	大窪	オーエスハウジング（株）	宅地造成	原因者	H19.3062
13	HJ587 次	平城京跡（右京一条南大路）	西大寺南町 2267、2268	H19.8.1 ～ H19.8.31	120㎡	秋山・松浦	奈良市長	西大寺南土地区画整理通常事業	公共	S63.3056
14	HJ588 次	平城京跡（朱雀大路）	四条大路三丁目 93 他	H19.8.20 ～ H19.8.28	150㎡	武田	（株）八州エイジェント	宅地造成	原因者	H19.3116
15	HJ589 次	大安寺西遺跡・平城京跡（左京五条二坊十六坪）	四条大路南町 578 他	H19.9.28 ～ H19.10.31	338㎡	大窪	個人	共同住宅新築	原因者	H19.3056
16	HJ590 次	平城京跡（左京八坊一坊十四坪）	杏町 300-1、301-4	H19.10.9 ～ H19.11.5	90㎡	池田富	奈良市長	第 11 号（杏南）市営住宅建替事業	公共	H19.3181
17	HJ591 次	平城京跡（右京北辺四坊八坪）	西大寺赤田町一丁目 805-4	H19.10.22 ～ H19.11.6	166㎡	原田香	社会福祉法人秋篠茜会	サイクルセンター新築	原因者	H19.3035
18	HJ592 次	平城京跡（右京四条二坊三坪）	四条大路五丁目 6-1	H19.11.12 ～ H19.12.3	150㎡	秋山	奈良市長	都跡バンビーホーム建設事業	公共	H19.3194
19	HJ593 次	平城京跡（左京五条三坊八坪・東三坊坊間路）	恋の窪 607-1	H19.12.6 ～ H19.12.26	150㎡	原田香	オーエスハウジング（株）	宅地造成	原因者	H19.3336
20	HJ594 次	平城京跡（右京四条一坊二坪）	四条大路四丁目 83、85-1、86	H20.1.10 ～ H20.2.21	612㎡	大窪・大原	個人	共同住宅新築	原因者	H19.3240
21	HJ595 次	杏遺跡・平城京跡（左京八条二坊二坪）	杏町 401-1	H20.1.15 H20.1.30	56㎡	久保清	奈良市長	杏人権文化センター増築工事	公共	H19.3291
22	HJ596 次	平城京跡（左京三条三坊十二坪・東三坊坊間東小路）	大宮町四丁目 250-6、251-1、-3	H20.1.16 ～ H20.3.14	720㎡	原田香	大和ハウス工業（株）	共同住宅新築	原因者	H19.3038
23	HJ597 次	平城京跡（右京七条三坊一坪・西二坊大路）	六条一丁目地内	H20.1.28 ～ H20.2.13	66.5 ㎡	秋山・松浦・山前	奈良市長	仮称　西ノ京六条線道路新設工事	公共	H19.3344
24	HJ598 次	平城京跡（左京二条四坊十坪・東四坊坊間路）	法蓮町 367-6、368-4	H20.2.4 ～ H20.2.29	100㎡	池田富	奈良市長	仮称　法蓮南北線道路新設工事	公共	H18.3006
25	HJ599 次	平城京跡（左京四条三坊九・十六坪・東三坊坊間東小路）	三条添川町 131-2、-3	H20.2.4 ～ H20.3.25	618㎡	中島	大和ハウス工業（株）	共同住宅新築	原因者	H19.3039
26	HJ600 次	平城京跡（左京二条五坊北郊）	法蓮町 717 他	H20.2.4 ～ H20.2.22	150㎡	安井	（株）八州エイジェント	宅地造成	原因者	H19.3307
27	HJ601 次	平城京跡（右京三条四坊五坪）	宝来三丁目 747-1	H20.2.20 ～ H20.3.21	375㎡	大窪・大原	個人	共同住宅新築	原因者	H19.3246
28	TI035 次	平城京跡（東市跡推定地・東堀河）	東九条町 442-4	H19.5.21 ～ H19.6.6	90㎡	大窪	個人	共同住宅新築	原因者	H19.3013
29	DA117 次	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目 1049	H19.9.18 ～ H19.9.25	9.5㎡	武田	個人	「離れ」棟の除却、住宅の増築	緊急	H18.1107
30	DA118 次	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目 1124 の一部	H20.3.4 ～ H20.3.10	11㎡	安井	個人	住宅の除却及び新築	緊急	H19.1095
31	GG63 次	元興寺旧境内	勝南院町 23	H19.9.6 ～ H19.9.25	25㎡	中島	（株）車屋	事務所・共同住宅新築	緊急	H19.3031
32	GG64 次	元興寺旧境内	薬師堂町 17	H19.10.22 ～ H19.11.9	33.5 ㎡	中島	個人	個人住宅新築	緊急	H19.3235
33	SD23 次	西大寺旧境内	西大寺南町 2406-5 他	H19.8.30 ～ H19.10.24	495㎡	秋山・松浦	奈良市長	西大寺南土地区画整理通常事業	公共	S63.3056
34	KI001 次	紀寺推定地	紀寺東口町 675-1	H19.5.28 ～ H19.6.4	37㎡	安井	個人	事務所・店舗付共同住宅新築	原因者	H19.3063
35	MK005 次	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目 334-1	H19.11.21 ～ H19.12.5	200㎡	大窪	（株）プロ・ホーム・創	宅地造成	原因者	H19. 3277
36	KGZ001 次	黄金塚古墳	田中町地内	H19.7.18 ～ H19.7.30	12㎡	安井	奈良市水道事業管理者	水道管敷設	緊急	H19. 3092
37	TKJ001 次	東九条平城	東九条町 200-1	H19.6.15 ～ H19.6.15	20㎡	鐘方・大窪・中島	（株）ベルコ	集会場建設	原因者	H10. 3268
38		菖蒲下池南遺跡（調査後抹消）	あやめ池北一丁目 1432-6	H19.11.15 ～ H19.11.29	37㎡	安井	近畿日本鉄道株式会社	区画整理	原因者	H19. 3276

第　1　章　　平成19年度奈良市埋蔵文化財調査概要報告

1．ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査

奈良市教育委員会では、平成 13 年度からＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業地内（総面積 14.6 万㎡）の発掘調査を実施しており、平成 18 年度までの調査面積は、13,665㎡である。

平成 19 年度事業では、平成 18 年度事業の繰越分として、連続立体交差関連公共施設整備事業で 3,430㎡、平成 19 年度の事業に係わる発掘調査として、連続立体交差関連公共施設整備事業で 2,700㎡、都市再生事業で 900㎡の計 7,030㎡の調査を行った。

平成 19 年度の発掘調査は、平城京の条坊復原では、左京五条四坊十五坪、東四坊大路、左京五条五坊二坪、左京五条四坊十坪北半で実施した。

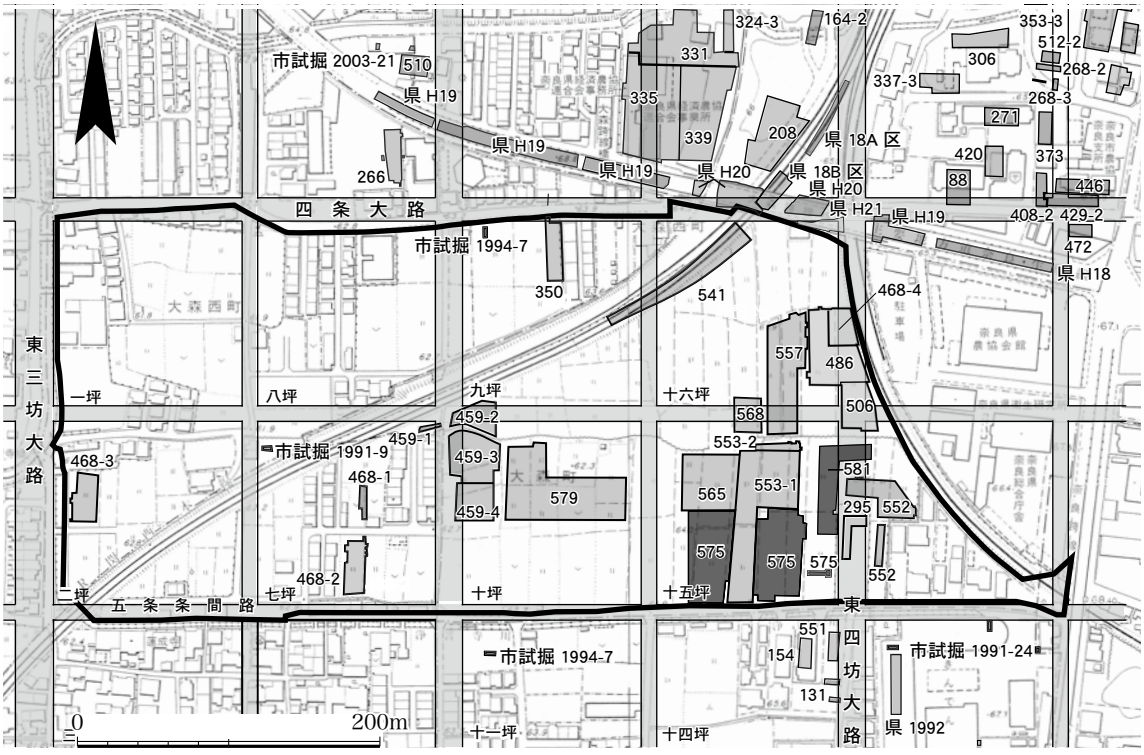
事業と調査の概要は下記の通りである。

このうち、今回報告する調査は、平成 19 年度に実施した左京五条四坊十五坪及び東四坊大路にあたるＨＪ第 575・581 次調査である。なお、平成 18 年度に実施したＨＪ第 553-1・2 次・565 次調査が左京五条四坊十五坪に含まれることから、その成果もあわせて報告する。平成 19 年度に実施した左京五条四坊十坪にあたるＨＪ第 579 次調査については、次年度以降に報告する予定である。

報告に用いる遺構番号については、古墳時代以前の遺構には２桁を、奈良時代以降の遺構には３桁以上の番号を用いた。これらの番号は、当事業に係る調査で設定している番号であり、条坊遺構あるいは坪ごとの通し番号とした。

平成19年度　ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業　発掘調査一覧表

事　業　名	調 査 次 数	調　査　地	調 査 期 間	調査面積	調査担当者
連続立体交差関連公共施設整備事業（18年度繰越）	ＨＪ第575次	大森町86-1　他	H19.5.1～12.26	3,430㎡	宮崎・山前
連続立体交差関連公共施設整備事業	ＨＪ第579次	大森町93～96、98-1、99～101	H19.6.11～12.19	2,700㎡	原田憲・池田富・大原
都市再生事業	ＨＪ第581次	大森町76　他	H19.6.18～10.5	900㎡	久保清・大原



ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業地内　発掘調査位置図（1/5,000）

平城京跡（左京五条四坊十五坪・東四坊大路）の調査　第553・565・575・581次

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京左京五条四坊十五坪・五条五坊二坪および東四坊大路に相当する。

地形的には奈良盆地北辺に位置する沖積地であり、周辺は東から西へ緩やかに傾斜し、現地表面の標高は64.2 m前後を示す。調査地のすぐ南側を東西に走る市道は往時の五条条間路とほぼ重なる。また、周辺が開発される以前は、調査地東側の水田畦畔には東四坊大路の痕跡を残していた。

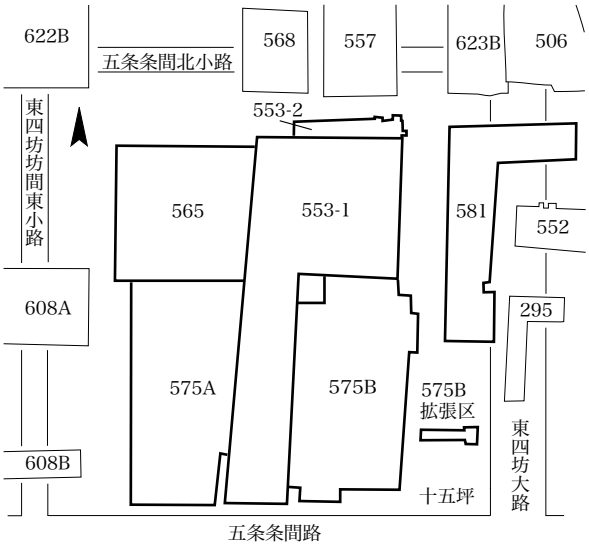
今回、十五坪内の利用状況を確認するとともに、周辺で見つかっている奈良時代以前の遺構を確認することも調査目的に加えて実施した。

Ⅱ　基本層序

調査地が広大で、基本的な層序は場所により異なる。

調査地北東のＨＪ第553-1次調査発掘区では、現地表面である耕作土の下に灰茶色砂質土が堆積する。耕作土上面から約0.3 mで奈良時代の遺構面である黄灰色粘土（標高64.0 m）に達する。一方、調査地南西のＨＪ第575次調査Ａ発掘区では、盛土・耕作土以下、暗灰茶色粘砂、茶灰黄色粘砂と続き、現地表面から約0.4 mで奈良時代の遺構面である茶灰褐色粘質土の地山（標高63.6 m）に達する。調査地北東から南西にかけての比高差はおおよそ0.4 mある。ＨＪ第575次調査Ａ発掘区をはじめ、調査地南端の地山上には、８世紀末～９世紀初頭の土器を包含する整地土（厚さ約0.2 m）がある。

ＨＪ第575次調査Ａ発掘区の北半部からＨＪ第553-1次発掘区、ＨＪ第581次発掘区にかけては、茶灰黄色粘砂層の下に弥生時代末から古墳時代初頭の土器を包含する河川の堆積層（河川１）が広がり、奈良時代の遺構面を形成している。



ＨＪ第553・565・575・581次調査発掘区位置図

Ⅲ　検出遺構

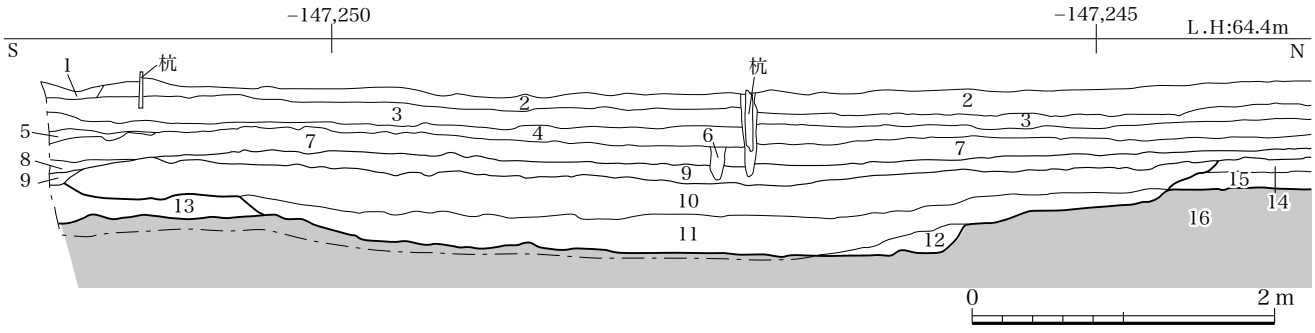
遺構検出は、ＨＪ第575次調査Ａ発掘区の南端では整地土上面と地山上面で、その他の範囲においては河川１の上面ないしは地山上面で行った。

検出した遺構には弥生時代、古墳時代、奈良～平安時代のものがあり、各遺構の概要は一覧表にまとめた。以下、主な遺構について弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の順に報告する。

弥生時代の遺構

竪穴建物３棟（ＳＢ01～03）、溝５条（ＳＤ04～08）、土坑３基（ＳＫ05～07）がある。

ＳＢ01は平面隅丸方形の竪穴建物で、南北約6.0 mで、西半部分は削平されるが、東西3.2 mまで確認した。幅約0.1 m、深さ約0.05 mの周溝が廻る。四本柱の構造で、柱間は南北約3.2 m、東西約3.0 mである。柱掘



1　黒灰色粘質土	5　灰黄褐色粘砂	9　黄灰褐色粘砂	13　暗灰褐色粘質	1・2：盛土	13：ＳＫ611
2　黒色砂（白色砂混じり）	6　灰茶色粘砂	10　褐灰色粘質土	14　茶灰色粘砂	3：耕作土	14・15：ＳＫ608
3　黒色粘質土	7　茶灰黄色粘砂	11　暗灰色粘土	15　暗茶灰色粘質土	9：整地土	16：地山
4　暗灰茶色粘砂	8　黄褐灰色粘砂	12　淡灰色粘砂	16　茶灰褐色粘質土	10～12：ＳＫ610	

ＨＪ第575次調査　Ａ発掘区西壁南半土層図（1/50）

形は径約0.3 m、深さ0.5～0.7 mである。ＳＢ02は部分的に削平されるが、一辺約7.2 mの平面隅丸方形の竪穴建物で、幅約0.15 m、深さ約0.15 mの周溝が廻る。周溝の南西隅には国土座標南で西に振れる幅約0.25 m、深さ約0.1 mの溝ＳＤ06が取り付く。溝内から弥生土器とみられる小片が出土した。ＳＤ06の溝底は南への下り勾配で、ＳＢ02の周溝から繋がる排水溝と考えられる。ＳＢ02もＳＢ01と同様に四本柱の構造で、柱間は南北約3.7 m、東西3.2～3.5 mである。柱掘形は径約0.3 m、深さ約0.5 mである。

ＳＢ03は東辺の周溝と柱穴を1つ検出したのみであるが、ＳＢ01･02と同様の竪穴建物になると考えられる。周溝は幅約0.15 m、深さ約0.05 mで、柱掘形は径約0.3 m、深さ約0.5 mである。

ＳＤ04はＨＪ第565次発掘区西半で検出した弧状に曲がる素掘り溝である。幅1.8～2.6 m、深さ約0.8 mである。全長は30 m以上に及ぶ溝で、発掘区外西に延びる。溝底の標高は北西が低い。溝の断面形状は逆台形で、溝内埋土は上層（灰色粗砂、茶褐色粘土）･中層（黄茶灰色粘土）・下層（灰色粘土）の3層に分かれる。下層から弥生時代中期、上層から弥生時代末～古墳時代初頭にかけての土器片が少量出土した。

ＳＤ05はＳＢ01の南側で断続的に検出した南北方向の素掘り溝で、幅0.15～0.3 m、深さは約0.15 mである。溝底の標高は南が低い。溝内から弥生土器とみられる小片が出土した。ＳＢ01に関わる排水溝と考えられる。

ＳＤ07は主軸が東北東－西南西の溝で、幅約1.0 m、深さ約0.1 m、長さ約2.8 mである。ＳＤ08は主軸が南東－北西の溝で、幅約0.7 m、深さ約0.1 m、長さ3.5 m以上である。

ＳＫ05は南北約1.5 m、東西0.7～1.2 m、深さ約0.5 mの土坑。ＳＫ06は径約0.8 m、深さ約0.3 mの土坑。ＳＫ07は南北1.4 m以上、東西6.4 m以上の平面不整形な土坑で、深さ0.2～0.4 m。底の凹凸が著しい。埋土は淡黄緑ないしは黄土色粘砂で、出土遺物は無い。発掘区外南に続く。重複関係からＳＤ06よりも古い。

古墳時代の遺構

土坑2基（ＳＫ08・09）がある。

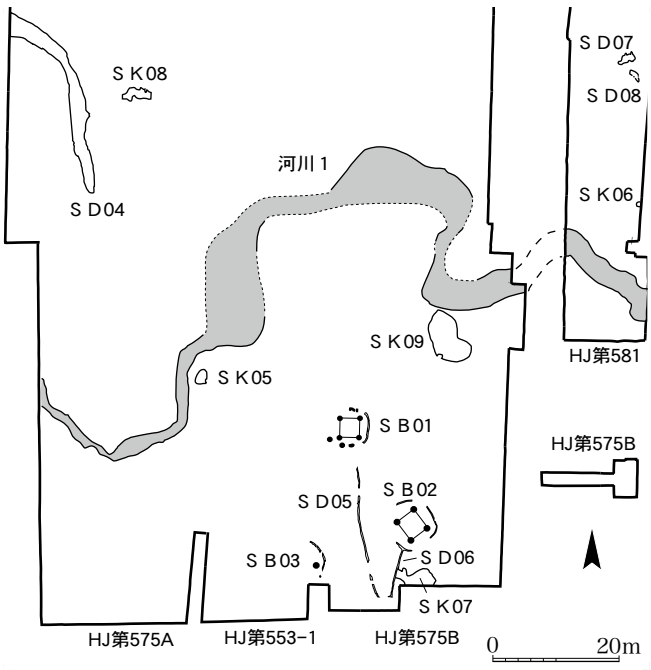
ＳＫ08は、弧状に曲がる溝ＳＤ04の東側で検出した溝状の土坑である。南北0.9～1.4 m、東西4.5 m以上、深さ約0.1 mで、古墳時代後期の土師器片・須恵器片が出土した。

ＳＫ09は河川1の南側で検出した平面不整形な土坑である。南北約8.5 m、東西約7.0 m、深さ0.1～0.2 mで、古墳時代後期の土師器片・須恵器片が出土した。

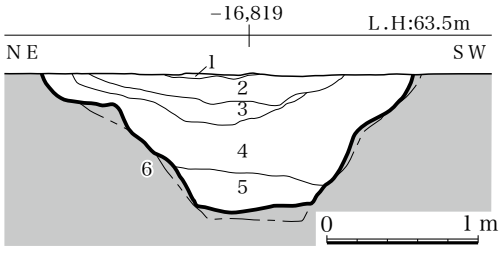
この他に、調査地を東から西に蛇行しながら流れる河川1を確認した。川幅は1.0～9.0 m、深さは0.4～1.0 mある。河川内の堆積土は主に灰色の砂礫層である。最上位には灰色のシルトが堆積しており、弥生時代前期から古墳時代初頭の土器片が出土した。

なお、河川1に先行する縄文時代の河川堆積土を部分的ではあるが確認した。

ＨＪ第575次調査Ａ発掘区の河川1の北岸沿いでは、縄文時代晩期の土器片を包含する黄茶灰色粘砂層を、ＨＪ第581次発掘区の西端においては、河川1の下層に流木を含む砂礫層とシルトで埋まった河川があることも確認した。この流木を測定試料として放射性炭素年代測定を行ったところ、補正^{14}Ｃ年代5280±50（年.B.P.）、暦年代（cal　B.C.）4250～3980年の値が得られた（本文155頁参照）。



検出遺構平面図（弥生～古墳時代）



1　紫灰褐色粘土　3　灰色粗砂　5　灰色粘土　1～5：ＳＤ04埋土
2　茶褐色粘土　4　黄茶灰色粘土　6　黄褐色粘土　6：地山

ＳＤ04南壁土層図（1/50）

奈良・平安時代の遺構

条坊遺構（道路･側溝）と掘立柱建物、門、掘立柱列、井戸、土坑がある。以下、条坊遺構、十五坪内の遺構の順で報告する。

条坊遺構　東四坊大路に関しては、ＨＪ第581次調査発掘区で東四坊大路の路面ＳＦ1013と東西両側溝を検出しており、ＳＦ1013の東側溝ＳＤ1015については、平成18年度概要報告で報告済みである。

ＳＤ1014は、東四坊大路に平行する南北方向の素掘り溝で、幅3.0～3.4ｍ、深さ0.3～0.7ｍ、長さ58.0ｍ分を検出した。溝の深部は溝の中央よりもやや西寄りになり、東側が一段浅くなる。溝内埋土は上･中･下層の３層に分かれ、さらに中層は２層に細分できる。

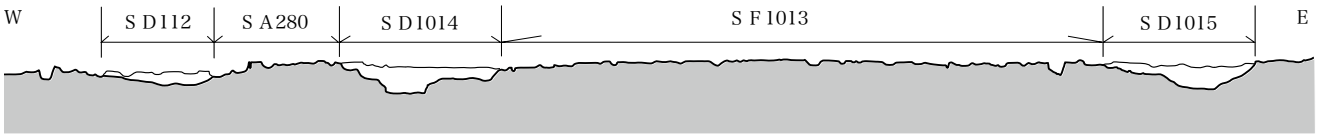
このうち、上層にあたる灰褐色粘土から８世紀末～９世紀初頭の土器が出土した。溝底の標高は北端が約63.50ｍ、南端が約63.85ｍで、南から北へわずかに下り勾配である。

ＳＤ1014の底で土坑ＳＫ605・606を検出した。８世紀のものとみられる土師器・須恵器片が出土した。

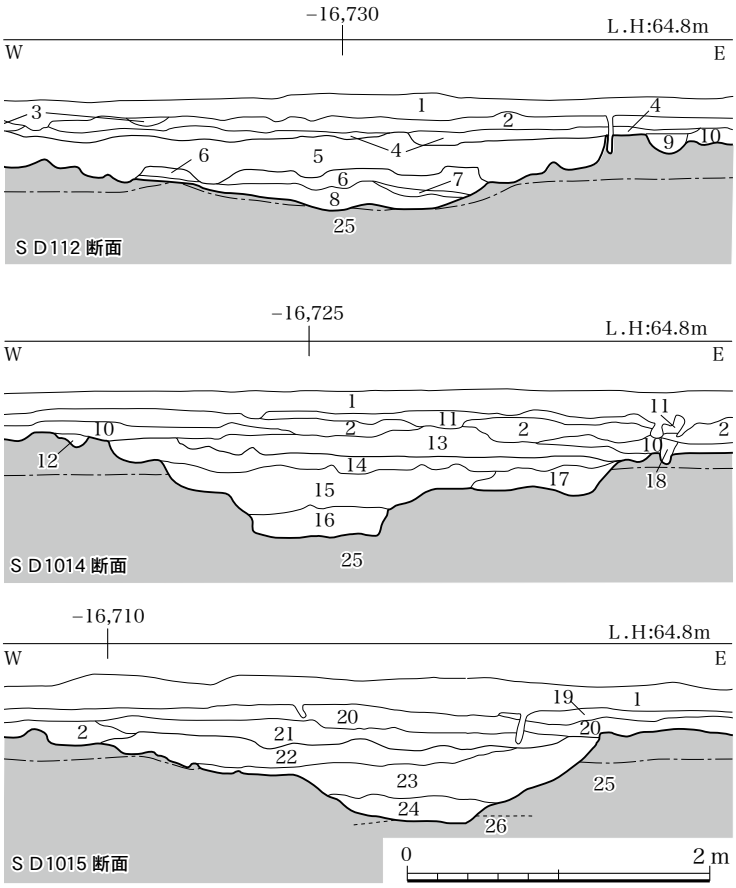
ＳＤ1014溝心の国土座標値はＸ＝－146,887.50ｍ、Ｙ＝－16,725.00ｍである。ＳＤ1015溝心の国土座標値はＸ＝－146,887.00ｍ、Ｙ＝－16,707.90ｍで、ＳＤ1014とＳＤ1015の両溝心々間距離は約17ｍである。ＳＤ1014は位置関係や規模などから東四坊大路西側溝に相当する。

東四坊大路ＳＦ1013の路面幅は11.6～12.6ｍで、路面心の国土座標値はＸ＝－146,887.00ｍ、Ｙ＝－16,716.45ｍである。

未報告ではあるが、ＨＪ第608次調査Ａ・Ｂ発掘区で十五・十坪間の東四坊坊間東小路とその両側溝を検出している。溝心の国土座標値は西側溝ＳＤ1011がＸ＝－146,940.00ｍ、Ｙ＝－16,852.55ｍで、東側溝ＳＤ1012がＸ＝－146,940.00ｍ、Ｙ＝－16,845.55ｍである。また、ＨＪ第608次調査Ｅ発掘区では、五条条間路ＳＦ2007の



東四坊大路ＳＦ1013付近の模式図



1　黒灰色土
2　灰色砂質土
3　黒灰色土＋灰色砂質土
4　灰褐色粘土
5　灰褐色砂質土（炭化物含む）
6　灰褐色粘土（炭化物含む）
7　灰色砂
8　茶褐色粘土＋灰色砂（炭化物含む）
9　灰色粘質土
10　灰色粘砂
11　灰茶褐色砂質土
12　灰色砂質土
13　灰茶褐色砂質土
14　灰褐色粘土（炭化物含む）
15　褐灰色粘土（炭化物含む）
16　灰色粘土＋若干の黄褐色粘土
17　茶灰褐色粘土＋灰色砂
18　灰色粘土
19　灰色粘質土＋灰色砂
20　灰橙色砂質土
21　灰色粘砂
22　灰褐色粘土（炭化物含む）
23　茶褐色粘土＋若干の黄褐色粘土
24　灰色砂
25　黄灰色粘土
26　黄灰色砂礫

6～8:ＳＤ112埋土　14～17:ＳＤ1014埋土
22～24:ＳＤ1015埋土　25・26:地山

ＨＪ第581次調査　ＳＤ112・1014・1015北壁土層図（1/50）

北側溝ＳＤ2008を検出している。溝心の国土座標値はＸ＝－146,993.35ｍ、Ｙ＝－16,904.00ｍである。詳細は次年度以降に報告する予定である。

東面築地関連　ＳＤ112は、東四坊大路西側溝ＳＤ1014に平行する南北方向の素掘り溝である。幅2.5～9.3ｍ、深さ0.3～0.5ｍ、長さ85.0ｍ分を検出した（ＨＪ第581次発掘区、ＨＪ第575次調査Ｂ発掘区拡張区）。ＨＪ第581次発掘区南端から北に約26ｍ付近までは幅6.0～7.8ｍで、以北は幅が2.5～3.0ｍと狭くなる。溝幅の広い部分の深部は東肩から2.5～6.0ｍにあり、西側が一段浅くなる。溝幅の狭い部分では、東肩から1/3付近に深部があり、西へ向かってなだらかに立ち上がる。溝底の標高は、南端で約63.9ｍ、北端で約63.7ｍである。溝内埋土は上下２層に分かれており、８世紀後半～９世紀初頭の土師器・須恵器や黒色土器Ａ類などが出土した。

ＳＤ112溝心の国土座標値はＸ＝－146,887.50ｍ、Ｙ＝－16,729.85ｍで、ＳＤ1014とＳＤ112の溝心々間距離は約4.85ｍである。ＳＤ112の底で土坑ＳＫ624・625を検出した。坑内から８世紀のものとみられる土師器・須恵器片が出土した。

ＳＤ1014とＳＤ112の間には添柱の痕跡は検出できなかったが、十五坪の東端をかぎる築地塀（ＳＡ280）が想定できることから、ＳＤ112はその雨落溝に相当するものと考える。

また、十五坪の北をかぎる築地塀の雨落溝（ＳＤ101）心を基準とした南北1/6の位置付近でＳＢ278を、南北1/2付近でＳＢ279を検出した。

いずれも南北一間の建物で、柱間はＳＢ278が約1.8ｍ、ＳＢ279は約3.3ｍである。ＳＢ278の柱掘形から土師器片が、ＳＢ279の柱掘形から土師器小片と塼が出土した。二脚門になる可能性が考えられる。

溝　ＳＤ105は十五坪の北半で検出した幅1.5～3.5ｍ、深さ0.2～0.3ｍの南北溝で、長さ35.5ｍ以上に及ぶ。溝内埋土は２層に分かれ、上層が淡黄灰色粘砂、下層が淡茶灰色粘質土である。溝内から８世紀前半の軒平瓦、８世紀末の土師器高杯・須恵器杯、製塩土器、圏足円面硯、土馬などが出土した。ＳＤ105は坪内の東西1/2の位置に掘られ、ＨＪ第553-1次発掘区外北に延びる。

ＳＤ106はＳＤ105の東側で検出した長さ8.6～9.6ｍ、幅約0.7ｍ、深さ約0.25ｍの東西溝で、西端から約7.2ｍの所で一旦途切れる。溝内から８世紀の土師器皿・須恵器杯・甕、瓦などが出土した。重複関係からＳＢ222よりも古い。

ＳＤ107はＳＤ105の南約５ｍで検出した長さ約13.0ｍ、幅0.6～1.5ｍ、深さ約0.2ｍの南北溝である。溝内から８世紀の土師器片・須恵器片、蹄脚円面硯、瓦などが出土した。重複関係からＳＢ242・247よりも古い。

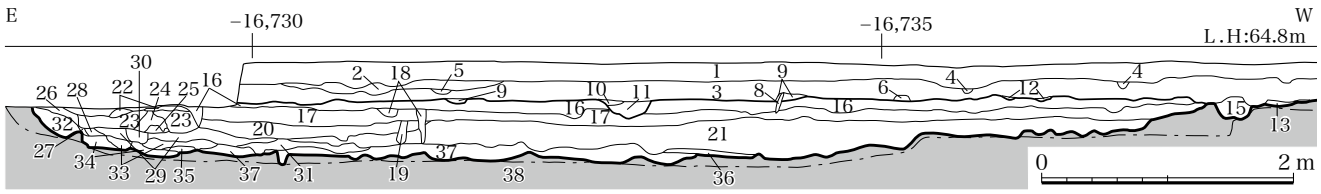
ＳＤ108はＳＤ107の東約3.5ｍで検出した長さ約17.0ｍ、幅1.0～1.4ｍ、深さ0.1～0.2ｍの南北溝である。溝内から８世紀末の土師器片・須恵器水瓶、土馬、瓦、９世紀の青磁などが出土した。重複関係からＳＢ245・247よりも新しい。

ＳＤ109はＳＤ107の西約２ｍで検出した長さ約4.0ｍ、幅0.5～1.0ｍ、深さ0.1～0.2ｍの南北溝である。溝内から８世紀のものとみられる土師器片・須恵器片が出土した。重複関係からＳＢ239よりも古い。

ＳＤ110はＳＤ107の南約2.5ｍで検出した長さ約3.0ｍ、幅約0.7ｍ、深さ約0.15ｍの南北溝である。出土遺物は無い。重複関係からＳＡ252よりも古い。

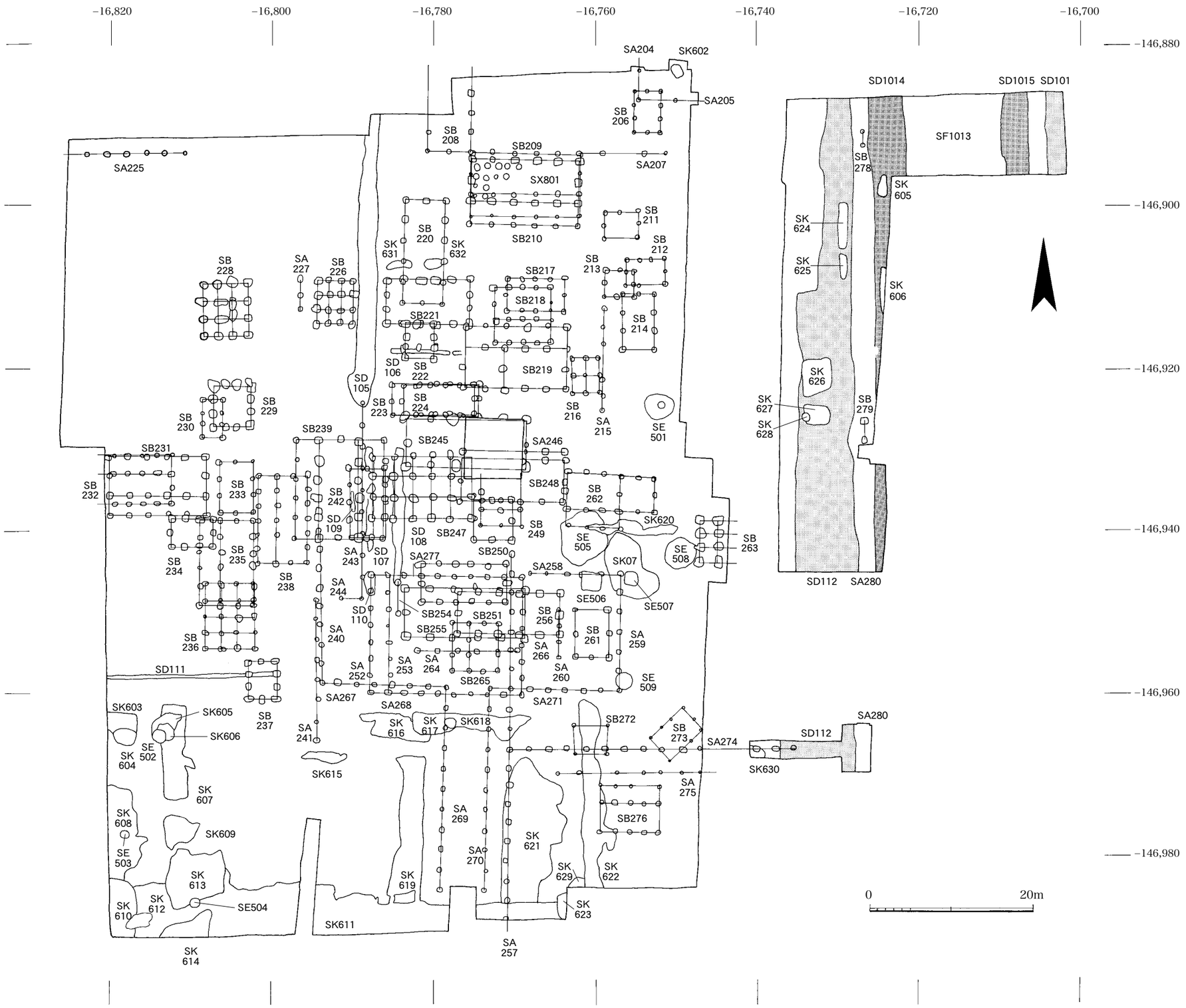
ＳＤ111は幅0.3～0.5ｍ、深さ約0.1ｍの東西溝で、長さ20.2ｍ分を検出した。溝内から８世紀中頃～後半の土師器・須恵器、形象硯（鳥形硯）、製塩土器、瓦などが出土した。重複関係からＳＢ237よりも古い。

建物・塀　ＳＢ209はＨＪ第553-１次発掘区北端で検出した南廂付東西棟建物である。ＳＢ209は東西両妻柱



1 暗灰色砂質土	8 淡灰色粘砂	15 淡灰黄色粘砂	22 黄灰色粘砂	29 灰茶褐色粘質土	36 淡灰色粘砂		
2 淡灰色砂質土	9 淡灰色砂質土	16 灰黄色粘砂	23 黄茶灰色粘砂	30 淡灰茶色粘砂	37 淡黄灰色粘砂		
3 灰茶色砂質土	10 黄灰色砂質土	17 黄灰色粘砂	24 橙茶灰色粘砂	31 淡褐灰色粘砂	38 明黄灰色粘砂		
4 淡暗灰色砂質土	11 淡黄灰色粘砂	18 淡灰黄色粘砂	25 灰褐色粘砂	32 淡黄橙灰色粘砂			
5 灰色砂質土	12 淡灰黄色粘砂	19 淡茶灰色粘質土	26 灰黄茶色砂質土	33 淡褐灰色粘砂	16～37: ＳＤ112埋土		
6 茶灰色砂質土	13 灰黄色粘砂	20 茶灰色粘砂	27 黄橙灰色粘砂	34 淡橙茶灰色粘質土	32: ＳＤ112溝岸の崩落土		
7 灰茶色粘砂	14 茶灰色砂質土	21 灰茶褐色粘質土	28 淡茶灰色粘砂	35 淡灰色粘質土	38: 地山		

ＨＪ第575次調査　Ｂ発掘区ＳＤ112南壁土層図（1/60）



検出遺構平面図（1/500）

列を揃えつつ、南へ1ｍ程度ずらして、平面が同規模の南廂付東西棟建物ＳＢ210に建て替えられる。ＳＢ210身舎の西半部で、平面形が隅丸方形または円形の土坑（ＳＸ801）を12基検出した。これらの土坑は掘形が径0.3～0.8ｍ、深さは0.2～0.4ｍである。8世紀のものとみられる土師器片・須恵器片が出土した。掘形の断面形は皿状を呈しており、甕を据えた痕跡と考える。重複関係からＳＢ209は東西塀ＳＡ207、ＳＢ208･210よりも古い。

ＳＢ211は東西棟建物で、西側柱列と東西棟建物ＳＢ213の西側柱列および南北塀ＳＡ215と柱筋が揃う。

東西棟建物ＳＢ217・221と総柱建物ＳＢ226・228は、北側柱列を揃える。ＳＢ228の南にはＳＢ228の東側柱列と柱筋を揃える総柱建物ＳＢ236と南北棟建物ＳＢ229・233が建つ。重複関係からＳＢ221は北廂付東西棟建物ＳＢ219、南北棟建物ＳＢ220･222よりも古く、ＳＢ229は南北棟建物ＳＢ230よりも古い。

南北棟建物ＳＢ235は東西棟建物ＳＢ234・236・ＳＢ238よりも新しい。

ＳＢ219は北廂付東西棟建物で、西から3番目の柱筋に間仕切りの柱穴がある。ＳＢ219の東妻柱列、東西棟建物ＳＢ248の東妻柱列、東廂付東西棟建物ＳＢ256の身舎東妻柱列が揃う。この3棟はいずれも桁行5間、梁行2間で同規模である。各々の建物の南側柱列と北側柱列の間隔は、ＳＢ219とＳＢ248の間が約9ｍ、ＳＢ248とＳＢ256の間が約11ｍである。重複関係からＳＢ219はＳＢ221・東西棟建物ＳＢ224よりも新しく、ＳＢ256は南北塀ＳＡ260・266、ＳＢ255・南北棟建物ＳＢ261・西廂付南北棟建物ＳＢ265よりも新しい。

ＳＢ223は東西棟建物で、南北両側柱列を揃えつつ、ほぼ同位置で規模の小さなＳＢ224に建て替える。重複関係からＳＢ223は東西棟建物ＳＢ245よりも新しく、ＳＢ219・224よりも古い。ＳＢ245はＳＢ223・224、ＳＤ108よりも古い。

ＳＢ232は北廂付東西棟建物で、ほぼ同位置で南廂付東西棟建物ＳＢ231に建て替える。重複関係からＳＢ231はＳＢ232よりも新しく、東西棟建物ＳＢ234よりも古い。ＳＢ242は南北棟建物で、南妻柱列と東側柱列の位置を変えずに東西廂付掘立柱建物ＳＢ239に建て替える。重複関係からＳＢ239は南北塀ＳＡ240・243、ＳＢ238・242よりも新しい。

ＳＢ245は東西棟建物で、南側柱列とＳＢ242の北妻柱列の柱筋が揃う。さらに西側柱列は東西棟建物ＳＢ255の西側柱列と柱筋が揃う。ＳＢ245南側柱列とＳＢ255北側柱列の間隔は約15ｍである。

ＳＢ247は坪内のほぼ中央に位置する総柱建物で、重複関係からＳＢ247はＳＢ250、ＳＤ107よりも新しく、ＳＤ108よりも古い。

ＳＢ250は南北棟建物で、東側柱列と南北塀ＳＡ257の柱筋が揃う。重複関係からＳＢ247よりも古い。

ＳＢ254は南北1間の南北柱列で、柱間が約3.9ｍと広く、柱掘形は深さが0.8～0.9ｍと深い。この柱列の南北に続く柱が無いため、二脚門になる可能性が高い。

南北塀ＳＡ243は南端で東西塀ＳＡ244に繋がる。重複関係からＳＡ243はＳＢ239よりも古い。

ＳＡ252・266はいずれも柱間が7間、全長が14.4ｍの南北塀である。ＳＡ252・266は北端で東西塀ＳＡ277に、南端で東西塀ＳＡ268に繋がる。ＳＡ277・268の柱間はいずれも柱間が9間、全長が18.9ｍである。ＳＡ277・268の西から2番目の柱穴に、柱間が7間で全長が14.4ｍの南北塀ＳＡ253が取り付く。

これらの塀で囲まれた内側には、西廂付南北棟建物ＳＢ265が建てられる。重複関係からＳＡ252はＳＤ110よりも新しく、ＳＡ266はＳＢ255・256よりも古い。

ＳＡ257は南北塀で、北から5番目の柱穴に東西塀ＳＡ264が、北から11番目の柱穴に東西塀ＳＡ274が取り付く。重複関係からＳＡ257はＳＫ611・617・621よりも古い。ＳＡ274はＳＫ630よりも新しく、ＳＤ112、ＳＫ622よりも古い。

ＳＡ269・270は約5.2ｍの間隔で平行する南北塀である。両者は柱間が10間、全長が約24.6ｍで、各々の柱間寸法は2.1～2.7ｍで不揃いである。両者の間は南北通路として機能していたものと考えられる。

ＳＡ269の北端は東西塀ＳＡ267に繋がり、さらにＳＡ267の西端で南北塀ＳＡ240に繋がる。

ＳＡ270の北端は東西塀ＳＡ271に繋がり、さらにＳＡ271は東端で南北塀ＳＡ259に、ＳＡ259は北端で東西塀ＳＡ258に繋がる。ＳＡ258・259・271で「コ」字状に囲まれた内側の東端に南北棟建物ＳＢ261が建つ。

ＳＡ260は柱間が3間、全長が5.85ｍの南北塀で、ＳＢ261の西約2ｍに位置し、ＳＢ261の目隠し塀と考えられる。重複関係からＳＡ240は土坑ＳＫ06よりも新しく、ＳＢ239よりも古い。ＳＡ258はＳＥ506よりも、ＳＡ260・ＳＢ261はＳＢ256よりも、ＳＡ269はＳＫ617・618よりも、ＳＡ270はＳＫ617よりも古い。

井戸　ＳＥ501は、掘形が南北約3.5ｍ、東西約4.0ｍの平面不整円形で、深さ約1.85ｍの井戸である。井戸底には炭を0.3ｍ程度の厚さで敷き、その上に拳大の石を0.2ｍ程度の厚さで敷く。これらの炭や石は濾過用途と考

えられる。井戸枠は平面楕円形で、内法は南北約0.9 m、東西約0.8 mである。枠材には幅5～15cm、厚さ7cm前後、遺存長1.4～1.6 mの縦板を23枚使い、各々の側面を上下2段の太枘を用いて固定している。

掘形埋土から8世紀後半のものと思われる土師器・須恵器片が、枠内埋土から9世紀中頃の土師器杯・皿・椀や須恵器片などが出土した。

また、上部の枠抜き取り埋土から9世紀中頃～10世紀初頭の土師器片・須恵器片などが出土し、同最上層埋土には拳大～人頭大の石が多量に含まれていた。

この他、坪の東半と南西隅で井戸を8基（ＳＥ502～509）検出したが、枠はすべて抜き取られていた。

ＳＥ502から時期不明の土師器片が、ＳＥ503から8世紀後半～末の土師器片・須恵器などが、ＳＥ504から8世紀後半の土師器・須恵器などが、ＳＥ505から8世紀中頃の土師器、8世紀の須恵器片などが、ＳＥ506・507から時期不明の土師器片・須恵器片などが、ＳＥ508から8世紀中頃～後半の土師器片・須恵器などが出土した。

重複関係からＳＥ502はＳＫ605～607よりも、ＳＥ503はＳＫ608よりも、ＳＥ504はＳＫ611・613よりも新しい。ＳＥ505はＳＫ07よりも新しく、ＳＫ620、ＳＢ262よりも古い。ＳＥ506はＳＡ258よりも、ＳＥ507はＳＫ07よりも新しい。ＳＥ508は総柱建物ＳＢ263よりも古い。ＳＥ509はＳＡ271よりも新しい。

土坑　ＳＫ607は隅丸長方形で、南北約11.6 m、東西2.0～3.0 m以上、深さ約0.4 mの土坑である。坑内から8世紀中頃の土師器・須恵器などが出土した。重複関係からＳＫ605・606、ＳＥ502よりも古い。

坪南端で検出したＳＫ611は溝状の土坑で、南北6.5 m以上、東西52.4 m以上、深さ約0.2 mである。発掘区外へ広がる。検出位置からみて、十五坪の南面築地の雨落溝である可能性もあるが、流水の痕跡は確認できず、埋土は暗灰褐色粘質土が主体である。

重複関係からＳＫ611は溝ＳＤ05・06、ＳＡ257、土坑ＳＫ612よりも新しく、土坑ＳＫ610・613・614・621・623、ＳＥ504よりも古い。また、ＳＫ613はＳＫ611よりも新しく、ＳＥ504よりも古い。ＳＫ611・613から8世紀後半の土師器・須恵器などが出土した。

先述の通り、十五坪南半部には9世紀初頭に整地が行われ、整地後にはＳＫ614が掘削される。

これらの遺構の新旧関係は、ＳＫ612→ＳＫ611→ＳＫ613→ＳＥ504→整地→ＳＫ614である。

ＳＫ616は南北約3.0 m、東西約8.7 m、深さ0.1～0.3m、ＳＫ617は溝状の土坑で、南北1.5～2.0 m、東西約14.6 m、深さ0.3～0.4 mである。重複関係からＳＫ617はＳＤ05、ＳＡ257・269・270、ＳＫ616よりも新しく、ＳＫ618よりも古い。ＳＫ616から8世紀のものとみられる土師器片・須恵器片が、ＳＫ617から8世紀後半の土師器などが出土した。

ＳＫ619は溝状の土坑で、南北約18.2 m、東西2.8～4.2 m、深さ0.1～0.3 mである。ＳＫ619の南東隅と南西隅には、長さ1 m程度、幅0.5～0.7 mの南北溝が掘られＳＫ611に繋がる。ＳＫ611・619は埋土が似ており、ほぼ同時に埋まったものと考えられる。

ＳＫ621は平面不整形な土坑で、南北18.3 m以上、東西2.5～8.0 m、深さ約0.2 mである。重複関係からＳＢ02、ＳＤ05・06、ＳＡ257、ＳＫ611よりも新しい。ＳＫ622は溝状の土坑で、南北22.8 m以上、東西1.6～3.0 m、深さ0.1～0.5 mである。発掘区外南に続く。重複関係からＳＡ274・275、ＳＢ02・272・276、ＳＫ07・629よりも古い。ＳＫ621・622から8世紀後半～末の土師器・須恵器などが出土した。

ＳＫ626は南北約4.5 m、東西約3.6 m、深さ約0.3 mの土坑で、8世紀のものとみられる土師器・須恵器片が出土した。ＳＫ628は南北約1.1 m、東西約0.8 m、深さ約0.3 mの土坑で、8世紀のものとみられる須恵器甕片が出土した。重複関係からＳＫ626はＳＤ112よりも新しく、ＳＫ628はＳＤ112よりも古い。

Ⅳ　出土遺物

ＨＪ第553・565・575次調査とＨＪ第581次調査を合わせて、遺物整理箱で182箱分の遺物が出土した。

出土遺物には縄文土器、弥生土器・土製品・鋳型、石器、石製品、古墳時代の土師器・須恵器、8世紀前半～9世紀前半の土師器・須恵器・奈良三彩・黒色土器Ａ類・墨書土器・製塩土器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・土製品・硯、瓦塼、金属製品、銭貨、11世紀以降の白磁、木製品、炭化物、桃核などがある。

以下、主な遺物について述べる。

縄文時代の土器

ＨＪ第575次調査Ａ発掘区北端の遺構面を形成する淡黄灰色粘砂の直下で部分的に堆積する黄茶灰色粘砂中から縄文時代晩期の深鉢片が数点出土した。　（宮崎正裕）

弥生時代の土器・土製品

奈良時代の遺構面を形成する弥生時代の河川1から出土したものが大半を占める。

この河川1と溝ＳＤ04からの出土土器・土製品を中心に、古墳時代後期の土坑ＳＫ08と平安時代初頭の土坑ＳＫ617・621から出土した弥生土器を記す。

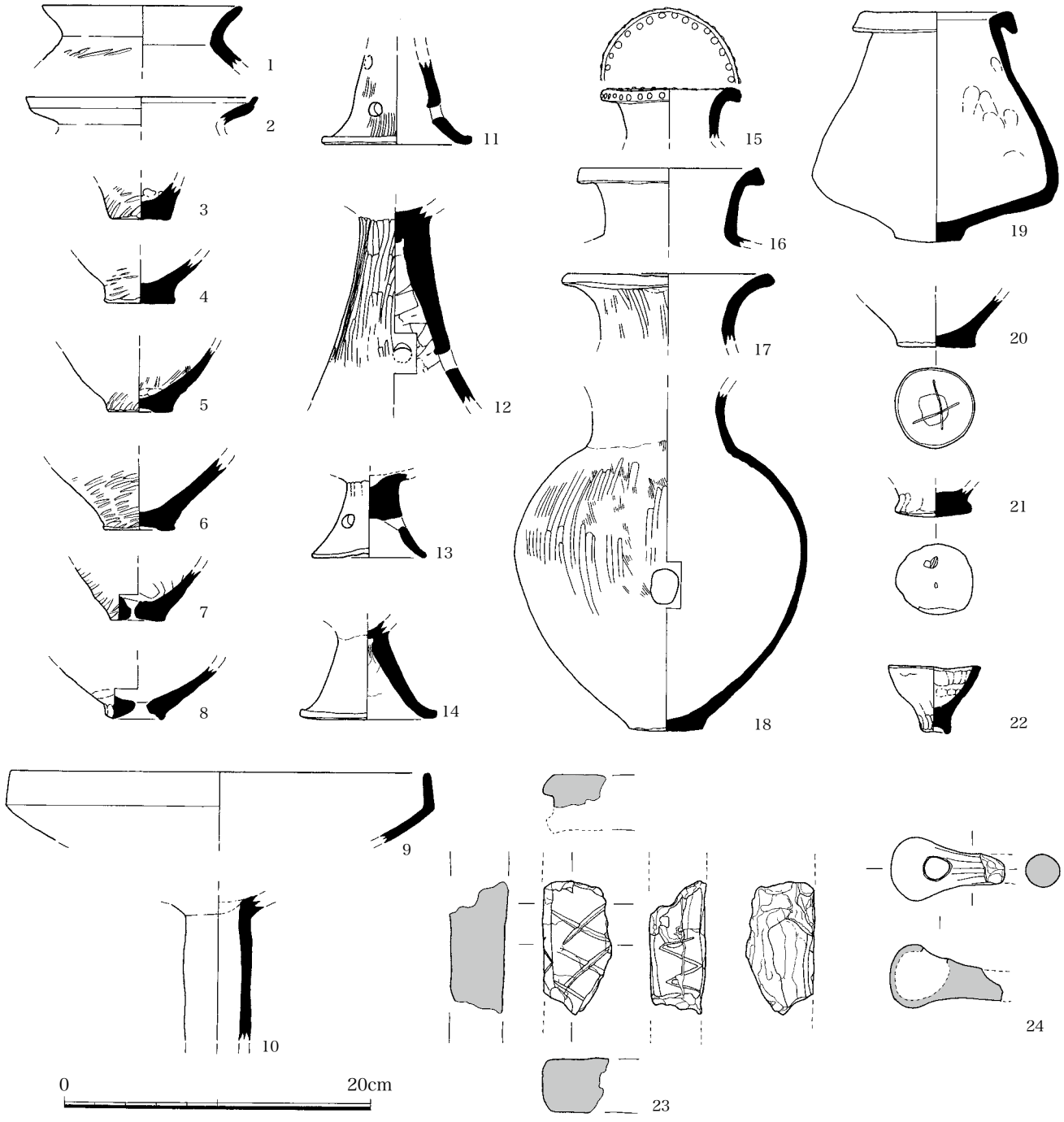
河川１出土土器（１～22)・土製品（23・24）　甕・鉢・高杯・壷・器台・ミニチュア土器がある。弥生時代後期後半から古墳時代初頭のものが主体を占めるが、弥生時代前期や中期末～後期前半のものも少量含まれる。大半が破片で、完存するものは少ない。

器種の大半は甕で、口縁端部が丸くおさまるもの（１）、短く立ち上がるもの（２）以外に外傾面があるものもある。体部から底部にかけて外面にタタキが残るものが多く、煤が付着しているものもある。

甕・鉢の底部は、平底のもの（３・４）とドーナツ状を呈する上げ底のもの（５・６）があり、いずれも端部までタタキが及ぶ。

有孔鉢は、外面にはタタキが残り、内面はナデ調整しているもの（７）と内外面ともナデ調整で仕上げているもの（８）がある。

高杯には大型品（９～12）と小型品（13・14）がある。口縁部が直立して短く立ち上がるもの（９）と外反するものがあり、脚部は筒状(10)のものと裾部に向かって緩やかに広がるもの（11～14）がある。11・12の脚部外面はミガキ調整で仕上げている。



河川１出土土器・土製品（1/4）

壷には広口壷（15～19）、細頸壷、長頸壷がある。広口壷には、口縁部に円形浮文が施されるもの（15）以外に口縁端部に凹線文や竹管押圧円形浮文が施されるもの、体部外面に竹管文が施されるもの、把手がつくものがある。また、体部に穿孔があるもの（18）がある。

これらの他に、甕か壷もしくは鉢の底部外面に記号とみられる「×」の線刻があるもの（20）、籾圧痕があるもの（21）、鉢形のミニチュア土器（22）もある。

今回図示した弥生土器は、大和第Ⅴ－２～Ⅵ－３様式に位置づけられる。

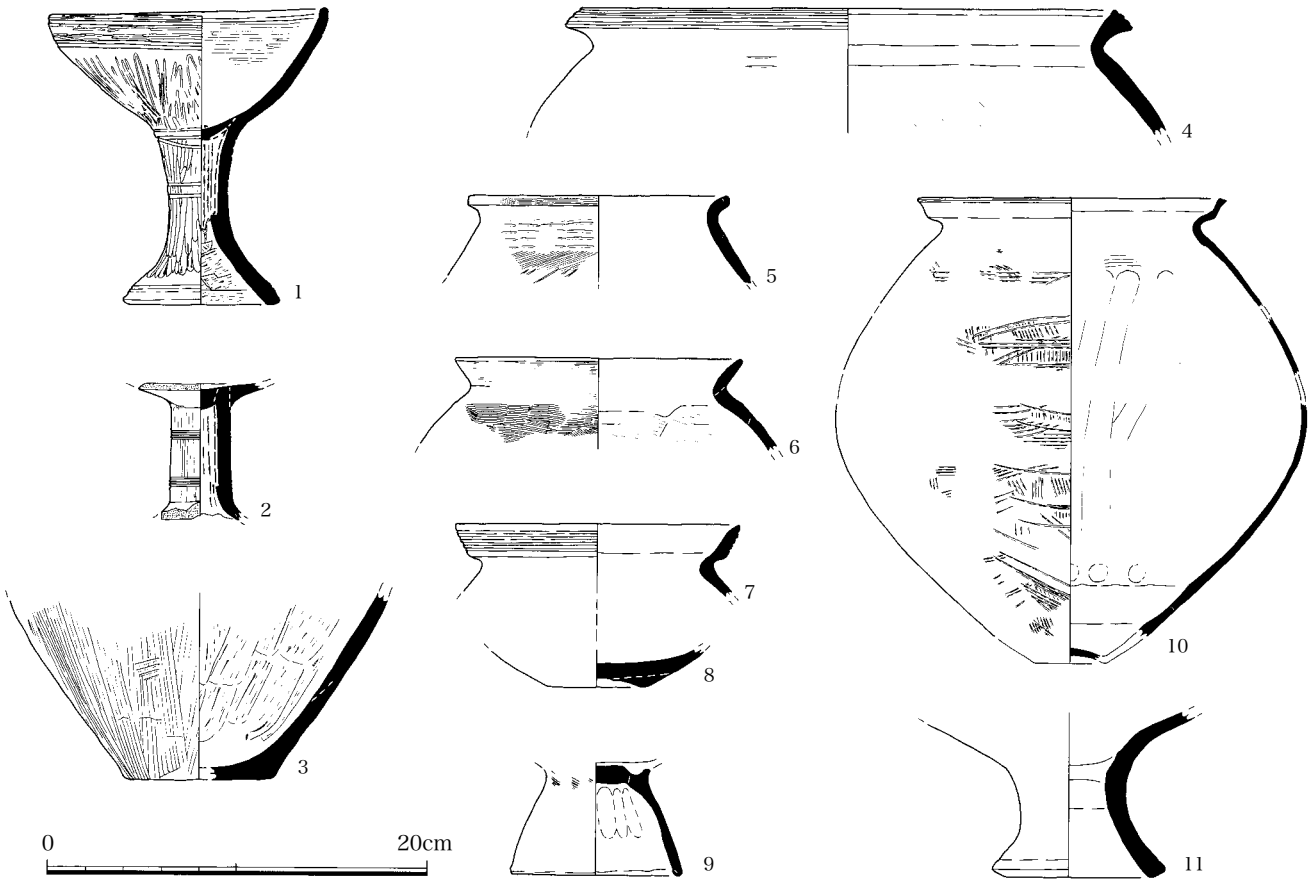
土製品には鋳型外枠の断片（23）と杓子状土製品（24）がある。23は長さ8.6㎝、幅4.3㎝の破片で、厚さ3.6㎝である。側端部分にあたり、内面には斜格子状の、側面には鋸歯状のヘラ状工具による線刻が施されている。側面の窪みは把手部分と考えられる。他に鋳造関係の共伴遺物も無く、何の鋳型であるか特定できない。土製鋳型外枠は、県内では４遺跡、県外で13遺跡の出土例が知られる。このうち10遺跡で類似の線刻が確認できるものが出土している[1)]。24は球状の身部分と棒状の柄部分で構成される。身部分は中空で、上部に径約1.5㎝の穴が開けられている。用途は不明である。類似品が奈良県田原本町唐古・鍵遺跡、大阪府八尾市山賀遺跡・亀井遺跡、大阪市森の宮遺跡で出土している[2)]。（久保清子）

ＳＤ04出土土器（１～10）　弥生時代中期から古墳時代前期にかけてのものである。

１は椀形の杯部をもつ高杯である。杯部の口縁外面・脚端部外面に２条の凹線文を施し、後に脚端部外面の凹線文上にナデ調整を施す。脚柱部には、２～３条のヘラ描き直線文を２段施す。外面には、縦位のケズリ調整後にミガキ調整を施す。杯部の内面調整は、ハケ調整後にミガキ調整を施していると思われる。脚部の内面には、脚端部にのみ明瞭なケズリ調整を施す。

２は柱状脚をもつ高杯の脚柱部で、円筒状の脚柱部を成形した後に上部を円盤充填している。外面には縦位のミガキ調整後に３条のヘラ描き直線文を２段施す。脚柱部はミガキ調整を施した後に、杯部と接合している。

３～５・７・８は甕である。３は底部で、外面にはタタキ調整後に縦位のハケ調整を施す。内面には明瞭なケズリ調整を施す。４は凹線文をもつ甕の口縁部である。調整は外面タタキ調整、内面ハケ調整を施す。口縁端部に



ＳＤ04・ＳＫ08出土土器（1/4）

は３条の凹線文を施す。５は口縁端面に面をもつ。肩部下位の外面にハケ調整、上位にタタキ調整、口縁端面に横位のハケ調整を施す。体部外面にはハケ調整後にヘラで列点を施す。

７は有段の口縁部をもつ甕で、口縁部外面には、擬凹線文を４条施した後に、口縁端部にかけてナデ調整を施す。８の底部片と同一個体と思われる。形態や胎土からみて、丹後半島から若狭湾沿岸の地域からの搬入品とみられる。

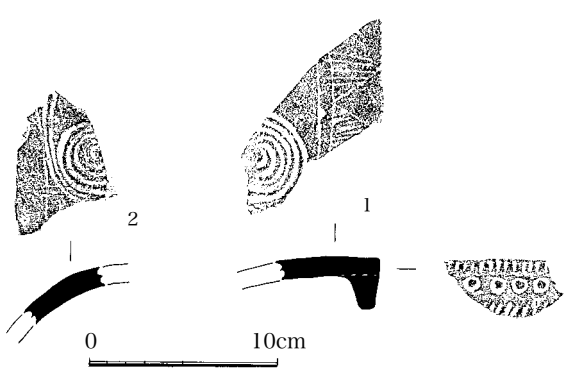
１は大和第Ⅳ - ２様式[3]、２・３・５は大和第Ⅴ様式、４は大和第Ⅳ様式に位置づけられる。７は高野編年[4]西谷１～２式、堀編年[5]法仏・小羽山１式～月影・風巻２式に位置づけられ、大和第Ⅳ - ３・４様式に併行する。

６・９・10 は土師器である。６は、「く」字状の口縁部をもつ甕で、内外面ともハケ調整で、口縁部はハケ調整後にヨコナデ調整を施す。内面のハケ調整は、板ナデ調整に近い。

９は「Ｓ」字状の口縁部をもつ甕の脚台部である。内外面ともに摩滅が激しいが、わずかに断続的な斜め方向のハケ調整を確認できる。胎土からみて、伊勢湾岸からの搬入品とみられる。脚部の開き具合から、赤塚分類Ｓ字状口縁甕Ｂ類ないしＣ類古にあたる。

10 は受口状の口縁部をもつ甕である。外面には縦位のハケ調整後に斜め方向のハケ調整を施す。内面には体部に縦位の強いナデ調整、肩部にわずかに横位のハケ調整を施す。底部は器壁の薄い上げ底である。甕の形態や近江地域に通有の粗いハケ調整を施し、表面が灰白色で断面に黒化部分を残す焼成方法などから、近江地域の野洲川流域からの搬入品とみられる。

６は布留式古段階[6]に位置づけられる。９は赤塚編年[7]廻間Ⅱ - ４～Ⅲ - １式に位置づけられ、布留式古段階に併行する。10 は伴野編年[8]Ⅶ期に位置づけられ、庄内式新段階から布留式古段階に併行する。



ＳＫ617・621出土土器（1/4）

ＳＫ 08 出土土器（11）　台付鉢の脚部である。鉢底部の円盤充填は剥離している。全体に摩滅が激しい。四角く面取りされた脚端部の上位には、弱い凹線文があったものと思われる。大和第Ⅴ様式に位置づけられる。

（中居和志）

ＳＫ 617・621 出土土器（１・２）　１はＳＫ 621 から出土した弥生土器で、器台の口縁部と考えられる。口縁部内外面は摩耗しており調整がわかりにくいが、外面には斜め方向のハケメ痕跡がわずかに残っている。内面は平滑に仕上げられているが調整は不明である。垂下した口縁部の外面には円形（径７㎜）の竹管文が押圧され、この上下にヘラ状の工具で刻目が施されている。口縁部内面には、針金のような工具で鋸歯文と二重の圏線が線刻されている。さらに圏線の内側にはヘラ状の工具で渦巻き文が描かれている。胎土には長石や雲母が含まれており、焼成はやや軟質、色調は内外面が淡橙灰色で、断面は暗灰色である。器壁は１㎝と分厚い。２はＳＫ 617 から出土した弥生土器器台の口縁部の破片である。口縁部内面には、１と同様の渦巻紋が描かれており、形態や胎土・焼成・色調などが似ることから、同一個体と考えられる。２点とも小片であるため、全体形の復元は難しいが、口径は 30㎝以上の大型品になると考えられる。

（宮崎正裕）

奈良・平安時代の土器・土製品

遺物整理箱で 95 箱分出土した。ＨＪ第 575 次調査Ａ発掘区南端の整地土中や、十五坪内の様相を知る上で重要な遺構からの出土土器を中心に図示し、記述する。

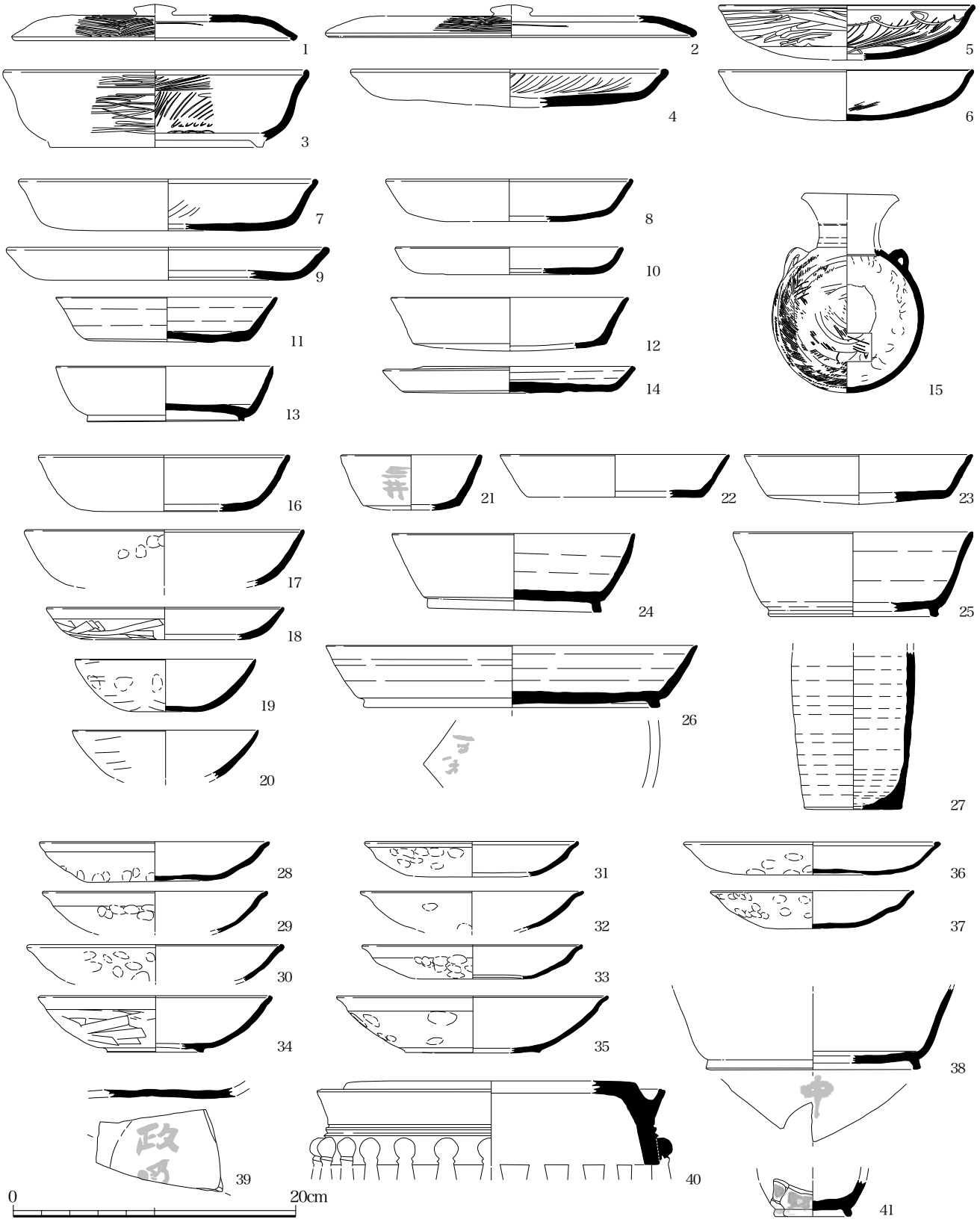
ＳＥ 505 出土土器（１～６）　図示したものはすべて土師器である。須恵器は小片が多く図化できなかった。食器類は外面をヘラミガキし、内面に１段ないし２段の斜放射状暗文と螺旋暗文を施しているものがある。蓋（１・２）も頂部外面をヘラミガキし、内面に螺旋暗文がある。８世紀前半～中頃のものと考えられる。

ＳＫ 610 出土土器（７～ 15）　７～ 10 が土師器、11 ～ 15 が須恵器である。15 はフラスコ型の横瓶で、肩部の２方向に把手がつく。

ＳＫ 613 出土土器（16 ～ 27）　16 ～ 20 が土師器、21 ～ 27 が須恵器である。杯Ａ（21）、皿Ｂ（26）には墨書があり、21 は「三井」、26 は「□□」である。

ＳＫ 610･613 出土土器は、土師器は残存状況が悪く、調整等の不明なものが多いが、土師器食器類は口縁部外面をヘラケズリするｃ手法で調整するものが主体である。古い特徴がみられる土器もあるが、時期的には８世紀末頃のものであろう。

ＳＥ501出土土器（28～37）　図示したものはすべて土師器である。須恵器は小片が多く図示できなかった。食器類の調整は口縁部を強くヨコナデするｅ手法で、口縁部下半に指頭圧痕がみられるものが多い。形態や法量から28～33を杯A、36を皿A、37を椀Aとした。杯B（34・35）はｃ手法で、9世紀中頃～後半のものと思われる。



ＳＥ501・505、ＳＫ610・613他出土土器（1/4）

その他の出土土器・土製品（38 ～ 41）　38 の須恵器杯Ｂは、十五坪南端に掘られた東西溝状土坑ＳＫ 611 から出土したもので、底部外面に「申」の墨書がある。

39 は十五坪の東面築地雨落溝ＳＤ 112 から出土した須恵器の杯もしくは皿の底部で、外面に「政所」の墨書がある。40 はＨＪ第 575 次調査Ｂ発掘区の遺物包含層から出土した蹄脚円面硯である。灰白色で硬質に焼き上がっている。

今回、十五坪内からは少なくとも３個体以上（９点）の蹄脚円面硯が出土した他、圏脚円面硯（７点）、鳥形硯と思われる形象硯（１点）、円面硯か円形硯の獣脚部（１点）、円面硯（１点）も出土している。出土した陶硯は小片が多く、個体数まではっきりしないが、破片数で 19 点に上る。すべてが十五坪内からの出土である。

「政所」の墨書土器が出土したＳＤ 112 は、共伴土器からみて９世紀初頭に埋まったと考えられる。

これらを併せて、当該期における十五坪の性格を考える際の手がかりになるかもしれない。

41 は先述の整地土から出土した奈良三彩の壷で、底部径 5.4cm である。

なお、この整地土中から８世紀～９世紀初頭の土器（土師器竈・甕・甑・高杯、須恵器壷・杯・蓋・羽釜、緑釉陶器椀ヵ皿）、ミニチュア土器須恵器壷、円面硯、土馬が出土した。

その他、ミニチュア土器杯・蓋、硯、緑釉陶器盤（体部片）、灰釉陶器椀、青磁椀・皿、白磁皿などが遺物包含層や耕作に伴う素掘り溝から出土している。　（池田裕英）

奈良時代の瓦塼

遺物整理箱で 80 箱分出土した。柱穴や遺物包含層や耕作に伴う素掘り溝を含めて、主要な瓦塼について記す。大半が丸瓦・平瓦で、軒丸瓦（58 点）、軒平瓦（67 点）の他に道具瓦（面戸瓦）や塼、小型瓦がある。

軒瓦　軒丸瓦は９型式 12 種（40 点）で、これらの他に型式不明が 17 点と新型式が１点ある。

内訳は 6140 型式Ａ種（１点）、6143 型式Ａ種（１点）、6272 型式Ｂ種（１点）、6301 型式Ｂ種（１点）、6308 型式Ａ種（１点）・Ｒ種（11 点）、6313 型式Ａａ種（11 点）・Ａ種（７点）・Ｈ種（１点）、6316 型式Ｈ種（１点）・Ｏ種（１点）、6318 型式Ａｂ種（１点）、6348 型式Ａａ種（１点）である。

軒平瓦は 10 型式 14 種（55 点）で、これらの他に型式不明が 12 点ある。内訳は 6661 型式Ｄｂ種（１点）、6664 型式Ｆ種（１点）、6666 型式Ａ種（19 点）、6671 型式Ａ種（２点）・Ｃ種（２点）・Ｉａ種（20 点）・Ｉｂ種（２点）、6679 型式Ｃ種（１点）、6685 型式Ａ種（１点）、6702 型式Ａ種（１点）・Ｇ種（１点）、6716 型式Ｃ種（１点）、6721 型式Ｇａ種（１点）・Ｋ種（１点）、6732 型式Ｌ種（１点）である。出土点数からみると、軒丸瓦では 6313 型式Ａａ・Ａ種（計 18 点）と 6308 型式Ｒ種（11 点）が、軒平瓦では 6671 型式Ｉａ・Ｉｂ種（計 22 点）、と 6666 型式Ａ種（19 点）が主体を成す。

なお、今回出土した 6671 Ｉａは段顎（２）と曲線顎あるいは直線顎（３）で、6671 Ｉｂはすべてが段顎であった。図示した軒丸瓦（１）は、盛り上がった蓮弁（子葉）が特徴的である。間弁は弁輪郭線に沿うようなＹ字状で、弁は単弁 12 弁に復原できる可能性が高い。外区には珠文と線鋸歯文を有する。新型式の軒丸瓦であるが、文様構成からみて、既存の 6138 型式の範疇に収まると思われる。図示した 6671 Ｉｂ（４）は、既存の瓦当文様を補うものである。既存のＩｂ資料は向かって右半分のもので、左半分資料は未確認であった。ＩａからＩｂへの彫り直しの基準は、唐草を彫り直しつつＩａの内区ベース面を高くするのが主たるものであった。今回出土のＩｂ資料には、中心飾の垂飾りと左第３単位の支葉の一部が確認できない。少なくともこの箇所の唐草については、内区ベース面よりも高く彫り直されていないようである。

出土状況から、十五坪の周辺築地と十五坪内での所用瓦について記す。東四坊大路西側溝ＳＤ 1014 から軒平瓦 6671 Ａ・6685 Ａが各１点出土したのみである。東面築地の雨落溝ＳＤ 112 から軒丸瓦 6272 Ｂ（１点）・6313 Ａａ（２点）・型式不明（２点）、軒平瓦 6666 Ａ（１点）・6671 Ｉａ（３点）・6732 Ｌ（１点）が出土した。

仮に十五坪の南面築地が所在した場合、築地所用瓦が含まれる可能性が高い十五坪南端の東西溝状土坑ＳＫ 611 から軒丸瓦 6308 Ｒと型式不明の軒平瓦が各１点出土している。東四坊大路東側溝ＳＤ 1015（ＨＪ第 581 次発掘区東半部）から軒丸瓦 6272 Ｂ（２点）、軒平瓦 6572 Ｄ（３点）が出土している。これらの状況からも、今回の主体を成す軒丸瓦 6313 Ａａ・Ａ（18 点）、6308 Ｒ（11 点）、軒平瓦 6671 Ｉａ・Ｉｂ（22 点）、6666 Ａ（19 点）は、東四坊大路に面した十五坪の東面築地や左京五条五坊二坪の西面築地で主体的に用いられたとは考え難く、十五坪内で主に用いられた可能性が高い。

今回、十五坪内を約 8060㎡調査して 125 点の軒瓦が出土した。五条条間路の北側溝が未検出であるため、坪の南端位置がはっきりしないが、少なくとも坪内面積の 55％余りに達する。型式が判明した軒瓦 96 点（軒丸瓦

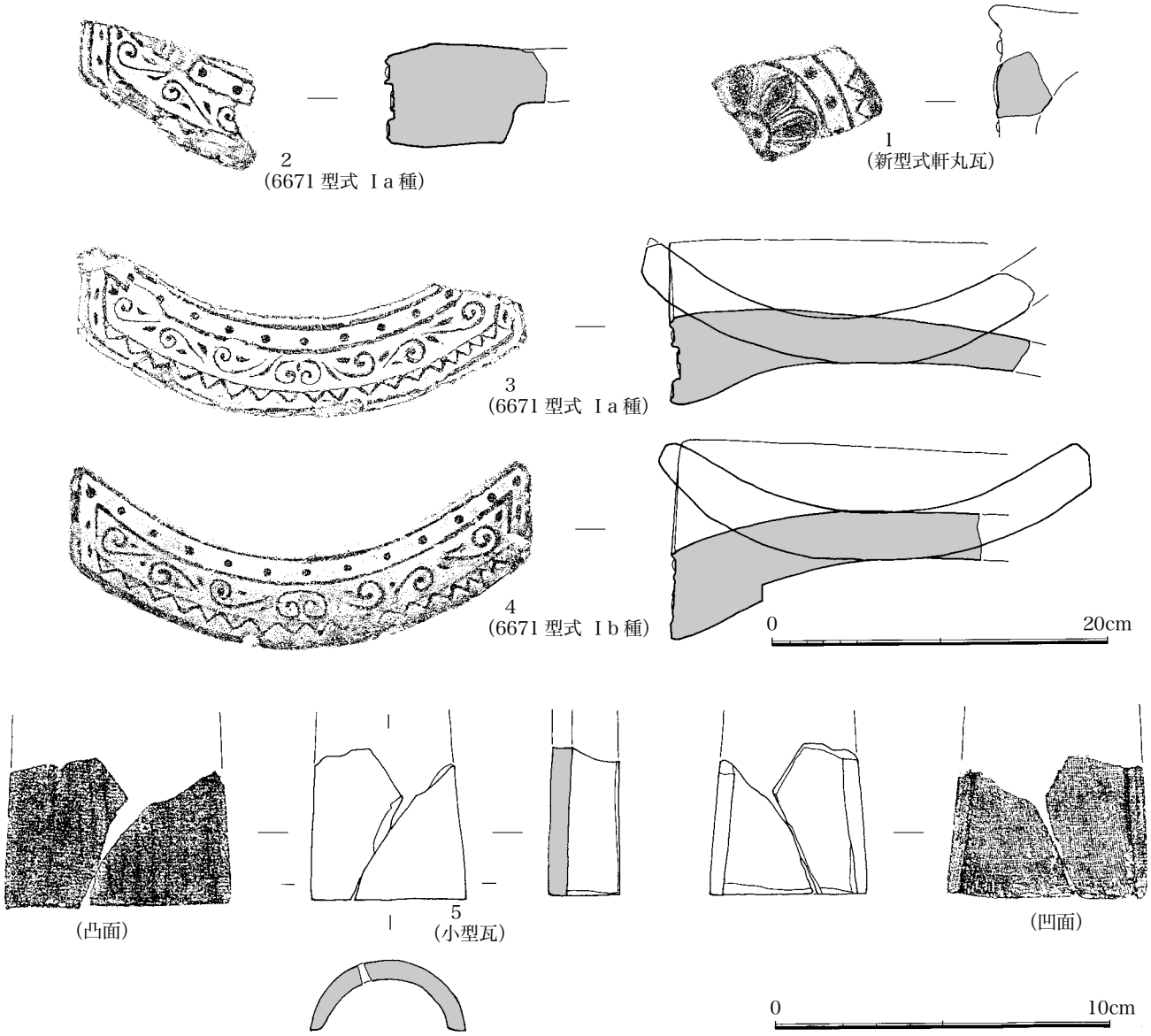
42点、軒平瓦55点）をもとに算出した単位面積当たりの出土点数は約1.19点/100㎡で、型式不明の軒瓦を含めても1.55点/100㎡程度である。この数値は平城京内で本瓦葺建物が想定されている各所のそれとは隔たりがある[9]。十五坪内には礎石建物が所在しないことと軒瓦の単位面積あたりの出土点数を勘案すると、積極的に本瓦葺建物の存在は考え難く、甍棟を想定するのが合理的であろう。

今回の出土軒瓦には、平城宮や京内寺院と同笵のものも含まれるが、基本的に平城京内各所で出土するいわゆる平城京系の軒瓦が主体を占める。軒丸瓦6308 R、同6313 A、軒平瓦6666 A、同6671 Ⅰは、いずれも平城宮出土軒瓦編年のⅡ期（721～745年）に比定される奈良時代前半の軒瓦である。比して、奈良時代後半に相当する同編年のⅢ期（745～757年）以降の軒瓦は少ない。

丸瓦・平瓦　十五坪内（ＨＪ第553・565・575次発掘区）で出土した丸瓦と平瓦の数量は、丸瓦が3,057点（205.723kg）、平瓦が5,983点（545.04kg）、丸瓦か平瓦いずれか不明が2,324点（26.122kg）である。

丸瓦・平瓦を包含する遺構の分布や密度によって、出土数量に差は当然生じるが、概して単位面積当たりの数量は、坪内の南西隅（ＨＪ第575次調査Ａ発掘区、ＨＪ第553-1次発掘区の南半西端）、北西隅（ＨＪ第565次発掘区）、東半（ＨＪ第575次調査Ｂ発掘区、ＨＪ第553-1次発掘区の大部分）の順になる。坪内の東半に比べて、南西隅の数量が多大な様相である。ただし、個体数を復元するまでには至っていない。

道具瓦　面戸瓦と塼がある。面戸瓦（10点）は、丸



出土軒瓦（1/4）・小型瓦（1/2）

瓦を生乾きの段階で面戸用に成形したものである。確認したものすべては大きく抉った両端が丸瓦の上に重なるいわゆる蟹面戸で、面戸下半部にT字状に舌部を造り出す。技法・法量ともに同規格品と推察できる。

出土遺構の内訳は、ＳＢ 229 の柱抜き取り（２点)、ＳＢ 239 の身舎柱掘形（２点)、ＳＢ 263 の柱痕跡（１点)・柱抜き取り（１点)、ＳＫ 622（１点)、十五坪東面の築地雨落溝ＳＤ 112 上部の耕作に伴う素掘り溝（１点)、坪内中央南半の遺物包含層（２点）である。

塼は 64 点出土したが、すべてが断片で全体形の分かるものはない。

小型瓦　図示した丸瓦（５）は、広端の幅が 4.6cm、筒部は長さ 4.5cm 程度が遺存する。狭端側にかけて筒部が次第に狭くなる特徴から、行基式丸瓦の小型品に復原できる。胎土は精良、焼成は硬質、色調は灰色である。凸面にはヘラ状工具による幅３mm 程度のタテナデが施される。凹面には細かい布目痕跡はあるが、布端や綴じ合わせ目などは確認できない。ＳＢ 238 の廂柱抜き取り痕跡から出土した。用途は厨子や小塔など小建築の屋瓦と考えられる。類似する小型瓦は難波宮[10]、播磨千本屋廃寺[11]などで出土が知られる稀有な資料である。

石器・石製品・金属製品・その他

石器・石製品には、サヌカイト製石鏃・剥片、砂岩製石斧片、チャート製剥片、片岩・頁岩・流紋岩製の砥石片がある。

金属製品には鉄釘・銅鋲があり、前者がＳＥ 505、後者が後世の耕作に伴う素掘り溝から出土した。

鋳造関係の遺物も見られ、炉壁片がＳＫ 607・608・610 から、フイゴ羽口がＳＤ 112 とＳＫ 621 から出土し、鉄滓はＳＤ 112、ＳＫ 622 や遺物包含層や後世の耕作に伴う素掘り溝から出土した。

また、頁岩製の硯片１点がＳＢ 208 の南側の柱穴から和同開珎あるいは神功開寶とみられる破片１点がＳＢ 222 の北妻柱穴から出土している。　（宮崎正裕）

Ⅴ　調査所見

今回の調査で縄文時代の河川堆積層を２地点で確認した。河川を確認した地点は約 70 m離れているが、地形的にみても同一の河川になると推察できる。その上面で検出した弥生時代の河川１は、その最終堆積にあたると考えられる。

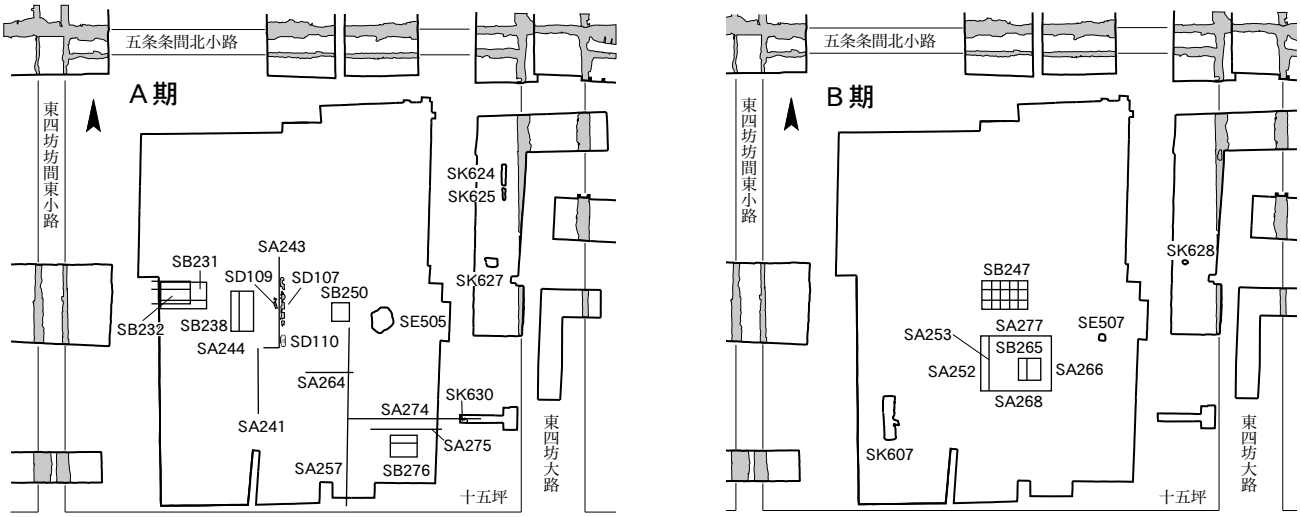
弥生時代については、河川１の南側微高地上で住居跡を検出した。調査地周辺の微高地上にも弥生時代の集落が存在すると思われ、当事業地内の南西部付近にも住居跡などの遺構が残存している可能性がある。

奈良時代については、１坪分を広範囲に調査した例が少なく、今回の調査では十五坪内の宅地利用状況を知る上で貴重な成果を得ることができた。十五坪内の遺構は、重複関係や配置、出土遺物などからみて、大きく５時期（Ａ～Ｅ）の変遷があることがわかった。

以下、時期ごとに記す。

Ａ期　この時期に属する遺構は、坪の南半分に配されて、北側は空閑地になっている。

坪中央のやや西は、ＳＡ 243- ＳＡ 244- ＳＡ 241 で区画される。ＳＡ 243 の東側にはＳＤ 107・110 が、西側にはＳＤ 109 が掘られる。坪の南東側にはＳＡ 257 に繋がるＳＡ 274 で区画される。ＳＡ 274 は五条条間路の計画心から北に 1/4 坪の位置に設けられている可能性が高い。ＳＡ 274 の南にはＳＡ 275 と北廂付



遺構変遷模式図（１）

東西棟建物ＳＢ 276 が建つ。ＳＡ 257 の北側には柱筋を揃えてＳＢ 250 が建ち、ＳＢ 250 の東側には井戸ＳＥ 505 が設けられる。坪東端のＳＫ 630 は重複関係からＳＡ 274 に先行する。坪中央西端には調査区外西に延びる北廂付東西棟建物ＳＢ 232 が建つ。短期間のうちに、ＳＢ 232 がＳＢ 231 に建て替えられる。

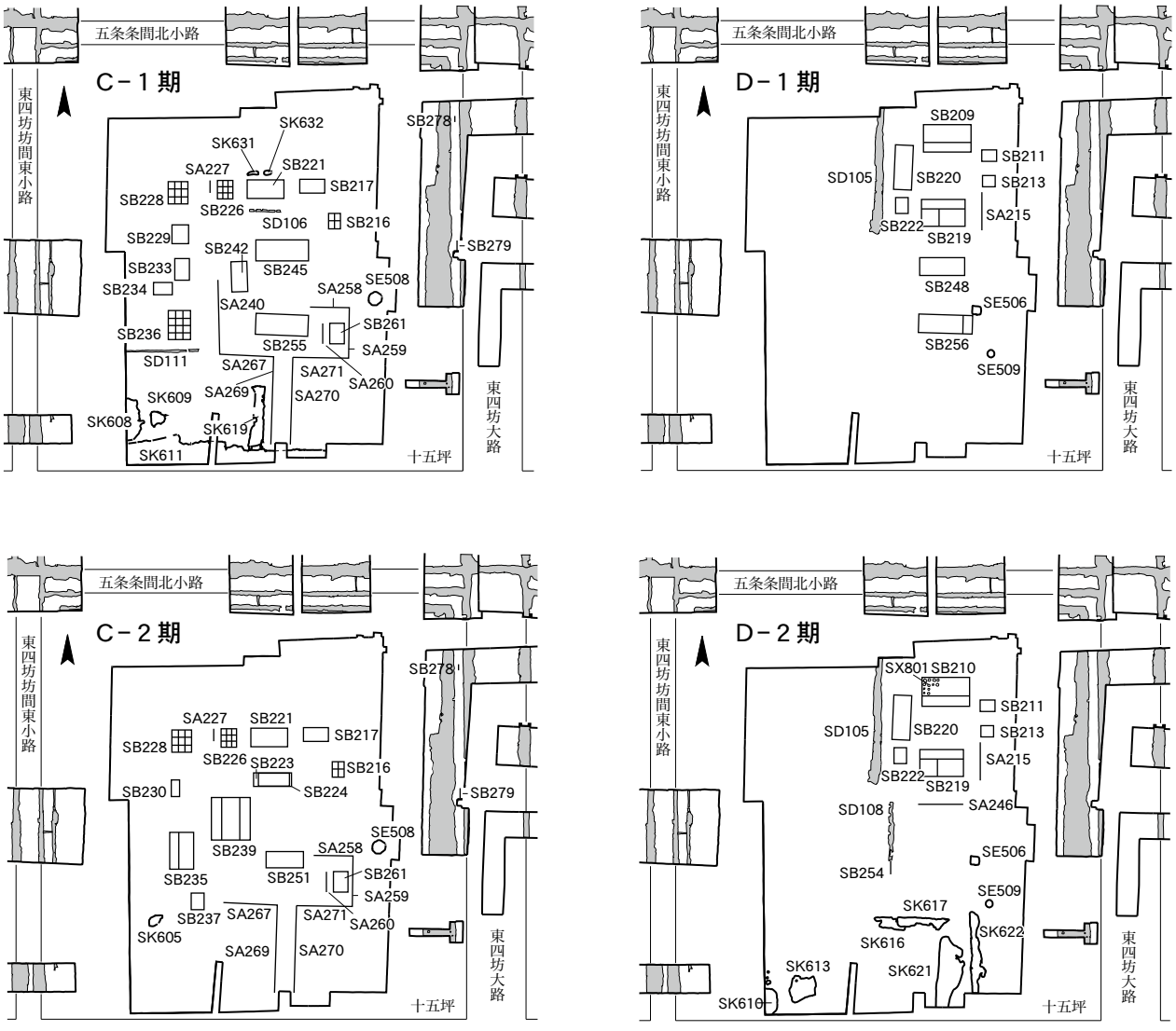
Ｂ期　Ａ期と同様、北側は空閑地のままである。

坪南半を縦横に廻っていた塀が無くなり、坪中央南半に遺構がまとまる。坪中央には東西棟総柱建物ＳＢ 247 が建つ。ＳＢ 247 の南には、ＳＢ 247 の西妻柱列と柱筋を揃えた南北塀ＳＡ 252 がＳＡ 277・266・268 と繋がり、西廂付南北棟建物ＳＢ 265 を囲む。ＳＢ 247 の建物心は、周辺条坊の計画心から割り付けた坪中心に相当する。坪東半には井戸ＳＥ 507 が設けられる。

Ｃ－１期　Ｂ期までに見られた坪内を区画、あるいは建物の周囲を塀で囲んでいた様相が大きく変わる。この時期に東四坊大路沿いをはじめ、坪の周囲を閉塞する築地が築かれたものと推察できる。築地には南北 1/2 の位置に門ＳＢ 279 が、さらにこの門心から北へ 36 mの位置に門ＳＢ 278 が置かれる。坪南端にはＳＡ 269・270 が設けられ、ＳＡ 269 の北端にはＳＡ 267-ＳＡ 240 が繋がる。ＳＡ 270 の北端には、ＳＡ 271-ＳＡ 259- ＳＡ 258 が廻り、南北棟建物ＳＢ 261 を「コ」字状に囲む。ＳＡ 269 とＳＡ 270 の間は南北通路として機能する。この通路の正面には、東西棟建物ＳＢ 255・245 が南北に並び、ＳＢ 245-242-255 が「コ」字状に並ぶ。さらに、ＳＢ 245 北側から西側にかけて、建物群が「Ｌ」字状に配置される。

Ｃ－２期　基本的にＣ - １期の配置を踏襲するが、建物の建替えが部分的に行われる。

坪中央には、東西両面廂付の南北棟建物ＳＢ 239 が建ち、ＳＢ 223-239-251 が「コ」字状に並ぶ。この「コ」



遺構変遷模式図（２）

字状配置の西側では、部分的な建て替えが見られるが、Ｃ‐１期からのＬ字状の建物配置は維持される。Ｃ‐１期に引き続き、南北塀ＳＡ269・270の間が南北通路として機能していたと考える。

坪南面の五条条間路沿いの築地の存廃状況は不明だが、ＳＡ269西側の土坑ＳＫ619と坪南端の土坑ＳＫ611が埋没する。

Ｄ－１期　坪内を東西1/2に区画する位置に南北溝ＳＤ105が掘られ、坪東半に遺構が集中する。

この頃に坪南西部が整地されるようであるが、坪の西半及び東半南端には顕著な遺構はない。

ＳＤ105の東側には、北廂付東西棟建物ＳＢ219と南廂付東西棟建物ＳＢ209が南北に相対して建つ。両者の間を空閑地として、建物が「口」字状に配置される。ＳＢ219の南には、ＳＢ219と同規模の東西棟建物ＳＢ248・256が南北に並ぶ。

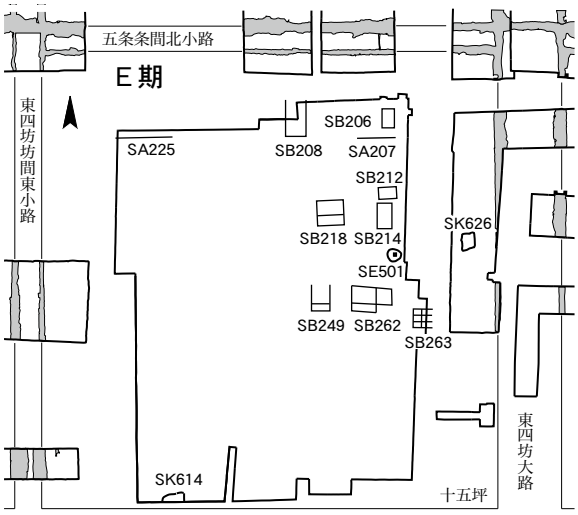
Ｄ－２期　南北溝ＳＤ105の南東側に南北溝ＳＤ108と門ＳＢ254が設けられ、さらに明確に坪内が東西1/2に区画される。ＳＢ254は、坪内の南端からおおよそ1/3ラインに位置する。

ＳＤ105の東側では、南廂付東西棟物ＳＢ209が同規のＳＢ210に建て替わり、身舎内西半に埋甕を据える。東西棟建物ＳＢ219の南側のＳＡ246以南は、空閑地化し、坪の東半南端には土坑ＳＫ616・617・621・622が、西半にはＳＫ610・613が掘られる。

Ｅ期　Ｄ期まで見られた平面規模の大きな建物は無くなり、坪北東部を中心に小規模な建物が建つ。

Ｄ期に坪内を東西に二分していた南北溝ＳＤ105や東面築地の雨落溝ＳＤ112が廃絶する。

（宮崎正裕・山前智敬）



遺構変遷模式図（３）

各時期の年代　各期の遺構から出土した土器・軒瓦のうち、年代が分かる主なものについて記す。

Ａ期：ＳＥ505の井戸枠抜き取り痕跡から８世紀前半～中頃の土師器が出土した。

Ｂ期：ＳＫ607から８世紀中頃の土師器・須恵器、平城宮出土軒瓦編年のⅡ期（721～745年）に相当する軒丸瓦（6313Ａａ）・軒平瓦（6666Ａ）が出土した。

Ｃ－１期：ＳＢ216・221・226・228の柱掘形、ＳＥ508の井戸枠抜き取り痕跡、ＳＫ608・611、ＳＤ111から８世紀後半の土師器・須恵器が出土した。

Ｃ－２期：ＳＢ224の柱掘形から８世紀後半の須恵器が出土した。

Ｄ－１期：ＳＢ209の柱掘形から９世紀前半の土師器が、ＳＢ209の柱痕跡から９世紀中頃の黒色土器Ａ類が出土した。整地層には８世紀末～９世紀初頭の土師器・須恵器が含まれる。

Ｅ期：ＳＢ208の柱抜き取り痕跡から９世紀の黒色土器Ａ類、ＳＥ501の井戸枠抜き取り痕跡から９世紀後半の土師器が出土した。

以上のように、出土遺物と遺構の重複関係から、Ａ期・Ｂ期は８世紀中頃、Ｃ－１期は８世紀後半、Ｃ－２期は８世紀末～９世紀初頭、Ｄ－１・Ｄ－２期は９世紀前半、Ｅ期は９世紀中頃以降とみておきたい。

まとめ

十五坪の宅地利用は、８世紀中頃からはじまり９世紀中頃まで続いていることが明らかになった。

とりわけ注目されるのは、８世紀後半に１町全域を利用して配された建物群（Ｃ期）である。これらの建物群は、前殿・後殿を中心に、その周囲に雑舎と倉庫群を配置しており、一般の邸宅というよりも公的な施設を想起させられる。

さらに東面築地の雨落溝から出土した「政所」の墨書土器も注目すべきである。政所は、公的施設か家政機関のいずれかは判断が難しいが、十五坪内に政所が存在していた可能性を示す資料である。

また、十五坪内から陶硯が19点（うち蹄脚円面硯９点）も出土し、蹄脚円面硯をはじめとした円面硯の出土数の多さも特筆すべきである。特に、蹄脚円面硯の多さは平城宮における出土傾向に匹敵[12)]するもので、平城京内では特殊な様相である。

現時点での見解ではあるが、少なくとも１町利用されていた奈良時代後期には、公的施設（官衙）が存在した可能性が高いものと考える。周辺宅地の利用形態との比較検討も不可欠な状況である。　（宮崎正裕）

1）奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『秋季特別展　銅鐸　－弥生時代の青銅器生産－』2009他
奈良県田原本町唐古・鍵遺跡、桜井市大福遺跡、脇本遺跡、大阪府東大阪市池島・福万寺遺跡、滋賀県守山市服部遺跡、野洲市下々塚遺跡、栗東市下鈎遺跡、東近江市石田遺跡、兵庫県姫路市仮称大井川区製地内遺跡第６地点、石川県小松市一針Ｂ遺跡の10遺跡で出土。各遺跡発掘調査報告書等で報告。
2）田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査概要２　唐古・鍵遺跡第16・18・19次発掘調査概報』1984
同『田原本町埋蔵文化財調査概要6　唐古・鍵遺跡第21・23次発掘調査概報』1988
（財)大阪文化財センター『山賀（その２）』1983
同『山賀（その３）』1984
大阪府教育委員会『河内遺跡群の動態Ⅶ　－南遺跡群　弥生時代後期～古墳時代前期－　遺構・土器・土製品編』1999
（財)大阪文化財センター『亀井（その２）』1984
難波宮址顕彰会『森の宮遺跡第３・４次発掘調査報告書』
3）藤田三郎・豆谷和之「奈良県における土器編年」『奈良県の弥生土器集成』　奈良県立橿原考古学研究所　2003
4）高野陽子「丹後地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター　2006
5）堀大介「北陸地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター　2006
6）森岡秀人・西村歩「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター　2006
7）赤塚次郎「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財調査センター　1997
8）伴野幸一「近江地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター　2006
9）中井公「大規模宅地とその類型」『古代都城制研究集会第3回報告集　古代都城の構造と展開』奈良国立文化財研究所　1998
10）財団法人　大阪市文化財協会　『難波宮址の研究　第十二　－宮殿周辺地域の調査－』　2004
11）兵庫県宍粟郡山崎町教育委員会『播磨千本屋廃寺跡』1982
12）奈良文化財研究所『平城京出土陶硯Ⅱ　－平城京・寺院－』2007
陶硯の出土数量は、おおよそ0.16点/100㎡で、平城宮内では出土品の54％が圏足円面硯、34％が蹄脚円面硯である。一方、（京内の寺院域を除く）平城京内では57％が圏足円面硯、20％が蹄脚円面硯である。

検出遺構一覧表（1）

遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
弥生時代・古墳時代					
ＳＢ01	隅丸方形	南北6.0×東西3.2以上	0.05（周溝）		竪穴建物。幅0.1mの周溝が廻る。建物内部で柱穴を４つ検出。柱穴掘形は直径0.3m、深さ0.5～0.7m。柱間は南北が3.2m、東西が3.2mと3.0m。
ＳＢ02	隅丸方形	南北8.1×東西6.5以上	0.15（周溝）		竪穴建物。幅0.15mの周溝が廻る。建物内部で柱穴を４つ検出。柱穴掘形は直径0.3m、深さ0.5m。柱間は南北が3.7m、東西が3.2mと3.5m。
ＳＢ03	隅丸方形	南北6.5以上×東西2.8以上	0.15（周溝）		竪穴建物。幅0.15mの周溝が廻る。建物内部で柱穴を１つ検出。柱穴掘形は直径0.3m、深さ0.5m。柱穴掘形は直径0.3m、深さ0.5mである。
ＳＫ05	不整形	南北1.5×東西0.7～1.2	0.5	弥生土器	重複関係からＳＡ240・241よりも古い。
ＳＫ06	円形	径0.8	0.3	弥生時代後期：弥生土器壷・甕	重複関係からＳＤ1014よりも古い。
ＳＫ07	不整形	南北1.4以上×東西6.4以上	0.2～0.4	無し	埋土は淡黄緑～黄土色粘砂で、土坑底の凹凸が著しい。重複関係からＳＤ06よりも古い。
ＳＫ08	不整形	南北0.9～1.4×東西4.5以上	0.1	弥生時代末：弥生土器台付鉢、古墳時代後期：土師器・須恵器	
ＳＫ09	不整形	南北8.5×東西7.0	0.1～0.2	サヌカイト剥片、古墳時代後期：土師器・須恵器	重複関係からＳＥ505・507、ＳＡ258・259よりも古い。
ＳＤ04	弧状溝	長さ30.0以上、幅1.8～2.6	0.8	サヌカイト石鏃・石核・剥片、弥生時代中期～末：弥生土器甕・高杯、古墳時代初頭：土師器甕	溝底の標高からみて、南東から北西に流れる。
ＳＤ05	蛇行溝	長さ19.8以上、幅0.15～0.3	0.15	弥生土器	ＳＢ01の排水溝と考えられ、南側でＳＤ06と合流する可能性がある。
ＳＤ06	斜行溝	長さ6.8以上、幅0.25	0.1	弥生土器	重複関係からＳＫ07よりも新しい。ＳＢ02の周溝と繋がる。南側でＳＤ05と合流する可能性がある。
ＳＤ07	斜行溝	長さ2.8以上、幅1.0	0.1	弥生土器	西端がＳＤ112で削平される。
ＳＤ08	弧状溝	長さ3.5以上、幅0.7	0.1	弥生土器	東端がＳＤ1014で削平される。
条坊関連					
ＳＦ1013	南北道路	長さ34.0、路面幅13前後			東四坊大路。舗装などの造作なし。
ＳＤ1014	南北溝	長さ58.0以上、幅3.0～3.4	0.3～0.7	サヌカイト楔形石器・石核・剥片、弥生時代後期：弥生土器高杯・台付鉢・壷・甕、８世紀末～９世紀初頭：土師器杯・皿・蓋・高杯・甕、須恵器杯・皿・蓋（転用硯）・壷・壷蓋・甕・ミニチュア壷・線刻「（記号ヵ）」のある須恵器杯Ｂ、黒色土器Ａ類杯、緑釉陶器片、製塩土器、土馬、軒平瓦（6685Ａ・6671Ａ）、塼、鉄滓	東四坊大路西側溝。溝最深部の国土座標値はＸ＝−146,887.5、Ｙ＝−16,725。重複関係からＳＫ06、ＳＤ08、ＳＫ605・606よりも新しい。
ＳＤ1015	南北溝	長さ80.0以上、幅3.0～4.0	0.4～0.5	８世紀末～９世紀初頭：土師器、須恵器、製塩土器、土馬、軒丸瓦（6272Ｂ）、軒平瓦（6572Ｄ）、神功開寶、隆平永寶	東四坊大路東側溝。溝最深部の国土座標値はＸ＝−146,887.0、Ｙ＝−16,707.9。埋没時期は平安時代初頭。
ＳＦ2004	東西道路	長さ41.0以上、幅6.0～6.6			五条条間北小路。
ＳＤ2005ａ	東西溝	長さ41.0以上、幅1.6～4.4	1.3～1.7	土師器、須恵器、製塩土器、墨書土器、人面墨書土器、土馬、軒平瓦（6702Ｇ）、鉄製刀子、フイゴ羽口、坩堝、銅滓、木製斎串・曲物・箸・漆塗椀、獣骨、桃種	
ＳＤ2005ｂ	東西溝	長さ41.0以上、幅1.6～2.8	0.8～1.2	土師器、須恵器、黒色土器Ａ類、三彩陶器椀・ミニチュア長頸壷、製塩土器、墨書土器、土馬、土錘、軒平瓦（6641Ｃ・6664Ｄ・6671Ａ・6671Ⅰａ・6691Ａ・6702Ｇ）、塼、銅鋲、銭貨（和同開珎・萬年通寶・神功開寶）、フイゴ羽口、ガラス溶解用坩堝、取瓶、溶銅、銅滴、銅滓、鉄滓、木製人形・斎串・横串・曲物・糸巻・漆塗皿、石鏃、砥石、玉髄、水晶、獣骨、桃種、瓜種	五条条間北小路北側溝。補修前をａ、補修後をｂとした。溝心の国土座標値はＸ＝−146,864.4、Ｙ＝−16,755.3。

検出遺構一覧表（2）

遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
条坊関連					
ＳＤ2006	東西溝	長さ41.0以上、幅1.0～1.8	0.4～0.6	須恵器鉢、土馬、軒丸瓦（6308Ａ）	五条条間北小路南側溝。溝心の国土座標値はＸ＝−146,871.0、Ｙ＝−16,755.3。
ＳＫ605	溝状	南北2.8×東西1.1	0.5	弥生土器甕・壷、８世紀：土師器甕、須恵器	重複関係からＳＤ1014よりも古い。
ＳＫ606	溝状	南北5.0×東西0.4以上	0.2	弥生土器壷・台付鉢、８世紀：須恵器壷蓋・甕	重複関係からＳＤ1014よりも古い。

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備考
		桁行×梁行	（m）	（m）	桁行	梁行	
ＳＡ201	東西	長さ119×幅3.0					十五坪の北面築地。
ＳＡ204	南北	１以上	3.6以上		3.6		柱穴の深さは0.3m。ＳＡ205に繋がる。
ＳＡ205	東西	１以上	4.5以上		4.5		柱穴の深さは0.3m。ＳＡ204に繋がる。
ＳＢ206	南北	３×２	5.1	3.2	1.7等間	1.6等間	柱穴の深さは0.2～0.4m。
ＳＡ207	東西	3	10.5		東から2.7-5.1-2.7		重複関係からＳＢ209よりも新しい。
ＳＢ208	南北	３×２	7.2	5.1	2.4等間	東から2.4-2.7	重複関係からＳＢ209よりも新しい。柱痕跡から８世紀後半～の土師器杯Ａ、柱抜取から９世紀初頭の黒色土器Ａ類椀、９世紀の黒色土器Ａ類片が出土。
ＳＢ209	東西	５×２	13.2	5.1	東から2.7-2.7-2.4-2.7-2.7	北から2.7-2.4	南廂（廂の出は2.7m）。柱穴の深さは身舎が0.1～0.4m、廂が0.1～0.3m。重複関係からＳＡ207、ＳＢ208・210よりも古い。身舎柱掘形から８世紀後半～末の土師器皿Ａ・椀Ｃ、８世紀末～の須恵器壷Ｇ・黒色土器Ａ類片、９世紀前半の土師器椀が出土。身舎柱痕跡から９世紀中頃の黒色土器Ａ類椀が出土。
ＳＢ210	東西	５×２	13.2	5.1	東から2.7-2.7-2.4-2.7-2.7	北から2.7-2.4	南廂（廂の出は2.7m）。柱穴の深さは身舎が0.3～0.5m、廂が0.1～0.3m。重複関係からＳＢ209よりも新しい。身舎西半部には埋甕ＳＸ801がある。身舎柱掘形から８世紀末～の黒色土器Ａ類片が出土。廂柱掘形から８世紀末～９世紀初頭の土師器高杯・杯Ｃ？が出土。身舎柱抜取から８世紀末～９世紀初頭の土師器皿Ａが出土。
ＳＢ211	東西	２×２	4.2	3.3	東から2.4-1.8	北から1.5-1.8	柱痕跡から９世紀中頃の土師器杯Ａ？が出土。
ＳＢ212	東西	３×２	4.8	3.2	1.6等間	1.6等間	柱穴の深さは0.1～0.4m。
ＳＢ213	東西	２×２	3.6	3.3	1.8等間	北から1.5-1.8	柱穴の深さは0.1～0.2m。
ＳＢ214	南北	３×２	6.6	3.9	北から2.1-2.1-2.4	東から2.1-1.8	南妻柱を持たない。柱穴の深さは0.2～0.5m。
ＳＡ215	南北	6	12.6		2.1等間		柱筋をＳＢ213の西妻柱列に揃える。
ＳＢ216	南北	２×２	4.2	3.3	2.1等間	東から1.5-1.8	総柱建物。柱穴の深さは0.1～0.2m。柱掘形から８世紀後半～の須恵器杯蓋が出土。柱痕跡から８世紀末～９世紀初頭の須恵器皿Ｃが出土。
ＳＢ217	東西	４×２	6.9	3.9	東から1.8-1.8-1.5-1.8	北から2.1-1.8	柱穴の深さは0.1～0.5m。
ＳＢ218	東西	４×２	6.9	3.9	東から1.5-1.8-1.8-1.8	北から2.1-1.8	南廂（廂の出は2.7m）。柱穴の深さは身舎が0.1～0.4m、廂が0.2～0.3m。柱痕跡から８世紀末～９世紀初頭の黒色土器Ａ類椀？が出土。
ＳＢ219	東西	５×２	12.6	5.1	東から2.4-2.4-2.7-2.7-2.4	北から2.7-2.4	北廂（廂の出は2.7m）。西から２間目で間仕切る。柱穴の深さは身舎が0.2～0.4m、廂が0.2～0.3m。重複関係からＳＢ221・224よりも新しい。身舎柱抜取から８世紀末の土師器椀Ａが出土。
ＳＢ220	南北	５×２	12.6	5.0	北から2.7-2.7-2.4-2.4-2.4	2.5等間	柱穴の深さは0.1～0.3m。重複関係からＳＢ221、ＳＫ631・632よりも新しい。柱掘形から８世紀後半～の土師器杯Ａ・須恵器蓋、８世紀末～９世紀初頭の黒色土器Ａ類片が出土。

検出遺構一覧表（3）

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	
ＳＢ221	東西	5×3	10.2	5.1	東から2.1-2.1-1.8-2.1-2.1	北から1.8-1.8-1.5	柱穴の深さは0.1～0.4m。重複関係からＳＢ219・220・222よりも古い。柱掘形から８世紀後半の土師器杯Ａが出土。
ＳＢ222	南北	3×2	4.2	3.6	北から1.5-1.5-1.2	1.8等間	柱穴の深さは0.4～0.6m。重複関係からＳＢ221、ＳＤ106よりも新しい。柱掘形から８世紀後半～９世紀初頭の土師器杯Ａ・皿Ａが出土。柱抜取から８世紀末～９世紀初頭の須恵器杯Ｂが出土。
ＳＢ223	東西	5×2	10.5	3.9	東から1.8-1.8-2.1-1.8-3.0	北から2.1-1.8	柱穴の深さは0.1～0.3m。重複関係からＳＢ245よりも新しく、ＳＢ219・224よりも古い。
ＳＢ224	東西	5×2	8.7	3.6	東から1.8-1.8-1.2-1.8-2.1	1.8等間	柱穴の深さは0.1～0.2m。重複関係からＳＢ223・245よりも新しい。柱掘形から８世紀後半～の須恵器杯Ｂが出土。
ＳＡ225	東西	5以上	12.0以上		2.4等間		柱穴の深さは0.1～0.5m。
ＳＢ226	南北	3×3	5.4	4.5	1.8等間	1.5等間	総柱建物。柱穴の深さは0.3～0.7m。柱掘形から８世紀後半の土師器杯Ｃ・須恵器杯ヵ皿、柱抜取から８世紀中頃の土師器杯ヵ皿が出土。
ＳＡ227	南北	2	3.9		北から2.1-1.8		柱穴の深さは0.2～0.3m。ＳＢ226の目隠し塀と考える。ＳＢ226東側柱列との距離は2.4mである。
ＳＢ228	南北	3×3	6.3	5.4	2.1等間	1.8等間	総柱建物。柱穴の深さは0.3～0.6m。柱掘形から８世紀後半～の土師器皿Ａヵ蓋・甕が出土。
ＳＢ229	南北	3×3	5.4	4.5	1.8等間	1.5等間	柱穴の深さは0.2～0.5m。重複関係からＳＢ230よりも古い。
ＳＢ230	南北	3×1	4.5	2.4	1.5等間	2.4	妻柱を持たない。柱穴の深さは0.2～0.3m。重複関係からＳＢ229よりも新しい。
ＳＢ231	東西	5×2	11.8	4.8	東から2.7-2.1-2.4-2.4-2.4	2.4等間	南廂（廂の出は2.4m）。柱穴の深さは身舎が0.3～0.6m、廂が0.2～0.4m。重複関係からＳＢ232よりも新しく、ＳＢ234よりも古い。
ＳＢ232	東西	4以上×2	7.2以上	3.6	1.8等間	1.8等間	北廂（廂の出は2.4m）。柱穴の深さは身舎が0.2～0.4m、廂が0.1～0.3m。重複関係からＳＢ231よりも古い。
ＳＢ233	南北	3×2	6.3	3.9	2.1等間	1.95等間	柱穴の深さは0.1～0.4m。
ＳＢ234	東西	3×2	5.25	3.6	東から1.8-1.8-1.65	1.8等間	柱穴の深さは0.1～0.4m。重複関係からＳＢ231よりも新しく、ＳＢ235よりも古い。
ＳＢ235	南北	5×2	10.5	3.9	北から2.1-1.95-1.8-2.25-2.4	1.95等間	西廂（廂の出は2.7m）。柱穴の深さは身舎が0.3～0.5m、廂が0.05～0.5m。重複関係からＳＢ234・236・238よりも新しい。
ＳＢ236	南北	4×3	7.8	6.3	北から2.1-2.1-1.8-1.8	東から2.25-1.8-2.25	総柱建物。柱穴の深さは0.1～0.5m。重複関係からＳＢ235よりも古い。
ＳＢ237	南北	3×2	4.5	3.6	1.5等間	1.8等間	柱穴の深さは0.4～0.5m。重複関係からＳＤ111よりも新しい。
ＳＢ238	南北	6×2	10.95	3.75	北から1.65-1.8-1.95-1.65-1.8-2.1	東から1.95-1.8	西廂（廂の出は2.4m）。柱穴の深さは身舎が0.2～0.5m、廂が0.3～0.4m。重複関係からＳＢ235・239よりも古い。廂柱抜取から小型丸瓦が出土。
ＳＢ239	南北	5×2	12.0	5.1	北から2.4-2.4-2.4-2.1-2.7	2.55等間	東西両廂（廂の出東西とも3.0m）。柱穴の深さは身舎が0.3～0.4m、廂が0.2～0.3m。重複関係からＳＡ240・243、ＳＢ238・242、ＳＤ109よりも新しい。身舎柱掘形から８世紀後半の土師器杯Ａ、身舎柱痕跡から８世紀末～９世紀初頭の黒色土器Ａ類椀が出土。
ＳＡ240	南北	9	21.15		北から2.4-2.4-2.4-2.4-2.1-2.25-2.4-2.4-2.4		柱穴の深さは0.2～0.5m。重複関係からＳＢ239よりも古い。ＳＡ267に繋がる。
ＳＡ241	南北	7	17.1		北から2.25-2.55-2.4-2.4-2.55-2.55-2.4		柱穴の深さは0.1～0.5m。重複関係からＳＫ05よりも新しい。
ＳＢ242	南北	4×2	8.4	4.5	2.1等間	2.25等間	柱穴の深さは0.3～0.4m。重複関係からＳＤ107よりも新しく、ＳＢ239よりも古い。
ＳＡ243	南北	9	24.3		2.7等間		柱穴の深さは0.1～0.3m。重複関係からＳＢ239よりも古い。柱痕跡から８世紀後半の土師器杯Ａが出土。
ＳＡ244	東西	1	2.4		2.4		柱穴の深さは0.1m。ＳＡ243に繋がる。

検出遺構一覧表（4）

遺構番号	棟方向	規模（間）桁行×梁行	桁行全長（m）	梁行全長（m）	柱間寸法（m）桁行	柱間寸法（m）梁行	備考
ＳＢ245	東西	5×2	14.85	6.0	東から2.7-？-？-2.85-3.0	3.0等間	柱穴の深さは0.2～0.4m。重複関係からＳＢ223・224、ＳＤ108よりも古い。
ＳＡ246	東西	（5）	12.0		東から2.4-2.4-？-？-？		柱穴の深さは0.25～0.4m。
ＳＢ247	東西	5×3	12.3	7.2	東から3.0-2.1-2.1-2.55-2.55	北から2.1-2.55-2.55	総柱建物。柱穴の深さは0.1～0.5m。重複関係からＳＢ250、ＳＤ107よりも新しく、ＳＤ108よりも古い。
ＳＢ248	東西	5×2	12.2	5.1	東から2.4-2.55-2.5-2.2-2.55	北から2.7-2.4	柱穴の深さは0.2～0.6m。
ＳＢ249	？	？×2	？	4.5	（2.1）	2.25等間	南廂（廂の出は1.8m）。柱穴の深さは身舎が0.4m、廂は不明。
ＳＢ250	南北	2×2	5.1	4.8	西側柱は北から2.4-2.7、東側柱は北から2.7-2.4	2.4等間	柱穴の深さは0.2～0.5m。重複関係からＳＢ247よりも古い。
ＳＢ251	東西	5×2	10.65	4.8	東から2.1-2.1-2.1-2.1-2.25	2.4等間	柱穴の深さは0.2～0.6m。
ＳＡ252	南北	7	14.4		北から2.1-2.1-2.1-2.1-1.8-2.1-2.1		柱穴の深さは0.3～0.5m。重複関係からＳＤ110よりも新しい。ＳＡ268・277に繋がる。
ＳＡ253	南北	7	14.4		北から2.1-2.1-2.1-2.1-1.8-2.1-2.1		柱穴の深さは0.2～0.3m。ＳＡ268・277に繋がる。
ＳＢ254	南北	1	3.9		3.9		門。柱穴の深さは0.8～0.9m。
ＳＢ255	東西	5×2	14.85	5.7	東から2.7-3.15-3.15-2.7-3.15	2.85等間	柱穴の深さは0.1～0.5m。重複関係からＳＡ266、ＳＢ265よりも新しく、ＳＢ256よりも古い。
ＳＢ256	東西	5×2	12.75	5.1	2.55等間	2.55等間	東廂（廂の出は2.4m）。柱穴の深さは身舎が0.3～0.6m、廂が0.3m。重複関係からＳＡ260・266、ＳＢ255・261・265よりも新しい。
ＳＡ257	南北	19以上	44.7以上		南から2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.1-2.1-2.1-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4		柱穴の深さは0.2～0.5m。重複関係からＳＫ611・617・621よりも古い。ＳＡ274に繋がる。
ＳＡ258	東西	5	11.25		東から2.4-2.1-2.25-2.25-2.25		柱穴の深さは0.2～0.3m。重複関係からＳＫ09よりも新しく、ＳＥ506よりも古い。ＳＡ257・259に繋がる。
ＳＡ259	南北	6	14.4		2.4等間		柱穴の深さは0.3～0.5m。ＳＡ258・271に繋がる。
ＳＡ260	南北	3	5.85		1.95等間		柱穴の深さは0.2～0.4m。重複関係からＳＢ256よりも古い。
ＳＢ261	南北	2×2	6.0	4.2	3.0等間	2.1等間	北妻柱を持たない。柱穴の深さは0.2～0.4m。重複関係からＳＢ256よりも古い。
ＳＢ262	東西	5（3）×2	10.8	4.5　(4.2)	東から2.1-2.1-2.1-2.4-2.1	西妻2.25等間、東妻2.1等間	南廂（廂の出2.1m）。西から3間目で間仕切る。柱穴の深さは身舎が0.1～0.5m、廂が0.1～0.5m。重複関係からＳＥ505、ＳＫ620よりも新しい。国土座標に対し西で北に振れる。
ＳＢ263	南北	3×1以上	5.1	2.4以上	1.7等間	2.4	総柱建物。柱穴の深さは0.3～0.6m。重複関係からＳＥ508よりも新しい。国土座標に対し北で西に振れる。
ＳＡ264	東西	5	12.3		東から2.4-2.7-2.4-2.4-2.4		柱穴の深さは0.3～0.5m。重複関係からＳＢ265よりも古い。
ＳＢ265	南北	3×2	5.85	3.6	1.95等間	1.8等間	西廂（廂の出2.4m）。柱穴の深さは身舎が0.2～0.5m、廂が0.2～0.4m。重複関係からＳＡ264よりも新しく、ＳＢ255・256よりも古い。
ＳＡ266	南北	7	14.4		北から2.1-2.1-2.1-2.1-2.1-1.8-2.1		柱穴の深さは0.2～0.3m。重複関係からＳＢ255・256よりも古い。ＳＡ268・277に繋がる。
ＳＡ267	東西	7	15.75		2.25等間		柱穴の深さは0.2～0.4m。ＳＡ240・269に繋がる。国土座標に対し西で北に振れる。
ＳＡ268	東西	9	18.9		東から2.25-1.95-2.1-2.1-2.1-2.1-2.1-1.95-2.25		柱穴の深さは0.3～0.4m。ＳＡ252・253・266に繋がる。

検出遺構一覧表（5）

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備考
		桁行×梁行	（m）	（m）	桁行	梁行	
ＳＡ269	南北	10	24.6		北から2.7-2.4-2.4-2.4-2.4-2.7-2.4-2.4-2.7-2.1		柱穴の深さは0.2～0.4m。重複関係からＳＫ617・618よりも古い。ＳＡ267に繋がる。
ＳＡ270	南北	10	24.6		北から2.4-2.4-2.7-2.4-2.4-2.4-2.7-2.1-2.4-2.7		柱穴の深さは0.2～0.5m。重複関係からＳＫ617よりも古い。ＳＡ271に繋がる。
ＳＡ271	東西	7	16.05		東から2.25-2.25-2.25-2.25-2.25-2.25-2.55		柱穴の深さは0.2～0.6m。重複関係からＳＥ509よりも古い。ＳＡ259・270に繋がる。
ＳＢ272	東西	1×1	3.9	3.3	3.9	3.3	柱穴の深さは0.1～0.2m。重複関係からＳＫ622よりも古い。
ＳＢ273	南北	4×2	5.4	3.5	北から0.6-1.4-1.8-1.6	東から1.6-1.9	柱穴の深さは0.1～0.2m。国土座標に対し北で東に振れる。
ＳＡ274	東西	15	35.85		東から2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-(2.4)-(2.4)-2.4-2.4-2.25		柱穴の深さは0.1～0.5m。重複関係からＳＫ630よりも新しく、ＳＤ112、ＳＫ622よりも古い。ＳＡ257に繋がる。
ＳＡ275	東西	(7)以上	17.4以上		東から2.4-2.4-2.4-3.0-2.4-(2.4)-2.4		柱穴の深さは0.2m。重複関係からＳＫ622よりも古い。
ＳＢ276	東西	4×1	7.2	3.6	1.8等間	3.6	北廂（廂の出2.1m）。柱穴の深さは身舎が0.1～0.3m、廂が0.1m。重複関係からＳＫ622よりも古い。
ＳＡ277	東西	9	18.9		2.1等間		柱穴の深さは0.2～0.5m。重複関係からＳＤ110よりも新しい。ＳＡ252・253・266に繋がる。
ＳＢ278	南北	1	1.8				門。柱穴の深さは0.1m。五条条間北小路南側溝心から南へ約20.8mに位置する。
ＳＢ279	南北	1	3.3				門。柱穴の深さは0.5m。五条条間北小路南側溝心から南へ約56.6mに位置する。
ＳＡ280	南北	長さ58.0以上、幅2.5～3.0					門と思われるＳＢ278・279があることから、十五坪の東面築地を想定する。

遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＤ102	南北溝	長さ3.0、幅0.6	0.1～0.3	須恵器蓋・椀・甕、製塩土器、塼	十五坪内から、五条条間北小路南側溝への排水施設（築地暗渠）。
ＳＤ105	南北溝	長さ35.5以上、幅1.5～3.5	0.2～0.3	サヌカイト石鏃・剥片、８世紀末：土師器高杯・須恵器杯、圏足円面硯、製塩土器、土馬、軒平瓦（6666Ａ）	埋没時期は奈良時代末～平安時代初頭で、重複関係からＳＡ243よりも新しい。明確な流水の痕跡が無く、一気に埋没するようである。
ＳＤ106	東西溝	長さ8.6～9.6、幅0.7	0.25	８世紀：土師器皿・須恵器杯・甕、漆が体部内面に付着した須恵器、製塩土器、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＢ222よりも古い。
ＳＤ107	南北溝	長さ13.0、幅0.6～1.5	0.2	弥生土器、８世紀：土師器・須恵器、蹄脚円面硯、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＢ242・247よりも古い。
ＳＤ108	南北溝	長さ17.0、幅1.0～1.4	0.1～0.2	８世紀末：土師器・須恵器水瓶、土馬、丸瓦、平瓦、９世紀：青磁杯	埋没時期は奈良時代末～平安時代初頭で、重複関係からＳＢ245・247よりも新しい。
ＳＤ109	南北溝	長さ4.0、幅0.5～1.0	0.1～0.2	８世紀：土師器・須恵器	重複関係からＳＢ239よりも古い。
ＳＤ110	南北溝	長さ3.0、幅0.7	0.15	無し	重複関係からＳＡ252・277よりも古い。
ＳＤ111	東西溝	長さ20.2以上、幅0.3～0.5	0.1	８世紀中頃～後半：土師器・須恵器、形象硯（鳥形硯）、製塩土器、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＢ237よりも古い。
ＳＤ112	南北溝	長さ85.0以上、幅2.5～9.3	0.3～0.5	サヌカイト楔形石器・石鏃・削器・剥片、弥生土器高杯・有孔鉢・壷・甕、８世紀後半～９世紀初頭：土師器杯・皿・椀・壷・甕・竈・甑、須恵器杯・皿・鉢・壷・壷蓋・甕・ミニチュア壷、黒色土器Ａ類杯・椀、灰釉陶器多口壷、須恵器杯か皿の底部外面に墨書「政所」、製塩土器、円面硯、軒丸瓦（6272Ｂ、6313Ａａ、6308Ｒ）、軒平瓦（6666Ａ、6671Ⅰａ、6732Ｌ）、塼、フイゴ羽口、鉄滓	十五坪の東面築地雨落溝。重複関係からＳＡ274、ＳＫ624・625・627・628よりも新しく、ＳＫ626よりも古い。坪の北から1/3ライン付近以北で溝幅が狭くなる。

検出遺構一覧表（6）

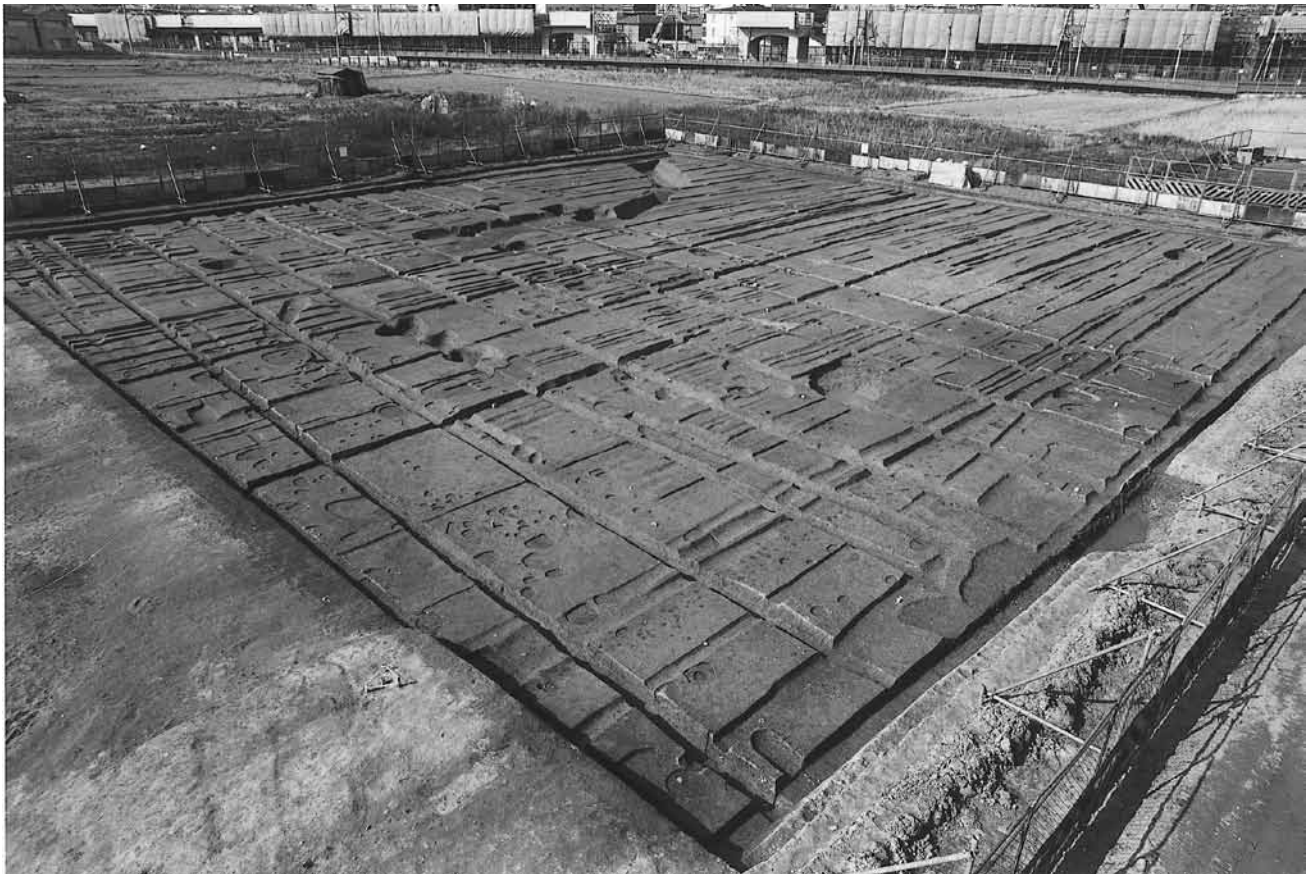
遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＫ602	不整形	南北1.7×東西1.6	0.3	８世紀：土師器・須恵器、瓦	
ＳＫ603	不整形	南北3.4以上×東西4.1以上	0.5～0.9	８世紀：土師器・須恵器、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＫ604よりも古い。
ＳＫ604	不整形	南北2.0×東西1.5～2.0	0.5	８世紀：土師器・須恵器、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＫ603よりも新しい。
ＳＫ605	不整形	南北2.5以上×東西2.3	0.4	８世紀：土師器・須恵器、円形硯ヵ円面硯、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＫ607よりも新しく、ＳＫ606、ＳＥ502よりも古い。
ＳＫ606	不整形	南北2.3×東西2.0以上	0.4	無し	重複関係からＳＫ605・607よりも新しく、ＳＥ502よりも古い。
ＳＫ607	隅丸長方形	南北11.6×東西2.0～3.0	0.4	サヌカイト楔形石器・削器・石核・剥片、８世紀中頃：土師器皿・蓋・甕・竈、須恵器甕・皿・杯・蓋、漆が底部内面に付着した須恵器壷、製塩土器、軒丸瓦（6313Ａａ）、軒平瓦（6666Ａ）、炉壁片	重複関係からＳＫ605・606、ＳＥ502よりも古い。
ＳＫ608	不整形	南北11.5以上×東西4.8以上	0.2	サヌカイト剥片、８世紀：土師器・須恵器、須恵器皿Ａの底部外面に墨書「十□」、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＫ610、ＳＥ503よりも古い。
ＳＫ609	不整形	南北2.1～4.5×東西2.8～3.8	0.2	８世紀後半：土師器・須恵器杯、軒丸瓦（6313Ａａ）、炉壁片	重複関係からＳＫ613よりも古い。
ＳＫ610	隅丸方形？	南北7.1以上×東西3.3以上	0.4	サヌカイト楔形石器・剥片、８世紀末：土師器竈、須恵器杯・壷、須恵器の底部外面に墨書「北」・須恵器杯Ａの体部外面に墨書「三井」、漆が体部内面に付着した須恵器、製塩土器、軒平瓦（6671Ⅰａ）、炉壁片	重複関係からＳＫ608・611・612よりも新しい。
ＳＫ611	溝状	南北6.5以上×東西52.4以上	0.2	８世紀後半：土師器竈、須恵器杯Ｂの底部外面に墨書「申」、漆が体部内面に付着した須恵器杯、製塩土器、軒丸瓦（6308Ｒ）、８世紀：軒平瓦（型式不明）	重複関係からＳＡ257、ＳＫ612よりも新しく、ＳＫ610・613・614・621・623、ＳＥ504よりも古い。
ＳＫ612	楕円形	南北1.5×東西3.5	0.6	無し	重複関係からＳＫ610・611よりも古い。
ＳＫ613	不整形	南北5.0～7.7×東西6.4～8.0	0.2	サヌカイト石鏃、８世紀後半：土師器蓋、須恵器杯・甕、須恵器杯Ｂの底部外面に墨書「中」、製塩土器、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＥ504よりも古い。
ＳＫ614	不整形	南北2.2以上×東西5.5以上	0.2	サヌカイト剥片、８世紀末：土師器・須恵器杯蓋、製塩土器、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＫ611よりも新しい。
ＳＫ615	不整形	南北1.5×東西4.2	0.1～0.3	８世紀：土師器・須恵器、丸瓦	
ＳＫ616	不整形	南北3.0×東西8.7	0.1～0.3	８世紀：土師器・須恵器	重複関係からＳＫ617よりも古い。
ＳＫ617	溝状	南北1.5～3.0×東西14.3	0.3～0.4	サヌカイト剥片、弥生土器器台、８世紀後半：土師器竈、軒平瓦（6671Ⅰａ）	重複関係からＳＡ257・269・270、ＳＫ616よりも新しく、ＳＫ618よりも古い。
ＳＫ618	隅丸方形	南北1.2×東西1.8	1.0	８世紀：土師器・須恵器、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＡ269、ＳＫ617よりも新しい。
ＳＫ619	溝状	南北18.2×東西2.8～4.2	0.1～0.3	サヌカイト石鏃、８世紀：土師器・須恵器、平瓦	南西・南東隅に、長さ約1.0m、幅0.5～0.7mの南北溝が掘られＳＫ611に繋がる。ＳＫ611と同時に埋まる。
ＳＫ620	溝状	南北0.7～2.0×東西11.5	0.1～0.2	８世紀：土師器・須恵器、軒丸瓦（6313Ａ）、塼	重複関係からＳＥ505よりも新しく、ＳＢ262よりも古い。

検出遺構一覧表（7）

遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＫ621	不整形	南北18.3以上×東西2.5～8.0	0.2	サヌカイト楔形石器・石鏃・削器・剥片、弥生土器器台、８世紀後半～末：土師器高杯・竈、須恵器壷、製塩土器、円盤型土製品、軒平瓦（6671Ⅰａ）、面戸瓦、塼、フイゴ羽口	重複関係からＳＢ02、ＳＤ05・06、ＳＡ257、ＳＫ611よりも新しい。
ＳＫ622	溝状	南北22.8以上×東西1.6～3.0	0.1～0.5	サヌカイト剥片、弥生土器、８世紀後半～末：土師器杯・皿・竈、須恵器壷、８世紀：軒平瓦（型式不明）、鉄滓	重複関係からＳＡ274・275、ＳＢ02・272・276、ＳＫ07・629よりも新しい。
ＳＫ623	楕円形	南北3.2×東西1.1以上	0.8	８世紀：土師器・須恵器	重複関係からＳＫ07・611よりも新しい。
ＳＫ624	溝状	南北5.5×東西1.2	0.1	８世紀：土師器甕・須恵器蓋・甕	重複関係からＳＤ112よりも古い。
ＳＫ625	溝状	南北3.2×東西0.8	0.1	８世紀：土師器甕・須恵器蓋・甕	重複関係からＳＤ112よりも古い。
ＳＫ626	不整形	南北4.5×東西3.6	0.3	８世紀：土師器杯・皿・高杯・壷・甕、須恵器杯・皿・蓋・壷・甕・軒丸瓦（6143Ａ・6308Ｒ）、凝灰岩片	重複関係からＳＤ112よりも新しい。
ＳＫ627	不整形	南北3.6×東西3.8	0.3	弥生土器、８世紀：土師器・須恵器	重複関係からＳＤ112、ＳＫ628よりも古い。
ＳＫ628	不整形	南北1.1×東西0.8	0.3	８世紀：須恵器甕	重複関係からＳＫ627よりも新しく、ＳＤ112よりも古い。
ＳＫ629	不整形	南北2.2以上×東西3.2以上	0.4	８世紀：土師器	重複関係からＳＫ07よりも新しく、ＳＫ622よりも古い。
ＳＫ630	不整形	南北1.2以上×東西1.9以上	0.4	サヌカイト剥片、８世紀：軒平瓦（型式不明）	重複関係からＳＡ274よりも古い。
ＳＫ631	楕円形	南北0.4～0.5×東西3.0	0.4	８世紀：土師器・須恵器甕	重複関係からＳＢ220よりも古い。
ＳＫ632	楕円形	南北0.4～0.6×東西2.0以上	0.4	８世紀：土師器蓋・須恵器、瓦	重複関係からＳＢ220よりも古い。
ＳＸ801	円ヵ隅丸方形	径0.3～0.8	0.2～0.4	８世紀：土師器・須恵器、瓦	ＳＢ210の身舎の西半部に収まり、断面形状が皿もしくは椀状を呈する。甕を据えた痕跡と考える。
ＳＥ501	不整円形	南北3.5×東西4.0	1.85	（掘形）８世紀後半：土師器・須恵器、（枠内）８世紀：軒丸瓦（6301Ｂ）・軒平瓦（6666Ａ、6671Ｃ）、９世紀中頃：土師器杯・皿・椀、（枠抜取）８世紀：丸瓦・平瓦、９世紀中頃～10世紀初頭：土師器・須恵器	円形縦板組の井戸。枠内法は南北0.9m、東西0.8m。枠材は幅0.05～0.15m、厚さ0.07m程度の縦板を23枚使い、各々の側面に上下２段で太枘で固定する。井戸底に炭と礫を敷く。
ＳＥ502	楕円形	南北1.5×東西1.5	1.6	８世紀：土師器	井戸枠抜き取り痕跡。重複関係からＳＫ605・606・607よりも新しい。
ＳＥ503	隅丸方形	南北1.1×東西1.1	0.7	８世紀後半～末：土師器・須恵器杯・杯蓋、丸瓦、平瓦	井戸枠抜き取り痕跡。重複関係からＳＫ608よりも新しい。
ＳＥ504	隅丸方形	南北1.2×東西1.2	0.6	８世紀末～９世紀初頭：土師器皿・椀・須恵器杯・杯蓋、丸瓦、平瓦	井戸枠抜き取り痕跡。重複関係からＳＫ611・613よりも新しい。
ＳＥ505	不整形	南北7.0×東西5.8	2.8	８世紀中頃：土師器杯・皿・蓋、８世紀：須恵器、鉄釘、木製の楔片	井戸枠抜き取り痕跡。重複関係からＳＫ09よりも新しく、ＳＫ620・ＳＢ262よりも古い。
ＳＥ506	方形	南北2.3×東西2.3	0.7	８世紀：土師器・須恵器蓋・甕、平瓦、桃種	井戸枠抜き取り痕跡。重複関係からＳＡ258よりも新しい。
ＳＥ507	隅丸方形	南北1.7×東西1.7	0.8	サヌカイト剥片、弥生土器甕、８世紀：土師器皿・須恵器壷・甕・丸瓦	井戸枠抜き取り痕跡。重複関係からＳＫ09よりも新しい。
ＳＥ508	円形	南北3.7×東西3.7	1.3	８世紀中頃～後半：土師器・須恵器杯・蓋	井戸枠抜き取り痕跡。重複関係からＳＢ263よりも古い。
ＳＥ509	円形	南北2.0×東西1.9	2.4	サヌカイト剥片、８世紀：土師器・須恵器皿・鉢・甕・丸瓦・平瓦	井戸枠抜き取り痕跡。重複関係からＳＡ271よりも新しい。

ＨＪ第553-1次調査 北半発掘区全景（南東から）

ＨＪ第553-1次調査 南半発掘区全景（北西から）



ＨＪ第565次調査 発掘区全景（南東から）

ＨＪ第575次調査　Ａ発掘区全景（北から）

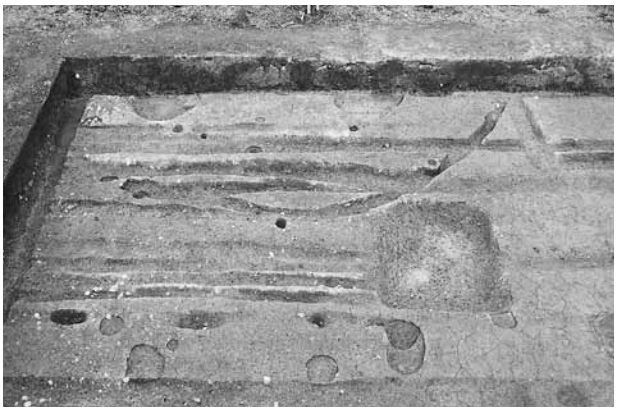
ＨＪ第575次調査　Ｂ発掘区 北半全景（南から）

ＨＪ第575次調査　Ｂ発掘区 南半全景（南西から）

ＨＪ第553-2次調査　発掘区全景（東から）

ＨＪ第575次調査　Ｂ発掘区竪穴建物ＳＢ02（北西から）

ＨＪ第575次調査　Ｂ発掘区拡張区全景（西から）



ＨＪ第575次調査　Ｂ発掘区竪穴建物ＳＢ03（東から）

ＨＪ第581次調査　発掘区西半（北から）

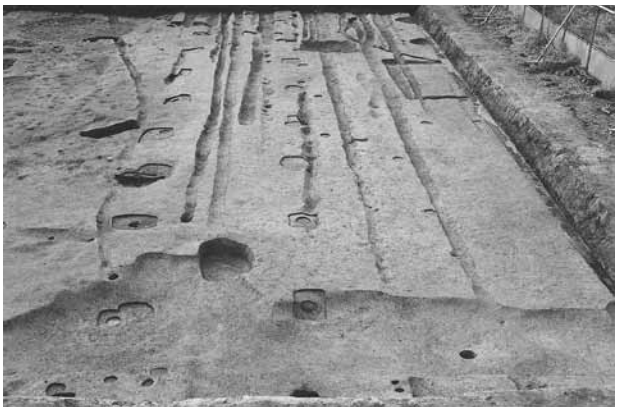
ＨＪ第575次調査　Ｂ発掘区竪穴建物ＳＢ01（北から）

ＨＪ第565次調査　溝ＳＤ04（南東から）

ＨＪ第581次調査　東四坊大路ＳＦ1013（南から）

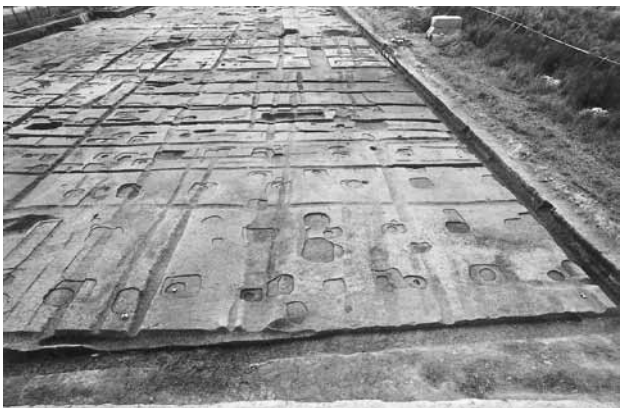
ＨＪ第575次調査　Ｂ発掘区掘立柱塀ＳＡ275他（西から）

ＨＪ第553-1次調査　土坑ＳＫ611・619（北から）



ＨＪ第575次調査　Ｂ発掘区掘立柱塀ＳＡ257・270（北から）

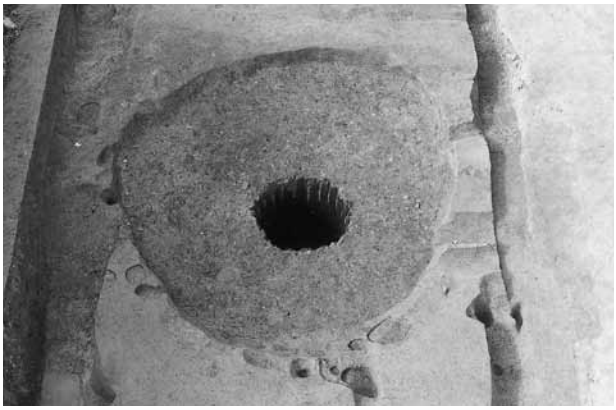
ＨＪ第553-1次調査　溝ＳＤ105（北から）



ＨＪ第575次調査　Ａ発掘区掘立柱建物ＳＢ231・232（北から）

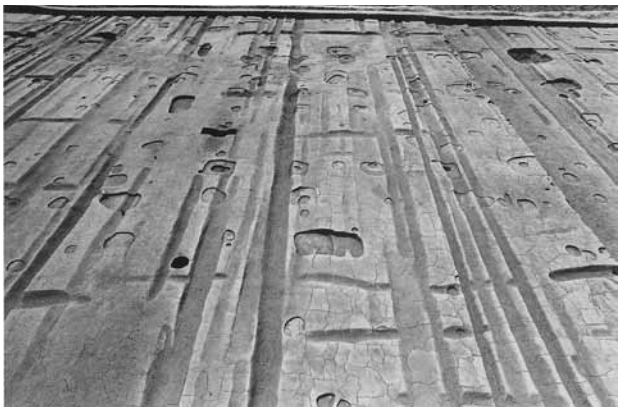
ＨＪ第553-1次調査　掘立柱建物ＳＢ247（北から）

ＨＪ第575次調査　Ｂ発掘区井戸ＳＥ505（西から）



ＨＪ第553-1次調査　井戸ＳＥ501（東から）

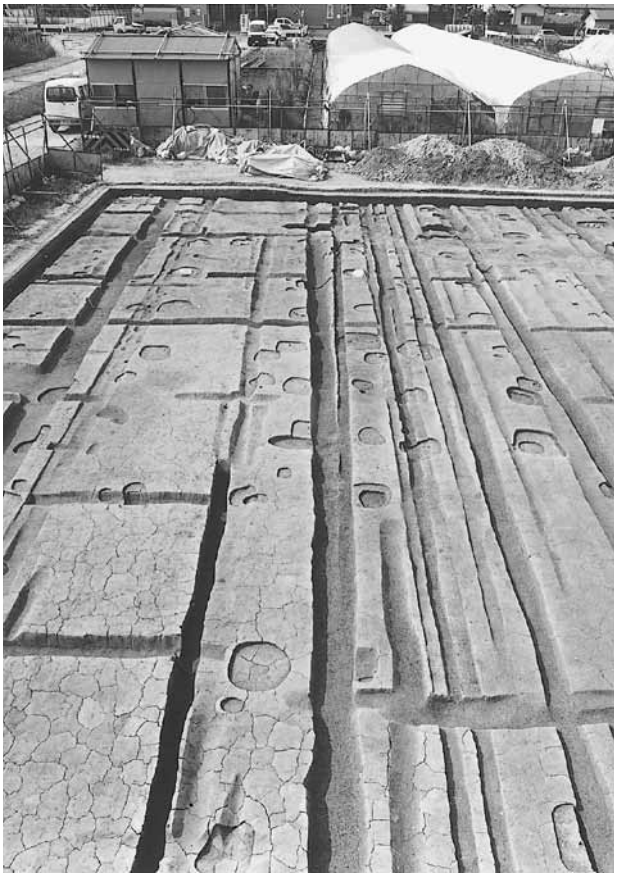
ＨＪ第553-1次調査　掘立柱建物ＳＢ209・210（東から）



ＨＪ第553-1次調査　掘立柱建物ＳＢ217・218・219（北から）

ＨＪ第553-1次調査　埋甕遺構ＳＸ801（東から）

ＨＪ第553-1次調査　掘立柱建物ＳＢ220（北から）



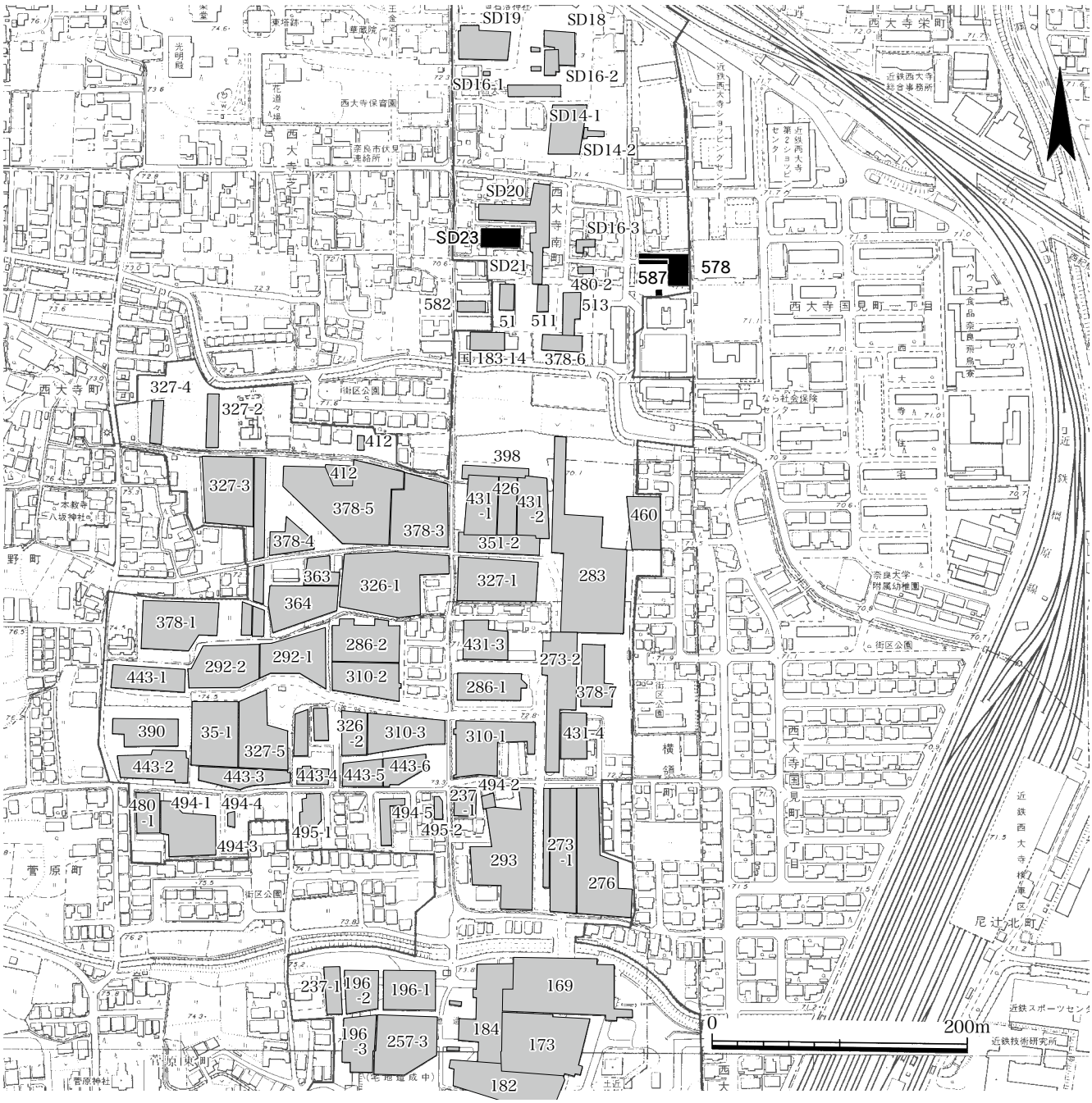
ＨＪ第553-1次調査　掘立柱建物ＳＢ212・213・214（北から）

2.近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に係る発掘調査

本調査は、奈良市が進めている近鉄西大寺駅南土地区画整理事業（総面積約300,000㎡）について実施した埋蔵文化財発掘調査である。奈良市教育委員会では昭和63年から事業地内の発掘調査を継続して実施している。平成19年度は下表の通り3箇所で発掘調査を実施した。合計発掘面積は1,175㎡であり、初年度からの総調査面積は109,274㎡になる。これらの調査は平城京の条坊復元では、西大寺旧境内および一条南大路に該当している。

平成19年度　近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内　発掘調査一覧表

調査次数	事　業　内　容	調　査　地	調 査 期 間	調査面積	調査担当者
HJ第578次	通常事業	西大寺南町2266-３、2268、2272、-３	H19.５.21～７.26	560㎡	秋山・松浦
HJ第587次	通常事業	西大寺南町2267、2268	H19.８.１～８.31	120㎡	秋山・松浦
SD第23次	通常事業	西大寺南町2406-５　他	H19.８.30～10.24	495㎡	秋山・松浦



近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内　発掘調査位置図（1/5,000）

（1）平城京跡（右京一条南大路）の調査　第 578・587 次

Ⅰ　はじめに

調査地は、条坊復原では右京一条二坊十三坪と二条二坊十六坪との間に位置し、一条南大路路面上にあたる。南に接する敷地の調査（昭和 56 年　国 137 次）では大路南側溝が確認できなかったことから、本調査において確認できる可能性があった。また、調査地は西二坊大路との交差点のすぐ東に位置し、これまでの調査から西二坊大路は 12 世紀以降流路となっていると推定されており、その変遷過程が窺えることも予想された。

第 578 次調査は 560㎡、第 587 次調査は第 578 次調査区の西半を南に拡張する形で 100㎡と、大路南側溝確認のため敷地南端に 20㎡の発掘区（南発掘区）を設けた。

Ⅱ　基本層序

調査地は擁壁によって南北２つの敷地に分かれており、堆積土層および遺構残存面の深さが異なっている。

南側は、厚さ約１mの造成土の下に黒色土（旧耕作土）が 0.2 m前後、灰色シルトが 0.05 m程度堆積し、東側で青灰色砂もしくはシルト、西側で灰色砂の地山となる。地山上面の標高は 70.1 m前後である。

北側は、0.15 mの造成土下、黒色土（旧耕作土）0.2 m前後、濁橙褐色砂質土 0.15 m前後で黄白色シルトの地山に達するが、一条南大路路面部分には暗灰色砂質土が 0.2 m、整地土と考えられる明灰褐色土と黄白色シルトが混じり合った層が 0.3 m前後堆積しており、路面部分と宅地内部分の地山面は最大 0.45 mの高低差がある。路面部分は西二坊大路との合流地点である西側に向かって下っている。地山面の標高は、発掘区北東隅では 70.8 m前後、大路路面にあたる部分では、東端で 70.3 m前後、西端で 69.9 m前後である。

Ⅲ　検出遺構

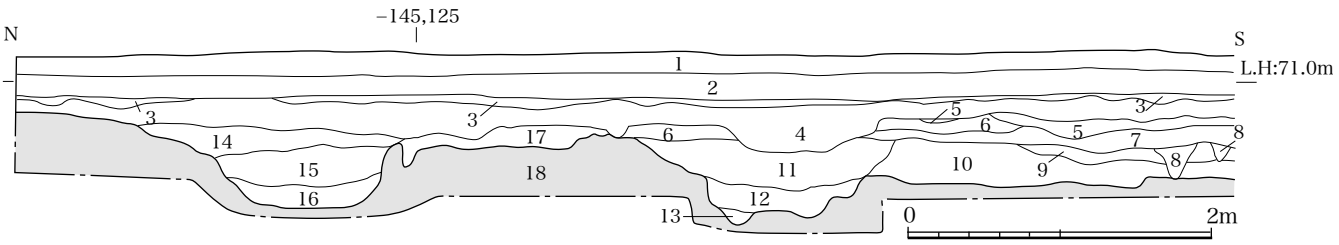
検出した遺構は、奈良時代のものと平安時代後期以降のものとの二時期に分けられる。この他、時期不詳の柱穴、土坑、素掘り溝を同一面で確認した。主な遺構については一覧表にまとめた。

奈良時代の遺構　奈良時代の遺構は、道路１条（ＳＦ 1012）、溝３条（ＳＤ 101・102・105）、井戸１基（ＳＥ 501）である。

ＳＦ 1012 は、想定上一条南大路にあたる部分である。擁壁南側は地下げと耕作による削平のため、当時の路面は残っていないと考えられるが、擁壁北側では８世紀の遺物を含むシルトブロック混じりの土層が不定形に広がっており、これは路面の整地層と考えられる。大路の北側溝にあたるのがＳＤ 101 である。西へ向かって下っており、発掘区西端付近では次第に浅く不明確となり消滅する。溝心の座標値はＹ＝－ 19,872.00 mの地点でＸ＝－ 145,127.40 mである。南側溝は南発掘区で検出したＳＤ 102 にあたる可能性が高い。発掘区内では東側が中世以降の掘り下げによって削平されている。南肩は発掘区外となり、側溝の大部分は敷地南辺を流れる現在の水路と重なるものと思われる。

ＳＤ 105 は、ＳＤ 101 と約２mの間隔で北側に並行する東西溝である。ＳＤ 101 と同規模であり、やはり西に向かって下っていくが、浅くなりつつも発掘区外西まで延びている。ＳＤ 101 が北側溝とすると、ＳＤ 105 は宅地内側の排水路であり、両溝間に遮蔽施設が想定される。溝心の座標値は、Ｙ＝－ 19,872.00 mの地点でＸ＝－ 145,123.85 mである。

ＳＥ 501 は、湧水と崩壊が激しかったため、完全な記録をとることができなかったが、深さは１m程度で、枠材が抜き取られ一度に埋められた状態であった。ＳＤ 101 と重複しており、土層観察からは新旧関係が不明瞭であったが、出土遺物からはＳＤ 101 より新しいものと



1．造成土
2．黒色土
3．灰色土
4．濁橙褐色砂質土
5．暗茶褐色固結土
6．暗灰褐色土
7．暗灰色砂質土
8．黒灰色土
9．黄白色粘質シルト
10．明灰褐色土＋黄白色シルトブロック（SF1012整地土）
11．灰褐色土（SD101）
12．淡灰褐色粘質土（SD101）
13．淡灰色粘土（SD101）
14．黒灰褐色土（SD105）
15．暗灰褐色土（SD105）
16．暗灰褐色土＋黄色土ブロック（SD105）
17．濁黄灰色シルト
18．黄白色シルト

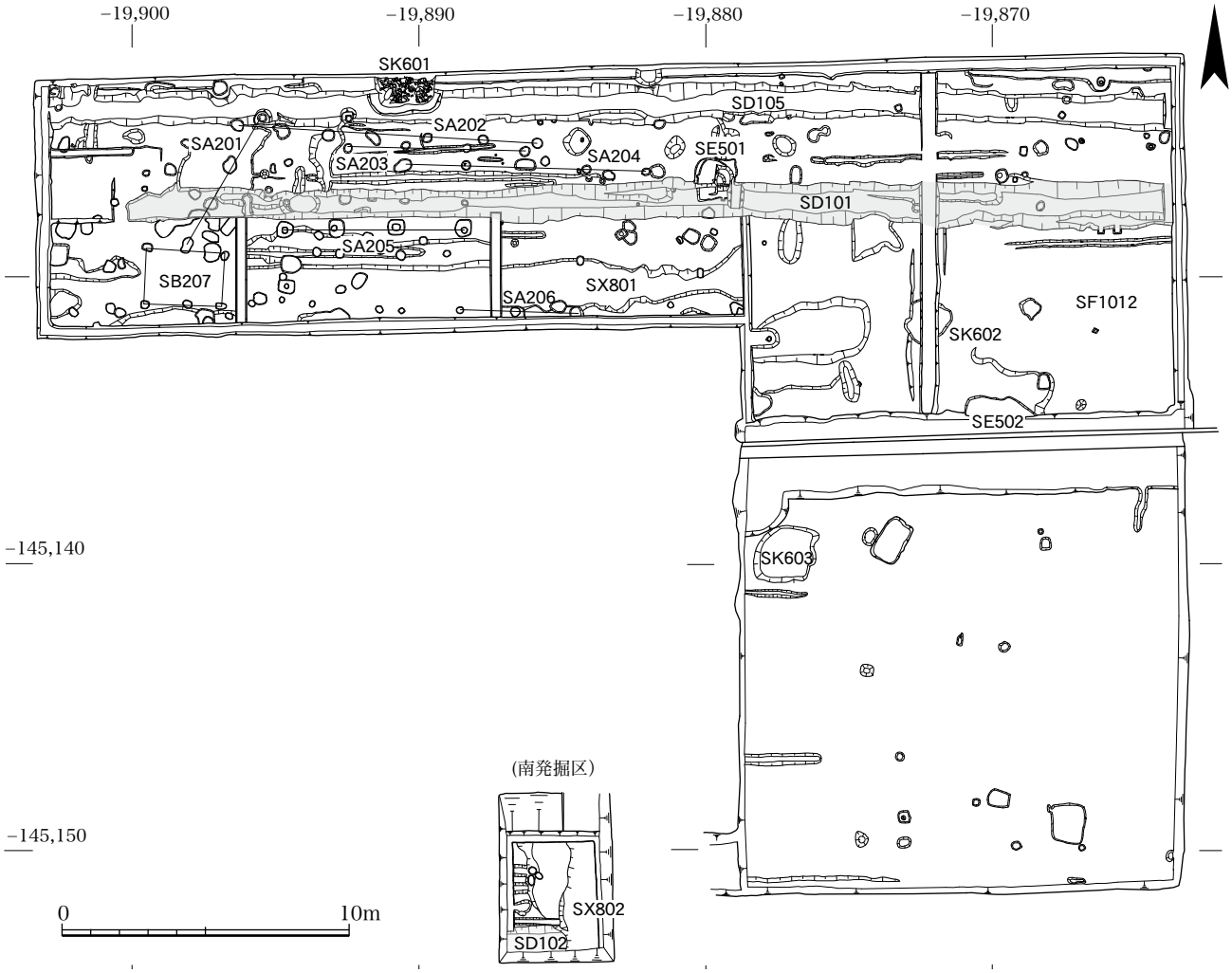
ＨＪ第578次調査　発掘区東壁北半土層図（1/50）

ＨＪ第578・587次調査　検出遺構一覧

遺構番号	方向	規模（間）	東西（m）	南北（m）	東西柱間寸法（m）	南北柱間寸法（m）	備考
ＳＡ201	北東-南西	3		5.4		2-1.6-1.8	柱穴深さ0.1～0.5m
ＳＡ202	東西	6	10.5		1.6-1.6-1.5-2.0-1.9-1.9		柱穴深さ0.2～0.4m
ＳＡ203	東西	3	6.2		2.1-2.1-2.0		柱穴深さ0.3m前後
ＳＡ204	東西	4	8.4		2.2-2.0-2.2-2.0		柱穴深さ0.15～0.2m
ＳＡ205	東西	3	6.3		1.8-2.25-2.25		柱穴深さ0.2～0.4m
ＳＡ206	東西	2	4.2		2.1-2.1		柱穴深さ0.1～0.15m
ＳＢ207	東西	2×1	2.7	1.9	1.4-1.3	1.9	柱穴深さ0.1～0.15m

遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＤ101	東西溝	幅約1.8×長さ35以上	0.45前後	8世紀後半：須恵器・土師器・唐三彩・製塩土器・土馬・ミニチュア土器・人面墨書土器・軒平瓦・磚	溝心Ｙ=−19,872.0、Ｘ=−145,127.4
ＳＤ102	東西溝	幅0.9以上×長さ2.0以上	0.2以上	8世紀後半：須恵器・土師器・丸瓦・平瓦	最深部は敷地外
ＳＤ105	東西溝	幅約1.8×長さ40以上	0.45前後	8世紀末：須恵器・土師器・製塩土器・土錘・土馬軒平瓦・緑釉平瓦・磚	溝心Ｙ=−19,872.0、Ｘ=−145,123.85
ＳＫ601	隅丸方形	一辺約2.0	約0.75	11世紀末～12世初：土師器・瓦器	焼土塊を多量に含む
ＳＫ602	不正円形	長径1.6、短径1.2	約0.5	12世紀中頃：土師器・瓦器	
ＳＫ603	隅丸方形	一辺約2.0	約0.2	８～12世紀:須恵器・土師器・瓦器・白磁	
ＳＸ801	東西溝状	幅1.5前後×長さ約18	0.15前後	8～12世紀：須恵器・土師器・緑釉陶器・黒色土器・瓦器・製塩土器・線刻石・磚	端部不明瞭
ＳＸ802	南北溝状？	幅1.5以上×長さ3.8以上	0.2以上	12世紀：瓦器、15世紀：瓦質土器	西肩を検出

遺構番号	掘形等			井戸枠		主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	構造	内法		
ＳＥ501	隅丸方形	一辺約1.4	約1.0			8世紀後半：須恵器・土師器・円面硯・製塩土器	湧水により崩壊
ＳＥ502	円形	直径1.8	2.0以上			8～12世紀:須恵器・土師器・瓦器・磚仏	深さ2.0m以上

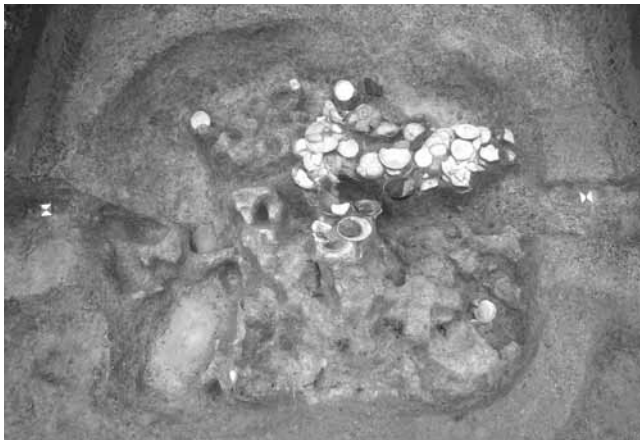


ＨＪ第578・587次調査　遺構平面図（1/250）

ＨＪ第578次調査　発掘区全景（北から）

ＨＪ第587次調査　南発掘区（北から）

溝ＳＤ101・105（東から）



土坑ＳＫ601（南から）

考えられる。

平安時代後期以降の遺構　平安時代後期以降の遺構は、掘立柱塀４条（ＳＡ 201 ～ 206）、掘立柱建物（ＳＢ 207）井戸１基（ＳＥ 502）、土坑３基（ＳＫ 601 ～ 603）のほか、不明確な掘り込み（ＳＸ 801・802）がある。

ＳＡ 201 ～ 206 については塀としたが、発掘区外に広がる建物の一部である可能性をもつものもある。

ＳＥ 502 は擁壁工事の際に南半が壊されており、作業困難なため深さ約 1.0 ｍで掘り下げを中止したが、さらに１ｍ以上深いことを確認している。埋土は粘土ブロック混じりの土で、一度に埋められたものと考えられる。

ＳＫ 601 の内部には多量の瓦器椀、土師器皿とともに窯壁状の焼土塊が混在していた。この土坑自体が熱を受けた痕跡は無く、一括して土坑内に遺棄されたものと考えられる。

Ⅳ　出土遺物

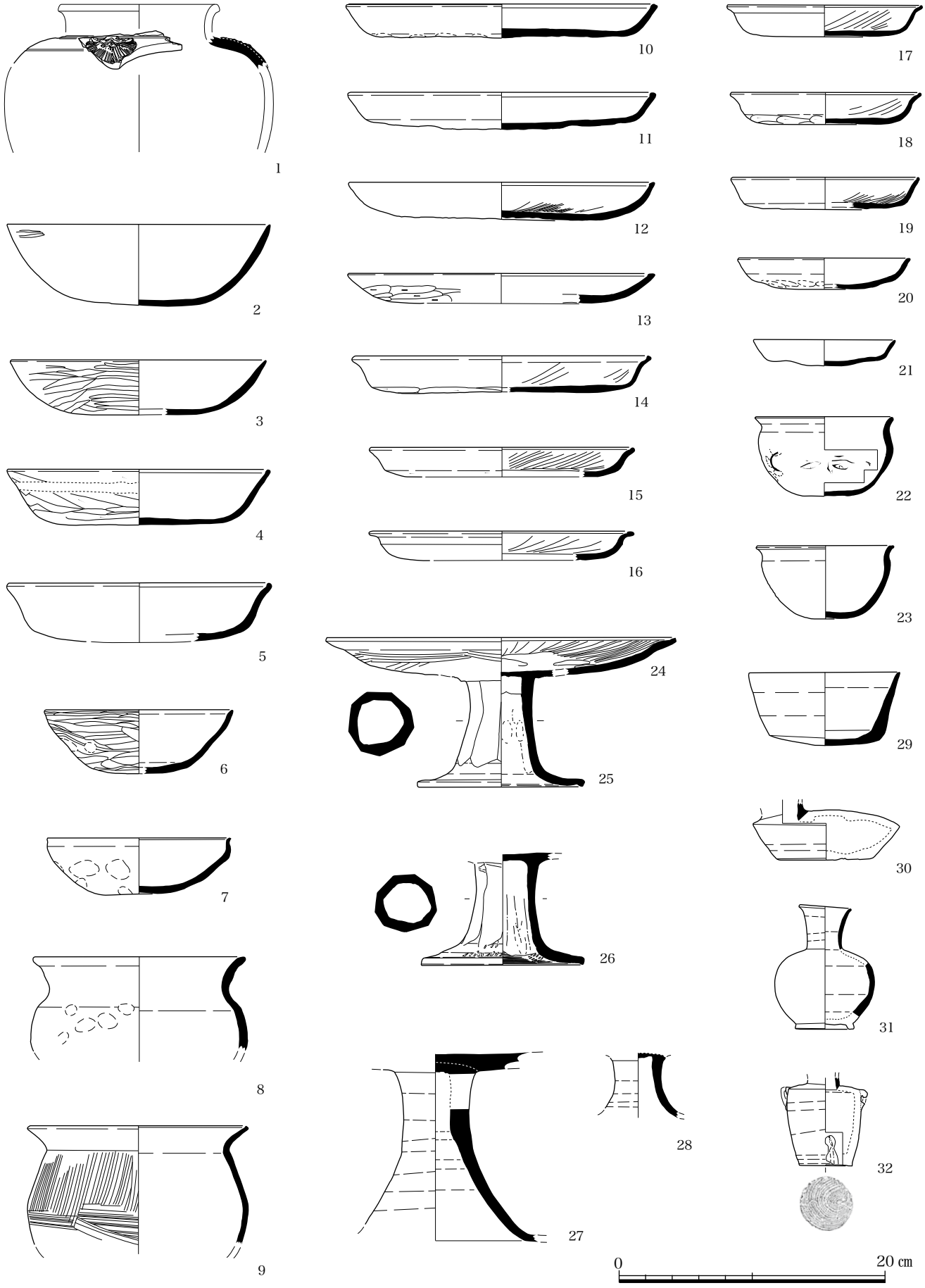
整理箱 143 箱分の遺物が出土した。大半は大路北側溝ＳＤ 101 からの出土であり、８世紀後半の須恵器・土師器、瓦類がある。ＳＥ 502 およびＳＫ 601 ～ 603 からは主に 12 世紀初～中頃の瓦器が出土している。

以下、ＳＤ 101 出土土器の一部および特別な遺物についてのみ報告する。

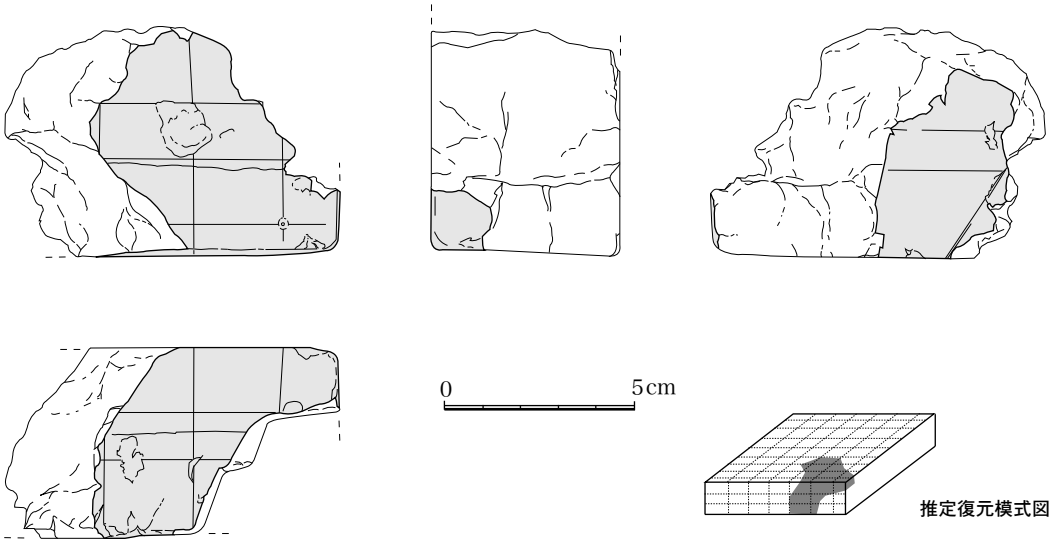
１は唐三彩である。縦約 5.0㎝、横約 7.5㎝、厚さ約 0.7㎝の破片で、三足炉の頸部から肩部にかけての一部と推定される。表面に縦横約 4.0㎝、厚さ 0.1㎝程度の宝相華を模した貼花文が型押しによって施されている。胎土や製作手法から、唐の黄冶窯で８世紀前半に製作されたものとみられる。（巻首図版１）

土師器は杯Ａ（２～５）・Ｂ・Ｃ、皿Ａ（10 ～ 19）・Ｃ（20・21）、椀Ａ（6）・Ｃ（7）、甕（8・9）、壺Ｂ（22・23）、高杯（24 ～ 26）、竈がある。杯Ａは口径 20㎝弱の大きさのものがまとまっているが、２のような深い形態もある。外面調整はヘラ削り、ナデが主で、ヘラ磨きが認められるものもある。皿Ａは口径約 23㎝・約 20㎝・約 14㎝の３種類に大きくまとまる。10・11 には底部外面に葉脈痕が残る。中・小型のものは主に外面調整がヘラ削りとナデにより、内面に斜放射状暗文を施す。高杯は脚部が８㎝程度の低いものが主で、９個体以上認められる。壺Ｂにはうっすらと人面墨書の認められるものがある。

須恵器は杯Ａ（29）・Ｂ、杯蓋、皿Ａ・Ｃ、甕、高杯（27・28）、平瓶（30）、壺Ｍ（31）、鉢、ミニチュア壺（32）がある。28 の高杯は小型で焼が弱く瓦質の感を



ＨＪ第578次調査　溝ＳＤ101出土土器（1/4）



ＨＪ第587次調査　ＳＸ801出土線刻石（1/2）　網掛けが残存面

呈す。29の杯Ａはやや丸底で、器壁が厚く彎曲が一様でない特殊な形態のものである。32はミニチュアの壺Ｂで、肩部に対称に２つ、底部近くに１つの耳がつき、底部外面に糸切り痕が残る。焼成等の特徴から猿投産とみられる。

この他、製塩土器、土馬、6664型式Ｋ種の軒平瓦などがＳＤ101から出土している。

ＳＤ101以外の遺構から出土した特殊な遺物として、磚仏と線刻石について記す。

磚仏１（巻首図版３）は縦約5.5㎝、横約5.0㎝、縁部厚さ約1.6㎝の破片で、十二尊連座磚仏の左下隅にあたる一体分である。蓮華座、天蓋および右半顔から右肩にかけて破損している。ＳＥ502から出土。

磚仏２（巻首図版４）は縦約6.0㎝、横約3.7㎝、厚さ約1.8㎝の破片で、十二尊連座磚仏の右上隅にあたる一体分である。蓮華座、光背、天蓋などの細部も明瞭である。ＳＡ201柱穴出土。これらと同じ意匠の磚仏が興福寺・西大寺・西隆寺旧境内および平城京右京二条三坊十一坪でも出土している。

線刻石（巻首図版２）は縦6.0㎝以上、横8.7㎝以上、幅5.0㎝の直方体の角部にあたる破片と思われ、三面にマス目状の線刻が認められる。表面（図左）は、縦に2.4㎝間隔で３本、横に下から1.7－1.5㎝間隔で３本、下面には表面から続く縦線と、横に1.3㎝間隔の２本の線によって方眼を描いている。裏面は1.3㎝間隔で横に２本の平行線が浅く刻まれるのみである。それぞれの線は完全に直交ではなく、やや斜めであったり交点で屈曲しており、線間隔も一定ではない。線幅は0.2㎜程度で針先で引いたような極細線である。線刻面は磨かれ艶があり、全体に暗褐色を呈す。石材は葉蝋石である。残存重量310ｇ。この線刻石はもともと磚状を呈していたものと推測されるが、その用途については現在のところ不明である。ＳＸ801から出土。

Ⅴ　調査所見

本調査は当初の予測どおり、大半が一条南大路の路面にあたっているものと判断できる。ＳＤ101は北側溝と考えられ、ＳＤ102が南側溝である可能性が高い。それらが大路の両側溝とした場合、検出路面幅は約24.5ｍあり、側溝心心間は不明であるが、一条南大路は幅75大尺（約26.6ｍ）に想定できる。仮に側溝心心間を75大尺とすると一条南大路心の推定復元座標値はＹ＝－19,872.00ｍ、Ｘ＝－145,140.70ｍとなる。

なお、大路の路面には地山のシルトがブロック状に混じり遺物を含む層が不定型に広がっており、これが路面上の凹凸を整地した痕跡とすれば、遺構検出面がほぼ当時の大路上面の高さを維持している可能性が高い。

ＳＤ105は一条二坊十三坪宅地南辺に位置する溝で、築地の雨落ち溝として機能した可能性がある。ＳＤ101との間に築地塀などの閉塞施設があったかどうかは確認し得なかったが、なんらかの遮蔽施設があった可能性が高いと考えられる。大路北側溝と考えられるＳＤ101は発掘区西端付近で消滅していくが、これは後世に流路と化す西二坊大路の氾濫等による削平を受けたためと考えられる。しかし、宅地内の溝ＳＤ105は西端付近でも残存しており、ＳＤ101が廃棄された後も存続した可能性が高く、最終的には平城京の廃絶とともに埋められたものと考えられる。また、大路北半については後の遺構配置からみて、遅くとも12世紀以降は一条大路に規制されない土地利用がなされたと考えられる。

（松浦五輪美）

(2) 西大寺旧境内の調査　第23次

Ⅰ　はじめに

調査地は西大寺旧境内の南東隅にあたるが、当時の土地利用の実態は不明な場所である。本調査地の北および東隣接地で行なった調査では、奈良時代の遺構はあまり検出されておらず、本来、奈良時代には建物の少ない地域であったと推測されていた。今回の調査ではこの地域の様相をさらに明らかとすることを目的とした。

Ⅱ　基本層序

遺構検出面の高さは北東から南西へ緩やかに下っており、堆積土層は北と南でやや異なっている。

北では厚さ0.05～0.2mの造成土下、黒灰色土が0.1～0.2m、灰色土が0.1m前後、赤褐色土が0.1m前後で灰色砂もしくは白色粘土の地山となり、この面が遺構検出面である。南では、赤褐色土の下にさらに暗黄灰色砂質土もしくは黄灰色土が0.1m前後堆積する。また南西隅付近では地山が下がっており、暗黄褐色砂質土が0.1m前後、整地土と考えられる淡黄褐色土が0.1～0.2m堆積し地山に至る。遺構検出は地山面と淡黄褐色土上面で行なった。地山面の標高は北で70.7～70.8m、南で70.5～70.7m。淡黄褐色土上面が70.6m前後である。

Ⅲ　検出遺構

検出した遺構は掘立柱塀11条（ＳＡ50～60)、掘立柱建物２棟（ＳＢ61・62)、井戸３基（ＳＥ63～65)、溝４条（ＳＤ66～69)、土坑１基（ＳＫ70)、土坑墓１基（ＳＸ71)、銭埋納遺構１基（ＳＸ72）であり、この他多数の小柱穴を確認した。検出遺構については表にまとめた。

掘立柱塀・建物は、出土遺物からみてＳＡ50～54・ＳＢ61・62が奈良時代、ＳＡ55～60が平安時代末～鎌倉時代初頭のものである可能性が高い。

井戸は全て８世紀後半の土器が出土する。ＳＥ63は底部にわずかに縦板が廻っていたが、ＳＥ64は枠材の残骸が埋土中に含まれており、枠を抜き取った後、不要な材も一緒に埋め戻されたようである。ＳＥ64掘形底面の北東部に板杭が１本刺さっており、これが井戸枠北東角の基準となっていた可能性がある。

溝は発掘区西端に集中しており、埋土からは12世紀後半の土器が出土している。耕作用の水路と考えられ、中世以降この辺りは耕作地となっていたようである。

土坑墓ＳＸ71（巻首図版５）は、内部には龍泉窯系輸入青磁椀２点と同安窯系輸入青磁小皿３点が入れ子状に重ねられており、その北西に大小２本の鉄刀が納められていた。骨や棺の痕跡は認められなかった。

銭埋納遺構ＳＸ72は平面形が丸みをもつ歪んだ三角形状の小土坑である。銅銭は底部に張り付いたり、めり込んだりした状態で散っており、16枚分を確認した。銹化が激しく粉状になっていたが、「同」の字が確認できるものもあり、和同開珎が含まれていると考えられる。容器の痕跡は認められず、遺構底面は凹凸が激しく、全体が地山の白色粘土層に押し込まれた様態を呈する。

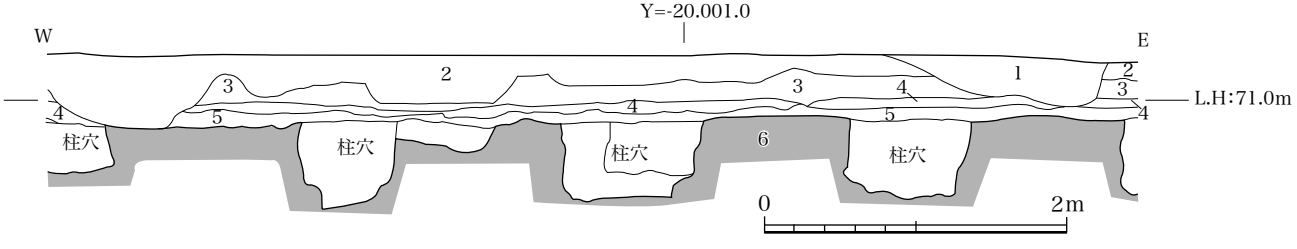
Ⅳ　出土遺物

整理箱43箱分の遺物が出土しており、８世紀の須恵器・土師器・瓦、12世紀の土師器・瓦器・青磁（巻首図版６）などがある。以下、土坑墓ＳＸ71出土の遺物についてのみ述べる。

青磁小皿（1・2）12世紀後半の同安窯系青磁小皿が３点ある。口径10.5～10.8㎝、器高2.1～2.3㎝で、いずれも見込みに箆による文様と櫛点描文を施す。

青磁椀（３）小皿と同時期の龍泉窯系青磁椀が２点ある。口径16.4㎝、器高6.9㎝で見込みに花状文をもつものと、口径16.8㎝、器高6.8㎝で見込みに茸状文をもつものがあり、ともに内面は五分割して飛雲文を配す。

鉄刀　長さ約45㎝、身の幅約４㎝のものと長さ約30㎝、身の幅約３㎝の大小２本が並んで出土した。銹化が激しく遺存状態は良くないが、表面に漆膜が残っており、漆塗りの鞘に入っていたと考えられる。Ｘ線撮影によっ



1．撹乱坑　2．造成土　3．黒灰色土（旧耕作土）　4．灰色土（旧耕作土）　5．赤褐色土　6．白色粘土

ＳＤ第23次調査　発掘区北壁東端部分土層図（1/50）

て長いほうの刀の茎に目釘穴を確認した。

Ⅴ　調査所見

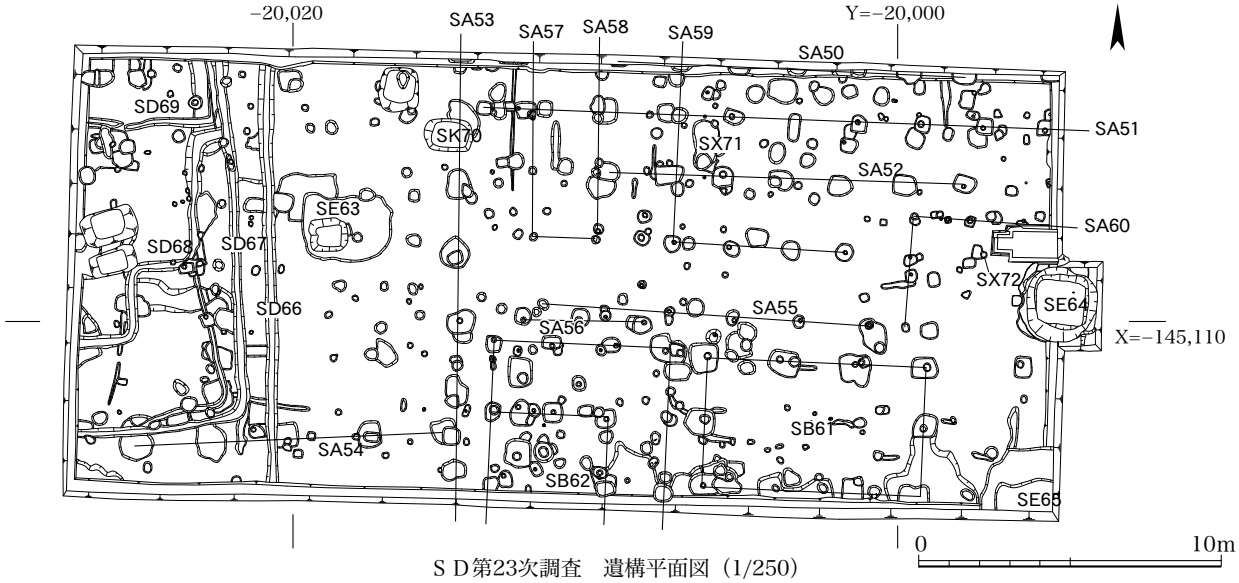
本調査地は西大寺旧境内の寺域に含まれるが、今回の調査では明確に西大寺と関連付けられる遺構は確認できなかった。しかし、発掘区北辺付近では３時期以上にわたって東西塀による区画が行われ、中央部は南北塀によって区画されていたという敷地利用の状況を知ることができた。北に接する市ＳＤ第20次調査地では奈良時代の建物が明確に検出されなかったが、今回の調査では塀によって囲まれた南東部に掘立柱建物が建てられており、居住空間とその他の場所（耕作地・作業場など）が明確に区分されていた様相を窺うことができる。ちなみ

ＳＤ第23次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	方向	規模（間）	東西（m）	南北（m）	東西柱間寸法（m）	南北柱間寸法（m）	備考
ＳＡ50	東西	6	11.4		2.1-1.9-1.9-1.8-1.9-1.8		柱穴深さ0.4～0.5m
ＳＡ51	東西	９以上	18.6以上		2.0-2.0-2.0-2.2-2.1-2.0-2.1-2.1-2.1		柱穴深さ0.2m前後
ＳＡ52	東西	6	11.7		1.9-1.9-1.9-1.9-2.1-2.1		柱穴深さ0.4m前後
ＳＡ53	南北	６以上		13.8以上		2.1-2.1-2.3-2.3-2.4-2.6	柱穴深さ0.3～0.7m
ＳＡ54	東西	4	10.2		2.4-2.4-2.7-2.7		柱穴深さ0.4～0.8m
ＳＡ55	東西	5	11.0		2.3-2.1-2.1-2.2-2.3		柱穴深さ0.1m前後
ＳＡ56	東西	2	3.9		1.8-1.8		柱穴深さ0.1m前後
ＳＡ57	Ｌ字	３以上	2.1	4.0以上	2.1	1.9-2.1	柱穴深さ0.1～0.15m
ＳＡ58	南北	２以上		3.7		1.8-1.9	柱穴深さ0.1m前後
ＳＡ59	Ｌ字	５以上	5.6	4.2以上	1.8-20-1.8	2.4-1.8	柱穴深さ0.15～0.2m
ＳＡ60	Ｌ字	４以上	3.6以上	3.6	1.8-1.8	1.8-1.8	柱穴深さ0.2～0.3m
ＳＢ61	東西	３×２	7.2	4.2	2.4-2.4-2.4	2.1-2.1	柱穴深さ0.2～0.3m
ＳＢ62	南北	２×２以上	3.8	2.4以上	1.9-1.9	2.4	北・東面廂付。廂の出2.1m

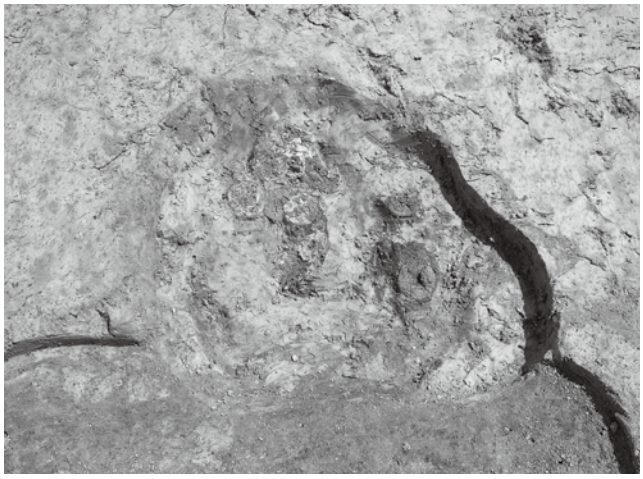
遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＤ66	南北溝	長さ14.0以上×幅0.4前後	約0.25	12世紀後半：土師器・瓦器	
ＳＤ67	Ｌ字	長さ17.0以上×幅0.3前後	約0.25	12世紀：土師器・瓦器・緑釉陶器・灰釉陶器	
ＳＤ68	鉤形	長さ11.0以上×幅0.6前後	約0.35		
ＳＤ69	Ｌ字	長さ6.0以上×幅0.3前後	約0.1		
ＳＫ70	隅丸長方形	東西約1.6×南北約1.0	約0.08	８世紀:土師器	
ＳＸ71	隅丸長方形	東西約0.8×南北約1.6	約0.15	12世紀後半：青磁・鉄刀	土坑墓
ＳＸ72	隅丸三角状	東西約0.24×南北約0.22	約0.04	和同開珎	

遺構番号	掘形等			井戸枠		主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	構造	内法（m）		
ＳＥ63	隅丸方形	東西2.8×南北1.8	1.25	方形縦板組横桟留	0.9×0.8	8世紀後半：須恵器・土師器・製塩土器	横桟最下段以下のみ残存
ＳＥ64	円形	直径2.45	1.7	方形縦板組横桟留？		8世紀:須恵器・土師器・製塩土器・墨書土器・転用硯・軒丸瓦・軒平瓦	下底部に板杭残存
ＳＥ65	円形？	直径2.0以上	0.8以上			8世紀後半：須恵器・土師器	北東1/4を確認



ＳＤ第23次調査　遺構平面図（1/250）

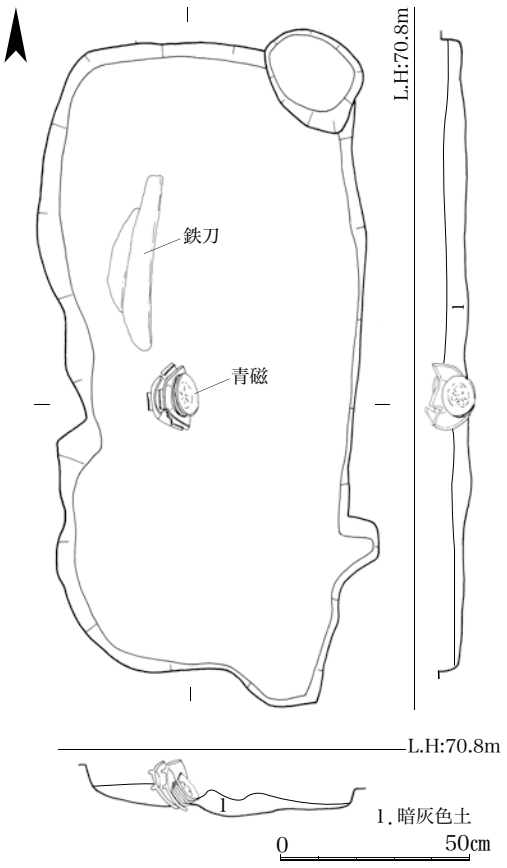
発掘区全景（南東から）



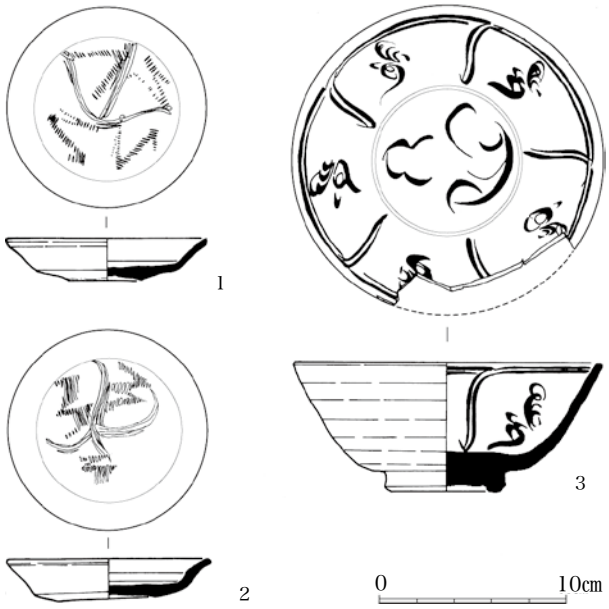
銭埋納遺構ＳＸ72（西から）

に条坊計画線に照らせば、おおよそ一条南大路の道路心から北へ1/4坪のラインが発掘区の中程、西二坊大路心から西へ3/4坪のラインが発掘区の西よりにあたり、両者とも概ねＳＥ63上を通る。この縦横４分割のラインは本発掘区内での遺構配置と合致する様相が認められ、寺域が通常の宅地とは異なると考えられるものの、この地域でも坪単位を基準とした区画割りが行われていた可能性が考えられる。

中世には改めて塀による区画が行われているようであるが、基本的に奈良時代の利用状態を踏襲したものとみ



ＳＤ第23次調査　土坑墓ＳＸ71（1/50）



ＳＤ第23次調査　土坑墓ＳＸ71出土青磁（1/4）

られる。ただし、西3/4坪ライン以西は完全に耕作地へと変貌しており、屋敷地と耕作地とが分離されていったことが考えられる。そのなかで、土坑墓ＳＸ71はこの付近が屋敷地の一画であったことを示唆する重要な遺構である。この墓は､通常単独で屋敷地内に葬られる｢屋敷墓」と称される埋葬形態にあてはまるものと考えられる。副葬品から見て、ある程度地位のある、おそらくはここに耕作地を持ち屋敷を構えていた人物もしくは縁者の墓と考えられる。これに伴う建物等の遺構は確認できなかったが、塀とした柱穴列のいずれかは、この墓に伴う屋敷地の区画塀の可能性がある。

今回の調査は、西大寺旧境内にあってもその用途が判明している場所ではないため、検出遺構の用途も不明な部分が多いが、この地域が奈良時代から少なくとも鎌倉時代初め頃までは居住地として利用されていたことが明らかとなった。　（松浦五輪美）

3.平城京跡（右京二条二坊八・九坪）の調査　第576次

事 業 名	マンション・事務所建設	調 査 期 間	平成19年５月７日～６月８日
届出者名	ハウス興産株式会社	調 査 面 積	582㎡
調 査 地	西大寺国見町一丁目2137-53　他	調査担当者	中島和彦

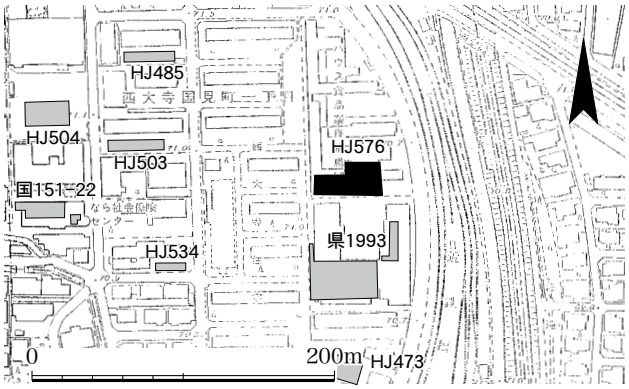
Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では右京二条二坊八坪の西半部と西二坊坊間路、九坪の東端の一部にあたる。調査地の南側の発掘調査（奈良県1993年）では、奈良時代の西二坊坊間路、二条条間北小路、建物、井戸、平安時代末の建物、井戸、溝等を検出している。今回の発掘調査は、西二坊坊間路と八坪内の様相の確認を目的として行った。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、上から造成土（1）、耕作土（2）、にぶい黄褐色砂質土（3）、にぶい褐色砂質土（4）、灰黄褐色砂質土（5）、褐色砂質土（10･奈良時代整地土）、褐灰色祖砂（11）､褐灰色粘質土（12）､褐灰色祖砂（13）、黄褐色粘質土（14）、暗緑灰色粘質土（15）とつづき、地山の明青灰白色粘土となる。

奈良時代の遺構面は10または11層上面で、遺構検出は11層上面で行った。遺構面は現地表下1.5～2.2mで、標高は68.9～69.6m、発掘区北西部が最も高く、南東隅部が最も低い。11層以下の堆積は砂層と粘土の互層で、15層内も数層の薄い粘土層に細分されることから、湿地状の地形が埋まったものと推定される。部分的に地山上面まで掘り下げて、遺構検出を行ったが遺構はなく、その他井戸、基礎の抜き取り跡等の断面観察からも下層遺構は確認出来なかった。土器の小片とサヌカイトの剥片が数点出土し、縄文時代以降の堆積と考えられる。地山上面の標高は､発掘区中央部で68.1mである。



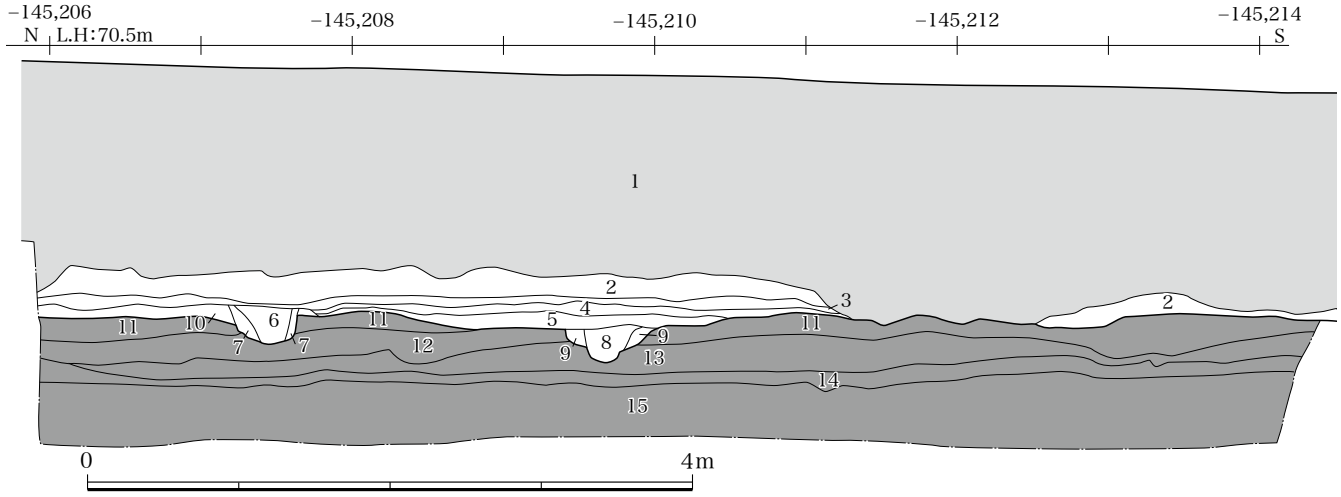
ＨＪ第576次調査　発掘区位置図(1/5,000)

また発掘区内の各所では、旧建物の基礎抜き取り工事による掘削が遺構面まで及び、耕作土が残る部分はわずかで、多くが解体後の造成土直下で遺構面となる。

Ⅲ　検出遺構

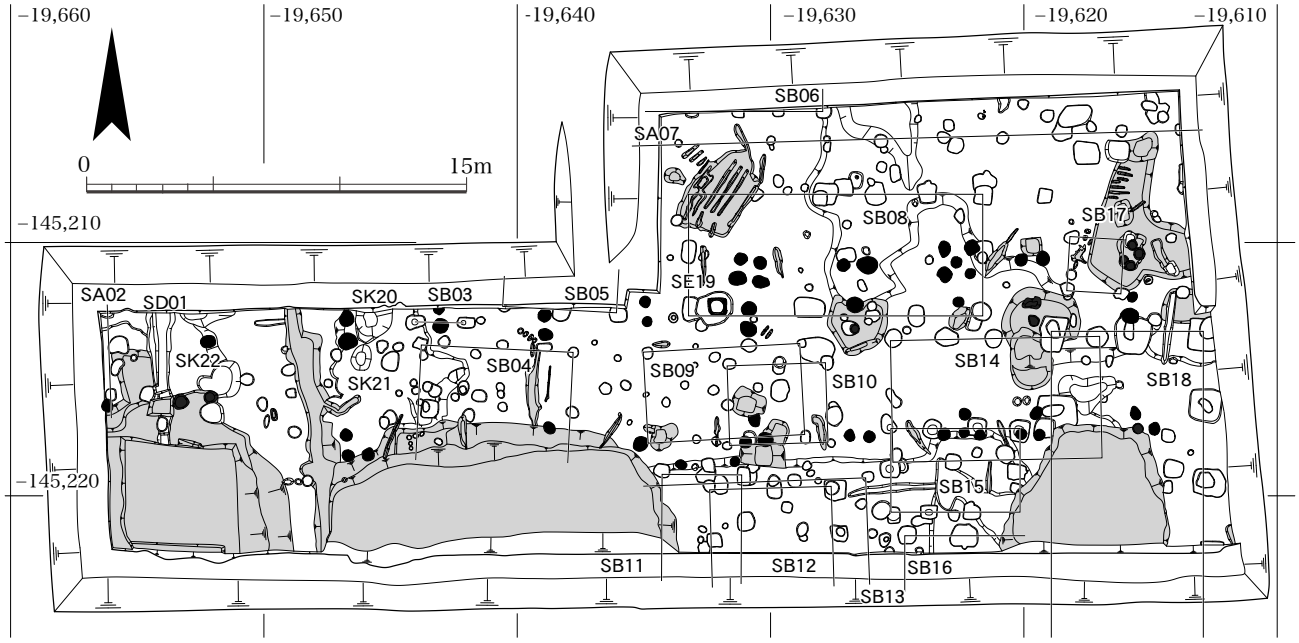
検出遺構には、掘立柱建物15棟、掘立柱列２条、井戸１基、土坑、溝がある。各遺構の詳細は一覧表に記す。

南北溝ＳＤ01は、西二坊坊間路西側溝で、溝の主軸は北でやや西に振れる。溝底は南側が低い。８世紀中頃～



1　解体時造成土
2　耕作土(灰黄褐色砂質土)
3　にぶい黄褐色砂質土
4　にぶい褐色砂質土
5　灰黄褐色砂質土
6　褐灰色砂質土(SA07柱穴)
7　にぶい黄褐色砂質土(SA07柱穴)
8　褐灰色粗砂(黄褐色粘土含む)
9　暗褐色砂質土
10　褐色砂質土(奈良時代整地土)
11　褐灰色粗砂
12　褐灰色粘質土
13　褐灰色粗砂
14　黄褐色粘質土
15　暗緑灰色粘質土

HJ第576次調査　発掘区東壁土層図（1/50）



ＨＪ第576次調査　発掘区遺構平面図（1/300、図中のトーンは撹乱坑、黒塗りは基礎杭）

ＨＪ第576次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁間全長	桁行柱間寸法	梁間柱間寸法	廂の出	備考
		桁行 × 梁間	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	
ＳＢ03	東西	1	1.95		1.95			門か、軒平瓦 6727A 出土
ＳＢ04	東西？	2 × 1 以上	6.0	2.4 以上	3.0 等間	2.4		
ＳＢ05	南北？	1 以上 × 2 以上	不明	5.5 以上	不明	2.25 等間		
ＳＢ07	東西	3 以上 × 1 以上	5.25 以上	不明	東から 1.8-1.65-1.8	不明		
ＳＢ08	東西	5 × 2	11.7	4.8	西から 2.7-2.7-2.1-2.1-2.1	2.4 等間		ＳＥ19 より古
ＳＢ09	東西	3 × 2	6.15	3.6	西から 1.95-2.1-2.1	1.8 等間		
ＳＢ10	東西	2 × 2	3.9	3.3	1.95 等間	1.65 等間		
ＳＢ11	南北	2 以上 × 2	2.4 以上	3.3	2.4	1.65 等間		
ＳＢ12	南北	2 以上 × 2	1.8 以上	4.8	1.8	2.4 等間		
ＳＢ13	東西	3 以上 × 1 以上	6.0 以上	2.25 以上	東から 3.0-3.0	2.25		
ＳＢ14	東西	4 × 2	8.4	4.8	2.1 等間	2.4 等間		ＳＢ15・18 より古
ＳＢ15	東西	3 × 2	5.1	3.3	西から 1.65-1.8-1.65	1.65 等間		
ＳＢ16	南北？	2 以上 ×1 以上	不明	2.4 以上	不明	2.4		
ＳＢ17	不明	1 × 1	2.1	2.1	2.1	2.1		
ＳＢ18	南北	3 以上 × 2	9.0 以上	6.0	3.0 等間	3.0 等間		
ＳＡ02	南北	1 以上	3.3 以上		3.3			九坪内の遺構
ＳＡ06	南北	8 以上	19.8 以上		西から 3.6-2.25-2.25-2.25-2.25-2.25-2.7-2.25-2.25			

遺構番号	掘形等			枠			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法 (m)	濾過装置等		
ＳＤ01	南北溝	幅 0.5〜0.7× 長さ 5.5 以上	0.5				土師器杯・高杯・壷・甕、須恵器杯・蓋・盤・壷・平瓶・甕、平瓦	西二坊坊間路西側溝発掘区外南北につづく８世紀中〜後半
ＳＥ19	不整方形	東西 2.9× 南北 2.6	1.45	方形隅柱横桟留	一辺 0.6	曲物（径 0.55m・高さ 0.37m）	土師器杯・皿・高杯・壷・甕・竈、須恵器杯・蓋・皿・鉢・盤・壷・平瓶・甕、墨書土器、製塩土器、丸瓦、平瓦、斎串、木簡（「□万呂」カ）、横櫛、曲物、不明木製品、炉壁	８世紀後半
ＳＫ20	楕円形？	東西 1.4× 南北 1.4 以上	0.5				土師器椀・杯・皿・蓋・甕、須恵器杯・蓋・高杯・皿・盤・壷・甕、製塩土器、黒色土器Ｂ類椀、丸瓦、平瓦、凝灰岩	８世紀後半の土器が大半だが 11 世紀のもの１点あり
ＳＫ21	楕円形	東西 0.8× 南北 1.0	0.2				土師器甕、須恵器杯・壷・甕	８世紀後半
ＳＫ22	不整方形	東西 3.0× 南北 3.0 以上	0.3				国産磁器碗、国産陶器擂鉢（信楽産）、奈良時代土師器・須恵器、丸瓦、平瓦	近代以降

発掘区全景（南東から）

後半の土器が遺物整理箱約半分、瓦類が２点（0.042kg）出土した。

建物15棟・柱列２条が復元できたが、この他建物としてまとまらない柱穴も多い。柱穴は全部で200個余り検出しており、多くが径約0.3mの小柱穴である。多くの柱穴からは８世紀後半の遺物が出土し、１基のみ11世紀以降の遺物が出土した。掘立柱建物・柱列は、重複関係から５時期以上に分かれる。

１期　ＳＢ14・ＳＢ16・ＳＡ07等、建物主軸線が東で北に振れる建物群の時期。ＳＡ07は、八坪の東西中心線近くにあり、八坪を南北に２分割する。

２期　ＳＡ03・ＳＢ06・ＳＢ08・ＳＢ12・ＳＢ18等、建物主軸線がほぼ真北を向く建物群の時期。柱穴の平面形は方形の整然としたものが多い。ＳＢ18は大規模な建物で、柱穴の掘形が一辺約1.5ｍ、深さ約0.5～0.8ｍある。

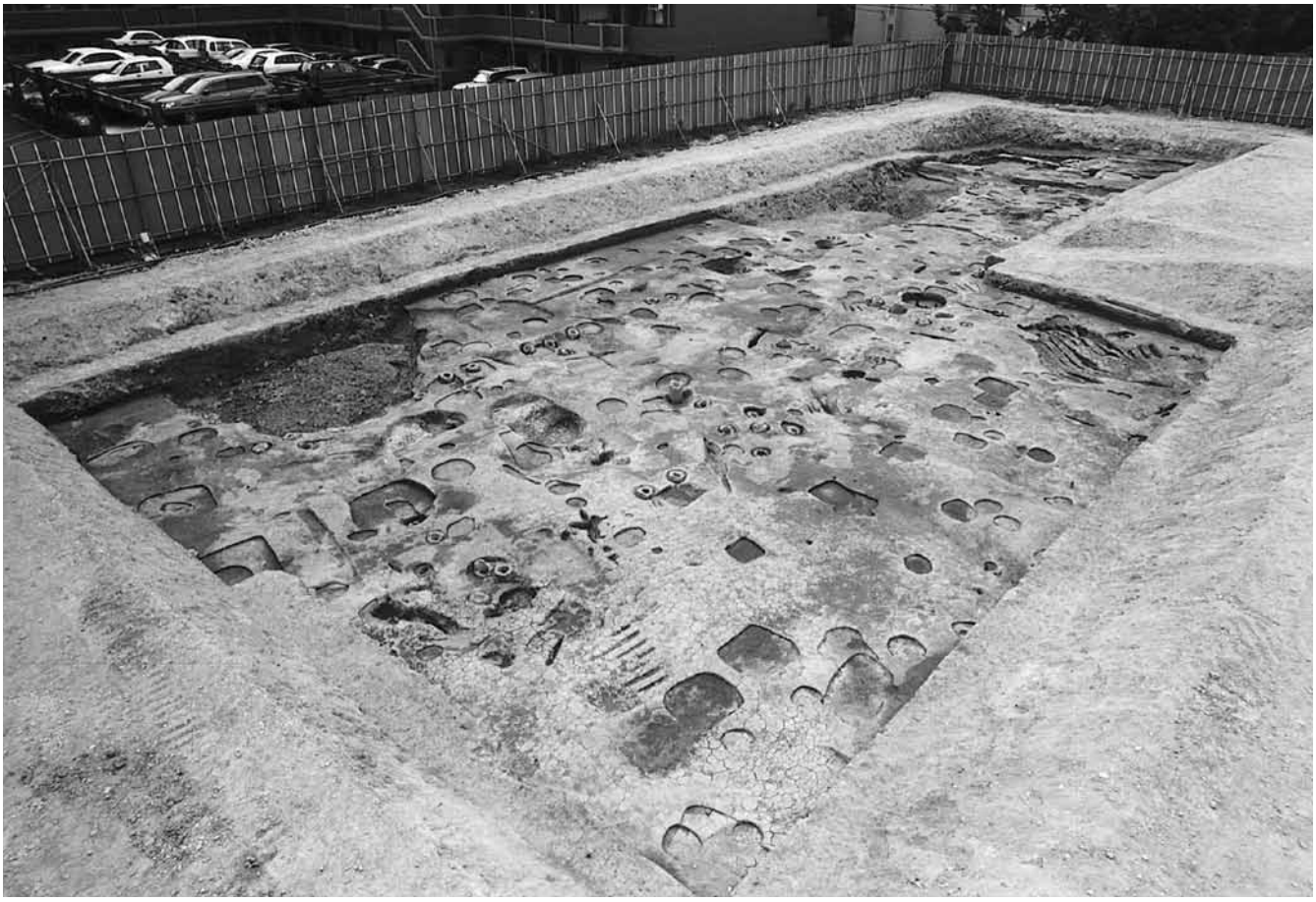
３期　ＳＢ15・ＳＥ19等、建物主軸線がほぼ真北を向く一群で、位置・重複関係から２期より新しい建物群の時期。

４期　ＳＢ05・ＳＢ17等、建物主軸線が東で南に振れる建物群の時期。

５期以降　この他の建物ＳＢ04・ＳＢ09・ＳＢ11・ＳＢ13で、径約0.3mの小柱穴からなり、建物主軸線が不揃いの建物群の時期。重複関係から２時期以上あると考えられるが、建物構成は不明である。建物規模・形態から新しい時期のものと推定されるが、出土遺物が少なく詳細な時期は不明である。

これらの内、３期がＳＥ19出土遺物から８世紀後半の時期で、１期が柱穴出土の僅かな土器から８世紀中頃を遡らない時期であることがわかる。５期に見られる小柱穴の建物は、周辺の発掘調査地でも多く検出しているが、時期が明確なものは少なく、出土遺物から鎌倉時代頃を下るものではなさそうである。

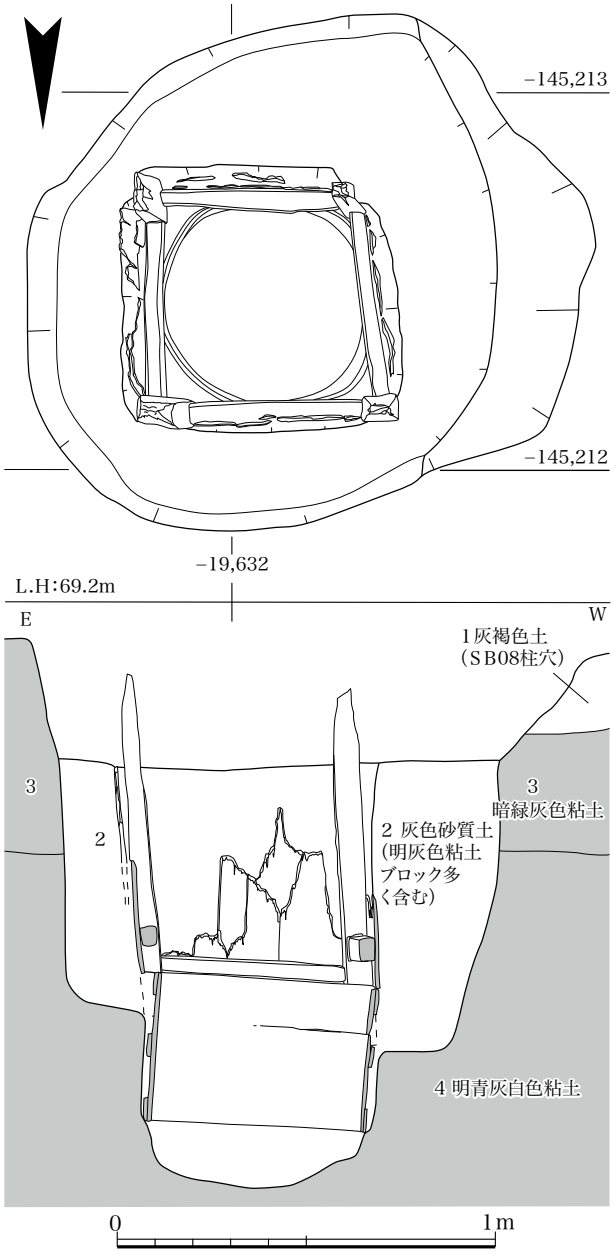
井戸ＳＥ19は方形縦板組隅柱横桟留の構造で、縦板はほとんどが腐朽して失われ、隅柱が高さ0.9m分残存する。掘形は深さ1.0mの平面不整楕円形で、その中央には曲物を据えるための、径0.6m、深さ0.45mの平面円形の掘形がある。曲物は中央の掘形上端から上へ0.1mほど頭を出して据えられ、隅柱を上段の掘形底面に曲物を囲んで配置する。隅柱側面に枘穴を穿ち、そこに横桟を差し込み固定する。使用する縦板は幅が様々で、部分的に二重にするなど雑な作りである。枠内からは遺物整理箱１箱分の土器と、20点（3.113kg）の瓦類、木簡１点、木製品他が出土した。井戸の廃絶時期は８世紀後半である。



発掘区全景（北東から）

西二坊坊間路（南から）

井戸ＳＥ19（北から）



ＨＪ第576次調査　井戸ＳＥ19平面・立面図(1/20)

土坑ＳＫ20・21は、平面楕円形の土坑で、南北に連なる。両者合わせて奈良時代後半の土器が遺物整理箱1箱分出土し、遺構規模の割に出土量が多い。ＳＫ20からは、11世紀前半〜中頃の黒色土器Ｂ類椀の破片が1点出土しており、埋没時期を示している。なお瓦類は、両者合わせて丸瓦・平瓦が46点（2.496kg）出土した。

ＳＫ22は19世紀中頃以降の遺構で、1962年撮影の航空写真に写る旧水田の境界線近くにあたり、当時の南北方向の溝の可能性もある。

Ⅳ　出土遺物

土器類が遺物整理箱5箱、瓦類が3箱、木簡1点、木製品（斎串・横櫛・曲物等）、サヌカイト剥片、砥石、凝灰岩石材、鉄釘、鞴羽口、炉壁、鉄滓がある。各遺構出土遺物は一覧表に記す。8世紀後半頃の土器が多い。

Ⅴ　調査所見

今回の発掘調査では、当初の目的通り、西二坊坊間路を検出し、八坪内には中小の掘立柱建物が8世紀後半頃を中心として建てられていることが確認できた。

西二坊坊間路は、南隣接地の発掘調査（県1993年）と、北側の発掘調査（国第142次・第183-14次）で、検出されている。北側の調査では、西二坊坊間路の東西両側溝を検出しており、溝心心間の距離が8.5〜8.6m、路面幅が7.3〜7.6mであることが判明している。その西側溝と、今回検出の西側溝ＳＤ01を結んだ線は北で西に0°10′前後の振れで、条坊の振れとしては問題ないであろう。また土坑ＳＫ20･21はＳＤ01の東側約8.3mで、確認されている東側溝とほぼ同距離にあることから、東側溝の残欠の可能性がある。その場合、発掘区内の西二坊坊間路は、溝心心間の距離が8.3m、路面幅が7.1mとなり、その国土座標値は以下の通りである。

西側溝　Ｘ＝−145,213m、Ｙ＝−19,653.95m
東側溝　Ｘ＝−145,213m、Ｙ＝−19,645.65m
道路心　Ｘ＝−145,213m、Ｙ＝−19,649.80m

一方、南隣接地の発掘調査では、八・九坪間では東側溝のみ検出し、西側溝は中世の溝と重複して検出できず、今回の西側溝との接続状況は不明である。この東側溝とＳＫ20を結んだ線は、北で西へ1°近く振れており、発掘区北側の状況と比べ振れが大きい。その南側の七・十坪間では、西側溝の他に条坊を踏襲した数条の溝を検出しているが、東側溝は確認されていない。溝は多くが北で東に振れており､北側の西側溝のあり方と大きく異なる。また、西側溝も、北側からの西側溝の延長線より0.7〜1.5mほど東側に位置し、同一直線上の溝は、中世の溝ＳＤ57のみである。西二坊坊間路は、二条条間北小路を挟み南北の様相が異なり、さらに検討が必要であろう。

掘立柱建物群は、8世紀後半頃を中心とした時期と考えられるが、小柱穴については時期が確定できなかった。このような小柱穴は、調査地周辺で確認例が多く、調査地を含め南北約450m、東西約320mの範囲に広がる。いずれの調査でも、小柱穴が高密度で分布し、出土土器が少なく時期不明のものが多い。しかし、約170m西側の市ＨＪ第504次調査では12〜13世紀中頃、南隣接地の調査では12世紀前半〜中頃のものを確認している。この他の調査でも14世紀以降の遺構・遺物は検出しておらず、小柱穴群は平安〜鎌倉時代のものと想定できよう。また市ＨＪ第504次調査では、建物廃絶後素掘小溝が掘削され耕作地化されることがわかる。奈良時代以後の土地利用を考える上で、注目される遺構である。　（中島和彦）

4．平城京跡（左京四条五坊六坪）の調査　第577次

事 業 名	ホテル新築	調 査 期 間	平成19年５月９日～５月29日
届出者名	奈良活性化ホールディングス	調 査 面 積	233㎡
調 査 地	奈良市三条川崎町321-3 他	調査担当者	武田和哉

Ⅰ　はじめに

本調査地は、平城京の条坊復原では左京四条五坊六坪の北東隅に該当し、敷地の東辺付近には東五坊坊間路、また北辺付近には四条条間路が各々想定されている。調査地西側ではＪＲ奈良駅周辺土地区画整理事業に伴う調査が実施されており、土坑や河川跡等が確認された。[1)]

Ⅱ　基本層序

層序は、造成土（約0.7ｍ）以下、黒灰色粘土（旧耕作土）、黒褐色粘土（旧耕作土）、暗褐色土（床土）と続き、現地表下約0.9～1.1ｍで、青灰色または黄灰色粘土の地山に到達する。なお、東側では地山が高くなる傾向にある。地山上面の標高は、発掘区東辺では標高約66.3ｍ前後、それ以外の部分では標高約66.1ｍ前後である。

Ⅲ　検出遺構

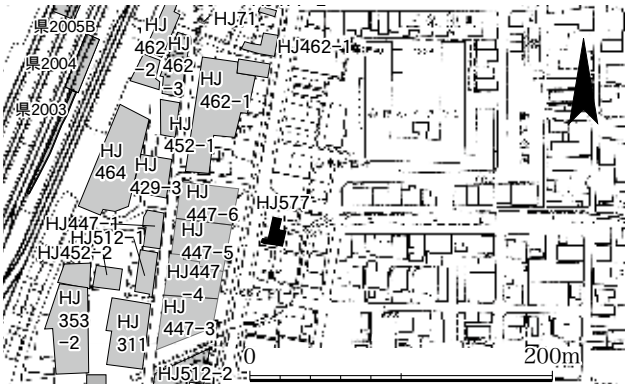
主要な検出遺構には、弥生時代後期の性格不明の遺構および奈良～平安時代前半頃の溝がある。

ＳＸ01は発掘区の中央付近で検出した性格不明遺構。平面円形を呈し、西半は後述のＳＤ02によって破壊されている。径は約８ｍ、深さは約0.5ｍ。埋土は３層に分かれ、上・中層は黒褐色の粘質土、下層は砂質土である。上・中層から、弥生時代後期の甕や高杯脚部が出土した。

ＳＤ02は、発掘区西辺で検出した南北方向の溝。発掘区内で約22ｍ分を確認。幅は約８ｍ、深さは最大約0.9ｍ。埋土は概ね３層に分かれ、主に粗砂や礫からなる。８～９世紀中葉頃の須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・製塩土器・墨書土器・線刻土器・竈・甑・土馬、丸瓦・平瓦・軒丸瓦（型式不明２点）・軒平瓦（6691A １点）の破片などが出土した。特に土師器は摩滅が著しい。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物は、遺物整理箱10箱分が出土した。その大半を弥生時代後期の土器と８～９世紀中葉頃の土器・瓦が占めている。８～９世紀中葉頃の遺物のほとんどは、前述のＳＤ02から出土している。



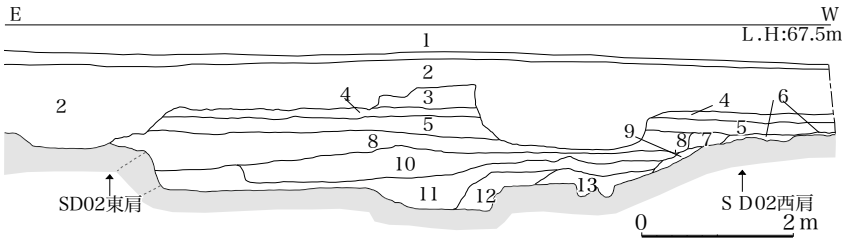
ＨＪ第577次調査　発掘区位置図（1/5,000）

Ⅴ　調査所見

本調査で検出したＳＸ01の遺構の性格は不明であるが、埋土の様相からみて、弥生時代後期に、窪地状の地形が徐々に埋没し、その過程で遺物が混入していったと推察される。ただし、この窪地状の地形が人為的に形成されたのか、あるいは自然に形成されたかは不明である。

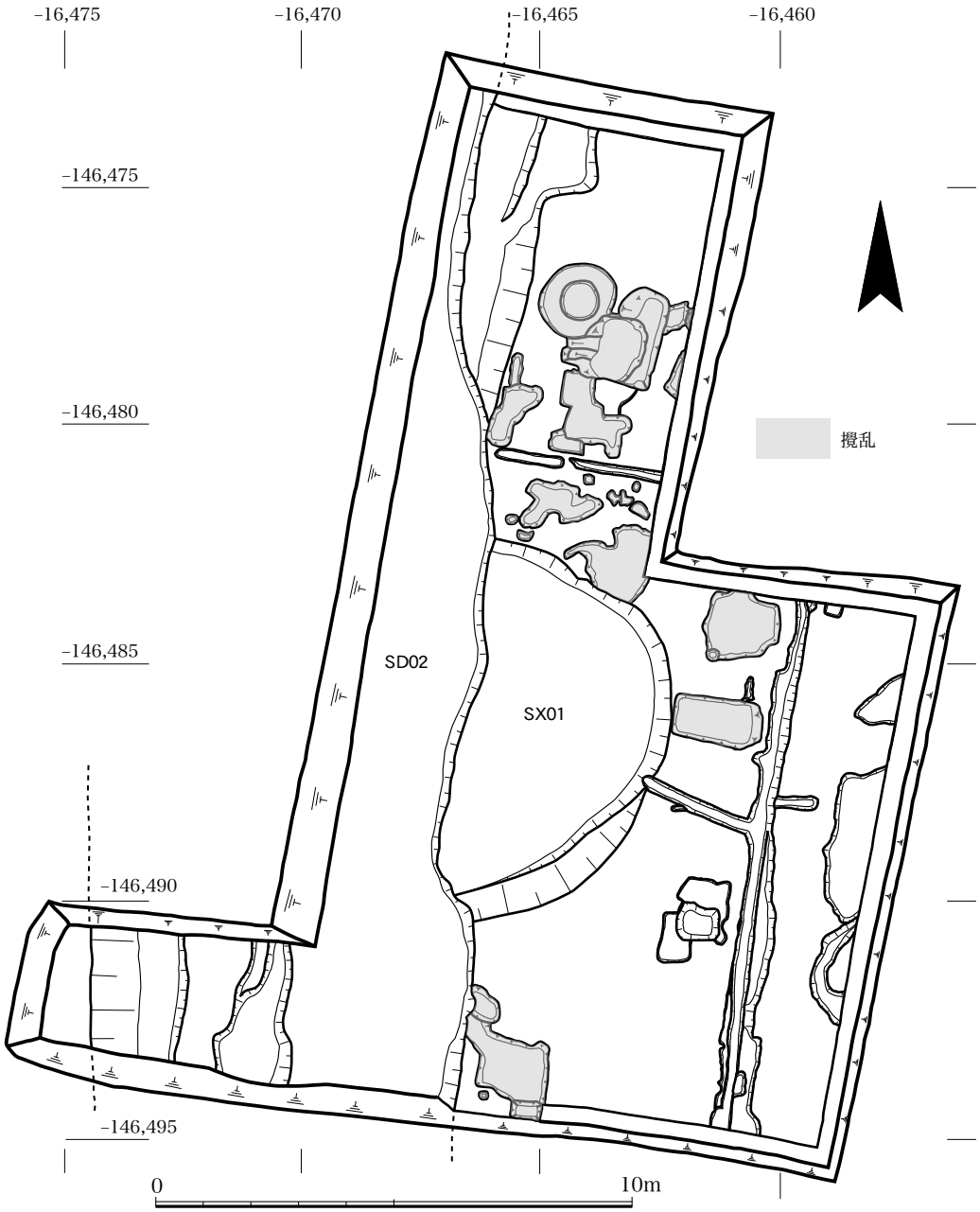
一方、ＳＤ02は概ね北から南へと流れる点が注目される。調査地付近の地形は、東から西に向かって低くなっているが、ＳＤ02は北から南へと流れていた状況が確認され、周辺の地形に制約されていないことが判る。こうしたことから、自然流路ではなく人工的に開削された水路等である可能性が高いと考えられる。埋土中に含まれる遺物は８～９世紀中葉頃のものであり、この時期に機能していたとみられる。ただし、調査地の東辺に想定されていた東五坊坊間路の西側溝の位置からは西にかなりずれた場所に位置しており、このＳＤ02を条坊側溝と判断することにはいささか困難がある。（武田和哉）

1）奈良市教育委員会「三条遺跡・平城京左京四条五坊六坪の調査第477-1・477-3～6次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成14年度』2006

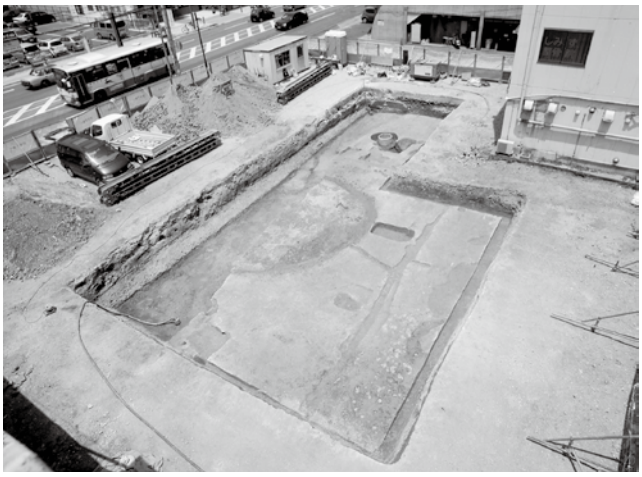


1　クラッシャー
2　造成土
3　黒灰色粘土（旧耕作土）
4　黒褐色粘土（旧耕作土）
5　暗褐色土（旧床土）
6　暗灰色粘土
7　茶褐色粘砂
8　灰色砂礫（SD02上層）
9　暗灰色砂礫
10　灰色粗砂（SD02中層）
11　黄茶灰色粗砂（SD02下層）
12　茶灰色粗砂（SD02下層）
13　暗灰色砂礫（SD02下層）
地山
青灰色または黄灰色粘土

ＨＪ第577次調査　発掘区南壁ＳＤ02付近土層図（1/100）



ＨＪ第577次調査　発掘区遺構平面図（1/150）



発掘区全景（南南東から）

発掘区中央部　ＳＸ01（西から）

5．平城京跡（左京六条三坊七坪）の調査　第580次

事 業 名	店舗新築	調 査 期 間	平成19年６月12日～６月22日
届出者名	株式会社　天礼社	調 査 面 積	85㎡
調 査 地	奈良市大安寺西三丁目183-１　他	調査担当者	安井宣也

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京六条三坊七坪の北西部で、地形的には佐保川左岸の氾濫平野にあたる。七坪内では今までに本格的な調査がなされていないため、坪内の様相はよくわかっていない。

今回の調査は、七坪北西部の様相を確認することを主な目的として実施した。

Ⅱ　基本層序

造成土（厚さ 1.7 m）の下に耕作土のオリーブ黒色砂混じりシルト質粘土層（厚さ 0.2 m）、元々は氾濫堆積物とみられる床土の灰色シルト質粘土層（厚さ 0.4 m）、灰色砂質粘土質シルト層（厚さ 0.1 m）、灰色礫混じり砂層（厚さ 0.15 m）、灰色シルト質砂層（南寄り、厚さ0.15 m)あるいは灰色礫混じりシルト質砂層(北寄り、厚さ 0.15 m）があり、その下で沖積層の地山である黄褐色砂質シルト層の上面となる。

床土の各層には細根の痕跡や斑鉄が認められ、粘土質シルト層やシルト質粘土層には砂のラミナがみられる。地山の黄褐色砂質シルト層の上位には乾燥した状態だったことを示す亀裂（乾裂痕）がみられる。

地山上面は古墳～奈良時代の遺構面である。その標高は 55.8 ～ 56.0 mで、南から北に緩やかに下る。遺構検出は地山上面で行った。

Ⅲ　検出遺構

古墳時代の溝１条（ＳＤ01)、奈良時代の建物か塀の一部とみられる南北方向の掘立柱列２条（ＳＡ02・03)・柱穴・土坑２基（ＳＫ04･05）と、時期の下る耕作溝がある。古墳～奈良時代の遺構の概要は次頁の表に示す。

Ⅳ　出土遺物

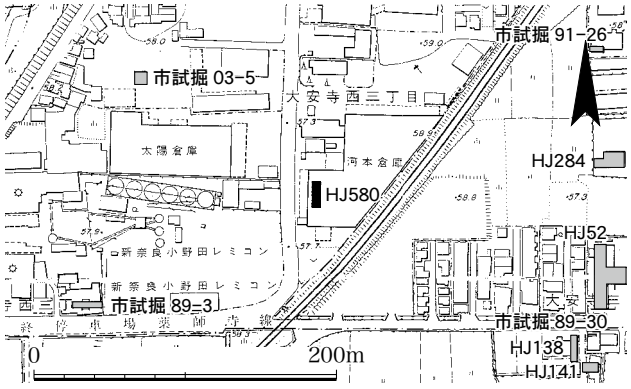
土器と瓦が遺物整理箱で各１箱分出土した。

土器には古墳時代と８世紀のものがある。

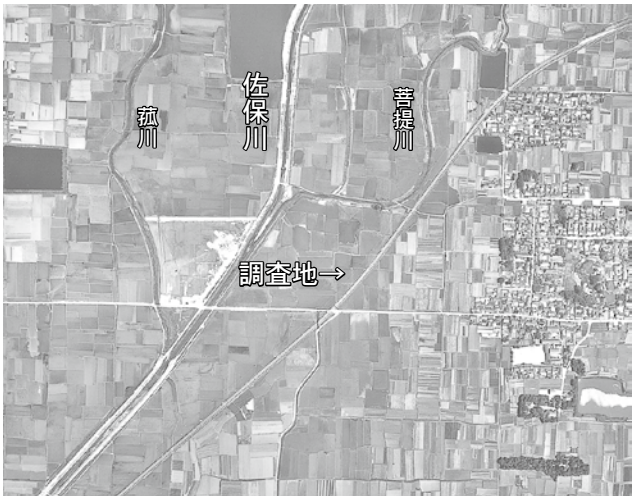
古墳時代の土器には、溝ＳＤ01 の埋土から出土した土師器の小型丸底壷の体～底部片が１点ある。体部外面にかすかなハケ目調整痕が､体部上半の内面に指頭圧痕、同下半～底部の内面にケズリ調整痕がみられる。時期は特定できない。

８世紀の土器は、柱穴や土坑の埋土と床土の各層から出土しており、器種には土師器皿Ａ・Ｃ、須恵器甕・壷・杯Ｂ・蓋がある。土坑ＳＫ05 の埋土から出土した土師器皿Ａは体～底部の外面にケズリ調整痕がみられ、８世紀後半の特徴を示す。

瓦には８世紀の丸瓦と平瓦の小片があり、柱穴の埋土と床土の各層から出土した。



ＨＪ第580次調査　発掘区位置図（1/5,000）



調査地の旧状（1961年、ＫＫ61-3　Ｃ5-188）

Ⅴ　調査所見

古墳時代の溝が検出されたことから、調査地付近に同時期の遺跡が存在することがうかがえる。

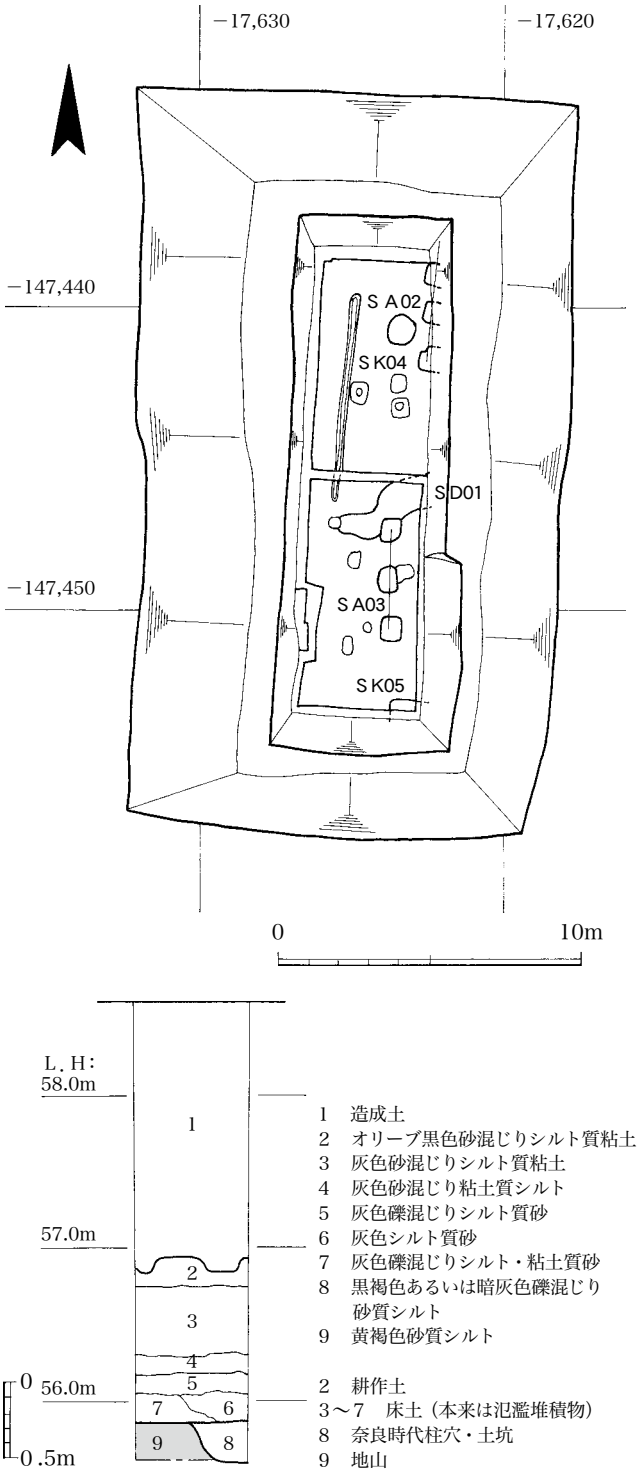
奈良時代の七坪内の様相については、建物か塀の一部とみられる掘立柱列２条と土坑２基が確認できたことから、宅地として利用されたとみて間違いない。

なお、黄褐色砂質シルト層の地山の上位にかつて乾燥した状態だったことを示す細かな亀裂がみられることから、調査地が古墳～奈良時代には微高地であったことが推察できる。　（安井宣也）

発掘区全景（北西から）

発掘区全景（北から）

発掘区東壁断面（南西から）



ＨＪ第580次調査　遺構平面図（1/250）・土層模式図（1/50）

ＨＪ第580次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備考
		桁行×梁行	（m）	（m）	桁行	梁行	
ＳＡ02	南北	2以上	2.7以上		南から1.5−1.2		柱穴の深さ0.2m。
ＳＡ03	南北	2	3.3		1.65等間		柱穴の深さ0.2m。ＳＤ01より新しい

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
ＳＤ01	斜行溝	長さ3.0以上×幅1.0	0.4	古墳時代の小型丸底壷小片	ＳＡ03より古い
ＳＫ04	円形	径0.9	0.3	8世紀：土師器皿Ｃ・須恵器蓋小片	
ＳＫ05	方形	東西1.0以上×南北0.5以上	0.1	8世紀後半：土師器皿Ａ小片	

6．平城京跡（右京二条三坊一坪）の調査　ＨＪ第582次

事 業 名	共同住宅新築	調 査 期 間	平成19年６月19日～６月27日
届出者名	個人	調 査 面 積	60㎡
調 査 地	奈良市西大寺南町2386-２	調査担当者	大窪淳司

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京右京二条三坊一坪の北西隅部分に位置する。同坪内では市HJ第51・378-6・511・513次調査および国183-18次調査が行われているが、全体として遺構密度は希薄で、調査地周辺が後世の削平を受けた可能性が考えられる。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本層序は、現代の造成土（0.8～0.9ｍ）の下に水田耕土（0.1ｍ）、灰白色細砂（0.1ｍ）と続き、青灰色シルトの地山となる。灰白色細砂は河川等の氾濫堆積層で、16～17世紀の土器を包含する。地山上面の標高は約70.0ｍで、発掘区内ではほとんど高低差がない。

Ⅲ　検出遺構

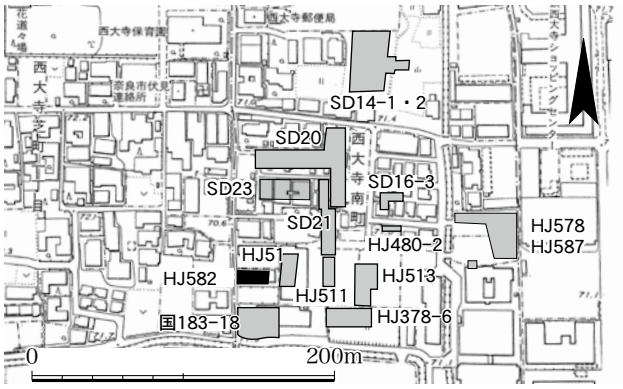
古墳時代以前の溝（ＳＤ01）と奈良～平安時代の柱穴・土坑、江戸時代前期の土坑状の落ち込み（ＳＸ01）を検出した。このうち柱穴・土坑は８～９世紀の土師器・須恵器が出土するものの、いずれも細片のため詳細な時期は不明である。また最大でも15㎝程度の深さしかなく、後世の削平を大幅に受けていることがわかる。

ＳＤ01　中央東側で検出した溝で、幅1.3～2.5ｍ、深さ0.6～0.9ｍ。北から南へ流れる。最下層から縄文時代晩期前葉の土器、最上層から須恵器小片が出土した。

ＳＸ01　西側で検出した土坑状の落ち込みで、南北1.5ｍ以上、東西8.0ｍ以上、深さは0.7～1.0ｍ。東から西へ緩やかに深くなる。人為的に埋められており、埋土から16～17世紀の土師器皿や瓦質土器が出土した。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物には縄文時代晩期前葉の土器、８世紀～９世紀初頭の土師器・須恵器、16～17世紀の土師器・瓦質土器、18世紀の染付椀が遺物整理箱で１箱分ある。

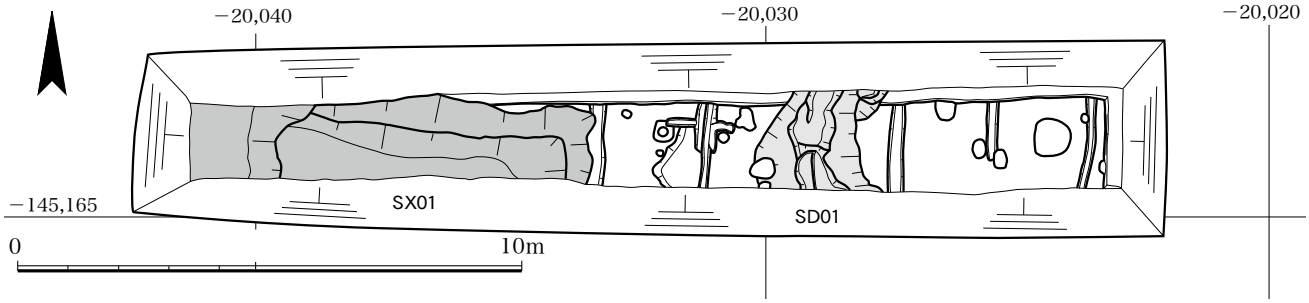


ＨＪ第582次調査　発掘区位置図（1/5,000）

発掘区全景（東から）

Ⅴ　調査所見

ＳＤ01は国183-18次調査で見つかった古墳時代の自然流路と埋土が似ており、両者が繋がる可能性もある。最下層から縄文時代晩期の土器が出土した点については、周辺の国212次調査（西隆寺下層）、市ＨＪ第283次調査で同時期の流路が見つかっており、これらの関連性をうかがわせる。　（大窪淳司）



ＨＪ第582次調査　発掘区遺構平面図（1/150）

7．平城京跡（右京二条二坊十四坪）の調査　第583次

事 業 名	共同住宅新築	調 査 期 間	平成19年６月19日～６月27日
届出者名	個人	調 査 面 積	98㎡
調 査 地	奈良市横領町334-6、334-7	調査担当者	武田和哉

Ⅰ　はじめに

本調査地は、平城京の条坊復原では右京二条二坊十四坪の西辺中央やや北寄りの場所に該当し、西隣には西二坊大路が想定されている。調査地の北西側・西側では、近鉄西大寺駅南地区区画整理事業に伴う調査が実施されており（奈良市第283次・378-7次・450次）、西二坊大路および奈良～平安時代の建物・井戸・土坑等の遺構が検出されている。

Ⅱ　基本層序

基本層序は、上から順に、造成土（約0.9ｍ）、黒灰色粘土（旧耕作土）、暗褐色粘土（旧耕作土）、暗灰色土（床土）と続き、現地表下約1.2～1.3ｍで青灰色シルトの地山に到達する。地山は、発掘区の西側で低くなる傾向にある。発掘区内での地山の標高は、中央～東では標高約70.5～70.6ｍ、また西側では70.3ｍ前後である。

Ⅲ　検出遺構

主要な検出遺構には、土坑・性格不明遺構などがある。

ＳＫ01は発掘区北辺中央付近で検出した土坑。平面不整形を呈し、東西約1.2ｍ、南北約1.2ｍ分を検出し、北側は発掘区外へと続く。深さは約0.2ｍ。埋土からは土師器の小片が出土。遺構の重複関係から、後述する８～９世紀前半の遺物を含む掘立柱穴より古いことが判る。

ＳＫ02は、発掘区の中央付近で検出した土坑。平面ほぼ円形を呈し、最大径約1.0ｍ、深さ約0.35ｍ。埋土は２層に分かれ、ともに８世紀頃の土器・瓦片が出土。

ＳＸ03は、発掘区西辺で検出した落ち込み状の遺構。発掘区内では南北約６ｍ、東西約4.5ｍ分を確認した。西に向かって徐々に深くなり、西端では深さ約0.3ｍ。埋土は３層に分かれ、８～９世紀前半の土器・瓦片が出土。

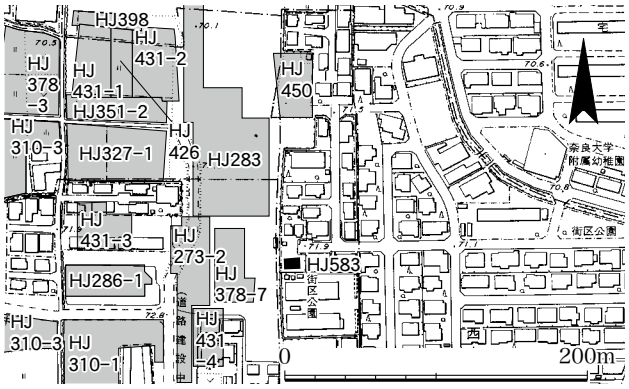
このほか、埋土に８～９世紀前半の土器・瓦が含まれる掘立柱穴や径0.1～0.3ｍ程度のピットも多数検出したが、いずれも明確に建物・柱列としてまとまらない。

Ⅳ　出土遺物

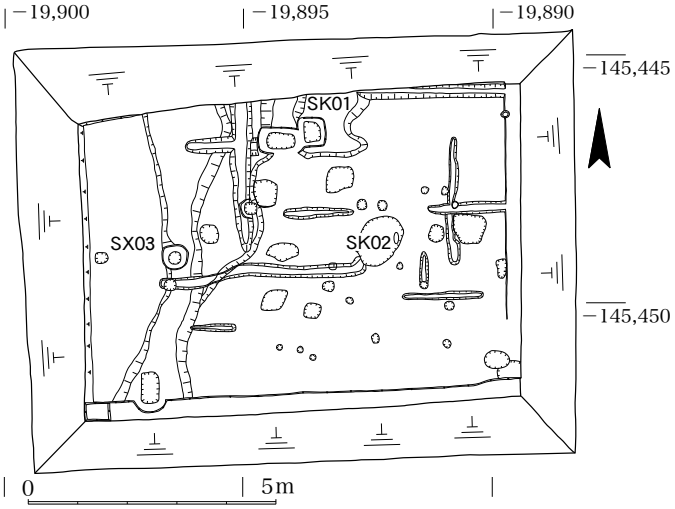
遺物は、８～９世紀前半の土師器・須恵器、丸・平瓦・磚の破片などが遺物整理箱２箱分出土した。

Ⅴ　調査所見

過去の隣接地における調査結果などから、調査地の西隣で検出された西二坊大路は、切り通し状に施工されていることが確認されている。今回の調査で検出したＳＸ03も、西隣の西二坊大路に向かって低くなる傾斜地形である可能性がある。（武田和哉）



ＨＪ第583次調査　発掘区位置図（1/5,000）



ＨＪ第583次調査　発掘区遺構平面図（1/150）

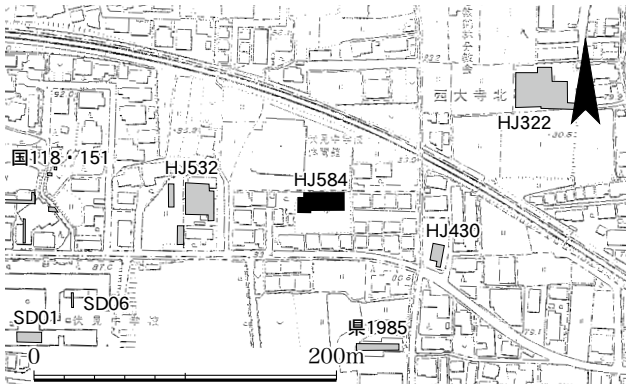
発掘区全景（北から）

8．平城京跡（右京北辺四坊二坪）の調査　第584次

事 業 名	共同住宅建設	調 査 期 間	平成19年７月４日～８月10日
届出者名	個人	調 査 面 積	432㎡
調 査 地	西大寺宝ヶ丘643-1、643-4の一部	調査担当者	中島和彦

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では右京北辺四坊二坪のほぼ東西中央の南半部にあたる。西側に隣接する三・六坪内の調査（国第151-26次）では、奈良時代の大規模な掘立柱建物群と、平安時代前半の火葬墓が検出されている。また周辺は称徳天皇陵兆域・称徳山荘との関係も指摘されている地域であり、発掘成果との関係が興味深い。本調査は、建物建設部分に発掘区を設定し、二坪内の宅地利用状況の一部を明らかにする目的で実施した。



ＨＪ第584次調査　発掘区位置図（1/5,000）

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、発掘区北東部分で上から耕作土（2）、灰黄褐色砂質土（3）、黄褐色砂質土（5）、灰黄褐色砂質土（7）またはにぶい黄褐色砂質土（8）とつづき、地表下0.5mで明黄橙色粘質土の地山となる。発掘区西端部では、地山面が南西方向に向かって低くなる部分があり（ＳＸ14）、発掘区内では約1ｍの深さがある。ＳＸ14内は、上からにぶい褐色砂質土（17）、褐灰色粘質土（18）、灰色粘土、にぶい黄褐色砂質土（19）、灰色粘質土（20）等が堆積する。後述するＳＢ01は19層上面から掘り込まれており、この層以下をＳＸ14下層、それより上をＳＸ14上層とする。上層からは、８世紀中頃～後半の土器が遺物整理箱２箱分、瓦類が２箱分と数多く出土した。地山面の標高は80.5～81.7mで、発掘区中央北端が最も高く、発掘区南西隅のＳＸ14底が最も低い。

Ⅲ　検出遺構

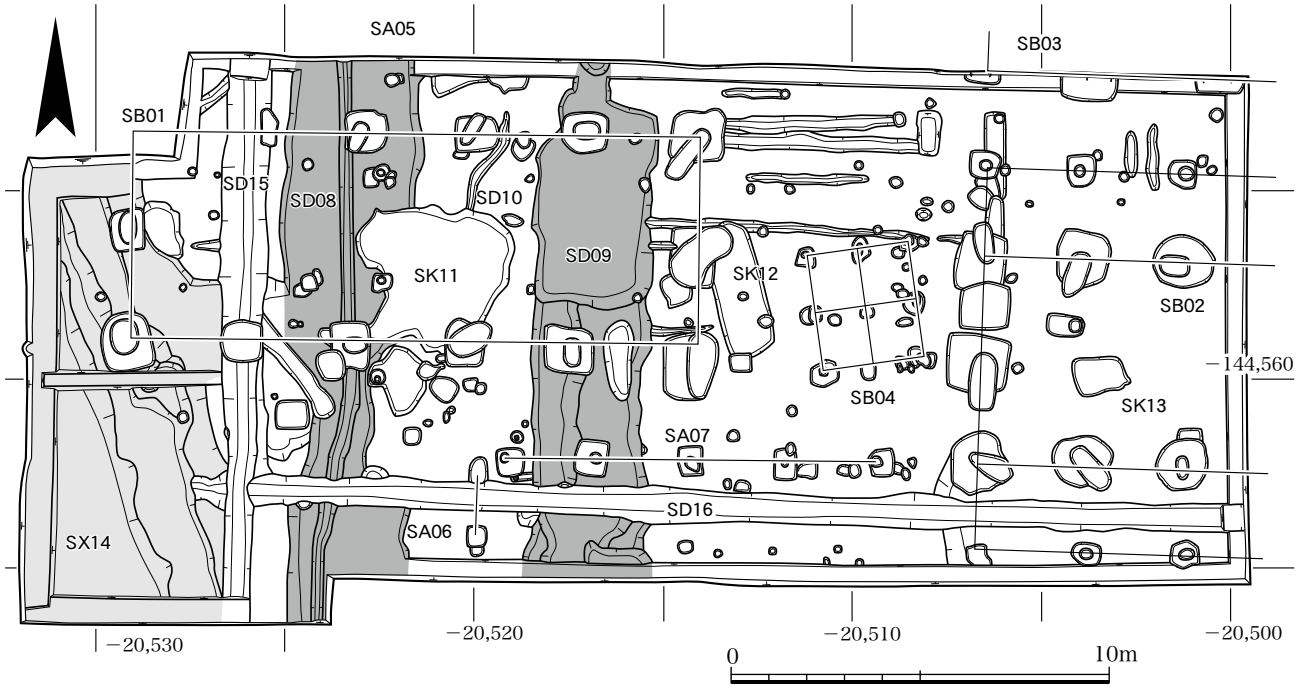
奈良・平安時代の掘立柱建物４棟・柱列３条、土坑２基、溝２条、時期不明の土坑１基、近世以降の溝２条がある。詳細は一覧表に記し、主要なものを記す。

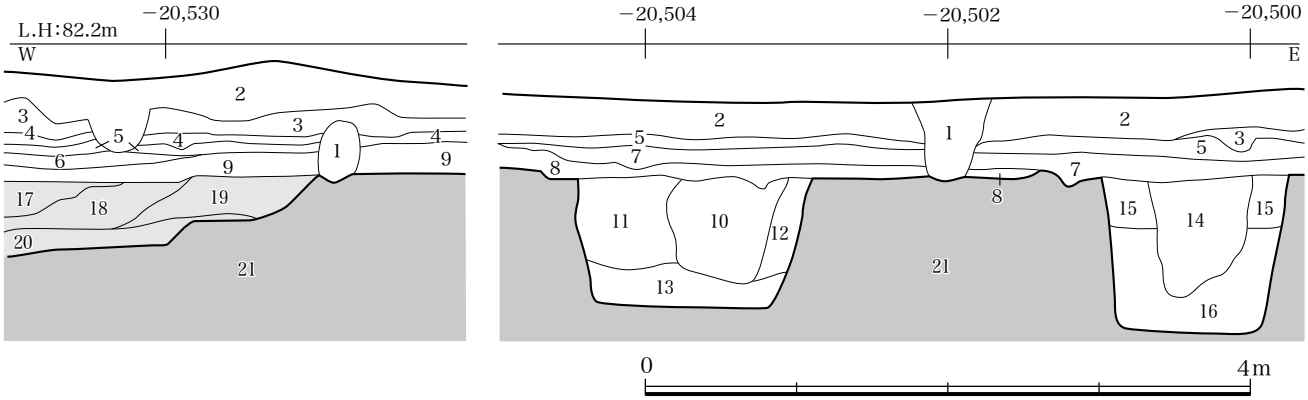
ＳＢ01は、大規模な東西棟建物で、周辺に足場柱穴が伴う。足場柱穴は、建物柱筋から外側では東側で約1.8m、

HJ第584次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間） 桁行×梁間	桁行全長 (m)	梁間全長 (m)	桁行柱間寸法 (m)	梁間柱間寸法 (m)	廂の出 (m)	備考
ＳＢ01	東西	5×2	15.0	5.4	3.0等間	2.7等間		足場柱穴あり・ＳＸ14下層より新、ＳＤ08・09、ＳＫ11より古
ＳＢ02	東西	3以上×2	5.4以上	5.4	2.7等間	2.7等間	2.4	南北両面廂付き・柱穴掘形深い
ＳＢ03	東西？	2以上×1以上	6.0以上		3.0等間			柱穴掘形深い
ＳＢ04	南北	2×2	3.0	2.7	1.5等間	1.35等間		総柱建物
ＳＡ05	南北	3以上	10.8以上		2.7等間			ＳＤ08より古
ＳＡ06	南北	1以上	1.8以上		1.8			
ＳＡ07	東西	4	10		2.5等間			ＳＤ09より新

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主な出土遺物	備考
ＳＤ08	南北	幅3.5×長さ15.0以上	0.25	８世紀？	土師器杯・高杯、須恵器杯・甕、平瓦、	ＳＢ01・ＳＡ05より新
ＳＤ09	南北	幅3.0×長さ13.5以上	0.25	８世紀中頃～後半	土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・甕、土馬、塼、丸瓦、平瓦、鞴羽口、坩堝	ＳＢ01より新
ＳＤ10	南北	幅0.25×長さ2.9以上	0.05	８世紀？	土師器甕	ＳＫ11に接続
ＳＫ11	不整形	東西4.0×南北4.0	0.25	８世紀中頃～後半	土師器杯・高杯、須恵器杯・甕、丸瓦、平瓦、敲石	ＳＢ01より新
ＳＫ12	隅丸長方形	東西1.3×南北3.6	0.1	不明	なし	ＳＢ01より古
ＳＫ13	隅丸長方形	東西1.4×南北1.0	0.1	８世紀？	土師器甕、鞴羽口	西半部に炭を含む灰白色砂質土が円形に広がる
ＳＸ14	南北	東西5.0以上×南北12.0以上	0.9以上	８世紀中頃～後半	土師器杯・皿・高杯・甕・羽釜、須恵器杯・甕・壷・平瓶、軒丸瓦（6308Ｉ・型式不明）、軒平瓦（6710Ｄb・型式不明）丸瓦、平瓦、熨斗瓦、銅片	
ＳＤ15	南北	幅0.7～1.3×長さ15.0以上	0.65	近代？		
ＳＤ16	東西	幅0.9×長さ32.0以上	0.45	近代？		





1　撹乱土
2　耕作土
3　淡黄褐色砂質土
4　明褐色砂質土
5　黄褐色砂質土
6　黄灰色砂質土
7　灰黄褐色砂質土
8　にぶい黄褐色砂質土
9　にぶい黄褐色土
10　黄褐色砂質土（SB03柱穴）
11　暗灰黄色砂質土（SB03柱穴）
12　黄褐色粘質土（SB03柱穴）
13　黄灰色粘質土（SB03柱穴）
14　暗灰黄色砂質土（SB03柱穴）
15　暗灰黄色砂質土（SB03柱穴）
（明黄褐色砂質土含む）
16　黄褐色粘質土（SB03柱穴）
17　にぶい褐色砂質土（SX14上層）
18　褐灰色粘質土（SX14上層）
19　にぶい黄褐色砂質土
（SX14下層）
20　灰色粘質土（SX14下層）
21　明黄褐色粘質土（地山）

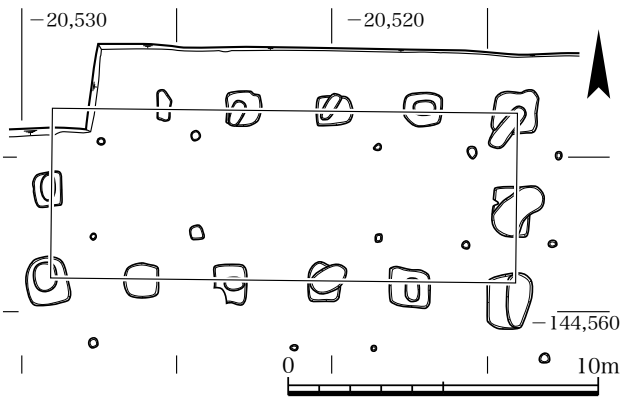
HJ第584次調査　発掘区遺構平面図（1/200）・発掘区北壁土層図（1/50）

南側で約 2.1m の位置に、内側では北側で約 1.0m、南側で約 1.5m、東側で約 1.3m、西側で約 1.5m の位置にある。建物の各柱穴間のほぼ中央に配されており、柱間は概ね等間となる。柱穴は、径 0.2 ～ 0.3m の平面円形または隅丸方形掘形で、柱痕跡から径約 0.1m の先端が尖った足場の柱が推定できる。建物本体の柱掘形は、深さ 0.6 ～ 0.8m と深く、足場柱穴は 0.2 ～ 0.3m と浅い。

ＳＢ 02 は南北両面廂付きの東西棟建物で、全体形は不明だが、柱穴規模から大規模な建物と想定できる。身舎の柱穴は、深さ 0.8 ～ 1.0m と深く、廂の柱穴は、深さ 0.25 ～ 0.5m である。

南北溝ＳＤ 08・09 は平行してあり、坪内通路の両側溝とも考えられる。二坪のほぼ東西 1/2 のラインに位置し、坪内を東西に区画していたものと想定される。ＳＤ 08 の底中央には、やや蛇行する幅約 0.35m の小溝がある。

なおＳＤ 15・16 は、重複関係から検出遺構中で最も新しく、掘り込まれる層位から近代のものと想定される。



ＨＪ第584次調査　掘立柱建物ＳＢ01と足場柱穴平面図（1/250）

発掘区全景（西から）

検出遺構を重複関係、建物主軸の傾き等から分類すると、次の４群に分けられる。

A群　建物主軸が北で西に傾くもの。ＳＢ04。

B群　建物主軸が北で東に傾く一群。ＳＢ02・03・ＳＡ05。

C－１群　建物主軸がほぼ北を向く一群で、重複関係から古いもの。ＳＢ01・ＳＡ06・07。

C－２群　主軸線がほぼ北を向く一群で、重複関係から新しい一群。ＳＤ08・09。

これら各群の掘立柱建物の柱穴には重複関係がなく、C－２群を除き直接的な前後関係を示すものはない。しかし、A群のＳＢ04が、西端の落ちこみＳＸ14の東肩の傾きに近いことからＳＸ14と同時期とすると、ＳＸ14下層の埋没後にC群のＳＢ01を築いているため、A群がC群より古いと推定される。B群とC－１群については、B群の掘立柱列ＳＡ05がＳＸ14の東側にある区画塀と考えると、ＳＸ14を埋め立てて発掘区内を一体で利用するC－１群より古いと考えられる。A群とB群の前後関係を示すものはなく新旧は不明。重複関係から最も新しいのはC－２群であることから、A・B群→C－１群→C－２群の順に変遷したものと考えられる。

これら各群の年代は、年代決定に有効な土師器杯皿類の残存状況が悪く、詳細な年代決定は困難である。A群のＳＢ04の柱穴からは、土師器皿Cの破片が出土しており、奈良時代以降のものと考えられる。またＳＸ14下層出土の土器は少量ではあるが、８世紀中頃を大きく遡るものとは考えられない。ＳＸ14上層とＳＤ09出土の須恵器は、いずれも８世紀中頃～後半のものと考えられ、両者に時期差を見出すことは難しい。これらから、A～C群は８世紀後半頃の半世紀間のものと考えられる。

Ⅳ　出土遺物

土器類が遺物整理箱５箱、瓦類が８箱、石器２点（石鏃・敲石）、鞴羽口、坩堝、鉄釘、銅片等がある。

ＳＸ14からの出土遺物が多く、土器類が遺物整理箱３箱、瓦類が３箱あり約半数を占める。またＳＤ09は鞴の羽口と坩堝の出土が目立つ。

Ⅴ　調査所見

調査の結果、２棟の大規模な掘立柱建物を検出し、４時期にわたる変遷を確認することができた。調査地周辺には、鈴鹿王の別業（後の称徳山荘）や、藤原武智麻呂の習宜の別業が推定されている。今回検出した大型掘建立柱建物もこうした高級貴族の別業とのかかわりをうかがわせる。

（中島和彦）

9．平城京跡（左京四条四坊三坪）の調査　第585次

事 業 名	店舗新築	調 査 期 間	平成19年７月９日～７月27日
届出者名	個人	調 査 面 積	199㎡
調 査 地	奈良市三条大宮町376-1	調査担当者	武田和哉

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条四坊三坪の中央より北西に寄った場所に該当する。調査地の敷地内東端部分において実施した試掘調査では、地表下約1.9mで黄灰色粘土の地山面を確認している。

Ⅱ　基本層序

造成土（1.0m）以下、黒灰色粘質土（旧耕作土）、暗褐色粘土（旧耕作土）、暗褐色粘質土（旧床土）、淡茶灰色細砂（包含層）と続き、現地表下約1.7mで灰色粗砂層または茶灰色砂礫層に達する。これらは後述の河川跡の堆積層である。遺構面は当層上面で、標高は61.2～3m。

Ⅲ　検出遺構

遺構面で検出した遺構は、小柱穴２基、土坑１基のみである。小柱穴はともに発掘区中央やや西寄りで検出し、径は0.3～0.5m程度で、特に列をなす位置関係にない。土坑は発掘区の南端で検出。平面楕円形を呈し、長径は約0.8m、深さ約0.3m。双方とも遺物は出土しなかった。

発掘区全体を占める河川跡の堆積層については、部分的な掘り下げを行った結果、層中から８世紀の土師器・須恵器・瓦、12世紀の白磁、13世紀の土師器・瓦器、12世紀の白磁、15～16世紀の瓦質土器の破片などが出土。いずれの遺物も磨滅が著しい。

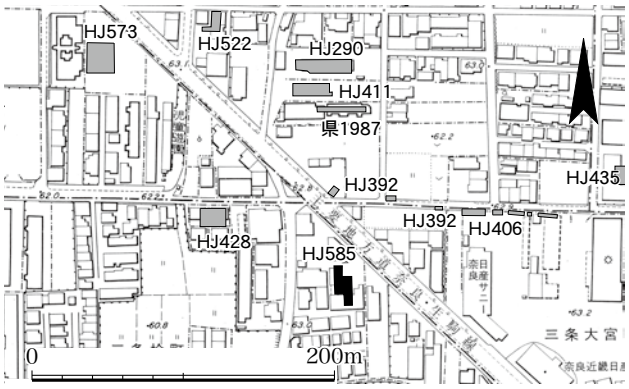
また、発掘区中央付近で木杭２本を検出。ともに径約10㎝、長さ30～40㎝程度で先端は尖っていた。河川の護岸等の目的で打設したとみられる。

Ⅳ　出土遺物

８世紀の土師器・須恵器、丸・平瓦、12世紀の白磁、13世紀の土師器・瓦器、12世紀の白磁、15～16世紀の瓦質土器の各破片、時期不明木製品（杭）などが、遺物整理箱３箱分出土。

Ⅴ　調査所見

本調査で検出した河川跡は、周辺地形や堆積状況からみて概ね北から南の方向へ流れていたと推測される。出土遺物から、16世紀頃には埋没したとみられる。なお、江戸時代の旧



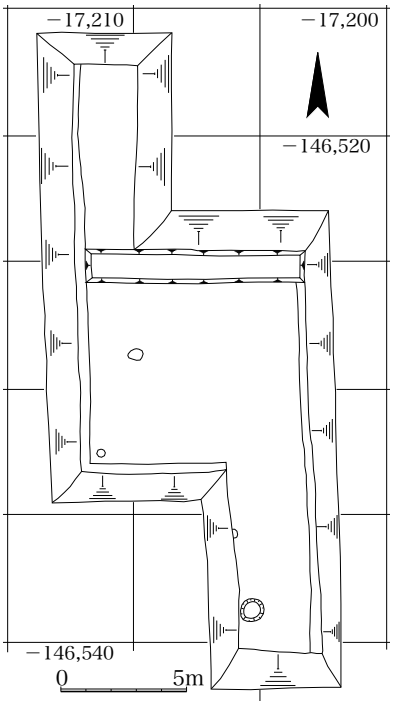
ＨＪ第585次調査　発掘区位置図（1/5,000）

三条村の絵図によれば[1]、埋没河川跡らしき地割が調査地北東側に見え、かつて河川が存在したことを示唆する。

各河川の方向は、調査地周辺の地形的条件に制約されておらず、人工的に設定された可能性がある。調査地周辺では、平城京条坊側溝を踏襲したとみられる河川跡の検出例があり[2]、さらに調査地西隣には東三坊大路が想定されているが、その東側溝が調査地付近では河川化し、室町時代頃まで水流があった可能性もある。（武田和哉）

1）三條農家組合ほか 編『奈良三條村史』2006
2）奈良市教育委員会「平城京左京四条四坊十五坪の調査第318-1･3、325-2～7、347-1次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成8年度』1997

発掘区全景（南から）



ＨＪ第585次調査　発掘区遺構平面図（1/300）

10. 大安寺西遺跡・平城京跡（左京五条三坊一坪・東二坊大路）の調査　第586次

事 業 名	宅地造成	調 査 期 間	平成19年７月９日～７月19日
届出者名	オーエスハウジング株式会社	調 査 面 積	14㎡
調 査 地	奈良市四条大路南町439-6の一部　他	調査担当者	大窪淳司

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京左京五条三坊一坪の北西隅部分に位置する。近隣の調査例には、同坪内で行われた市ＨＪ第240次調査と、県2000年度調査がある。今回の調査は、左京五条三坊一坪の北西隅の様相確認、および四条大路南側溝の検出を主目的とした。

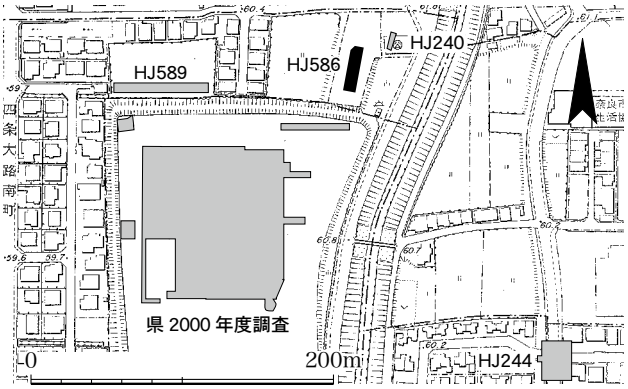
Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本層序は、現代の造成土（2.3 m）の下に、水田耕土（0.26 m）、床土（0.18 m）、中世以降の旧造成土（0.4 m）と続き、これ以下、青灰白色細砂や砂質シルト、暗灰色粘土等で構成された流路堆積層が約２m以上続く。流路堆積層上面の標高は58.5～58.6 mで、北から南へ緩やかに下がる。掘削は標高56.5 mまで行ったが壁面崩落のおそれがあり、地山層は確認できなかった。

Ⅲ　検出遺構

今回の調査区は中世以降と考えられる自然流路内にあり、遺構はなかった。自然流路の堆積は確認した範囲で大きく４つに分かれ、上から青灰白色砂質シルトや細砂で構成される第１層、青灰白色シルトや暗灰色粘土で構成される第２層、灰色粗砂の第３層、暗灰色シルトの第４層がある。このうち第３層から奈良～平安時代と考えられる土師器・須恵器が少量出土した。

発掘区全景（北から）



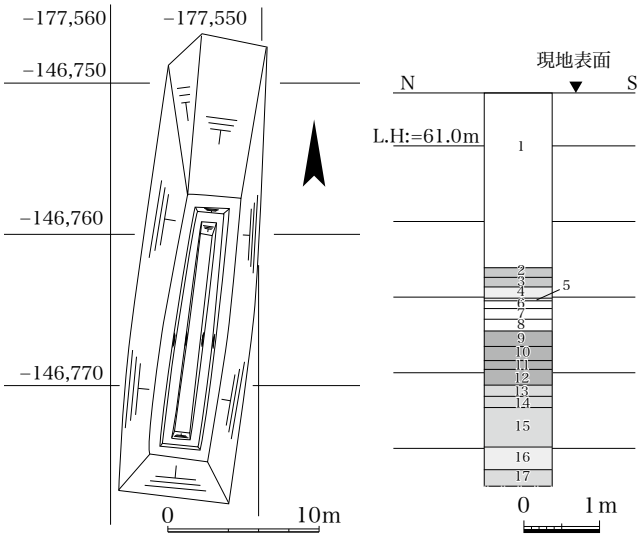
ＨＪ第586次調査　発掘区位置図（1/5,000）

Ⅳ　出土遺物

８～９世紀の土師器・須恵器と、16～17世紀の土師器、18世紀以降の染付椀が遺物整理箱で１箱分出土。

Ⅴ　調査所見

前述の県2000年度の調査では、東二坊大路が推定される箇所で中世以降の溝ＳＤ72が検出されており、現在の地割りに残る田平川である可能性が指摘されている。溝ＳＤ72は幅17.6 m、深さ1.3 m以上の南北方向の溝で、上方の堆積層で瓦器の細片が出土している。今回検出した自然流路は溝ＳＤ72との位置関係や、堆積状況が同様であることから一連のものであり、田平川が埋没した痕跡である可能性が高いと考えられる。（大窪淳司）



ＨＪ586次調査　遺構平面図（1/500）・東壁土層柱状図（1/100）

1　造成土
2　黒褐色粘質シルト
3　灰白色土混黒灰色砂質シルト
4　灰白色砂質シルト
5　青灰色砂質シルト
6　灰色細砂混青灰色シルト
7　青灰色砂質シルト
8　灰白色細砂混青灰色砂質シルト
9　青灰白色シルト
10　青灰白色砂質シルト
11　青灰白色細砂
12　青灰白色細砂混シルト
13　青灰色シルト
14　灰色粘土（黄灰白色細砂混）
15　暗灰色粘土（黄灰白色細砂混）
16　灰色粗砂（奈良～平安時代の包含層）
17　暗灰色シルト
※２・３：旧水田耕土、
４・５：床土
６～８：旧造成土
９～12：自然流路堆積第1層
13～15：自然流路堆積第2層
16：自然流路堆積第3層
17：自然流路堆積第4層

11．平城京跡（朱雀大路）の調査　第588次

事 業 名	宅地造成	調 査 期 間	平成19年８月20日～８月28日
届出者名	株式会社 八州エイジェント	調 査 面 積	150㎡
調 査 地	奈良市四条大路三丁目93　他	調査担当者	武田和哉

Ⅰ　はじめに

本調査地は、平城京の条坊復原では朱雀大路路面上に該当しており、下ツ道西側溝の東肩の検出が想定された。

Ⅱ　基本層序

基本層序は、造成土以下、黒灰色粘質土（旧耕作土）、暗灰色土（旧床土）、黄褐色土、暗褐色粘質土と続き、現地表下約0.5ｍで黄褐色粘土または暗褐色粘土の地山に達する。地山上面の標高は61.4～61.5ｍである。

Ⅲ　検出遺構

主要な検出遺構には、河川跡、時期不明の溝等がある。

河川01　発掘区の中央東側で検出。北西から南東へと斜行する。幅は15ｍ前後とみられ、深さは１ｍ以上ある。埋土の主体は砂で、場所により堆積状況が微妙に異なっており、数時期の変遷がみられる。埋土上層から、弥生時代中期（受口状口縁甕）や後期の土器（高杯・甕）が出土。遺構の重複関係から、後述の溝ＳＤ02より古い。

ＳＤ02　発掘区の中央～西側にかけて検出した溝である。長さ約25ｍ、幅は最大約５ｍ分を検出した。西肩は発掘区外に想定される。東肩はやや入りくんだ様相を呈し、深さは発掘区の北端で約2.2ｍを測る。埋土は３層に分かれ、上層は主に黄褐色粘質土、中層は暗灰褐色粘土等が主体で、下層は木片を含む腐葉土層である。遺物はきわめて少なく、土師器小片が数点出土したのみであり、年代を特定できない。

このほか、発掘区の北側から中央付近において、小土坑を５基検出した。径は0.2～0.6ｍ、深さは最大でも0.2ｍ程度であり、特に列をなす位置関係にはない。

Ⅳ　出土遺物

遺物は整理箱１箱分の出土に留まる。その大半を上述の河川01出土の弥生時代中・後期の土器が占めている。

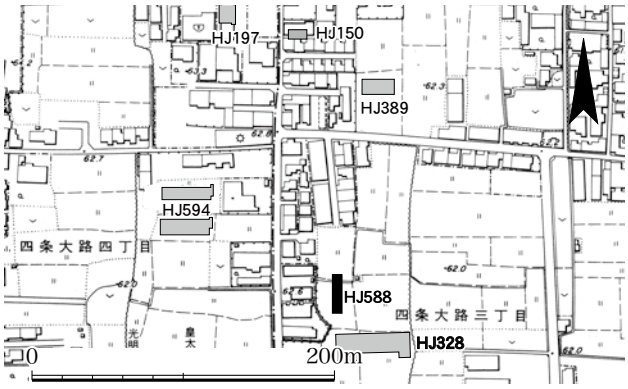
Ⅴ　調査所見

本調査で検出した河川01は、周辺の地形を考慮すると北西より南東方向へ流れる自然河川とみられる。一方、溝ＳＤ02は東肩が一定しないものの概ね南北方向であり、発掘区北端と南端における埋土の様相も類似する。

なお、平城宮・京内での下ツ道西側溝検出例は９例あり、その成果から本発掘区の西辺より更に西側約５ｍ付近に溝の中心が想定される。調査地の北側約550ｍで検出した事例では、幅約3.1～3.45ｍ、深さ約0.8～1.0ｍの規模であった[1)]。

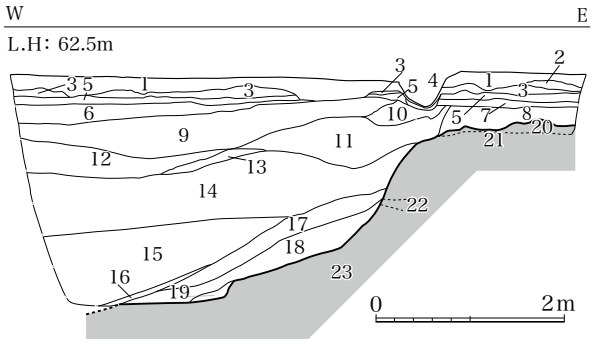
一方、調査地の南約600ｍでの検出例では、幅約６ｍ、深さ約0.7ｍの規模で、その下層に木質を含む溝が存在するとの報告がある[2)]。ＳＤ02の堆積状況は、後者の所見と共通する点がいくつか看取されるが、本調査地とは距離がある。こうしたことから、ＳＤ02を下ツ道西側溝と判断できるかどうかは、現状では困難であると言える。

（武田和哉）



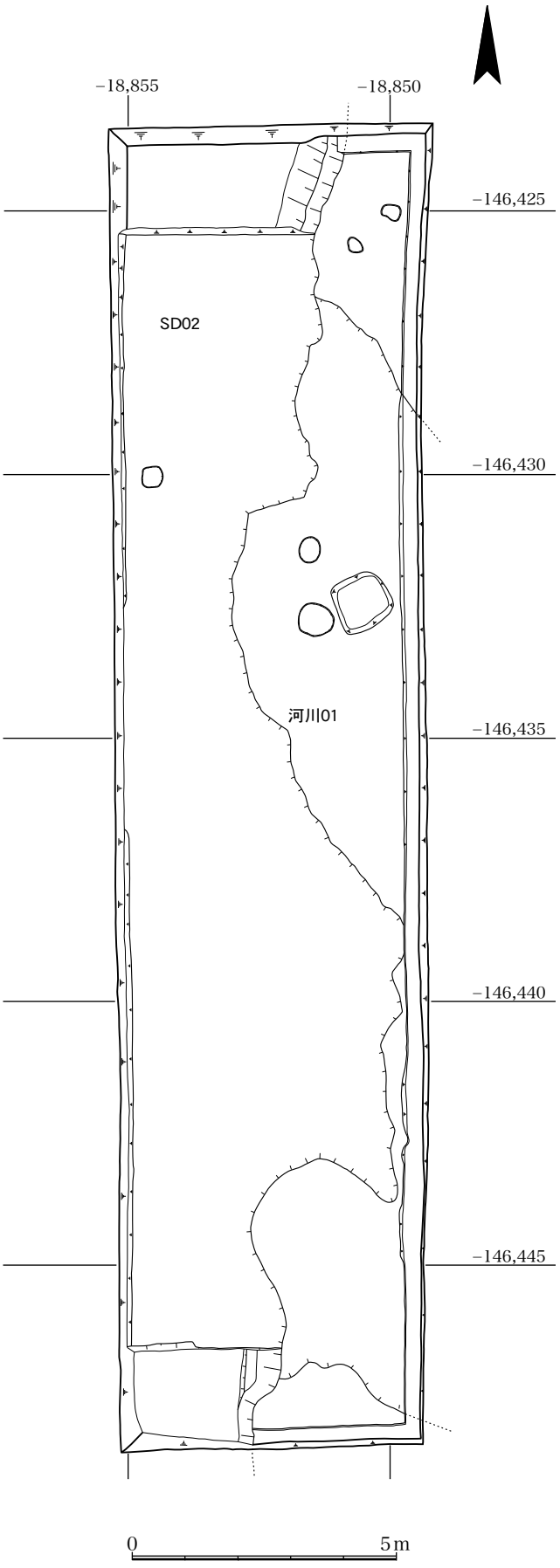
ＨＪ第588次調査　発掘区位置図（1/5,000）

1）奈良市教育委員会『史跡 平城京朱雀大路跡』1999
2）奈良市教育委員会「平城京朱雀大路の調査 第103次」『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和60年度』1986



1　造成土
2　黒灰色土（旧耕作土）
3　暗灰色土（旧床土）
4　黄褐色土（やや暗い）
5　黄褐色土（表面マンガン沈着）
6　茶灰色土
7　暗褐色粘質土
8　茶灰色砂質土
9　黄褐色粘質土
10　暗茶灰色土
11　黄褐色粘質土
12　茶灰色土または粘砂
13　黄灰色土＋灰色粘砂
14　暗灰褐色粘土
15　暗灰褐色粘土（やや砂質）
16　木質堆積層
17　暗灰色粘砂
18　暗灰色粘砂＋暗褐色粘土
19　暗褐色粘土
20　黄褐色粘土またはシルト（地山）
21　暗褐色粘土（地山）
22　灰色砂（地山）
23　暗青灰色粘土（地山）

ＨＪ第588次調査　ＳＤ02土層断面図（1/80）



ＨＪ第588次調査　発掘区遺構平面図（1/125）

発掘区全景（北から）

発掘区全景（南から）

ＳＤ02土層断面（南から）

12. 大安寺西遺跡・平城京跡（左京五条二坊十六坪）の調査　第589次

事 業 名	共同住宅新築	調 査 期 間	平成19年９月28日～10月31日
届出者名	個人	調 査 面 積	338㎡
調 査 地	奈良市四条大路南町578　他	調査担当者	大窪淳司

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京左京五条二坊十六坪の北西隅部分に位置し、縄文～古墳時代の集落遺跡大安寺西遺跡に該当する。近隣の調査例には、ＨＪ第240・586次調査[1)]と、県立図書情報館の建設に伴って行われた平城京左京五条二坊十五・十六坪の調査[2)]がある。ＨＪ第240次の調査では、古墳時代の土坑１、奈良時代の素掘溝１条・柱穴１、中世・近世の素掘溝を検出しており、このうち奈良時代の素掘溝は、四条大路南側溝の可能性がある。第586次調査では、中世以降に埋没した田平川と思われる堆積を確認した。また県立図書情報館建設に伴う調査[2)]では、縄文時代の自然流路、弥生～古墳時代の遺構や流路、奈良時代の宅地跡と五条条間北小路、中世の自然流路を検出している。

今回の調査は、左京五条二坊十六坪の北西隅の宅地様相と、大安寺西遺跡の広がりの確認を目的とした。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本層序は、現在の水田耕土（0.1 m）の下に、旧水田耕土（灰色砂質シルト・灰白色砂質シルト）および床土（橙灰白色砂質シルト）が約0.3 m続き、これ以下河川の氾濫堆積と考えられる橙灰色細砂・青灰白色砂質シルト（0.1 ～ 0.4 m）、および湿地の堆積と考えられる青灰白色シルト（0.1 ～ 0.2 m）が堆積する。その下に、中世の畑作・水田耕作に係わると考えられる遺物包含層が0.1 ～ 0.2 m続き、黄白色砂質シルトの地山となる。地山上面の標高は、57.6 ～ 58.0 mで北東から南西へ向かって緩やかに下がる。

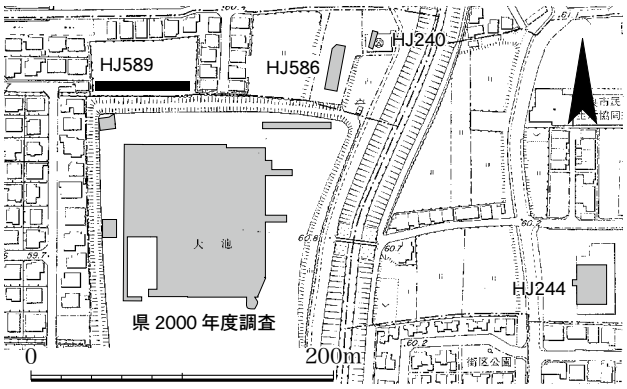
Ⅲ　検出遺構

古墳時代の溝と土坑、ならびに奈良時代の掘立柱建物や井戸、東二坊坊間東小路とその東側溝を検出した。

古墳時代の遺構

ＳＤ01　発掘区中央西部分で検出した長さ5.5 m以上、幅2.6 ～ 3.4 m、深さ約0.7 mの南北溝である。溝底は南に向けて低くなっており、溝の断面形は逆台形である。埋土は概ね２層に分かれ、上層埋土は褐灰色砂質シルト、下層埋土は暗褐灰色砂質シルトである。上下層の境で古墳時代前期の土器が出土した。

ＳＤ02　発掘区中央東部分で検出した長さ5.0 m以上、幅1.3～1.7 m、深さ0.40～0.45 mの南北溝である。溝底は南に向けて低くなっており、ＳＤ03と合流する。溝の断面形は逆台形である。埋土は大きく上下２層に分かれ、上層は暗橙灰色砂質シルト～灰白色シルト、下層は黄白色砂質シルト～灰白色極細砂である。上層埋土から古墳時代前期の土器が出土した。



ＨＪ第589次調査　発掘区位置図（1/5,000）

ＳＤ03　発掘区東部で検出した長さ20.0 m以上、幅1.7 ～ 2.3 m、深さ0.6 ～ 0.7 mの東西溝である。溝底は西にむかって低くなり、発掘区中央東部分でＳＤ02と合流する。断面形は逆台形で、埋土はＳＤ01・02と同様、大きく上下２層に分かれる。ＳＤ02との新旧関係はなく、同時に機能していると考えられる。上層から古墳時代前期の土器片が出土した。

ＳＤ04　発掘区西部で検出した長さ6.3 m、幅0.3 ～ 0.35 m、深さ0.1 ～ 0.2 mの東西溝である。溝底は東に向かって深くなる。埋土から古墳時代と思われる土師器片が出土した。重複関係からＳＫ01より古い。

ＳＫ01　発掘区西部で検出した南北0.8 m、東西1.0 m、深さ0.7mの不整形土坑である。埋土から古墳時代前期の土器片が出土した。

ＳＸ01　発掘区西部南端で検出した長さ2.2 m以上、幅1.0 m以上、深さ0.1 ～ 0.2 mの土坑状の落ち込みである。奈良時代の溝ＳＤ05・06により壊されている。埋土から古墳時代と思われる土器が出土した。

奈良時代の遺構

ＳＦ01　発掘区西端で検出した東二坊坊間東小路（九・十六坪坪境小路）である。両側溝を検出していないため道路幅は不明だが、幅約6.0 m分を検出した。

ＳＤ 05　発掘区西部で検出した長さ 5.5 m以上、幅 1.9 ～ 2.1 m、深さ 0.4 mの溝で、周辺の調査例から東二坊坊間東小路の東側溝に相当すると考えられる。埋土は橙灰色砂質シルト、淡褐灰色砂質シルトの上下２層に分かれる。Ｘ＝－ 146,761.0 mにおける溝心は、下層の底面でＹ＝－ 17,907.1 m、上層の底面でＹ＝－ 17,907.3 mと若干の差が見られる。下層から奈良時代後半の土器が出土した。

ＳＤ 06 ～ 08　発掘区西部で検出した長さ 5.5 m以上、幅 0.7 ～ 1.0 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mの溝で、十六坪の西端に位置する。いずれも埋土から奈良時代と思われる土器が出土しているが、細片のため詳細な時期は不明である。重複関係からＳＤ 07 よりＳＤ 06 が新しい。なお、先述の県立図書情報館建設に関わる調査では見つかっていないため、十六坪の南半では削平されてなくなっている可能性がある。

ＳＢ 01　発掘区西部南端で検出した掘立柱建物である。柱穴の深さから梁間２間（3.6 m）の身舎の西側に庇が付く南北棟建物の可能性がある。柱間は、身舎と庇の出がともに 1.8 m等間である。

ＳＢ 02　発掘区西部で検出した梁間２間（4.8 m）、桁行１間（2.1 m）以上の南北棟建物である。柱間は梁間が 1.4 m等間、桁行が 2.1 m。重複関係からＳＢ 01 より古い。

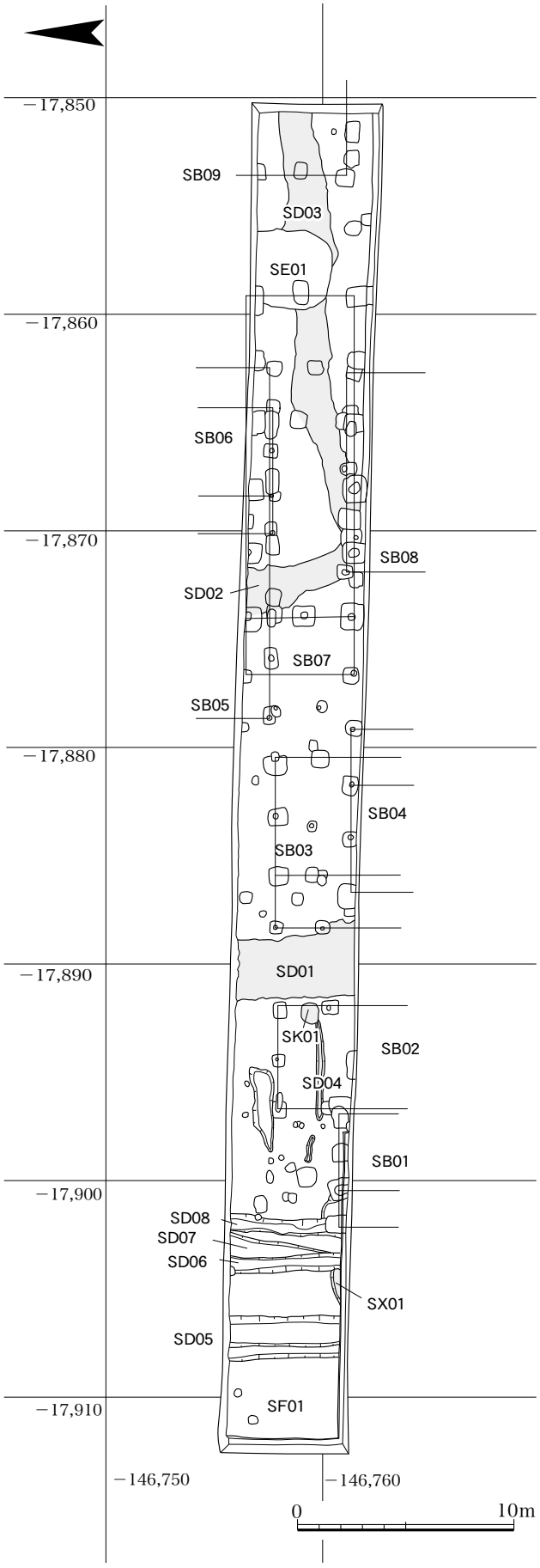
ＳＢ 03　発掘区中央部で検出した梁間２間（5.4 m）、桁行１間（2.1 m）以上の南北棟建物で、身舎の西側に庇が付く。柱間は、梁間が 2.7 m等間、桁行が 2.1 m、庇の出が 2.4 mである。

ＳＢ 04　発掘区中央南端部で検出した東西３間（7.4 m）の掘立柱列で、発掘区外へ続く掘立柱建物の可能性が高い。柱間は西から 2.4-2.4-2.6 mで若干東端が広いことから、身舎の東側に庇が付く南北棟建物と考えられる。

ＳＢ 05　発掘区中央東部で検出した東西６間（16.2 m）の掘立柱列で、発掘区外へと続く東西棟建物の可能性がある。柱間は 2.7 m等間。重複関係からＳＢ 06 より新しい。

ＳＢ 06　発掘区東部で検出した東西３間（6.0 m）の掘立柱列で、発掘区外へ続く掘立柱建物の可能性が高い。柱間は西から 1.8-2.1-2.1 mで、西端がやや狭く、身舎の西側に庇が付く南北棟建物となる可能性がある。

ＳＢ 07　発掘区東半で検出した梁間２間（4.8 m）、桁行５間（15.0 m）の東西棟建物で、身舎の西側に庇が付く。柱間は梁間が 2.4 m等間、桁行が 3.0 m等間で、



ＨＪ第 589 次調査　発掘区遺構平面図（1/300）

庇の出が2.7ｍである。重複関係からＳＢ05・06・08、および後述するＳＥ01より新しい。概して身舎の柱穴には礎板がよく残り、北西隅の柱穴には塼が礎板として使用されていた。また南西隅の柱穴には直径0.3ｍの柱根が遺存しており、南東隅の柱穴の柱抜取り穴からは6348型式Ａａ種の軒丸瓦が出土した。

ＳＢ08　発掘区東部南端で検出した東西４間(9.6ｍ)の掘立柱列で、発掘区外へと続く東西棟建物の可能性が高い。柱間は2.4ｍ等間。重複関係からＳＢ07より古い。

ＳＢ09　発掘区東端で検出した南北２間（4.2ｍ）、東西１間（2.4ｍ）以上の掘立柱建物である。柱間は南北が2.1ｍ等間、東西が2.4ｍである。

ＳＥ01　発掘区東部で検出した東西約3.7ｍ、南北3.5ｍ以上、深さ約1.9ｍの井戸である。井戸枠は全て抜き取られていた。掘形埋土から奈良時代後半の土器と弥生時代のサヌカイト製尖頭器が出土しており、奈良時代後半以降に築造されたと考えられる。

Ⅳ　出土遺物

古墳時代の土師器、奈良時代の土師器・須恵器、瓦類と塼、および鎌倉～室町時代の土師器・瓦器が遺物整理箱で16箱分あり、この他に弥生時代のサヌカイト製尖頭器１点と石核２点が出土している。古墳時代の土師器には古墳時代前期後半の布留式甕や高坏がある。奈良時代の土器は奈良時代後半のものが大半を占め、瓦にはＳＢ07の柱穴から出土した6348型式Ａａ種の軒丸瓦、中世の遺物包含層から出土した6134型式Ａｂ種、6348型式Ａ種の軒丸瓦、中世素掘溝から出土した型式不明の軒丸瓦がある。

Ⅴ　調査所見

今回の調査では、古墳時代前期および奈良時代の遺構を多数確認した。とりわけ、今まで明確な検出例のほとんどない東二坊坊間東小路とその東側溝を確認できたことは、非常に重要な成果といえる。また掘立柱建物は、柱穴規模が大きいものがほとんどで、重複関係から少なくとも３時期以上の変遷が確認できた。古墳時代の溝ＳＤ01～03については埋土の堆積構造や出土土器の時期が一致することから、同時期に機能していた一連の溝であると考える。周辺の調査でも古墳時代前期の遺構や流路を検出しており、大安寺西遺跡の北端部の様相も確認することができた。　（大窪淳司）

1）奈良市教育委員会1992「奈良市左京五条三坊一坪の調査　第240次」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』平成３年度
2）奈良県立橿原考古学研究所2006『平城京左京五条二坊十五・十六坪　奈良県立橿原考古学研究所調査報告第九十八冊』

発掘区全景（南東から）

発掘区全景（東から）

発掘区全景（西から）

ＳＢ07　塼出土状態（南西から）

13. 平城京跡（左京八条一坊十四坪）の調査　第590次

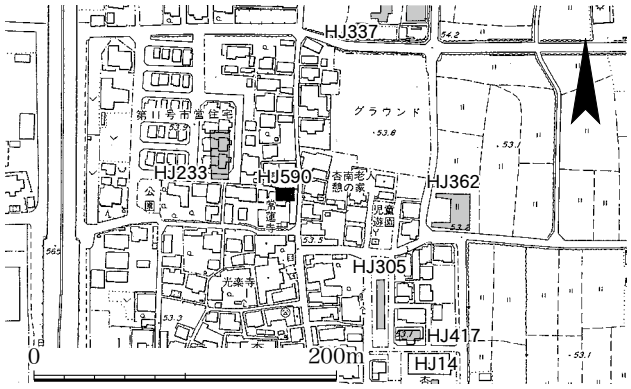
事 業 名	第11号（杏南）市営住宅建替事業	調 査 期 間	平成19年10月９日～11月５日
通 知 者	奈良市長	調 査 面 積	90㎡
調 査 地	奈良市杏町300-1、301-4	調査担当者	池田富貴子

Ⅰ　はじめに

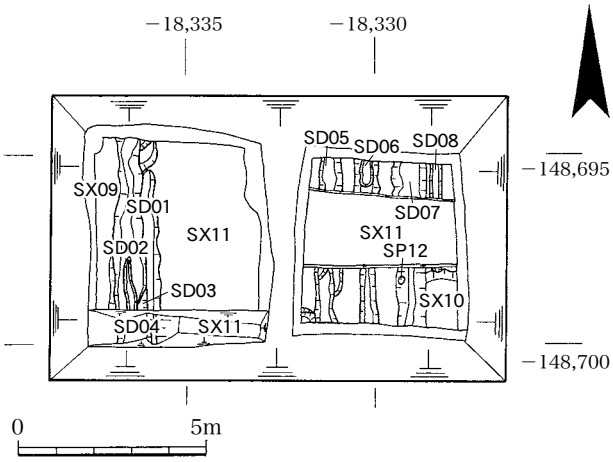
調査地は、平城京の条坊復原では左京八条一坊十四坪の南東隅に位置する。調査地の北で実施した市ＨＪ第13次・市ＨＪ第175次・市ＨＪ第216次調査では、水田化以前は滞水した低湿地であることを確認した。市ＨＪ第175次・市ＨＪ第216次調査では検出遺構はなく、砂と粘土の層が厚く堆積し、地山を確認していない。調査地の南東で実施した市ＨＪ第305次では佐保川の旧河道の南岸と奈良時代の建物、井戸、調査地の東で実施した市ＨＪ第362次調査では、佐保川の旧河道を確認している。本調査は周辺で検出されている低湿地や流路の範囲と、奈良時代の遺構の残存状況の確認を目的として行った。

Ⅱ　基本層序

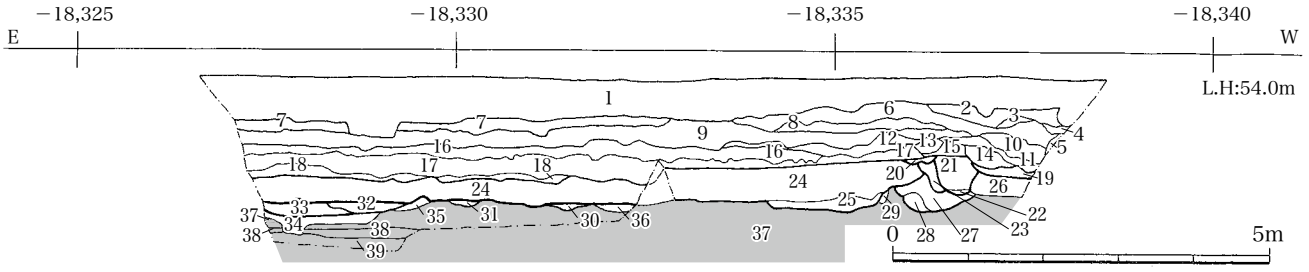
発掘区内の基本層序は造成土、耕作土の下に暗灰褐色粘質土、橙褐色細粒砂～中粒砂、淡灰青色粘質土、橙褐色細粒砂、淡青灰色粘砂と続き、緑灰色シルトの地山となる。地山まで砂と粘質土が互層になって堆積している。遺構面は地表下1.2～1.4ｍの淡青灰色粘砂上面と地表下約1.6ｍの地山上面の２面を確認した。淡青灰色粘砂上面は西から東へ向かってゆるやかに下がっている。その標高は淡青灰色粘砂上面で52.3～52.5ｍ、地山上面で52.1ｍである。淡青灰色粘砂は、後述するＳＸ11の埋土で、その埋没後に溝などが掘り込まれて



ＨＪ第590次調査　発掘区位置図（1/5,000）



ＨＪ第590次調査　発掘区遺構平面図（1/200）



1　造成土
2　灰茶色粘砂
3　灰茶色砂質土
4　茶褐色粘質土
5　暗青灰色砂質土
6　橙灰～暗灰色砂質土
7　暗灰青色砂質土（耕作土）
8　暗灰色粘砂
9　暗灰褐色粘質土～砂質土
10　暗茶褐色粘砂
11　橙灰～暗灰色細～中粒砂
12　橙茶褐色中粒砂
13　橙茶灰色中粒砂
14　橙茶灰色細粒砂
15　橙茶褐色粘質土
16　橙褐色細粒砂～中粒砂
17　淡灰青色粘質土
18　橙褐色細粒砂
19　暗灰青色砂質土（ＳＸ09）
20　暗灰色粘砂（SD01）
21　暗灰褐色粘質土（SD02）
22　橙褐色砂質土（SD02）
23　茶褐色粘砂（SD03）
24　淡灰青色粘砂（SX11）
25　暗青灰色粘砂含粘土（SX11）
26　淡灰色粘砂
27　暗褐色砂質土（SD04）
28　暗橙褐色粘質土（SD04）
29　暗青灰色中粒砂
30　淡灰色粘質土（SD05）
31　淡灰色粘質土（SD06）
32　暗灰青色粘砂（SD07）
33　暗青灰色細粒砂（SX10）
34　暗灰色粘砂含炭
35　緑灰褐色細粒砂
36　淡褐灰色粘質土
37　緑灰色シルト（地山）
38　暗灰色粘砂（地山）
39　暗灰青色中～粗粒砂（地山）

ＨＪ第590次調査　発掘区南壁土層図（1／100）

ＨＪ第590次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	掘　形　等			主な出土遺物
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	
ＳＤ01	南北溝	長さ4.4以上×幅0.4	0.1前後	時期不明土師器
ＳＤ02	南北溝	長さ5.3以上×幅0.7前後	0.3～0.4	８世紀：土師器・須恵器、12世紀後半～13世紀末：土師器、瓦器
ＳＤ03	南北溝	長さ1.2以上×幅0.3以上	0.4前後	８世紀：土師器・須恵器、12～13世紀：瓦器、時期不明瓦質土器
ＳＤ04	南北溝	長さ0.7以上×幅0.9	0.2前後	８世紀：土師器・須恵器、時期不明土師器
ＳＤ05	南北溝	長さ4.4以上×幅0.6前後	0.1前後	８世紀：土師器・須恵器
ＳＤ06	南北溝	長さ4.3以上×幅0.3～0.7	0.1前後	12世紀：瓦器
ＳＤ07	南北溝	長さ4.4以上×幅0.7	0.1前後	８世紀：土師器、13～15世紀：土師器
ＳＤ08	南北溝	長さ4.4以上×幅0.3	0.1前後	時期不明土師器・須恵器
ＳＸ09	不明	南北5.3×東西0.4～1.7	0.1前後	時期不明土師器、８世紀：須恵器、時期不明瓦質土器
ＳＸ10	方形	南北1.5×東西0.8	0.1前後	８世紀：須恵器
ＳＸ11	不明	南北0.8以上×東西8以上	0.3～0.7	８世紀：須恵器、12～13世紀：土師器、12世紀：瓦器、時期不明瓦質土器
ＳＰ12	円形	東西0.2×南北0.15	0.1	なし

いる。遺構検出作業は淡青灰色粘砂上面と一部地山上面で行った。

Ⅲ　検出遺構

検出遺構には12～15世紀の溝８条（ＳＤ01～08）、落ち込み３（ＳＸ09～11）、時期不明のピット１（ＳＰ12）がある。各遺構の概要は表の通りである。ＳＤ01～03・ＳＸ09はＳＸ11の埋土である淡灰青色粘砂上面で、ＳＤ04～08・ＳＸ10・11は地山上面で検出した。ＳＤ04・ＳＸ11の検出面は地山上面だが、それぞれの本来の遺構面は、ＳＤ04はＳＸ11に、ＳＸ11はＳＤ01～03などに壊されており不明である。検出した遺構は、狭い範囲で重複しており、出土遺物が乱れている可能性が高い。また、細片が多いため、各遺構の時期を考えるのは難しい。検出した遺構は、おおむね12～15世紀の間に重複して掘削されたと考えられる。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱２箱分の遺物が出土した。遺物には８世紀の土師器、須恵器、製塩土器、12～15世紀の土師器、12～13世紀の瓦器があり、包含層からは18世紀半ば～19世紀の肥前系磁器、国産陶器も出土した。

Ⅴ　調査所見

本調査地の造成土の下には地山までの間に粘土と砂が交互に堆積し、その堆積土は東へ行くにつれ厚くなっていった。この堆積状態から、本調査地は、調査地の東を北東－南西方向に流れる佐保川の旧河道の影響を大きく受けていると考えられる。今回の調査では、現地表下約1.6ｍという深さではあるが、地山を確認しているので、旧河道の本流から水流があふれ出た痕跡の縁辺部に当たると思われる。また、調査地の西では奈良時代の遺構を検出しており、本調査地でも８世紀の遺物が出土しているので、奈良時代の遺構面が存在したと思われるが、水流があふれた跡と思われるＳＸ11により、失われたと考える。本調査地の南東で検出している佐保川の旧河道は12～14世紀のものと考えられている。また、調査地周辺の杏町は、13～16世紀末には杏郷と呼ばれる中世の集落があったと考えられている場所である。今回検出した素掘溝や堆積土は杏郷や、旧佐保川に関わるものである可能性が高いと思われる。　（池田富貴子）

東発掘区全景（北から）

西発掘区全景（北から）

14. 平城京跡（右京北辺四坊八坪）の調査　第591次

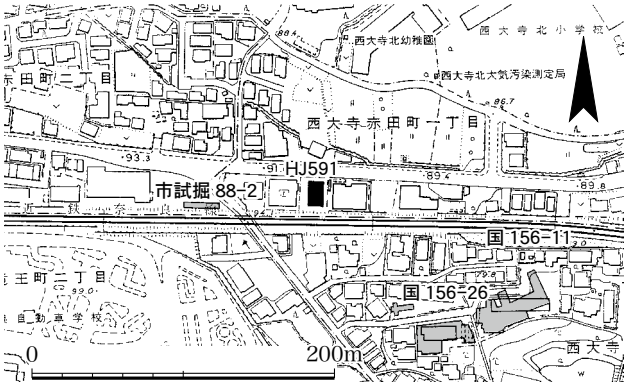
事 業 名	サイクルセンター新築	調 査 期 間	平成19年10月22日～11月６日
届出者名	社会福祉法人　秋篠茜会	調 査 面 積	166㎡
調 査 地	奈良市西大寺赤田町一丁目805-4	調査担当者	原田香織

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京北辺四坊八坪の中央部、地形的には丘陵北側斜面にあたる。平城京辺縁部の様相の確認を目的に実施した。調査地西側の四坊大路推定地で実施した市第88－２次試掘調査では、自然流路の堆積を確認したのみで、遺構・遺物はなかった。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本層序は上から造成土、耕作土、床土と続き、現地表下0.6～0.8ｍ（標高89.6～89.8ｍ）で水成堆積層を検出した。水成堆積層は、灌漑用溜池等に伴う堆積層の可能性が高く、検出遺構や出土遺物はなかった。地山面を確認するために一部を掘削したが、発掘区南西隅では湧水が激しく確認できなかった。地山面の各標高は、発掘区南端東部の高い部分で89.7ｍ、北端で88.3ｍ、南西隅では88.3ｍよりも下となる。本来は、南東から北西方向へ大きく下がる斜面地であったことがわかる。



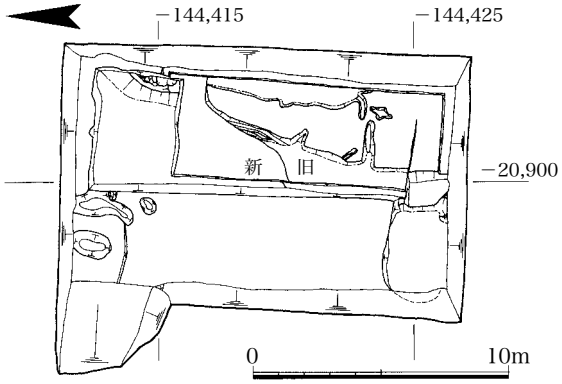
ＨＪ第591次調査　発掘区位置図（1/5,000）

Ⅲ　出土遺物

耕作土などから17世紀以降の土師器、桟瓦、19世紀以降の磁器、時期不明の土師器、丸瓦・平瓦の各破片が遺物整理箱１箱出土した。

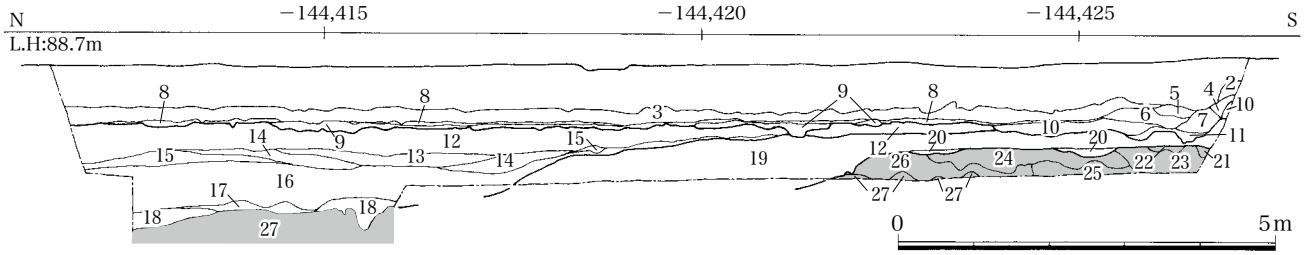
Ⅳ　調査所見

今回の調査地は厚い水成堆積層で覆われる斜面地で、宅地利用された痕跡は確認できなかった。（原田香織）



ＨＪ第591次調査　発掘区遺構平面図（1/300）

発掘区全景（南西から）



1　造成土
2　黒灰色土（腐植土）
3　暗灰色砂質粘土（耕作土）
4　暗灰青色粘土（旧耕作土）
5　3と青灰色土の混合土
6　青灰色砂質粘土
7　緑灰色粘質土と青灰色粘土ブロックの混合土
8　淡灰色砂質土（床土）
9　灰黄色粘砂土
10　青灰色粘砂土
11　青灰色シルト質砂･灰白色砂
12　青灰色粘土･砂･シルトの細かい互層
13　白灰色砂
14　灰白色砂
15　青灰色シルト･白灰色砂の互層
16　青灰色粘土･灰白色砂薄層の互層
17　青灰色砂質粘土
18　灰色砂
19　青灰色シルト･白灰色砂･灰青色砂の互層
20　灰白色砂･24の互層
21　灰白黄色粘砂土（地山）
22　灰白茶色粘質砂（地山）
23　明茶灰色砂質土（地山）
24　灰白茶色砂質土（地山）
25　灰白茶色砂質シルト（地山）
26　灰白色シルト質砂ブロックと淡灰色粘土･灰白色砂の混合土（地山）
27　白灰色粘土（赤色斑入る）（地山）

ＨＪ第591次調査　発掘区東壁土層図（1/100）

15. 平城京跡（右京四条二坊三坪）の調査　第592次

事 業 名	都跡バンビホーム建設事業	調 査 期 間	平成19年11月12日～12月３日
通 知 者	奈良市長	調 査 面 積	150㎡
調 査 地	奈良市四条大路五丁目６-１	調査担当者	秋山成人

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると、右京四条二坊三坪の北辺中央付近に該当する。過去の近接地の調査には、市ＨＪ第18次調査、市ＨＪ第158次調査がある。この２つの調査成果では、奈良時代の掘立柱列１条・井戸４基を確認しているものの、発掘区の大半で中世の粘土採掘坑が掘削されており、それ以前の奈良時代の遺構が削平され失われていると報告されている。本調査においては、奈良時代の遺構を検出し、坪内の様相を知るとともに、中世粘土採掘坑の形状とその分布範囲を明らかにすることを目的として行った。

Ⅱ　基本層序

発掘区の基本層序は、造成土、黒灰色土（耕作土）、赤灰色土（床土）、淡灰色土、灰褐色土（粗砂含む）、以下地山の黄白色粘土、黒灰色粘土、白色粘土の順である。遺構は黄白色粘土上面で検出した。遺構面の標高は約63.6ｍである。

Ⅲ　検出遺構

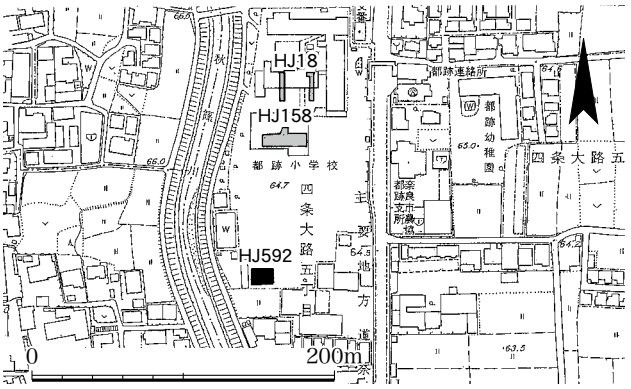
検出した遺構には、奈良時代以前の土坑３基（ＳＫ01～03）、奈良時代の土坑２基（ＳＫ04・05）、鎌倉時代の粘土採掘坑（ＳＫ06）、時期不明の人、牛あるいは馬と考えられる足跡（ＳＸ07）がある。その他に、鎌倉時代以前の自然流路１条がある。遺構の詳細は、検出遺構一覧表にまとめた通りである。

Ⅳ　出土遺物

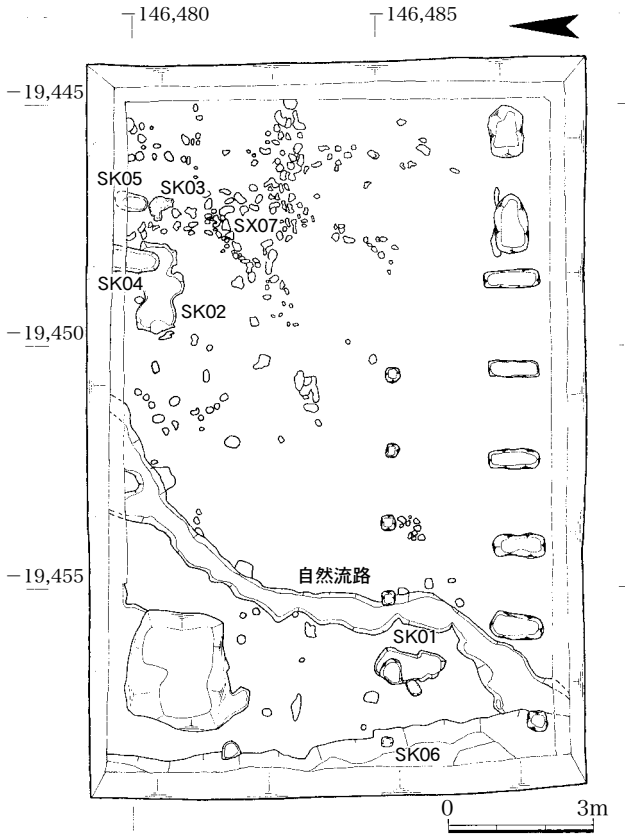
出土遺物は少なく、全て小片である。８世紀の土師器20点・須恵器16点、13世紀の瓦器２点、８世紀の丸瓦２点・平瓦７点、その他不明瓦10点、鉄滓１点がある。

Ⅴ　調査所見

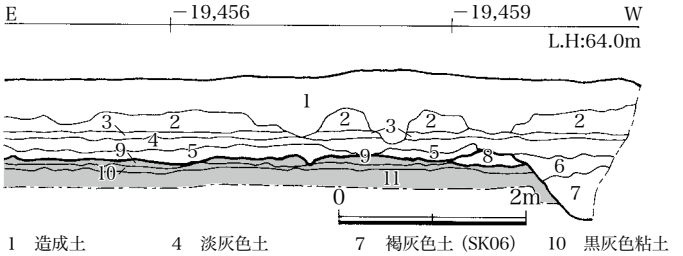
今回、鎌倉時代の粘土採掘坑を発掘区の西辺でのみ検出し、全体に広がるものでなかった。このことから、奈良時代の遺構は粘土採掘坑に削平されていないにもかかわらず希薄であり、三坪の北辺中央付近は、奈良時代の建物の存在しない空閑地であった可能性がある。また、粘土採掘坑は、隣接する周辺地域（西ノ京町、五条町）でも見つかっており、今回及びこれまでの調査成果から、調査地周辺（四条大路五丁目）にまで拡がることが明らかとなった。　（秋山成人）



ＨＪ第592次調査　発掘区位置図（1/5,000）



ＨＪ第592次調査　発掘区遺構平面図（1/150）



1　造成土　4　淡灰色土　7　褐灰色土（SK06）　10　黒灰色粘土
2　黒灰色土(耕作土)　5　灰褐色土(粗砂含む)　8　褐色粗砂（自然流路）　11　暗白色粘土
3　赤灰色土(床土)　6　褐色土(SK06)　9　黄灰色粘土　(9～11地山)

ＨＪ第592次調査　発掘区南壁土層図（1/80）

ＨＪ第592次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	埋土	出土遺物	備考
ＳＫ01	平面不整形	東西0.6 南北1.4	0.9	淡褐色土		ＳＫ01上から掘られた小ピットより須恵器・平瓦小片（８世紀）出土
ＳＫ02	平面不整形	東西1.85 南北0.9	0.95	灰褐色土		ＳＫ04より古い
ＳＫ03	平面不整形	東西0.45 南北0.5	0.15	灰褐色土		
ＳＫ04	平面楕円形	東西0.45 南北0.7	0.19	褐色土	８世紀：土師器小片・須恵器甕	
ＳＫ05	平面楕円形	東西0.35 南北0.7	0.75	褐色土		
ＳＫ06	平面不整形	東西1.10 南北9.6	0.5～0.8	上層　褐色土 下層褐灰色土	８世紀：須恵器小片・土師器皿、丸・平瓦 13世紀：瓦器椀	南北約1.5mごとに彎曲し、肩は急傾斜、底は起伏がある
ＳＸ07	平面不整形	径0.27～0.15	0.02～0.03	褐灰色土		発掘区北東部を中心に広がる足跡
自然流路	断面Ｕ字状	幅0.5～1.0 長さ12 深さ0.5～0.7	0.15	褐色粗砂		発掘区外南西から北東へ延びる 重複関係からＳＫ06より古い

発掘区全景（北東から）

ＳＫ06（西から）

ＳＸ07（北から）

16. 平城京跡（左京五条三坊八坪・東三坊坊間路）の調査　第593次

事 業 名	宅地造成	調 査 期 間	平成19年12月6日～12月26日
届出者名	オーエスハウジング株式会社	調 査 面 積	150㎡
調 査 地	奈良市恋の窪607-1	調査担当者	原田香織

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると左京五条三坊八坪東辺と東三坊坊間路にあたる。調査地の北東側に建つマンションの事前調査（県1995年）では、奈良時代後半から平安時代初期頃の遺物を含む河川跡を検出しており、この河川が当地に及んでいる可能性が考えられた。今回の調査は、宅地造成地内の道路予定箇所に南北30m、東西5m、面積150㎡の発掘区を設定し、東三坊坊間路の様相確認を主な目的として実施した。

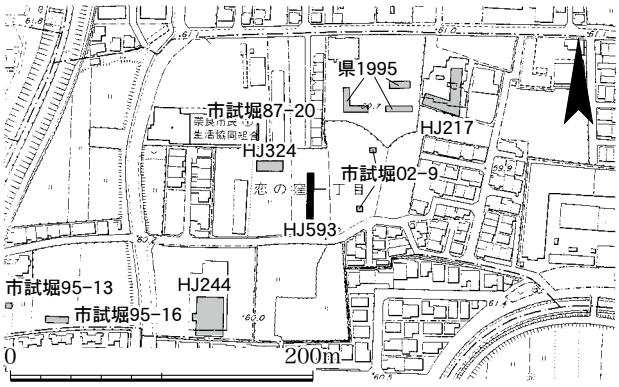
Ⅱ　基本層序

発掘区における基本層序は、上から現代の耕作土、旧耕作土、湿地堆積層、旧耕作土、旧床土と続き、現地表下0.5～0.7mで奈良時代の遺構面（標高58.6～58.7m）となる。遺構面は、黄灰色砂質粘土・シルト層などの旧河川堆積層の上面である。この旧河川堆積層は本流部分を除くと0.25m程の厚さで、その下が暗茶褐色粘土の地山となる。なお、旧河川埋土に古墳時代の土器片や炭化物が含まれていることが、上面や奈良時代の遺構を掘削した際に確認できた。

Ⅲ　検出遺構

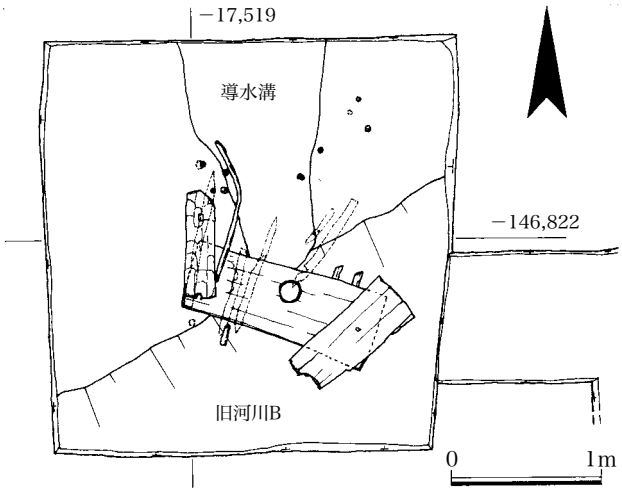
古墳時代（下層）の遺構　奈良時代の遺構面となっていた旧河川の埋土を部分的に掘削したところ、2時期の流路が重複していることが判明した。古い流路跡を旧河川A、新しい流路跡を旧河川Bとする。旧河川A・Bは共に東北東から西南西に流れ、その深さは奈良時代の遺構面から1.0mである。旧河川Aの埋土からは出土遺物がなく、時期を特定することができない。旧河川A埋没後、旧河川Bから北北西方向に延びる導水用の溝と両

H J第593次調査　下層調査区堰検出状態（西から）

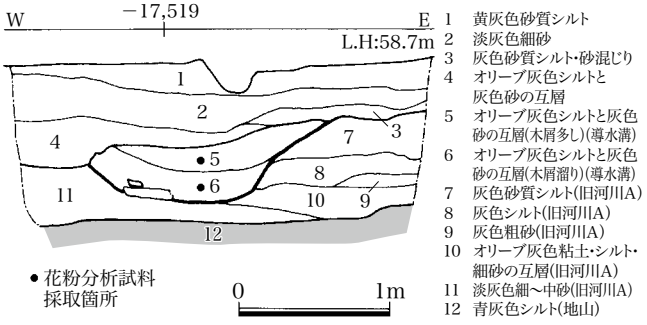


H J第593次調査　発掘区位置図（1/5,000）

者の接続箇所に堰が設けられていた。堰板とそれを支える杭や板は、旧河川B側にそのまま倒れた状態で出土した。堰板の中央やや下寄りに直径12cmほどの穴が開けられている。旧河川Bの埋土から古墳時代前半の土師器（布留式土器）高杯・小型壺や桃の種が出土した。なお、導水溝の埋土から土壌試料を採取して花粉分析を実施したところ（159頁参照）、その上下層で花粉組成の



H J第593次調査　下層調査区堰検出状態平面図（1/50）



H J第593次調査　下層調査区北壁土層図（1/50）

変化が認められ、集落域や水田など人的環境が拡大した可能性が推定された。

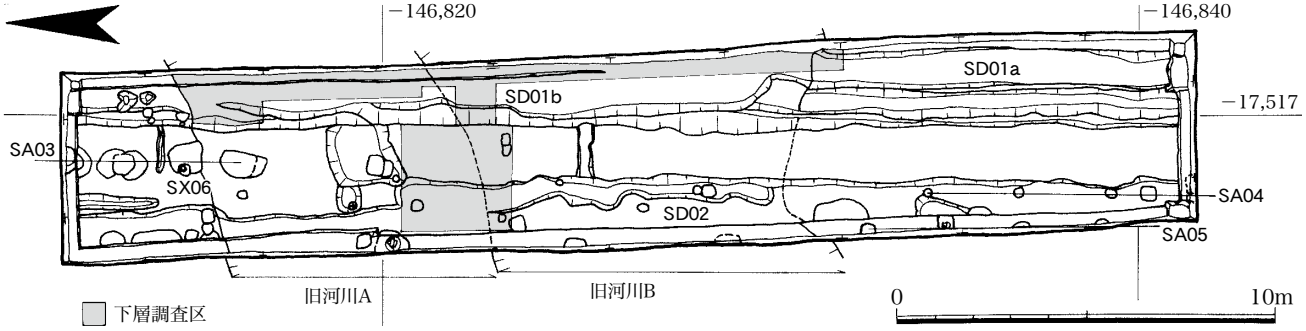
奈良時代の遺構　東三坊坊間路の西側溝（ＳＤ01a・ｂ）とこれに平行する溝（ＳＤ02)、建物か塀の一部とみられる掘立柱列３条(ＳＡ03～05)、土器埋納遺構(ＳＸ06)、土坑、奈良時代よりも時期の下る耕作溝などがある。以下、主なものについて述べる。

ＳＤ01a・ｂ　東三坊坊間路西側溝で、新旧２時期ある。旧溝ＳＤ01aは発掘区南1/３のみで検出した。幅が狭く、両肩は垂直に掘り込まれて深い。これを人為的に埋め戻した後、重なる位置に新溝ＳＤ01ｂが掘られている。断面形は皿状で浅い。「美濃国」刻印の須恵器杯１点は、ａ・ｂ両溝の埋土から破片で出土し接合した。

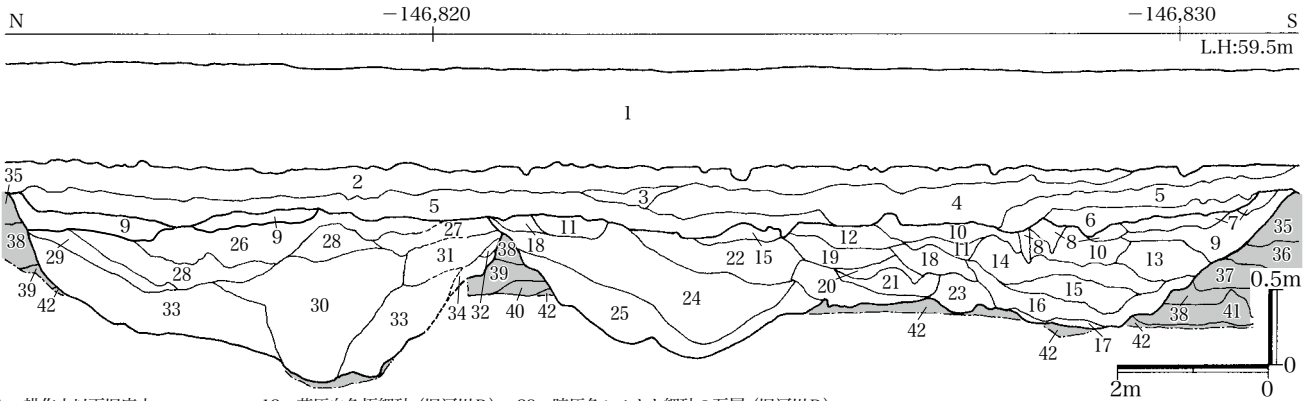
ＳＤ02　東三坊坊間路西側溝（ＳＤ01）の西側に２m前後離れて平行する溝である。宅地内の排水溝と考えられるが、流水の痕跡はみられず人為的に埋め戻されており、土器などの遺物を多量に含む。この溝の埋没後に掘立柱列ＳＡ04・05が掘削されている。

ＳＡ03　発掘区北端で検出した３間以上の掘立柱列

発掘区全景（北から）



HJ第593次調査　発掘区遺構平面図（1/200）



1　耕作土以下旧床土（南壁土層図１～７参照）
2　橙灰色砂質シルト（SD01）
3　暗橙色砂質シルト（SD01）
4　明橙灰色砂質シルト（SD01）
5　暗橙灰色砂質シルト（SD01）
6　黄橙色砂質シルト（SD01）
7　淡褐灰白色極細砂（旧河川Ｂ）
8　灰色細砂（旧河川Ｂ）
9　灰白～灰色極細砂（旧河川Ｂ）
10　灰白色細砂（旧河川Ｂ）
11　灰白色極細砂（旧河川Ｂ）
12　茶灰白色極細砂（旧河川Ｂ）
13　灰白色シルト質細砂・橙色細砂混じり（旧河川Ｂ）
14　灰色粘土（旧河川Ｂ）
15　灰白色中砂（旧河川Ｂ）
16　暗灰色シルト（旧河川Ｂ）
17　灰色中砂（旧河川Ｂ）
18　灰白色極細砂（旧河川Ｂ）
19　灰色粘土（旧河川Ｂ）
20　灰色極細砂（旧河川Ｂ）
21　灰色シルト（旧河川Ｂ）
22　明灰白色細砂（旧河川Ｂ）
23　暗灰色シルトと細砂の互層（旧河川Ｂ）
24　灰白色細砂（木屑混じり）（旧河川Ｂ）
25　灰白色中～粗砂とオリーブ灰色粘土の互層（木屑・葉多し）（旧河川Ｂ）
26　灰色粘土（旧河川Ａ）
27　灰色シルト質砂（旧河川Ａ）
28　灰色中砂（旧河川Ａ）
29　灰色極細砂（旧河川Ａ）
30　灰白色細～粗砂（木屑含む）（旧河川Ａ）
31　灰色砂質シルト（旧河川Ａ）
32　灰色砂（旧河川Ａ）
33　暗灰色シルトと細砂の互層（木屑含む）（旧河川Ａ）
34　白色砂と38・39ブロックの混合土（旧河川Ａ）
35　褐灰色シルト（地山）
36　灰色砂質シルト（地山）
37　黄白色極細砂（地山）
38　黄白～青灰色粘土（地山）
39　暗灰色粘土（地山）
40　暗灰色シルト質粘土（地山）
41　暗灰色細砂（地山）
42　青灰色粘土（地山）

ＨＪ593次調査　発掘区東壁土層図（縦1/50　横1/100）

である。それぞれの柱穴は２回以上掘りなおされており、同じ位置で建て替えが行われている。塀などの閉塞施設が想定されるＳＤ01とＳＤ02の間にあり、坪の南北1/4付近にあたることなどから門の可能性がある。

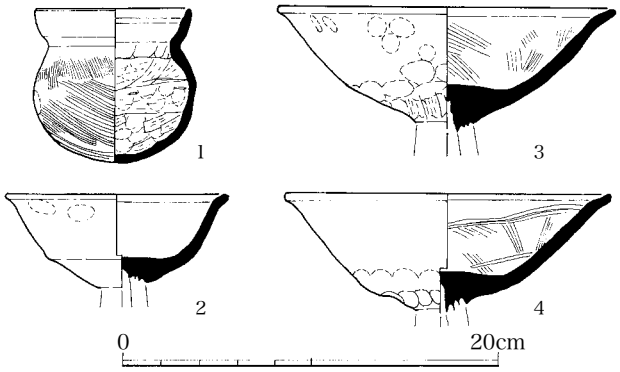
ＳＡ04・05　発掘区南側の西壁沿いで検出した３間以上の掘立柱列である。ＳＡ04・05ともに発掘区外西へ続く掘立柱建物の一部となる可能性もある。

ＳＸ06　ＳＡ03の南から２番目の柱穴を埋め戻した後掘られた土器埋納遺構である。土坑中央に口縁部を欠失する須恵器壺Ｌがほぼ正立して埋まっており、地鎮を目的とした遺構の可能性がある。

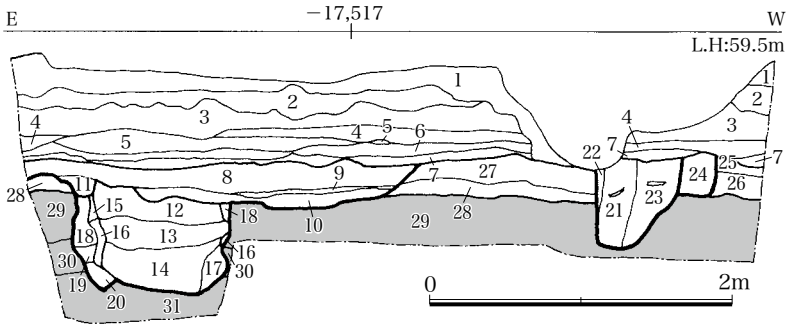
Ⅳ　出土遺物

今回の調査では、古墳時代の旧河川Ｂや奈良時代の各遺構、遺構面直上の遺物包含層から、古墳時代の土器（土師器）・木製品・桃の種、８世紀の土器（土師器・須恵器）・瓦類（軒平瓦6664Ｃ１点・平瓦・塼）・柱根が、遺物整理箱で合わせて30箱分出土した。　（原田香織）

古墳時代の土器　旧河川Ｂから出土した土師器甕・小型丸底壺１点・高杯６点について記す。このうち、甕は体部の小片のみである。小型丸底壺はほぼ完形。高杯は５点が杯部、１点が脚部で、そのうち図示したものを含む杯部４点は比較的残存状態が良い。以下、主な土器の



ＨＪ第593次調査　旧河川Ｂ出土古墳時代土器（1/4）



1　暗灰茶色粘質土（耕作土）
2　灰色粘土（床土）
3　淡灰白色シルト質粘土（湿地堆積層）
4　淡灰色砂質粘土（旧耕作土）
5　明灰白色粘土（旧耕作土）
6　淡灰色粘砂土（旧床土）
7　淡黄灰色粘砂土（旧床土）
8　灰茶色砂質粘土（ＳＤ01ｂ）
9　灰色粘砂（ＳＤ01ｂ）
10　灰褐色粘砂土（ＳＤ01ｂ）
11　灰茶色砂質粘土（SD01ａ）
12　茶灰色粘砂土（SD01ａ）
13　灰褐色粘土・砂混じり（SD01ａ）
14　灰色粘土・砂混じり（SD01ａ）
15　灰茶色粘質土（SD01ａ）
16　暗灰色粘土（SD01ａ）
17　灰色砂質粘土（SD01ａ）
18　29ブロック（SD01ａ）
19　30ブロック（SD01ａ）
20　灰色シルト（SD01ａ）
21　灰茶色砂質粘土と27の混合土（柱穴抜取穴）
22　灰色砂質粘土と27・28の混合土（柱穴掘形）
23　灰色砂質粘土と27・29小ブロックの混合土（柱穴掘形）
24　27・29小ブロックと灰色粘砂の混合土（SA04柱穴）
25　灰茶褐色砂質土（SD02）
26　灰黄色砂質粘土・炭混じり（SD02）
27　黄灰色シルト（旧河川あふれ）
28　灰色砂（旧河川あふれ）
29　暗茶褐色粘土（地山）
30　暗灰褐色砂質粘土（地山）
31　白黄灰色シルト（地山）

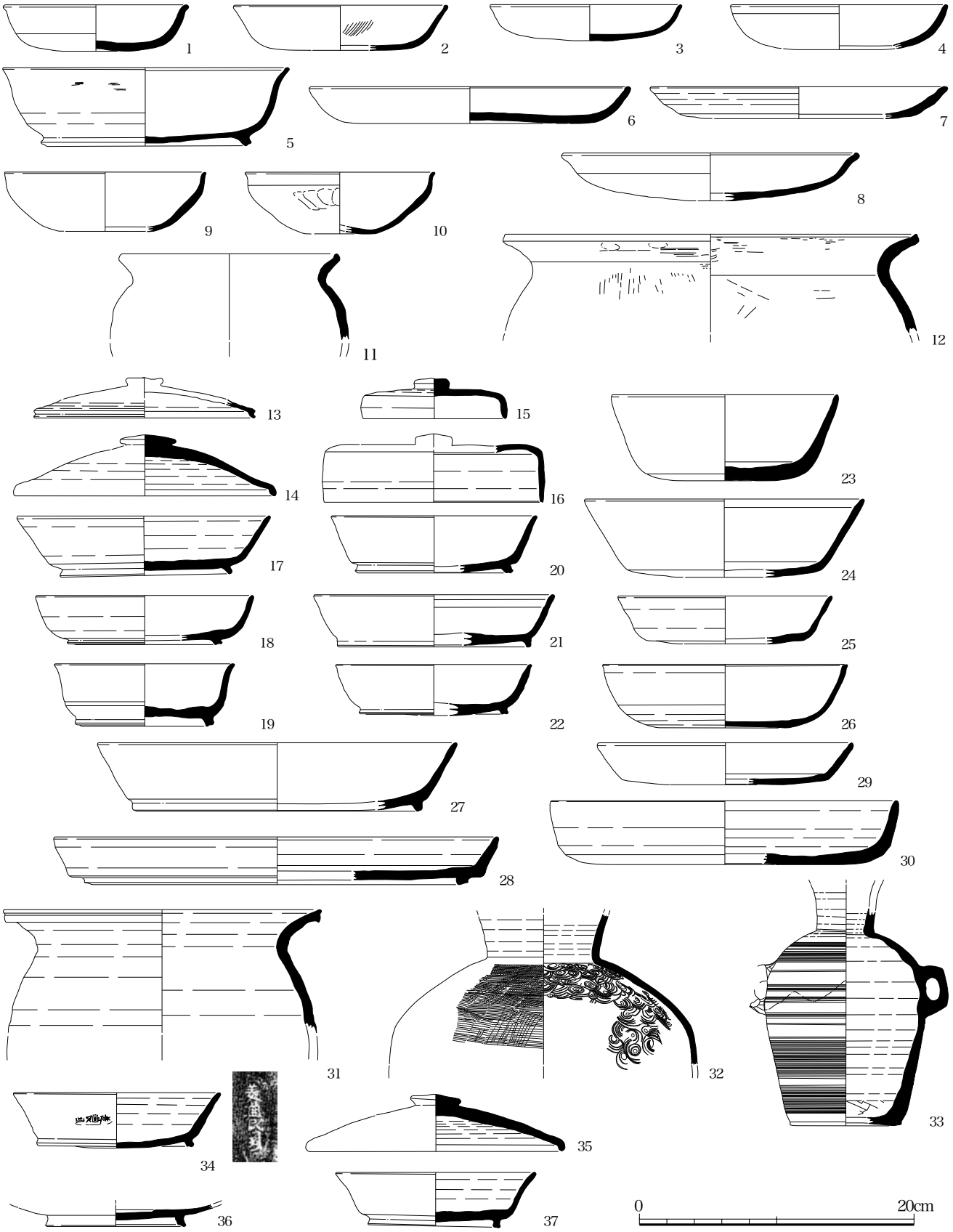
ＨＪ593次調査　発掘区南壁土層図（1/50）

ＨＪ593次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	
ＳＡ03	南北	３以上	4.5以上		1.5		柱穴の深さ最深0.65m、他0.25m。２～３回建替え。ＳＸ06より古い。
ＳＡ04	南北	３以上	7.2以上		2.4		柱穴の深さ0.5～0.6m。ＳＤ02より新しい。
ＳＡ05	南北	３以上	6.3以上		2.1		柱穴の深さ0.15～0.25m。ＳＤ02より新しい。

遺構番号	平面形	平面規模（m）	深さ（m）	主な出土遺物	備考
ＳＤ01a	南北溝	長さ10.0以上×幅1.0	0.45～0.65＊	８世紀前半：「美濃国」刻印須恵器杯、８世紀後半：土師器杯か皿・皿・高杯・壷・甕、須恵器杯・壷・甕、８世紀：平瓦	最深部Ｙ:−17,516.6～−17,516.7mで推移。
ＳＤ01b	南北溝	長さ30.0以上×幅2.6以上	0.3～0.35	８世紀：土師器杯・皿・高杯・壷・甕・盤・竈、須恵器杯（「美濃国」刻印１点含む）・皿・杯蓋・椀・壷・壷蓋・鉢・甕・横瓶、製塩土器、土馬、瓦製円盤、丸・平瓦	東三坊坊間路西側溝。
ＳＤ02	南北溝	長さ30.0以上×幅1.8以上	0.2～0.25	８世紀中頃：土師器杯・皿・椀・高杯・壷・甕・竈、須恵器杯・杯蓋・皿・壷・壷蓋・甕、平瓶、製塩土器、土馬、圏脚円面硯、８世紀：丸・平瓦	溝心Ｘ:−146,840、Ｙ:−17,515.8m。ＳＡ04・05より古い。
ＳＸ06	隅丸方形	東西0.3×南北0.3	0.2	壷Ｌ（口縁部欠失）	ＳＡ03より新しい。

＊ＳＤ01b底面からの深さ



ＨＪ第593次調査　出土土器（1/4「美濃国」刻印は1/2・33は1/8）

特徴を記す。

小型丸底壷（1）は、器高8.2㎝、口径8.4㎝、体部最大径8.6cm。口縁部と頸部は内・外面とも横方向のナデ調整が施され、頸部内面には指頭圧痕が残る。体部と底部の外面はハケメ調整で、肩部は縦方向、それより下は斜め方向で後者が先に施される。肩部から体部中位までの内面は主に横方向のケズリ調整が施され、部分的に指頭圧痕が残る。体部下位と底部には板状工具による

ナデ調整が施されるが、指頭圧痕がかなり残る。

高杯の杯部のうち、1点は体・底部の境の外面に明瞭な稜を形成するが、残りはほとんど稜をなさない。後者は、口縁端部がわずかに外反し、体・底部の境の内面を強く押圧する。脚部との接合は、底部外面に付した粘土塊で脚軸部を包み込むようにしており、脚軸部の先端内面には棒を抜き取った痕跡が残る。

2は小型のもので、杯部高5.0㎝、口径11.8㎝。器面は平滑で、ナデ調整とみられる。3は杯部高6.5㎝、口径18.0㎝。口縁部と体部の外面はナデ調整が施され、部分的に指頭圧痕が残る。底部外面には板状工具によるナデ調整が施されるが、指頭圧痕がかなり残る。口縁部の内面はナデ調整。体部と底部の内部はハケメ調整で、体部下半から底部までが先に施される。4は、杯部高6.5㎝、口径17.4㎝。成形や調整の特徴は3とほぼ同様であるが、体部内面に粗い横方向のミガキ調整が施され、脚軸部との接合部付近の外面に強い指頭圧痕がみられる。

なお、1点ある高杯脚部は、杯部底面から中空の脚軸部内に円錐状の粘土塊を充填する状態が把握できる。

これらは、布留式でも比較的新しい様相を示すものである。（安井宣也）

奈良時代の土器　ここでは主にSD02から出土した土器について記すが、「美濃国」刻印の土器や包含層から出土した遺物も一部図示した。

ＳＤ02から出土した土器には土師器杯Ａ（1・2）・Ｂ（5）、皿Ａ（3・4・6～8）・Ｂ、椀Ｃ（9・10）、壷、甕（11～12）、須恵器杯蓋（13・14）、杯Ａ（23～25）、Ｂ（17～22）、Ｅ（26）、皿Ａ（29・30）・Ｂ（27・28）、壷蓋（15・16）、壷（33）、甕（31・32）がある。

土師器　杯Ａ（1）は、口縁端部を外方へつまみだす。河内産の可能性が考えられる。杯Ｂ（5）は外面をヘラミガキしている。皿Ａは6・7の底部が平底で、口縁端部を丸く収めるが、8は丸底状で、口縁部が外反し、口縁端部を内側にやや肥厚させている。7は口縁部にやや強いヨコナデを加えている。

須恵器　杯蓋13は茶褐色の焼き上がりで、粘土紐の凹凸が明瞭に残る。14は灰白色で硬質に焼き上がり、頂部外面をロクロケズリしている。15の壷蓋は口縁端部を丸く収める。頂部内面に暗灰緑色の釉がかかる。24の杯Ａは灰白色で軟質の焼き上がりである。底部が厚く、深い器形である。26の杯Ｅは口縁端部を内傾させて面をつくる。外面体部下半はロクロケズリで、胎土中の黒色微粒子が流れたようになっている。

34の杯ＢはＳＤ01から出土した。体部外面に横方向に「美濃国」の刻印がある。刻印は老洞窯分類[1)]のＡ-Ⅱ-2類にあたるものであろう。35～37は包含層出土の土器であるが、形態等の特徴からみて東海地方産と考えられる須恵器である。これらのように刻印土器以外でも、形態や胎土、焼成具合などからみて東海産と思われるものがあり、13・15・17・36は尾張産、14・35・37は美濃産であろう。時期については、尾張産の杯Ｂが高蔵寺2号窯式（Ｃ－2）～岩崎25号窯式（Ⅰ－25）期、美濃産が刻印土器や蓋の形態などから、老洞1～2号窯期のものでないかと思われる。これらの他にも和泉産以外と思われる須恵器が目立つ。18・19・22・28・30・31・33がそれに該当するが、産地は明確にできない。

ＳＤ02から出土した土器の時期については、土師器の残存状況が悪く、調整手法がよくわからないこともあり、詳細に特定することが難しい。しかし、形態や一段の細く間隔の短い斜放射暗文がみられること、外面をヘラミガキしている点、須恵器も杯Ｅや法量の大きな杯、皿がみられることなどから、奈良時代中頃を中心とし、若干の幅を持たせて考えておきたい。そこで、平城京での尾張・美濃産の須恵器出土状況をみると、Ｃ－2・Ⅰ－25窯式期、老洞1・2号窯期の須恵器は平城宮土器Ⅰ～Ⅲの中に出土例が知られ[2)]、これによっても時期幅はあるものの大きな齟齬はないように思われる。

ＳＤ01・02から出土した尾張・美濃産の須恵器は平城京における東海産の土器の年代、尾張と美濃との併行関係を考える上で、貴重な資料といえよう。（池田裕英）

Ⅴ　調査所見

左京五条三坊八坪東辺における宅地利用の様相については、ＳＤ02を埋め立てて塀あるいは建物を築いていることから、ある時期に宅地の東を限る閉塞施設の改変や、閉塞方法を変更した可能性がある。これに東三坊坊間路西側溝（ＳＤ01）の掘りなおしが関連するものであるかは別に検討を要する。

また、古墳時代前半頃の旧河川とそれに接続する導水施設（溝と堰）を検出した。調査地北側周辺に、同時代の農耕地あるいは集落が拡大した可能性が花粉分析の結果からも推定できる。今後、周辺で調査を行う際には、この点について十分留意する必要があろう。（原田香織）

1）高木　洋「第Ⅴ章　出土遺物の検討　4美濃国刻印須恵器」『老洞古窯跡群発掘調査報告書』岐阜市教育委員会1981

2）金田明大ほか「宮都出土の東海産須恵器」『須恵器生産の出現から消滅』第1分冊発表要旨　東海土器研究会2000

17. 平城京跡（右京四条一坊二坪）の調査　第 594 次

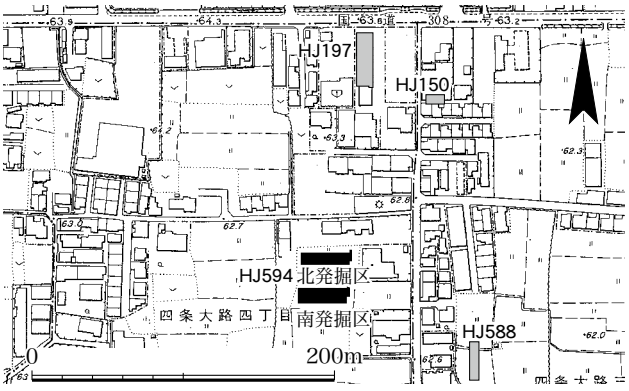
事 業 名	共同住宅新築	調 査 期 間	平成20年１月10日～２月21日
届出者名	個人	調 査 面 積	612㎡
調 査 地	奈良市四条大路四丁目83、85-1、86	調査担当者	大窪淳司・大原瞳

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京四条一坊二坪の北西部に相当し、当坪内では初めての調査となる。調査地周辺では、朱雀大路で市ＨＪ第 150・328・588 次、北側の一坪で市ＨＪ第 197 次の各調査が実施されており、奈良時代の掘立柱建物や溝を確認している[1)]。今回の調査は二坪内の土地利用の様相把握を主目的として、北発掘区と南発掘区の２箇所を設定した。また、市ＨＪ第 197・150 次調査では弥生時代後期の竪穴住居・溝等を確認しており、弥生時代の遺構確認も目的として、調査を実施した。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本的な層序は、北発掘区では、現代の耕作土（0.2 m）の下に旧耕作土および旧床土（0.1 m）が続き、現地表下約 0.3 mで橙黄色ないし橙褐色砂質シルトの地山となる。南発掘区では、旧床土の下に橙黄色砂質シルト（0.2 m）が続き、さらに西半では弥生時代後期後半の土器や焼土・炭化物を包含する黄褐白色シルト（0.1 m）が続いて、現地表下 0.5 ～ 0.6 mで地山となる。遺構面の標高は、北発掘区では 62.2 ～ 62.3 m、



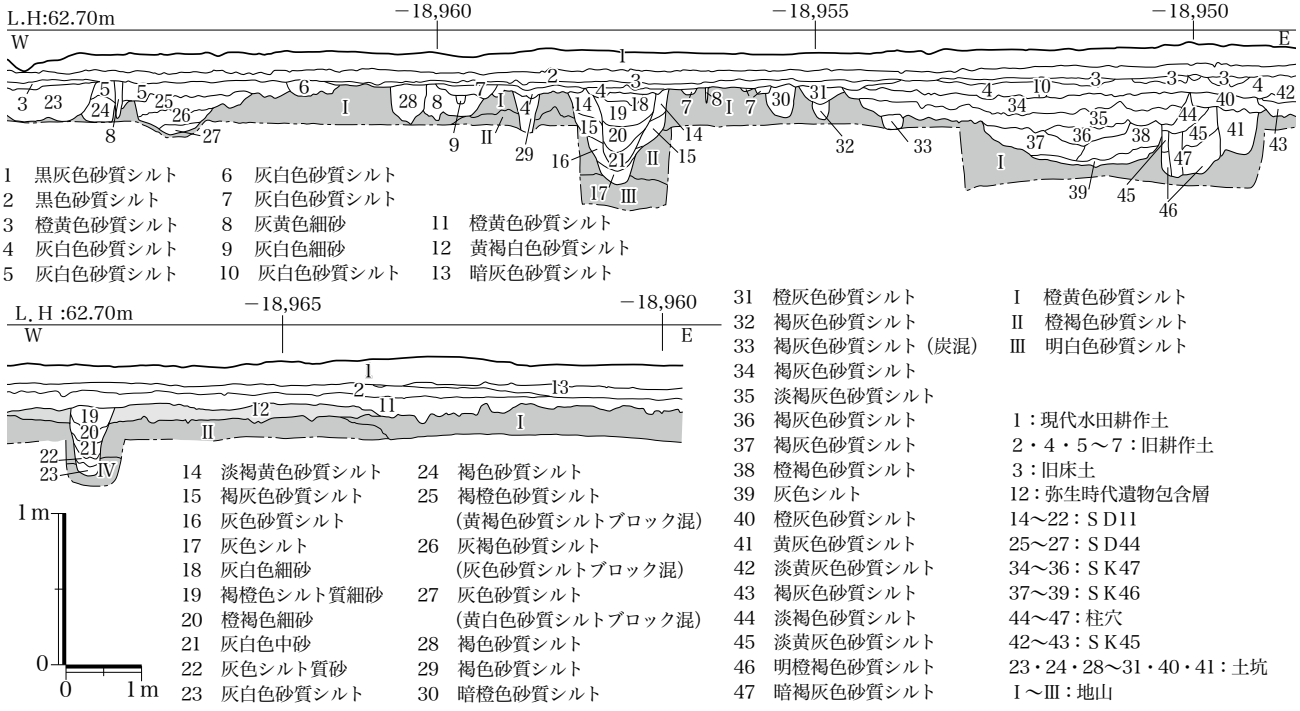
ＨＪ第594次調査　発掘区位置図（1/5,000）

南発掘区では 62.0 ～ 62.2 m、弥生時代遺物包含層上面では 62.0 ～ 62.1 mであり、いずれも北東から南西へ緩やかに下がる。遺構検出は基本的に地山上面で行ったが、弥生時代遺物包含層の広がる南発掘区西半では、包含層上面と地山上面の２回に分けて調査を進めた。

Ⅲ　検出遺構

弥生～奈良時代の遺構を検出した。検出遺構の規模等は一覧表にまとめた。以下、主要な遺構について述べる。

奈良時代以前の遺構　掘立柱列６条（ＳＡ 01 ～ 06）、土坑４基（ＳＫ 15 ～ 18）、溝８条（ＳＤ 07 ～



1　黒灰色砂質シルト
2　黒色砂質シルト
3　橙黄色砂質シルト
4　灰白色砂質シルト
5　灰白色砂質シルト
6　灰白色砂質シルト
7　灰白色砂質シルト
8　灰黄色細砂
9　灰白色細砂
10　灰白色砂質シルト
11　橙黄色砂質シルト
12　黄褐白色砂質シルト
13　暗灰色砂質シルト
14　淡褐黄色砂質シルト
15　褐灰色砂質シルト
16　灰色砂質シルト
17　灰色シルト
18　灰白色細砂
19　褐橙色シルト質細砂
20　橙褐色細砂
21　灰白色中砂
22　灰色シルト質砂
23　灰白色砂質シルト
24　褐色砂質シルト
25　褐橙色砂質シルト（黄褐色砂質シルトブロック混）
26　灰褐色砂質シルト（灰色砂質シルトブロック混）
27　灰色砂質シルト（黄白色砂質シルトブロック混）
28　褐色砂質シルト
29　褐色砂質シルト
30　暗橙色砂質シルト
31　橙灰色砂質シルト
32　褐灰色砂質シルト
33　褐灰色砂質シルト（炭混）
34　褐灰色砂質シルト
35　淡褐灰色砂質シルト
36　褐灰色砂質シルト
37　褐灰色砂質シルト
38　橙褐色砂質シルト
39　灰色シルト
40　橙灰色砂質シルト
41　黄灰色砂質シルト
42　淡黄灰色砂質シルト
43　褐灰色砂質シルト
44　淡褐色砂質シルト
45　淡黄灰色砂質シルト
46　明橙褐色砂質シルト
47　暗褐灰色砂質シルト

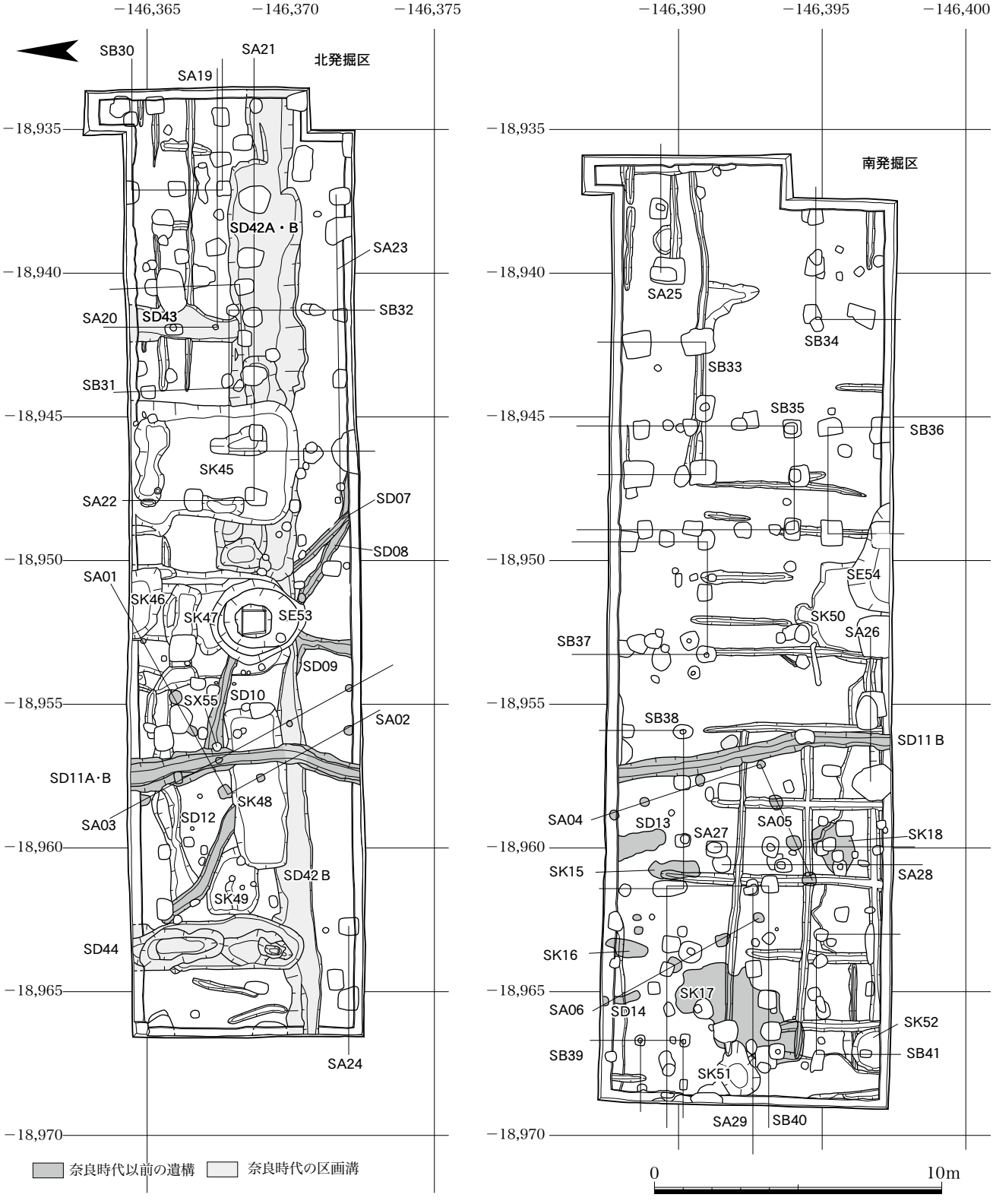
Ⅰ　橙黄色砂質シルト
Ⅱ　橙褐色砂質シルト
Ⅲ　明白色砂質シルト

1：現代水田耕作土
2・4・5～7：旧耕作土
3：旧床土
12：弥生時代遺物包含層
14～22：ＳＤ11
25～27：ＳＤ44
34～36：ＳＫ47
37～39：ＳＫ46
44～47：柱穴
42～43：ＳＫ45
23・24・28～31・40・41：土坑
Ⅰ～Ⅲ：地山

ＨＪ第594次調査　上段：北発掘区北壁土層断面図、下段：南発掘区北壁土層断面図（垂直1/50、水平1/100）

14）がある。これらはいずれも弥生時代遺物包含層上面にて検出した。ＳＡ01～06は国土方眼方位に対して北で西へ振れる。ＳＡ01の西端はＳＡ02の北端と、ＳＡ04の南端はＳＡ05の東端と接続してＬ字形に配置する。ＳＡ04の埋土から弥生時代後期後半の甕が出土した。ＳＫ15～18は弥生時代遺物包含層同様、埋土に炭化物や焼土を多量に包含し、ＳＫ18から弥生時代後期の甕片等が出土した。

ＳＤ11は掘り直されており、古い溝をＳＤ11Ａ、新しい溝をＳＤ11Ｂとした。南発掘区はＳＤ11Ｂのみがある。溝底の勾配は北から南へ緩やかに下っていることから、南流していたものと考える。いずれも水成堆積層で構成されており、埋土の状況からＳＤ11ＡよりＳＤ11Ｂの方が水流の勢いが強かったことがうかがえ



ＨＪ第594次調査　発掘区遺構平面図（1/200）

ＨＪ第594次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備考
		桁行(間)×梁行(間)	(m)	(m)	桁行	梁行	
ＳＡ01	E29°N	3以上	6.0以上		北東から2.4-1.2-2.4		柱穴の深さ0.2～0.4m。ＳＫ47・48より古い。
ＳＡ02	N29°W	2以上	4.8以上		北西から1.3-3.5		柱穴の深さ0.2～0.4m。ＳＫ48より古い。
ＳＡ03	N29°W	4以上	8.5以上		北西から1.5-1.5-3.0-2.5		柱穴の深さ0.2～0.3m。ＳＤ11・42Ｂより古い。
ＳＡ04	N18°18′58″W	3以上	5.4以上		北西から1.1-2.1-2.2		柱穴の深さ0.2～0.5m。弥生時代後期後半の甕出土
ＳＡ05	E23°43′55″N	3	4.3		北東から1.5-1.5-1.3		柱穴の深さ0.2～0.5m。
ＳＡ06	N30°33′32″W	3以上	6.3以上		北西から2.8-1.9-1.6-2.2		柱穴の深さ0.2～0.5m。
ＳＡ19	東西	2以上	6.0以上		3.0等間		柱穴の深さ0.3～0.6m。ＳＤ43より古い。
ＳＡ20	南北	1以上	1.5以上		1.5		柱穴の深さ0.3m。ＳＤ43より古い。
ＳＡ21	東西	6以上	13.7以上		西から2.1-2.1-2.1-2.1-2.1-3.2		柱穴の深さ0.3～0.6m。ＳＫ45・ＳＤ42より古い。
ＳＡ22	南北	2以上	4.2以上		2.1等間		柱穴の深さ0.3m。ＳＫ45より古い。
ＳＡ23	東西	3	10.2		西から3.6-2.4-4.2		柱穴の深さ0.4～0.7m。
ＳＡ24	東西	1以上	2.4以上		2.4		柱穴の深さ0.2～0.7m。発掘区外南西に続く南北棟建物の可能性あり。
ＳＡ25	東西	1以上	2.4以上		2.4		柱穴の深さ0.4m。
ＳＡ26	東西	2	4.8		2.4等間		柱穴の深さ0.6～0.7m。ＳＫ50より古い。
ＳＡ27	南北	3以上	5.4以上		1.8等間		柱穴の深さ0.4～0.7m。坪内の東西1/6ラインに位置する。ＳＡ28・ＳＫ18より新しい。
ＳＡ28	南北	2以上	4.2以上		2.1等間		柱穴の深さ0.6m。坪内の東西1/6ラインに位置する。ＳＡ27より古く、ＳＫ18より新しい。
ＳＡ29	東西	2以上	5.4以上		2.7等間		柱穴の深さ0.2～0.5m。ＳＫ17より新しい。
ＳＢ30	東西	1以上×2	2.4以上	3.4	2.4	1.7等間	柱穴の深さ0.4～0.6m。
ＳＢ31	南北	1以上×2	2.4以上	3.0	2.4	1.5等間	柱穴の深さ0.2～0.4m。ＳＤ42より古い。
ＳＢ32	南北	1以上×2	3.0以上	4.8	3.0	2.4等間	柱穴の深さ0.2～0.3m。ＳＫ45・ＳＤ42より古い。
ＳＢ33	南北	1以上×2	2.4以上	4.8	2.4	2.4等間	柱穴の深さ0.4～0.7m。
ＳＢ34	不明	2以上×1以上	3.6以上	1.8以上	1.8等間	1.8	柱穴の深さ0.5m。
ＳＢ35	南北	3以上×2	5.4以上	3.6	1.8等間	1.8等間	柱穴の深さ0.2～0.5m。ＳＢ37より新しい。
ＳＢ36	南北	1以上×1	1.8以上	3.6	1.8等間	3.6	柱穴の深さ0.6m。妻柱無。ＳＥ54より新しい。
ＳＢ37	南北	2以上×2	1.8以上	4.2	1.8等間	2.1等間	柱穴の深さ0.2～0.5m。ＳＢ35より古い。
ＳＢ38	東西	3×1以上	5.4	2.1以上	1.8等間	2.1	柱穴の深さ0.3m。ＳＤ11より新しい。
ＳＢ39	不明	1以上×1以上	1.5以上	1.8以上	1.5	1.8	柱穴の深さ0.2～0.3m。発掘区外北西に続く南庇付掘立柱建物もしくは総柱建物の可能性あり。
ＳＢ40	東西	3以上×1	5.4以上	3.6	1.8等間	3.6	柱穴の深さ0.3～0.6m。妻柱無。ＳＫ17より新しい。
ＳＢ41	南北	1以上×2	1.8以上	4.2	1.8	2.1等間	柱穴の深さ0.4～0.7m。ＳＫ52より古い。

遺構番号	長さ（m）	幅（m）	深さ（m）	主な出土遺物	備考
ＳＤ07	3.3以上	0.2～0.3	0.1	出土遺物無	ＳＤ42より古く、ＳＤ08より新しい。
ＳＤ08	5.0以上	0.3～0.4	0.1	出土遺物無	ＳＤ07・42、ＳＥ53より古い。
ＳＤ09	2.1以上	0.4～0.5	0.05	出土遺物無	ＳＤ42Ｂ、ＳＥ53より古い。
ＳＤ10	3.2	0.3～0.5	0.1	出土遺物無	ＳＫ47、ＳＥ53、ＳＸ55より古い。
ＳＤ11Ａ	8.4以上	0.7～1.2	0.4～0.6	出土遺物無	ＳＤ42Ｂ、ＳＫ48より古く、ＳＡ03より新しい。
ＳＤ11Ｂ	8.4以上	0.7～0.8	0.4～0.5	時期不明の須恵器	ＳＤ42Ｂ、ＳＫ48より古く、ＳＤ11Ａより新しい。
ＳＤ12	4.5	0.4～0.5	0.05	出土遺物無	ＳＤ44、ＳＫ48・49より古い。
ＳＤ13	2.2以上	0.7	0.25	出土遺物無	
ＳＤ14	1.0以上	0.3	0.1	出土遺物無	
ＳＤ42Ａ	14.7	2.2～2.8	0.2	８世紀中頃～後半：土師器杯・皿・甕・壷・高杯・鉢、須恵器杯・皿・杯蓋・甕・壷、線刻土器、竈、軒平瓦（6641Ｆ型式）・平瓦・丸瓦	坪内の南北1/4ラインに位置することから、坪内区画溝と考える。ＳＤ42ＡはＳＤ43と接続する。ＳＫ45～47より古く、ＳＡ21、ＳＢ31・32より新しい。ＳＤ42ＢはＳＤ44と接続する。ＳＫ45～48より古く、ＳＡ21、ＳＤ42Ａ、ＳＥ53より新しい。
ＳＤ42Ｂ	33.0以上	0.5～1.9	0.2～0.3		
ＳＤ43	4.0以上	0.8～1.5	0.1～0.3	８世紀：土師器・須恵器・竈、平瓦・丸瓦	ＳＤ42Ｂに接続。ＳＡ19・20より新しい。
ＳＤ44	6.0以上	1.4～1.9	0.2～0.4	８世紀後半：土師器杯・皿・椀・甕・高杯、須恵器杯・皿・杯蓋・甕・壷、奈良三彩蓋？、墨書土器、製塩土器、線刻土器、竈、平瓦・丸瓦・磚	ＳＤ42Ｂと接続。ＳＫ49より古い。

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	主な出土遺物	備考
ＳＫ15	楕円形	長径1.8×短径0.7	0.1	出土遺物無	
ＳＫ16	不定形	長径5.0×短径2.8	0.1	出土遺物無	
ＳＫ17	楕円形	長径2.0×短径1.2	0.65	弥生時代の甕？・石斧	ＳＡ29、ＳＢ40、ＳＫ51より古い。
ＳＫ18	楕円形	長径1.5×短径0.6	0.5	弥生時代後期の甕・石斧	ＳＡ27・28より古い。
ＳＫ45	長方形	東西4.4×南北5.8以上	0.2	８世紀後半～末頃：土師器皿・椀・甕、須恵器杯・皿・杯蓋・甕・壷、竈、製塩土器、平瓦・丸瓦	ＳＡ21・22、ＳＢ32、ＳＤ42より新しい。
ＳＫ46	不定形	東西2.4×南北1.1以上	0.3	８世紀後半～末頃：土師器皿・椀・甕、須恵器杯・皿・杯蓋・甕・壷、平瓦・丸瓦	ＳＫ47より古い。
ＳＫ47	長方形	東西3.7×南北5.8以上	0.2	８世紀末頃：土師器椀・皿・甕、須恵器杯・皿・杯蓋・壷・甕・平瓶（ミニチュア）、軒丸瓦（型式不明）、坩堝、製塩土器、竈、奈良三彩壷？、平・丸瓦	ＳＤ42、ＳＫ46、ＳＥ53より新しい。
ＳＫ48	長方形	東西5.7×南北1.9	0.2	８世紀末頃：土師器椀・皿・甕、須恵器杯・杯蓋・皿・壷（ミニチュア）・甕、平瓦・丸瓦、竈、製塩土器	ＳＡ02、ＳＤ12・42Ｂ、ＳＫ49より新しい。
ＳＫ49	不定形	東西2.3×南北1.7	0.1	８世紀：土師器皿・椀・甕、須恵器杯・杯蓋・甕、平瓦・丸瓦	ＳＫ48より古く、ＳＤ12･44より新しい。
ＳＫ50	不定形	東西3.4×南北3.5以上	0.1	８世紀：土師器皿・杯・甕、須恵器杯蓋・甕、平瓦・丸瓦	ＳＡ26・ＳＥ54より新しい。
ＳＫ51	不定形	長径1.7×短径1.2	0.2	８世紀末頃：土師器皿・椀・杯・杯蓋・甕、黒色土器Ａ類、須恵器杯・杯蓋・甕、平瓦・丸瓦	ＳＫ17より新しい。
ＳＫ52	楕円形	長径1.0以上×短径1.7	0.1	８世紀末頃：土師器杯・皿・椀、黒色土器Ａ類、須恵器杯・甕・壷蓋、平瓦・丸瓦	ＳＢ42より新しい。
ＳＸ55	円形	直径0.3	0.1	銭貨（和同開珎５枚）	

遺構番号	掘形			井戸枠		主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模(m)	深さ（m）	構造	内法		
ＳＥ53	楕円形	南北3.3×東西2.9	2.8	方形縦板組隅柱横桟留	一辺0.8m	枠内：８世紀前半：土師器杯・皿・甕、須恵器甕、墨書土器、斎串、桃種、瓢箪、鉄釘、石鏃	ＳＫ47・ＳＤ42より古い。
ＳＥ54	円形？	東西3.9以上	2.9以上	抜き取られている		８世紀：土師器・須恵器	ＳＫ50より古い。発掘区外南に続く。

る。ＳＤ 11 Ｂの埋土から須恵器の小片が出土したが、詳細な時期は不明である。

ＳＤ 07 ～ 10・12 は斜行溝で、埋土がＳＤ 11 Ｂと同じであることから、ＳＤ 11 Ｂに接続する溝と考える。これらの溝から遺物は出土しなかった。

奈良時代の遺構

掘立柱建物・塀・柱列　掘立柱建物 12 棟（ＳＢ 30 ～ 41）、掘立柱塀３条（ＳＡ 27 ～ 29）、掘立柱列８条（ＳＡ 19 ～ 22・23 ～ 26）がある。

建物等の規模は判然としないが、北と南発掘区では建物配置に相違が見られる。北発掘区では北東部に建物等が集中する配置となる。一方、南発掘区では散漫とした配置となるが、東半部に柱穴の規模が大きい建物、西半部では小規模な建物が集中する傾向がうかがえる。また、これらの中には柱筋を揃えて建つものがあり、建物配置には計画性がうかがえる。

重複関係からはＳＡ 28 →ＳＡ 27、ＳＢ 37 →ＳＢ 35 という変遷がわかる。また、ＳＢ 33・37 は南妻柱を揃えて東西に並び、ＳＢ 35・36 は側柱を揃えて南北に並び、ＳＢ 40 の北側柱はＳＡ 25 と柱筋を揃え、ＳＢ 34・41 は北側柱を揃え、ＳＡ 23・24 は柱筋を揃えており、それぞれ同時期と考える。

ＳＡ 19 は西端でＳＡ 20 と接続して北へ屈曲する塀もしくは東西棟建物と考えられる。

ＳＡ 21 は西端でＳＡ 22 と接続して北へ屈曲するＬ字形の掘立柱塀もしくは東西棟建物の可能性があるが、現状では不明である。東から１間目の柱間のみ 3.2 ｍと広くなる。重複関係からＳＤ 42 より古い。埋土から８世紀の土器の小片が出土したが、ＳＤ 42 の時期から８世紀中頃以前と考えられる。

ＳＡ 24 は１間以上の柱列と判断したが、西側の柱穴の深さが 0.2m、東側が 0.6m であることから、南北棟建物の北側妻柱列とも考えられる。

ＳＡ 26 は一辺約 1.0 ｍの大きな柱穴の柱列である。柱は全て抜き取られており、東端の掘形底面には礎板が据えられていた。発掘区外南へ続く掘立柱建物とも考えられる。

ＳＡ 27・28 はほぼ同位置で西から東へと建て替えている。坪内の東西 1/6 ライン付近に位置することから坪内区画塀と考える。南端は発掘区外南へ続く。

溝　溝３条（ＳＤ 42 ～ 44）がある。ＳＤ 42 は、坪内の南北 1/4 ラインに位置することから、坪内区画溝と考える。規模を大きくして掘り直しがされており、以下古い溝をＳＤ 42 Ａ、新しい溝をＳＤ 42 Ｂとした。溝心の国土座標値は、ＳＤ 42 ＡがＸ =–146,368.9、Ｙ =–18,939.0、ＳＤ 42 Ｂは東端でＸ =–146,369.7、Ｙ =–18,939.0、西端でＸ =–146,370.8、Ｙ =–18,966.0 である。

ＳＤ 42 Ａは、北発掘区東端から約 2.5 ｍの位置から始まって、ＳＤ 43 とＴ字形に接続する。溝の西端はＳＫ 47 によって削平を受けているが、以西には続かないことから概ねこの位置で途切れるものと推定できる。埋土から８世紀中頃～後半の土器が出土したが、出土量は概して少ない。

ＳＤ 42 ＢはＳＤ 42 Ａの溝心から約 1.0 ｍ南へ位置をずらして掘り直している。ＳＤ 42 Ａとは異なり、溝の両端は発掘区内で途切れることはなく、発掘区外東・西へ続く。溝底の勾配から西流していることが分かり、発掘区西辺では後述するＳＤ 44 とＴ字形に接続する。埋土は地山ブロックを多量に包含しており、人為的に一度に埋められたことが分かる。ただし、発掘区西端では溝底にシルト層が堆積しており、溝が機能していた段階では一定の流水があったものと考える。埋土から８世紀中頃～後半の土器が出土した。

ＳＤ 44 は坪内の東西 1/8 ライン付近に位置することから、坪内区画溝の可能性を考える。溝の南端でＳＤ 42 Ｂと接続し、北端は発掘区外北へ続く。ＳＤ 42 Ｂとの合流部付近では湧水層まで深く掘り下げられており、土坑状に急に深くなっていた。埋土は３層あり、上層がＳＤ 42 Ｂと同一層であることから、同時期に埋没していることがわかる。ただし、各層の埋土から８世紀後半の土器が出土していることから、掘削時期はＳＤ 42 Ｂより後になる可能性がある。

井戸　井戸２基（ＳＥ 53 ～ 54）がある。ＳＥ 53 は、直径 3.0 ～ 3.3m の平面円形の掘形内に一辺 0.8 ｍの方形縦板組隅柱横桟留めの井戸枠を据える。底面から 1.5m 分が遺存していた。掘形から時期の特定できる土器は出土しなかったが、枠内埋土から８世紀前半の土器が出土していること、重複関係からＳＤ 42 より古いことから、発掘区内で最も先行する遺構となる。

ＳＥ 54 は、掘形が垂直に掘り込まれていること、深さが 2.9 ｍ以上あることから、発掘区外南へ続く井戸と判断した。枠は抜き取られている可能性がある。８世紀の土器が出土した。

土坑　土坑８基（ＳＫ 45 ～ 52）がある。このうちＳＫ 45・47 は発掘区外北へ続く大型の土坑である。ＳＫ 45・47・48 は重複関係からＳＤ 42 より新しく、ＳＫ 50 はＳＥ 54・ＳＡ 26 より新しい。これらの埋土から８世紀後半～末頃の土器が出土した。なお、ＳＫ

北発掘区全景（東から）

南発掘区全景（東から）

46・47は坪内の東西1/4ラインに位置する。

埋納遺構　埋納遺構1基(ＳＸ55)がある。ＳＸ55は、直径0.3ｍ、深さ0.1ｍ、平面円形を呈する。土坑中央から和同開珎５枚が銭文を上に向けた状態で重なって出土した。銭貨は地山面から0.1ｍ上方で出土していることから、有機質等の容器に納められていた可能性があるが、そのような痕跡は認められなかった。

Ⅳ　出土遺物

土器類が遺物整理箱39箱分､瓦類が1箱分､金属製品、石製品などがある。各遺構からの出土遺物は一覧表にまとめた。土器類には弥生時代後期後半の甕、８～９世紀の土師器・須恵器・黒色土器Ａ類・施釉陶器がある。瓦類には､軒平瓦（6641 Ｆ型式)･軒丸瓦（型式不明２点)･丸瓦・平瓦・磚がある。その他、銅銭（和同開珎５点)、斎串、坩堝、石斧・石鏃などがある。なお、遺物の大半は区画溝や大型土坑からの出土である。

Ⅴ　調査所見

奈良時代以前の遺構としては、柱列・土坑・溝を検出した。調査地から約150ｍ北に位置するＨＪ第197次調査では弥生時代後期の竪穴住居跡・土坑・溝を検出しているが、今回検出した遺構からも弥生時代後期後半の土器が出土しており、集落の広がりが調査地周辺にまで展開していたことがわかる。

奈良時代の詳細な土地利用については、不確定な部分も多いが、坪の四周を取り囲む条坊道路側溝の内側を基準とした南北1/4ラインでＳＡ21・ＳＤ42を、東西1/4・1/6・1/8ラインでＳＫ46・47・ＳＥ53、ＳＡ27・28、ＳＤ44を確認できたことによって、少なくとも二坪北西部は区画して宅地利用する時期があることが判明した。

遺構の時期区分については、南北1/4ライン付近における重複関係等から判断すると、ＳＡ21・22→ＳＤ42→ＳＫ45・47・48ということが分かり、３時期以上に区分できる。最も先行するＳＡ21・22の段階から、南北1/4ラインを意識した宅地計画がうかがえる。ＳＡ21・22を廃した後は、ＳＤ42がその位置を踏襲し、坪内を南北1/4に区画している。なお、ＳＤ42Ｂの段階では、この溝をまたぐような遺構が見られないことや、これを境とした北側と南側の各区画では遺構の在り方に相違が見られることから、ＳＤ42Ｂは宅地割の区画施設と考える。こうした宅地割は、出土遺物の時期から少なくとも８世紀中頃には行われていたものと考えられる。また、ＳＤ42埋没後はＳＫ45･47･48といった大型土坑等が掘削されており、８世紀末頃に坪内の利用形態が大きく変容したものと分かる。このように、二坪は連綿と宅地として利用されており、調査例がさほど多くない朱雀大路に面した坪の土地利用に関する貴重なデータを得ることができた。　　（大窪淳司・大原瞳）

1）奈良市教育委員会1989「平城京朱雀大路の調査　第150次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和63年度』
奈良市教育委員会1990「平城京右京四条一坊一坪の調査　第197次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成２年度』
奈良市教育委員会1996「平城京朱雀大路の調査第328次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成７年度』

18. 杏遺跡・平城京跡（左京八条二坊二坪）の調査　第595次

事 業 名	杏人権文化センター増築工事	調 査 期 間	平成20年1月15日～平成20年1月30日
通 知 者	奈良市長	調 査 面 積	56㎡
調 査 地	奈良市杏町401-1	調査担当者	久保清子

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京八条二坊二坪の西辺中央部分に相当し、西には東一坊大路が通る。二坪内での調査例には、調査地北側で市ＨＪ第13次調査があり、水田化以前は滞水した低湿地であったことが確認されており、奈良時代の遺構は見つかっていない。調査地南東側では市ＨＪ第337･340･500次調査があり、弥生時代の土坑、溝、古墳時代の方墳、溝、奈良～平安時代の掘立柱建物、掘立柱列、井戸、土坑、溝を検出している。

今回は、二坪西辺の様相ならびに奈良時代以前の遺構の有無を確認することを目的として、調査を行った。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本層序は、造成土（0.6～0.8ｍ）の下に耕作土（0.1ｍ）､灰色粘質土（0.2ｍ）､黄灰色粘土（0.2ｍ）、灰橙色粘土（0.3ｍ）、鎌倉時代の遺物を包含する灰色粘土（0.4ｍ）､灰色粘砂（0.2ｍ）と続き､現地表下2.0ｍ前後で青灰色砂もしくは粗砂の地山となる。遺構検出作業はこの地山上面で行ったが､南北小溝が6条見つかったのみである。地山上面の標高は、52.3ｍである。

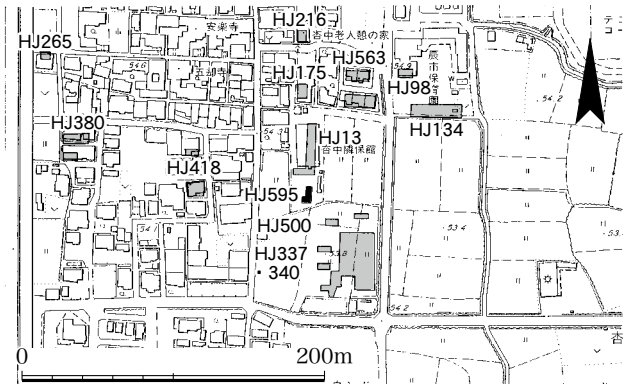
さらに、これより下の堆積状況を確認するため、一部掘り下げたところ、青灰色砂～粗砂（0.4ｍ）の下には植物遺体である茶褐色の有機質土（0.1～0.25ｍ）と灰茶色粘土（0.1ｍ）が厚さ0.5ｍにわたって互層に堆積し、その下に灰色シルトが続くことが判明した。今回、青灰色砂層以下においては、遺構、遺物とも見つからなかった。

Ⅲ　出土遺物

遺物整理箱1/3箱分の遺物が出土した。遺物には、灰色粘土層及び灰色粘砂層から出土した８世紀の須恵器、13世紀の土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器、時期不明の土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓がある。

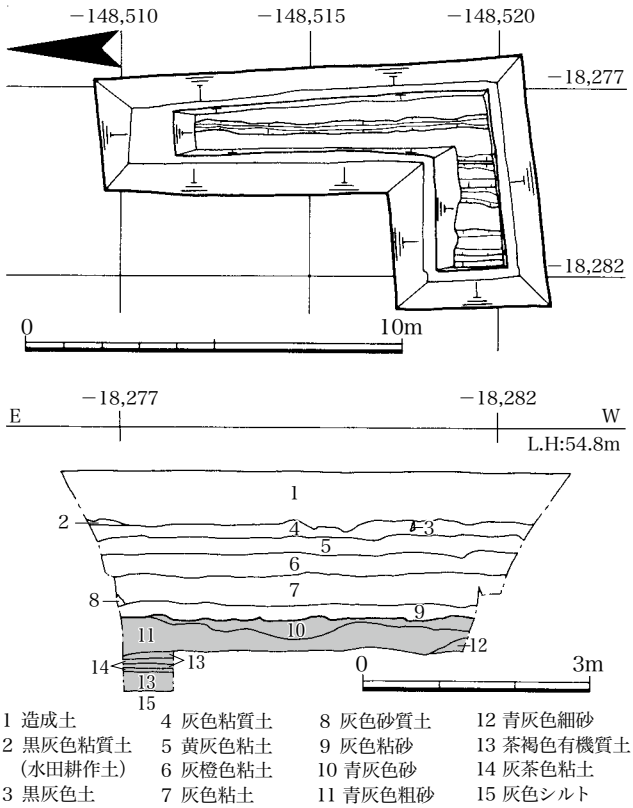
Ⅳ　調査所見

今回の調査では、奈良時代の遺構は見つからなかった。青灰色砂上面で確認した南北方向の溝は、鎌倉時代の耕作に伴う素掘溝であることが考えられる。今回の調査地の地山標高は、南東に隣接する市ＨＪ第500次調査の奈良時代遺構面より1.2ｍ低く、周辺調査の結果からも、東一坊大路に接する坪の西辺は鎌倉時代後半までに地下げされたものと思われる。　（久保清子）



ＨＪ第595次調査　発掘区位置図（1/5,000）

発掘区全景（北から）



ＨＪ第595次調査　発掘区遺構平面図（1/200）・南壁土層図（1/100）

19. 平城京跡（左京三条三坊十二坪・東三坊坊間東小路）の調査　第596次

付載　市試掘89-23次調査

事 業 名	共同住宅新築	調 査 期 間	平成20年1月16日～3月14日
届出者名	大和ハウス工業株式会社	調 査 面 積	720㎡
調 査 地	奈良市大宮町四丁目250-6、251-1・3	調査担当者	原田香織

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京の条坊復原によると左京三条三坊十二坪の東辺南半部と東三坊坊間東小路に当たり、同敷地の南側には三条大路が想定される。条坊道路と宅地東辺区画施設の様相確認を目的に調査を行った。なお、排土置き場確保のため、南北1/2ずつ2回に分けて調査した。

Ⅱ　基本層序

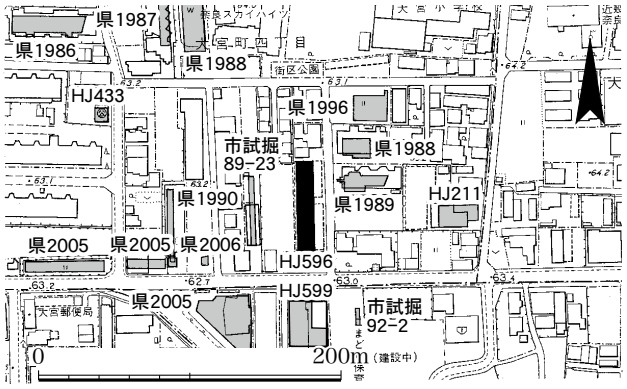
基本的には、上から造成土（厚さ0.8～1.0m）、水田耕作土の黒灰色土層（厚さ0.2ｍ）、旧耕作土とみられる淡灰色系砂質粘土・粘土層が4～5層（厚さ0.4～0.6m）と続き、現地表下1.3～1.45mで奈良時代の遺構面である黄灰色シルトの地山もしくは黄褐色砂質シルト等の旧河川埋土の上面に至る。遺構面の標高は61.3～61.5ｍで北から南へ緩やかに下る。

Ⅲ　検出遺構

奈良時代の遺構には、東三坊坊間東小路ＳＦ01、同西側溝ＳＤ02と西側でこれに平行する溝ＳＤ03、これら2つの溝に接続する東西溝3条（ＳＤ04・13・14）、掘立柱塀とみられる掘立柱列3条（ＳＡ05・06・15）、門とみられる掘立柱列（ＳＢ07）、掘立柱建物とみられる掘立柱列3条（ＳＢ08・09・16）、井戸3基（ＳＥ10・11・17）、土坑2（ＳＫ12・18）などがある。各遺構の概要は一覧表にまとめた。他に、奈良時代よりも時期の下る耕作溝を重複して検出した。

ＳＦ01　東三坊坊間東小路で、路面西肩は西側溝ＳＤ02が路面側に溢れたことにより大きく浸食されている。浸食されて当時ぬかるんでいたと思われる部分で、人や牛などが歩いて路面を攪拌したと思われる痕跡を検出した。また、溢れた部分の縁に沿って幅5㎝程の狭い溝を数条検出したが、これは車の轍跡の可能性がある。今回、東側溝を検出できなかったが、発掘区外の当敷地内にあると想定できる。

ＳＤ02　東三坊坊間東小路の西側溝である。発掘区北端から南へ長さ1.5ｍまでは幅1.2ｍ、それより南については路面側に大きく広がって路面を浸食している。深さもその部分から0.2ｍほど一段深くなる。また、局地的に護岸のための杭の痕跡が並ぶ。土層の断面観察から、溢れた水流が一度路面側を浸食したのちＳＤ02は掘り



ＨＪ第596次調査　発掘区位置図（1/5,000）

発掘区北半部（東南から）

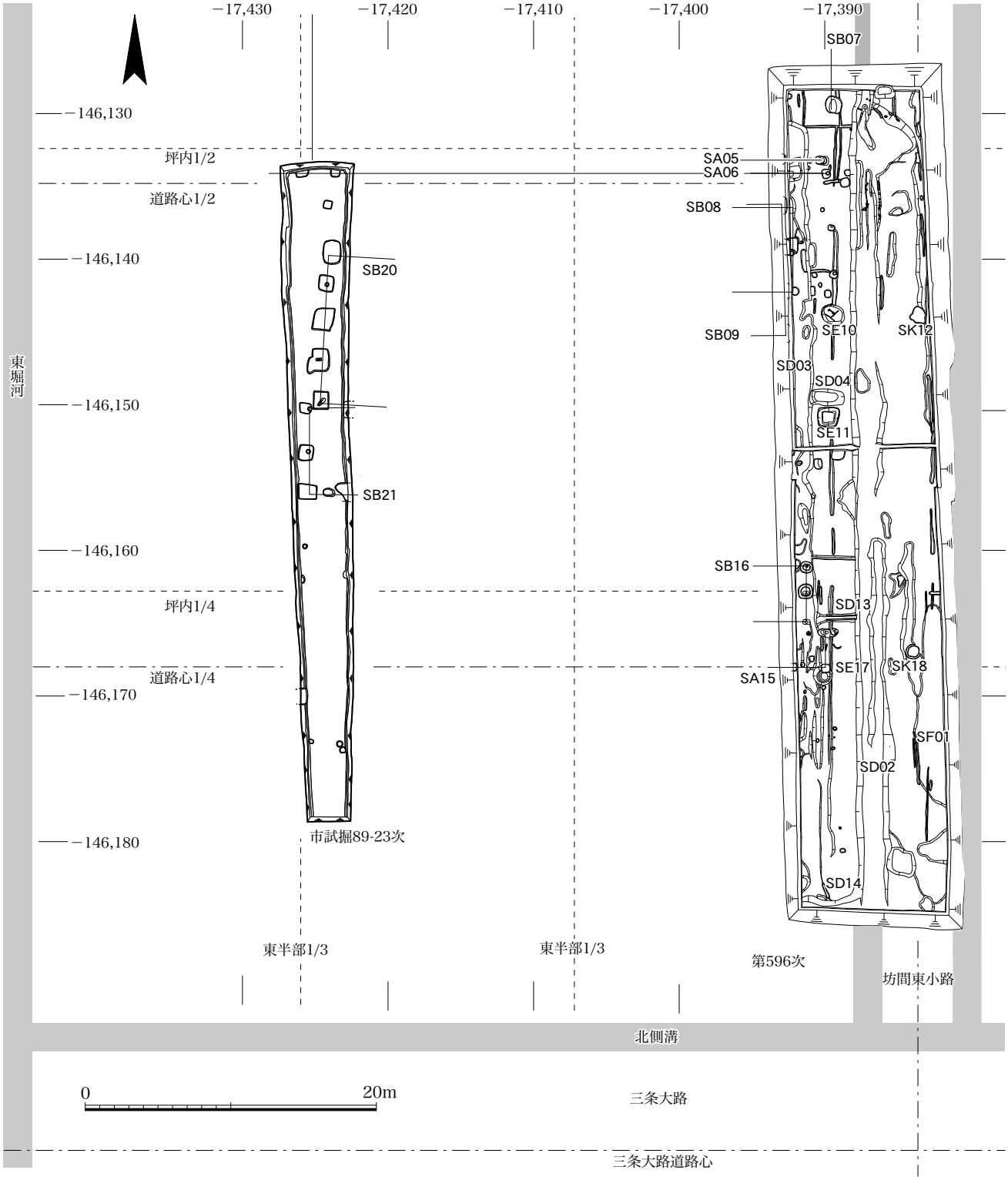
発掘区南半部（北から）

直されるが、再度路面側に水流が溢れた形跡がうかがわれる。最上層から平安時代前期の黒色土器A類が出土しており、少なくともこの頃までは溝が機能していたものと考えられる。最深部での西側溝心は、X＝－146,160 m、Y＝－17,386.5 mである。

ＳＤ03　ＳＤ02の西側に2.5 mほど離れて平行する南北溝である。発掘区の北端から2.5 m南のところより始まる。宅地の排水を兼ねた十二坪内の東側を限る溝で、ＳＤ02とＳＤ03の間には築地などの閉塞施設が想定できる。後述のＳＤ13・14付近では流水の痕跡である砂や粘土の堆積がみられたが、それ以外では人為的に埋め立てられており、埋没後に柱穴が掘り込まれている。

ＳＤ04　発掘区中央で検出した東西溝である。西端は浅くなりＳＤ03と接続するが、東端はＳＤ02と接続していない。

ＳＤ13　発掘区中央で検出した東西溝で、東端がＳＤ



ＨＪ第596次調査　発掘区遺構平面図（1/400）

02、西端がＳＤ03と接続する。溝内の南北両肩に沿って側板が立てられていた痕跡が残る。なお、底板の痕跡はなかった。底面が西から東へ下がっていることからＳＤ03からＳＤ02への排水のための溝と考えられる。天板の存在は確認できなかったが、築地塀の存在を想定すれば暗渠となる可能性が考えられる。坪内の南北1/4ライン付近に位置する。

ＳＤ14　発掘区南端で検出した東西溝で、東端はＳＤ02と接続するが、西端はＳＤ03よりも一段下がって発掘区外西へと続く。南肩も発掘区外となるため、溝幅も不明。５～６m南側に三条大路北側溝が想定されることから、宅地内の排水を兼ねた十二坪内の南側を限る溝の可能性がある。埋土の東側はＳＤ02の掘り直しによって途切れ、埋土中層には薄い木質層が広がっていた。持ち帰り洗浄してみたところ、表面観察では大半が木の皮のように見え、一部板の小片もあった。なお、これらは腐植がひどく、取り上げできなかった。

ＳＡ05・06　発掘区北側で検出した東西方向の掘立柱列で、それぞれ1間以上あり、発掘区外西に続く。ＳＡ05は坪内の南北1/2付近、ＳＡ06は条坊道路心々間の南北1/2付近に相当する。

ＳＡ15　発掘区中央で検出した東西1間以上の掘立柱列で、東端はさらに1間分北に折れる。発掘区外西に続く。条坊道路心々間の南北1/4付近に相当する。

ＳＢ07　発掘区北端で掘形１mを超える大きな柱穴を1つ検出し、発掘区外北へ続く掘立柱列の一部とみられる。この東側でＳＤ02は幅を狭め、西側でＳＤ03は途切れるが、その位置は坪内の南北1/2ラインに近い。この南北1/2ラインから北へ10尺ほどの位置に柱穴があり、坪内北半部の南端に沿って門と通路が東に開くと推

ＨＪ596次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	
ＳＡ05	東西	１以上	2.7以上		2.7		柱穴の深さ0.6m。ＳＤ02より新しい。坪内南北1/2付近。
ＳＡ06	東西	１以上	2.4以上		2.4		柱穴の深さ0.5m。ＳＤ02より新しい。坪内南北1/2付近。
ＳＢ07	南北	１以上	2.0以上				柱穴の深さ0.7m。ＳＤ02より新しい。坪内南北1/2付近。
ＳＢ08	不明	２以上×１以上	6.0		3.0等間		柱穴の深さ0.3～0.4m。ＳＤ02より新しい。
ＳＢ09	不明	３以上×１以上	9.0		3.0等間		柱穴の深さ0.4～0.6m。ＳＤ02より新しい。
ＳＡ15	東西南北	東西１以上、南北１	東西2.1以上、南北2.4		東西2.1 南北2.4		柱穴の深さ0.6m。ＳＤ02･ＳＥ17より新しい。坪内南北1/4付近。
ＳＢ16	東西	１以上×２	0.6以上	3.8		1.9等間	柱穴の深さ0.2～0.5m。ＳＤ02より新しい。

遺構番号	掘　形			井戸枠		主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	構造	内法(m)		
ＳＤ02	南北	幅4.0～5.0、長さ56.5以上	0.4			８世紀中～９世紀初頭：土師器杯・皿・椀・蓋・高杯・壷・甕・墨書杯か皿「□」、須恵器杯・皿・杯蓋・壷・壷蓋・平瓶・鉢・盤・甕・墨書杯か皿「□」・転用硯・ミニチュア杯、黒色土器Ａ類杯・椀、軒丸瓦6272Ｂ1点・6284Ｅa1点・軒平瓦6664Ｉ1点・6732Ａ1点・丸・平・面戸瓦、圏脚円面硯、竈、鞴羽口、土馬、桃核、細木燃えさし	東三坊坊間東小路西側溝。２回以上掘り直しあり。最新の溝はＳＤ14より新しい。 最深部座標 Ｘ＝−146,160m、 Ｙ＝−17,386.5m。
ＳＤ03	南北	幅1.8以上、長さ54.0以上	0.2～0.4			８世紀後半：土師器杯・皿・蓋・高杯・鉢？・鉢か盤・甕、須恵器杯か皿・杯・杯蓋・壷・壷蓋・平瓶・甕・ヘラ記号杯か皿「×」・漆付杯か皿、軒丸瓦型式不明（6285Ａ？）1点・丸・平瓦、竈、榛原石	ＳＡ05・06・15・ＳＢ08・09・16より古い。
ＳＤ04	東西	幅1.1、長さ2.4	0.4			８世紀：土師器杯か皿甕、須恵器杯か皿・蓋・甕	
ＳＥ10	円形	東西1.4×南北1.4	1.0	不明	水溜：東西0.05×南北0.65	（枠内）８世紀後半～９世紀初頭：土師器杯か皿・高杯・甕、須恵器杯か皿・杯 （掘形）８世紀：土師器蓋	枠は水溜施設以外抜き取られている。水溜施設は折敷を半裁して転用。
ＳＥ11	隅丸方形	東西0.7×南北0.7	0.6	素掘り		８世紀中頃～後半：土師器杯・皿・椀・高杯・鉢・盤・壷・甕、須恵器杯・甕	水溜は一段狭くなる。
ＳＫ12	不整形	東西1.1×南北1.2	0.05			８世紀：土師器杯か皿・椀、須恵器杯か皿、丸・平瓦	
ＳＤ13	東西	幅0.5、長さ2.8	0.2			８世紀：土師器杯か皿・椀・甕、須恵器杯か皿・杯・甕	暗渠か。
ＳＤ14	東西	4.4以上	0.4			８世紀：土師器杯か皿・甕、須恵器杯か皿・杯・蓋・壷か甕・壷か鉢・甕、丸・平瓦、桃核	最新のＳＤ02より古い。
ＳＥ17	円形	東西1.3×南北1.3	1.5	素掘り		８世紀後半：土師器杯か皿、８世紀：杯か皿・高杯・壷・甕、須恵器杯か皿・壷・平瓶・甕、製塩土器、桃核、瓢箪種子	水溜は一段狭くなる。
ＳＫ18	隅丸方形	東西0.75×南北0.7	0.5			８世紀：土師器杯か皿・甕、桃核	炭や灰の廃棄土坑か。

測できる。また、ＳＤ02のあふれの縁に沿って、数条の車の轍跡とみられる溝が巡り込んでおり、この門に車が出入りする様子を示すようで興味深い。なお、柱穴の柱抜取痕跡から奈良時代末～平安時代初頭頃の土師器片が出土している。

ＳＢ08・09　発掘区北側の西壁に沿って検出した掘立柱列で、発掘区外西に続く掘立柱建物とみられる。どちらも掘形１m前後、柱間10尺（約３m）と大きい。

ＳＢ16　発掘区中央の西壁沿いで検出した掘立柱列で、発掘区外西に続く掘立柱建物とみられる。坪内の南北1/4ライン付近に位置する。

ＳＥ10　発掘区中央で検出した井戸で、掘形の平面は円形に近い。井戸枠はほとんど抜き取られ、一番底の水溜（集水施設）だけが残っていた。この水溜は、２個体の折敷を分割した転用材で方形に構築されている。

ＳＥ11　発掘区中央で検出した平面方形の素堀りの井戸である。下部は一段狭くなる。一番底から口縁を一部欠失するだけの取手付土師器壺Ａ１点が出土した。井戸を埋め戻す際の祭祀に用いられた可能性がある。

ＳＥ17　発掘区中央で検出した平面ほぼ円形の素堀りの井戸である。下部は一段狭くなる。

ＳＫ12・18　発掘区中央東寄りのＳＦ01上面で検出した土坑である。ＳＫ12は暗灰色粘土などのブロックで埋められており、ごく浅い。ＳＫ18には、灰や消し炭の細片を埋めている。どちらも路面上に掘られている。

井戸ＳＥ10（北東から）

井戸ＳＥ11（西から）

Ⅲ　出土遺物

奈良時代の各遺構の埋土や時期が下る耕作溝の埋土から、サヌカイト製石器（削器・石核・剥片）、弥生土器、古墳時代の土師器、８世紀～９世紀初頭の土器類（土師器・須恵器・黒色土器・製塩土器）、８世紀の瓦類（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦）・石製磚・焼け石・木製品・種子（桃・瓢箪）が、遺物整理箱で合わせて26箱分出土した。軒丸瓦には6272Ｂ１点・6284Ｅａ１点・型式不明（6285Ａの可能性あり）１点、軒平瓦には6664Ｉ１点・6689Ａ１点・6732Ａ１点がある。主要遺構から出土した遺物の内訳は、各遺構の一覧表にまとめている。

Ⅳ　調査所見

ＳＤ02とＳＤ03の間には、暗渠と推測できるＳＤ13があり、築地塀が存在した可能性を想定できる。しかし、その築地塀想定位置には南北に並ぶ井戸３基（ＳＥ10・11・17）があり、奈良時代中頃～後半の遺物が出土する。また、奈良時代後半にはＳＤ03が埋め立てられ、東辺端近くまで建物が築かれる。これらの所見を総合すると、奈良時代後半頃に築地塀を取り払いＳＤ03を埋め立てて宅地利用を大きく転換させるような事象が十二坪内で生じたことが考えられる。この事象と東三坊坊間東小路路面の水流による浸食及び西側溝の掘り直しが関連するのかどうかはわからない。

ＳＢ07の東側でＳＤ02が幅を狭め、西側でＳＤ03が途切れる点を根拠として、坪内の南北1/2ラインの北側に沿って通路があり、ＳＢ07はその東端に開く門と推定した。とすれば、ＳＤ03が機能した当初からＳＢ07が存在した可能性も想定できることとなる。しかし、ＳＢ07の柱抜取痕跡から奈良時代末～平安時代初頭頃の土師器が出土しており、奈良時代前半からＳＢ07が存続したと理解するのは難しい。もう少し北側の発掘区外に前身の門があり、ＳＢ07はその建替えと理解するのが妥当と考えるが確証はない。いずれにしても、この位置に十二坪への出入口が設けられていたことは間違いないだろう。十二坪内中央には東堀河が南北に流れており、宅地は東西に大きく分割されている。したがって、宅地東半部への出入口を東辺中央の位置に設けることに無理はない。

また、東辺で確認した井戸３基や掘立柱列の位置をみると、南北1/2付近にＳＡ05・06、南北1/4付近にＳＤ13・ＳＡ15・ＳＢ16・ＳＥ17がある。したがって、奈良時代後半には坪内東南部を南北1/4に分割して宅地利用した可能性が想定できる。　（原田香織）

付載　市試掘 89-23 次調査

Ⅰ　はじめに

平城京第 596 次調査地から約 30 m西側の敷地でビル建設に伴う緊急発掘調査（市試掘 89-23 次調査）を 1989 年に実施したが、その内容は未報告である。同じ左京三条三坊十二坪内の近接地の調査でもあるので、この機会にその概要を合わせて報告しておきたい。

調査地は大宮町四丁目 250- 8、255。橿原考古学研究所伊藤勇輔氏の協力を得て、平成元年 10 月 4 日～6 日で調査を実施した。調査面積は、約 155㎡である。

Ⅱ　基本層序

上から造成土（厚さ 0.95 m）、旧耕作土（厚さ 0.2 m）、灰色粘土（厚さ 0.15 m）と続き、現地表下約 1.3 mで青灰色粘土の地山となる。遺構面は地山上面で、その標高は 61.4 m前後である。

Ⅲ　検出遺構

掘立柱建物２棟と掘立柱建物列１条の存在を確認したが、その他にもまとめられない柱穴が幾つかある。各建物の概要は一覧表にまとめた通りである。

ＳＢ 20　桁行４間の南北棟掘立柱建物で、西側柱列を検出し、発掘区外東へ続く。南端の柱穴に直径 0.33 m・長さ 0.86 mの柱根、南端から２番目の柱穴底に長さ 0.4 m・幅 0.18 m・厚さ 0.05 mの礎板が残っていた。

ＳＢ 21　梁行２間の東西棟掘立柱建物で、西妻柱列を検出し、発掘区外東へ続く。ＳＢ 20 とＳＢ 21 は空間的に同時併存し得ないが、その前後関係は不明である。いずれの建物も、北で東に方向が振れている。

ＳＡ 06　発掘区北端で確認した２つの柱穴が第 596 次調査で検出したＳＡ 06 の西側延長上の位置に合致し、柱間も 2.4 mで共通する。西側の柱穴はＳＡ 06 東端の柱穴から数えて 15 間目となり、36.0 m以上の規模となる。十二坪東半部内を南北に２分する区画施設と考えられる。

Ⅳ　調査所見

第 596 次調査の成果と合わせて考えると、ＳＡ 06 が十二坪東半部内を南北に２分し、その北側に沿って東西方向の坪内道路を設けていた可能性が高い。

また、想定される東堀河東端と坊間東小路西側溝西端との間の距離は約 56.2 mで、その西から 1/3 ラインがＳＢ 21 の西妻柱列付近になる。ＳＢ 20 の西側柱列にも近く、その南北に顕著な遺構が認められない点からすれば、十二坪東半部内を東西に三分して利用した時期があったことを推測させる。　（鐘方正樹）

市試掘89-23次調査地遠景(北から)

市試掘89-23次調査発掘区(北から)

掘立柱建物ＳＢ20(西から)

市試掘89-23次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	
ＳＡ06	東西	15以上	36.0以上		2.4		第596次調査成果と合成して復原した規模。 坪内を南北に2分割する。
ＳＢ20	南北	4×1以上	10.2		2.1-2.7- 2.7-2.7		柱穴規模：一辺1.1～1.6m・深さ0.4～0.6m。 一部の柱穴に柱根・礎板が残存
ＳＢ21	東西	1以上×2		6.0	3.0？	3.0等間	柱穴規模：一辺0.8～1.2m・深さ0.5m。

20. 平城京跡（右京七条三坊一坪・西二坊大路）の調査　第 569・597 次

事 業 名	仮称西ノ京六条線道路新設工事	調 査 期 間	第569次　平成19年１月 ９日～１月22日
通 知 者	奈良市長		第597次　平成20年１月28日～２月13日
調 査 地	奈良市六条一丁目地内	調 査 面 積	第569次　25㎡　第597次　66.5㎡
		調査担当者	第569次　秋山成人
			第597次　秋山成人　松浦五輪美　山前智敬

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京の条坊復原によると、右京七条三坊一坪東辺から西二坊大路にかけてと一坪の北辺から六条大路にかけて位置する。現在は乾川南岸に位置し、旧河川の流路の存在も想定された。調査地点の東隣では市ＨＪ第 527 次調査・市ＹＳ第８次調査が実施され、市ＨＪ第 527 次調査では西二坊大路西側溝を踏襲するとみられる南北方向の溝東肩部分を検出している。市ＹＳ第８次調査では六条大路南側溝南肩部分を検出しており、今回も大路に関わる遺構を明らかにすることを目的とした。

ＨＪ第 569 次調査の発掘区を第１発掘区とし、ＨＪ第 597 次調査発掘区は東から第２・第３発掘区と呼称する。

Ⅱ　基本層序

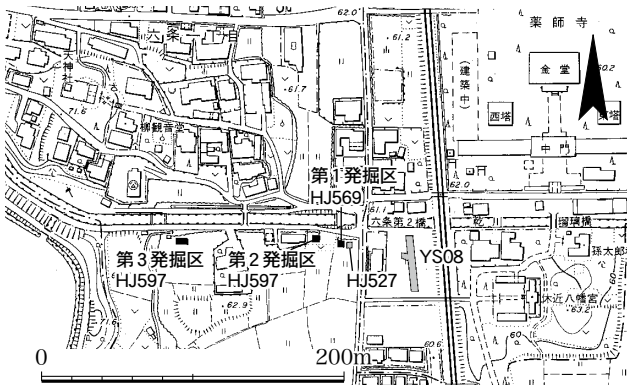
第１発掘区は上から黒灰色土（耕作土）、赤灰色土（床土）、淡灰色土、灰色粗砂（以上河川堆積土）、暗灰色粘砂（旧耕作土）、発掘区東半部分に堆積する灰色粘砂・淡灰色粘砂・暗灰色粗砂・暗灰色粘土・灰色細砂・黄灰色砂（以上ＳＤ 05 埋土）、発掘区西半に堆積する黒褐色粘土（粘土採掘坑ＳＫ 03･04 埋土）、黒色粘土・茶褐色粘土（以上ＳＤ 01 埋土）､灰色粘土（地山）の順に堆積する。地山直上の標高は 58.4 ｍである。

第２発掘区は上から造成土、黒色土（耕作土）、灰色砂質土（床土）､濁暗黄灰色土､明黄色粘土､黒灰色粘砂（旧耕作土）、黄白色粘砂（地山）の順で、発掘区北東部の斜面には、黒灰色粘砂と地山の間に灰色粘砂、暗灰色砂質土が堆積する。地山直上の標高は南で 61.1 ｍ、北東隅で 60.6 ｍである。

第３発掘区は上から黒色土（腐植土）､暗灰色土（耕作土）、橙灰白色粘砂、暗灰色粘土（旧耕作土）、明灰色粗砂、灰色粘土、暗灰色粘砂、暗青灰色砂質土、青灰色粘土ブロック混じりの砂、灰色砂礫と粘土の互層（河川堆積土）、青色粘土（地山）の順で堆積する。地山の標高は 59.8 ｍである。

Ⅲ　検出遺構

第１発掘区では室町時代の溝２条（ＳＤ 01・05）・土坑３基（ＳＫ 02 ～ 04）を検出した。ＳＤ 01 は発掘区外へ南北に延びる溝で、ＨＪ第 527 次調査検出のＳＤ 01 と溝内の埋土、溝底の標高がほぼ同じであり、同一の溝と考えられる。ＳＤ 01 は西二坊大路西側溝の位置を踏襲しており、ＨＪ第 527 次調査の成果と合せると、幅 8.5 ｍ、深さ 0.8 ｍ以上、溝心Ｘ＝－ 147,822.3　Ｙ＝－ 19,904.8 となる。ＳＫ 02 はＳＤ 01 西岸で検出した土坑で、ＳＤ 01 と同じ茶褐色粘土が堆積していた。ＳＫ 03・04 は発掘区西半で検出した粘土採掘坑で、ほぼ垂直に掘り込んでいる。ＳＤ 05 は発掘区外へ南北に延びる溝で、護岸の杭が３ヶ所打たれている。重複関係からＳＫ 02 ～ 04 埋没後に掘削されていることがわかる。各遺構の詳細は遺構一覧表にまとめた通りである。



ＨＪ第569・597次調査　発掘区位置図（1/5,000）

第２発掘区では発掘区南東隅において時期不明の柱穴を２ヶ所確認した。また、発掘区北辺において六条大路にむかって南西から北に下ると考えられる斜面を検出した。斜面を覆う堆積土には、奈良時代の須恵器・丸瓦・平瓦、室町時代の瓦質土器が含まれている。

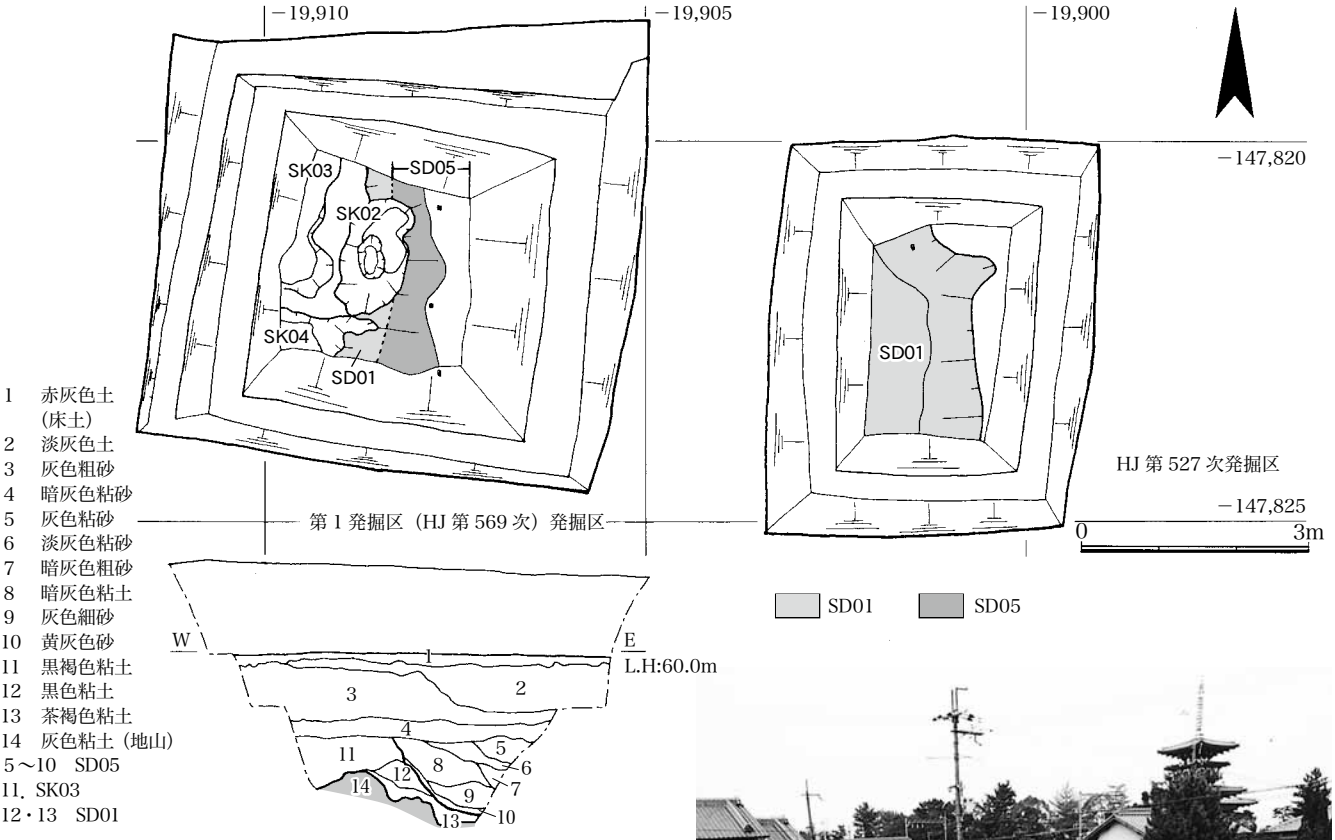
第３発掘区では発掘区全体が河川堆積で、埋土には奈良時代の須恵器、鎌倉時代の瓦器が含まれている。河川堆積土直下の地山面標高は第２発掘区より 0.8 ｍ低く、本来の遺構面は河川の流れにより削平されたと考えられる。

Ⅳ　出土遺物

ＨＪ第 569・597 次調査で合せて遺物整理箱に２箱分の土器類、８箱分の瓦類、その他少量の金属類・石製品がある。第１発掘区出土遺物には８・９世紀の土師器杯・須恵器壺・甕、９世紀の緑釉陶器椀、11 世紀の黒色土器Ｂ類椀、11・12 世紀の土師器皿、13 ～ 15 世紀の土師器

第１発掘区（ＨＪ第569次）検出遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	出土遺物
ＳＤ01	南北溝 断面Ｕ字状	幅1.7以上 長さ2.5以上	0.8以上	８世紀:須恵器甕、軒丸瓦(6235種別不明)１点、８～12世紀:丸瓦・平瓦、軒丸瓦(6235種別不明)１点、11・12世紀:土師器皿・甕・瓦器椀、14・15世紀:瓦質土器鉢
ＳＫ02	平面不整形 断面Ｕ字状	東西0.9 南北1.6	0.8	８世紀:須恵器甕、８～12世紀:丸瓦・平瓦、12世紀：瓦器椀、14・15世紀：瓦質土器鉢・擂鉢、土師器羽釜
ＳＫ03・04	平面不整形 断面逆台形状	東西1.6以上 南北3.5以上	0.8以上	８世紀：土師器甕・須恵器甕、軒平瓦(6641Ｇ型式)１点、８～12世紀：丸瓦・平瓦、11世紀前半：土師器皿・黒色土器Ｂ類椀、11・12世紀：瓦器椀、14～16世紀：瓦質土器擂鉢・浅鉢、14・15世紀：青磁椀
ＳＤ05	南北溝 断面Ｕ字状	東西1.8以上 南北3.3以上	1.2	８世紀：須恵器甕・壺・製塩土器、軒丸瓦(6172Ａ型式)１点、軒平瓦(6641Ｈ型式)１点・(6663Ｈ型式)１点、８～12世紀：丸瓦・平瓦、９世紀：黒色土器Ａ類椀・緑釉陶器椀、９世紀以降：軒丸瓦(平安前期に比定される薬師寺38型式に酷似)１点、11世紀末の瓦器椀、12世紀：瓦器椀・皿、13～15世紀：土師器羽釜、14～16世紀：瓦質土器・鉢、14世紀：平瓦



第１発掘区（ＨＪ第569次）遺構平面図・北壁土層図（１/100）

羽釜、14･15 世紀の青磁椀、14 ～ 16 世紀の瓦質土器鉢、８～ 12 世紀の丸瓦・平瓦、９世紀以降の軒丸瓦、その他に紹聖元寶（北宗 1094 年初鋳）、砥石がある。第２発掘区出土遺物には８世紀の須恵器甕・壺、15 世紀の瓦質土器鉢、８世紀の丸瓦・平瓦がある。第３発掘区出土遺物には８世紀の須恵器甕、12 世紀の瓦器の小片がある。

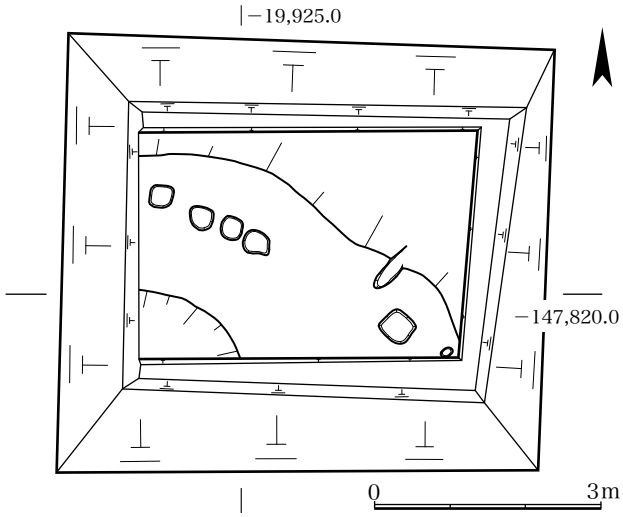
Ⅵ　調査所見

調査の結果、第１発掘区ではＳＤ 01 を検出し、ＨＪ第 527 次調査のＳＤ 01 と合わせると溝幅がわかり、西二坊大路西側溝の位置が明らかとなった。第２発掘区では 15 世紀に地山面が埋まり、耕作地に利用された後、さらに埋まり現代の耕作面となる。この状況から中世から現代にかけての土地利用状況を知ることができた。第３発掘区では河川の氾濫が遺構と地山を削平していることが明らかとなった。　（秋山成人　松浦五輪美）

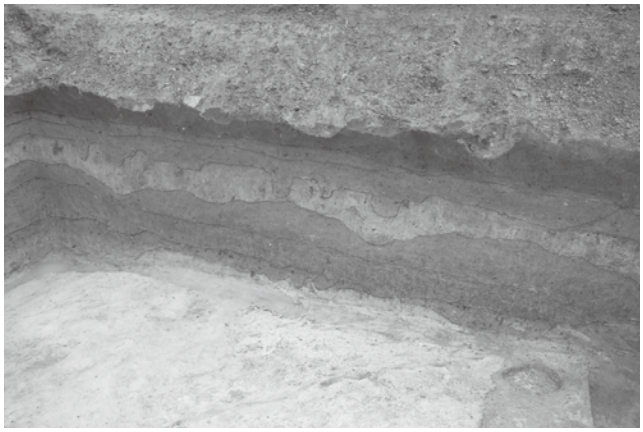
第１発掘区（ＨＪ第569次）全景（南西から）

第２発掘区（ＨＪ第597次）全景（南東から）

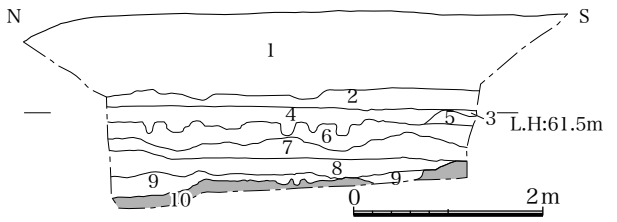
第２発掘区（ＨＪ第597次）全景（北から）



第２発掘区（ＨＪ第597次）遺構平面図（1/100）

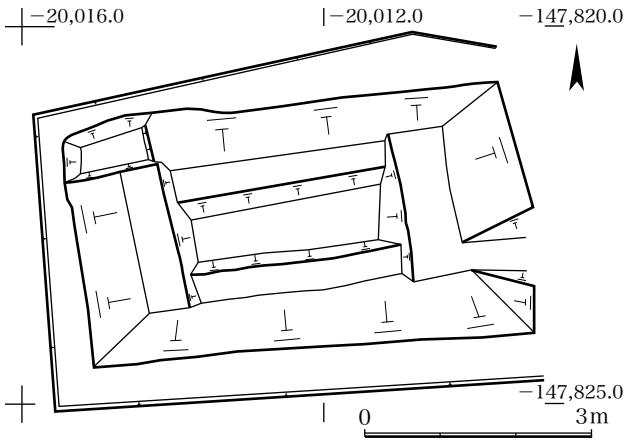


第２発掘区（ＨＪ第597次）東壁（西から）



1　造成土
2　黒色土（耕作土）
3　灰色砂質土（床土）
4　濁暗黄灰色土
5　暗黄色粘土
6　明黄色粘土
7　黒灰色粘砂（旧耕作土）
8　灰色粘砂
9　暗灰色砂質土
10　黄白色粘砂（地山）

第2発掘区（ＨＪ第597次）東壁土層図（1/80）



第３発掘区（ＨＪ第597次）遺構平面図（1/100）

第３発掘区（ＨＪ第597次）全景（西から）

21．平城京跡（左京二条四坊十坪・東四坊坊間路）の調査　第549・598次

事業名	法蓮南北線道路新設工事	調査期間	第549次　平成18年４月18日～５月16日
通知者	奈良市長		第598次　平成20年２月４日～２月29日
調査地	第549次　法蓮町364、365、366-１他	調査面積	第549次　約170㎡　第598次　約100㎡
	第598次　法蓮町367-６、368-４	調査担当者	第549次　原田憲二郎　第598次　池田富貴子

Ⅰ　はじめに

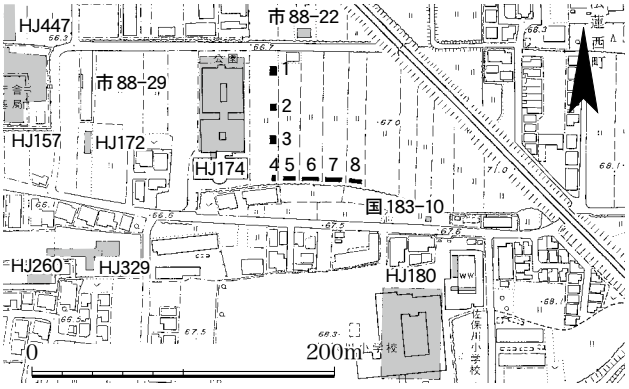
ＨＪ第549次調査は平成18年度に、ＨＪ第598次調査は平成19年度に実施しているが、同じ事業にかかる調査である。両発掘区は近接しており、検出した遺構の性格上からも、両調査を合わせてここに報告する。

ＨＪ第598次調査は南北３箇所の発掘区を北から第１・２・３発掘区とし、ＨＪ第549次調査は東西５箇所の発掘区を西から第４・５・６・７・８発掘区と呼称する。

平城京の条坊復原では、第１発掘区から第４発掘区までが、左京二条四坊七・十坪間の南北道路である東四坊坊間路に、第５発掘区から第８発掘区までは十坪の南西辺に相当する。このため、東四坊坊間路の確認と、左京二条四坊十坪の南西辺の様相解明を調査の主たる目的とした。なお、発掘区を設定した水田の地割は南北に長いが、南に接する水田は東西に長い。字名「川田」というこの水田は奈良文化財研究所第183-10次調査で、河川が確認されている。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本的な層序は、黒褐色の耕作土以下、明灰色細砂土（床土）、淡灰色粘土と続き、現地表下0.4～0.5ｍで黄褐色粘土または黄灰色粘土の地山に至る。地山の標高は第１～３発掘区では65.7～65.9ｍで、北から南へ緩やかに低くなっている。第４～８発掘区は65.8～66.2ｍで東から西へ向かって低くなっている。各発掘区とも遺構検出は地山上面で行った。なお、第６発掘区東部から第７発掘区西部では、南辺に淡灰色粘土と地山との間に、暗灰褐色粘土や灰白色砂が堆積していた。これらは前述した発掘区南側で確認されている河川の氾濫堆積土と考える。



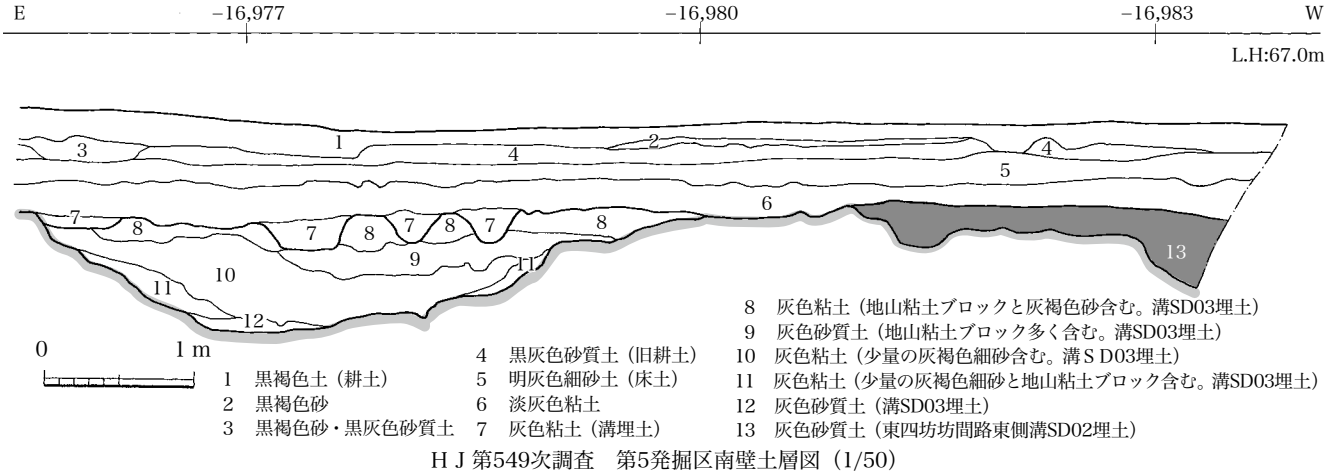
ＨＪ第549・598次調査　発掘区位置図
（１～３はHJ第598次調査区、４～８はHJ第549次調査区、1/5,000）

Ⅲ　検出遺構

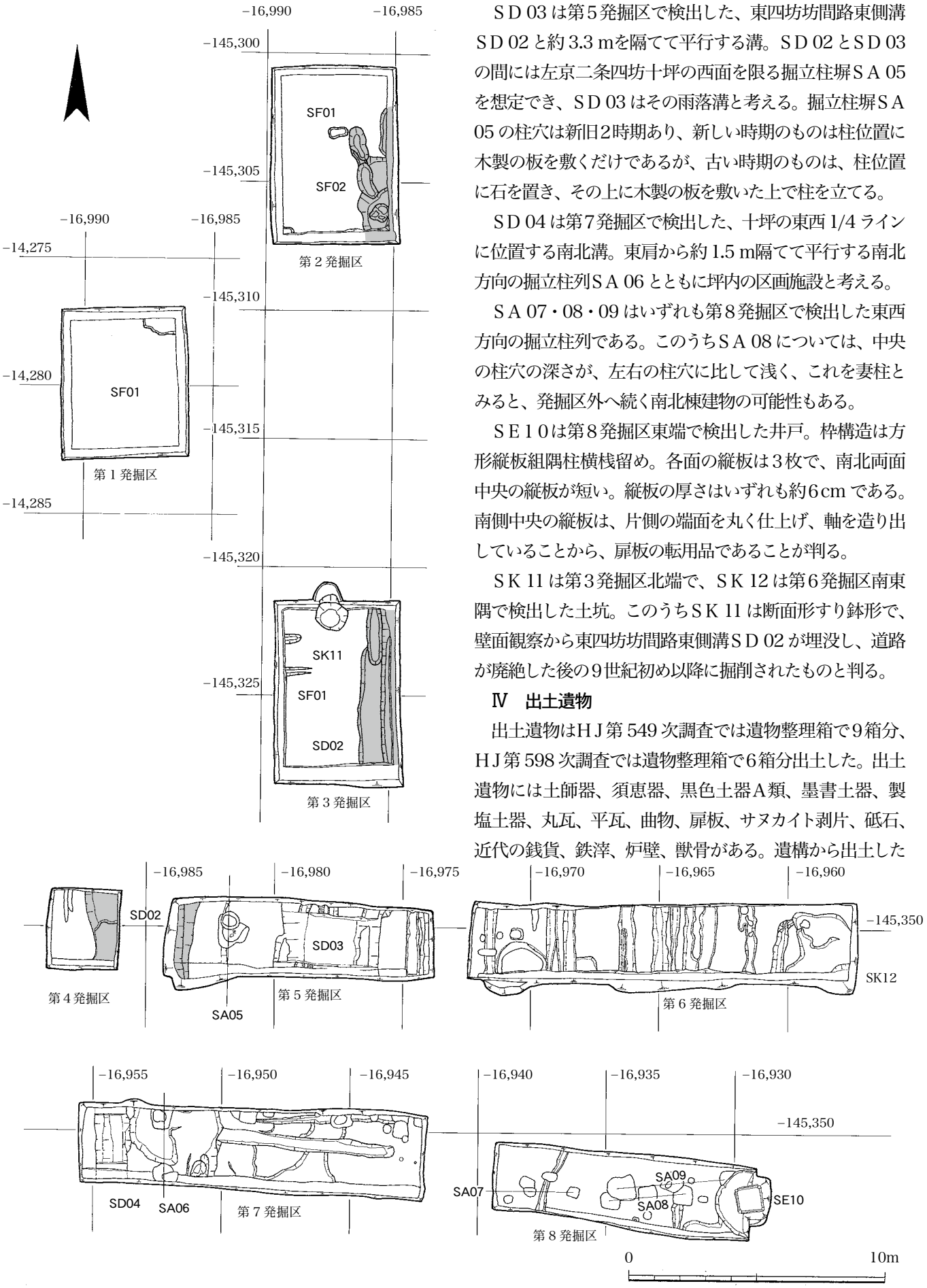
検出遺構には、東四坊坊間路、同東側溝、十坪西面を限る掘立柱塀、同雨落溝、井戸、掘立柱列、溝、土坑がある。

ＳＦ01は東四坊坊間路。第１～４発掘区で検出した。東側溝は確認できたが、西側溝は発掘区外西方であり、幅約1.5～4.0ｍ分を検出したに過ぎない。路面上に舗装の痕跡は無かった。なお、東四坊坊間路は奈良文化財研究所の第141-９次調査で、東西両側溝が確認されており、側溝心々間の距離が9.0ｍであることが明らかにされている。

ＳＤ02は東四坊坊間路東側溝。第２～５発掘区で検出した。第２～４発掘区で西肩を、第５発掘区では東肩を検出し、溝幅3.6～4.4ｍに復元できる。ただし第２発掘区の北半部では、溝の西肩が発掘区外東へ続くことから、溝幅は狭くなっていると判る。溝底は北から南に下る。



ＨＪ第549次調査　第５発掘区南壁土層図（1/50）



ＨＪ第549・598次調査　発掘区遺構平面図　（1/200・網目部分は東四坊坊間東側溝　ＳＤ02）

ＳＤ03は第５発掘区で検出した、東四坊坊間路東側溝ＳＤ02と約3.3ｍを隔てて平行する溝。ＳＤ02とＳＤ03の間には左京二条四坊十坪の西面を限る掘立柱塀ＳＡ05を想定でき、ＳＤ03はその雨落溝と考える。掘立柱塀ＳＡ05の柱穴は新旧2時期あり、新しい時期のものは柱位置に木製の板を敷くだけであるが、古い時期のものは、柱位置に石を置き、その上に木製の板を敷いた上で柱を立てる。

ＳＤ04は第７発掘区で検出した、十坪の東西1/4ラインに位置する南北溝。東肩から約1.5ｍ隔てて平行する南北方向の掘立柱列ＳＡ06とともに坪内の区画施設と考える。

ＳＡ07・08・09はいずれも第８発掘区で検出した東西方向の掘立柱列である。このうちＳＡ08については、中央の柱穴の深さが、左右の柱穴に比して浅く、これを妻柱とみると、発掘区外へ続く南北棟建物の可能性もある。

ＳＥ10は第８発掘区東端で検出した井戸。枠構造は方形縦板組隅柱横桟留め。各面の縦板は３枚で、南北両面中央の縦板が短い。縦板の厚さはいずれも約6cmである。南側中央の縦板は、片側の端面を丸く仕上げ、軸を造り出していることから、扉板の転用品であることが判る。

ＳＫ11は第３発掘区北端で、ＳＫ12は第６発掘区南東隅で検出した土坑。このうちＳＫ11は断面形すり鉢形で、壁面観察から東四坊坊間路東側溝ＳＤ02が埋没し、道路が廃絶した後の９世紀初め以降に掘削されたものと判る。

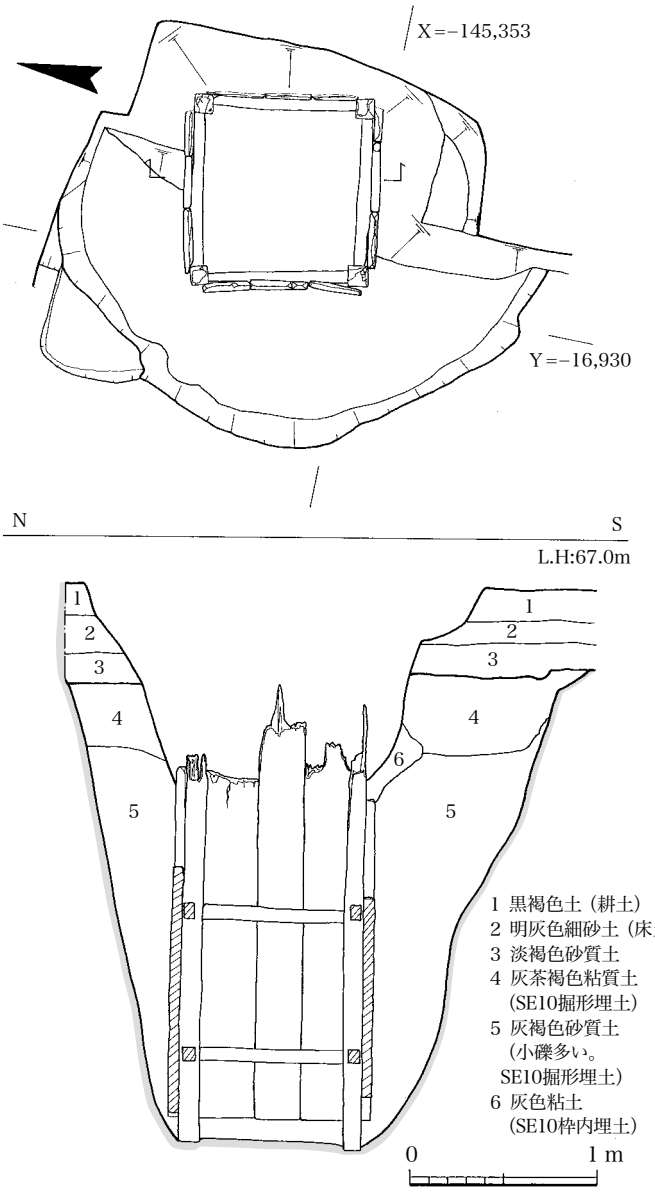
Ⅳ　出土遺物

出土遺物はＨＪ第549次調査では遺物整理箱で９箱分、ＨＪ第598次調査では遺物整理箱で６箱分出土した。出土遺物には土師器、須恵器、黒色土器Ａ類、墨書土器、製塩土器、丸瓦、平瓦、曲物、扉板、サヌカイト剥片、砥石、近代の銭貨、鉄滓、炉壁、獣骨がある。遺構から出土した

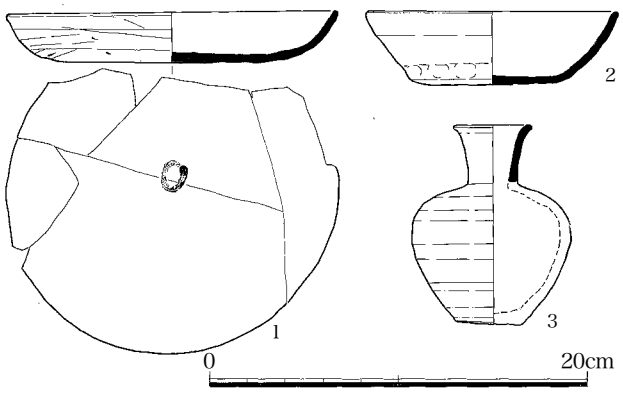
HJ第549・598次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	方向	規模（間）	全長（m）	柱間寸法（m）	備考
ＳＡ05	南北	1以上			十坪西面を限る掘立柱塀と考える。新旧2時期あり。柱穴深さは新旧とも0.6m。
ＳＡ06	南北	1以上	2.4以上	2.4	坪内東西1/4ラインに位置しており、坪内を区画する掘立柱塀と考える。柱穴深さは0.5m。
ＳＡ07	東西	1以上	1.8以上	1.8	柱穴深さは0.3m。
ＳＡ08	東西	2	3.6	1.8等間	南北棟掘立柱建物の北側または南側柱の可能性を考える。柱穴深さは両端が0.5m、中央が浅く0.3m。
ＳＡ09	東西	2	4.2	2.1等間	遺構の重複関係からＳＡ08より新しい。柱穴深さは0.1～0.2m。

遺構番号	掘形等			井戸枠		主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	構造	内法		
ＳＦ01	南北道路		—	—	—	—	東四坊坊間路。
ＳＤ02	南北溝	復原幅3.6～4.4	0.1～0.5	—	—	8世紀後半～末：土師器・須恵器、8世紀末～9世紀初め：黒色土器A類、製塩土器、丸瓦、平瓦、鉄滓	東四坊坊間路東側溝。
ＳＤ03	南北溝	幅3.7～4.0	0.7	—	—	8世紀後半以降：土師器・須恵器、獣骨	十坪西面を画する溝。
ＳＤ04	南北溝	幅1.3	0.2	—	—	8世紀：土師器・須恵器、丸瓦、平瓦	十坪内東西1/4ラインに位置する。
ＳＥ10	円形	径2.6	2.6	方形縦板組隅柱横桟留め	一辺0.9	枠内）8世紀末～9世紀前半：土師器・須恵器、墨書土器、丸瓦、平瓦、曲物、獣骨 掘形）8世紀後半以降：土師器・須恵器、製塩土器、曲物	南側中央の縦板は扉板の転用材。遺構の重複関係からＳＡ09より新しい。
ＳＫ11	不整円形	南北1.4×東西1.3	0.5	—	—	8世紀末～9世紀初め：土師器・須恵器、製塩土器	
ＳＫ12	円形	径0.3以上	0.3	—	—	8世紀：須恵器	



ＨＪ第549次調査　井戸ＳＥ10平面・断面図（1/40）



HJ第549次調査　井戸ＳＥ10枠内出土遺物（1/4）

遺物のうち、時期のわかるものは、表に掲げた（原田憲二郎）

土器類　図示したのは井戸ＳＥ10枠内出土の底部外面に墨書のある土師器皿Ａ（1）、椀（2）、須恵器壺Ｍ（3）である。壺Ｍの底部外面には糸切り痕が残る。（池田富貴子）

Ⅴ　調査所見

東四坊坊間路東側溝は第2発掘区南半から溝幅が広くなり、溝底は北から南に下ることがわかった。発掘区南方に想定される二条条間路北側溝への合流を意図した排水計画によるものと考える。十坪の様相は、ＳＡ08・ＳＡ09・ＳＥ10の重複関係から、少なくとも3時期の遺構あることがわかった。

なお、本調査区南に位置する市ＨＪ第180次調査では、南北溝ＳＤ49・50が検出され、坪内の区画溝と報告されている。近年、このＳＤ49・50が、中ツ道東側溝ではないかとの指摘[1)]がある。中ツ道の幅員は遺存地割の分析から28.32ｍと推定されている。南北溝ＳＤ49・50が中ツ道東側溝であり、中ツ道西側溝が残っておれば、本調査の第8発掘区内で確認できるはずであるが、該当するとみられる南北溝は検出できなかった。（原田憲二郎）

1）井上和人「平城京下層中ツ道の検証」『飛鳥文化財論攷－納谷守幸氏追悼論文集－』納谷守幸氏追悼論文集刊行会　2005

第1発掘区（ＨＪ第598次）全景（北から）

第５発掘区（ＨＪ第549次）全景（東から）

第２発掘区（ＨＪ第598次）全景（南から）

第6発掘区（ＨＪ第549次）全景（東から）

第３発掘区（ＨＪ第598次）全景（南から）

第７発掘区（ＨＪ第549次）全景（東から）

第４発掘区（ＨＪ第549次）全景（東から）

第8発掘区（ＨＪ第549次）全景（西から）

22. 平城京跡（左京四条三坊九・十六坪・東三坊坊間東小路）の調査　第599次

事 業 名	共同住宅新築	調 査 期 間	平成20年２月４日～３月25日
届出者名	大和ハウス工業株式会社	調 査 面 積	618㎡
調 査 地	三条添川町131-２・131-３	調査担当者	中島和彦

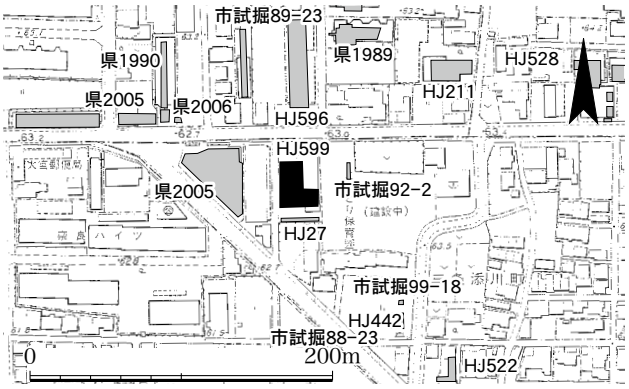
Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条三坊九坪の北東部と東三坊坊間東小路、十六坪の西端の一部にあたる。調査地の南側の発掘調査（市ＨＪ第27次）では、奈良時代の東三坊坊間東小路とその東西両側溝を検出している。また西側30ｍ地点の発掘調査（県2004年度調査）では、東堀川とその両岸の掘立柱建物を確認している。今回の発掘調査は、東三坊坊間東小路と九坪内の様相の確認を目的として行った。また奈良時代の遺構面の下に縄文土器を含む河川を確認したことから、一部で下層調査を行った。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、発掘区南部で上から造成土（１）、耕作土（２）、暗灰色砂質土（５）、灰色砂質土（８）、暗オリーブ灰色砂質土（９）とつづき、現地表下約1.4～2.0ｍで灰色粗砂層（17）を主体とした河川堆積土層にいたる。この層上面が古墳時代～奈良時代の遺構面で、遺構検出はこの上面で行った。遺構面の標高は60.9～61.1ｍで、発掘区内ではほぼ平坦である。

また遺構面下の河川堆積層を一部で掘り下げたところ、発掘区北半部では遺構面下約0.2ｍ（標高60.8ｍ）で、黄褐色粘土の地山が現れ、河川の北岸を確認した。それ以南では、粗砂層とシルト層が複雑に堆積しており、明確な下層の遺構面は確認できなかった。発掘区北半の国土座標Ｙ＝-17,387ラインの遺構面下の堆積土層を示すと（96頁河川土層図）、上から明青白色シルト（Ａ）、



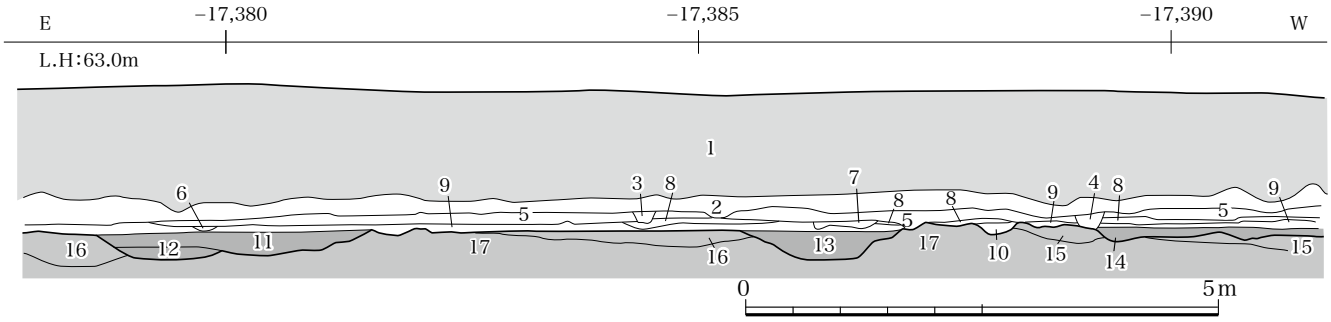
ＨＪ第599次調査　発掘区位置図（1/5,000）

オリーブ灰色粘土（Ｂ）、暗褐色粘土（Ｃ）と続き、黄褐色粘土の地山（Ｈ）となる。南側は河川の堆積土である。河川内の堆積は上から灰色砂礫（Ｄ）、明青灰白色シルト（Ｅ）、暗灰色砂質土（腐植土多く含む・Ｆ）灰色砂礫（Ｇ）となり、深さ約1.3ｍまで掘削したが底には到らなかった。Ｅ層からは後述する縄文時代後期と考えられる土器が出土した。土器は掘形を伴わず、東西約0.6ｍ南北約0.4ｍの範囲でほぼ水平に散らばって出土した。土器出土地点は標高約60.6ｍである。

Ⅲ　検出遺構

検出遺構には、古墳時代の溝１条、土坑２基、奈良時代の東三坊坊間東小路とその東西両側溝、掘立柱建物10棟、掘立柱列７条、土坑等がある。なお遺構番号は、市ＨＪ第27次調査に一部を追加してその続きとした。各遺構の詳細は一覧表に記す。

古墳時代の遺構　溝ＳＤ29は、奈良時代の遺構によっ



1　造成土
2　耕作土
3　淡黒褐色土
4　黒褐色粘質土
5　暗灰色砂質土
6　灰色砂質土
7　黒褐色粘質土
8　灰色砂質土
9　暗オリーブ灰色砂質土
10　茶褐色砂質土
11　暗灰色砂質土（SD06）
12　灰色砂質土（SD06）
13　暗灰色砂質土（SD05）
14　暗茶褐色砂質土（SX27）
15　暗オリーブ灰色粘土（河川埋土）
16　暗オリーブ灰色シルト（河川埋土）
17　灰色祖砂（河川埋土）

ＨＪ第599次調査　発掘区南壁土層図（1/80）

て上面が削平され、溝底の一部が残る。溝底には凹凸があり、発掘区東側では幅 2.8 m、長さ 6.2 mにわたって大きく窪む。埋土は下層が粘土、上層が砂を主体とする。

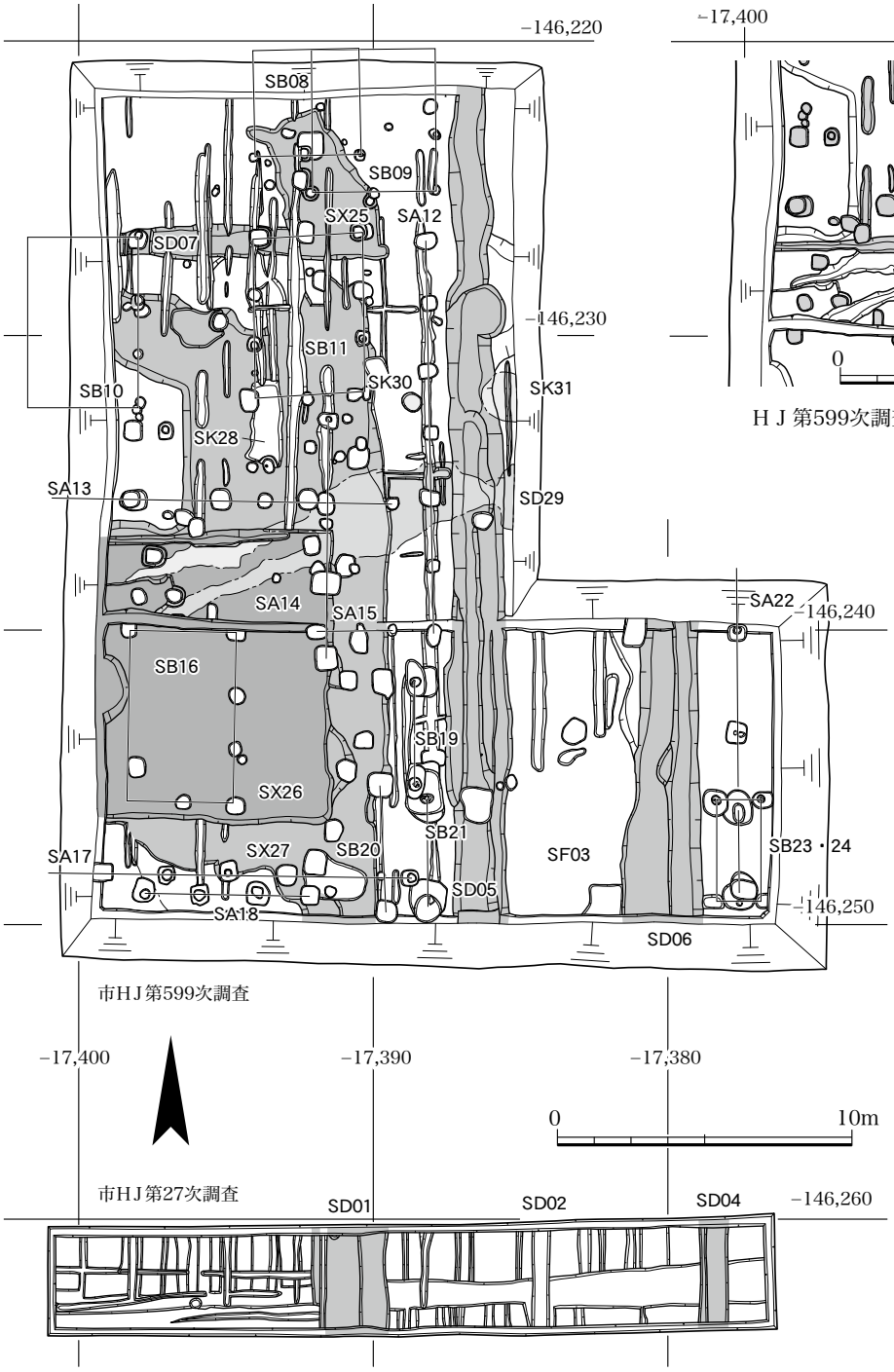
奈良時代の遺構　東三坊坊間東小路ＳＦ 03 は、発掘区南半部で長さ約 10 m分を確認した。東西両側溝を確認し、道路幅は溝心心間で 7.0 m、路面幅は 4.5 mある。道路心・側溝心の国土座標値は一覧表に記した。ＳＤ 05・06 は、東三坊坊間東小路西側溝と東側溝で、溝の主軸は北でやや西に振れる。溝底はいずれも南側が低い。ＳＤ 06 は埋土が上下２層に分かれ、上層部分は大きく道路側に広がり路面を浸食する。溝幅は上層部分を含むと 1.9 ～ 2.9 mで、下層部分のみでは 1.0 ～ 1.3 mとなる。なお先述の溝心の座標値は下層部分のみで計測した。

建物 10 棟・柱列７条が復元できた。特徴的な遺構として、東三坊坊間東小路に面して開く門がある。九坪側にはＳＢ 20・21 が、十六坪側はＳＢ 23・24 がほぼ向かい合って建ち、いずれも同位置に立て替えられる。九坪側ではさらに北側に門ＳＢ 19 が築かれる。十六坪側

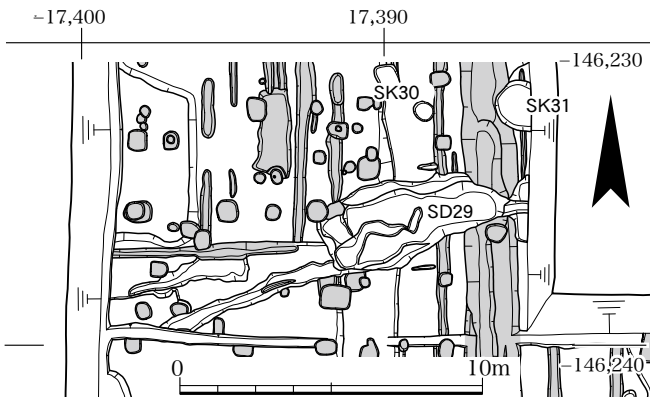
ＨＪ第599次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模	桁行全長	梁間全長	桁行柱間寸法	梁間柱間寸法	廂の出	備考
		（桁行 × 梁間）	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	
ＳＢ08	南北？	2 × 1 以上	不明	3.6	不明	1.8 等間		
ＳＢ09	南北？	3 × 1 以上	1.8 以上	4.2	1.8	2.1 等間		
ＳＢ10	南北？	3 × 1 以上	5.7	不明	北から 2.1-1.8-1.8	不明		ＳＤ07 より新、ＳＫ27 より古
ＳＢ11	南北	3 × 2	5.4	3.9	1.8 等間	1.95 等間		ＳＤ07 より新、ＳＸ27 より古
ＳＢ16	南北	3 × 2	5.7	3.6	北から 2.1-1.8-1.8	1.8 等間		ＳＸ26・27 より古
ＳＢ19	南北	1	3.45		3.45			門か、軒平瓦 6763Ａ出土
ＳＢ20	南北	1	4.5		4.5			門か
ＳＢ21	南北	1	3.6		3.6			門か
ＳＢ23	南北	1	2.7		2.7			門か、ＳＢ24 より古、 軒平瓦 6721Ａ
ＳＢ24	南北	1 以上 ×1 以上	3.45 以上	1.5 以上	3.45	1.5		四脚門か、ＳＢ23 より新、
ＳＡ12	南北	6	13.5		2.25 等間			
ＳＡ13	東西	3 以上	9.0 以上		3.0 等間			ＳＸ27 より古
ＳＡ14	南北	3	8.1		2.7 等間			ＳＸ26・27 より古
ＳＡ15	東西	1	2.7		2.1			ＳＸ26・27 より古
ＳＡ17	東西	5 以上	10.5 以上		東から 4.2-2.1-2.1 -2.1			ＳＸ27 より古
ＳＡ18	東西	3	5.4		1.8 等間			ＳＸ27 より古
ＳＡ22	南北	2 以上	6.3 以上		南から 2.7-3.6			ＳＢ23 に接続

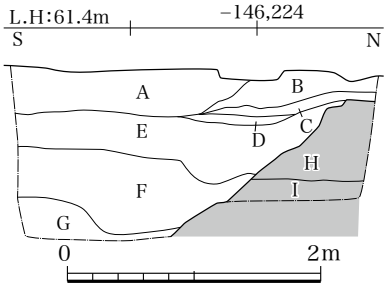
遺構番号	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主な出土遺物	備考
ＳＤ01	南北	幅 0.8× 長さ 3.6 以上	0.2			ＨＪ第 27 次発掘区 ＨＪ第 599 次 ＳＸ26 と接続か
ＳＤ02	南北	幅 0.5× 長さ 3.8 以上	0.3			ＨＪ第 27 次発掘区 ＨＪ第 599 次との接続不明
ＳＤ04	南北	幅 1.0× 長さ 3.9 以上	0.1			ＨＪ第 27 次発掘区 ＨＪ第 599 次 ＳＤ06 と接続か
ＳＦ03	南北	幅 7.0× 長さ 10.0 以上				東三坊坊間東小路 道路心　X=−146,246.0 Y= −17,382.9
ＳＦ05	南北	幅 1.0～2.2× 長さ 28.5 以上	0.2～0.3	８世紀後半	土師器杯・皿・椀・甕、須恵器杯・蓋・盤・甕、製塩土器、丸瓦・平瓦、塼	東三坊坊間東小路西側溝 溝心　X=−146,246.0 Y= −17,386.4
ＳＤ06	南北	幅 1.0～2.9× 長さ 10.5 以上	0.25～0.3	８世紀後半	土師器杯・甕、須恵器杯・甕、 丸瓦・平瓦、石材（千枚岩）	東三坊坊間東小路東側溝 溝心　X=−146,246.0 Y= −17,379.4
ＳＤ07	東西	幅 0.85～1.1× 長さ 9.5 以上	0.25		土師器壺、須恵器杯	ＳＢ10・11 より古、 西側県 2004 年調査区までつづき、長さ約 66m となる ＳＸ25 と接続
ＳＸ25	不整形	東西 1.3× 南北 3.6	0.1	８世紀 中頃～後半？	土師器杯・皿・甕、須恵器杯・鉢・壺・甕、 製塩土器、平瓦	ＳＤ07 と接続
ＳＸ26	長方形	東西 9.0 以上 × 南北 10.0	0.3	８世紀 後半～末	土師器杯・皿・椀・高杯・甕・甑・竈、 須恵器杯・蓋・皿・高杯・盤・壺・甕、 製塩土器、軒平瓦、丸瓦・平瓦、塼	ＳＸ27 より古
ＳＸ27	不整形	東西 10.0 以上 × 南北 21.0 以上	0.1～0.2	８世紀 後半～末	土師器杯・皿・椀・高杯・盤・壺・甕・甑、 須恵器杯・蓋・皿・盤・甕、黒色土器Ａ類椀、 製塩土器、軒丸瓦（6282Ｄ）、軒平瓦（6663Ｂ・ 6721Ａ）丸瓦、平瓦、塼、砥石、鉄釘	ＳＸ26 より新
ＳＫ28	長方形	東西 1.1× 南北 2.9	0.2	８世紀 後半～末	土師器杯・皿・椀・甕、須恵器杯・蓋・甕、 製塩土器、軒丸瓦（型式不明）、丸瓦、平瓦	ＳＸ27 より古
ＳＤ29	東西	幅 0.4～3.0× 長さ 13.0 以上	0.25～0.7	古墳時代前期	土師器高杯・小型器台・壺・甕	
ＳＫ30	円形	径 0.7	0.5	古墳時代前期	土師器甕	底から 0.1m 上に薄い炭層
ＳＫ31	円形	東西 1.2 以上 × 南北 1.7	0.5	古墳時代前期	土師器高杯・甕、木製品（曲柄平鍬）	湧水はげしい



ＨＪ第27・599次調査　遺構平面図（1/250）



ＨＪ第599次調査　古墳時代遺構平面図（1/250）



A　明青灰白色シルト　　F　暗灰色砂質土
B　オリーブ灰色粘土　　（腐植土多く含む）
C　暗褐色粘土　　G　灰色砂礫
D　灰色砂礫　　H　黄褐色粘土
E　明青灰白色シルト　　I　明青灰色シルト

ＨＪ第599次調査　河川土層図（1/60）

縄文土器出土状況（北から）

のＳＢ24は、発掘区東側につづき四脚門になると考えられる。南西隅の柱穴の底には礎石が、その他の柱穴には礎板が使われる。これらの門は坪の南北1/3ライン近くに位置する。

九坪内の掘立柱建物・列は、重複関係から3時期以上に分かれる。柱穴・平面の規模から中小規模の建物が多く、柱間が不等間で、平面形もやや歪なものがある。位置関係から門ＳＢ20・21とＳＡ18が、ＳＢ19とＳＡ12・17が同時期と考えられ、九坪の北側1/3を塀で区画し、区画南端に門が開くことがわかる。

ＳＸ27（図中網掛け部分）は、発掘区内のほぼ九坪側全域に広がる浅い窪み状の遺構である。不整形な平面形であるが、東の肩はほぼ直線的で、西側溝ＳＤ05と平行する。東南隅で市ＨＪ第27次調査のＳＤ01と接続するものと考えられる。

Ⅳ　出土遺物

土器類が遺物整理箱8箱、瓦類が8箱、木製品（曲柄平鍬）、石製品（砥石等）、サヌカイト剥片、鉄釘がある。各遺構出土のものは遺構一覧表に記す。土器の大半は奈良時代のもので、8世紀後半頃のものが目立つ。河川出土の縄文土器について記す。

縄文土器　後期前半と考えられる縄文土器の破片が約

発掘区北半全景（北から）

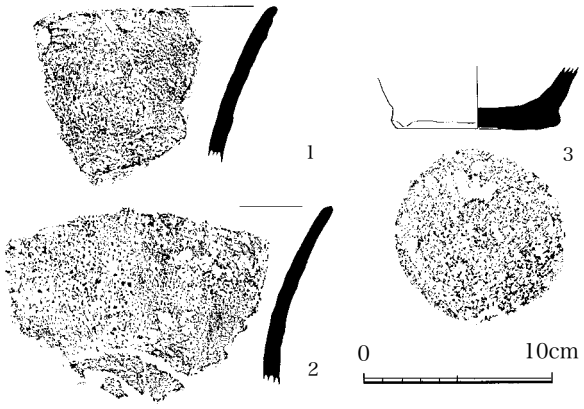
発掘区南半全景（西から）

30点ある。

１・２は深鉢の口縁部の破片である。内外面はナデ調整で、部分的に巻具による条痕が残る。口縁部は緩く外反している。

３は底部の破片である。平底で底部からの立ち上がりがやや外開きになる。底径8.9㎝。内外面はナデ調整されており、底面には爪痕がわずかに残る。

出土した縄文土器は、図示した以外に胴部片もあり、胎土や出土状況から同一個体である可能性が高い。この個体の他に横方向にミガキ調整を施す破片が4片ある。いずれも無文で型式は不明であるが、形態から概ね北白川上層式に伴うものであると考えられる。河川内明青灰白色シルト層（E層）から出土。　（久保邦江）



ＨＪ第599次調査　河川出土縄文土器（1/4）

Ⅴ　調査所見

今回の発掘調査では、当初の目的通り東三坊坊間東小路を検出し、九坪内には中小の掘立柱建物が8世紀後半頃に建てられていることが確認できた。また縄文時代の河川を確認し、僅かであるが縄文土器が出土した。

東三坊坊間東小路については、南隣接地の発掘調査（市ＨＪ第27次調査）と異なる結果となった。この調査ではＳＤ01とＳＤ02間を東三坊坊間東小路としたが、今回の調査により正確な小路位置が確定した。遺構の位置関係から、ＨＪ第27次調査のＳＤ01が今回のＳＸ27の続きで、新たに番号を付したＳＤ04が東側溝ＳＤ06の続きと考えられる。しかしながら、西側溝ＳＤ05の続きが南側で確認されず、ＳＤ02の続きも北側では確認出来なかった。南側の遺構面が大きく削平されたとは考えられないことから、西側溝ＳＤ05は

１、HJ第27次調査地北で途切れる

２、HJ第27次調査地北で東西いずれかに折れる

３、HJ第27次調査地北で曲がりＳD02に接続するとなろう。いずれにしろ異常な条坊施工となる。

縄文時代については、調査地西側の県2004年度調査でも、縄文時代後期の加工木が河川内から出土しており、縄文時代の河川が両調査地周辺に広がることがわかる。今後周辺の調査においては、縄文時代の遺構・遺物に対する注意が必要であろう。　（中島和彦）

23. 平城京跡（左京二条五坊北郊）の調査　第600次

事 業 名	宅地造成	調 査 期 間	平成20年２月４日～２月22日
届出者名	株式会社　八州エイジェント	調 査 面 積	150㎡
調 査 地	奈良市法蓮町717　他	調査担当者	安井宣也

Ⅰ　はじめに

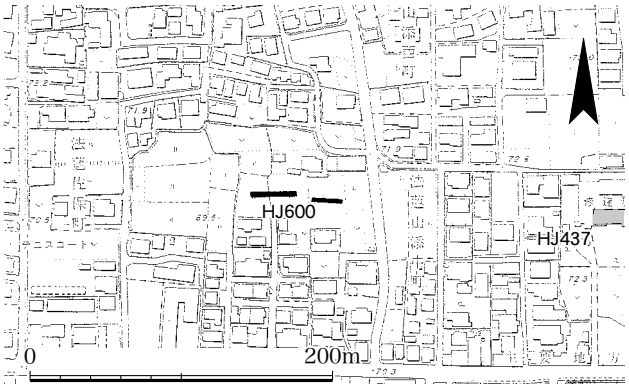
調査地は佐保川右岸の沖積平野の北縁に位置し、平城京の条坊復原では左京二条五坊北郊の西辺南寄りにあたる。現状は水田や畑地で、東から西に緩やかに下る。

調査地の東方約250 mの旧奈良高校敷地内では、昭和29年から同63年までの間に計６回の調査が行われ、奈良時代から平安時代初頭にかけての宅地と鎌倉時代初頭の集落に関連する遺構が確認された。また、東方約150 mのところで平成11年に実施した市ＨＪ 437次調査では、古墳時代後期の小規模な前方後円墳であるヤイ古墳（墳丘の全長18.5 m､南西向き）が確認されている。

今回の調査は、奈良時代の土地利用の様相の把握を主な目的とし、東西２箇所の発掘区を設定して実施した。

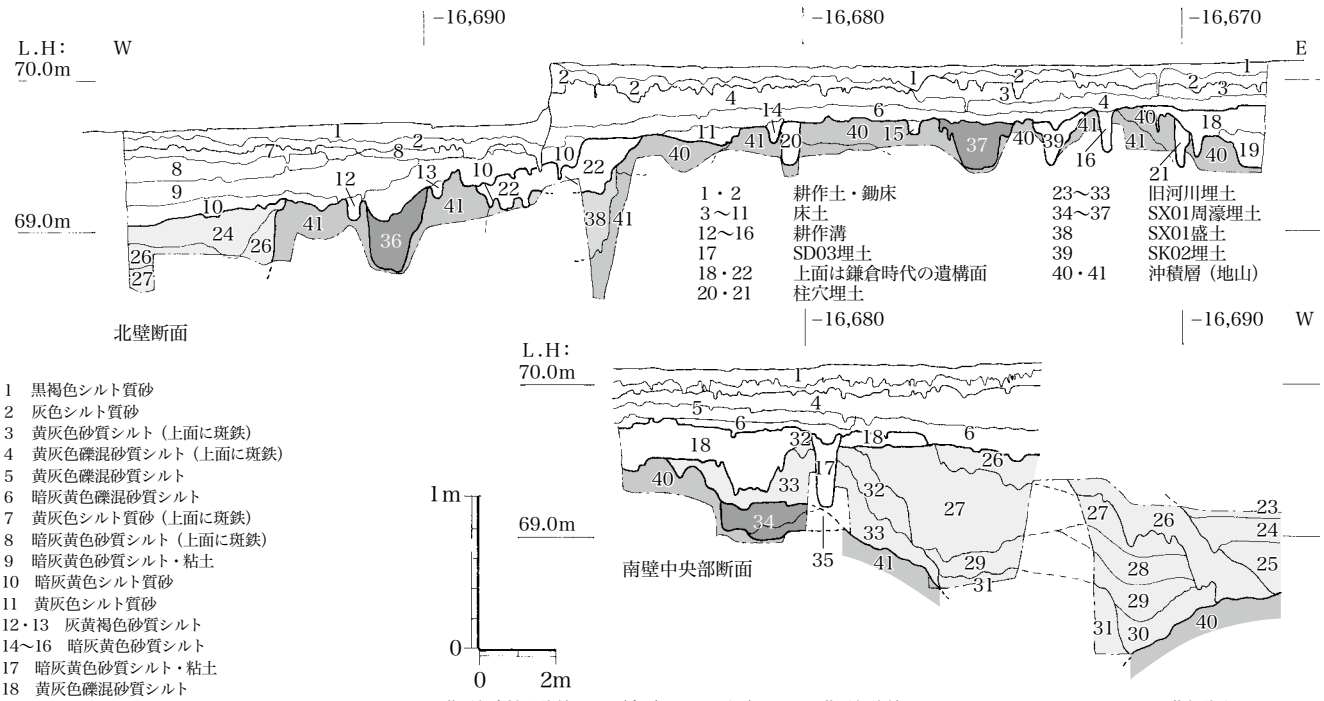
Ⅱ　基本層序

東･西発掘区とも、概して耕作土･鋤床（厚さ0.2 m）･床土（２～３層あり、厚さ0.2～0.3 m）の下で沖積層の地山や後述する旧河川の上面となる。地山上面は古墳



ＨＪ第600次調査　発掘区位置図（1/5,000）

～平安時代の遺構面で、東から西に下っており、その標高は東発掘区西辺が69.9 m、西発掘区が69.2～69.8 mである。また、西発掘区の南東部で地山及び旧河川上を覆う砂質シルト層（図中18層）と同中央部で後述の古墳ＳＸ01及び旧河川上を覆う砂質シルト層（図中22層）の上面は鎌倉時代初頭の遺構面で、後者の層には古墳時代中期後半の埴輪片や８世紀の土器片を含む。



1　黒褐色シルト質砂
2　灰色シルト質砂
3　黄灰色砂質シルト（上面に斑鉄）
4　黄灰色礫混砂質シルト（上面に斑鉄）
5　黄灰色礫混砂質シルト
6　暗灰黄色礫混砂質シルト
7　黄灰色シルト質砂（上面に斑鉄）
8　暗灰黄色砂質シルト（上面に斑鉄）
9　暗灰黄色砂質シルト・粘土
10　暗灰黄色シルト質砂
11　黄灰色シルト質砂
12･13　灰黄褐色砂質シルト
14～16　暗灰黄色砂質シルト
17　暗灰黄色砂質シルト・粘土
18　黄灰色礫混砂質シルト
19　灰黄色シルト質砂
20　黄灰色砂質シルト
21　暗灰黄色砂質シルト・粘土
22　黄灰色礫混砂質シルト（土器・埴輪片）
23　黒褐色砂質シルト・粘土
24　黒褐色砂質シルト・粘土中に浅黄色砂ラミナが混在
25　黄灰色砂質シルト中に灰黄色砂ラミナが混在（土器片）
26　黄灰色腐植混砂質シルト（底面に土器・瓦片）
27　灰色砂・礫ラミナ互層（平行葉理）
28　灰色砂・礫ラミナ互層（斜交葉理）
29　灰色シルト・砂ラミナ互層（平行葉理）
30　オリーブ黒色腐植混砂質シルト・粘土
31　にぶい黄色砂礫
32　暗灰黄色砂質シルト・粘土
33　黄灰色砂質シルト
34　黄灰色砂質シルト・粘土
35　暗灰黄色シルト混砂＋41層ブロック
36　灰黄褐色砂質シルト（埴輪）
37　黒褐色砂質粘土
38　黒褐色砂質シルト・粘土ブロック
39　黄灰色シルト質砂（埴輪）
40　にぶい黄色砂礫
41　灰黄色（上位）砂質シルト・粘土、（下位）シルト質砂

ＨＪ第600次調査　西発掘区土層図（縦：1/50、横：1/200）

東発掘区全景（南西から）

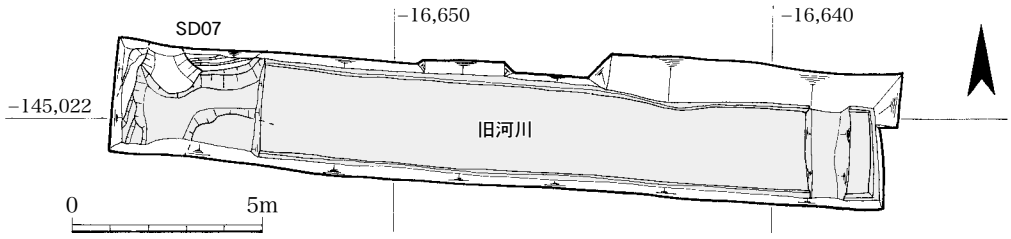
西発掘区全景（東から）

Ⅲ　検出遺構

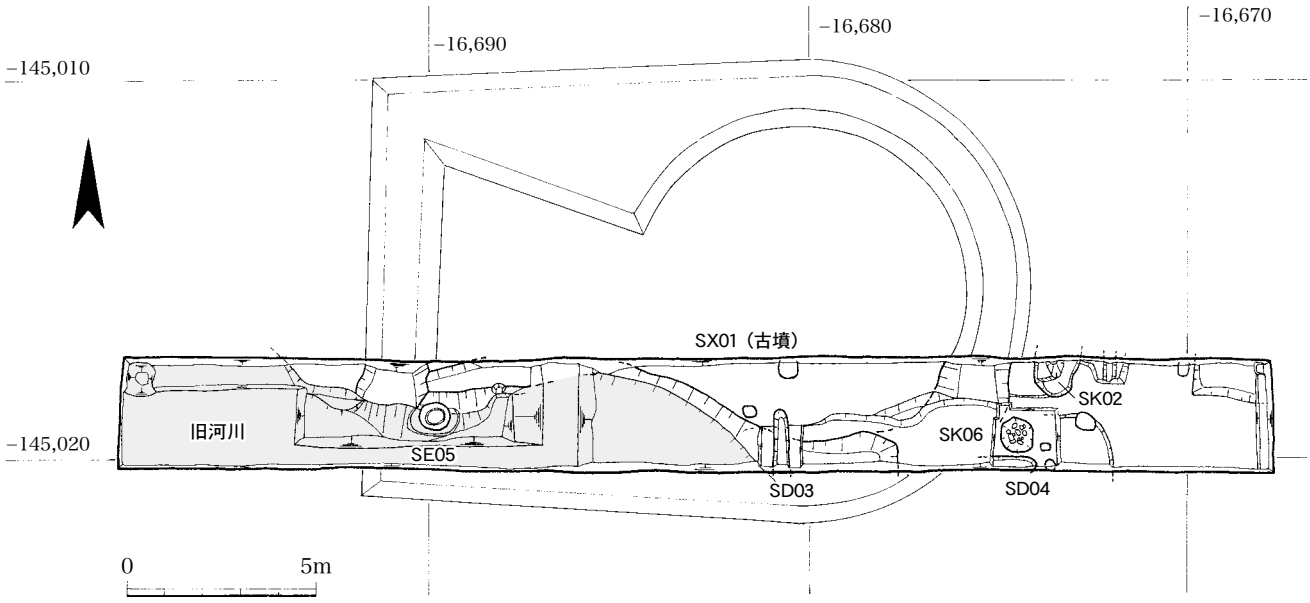
東発掘区では地山上面で古墳時代以前の溝と旧河川を検出した。西発掘区では地山上面で古墳時代中期後半の古墳・土坑、平安時代以前の柱穴と旧河川を、その上を覆う砂質シルト層（図中18・22層）上面で鎌倉時代初頭の溝、井戸、土坑を検出した。古墳と柱穴を除く遺構の概要は表にまとめた。

旧河川　東・西発掘区で西流する旧河川の北岸付近を検出した。深さは１m以上。埋土は州を形成する砂礫層と窪みに堆積した泥層からなり、古墳時代中期後半～後

西発掘区　旧河川（古墳ＳＸ01横、北西から）



ＨＪ第600次調査　東発掘区遺構平面図（１/200）



ＨＪ第600次調査　西発掘区遺構平面図（１/200）

古墳ＳＸ01（西から）

期の埴輪・土器片、８世紀の土器・瓦片と９世紀後半～10世紀初頭の土器片が出土した。

ＳＸ01　西発掘区中央部で検出した西向きの前方後円墳で、旧河川の北岸付近が前方後円墳の基底部と同様の形状を呈し、近接する旧河川の埋土から古墳時代中期後半の埴輪片が多数出土したことから認識できた。

墳丘の南辺部と前方部前面・後円部東面の周濠の一部が確認できたが、後円部南東の墳裾と周濠が後世の切土で、くびれ部及び前方部南側面の墳裾と周濠が旧河川の侵食で消失している。墳丘は後円部が基底部、前方部が２段目の斜面下部までが残る。基本的に地山を成形しているが、前方部南側面の１段目は黒色粘土塊を積み上げて形成している。葺石はみられない。周濠は幅約1.8mで、埋土から古墳時代中期後半の埴輪片が出土した。

規模は、墳丘が全長約15m、後円部径約９m、前方部幅約８m、周濠を含む全長約18mに復原できる。

柱穴　古墳ＳＸ01の後円部上とその東側の地山上面で検出した。一辺0.2～0.3mの平面方形で、深さ0.1～0.2m。出土遺物はないが、上面が鎌倉時代初頭の遺構面である砂質シルト層（図中22層）との先後関係から、平安時代以前のものと推定される。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱で14箱分あり、その内訳は、古墳時代中期後半の埴輪、同後期の土器・埴輪、８世紀の土器・瓦、９世紀後半～10世紀初頭の土器、12世紀末～13世紀前半の土器・木製品・石製品である。主なものを記す。

旧河川出土土器　古墳時代後期の田辺編年ＴＫ43・同209型式の須恵器杯身、８世紀の土師器甕･壷･杯･皿･高杯、須恵器甕・壷・杯・杯蓋・円面硯、三彩小壷と９世紀後半～10世紀初頭の土師器杯Ａ・Ｂがある。８世紀の土器が大半を占める。

瓦　８世紀の丸・平瓦が主に旧河川から、軒丸瓦6274型式Ａｂ種１点が西発掘区の旧河川上を覆う砂質シルト層（図中22層）から出土した。　（安井宣也）

埴輪　埴輪編年第Ⅳ期と第Ⅴ期の埴輪が出土したが、第Ⅴ期の埴輪は東発掘区内に限られる。西発掘区から出土した第Ⅳ期の埴輪は古墳ＳＸ01に伴うと考えられるが、鰭付円筒埴輪（３）は混入品である可能性が高い。

西発掘区出土の第Ⅳ期埴輪　円筒埴輪･鰭付円筒埴輪･朝顔形埴輪・形象埴輪が遺物整理箱で７箱分ある。

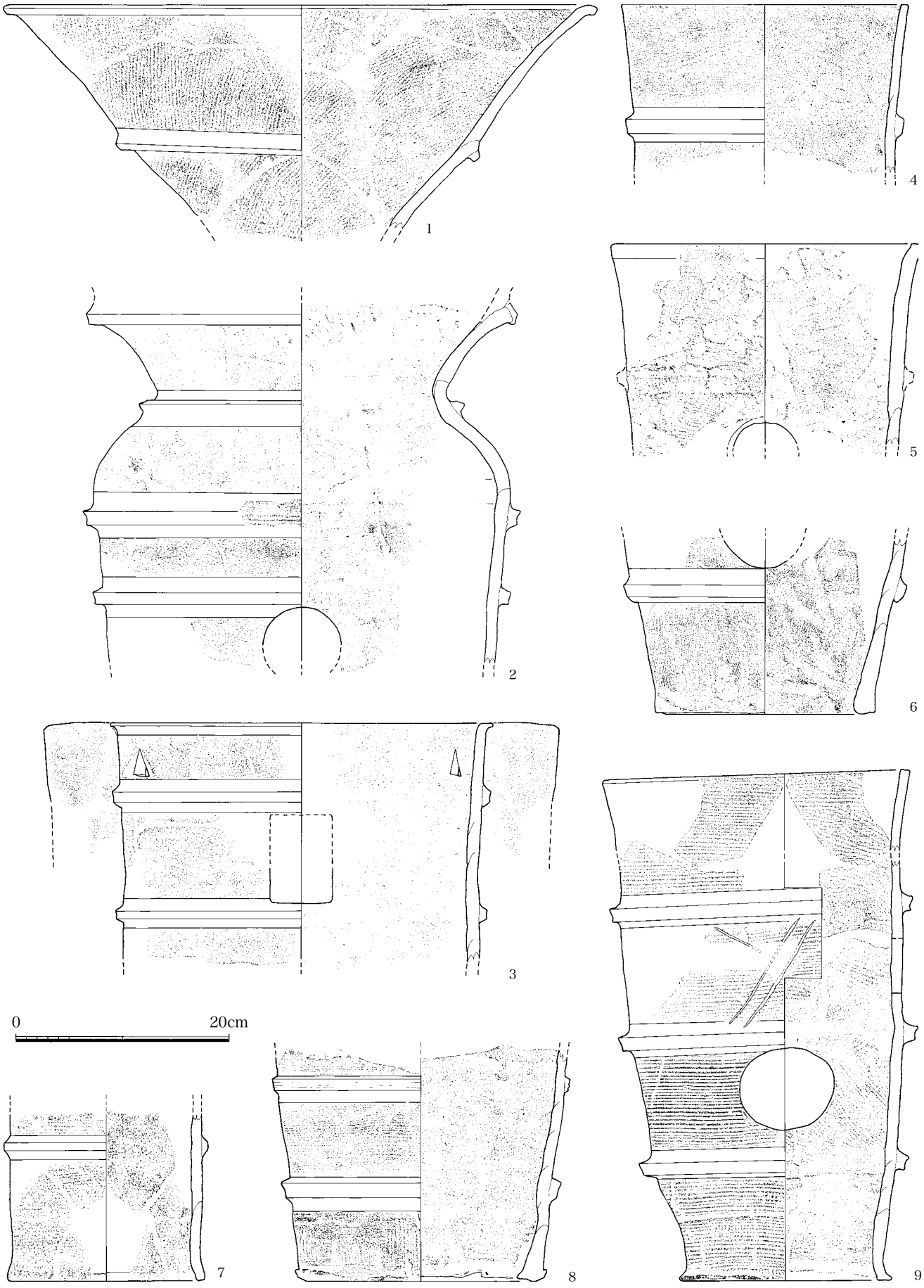
円筒埴輪（４～14）　９は口縁部のみ接合しないが、３条突帯４段構成に復元できる。一方、10は透孔の配置等から４条突帯５段構成であった可能性が高い。したがって、２種の形態が併存したと想定される。３条突帯４段例の器高は、９から48.2㎝前後に復元できる。

口縁部高は４が10.4～10.8㎝、５が12.1㎝、底部高は６が12.4～13.0㎝、７が13.0㎝、８が9.5～9.8㎝、９が11.0～11.8㎝、突帯間隔は８が9.3～9.5㎝、９が上から11.9㎝･12.1～12.5㎝、10が上から9.4㎝･9.1～9.5㎝、11が10.7㎝、12が9.0～9.4㎝、13が8.8～9.0㎝、14が10.6～10.9㎝である。８・９では底部高と突帯間隔が近似値を示し、４・５の口縁部高も他の突帯間隔の範囲内に収まる。したがって、口縁部高・底部高は突帯間隔とほぼ均等になるように製作されたと

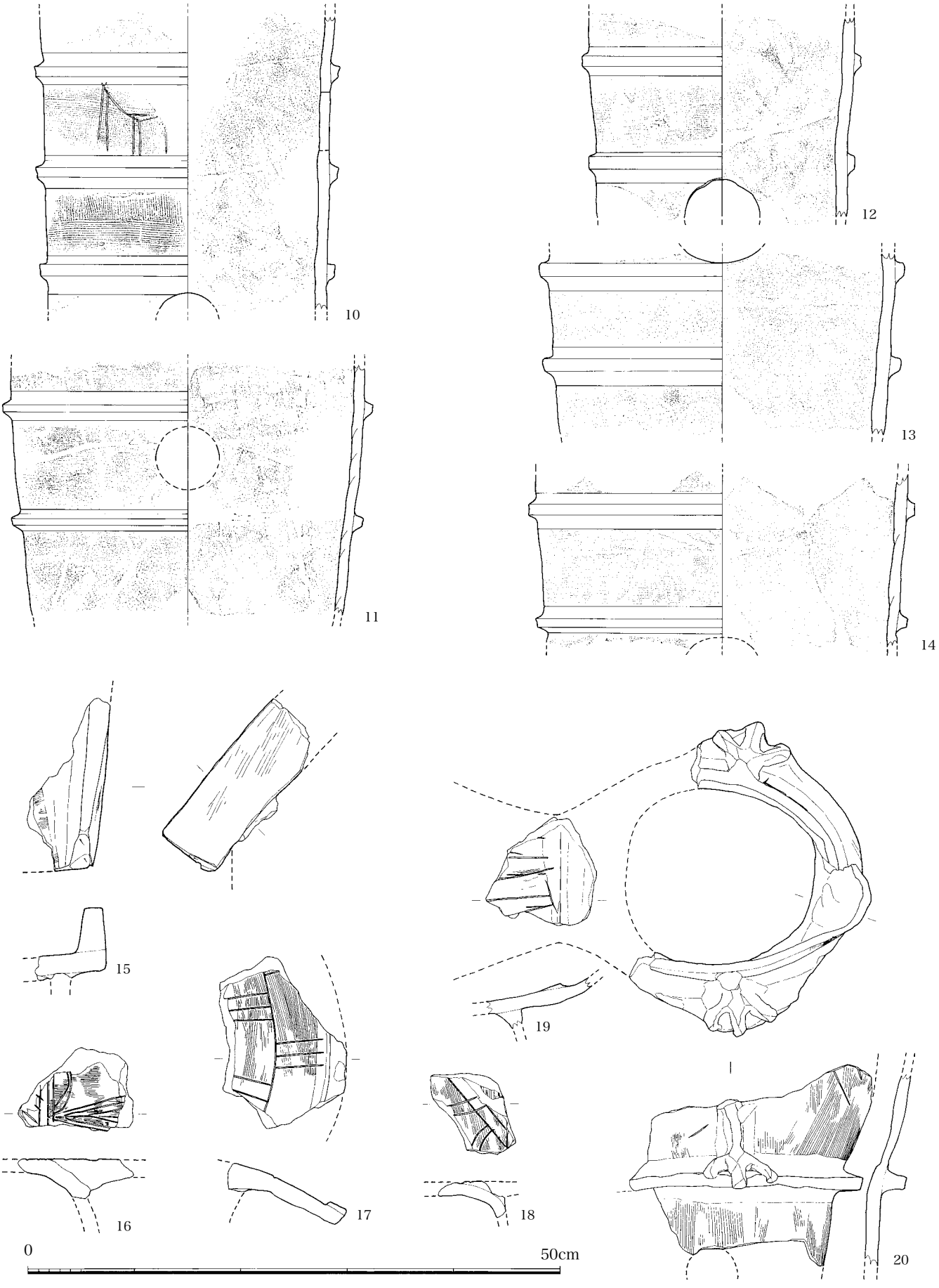
ＨＪ第600次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	平面形	平面規模（m）	深さ（m）	主な出土遺物	備考
ＳＤ03	南北溝	長さ1.6以上×幅0.7	0.4	12世紀末～13世紀前半：瓦器椀・皿、土師器皿、白磁椀	
ＳＤ04	東西溝	長さ1.2以上×幅0.2以上	0.1	12世紀末～13世紀前半：瓦器椀	
ＳＤ07	南北溝	長さ1.0以上×幅1.0	0.6		旧河川より古い
ＳＫ02	不整円形	東西1.2×南北1.0以上	0.4	古墳時代中期後半：朝顔形埴輪	
ＳＫ06	不整円形	東西0.8×南北0.9	0.2	12世紀末～13世紀前半：瓦器椀、土師器皿、砥石	

遺構番号	掘　形			井戸枠		主な出土遺物・備考
	平面形	平面規模（m）	深さ（m）	構造	内法(m)	
ＳＥ05	円形	東西0.8×南北0.7	0.4以上	円形曲物組	径0.45	（枠内）12世紀末～13世紀前半：瓦器椀



ＨＪ第600次調査　出土埴輪①（1/5）



ＨＪ第600次調査　出土埴輪②（1/5）

推定できる。復元口径は４が27.0㎝、５が29.0㎝、９が29.0㎝、底径は６が20.7㎝（復元）、７が18.5㎝（復元）、８が23.6㎝（復元）、９が20.0㎝である。底径・口径はほぼ一定することが推測される。

突帯間隔設定技法には凹線例（５）や突帯上辺にＬ字形工具痕を認める例（10・11）がある。

外面調整は２次調整Ｂ種ヨコハケを行う例がほとんどで、他にタテハケ調整のみが１例（６）、板ナデ調整が１例（13）ある。体部のＢ種ヨコハケにはＢｂ種（９）・Ｂｃ種（８・11・12・14）・Ｂｄ種（10）があり、底部のＢ種ヨコハケはＢｃ種（７～９）に限られる。ヨコハケ工具幅は８が6.7㎝、９が9.2㎝、10が6.5㎝である。

異なるヘラ記号が３例にみとめられ、９・10は上から２段目に記されている。

７は古墳ＳＸ01南側の砂質シルト層（図中22層）、９は古墳ＳＸ01周濠と旧河川、11は古墳ＳＸ01周濠、その他は旧河川出土。

鰭付円筒埴輪（３）　上から３段目の一部までが残る。口縁部高6.2～6.5㎝、突帯間隔11.0～11.3㎝で、口縁部高は突帯間隔より低い。口縁部に小型三角形透孔、上から２段目に方形透孔を確認できる。側面には刻み目を入れて幅6.8㎝・厚さ1.0～1.5㎝の鰭を貼り付ける。表面が著しく風化し、調整は判然としない。旧河川出土。

朝顔形埴輪（１～２）　１は口径55.5㎝、口縁部長13.1～14.3㎝。外面タテハケ調整、内面ナナメハケ調整である。２は肩部直下の突帯間隔が7.6～7.8㎝で円筒埴輪よりやや低い。肩部長10.3㎝、頸部長8.2㎝。肩部直下の突帯剥離面に突帯設定のための凹線が認められる。外面板ナデ調整で、円筒埴輪(13)とつくりが似る。１は古墳ＳＸ01周濠、２は土坑ＳＫ02出土。

形象埴輪（15～20）　15は家形埴輪の屋根部破風板部分の破片で、屋根妻側に粘土板を接合してつくる。下端面にケズリがある。壁体部剥離痕跡から、壁体部の上に別作りの屋根部を載せて製作したことがわかる。

16は盾形埴輪の一部で、３条の複線による内・外区分割帯と外区をめぐる鋸歯文・重弧文の線刻が確認できる。外面調整は内区部分がナデ、外区部分がヨコハケである。表面朱塗。

17は蓋形埴輪の蓋下半部片である。上下２段を互い違いに３条ずつ線刻して装飾する。外面をハケ調整し、蓋縁に突帯を貼り付ける。

18は靭形埴輪の矢筒部片で、正面に直弧文、側面に直線文を線刻する。正面から側面へ張り出す鰭飾りの欠失痕跡がみられる。表面朱塗。

19・20は鳥形埴輪である。19は尾の部分と考えられ、突帯を貼付けて体部と区画し、線刻で尾羽を表現する。20は体部下半から台部上半の一部が残る破片である。粘土紐を貼り付けて２本の脚をつくり、半月形に張り出す突帯上に載せている。頸部の羽毛を表現した線刻の一部がみえる。台部には円形透孔がある。外面はタテハケ調整、内面はタテ・ナナメ方向のナデ調整である。

19は旧河川、その他は古墳ＳＸ01周濠出土。

円筒埴輪群の特徴　10㎝を基準として口縁部高・底部高・突帯間隔を大小に分ければ、朝顔形を含めて大型７例、小型５例となり、その割合はほぼ半々である。３条突帯４段例（９）に大型、４条突帯５段例（10）に小型が認められるので、その大小が形態差と関連する可能性は高い。ヨコハケ調整はＢｃ種が主体であるが、大型にＢｂ種、小型にＢｄ種が認められる。ヨコハケ工具幅もその大小に合致し、使い分けが認められる。突帯間隔10㎝未満の製品は第Ⅳ期後半に主体化するので、この埴輪群はそれへの過渡期的様相を示すと思われる。

東発掘区出土の第Ⅴ期埴輪　第Ⅳ期埴輪と比べて資料数は少ない。内訳は円筒埴輪39点・朝顔形埴輪１点・形象埴輪（種別不明）２点であり、全形を復元できる資料はない。底部高を確認できる円筒埴輪資料は、9.5㎝例１点、11.0㎝例２点、14.0㎝例１点である。底部調整に押圧、突帯に断続ナデ技法Ａを行う例が確認できる。いずれも旧河川出土。　（鐘方正樹）

Ⅴ　調査所見

特筆すべきものに、西発掘区で検出した古墳時代中期後半の小規模な前方後円墳ＳＸ01がある。調査地の東方に同後期の小規模な前方後円墳のヤイ古墳が存在し、東発掘区で検出した旧河川から同後期の埴輪や土器が出土したことを踏まえれば、調査地とその東方一帯に小規模な前方後円墳を含む同中期後半～後期の古墳群が存在した可能性が高い。ＳＸ01南側の旧河川から埴輪とともに８世紀の土器・瓦片や９世紀後半～10世紀初頭の土器片が出土したことから、調査地周辺では奈良時代から平安時代前葉にかけて宅地が営まれるが、旧河川付近には開発が及ばず古墳が残存していたことがうかがえる。

なお、古墳ＳＸ01の墳丘が削平される契機は、後円部上に柱穴がみられることから居住地化に伴う開発と考えられ、墳丘及び旧河川上を覆う埴輪片を含む砂質シルト層は墳丘を切り崩して形成された整地層の可能性がある。その時期は遺構や土層の先後関係から平安時代中～後葉と推定され、鎌倉時代初頭の遺構とともに一乗院領の佐保田荘との関連が留意される。　（安井宣也）

24. 平城京跡（右京三条四坊五坪）の調査　第601次

事 業 名	共同住宅新築	調 査 期 間	平成20年２月20日～３月21日
届出者名	個人	調 査 面 積	375㎡
調 査 地	奈良市宝来三丁目747-1	調査担当者	大窪淳司・大原瞳

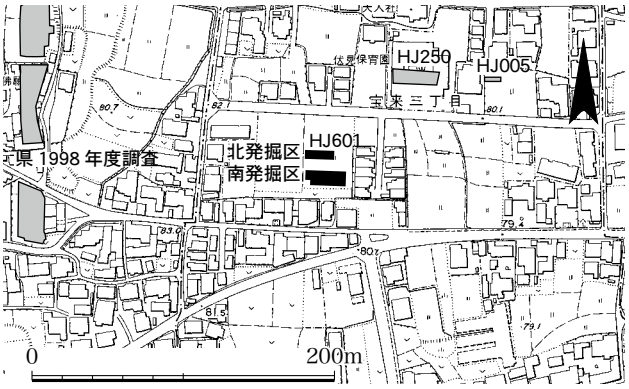
Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京三条四坊五坪の南半部分に相当する。調査地周辺では、北西側の四坪で市ＨＪ第５・250次の各調査が実施されており、奈良時代の掘立柱列、四・五坪坪境小路の側溝、鎌倉・室町時代の井戸・溝等を確認しており、また西側の十二坪の調査（県1998）では、室町時代の溝を確認している[1)]。

調査に先立って、試掘07－６次調査を実施したところ、室町時代の溝と時期不明の柱穴・土坑を確認した。そこでその成果に基づき、奈良時代の五坪南東部および室町時代の土地利用の様相把握を主目的として、北発掘区（123㎡）と南発掘区（189㎡）を設定し、その後、南発掘区南側に拡張区（63㎡）を設けて、調査を実施した。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本的な層序は、耕作土（0.2～0.4m）の下に旧耕作土および旧床土（0.4～0.5m）が続き、現地表下0.6～0.8mで黄色シルトの地山に至る。南発掘区南半では、旧耕作土の下にさらに灰白色砂質シルトや室町時代遺物包含層の暗橙灰・淡褐灰色砂質シルトが続いて、現地表下0.9～1.0mで黄色シルト・橙白色シルト質砂の地山に至る。遺構検出は基本的に地山上面で行ったが、室町時代遺物包含層の広がる南発掘区南半では、この上面と地山上面の２回に分けて実施した。遺構面の標高は、北発掘区で81.7～81.9m、南発掘区で81.3～81.8m、室町時代遺物包含層上面で81.7mであり、西から東へ緩やかに下がっている。



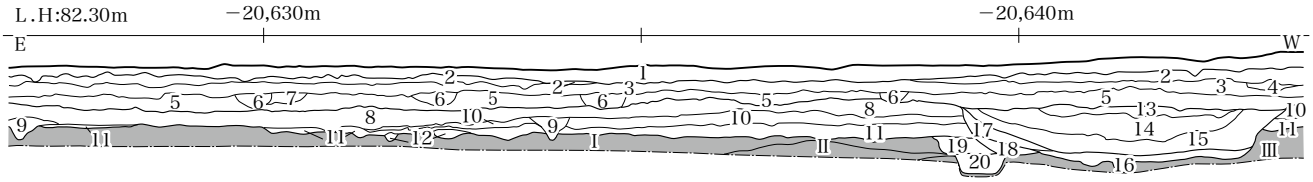
ＨＪ第601次調査　発掘区位置図（1/5,000）

Ⅲ　検出遺構

奈良～平安時代の掘立柱建物・柱列・井戸・土坑・溝、室町時代の井戸・土坑・溝、江戸時代以降の溝を検出した。

各遺構の概要は一覧表にまとめた。以下、主要な遺構について述べる。

奈良～平安時代の遺構　ＳＤ15・16は南発掘区・拡張区東部で検出した南北溝である。それぞれ東から西へ掘り直しており、古い溝をＡ、新しい溝をＢとした。坪内区画溝と考えるが、この両溝間の空閑地が坪端を基準とした坪内の東西1/3ラインにあたることから、坪内道路とも考えられる。溝心の座標は、Ｘ＝－146,188.0mのとき、ＳＤ15ＡがＹ＝－20,621.5m、ＢがＹ＝－20,621.9m、ＳＤ16ＡがＹ＝－20,617.2m、ＢがＹ＝－20,617.9m。埋土はＳＤ15Ａ・16Ａが淡褐色砂質シルト、ＳＤ15Ｂ・16Ｂが灰褐色砂質シルトで、いずれも水成堆積ではない。重複関係からＳＫ23より古く、８世紀後半以前の溝と考える。



1　黒灰色砂質シルト（耕作土）
2　灰色砂質シルト（旧耕作土）
（橙灰色砂質シルトブロック混）
3　明橙灰色砂質シルト（旧耕作土）
4　灰白色砂質シルト（素掘溝）
5　黄灰色砂質シルト（旧耕作土）
（黄色シルトブロック混）
6　灰白色砂質シルト（素掘溝）
7　灰色砂質シルト（素掘溝）
8　灰白色砂質シルト
9　灰白色砂質シルト
10　暗橙灰色砂質シルト
（奈良～室町時代遺物包含層）
11　淡褐灰色砂質シルト
（奈良～室町時代遺物包含層）
12　灰白色砂質シルト
（奈良～室町時代遺物包含層）
13　灰色砂質シルト（SD26）
（黄橙色砂質シルトブロック混）
14　灰白色砂質シルト（SD26）
（黄橙色・褐色砂質シルトブロック混）
15　灰白色砂質シルト（SD26）
（黄橙色・褐色砂質シルトブロック多混）
16　灰白色シルト（SD26）
17　灰白色砂質シルト（SD26）
18　橙灰色砂質シルト（SD26）
（橙白色シルト質砂ブロック混）
19　淡茶灰色砂質シルト（SD14）
（灰色・茶色シルトブロック混）
20　明淡茶灰色砂質シルト（SD14）
（灰色・茶色シルトブロック混）
Ⅰ　黄色シルト
Ⅱ　黄色粘土
Ⅲ　橙白色シルト質砂

ＨＪ第601次調査　南発掘区南壁土層図（1/100）

ＨＪ第601次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	
ＳＡ01	南北	2以上	4.3以上		1.9–2.4		柱穴の深さ0.1～0.2m。Ⅰ－Ｃ期
ＳＡ02	南北	2以上	4.2以上		1.4–2.8		柱穴の深さ0.1～0.3m。Ⅰ－Ｃ期
ＳＡ03	東西	4以上	8.1以上		2.3–2.3–2.3–1.2		柱穴の深さ0.3～0.5m。Ⅰ－Ｂ期
ＳＡ04	東西	2	3.4		1.7等間		柱穴の深さ0.1～0.2m。重複関係からＳＢ11より新しい。Ⅱ－Ｂ期
ＳＡ05	東西	2	4.8		2.4等間		柱穴の深さ0.1～0.2m。重複関係からＳＢ13より新しい。Ⅱ－Ａ期
ＳＡ06	東西	2	3.4		1.7等間		柱穴の深さ0.1～0.4m。重複関係からＳＤ15・16より新しい。Ⅰ－Ｄ期
ＳＡ07Ａ	南北	1以上	2.4以上		2.4		柱穴の深さ0.2～0.3m。重複関係からＳＡ07Ｂより古く、ＳＤ16・ＳＫ23より新しい。Ⅰ－Ｄ期
ＳＡ07Ｂ	東西	2以上	4.8以上		2.4–2.4		柱穴の深さ0.1m。重複関係からＳＡ07Ａ・ＳＤ16・ＳＫ23より新しい。Ⅰ－Ｄ期
ＳＢ08	東西	3×2	6.6	2.0	2.2等間	1.0等間	柱穴の深さ0.3～0.4m。東妻柱なし。重複関係からＳＤ28・31・ＳＫ33より古い。Ⅰ－Ｂ期
ＳＢ09	東西	4×2	7.4	3.8	1.85等間	1.9等間	柱穴の深さ0.1m。重複関係からＳＫ21より新しい。Ⅱ－Ｂ期
ＳＢ10	南北	2以上×2	2.8以上	3.4	1.4等間	1.7等間	柱穴の深さ0.2～0.6m。Ⅱ－Ａ期
ＳＢ11	南北	3×2	5.1	3.0	1.7等間	1.5等間	柱穴の深さ0.1～0.2m。重複関係からＳＡ04より古い。Ⅱ－Ａ期
ＳＢ12	南北	1以上×2	2.4以上	3.6	1.2	1.8等間	柱穴の深さ0.1～0.6m。重複関係からＳＤ16より新しい。Ⅰ－Ｄ期
ＳＢ13	南北	1以上×2	2.4以上	3.4	2.4	1.7等間	柱穴の深さ0.2～0.4m。重複関係からＳＡ05・ＳＤ16より新しい。Ⅰ－Ｄ期

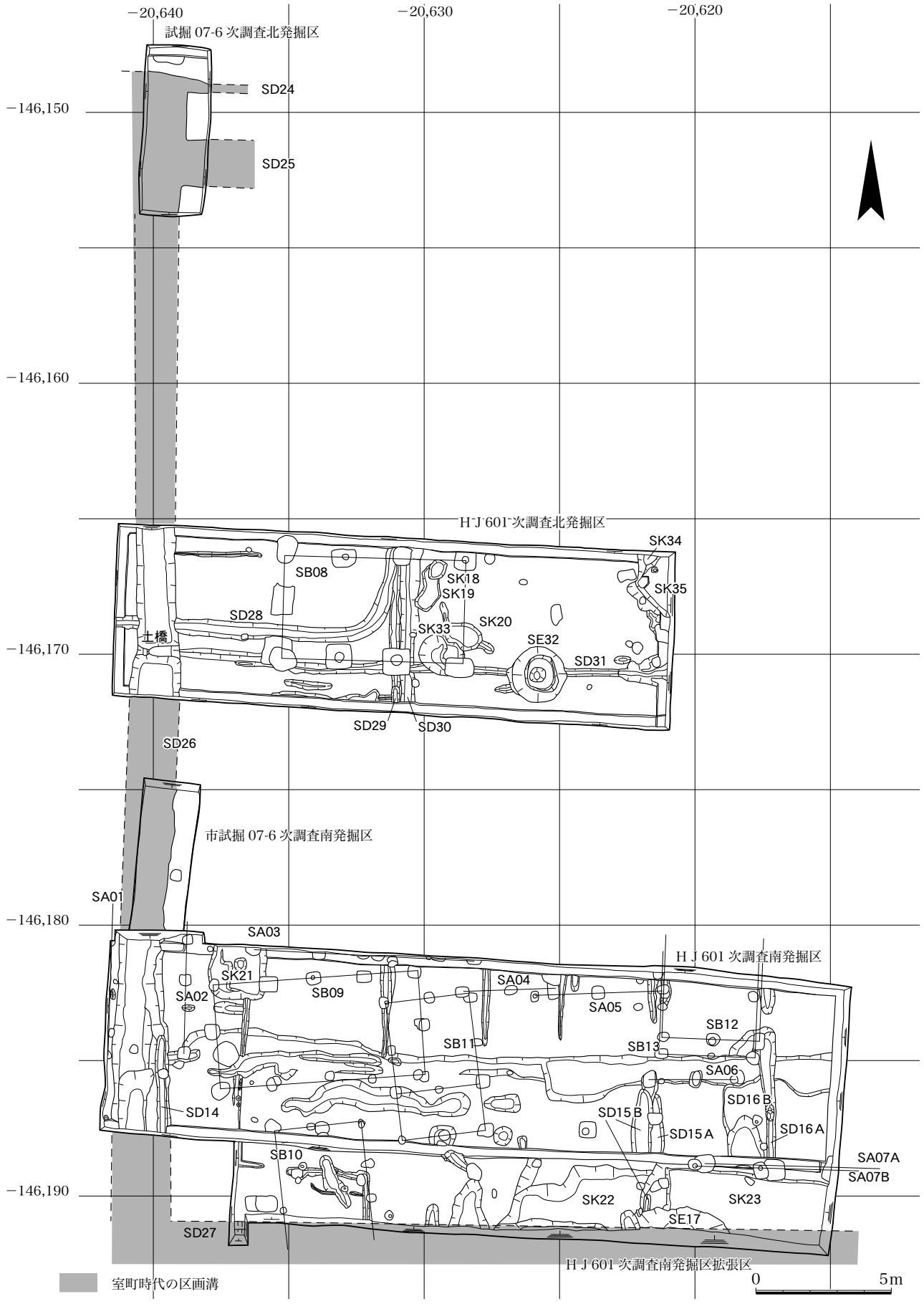
遺構番号	掘形			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＤ14	南北溝	長さ3.6以上×幅0.4～0.5	0.4	8世紀後半：土師器杯、須恵器杯・壺・甕、丸瓦	重複関係からＳＤ26より古い。Ⅰ－Ｃ期
ＳＤ15Ａ	南北溝	長さ9.5以上×幅0.1～0.2	0.1	8世紀：土師器甕、須恵器杯・杯蓋・甕、丸瓦	重複関係からＳＥ17・ＳＫ22より新しく、ＳＡ06より古い。Ⅰ－Ｂ期
ＳＤ15Ｂ	南北溝	長さ9.5以上×幅0.1～0.3	0.1～0.2	8世紀：土師器甕、須恵器杯・杯蓋・甕、丸瓦	重複関係からＳＥ17・ＳＫ22より新しく、ＳＡ06より古い。Ⅰ－Ｂ期
ＳＤ16Ａ	南北溝	長さ6.5以上×幅0.1～0.2	0.1	8世紀：土師器甕、須恵器甕	重複関係からＳＡ06・ＳＢ12・13より古い。Ⅰ－Ｂ期
ＳＤ16Ｂ	南北溝	長さ6.5以上×幅0.6～0.7	0.1	8世紀：土師器甕、須恵器甕	重複関係からＳＡ06・ＳＢ12・13より古い。Ⅰ－Ｂ期
ＳＥ17	楕円形	東西4.1以上×南北1.3以上	0.9以上	8世紀：土師器皿・甕、須恵器杯蓋・甕・壺	発掘区外南に続く井戸と考える。重複関係からＳＤ15Ａ・Ｂ・ＳＫ22・23より古い。Ⅰ－Ａ期
ＳＫ18	楕円形	長径0.8×短径0.6	0.1	8世紀：平瓦	重複関係からＳＫ19より新しい。Ⅰ－Ｃ期
ＳＫ19	不整形	東西0.6×南北1.6	0.1	8世紀後半：土師器皿・杯・甕、須恵器杯・杯蓋・壺・甕、製塩土器	重複関係からＳＤ30・ＳＫ18より古い。Ⅰ－Ｃ期
ＳＫ20	不整形	東西1.4×南北1.0	0.4	8世紀後半：土師器皿・甕	重複関係からＳＫ33より古い。Ⅰ－Ｃ期
ＳＫ21	長方形	東西2.2×南北2.0以上	0.1	8世紀後半：土師器甕、須恵器壺、瓦	重複関係からＳＢ09より古く、ＳＡ03より新しい。Ⅰ－Ｃ期
ＳＫ22	不整形	東西5.8以上×南北2.4以上	0.1～0.2	8世紀：土師器・須恵器	重複関係からＳＤ15・ＳＫ23より古く、ＳＥ17より新しい。Ⅰ－Ａ期
ＳＫ23	長方形	東西5.8以上×南北2.3	0.2～0.3	8世紀末頃：土師器皿・杯・高坏・甕・竈、須恵器皿・杯・杯蓋・甕・壺、平瓦・丸瓦	重複関係からＳＡ07Ａ・Ｂ・15より古く、ＳＥ17・ＳＫ22より新しい。Ⅰ－Ｃ期
ＳＤ24	東西溝	長さ0.8以上×幅0.5	－	－	試掘07－6次調査北発掘区にて検出
ＳＤ25	東西溝	長さ0.8以上×幅1.7	0.2	－	試掘07－6次調査北発掘区にて検出
ＳＤ26	南北溝	長さ39.2以上×幅1.4～2.2	0.3～0.4	14世紀後半～15世紀初頭：土師器皿・羽釜（大和Ｈ1・Ｈ2型）・竈、瓦質土器（浅鉢・摺鉢）、平・丸瓦、8世紀：須恵器杯	ＳＤ24・25・27と接続。重複関係からＳＤ28より古い。
ＳＤ27	東西溝	長さ21.5以上×幅0.9以上	0.5以上	14世紀～15世紀：土師器・須恵器、丸瓦・瓦	ＳＤ26と接続。
ＳＤ28	Ｌ字形	長さ13.5以上×幅0.5～0.7	0.1～0.2	17世紀前半：土師器羽釜、瓦質土器（浅鉢）、国産陶器（肥前窯碗）、平瓦、輸入磁器（白磁碗）	重複関係からＳＤ26より新しい。
ＳＤ29	南北溝	長さ6.3以上×幅0.4	0.1	出土遺物無し	重複関係からＳＢ08・ＳＤ28より新しい。
ＳＤ30	南北溝	長さ6.3以上×幅0.5～0.6	0.1	8世紀：須恵器	重複関係からＳＢ08・ＳＤ31・ＳＫ19より新しい。
ＳＤ31	東西溝	長さ14.1以上×幅0.2～0.3	0.1	14世紀後半～15世紀初頭：土師器皿・羽釜（大和Ｈ1型）、瓦質土器、国産陶器（常滑窯甕）	重複関係からＳＥ32・ＳＫ33より古く、ＳＫ・ＳＢ08より新しい。
ＳＥ32	円形	直径2.0	2.2	14世紀後半～15世紀初頭：土師器皿・羽釜（大和Ｈ1・Ｈ2型）、瓦質土器（浅鉢・摺鉢）、国産陶器（常滑窯甕）、平瓦、砥石、木片	枠は抜き取られている。重複関係からＳＤ31より新しい。
ＳＫ33	不整形	長径1.7×短径1.5	0.2	14世紀後半～15世紀前半：土師器皿、瓦質土器（摺鉢）、瓦、8世紀：須恵器	重複関係からＳＢ08・ＳＤ31・ＳＫ20より新しい。
ＳＫ34	不整形	東西0.5以上×南北1.2以上	0.4	14世紀～15世紀：土師器	重複関係からＳＫ35より新しい。
ＳＫ35	不整形	東西1.5以上×南北2.2以上	0.3	14世紀後半：瓦質土器（浅鉢）、国産陶器（常滑窯甕）、須恵器甕、平瓦	重複関係からＳＫ34より古い。

掘立柱建物・柱列は、いずれも地山上面で検出した。主軸方向が国土方眼方位に合致するものと、西で南へ振れるものとに大きく２分できる。また、重複関係からＳＢ11→ＳＡ04、ＳＡ05→ＳＢ13、ＳＡ07Ａ→ＳＡ07Ｂという変遷がわかる。

室町時代以降の遺構　14～15世紀の区画に伴う溝５条、井戸１基、土坑２基、17世紀以降の水田造成に伴う溝３条がある。

ＳＤ26は試掘07－6次調査で検出した南北溝の続きであり、溝の北端でＳＤ24・25と接続する。南端は発掘区外の未調査部分でＳＤ27の西端と接続するものと想定できる。溝の底面は基本的に平坦で、北から南へ向かって緩やかに下がる。中央には地山を掘り残した部分があり、土橋と考えられる。土橋の規模は、南北幅が上面で0.3ｍ、下面で0.8ｍ、高さ0.2～0.3ｍ、東西長が1.2ｍ、断面台形を呈す。この土橋の西側には、溢れた流水を北から南へ排水する目的として、幅0.4ｍ、深さ0.1ｍの南北溝を設けている。ただし、ＳＤ26埋土には水成堆積層が僅かに残るのみであるため、常時流水する環境ではなかったと考えられる。埋土から14世紀後半～15世紀前半の土師器羽釜等が出土した。

ＳＤ27は拡張区南端で検出した東西溝である。溝の



H J 第601次調査　発掘区遺構平面図（1/200）

両端は発掘区外東、西へ続く。北肩部分の検出のみだが、埋土や検出面がＳＤ26と同一であることから、ＳＤ26に接続する区画溝と判断した。遺物の出土量は極めて少ないが、14～15世紀と考えられる土師器片等が出土した。ＳＤ24・25は試掘07－06次調査で検出した東西溝である。溝の西端でＳＤ26とそれぞれ接続する。以上のことから、これらはＳＤ25が区画の北辺、ＳＤ26が西辺、ＳＤ27が南辺を画した方形区画を構成する溝と考える。そしてこの方形区画内にはＳＤ31・ＳＥ32・ＳＫ34・35がある。ＳＤ31は北発掘区南半で検出した東西溝である。溝の西端はＳＤ26手前で途切れ、東端は発掘区外東へ続く。方形区画内の概ね南北1/2ラインにあたることから、区画内をさらに細分する溝と考える。これらの埋土から14～15世紀前半の土師器羽釜や瓦質土器摺鉢等が出土した。

ＳＤ28～30は北発掘区西半で検出した南北・Ｌ字溝である。Ｌ字溝ＳＤ28から17世紀前半の磁器片が出土した。水田造成に伴う溝と考える。

Ⅳ　出土遺物

土器類が遺物整理箱17箱分、瓦類が1箱分出土した。各遺構からの出土遺物については一覧表にまとめた。土器類には８世紀の土師器・須恵器、丸瓦・平瓦・磚、14～15世紀前半の土師器皿・羽釜、瓦質土器浅鉢・摺鉢、国産陶器（常滑窯甕）、17世紀前半の土師器羽釜、瓦質土器浅鉢、国産陶器（肥前窯碗）などがある。

Ⅴ　調査所見

奈良～平安時代については、坪内の東西1/3ラインに区画溝ＳＤ15・16を設ける時期があることが判明した。

時期区分については遺構の主軸方向から大きくⅠ～Ⅱ期に区分できる。さらにⅠ期はＡ～Ｄ期の４期、Ⅱ期はＡ～Ｂ期の２期に細分できる。なお、各期にそれぞれ属する遺構については一覧表にまとめた。

Ⅰ期は主軸方向が方位に合致する建物・柱列がある時期。坪内の東西1/3ライン付近に遺構が集中していることから、遺構種を変えながらもこの位置を踏襲して数期に亘って利用していることが窺える。Ⅱ期はⅠ期の建物方向とは異なり、建物・柱列の主軸方向が北で西へ振れる時期であり、坪内の宅地利用に変化が生じたものと考えられる。

時期については、Ⅰ期のＳＫ23から８世紀末頃の土器が出土していることから、Ⅰ期の下限は概ね８世紀末頃、Ⅱ期はそれ以降と考えられ、少なくとも坪内東南部は平城廃都後も宅地利用が継続していたと推定できる。

室町時代以降については、試掘調査で検出した溝の続きを確認すると共に、これらが方形区画を構成する区画溝であることが判明した。なお、方形区画に伴う建物などは後世の水田造成に伴って削平されている可能性があり、今回は確認できなかった。また、ＳＤ26・27の位置は現在の地割と合致していることから、現在の地割の原形はこの時期に生じていた可能性がある。17世紀に入ると水田造成が行われ、一帯は大幅な削平と耕作に伴う溝の掘削が行われたものと考えられる。（大窪淳司・大原瞳）

1）奈良市教育委員会1980「平城京右京三条四坊四坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和55年度』
奈良市教育委員会1992「平城京右京三条四坊四坪の調査　第250次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成４年度』
奈良県立橿原考古学研究所1998「平城京右京三条四坊・四条四坊発掘調査概報―大和中央道に伴う調査―」『奈良県遺跡調査概報1998年度』

北発掘区全景（西から）

南発掘区全景（西から）

南発掘区全景（東から）

25. 平城京東市跡推定地・東堀河の調査　第 35 次

事 業 名	共同住宅新築	調 査 期 間	平成19年５月21日～６月６日
届出者名	個人	調 査 面 積	90㎡
調 査 地	奈良市東九条442-４	調査担当者	大窪淳司

Ⅰ はじめに

今回の調査地は、平城京の条坊復原では左京八条三坊十一坪の中央付近に位置する。この坪は東市推定地の北東部を占める坪で、中心を南北に東堀河が貫流する。

近隣の調査例には、昨年度北隣で実施した第 34 次調査があり、奈良時代以降の東堀河の変遷を確認している。さらに北の第４次調査では、東堀河と八条条間路との交差点を調査し、東堀河にかかる木橋を確認した。今回の調査は、調査地が東堀河に収まることが予想されたため、東堀河の様相確認を目的とした。なお、遺構番号は東市跡推定地内で付している通し番号である。

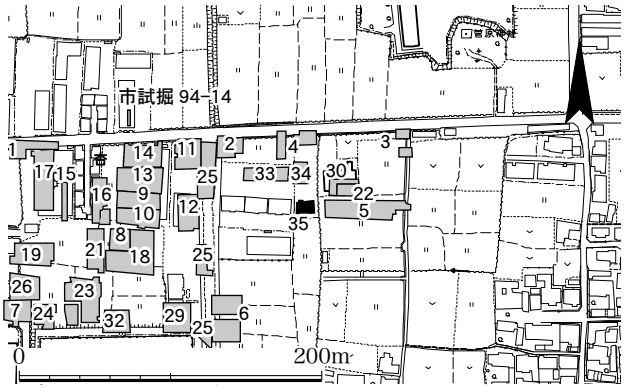
Ⅱ 基本層序

発掘区内の基本層序は、現代の水田耕作土の下に、19 世紀の陶磁器片を含む旧耕作土、17 ～ 18 世紀の陶磁器片を含む旧床土と続き、これより下が東堀河内の堆積土となる。堀河埋土の直下で青灰色粘土の地山となり、地山の標高は 54.552 ～ 54.973 m。北東が最も高く、南西が最も低い。

Ⅲ　検出遺構

東堀河ＳＤ17とこれに付随する施設ＳＸ577がある。

東堀河ＳＤ 17　第４次調査で幅 11 ～ 12 ｍと推定された堀河である。水は北から南へ流れていたと考えられるが、北端と南端の標高差は 0.02 ～ 0.03 ｍ程度しかない。堀河の最深部は不明であるが、発掘区の西端が最も深く、発掘区の中央と西部でそれぞれ一段ずつ河底が深くなる。東堀河内堆積土は上層が 13 世紀前半の土器片を含む暗橙灰色砂質シルト（0.4 m）、10 世紀後半～ 12 世紀土器片を含む橙灰色砂質シルト（0.4 m）、中層が９世紀～ 10 世紀前半の土器片を含む暗灰色粘土（0.8 ～ 0.9 m）で構成される。下層は上からａ層（灰色細粒砂）、ｂ層（灰色粗粒砂）、ｃ層（灰色砂礫）に分けられ、これらが 0.1 ～ 0.6 m続く。ａ～ｃ層の中から８世紀後半から末の遺物が大量出土しており、特筆すべきものとして、全長 45.5㎝におよぶ木製の人形や、銅銭、鉄製の風鐸の舌がある。人形・舌はｂ層、銅銭はｂ・ｃ層から出土している。他に土馬や牛馬の骨も多数出土しており、土馬はａ・ｂ層の境付近から、骨はａ～ｃ層にわたって出土した。



ＴⅠ第35次調査　発掘区位置図（1/5,000）

ＳＸ 577　発掘区北西部で検出した東堀河に伴うと考えられる施設であり、第４次調査で検出した木橋から約 49 ｍ南に位置する。丸太杭Ａを打ち込み、この西側に柱材Ａを横倒しにして置いている。部材Ａの貫穴には丸太杭Ｂが打ち込まれ、部材Ａを固定している。部材Ａがａ層上面に置かれていることから、ＳＸ 577 は８世紀末～９世紀初頭に構築されたと考えられる。

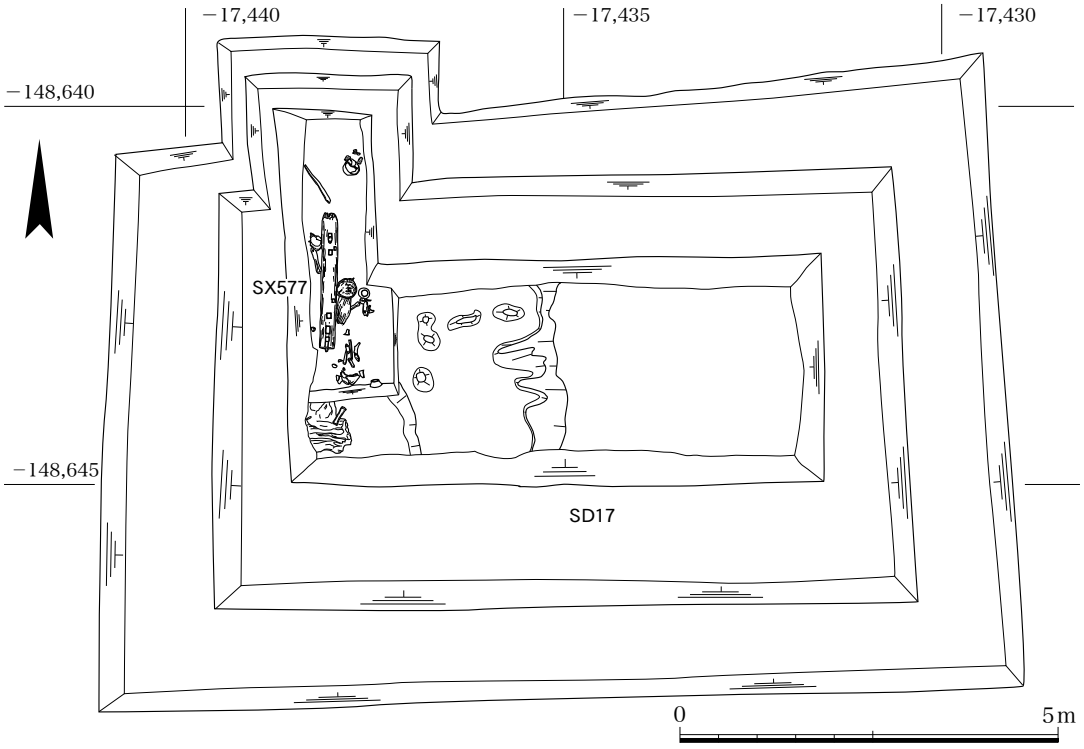
ＳＸ 577 以北には、シルトが多く堆積しており、ＳＸ 577 の北側で水が滞留していたことが分かる。このため発掘区を一部北側に拡張したが、丸太杭Ａに対応する杭は出土しなかった。　（大窪淳司）

Ⅳ　出土遺物

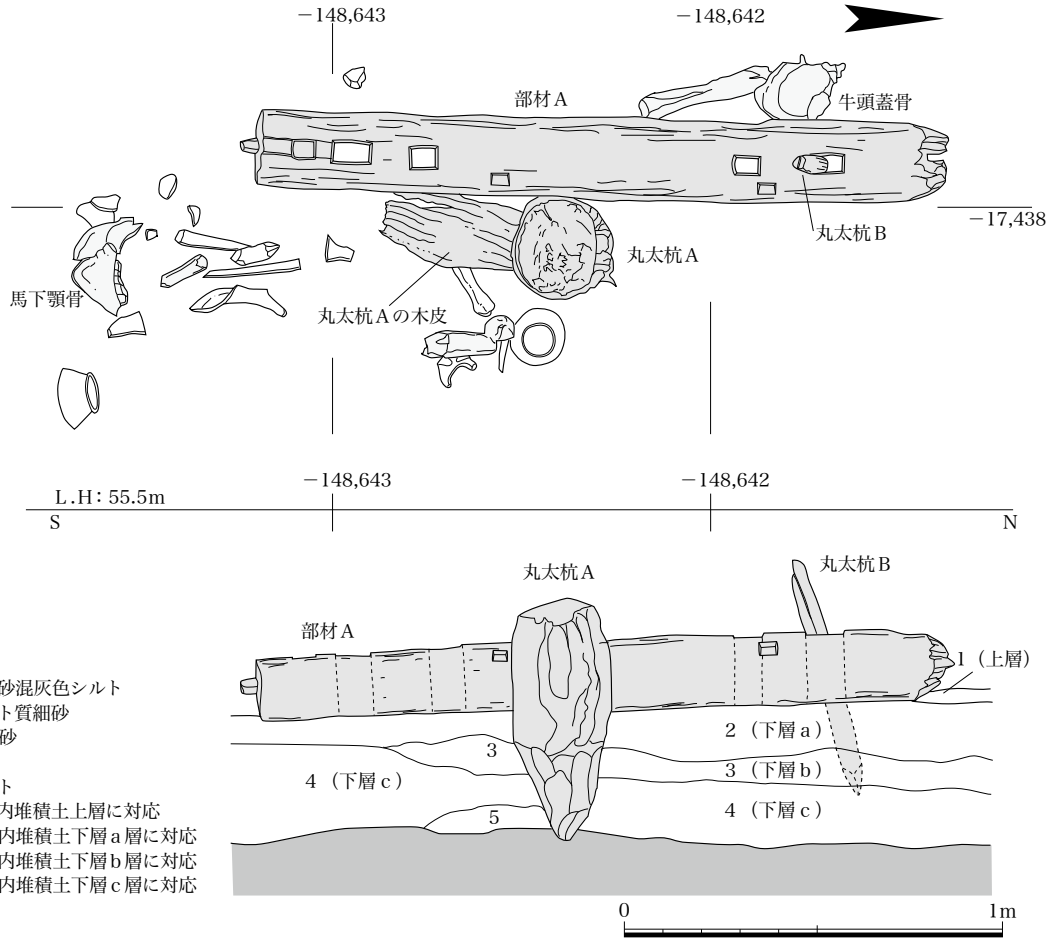
遺物整理箱で 23 箱分あり、大半が東堀河ＳＤ 17 から出土したものである。

東堀河ＳＤ 17 から出土した土器類には８世紀後半～９世紀初頭の土師器・須恵器・瓦類が遺物整理箱で 18 箱分、土馬が５点、不明土製品が１点あり、木製品には８世紀末の人形１点、横櫛１点、柱材１本、丸太杭２本、その他不明木製品が遺物整理箱で１箱分ある。金属製品には奈良時代の銅銭４点（和同開珎１、神功開寶２、萬年通寶１）、及び鉄製の風鐸の舌１点がある。骨類には馬の下顎骨、牛の頭蓋骨をはじめとする牛馬の骨が遺物整理箱で５箱分出土した。

１はＳＸ 577 を構成する部材Ａである。木材の片端が腐朽しており、その反対側は、中央に枘がある。長さ 1.8 m、直径 0.3 m。上面および側面の計７箇所に枘孔を穿ち、材の両端付近に位置や規模が対応する貫孔が計４箇所ある。本来は柱材として使用されていた木材を転



ＴＩ第35次調査　遺構平面図　(1/100)



1　灰白色細砂混灰色シルト
2　灰色シルト質細砂
3　灰色極細砂
4　灰色砂礫
5　灰色シルト
※1＝東堀河内堆積土上層に対応
　2＝東堀河内堆積土下層ａ層に対応
　3＝東堀河内堆積土下層ｂ層に対応
　4＝東堀河内堆積土下層ｃ層に対応

ＴＩ第35次調査　ＳＸ577遺構平面図・立面図（1/20）

発掘区全景（北から）

ＳＸ577（北東から）

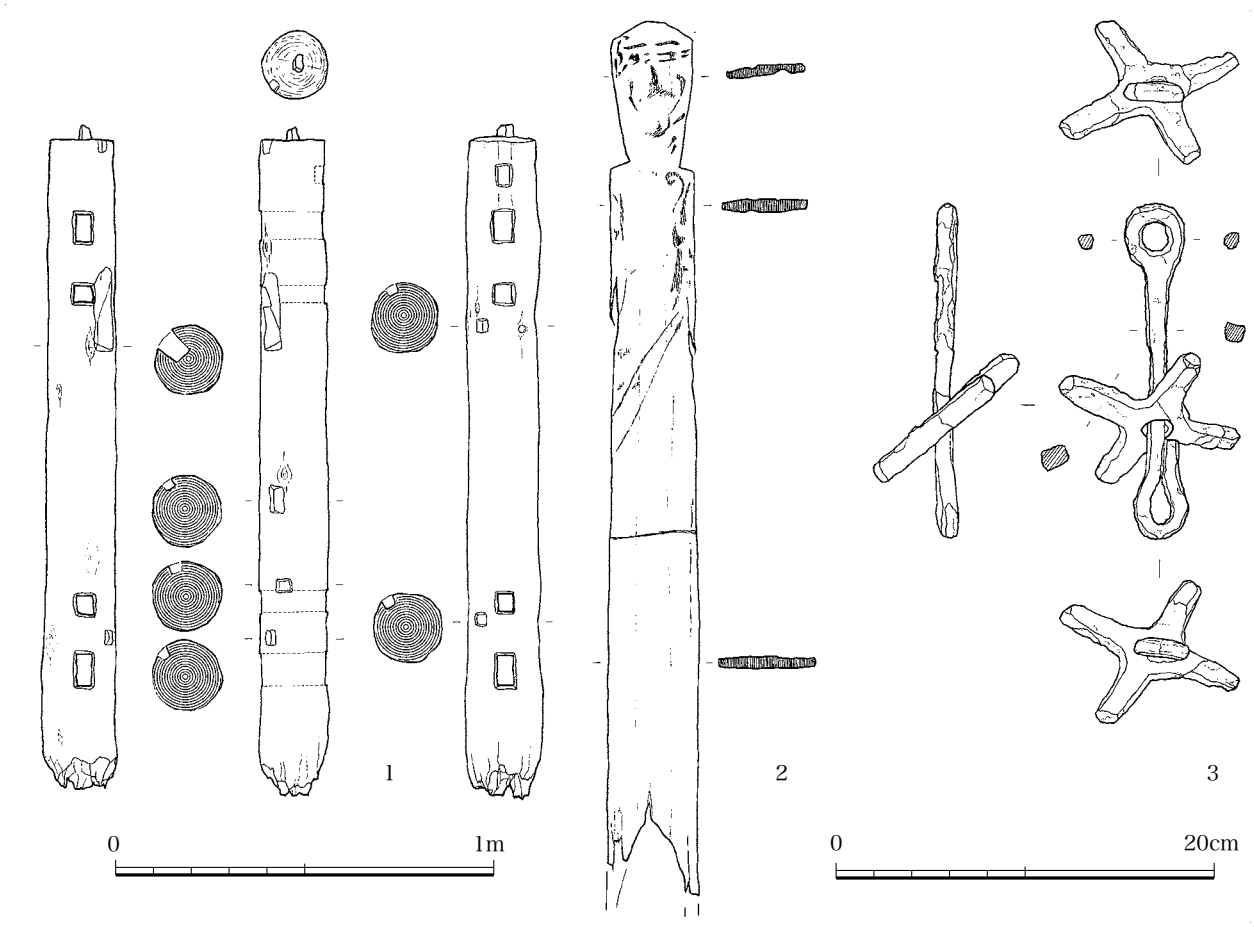
用したものと考える。

２は大型の木製人形である。長さ 47.7㎝、幅 5.0㎝、厚さ 0.7㎝。頭部、頸部、肩、腕、脚は切り込んで成形しており、両面は削って調整している。墨書で顔、左胸から腰の部分にかけて衣服、帯の表現を描いている。ヒノキ材を使用。

３は鉄製風鐸の舌である。舌は鐸からぶら下がり、風招を吊る棒状金具と、それに嵌められ鐸とあたって音をだす十字形の金具で構成されている。棒状金具は長さ 18.3㎝、頭部幅 3.2㎝、厚さ 1.0㎝。頭部は中央に方形の孔を穿ち、下端は風招を繋ぐ鎖を嵌めるため雫形に 5㎝折り曲げている。十字形の金具は一辺 10.95㎝・10.66㎝。金具幅 1.06 ～ 1.55㎝、厚さ 1.01 ～ 1.15㎝。中央に円形の孔を穿っている。　（久保邦江）

Ⅴ　調査所見

今回の調査では、東堀河の奈良時代堆積土から奈良時代の木製人形や、風鐸の舌等、多数の貴重な遺物が出土した。またＳＸ 577 から出土した奈良時代末～平安時代前半の柱材は転用材であるが、柱に貫の技術が認められるなど、奈良時代の部材加工、建築を知る上で重要な資料である。　（大窪淳司）



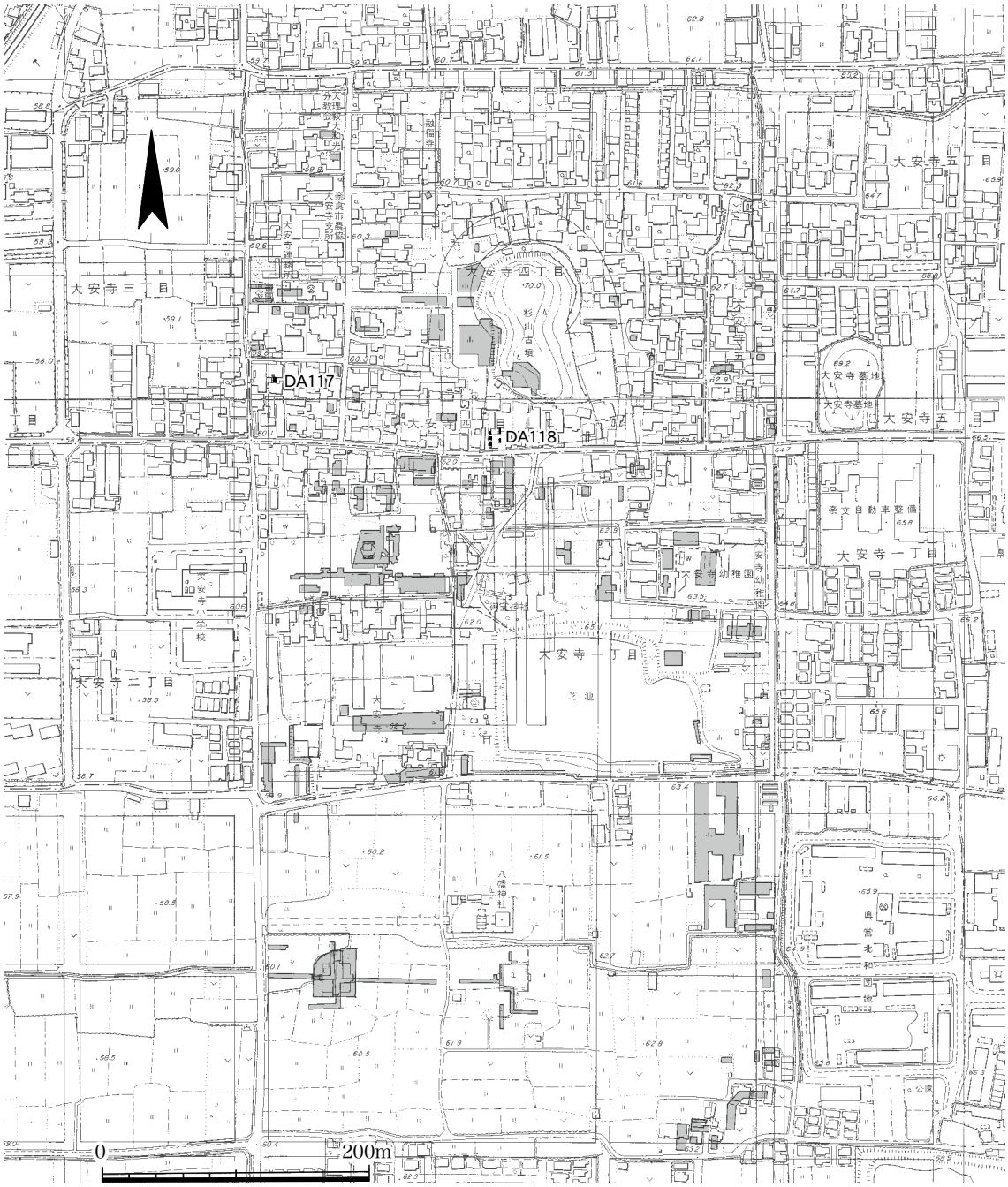
ＴＩ第35次調査　東堀河ＳＤ17・ＳＸ577出土遺物（１は1/20、２・３は1/4）

26. 史跡大安寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成 19 年度に史跡大安寺旧境内において計２件の調査を実施した。第 117 次調査は「禅院食堂并太衆院地区」で、第 118 次調査は「北東中房地区」にあたる。いずれも個人住宅の新築および増築に伴う現状変更許可申請に係る調査で、ともに条件付き許可となったものである。

平成19年度史跡大安寺旧境内　発掘調査一覧表

調査次数	事　業　内　容	調　査　地	調 査 期 間	調査面積	調査担当者
ＤＡ第117次	「離れ」棟の除却及び住宅の増築	大安寺四丁目1049	H19.９.18～９.25	9.5㎡	武田
ＤＡ第118次	住宅の除却及び新築	大安寺四丁目1124の一部	H20.３.４～３.10	11㎡	安井



史跡大安寺旧境内の調査　発掘調査位置図（1/5,000）

（1） 禅院食堂并太衆院地区の調査　第117次

Ⅰ　はじめに

調査地は、史跡大安寺旧境内の禅院食堂并太衆院推定地の西側に該当する。調査地の北西約50 mにおいて実施した調査（市ＤＡ第111次）では、大安寺西面築地と雨落溝と考えられる遺構を検出している[1)]。本調査では、9.5㎡の発掘区を設定し調査を実施した。

Ⅱ　基本層序

発掘区内は、造成土の下に暗褐色土があり、その下層で黄褐色粘土の地山となる。地山の標高は、最も高い発掘区南端部で約60.45 mである。

Ⅲ　検出遺構

江戸時代末の土坑と性格不明遺構を各１基検出した。

ＳＫ01　発掘区北端で検出した土坑である。東西約２m、南北約２m分を検出し、発掘区外北側と西側へ続く。深さは約0.6 mである。埋土から奈良～平安時代初期・鎌倉時代・江戸時代の瓦および江戸時代後半（18～19世紀）の土師器・陶磁器が出土した。

ＳＸ02　発掘区の南西隅で検出した性格不明の遺構である。東西約0.9 m、南北約0.9 m分を検出し、発掘区外西・南側へ続く。径0.05～0.2 m程度の石が集中して置かれた部分がある。奈良～平安時代初期および江戸時代の瓦、江戸時代後半（18～19世紀）の陶磁器が出土した。

Ⅳ　出土遺物

遺物は、８世紀の軒平瓦（6690A）、８～９世紀初頭の土師器・須恵器・丸瓦・平瓦・塼、12～13世紀の瓦器、18～19世紀の土師器・陶磁器、平安時代以降の軒丸瓦、鎌倉時代以降の軒平瓦・丸瓦・平瓦、室町時代の軒平瓦、明治時代以降の陶磁器、刻印瓦などが遺物整理箱７箱分出土した。

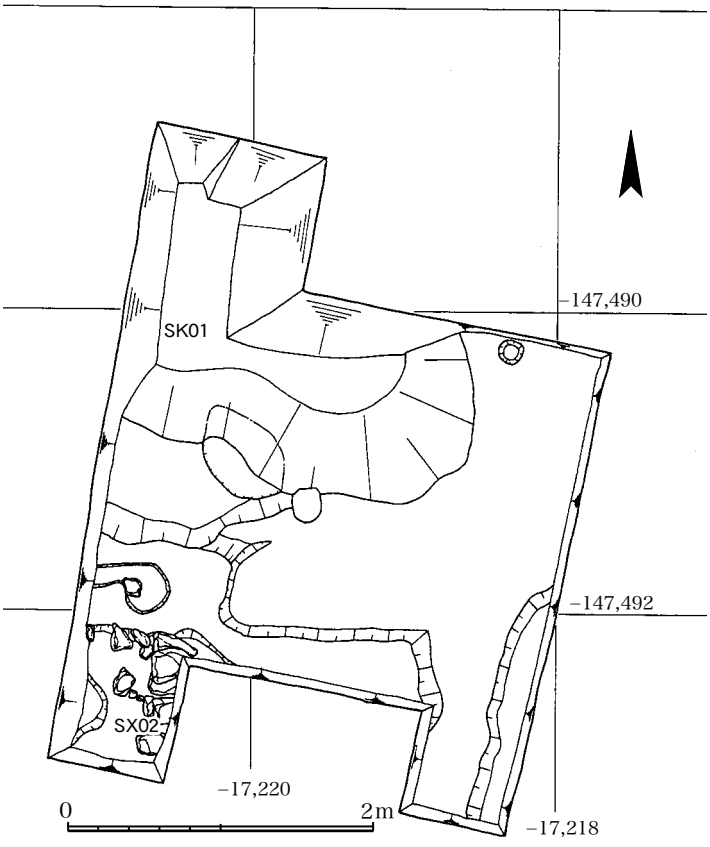
Ⅴ　調査所見

本調査では、大安寺に直接関連があるとみられる遺構は確認できず、江戸時代以降の遺構のみを検出したにとどまった。　（武田和哉）

1）奈良市教育委員会「西面築地地区の調査　第111次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成17年度』2008

発掘区全景　（南から）

発掘区全景　（北から）



DA第117次調査　発掘区遺構平面図（1/50）

(2)　北東中房地区の調査　第118次

Ⅰ　はじめに

調査地は、大安寺の伽藍復原では北東中房の北側にあたり、古墳時代中期後半の前方後円墳である杉山古墳（全長約140ｍ）の前方部前端が想定される。東隣接地で昭和56年度に実施された市ＤＡ第６次調査では、現地表下0.8ｍまでが江戸時代以降の整地土で、その下に奈良時代以降の遺物包含層があることが確認されている。

今回の調査は、奈良時代の遺構面と杉山古墳に伴う遺構の遺存状態の把握を主目的として、建物予定地にＡ～Ｅの５箇所の発掘区を設定して実施した。

Ⅱ　基本層序

各発掘区の掘削深度は、Ａ発掘区が0.8ｍ、Ｂ発掘区が1.1ｍ、Ｃ発掘区が1.2ｍ、Ｄ発掘区が0.9ｍ、Ｅ発掘区が1.0ｍで、把握できた層序は以下のとおりである。

Ａ～Ｄ発掘区　現地表下１ｍまでの層序は各発掘区でほぼ同じ様相を示す。最上層はＡ発掘区が近年の造成土（厚さ0.2ｍ）、Ｂ～Ｄ発掘区が灰色礫混じり砂質シルト層（厚さ0.2ｍ）で、その下に炭・焼土や瓦片を多く含む暗灰黄色砂質シルト層（厚さ0.2ｍ）、灰黄褐色砂質シルト層（厚さ0.2ｍ）と続き、黄褐色や黄灰色の砂質シルト層やシルト質砂層（厚さ0.1ｍ）をはさんでオリーブ褐色砂質粘土層（厚さ0.3ｍ）となる。造成土を除く各層から17世紀以降の土器片が８世紀以降の瓦片や15～16世紀の土器片とともに出土した。

オリーブ褐色砂質粘土層より下については、Ｂ・Ｃ発掘区では上から水田床土に似た黄灰色砂混じり粘土質シルト層（厚さ0.3ｍ）、湿地の堆積層に似た黄灰色粘土質シルト層となるが、Ｄ発掘区では溝か井戸の埋土らしい黒褐色砂質シルト層となる。Ｃ発掘区において、黄灰色砂混じり粘土質シルト層から12～13世紀及び15～16世紀の土器片が、黄灰色粘土質シルト層から12～13世紀の土器片が８世紀以降の瓦片とともに出土した。

Ｅ発掘区　撹乱土（厚さ0.6ｍ）の下に、Ｂ・Ｃ発掘区と同様のオリーブ褐色砂質粘土層（厚さ0.1ｍ）、黄灰色砂混じり粘土質シルト層（厚さ0.3ｍ）が続き、その下でやや固結した灰色シルト混じり砂礫層の地山上面となる。地山上面の標高は標高61.4ｍである。

Ⅲ　検出遺構

Ａ発掘区の暗灰黄色砂質粘土層上面（標高62.1ｍ）で東西方向の石敷き遺構ＳＸ01を検出した。幅0.45ｍで、長径10～20㎝の花崗岩やチャートの礫を敷く。出土遺物はないが、層位から江戸時代のものと考えられる。

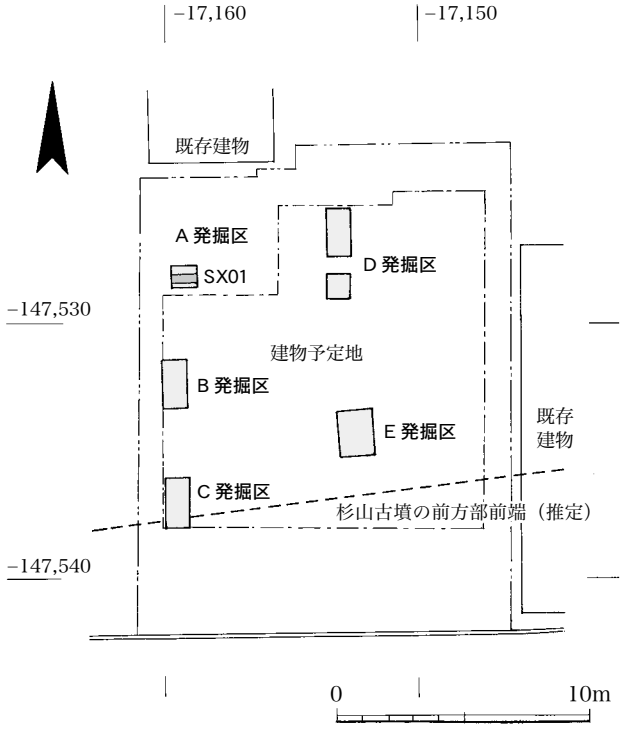
Ⅳ　出土遺物

各発掘区の土層から出土した土器・瓦等が遺物整理箱８箱分あり、瓦が多い。土器には12～13世紀の瓦器椀・青磁椀、15～16世紀の土師器皿・瓦質土器鉢、17世紀以降の土師器皿・肥前系陶磁器椀等がある。瓦の大半は丸・平瓦で、８世紀と13世紀頃のものがある。８世紀の軒平瓦6712型式Ａ種がＤ発掘区の暗灰黄色砂質シルト層から１点出土した。土器や瓦はいずれも小片である。

Ⅴ　調査所見

土層の時期と性格については、出土遺物や層相から、Ａ～Ｄ発掘区の現地表下１ｍまでの各層が江戸時代以降の集落に伴う整地土で、その下でＥ発掘区でもみられる黄灰色砂混じり粘土質シルト層は室町時代の水田床土の可能性がある。奈良時代の遺構面は、層序からＥ発掘区で確認した地山上面と判断され、Ｂ・Ｃ発掘区で層位が対応する黄灰色粘土質シルト層は、杉山古墳の前方部西端の想定位置より東方でみられることから、古墳の周濠ではなく鎌倉時代頃の溝の埋土の可能性がある。

Ａ発掘区で検出した石敷き遺構ＳＸ01は、調査地のすぐ西方で鎌倉時代末に興福寺の大乗院家の祈祷所として建てられ、江戸時代中頃まで存続したと推定される己心寺に関連する通路の可能性がある。　（安井宣也）



ＤＡ第118次調査　発掘区配置図（1/300）

調査地全景（南から、建物奥は杉山古墳前方部）

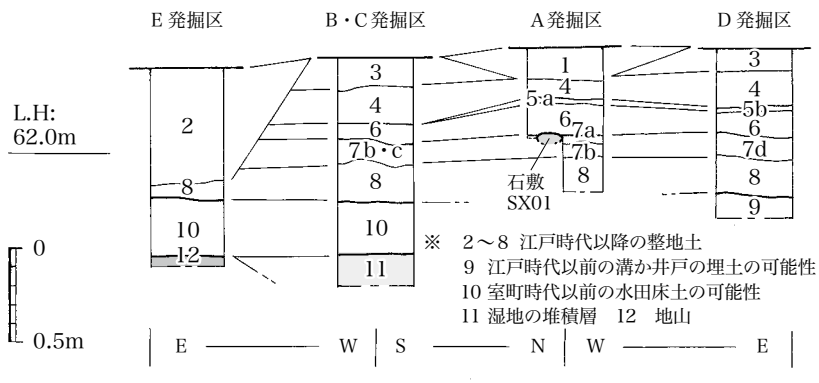
A発掘区全景（東から）

B発掘区全景（南東から）

C発掘区全景（北東から）

D発掘区北部分（南東から）

E発掘区全景（東から）



1　近年の造成土
2　近年の撹乱土
3　灰色礫混じり砂質シルト
4　暗灰黄色砂質シルト、炭・焼土・瓦片多く含む
5a　(A区) にぶい黄色砂質シルトブロック
5b　(D区) 黄褐色シルト質砂
6　灰黄褐色砂質シルト
7a　(A区) 暗灰黄色砂質粘土
7b　(A・B区) 暗灰黄色砂質シルトブロック
7c　(C区) にぶい黄褐色砂質シルト
7d　(D区) 黄灰色シルト質砂
8　オリーブ褐色砂質粘土
9　黒褐色砂質シルト、腐植含む
10　黄灰色砂混じり粘土質シルト
11　黄灰色粘土質シルト
12　灰色シルト混じり砂礫、やや固結

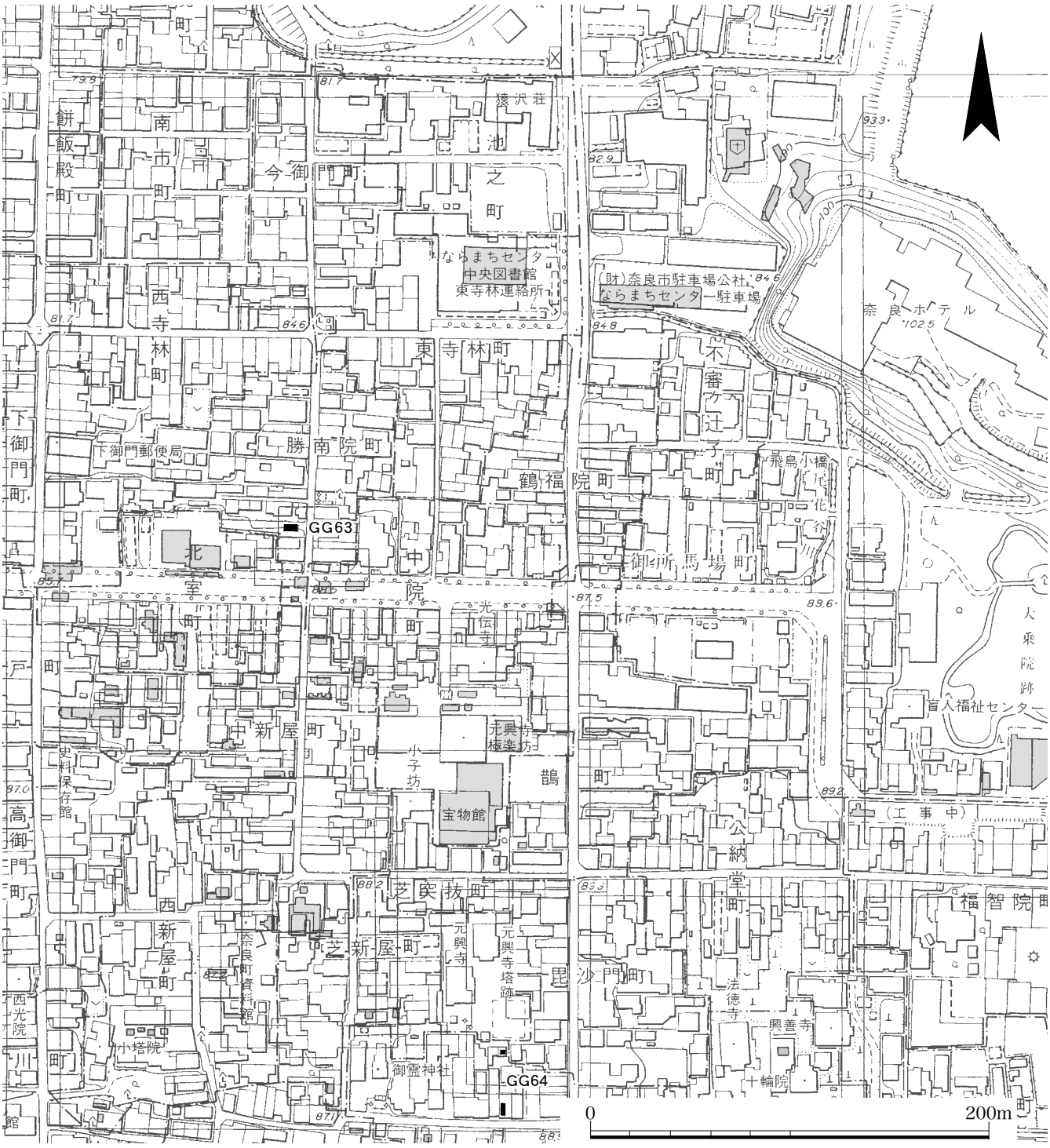
DA第118次調査　発掘区土層模式図（1/50）

27. 元興寺旧境内・奈良町遺跡の調査

奈良市教育委員会では、平成 19 年度に元興寺旧境内において計２件の調査を実施した。第 63 次調査は「食堂･食殿地区」で事務所付き共同住宅新築に伴うもので、第 64 次調査は「東塔院地区」で個人住宅新築に伴って調査を実施した。

平成19年度元興寺旧境内　発掘調査一覧表

調査次数	事　業　内　容	調　査　地	調 査 期 間	調査面積	調査担当者
GG第63次	事務所・共同住宅新築	勝南町23	H19．9．6～9.25	25㎡	中島
GG第64次	住宅の除去および住宅の新築	薬師堂町17	H19.10.22～11．9	33.5㎡	中島



元興寺旧境内の調査　発掘調査位置図（1/3,000）

（1）食堂・食殿地区の調査　第63次

Ⅰ　はじめに

調査地は、元興寺旧境内の食堂･食殿推定地にあたる。周辺では過去に5回の発掘調査が行われているが、いずれも食堂・食殿に関する遺構は検出されていない。今回の発掘調査はこの食堂・食殿の確認を目的として、敷地東側に発掘区を設定した。なお排土置場の制約により、南北2回に分けて調査を実施した。

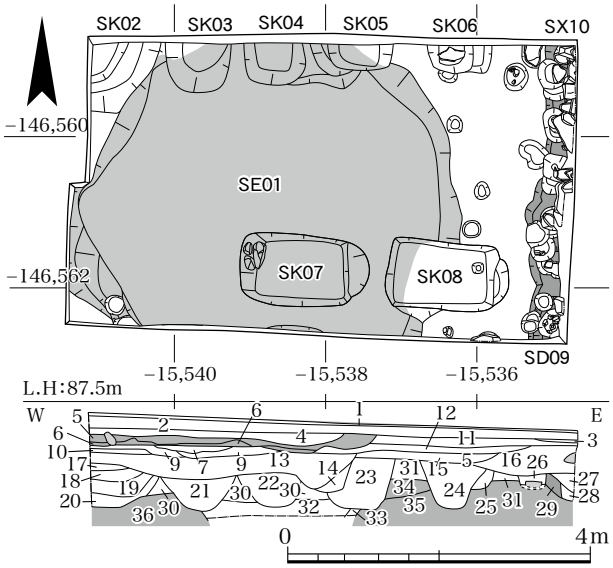
Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、遺構が数多く重複し一様ではないが、発掘区北側では、上からアスファルトとクラッシャー（1･2）、暗灰色粘質土等の焼土混じりの整地層（3･4）、焼土層・炭層（5・6）、灰褐色土系の整地層（7～12）、茶灰色土（15）、灰褐色土（31）と続き、現地表下約0.45～0.7mで明黄橙色砂礫の地山となる。地山は南西から北東に向かい低くなり、標高は86.5～86.9mである。焼土層（5）は、発掘区全域に堆積し、18世紀頃の土師器皿が出土した。遺構検出は地山上面で行った。

Ⅲ　検出遺構

室町～江戸時代の井戸1基、土坑、柱穴、石積遺構1基があり、元興寺の食堂に関する遺構はなかった。詳細は一覧表にまとめ、以下主要なものを記す。

ＳＥ01　径約5.0ｍの平面円形掘形の井戸で、深さ約1.5ｍまで掘削したが、井戸底には達せずまた井戸枠も確認できなかった。土器、瓦類の他銅製小皿1点、石硯他が出土した。時期は15世紀中頃である。



1　アスファルト
2　クラッシャー
3　暗灰色粘質土（焼土・炭含む）
4　茶褐色土（焼土多く含む）
5　暗赤褐色焼土（灰褐色土多く含む）
6　黒色炭層
7　淡茶灰色砂質土
8　暗赤褐色土（淡茶褐色土含む）
9　暗灰褐色土（焼土・炭多く含む）
10　淡灰褐色土
11　暗灰褐色土（焼土含む）
12　茶褐色土（黄褐色砂礫含む）
13　暗灰褐色土（黄褐色粘土ブロック含む）
14　暗灰褐色土
15　茶灰色土
16　茶褐色土
（黄褐色粘土ブロック多く含むSX10掘形）
17　暗茶褐色土
（黄褐色粘土ブロック多く含む SK02）
18　茶褐色土（橙色土少し含むSK02）
19　暗橙色土（灰褐色土含む SK02）
20　灰褐色土（SK02）
21　淡茶褐色土
（黄褐色粘土ブロック含むSK03）
22　淡茶褐色土（SK04）
23　暗茶褐色土（SK05）
24　暗灰褐色土（SK06）
25　茶褐色土
26　暗灰褐色土
27　明灰褐色土
28　暗灰褐色土
29　明灰褐色砂質土（SD09）
30　茶褐色土（橙色土ブロック含む）
31　灰褐色土
32　灰褐色土（SE01）
33　淡茶灰色土
（橙色土多く含むSE01）
34　淡黄橙色砂礫
35　明橙色粘土
36　暗橙色砂礫

ＧＧ第63次調査　発掘区遺構平面図・土層図（1/100）

ＧＧ第63次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主な出土遺物	備考
ＳＥ01	円形	径5.0	1.5以上	15世紀中頃	土師器皿･羽釜･蓋、瓦質土器浅鉢･擂鉢、須恵器鉢･甕、国産陶器(常滑産甕、備前産甕、瀬戸産椀･皿･鉢･仏供)、青磁碗、白磁碗、褐釉壺、青白磁壺、丸瓦、平瓦、文字平瓦(馬道)、石硯1、銅製小皿1(鉄漿皿?)、銅銭1(皇宋通寶)、鉄釘8	井戸枠未確認
ＳＫ02	円形？	東西0.9以上×南北0.9以上	0.6	15世紀以降	土師器皿、瓦器椀、須恵器杯･壺、青磁(越州窯系)皿、丸瓦、平瓦、砥石1、鉄釘1	ＳＥ01より新
ＳＫ03	円形？	東西0.6×南北0.9以上	0.4	15世紀以降	土師器皿・羽釜、瓦器椀、瓦質土器、丸瓦、平瓦	ＳＥ01より新
ＳＫ04	円形？	東西0.7×南北0.6以上	0.4	15世紀以降	土師器皿・羽釜、平瓦	ＳＥ01より新
ＳＫ05	円形？	東西0.8×南北0.4以上	0.7	15世紀以降	土師器皿、瓦質土器鉢類、国産陶器(信楽産捏鉢)、丸瓦	ＳＥ01より新
ＳＫ06	円形？	東西0.6×南北0.4以上	0.6	15世紀以降	土師器皿、瓦質土器鉢類、丸瓦	ＳＥ01より新
ＳＫ07	隅丸長方形	東西1.4×南北1.0	0.8	18世紀以降？	土師器皿･羽釜、瓦器椀、瓦質土器鉢類、須恵器鉢･甕、国産陶器(常滑産甕)、軟質施釉陶器皿、白磁碗･壺、青磁碗、軒丸瓦(6201A)、丸瓦、平瓦、桟瓦、鉄釘4、鉄滓	ＳＥ01より新
ＳＫ08	隅丸長方形	幅1.5×長さ0.9	0.8	18世紀以降？	土師器皿・羽釜、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・浅鉢、国産陶器(常滑産甕、備前産甕)、国産磁器(肥前産碗)白磁碗、丸瓦、平瓦、桟瓦、塼、銅銭(皇宋通寶1)、鉄釘3	ＳＥ01より新
ＳＤ09	南北方向	幅0.4以上×長さ4.0以上	0.45	15～16世紀	土師器皿･羽釜、瓦器椀、瓦質土器鉢類、須恵器杯、国産陶器(信楽産擂鉢)、丸瓦、平瓦、鉄滓	
ＳＫ10	石積	南北4.0以上	高さ0.4以上	16～17世紀	瓦質土器浅鉢	道路に面した石積

発掘区北半全景（西から）

発掘区南半全景（西から）

ＳＫ 02 ～ 06　いずれも径約 0.6 ～ 0.9 m、深さ約 0.6 ～ 0.7 mの平面円形と考えられる土坑で、東西方向に一列に並ぶ。形態から埋甕遺構の甕の抜き取り跡と考えられる。土坑内からは少量の土器が出土したが、詳細な時期は不明である。重複関係からＳＥ 01 より新しく、15 世紀中頃以降で、17 世紀以前のものである。

ＳＫ 07・08　いずれも平面長方形の土坑で、東西に並ぶ。重複関係からＳＥ 01 より新しい。土器と瓦類が少量出土し、時期は 18 世紀以降と考えられる。ＳＫ 07 の底には、西壁に沿って一抱えもある石が１つあり、石組遺構であったことも考えられる。

ＳＤ 09　発掘区東端を南北に走る溝で、西肩から幅約 0.3 m分を検出した。深さ約 0.1 mで、少量の土器と瓦が出土し、15 世紀前半以降のものと考えられる。

ＳＸ 10　発掘区東端で南北に並ぶ石積遺構で、南北約2.3 m分を検出した。石を２～３段積み、高さは約0.45 mある。発掘区東に隣接する南北道路に沿った宅地東端の石積の裏側部分と考えられる。掘形からは 16 世紀頃の瓦質土器が出土しており、焼土層に覆われていることから、16 ～ 17 世紀に作られたことがわかる。

この他発掘区東端で南北方向の小柱穴群を検出している。柱穴には底に礎石を置くものがある。発掘区が小さいため建物の規模等は不明である。重複関係からＳＸ 10 より古く、ＳＤ 09 より古いものと新しいものがある。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱７箱の土器類と遺物整理箱４箱の瓦類の他に、石硯１点、砥石１点、銅製小皿１点、銅銭２点、鉄釘 13 点がある。各遺構出土の内訳については、遺構一覧表にまとめた。以下ＳＥ 01 出土遺物について記す。

ＳＥ 01 からは、遺物整理箱２箱の土器と２箱の瓦類他が出土した。出土土器は、破片点数で 1,130 点が出土しており、その内訳は表に示した。

土師器皿には、胎土の色調が橙色系のいわゆる「赤土器」と、黄白色系の「白土器」がある。赤土器は 508 点、白土器は 455 点出土し、完形で出土するものが多い。

赤土器は、口径が 7.0 ～ 7.9㎝の小皿（１～ 18）と、9.0 ～ 9.9㎝の大皿（19 ～ 36）の大小２種類に分けられる。小皿は底部が上げ底状の「へそ皿」で、内面の底部と口縁部の境は強いヨコナデ調整によって凹線状に窪む。口縁部は中位でやや屈曲して外反し、底部に比べ器壁が厚い。口縁端部に灯明芯の煤が付着するものが数点ある。大皿は、平坦な底部と中位でやや屈曲して外反する口縁部からなる。底部と口縁部の境は口縁部の強いヨコナデ調整のため明瞭に屈曲する。一部上げ底風のもの

があるが、この強いヨコナデ調整のために屈曲部が外側に押し出された結果で、「へそ皿」を意識したものではない。口縁部は、小皿同様底部に比べ器壁が厚い。口縁部外面のヨコナデ調整は幅約１㎝程度であるが、34～36はヨコナデ調整が通常のものに比べ幅広である。

白土器は、口径が7.0～7.9㎝のもの（37～52）と、10.0㎝前後のもの（51～70）が主体を占めながらも、11.0～15.0㎝のもの（71～73）が少量であるが一定量存在する。口径が7.0～7.9㎝のものはすべて底部が上げ底状の「へそ皿」で、赤土器の小皿に比べ底部が広く、その分口縁部の長さが短い。口径が10.0㎝前後のものは、平坦な底部と端部がやや内湾気味の口縁部からなる。底部と口縁部の境は明瞭に屈曲するものの、赤土器に比べ内面屈曲部のヨコナデ調整は弱い。口縁部外面のヨコナデ調整は、赤土器に比べ幅広である。器壁は口縁部・底部ともに一定の厚みで、胎土は砂を含まず精良である。

土師器羽釜（82・83）は口縁部を内側に折り曲げる菅原編年[1]「大和H_2型」のみ出土しており、82はほぼ完形で出土した。体部をタタキ成形し、その後内面をハケメ調整（82）または板ナデ調整（83）する。胎土は砂が少なく精良で、色調は黄橙色である。

土師器蓋は小片のため図化できなかったが、コップ型の油煙採取用の蓋で、３点出土している。同様のものが市ＧＧ第38次ＳＫ03から出土している。

瓦質土器は小片が多く、全体形を窺えるものはない。78は小片のため擂目が確認できないが、形態から擂鉢と考えられる。口縁端部は丸く仕上げており、比較的古い形態である。内面は摩滅がはげしい。浅鉢（76）は、外面を縦方向のヘラミガキ調整する。

国産陶器は、瀬戸・備前・常滑産のものがあり、いずれも小片で図化できるものは少ない。瀬戸産の仏供(74)は、全面に錆釉を施釉する。高台は回転糸切りの平高台である。卸皿（75）は、口縁部上半の内外面にのみ灰釉を施釉する。その他の瀬戸産陶器も灰釉の製品である。備前産の擂鉢（80）は、内面に１単位７条の擂目がある。

輸入陶磁器の白磁皿（81）は、碁笥底で内面には陰刻で草花文を描く。釉薬は透明度が高く、全面施釉後畳付け部の釉を掻き取る。

銅製小皿（77）は、平面五花の輪花形で、口径4.0㎝、器高1.6㎝、重量15.158gである。鋳造品と考えられる。

石硯（79）は粘板岩製で、中央に長楕円形と考えられる海・陸部がある。欠損部が多く平面形は不明。

瓦類は、丸瓦35点(4,054g)、平瓦128点(16,005g)、丸平不明瓦19点（497g）がある。平瓦には、凸面が縄目と格子目のタタキ目のものがあり、他に「馬道」の逆文字のタタキ目のものが１点ある。

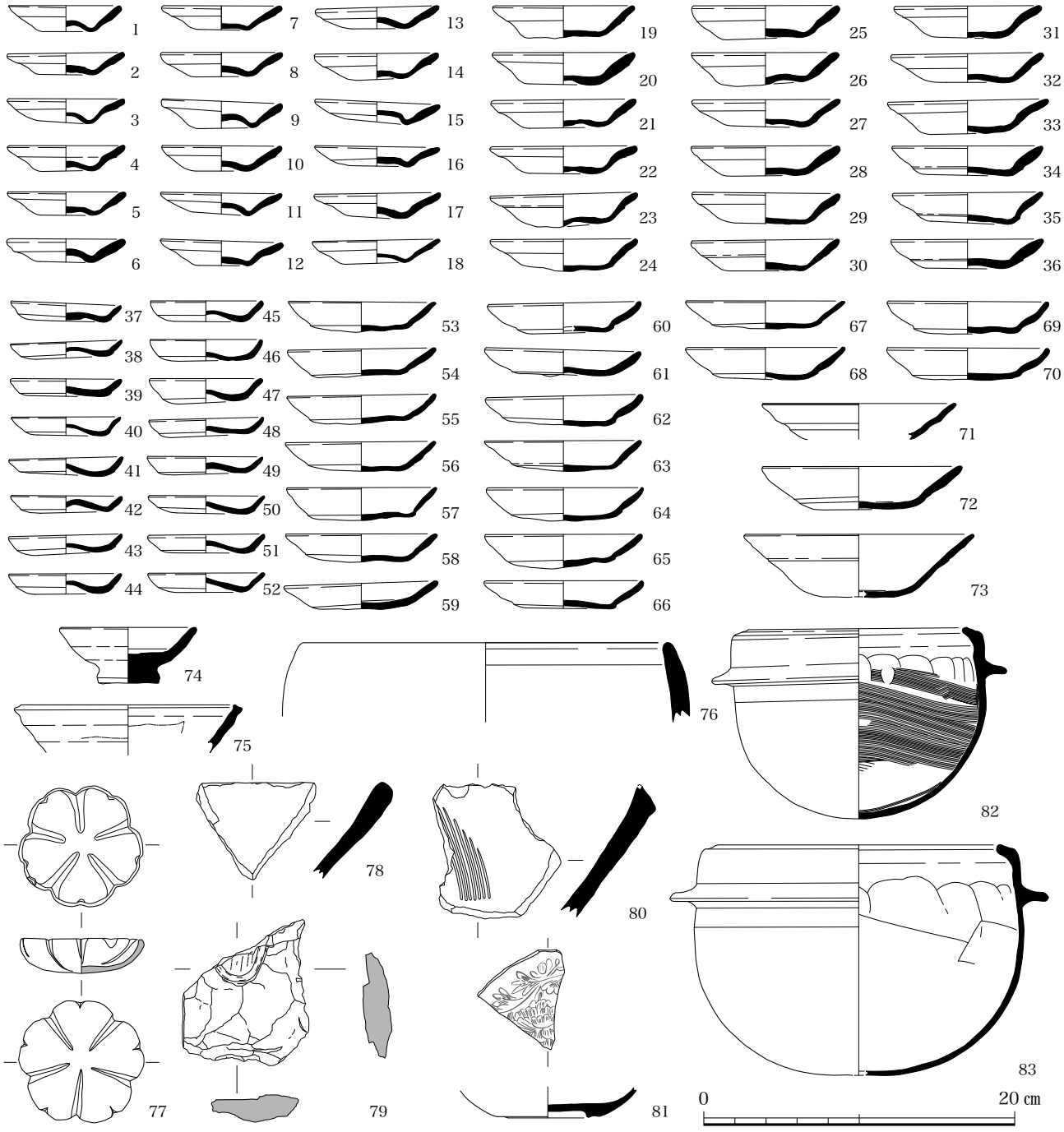
ＧＧ第63次調査　ＳＥ01出土土器組成表

種類	産地	器種	出土点数	出土比率(%)
土師器		皿	963	85.15
		(赤色系)	508	44.92
		(白色系)	455	40.23
		羽釜	111	9.81
		蓋	3	0.27
		不明	2	0.18
	小　計		1079	95.40
瓦質土器		浅鉢	2	0.18
		鉢類	10	0.88
		捏鉢	1	0.09
		擂鉢	3	0.27
	小　計		16	1.41
須恵器		鉢	3	0.27
		甕	1	0.09
	小　計		4	0.35
国産陶器	備前	擂鉢	1	0.09
	常滑	甕	10	0.88
	瀬戸	椀	3	0.27
		皿	2	0.18
		鉢	2	0.18
		仏供	1	0.09
		小計	8	0.71
	小　計		19	1.68
輸入陶磁	青磁	碗	5	0.44
	白磁	碗	2	0.18
		皿	2	0.18
		壷	2	0.18
		小計	6	0.53
	青白磁	壷	1	0.09
	褐釉	壷	1	0.09
	小　計		13	1.15
合　計			1131	100.00

Ⅴ　調査所見

今回の発掘調査では、元興寺の食堂に関する遺構は確認できず、15世紀以降の町屋の遺構を検出した。発掘区東端の柱穴群は、宅地東側の南北道路に沿って掘られており、建物としてまとめられないものの勝南院町の南北道路に面した建物跡と考えられ、15世紀中頃以降には道路に面した建物があったことがわかる。また16～17世紀には、道路に面して石積が作られ宅地との境界がより明瞭になっている。発掘区の面積が小さく宅地内の様相を知るには至らなかったが、勝南院町の変遷の一端を知り得たことは成果と言えよう。

ＳＥ01出土土器は、森下・立石編年[2]の「奈良Ⅲ期」に相当し、同時期の良好な一括資料であり、編年的位置付けを記す。同時期の土師器皿は、「赤土器」と「白土器」と大きく二分され、赤土器の大皿は、口径が11～10㎝代で推移する。ＳＥ01出土の赤土器の大皿は、口径９㎝代のものが主体で、またその他の法量も同期中で最小となる。一方白土器については、変化の方向性を見出すことが難しい。口径９～10㎝代の皿には、器高の縮小化が認められるが、比較資料が少なく今後の検討課題である。赤土器の様相から見て、同期中では最も新しい資料と考えられる。一方、次の時期の奈良Ⅳ期前半の



ＧＧ第63次調査　ＳＥ01出土遺物（1/4、77は1/2）

資料には、市ＧＧ48次ＳＫ15出土資料がある。同出土の赤土器系の皿の口径は、小皿が7㎝前後、大皿が8㎝代であり、ＳＥ01出土資料と比べると、口径の縮小がさらに進んでいる。また土師器羽釜と瓦質土器擂鉢も明らかに型式的に変化が進んでおり、両資料間にはもう1型式ほど設定できそうである。また、古市城山遺跡出土の15世紀中頃～後半の紀年銘の土師器羽釜と同形式の羽釜（H_3型）が出土していない点から見て、ＳＥ01出土資料はそれよりやや古い様相がうかがえる。供伴する瀬戸産陶器は、藤澤編年[3]の古瀬戸後期のⅢ期頃、備前産陶器は、間壁編年[4]のⅣＡ期頃と考えられ、これらの年代は14世紀後半～15世紀前葉である。以上のことから、ＳＥ01出土資料は15世紀中頃を前後する時期と考えられよう。奈良Ⅲ期の年代は、従来14世紀前半～15世紀後半とされており、ＳＥ01出土資料がこの時期の終わり頃とすれば、Ⅲ期の終末もやや遡ることとなる。

（中島和彦）

1）菅原正明　「機内における土釜の製作と流通」　『文化財論叢』奈良国立文化財研究所1883
2）森下惠介・立石堅志　「大和北部における中近世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財センター紀要　1986』　奈良市教育委員会1986
3）藤澤良祐　「瀬戸古窯址群Ⅱ―古瀬戸後期様式の編年―」『瀬戸市歴史民　俗資料館　研究紀要Ⅹ』瀬戸市歴史民俗資料館1991
4）間壁忠彦・間壁葭子　「備前焼研究ノート1～4」『倉敷考古館研究集報　第1～3・18号』倉敷考古館1966・1968・1984

（2）東塔院地区の調査　第64次

Ⅰ　はじめに

調査地は、元興寺旧境内の東塔院推定地の南側で、東塔基壇の南に隣接する。また南大門から東に延びる南面築地が推定される場所にもあたる。今回の発掘調査は、東塔南側の状況確認のため敷地北端に北発掘区を、南面築地の確認のために敷地南端に南発掘区を設定した。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、北発掘区と南発掘区では大きく異なる。北発掘区では上から近現代の層（土層図1・4・10・11）、江戸時代前半～中頃の整地層（18・22）、室町時代後半～江戸時代初めの整地層（23・24）で、現地表下1.0～1.2ｍで明黄橙色砂礫の地山となる。地山面の標高は87.3～87.5ｍである。

南発掘区では上から近現代の層（1・3・29）、江戸時代中頃～後半の厚さ約3～5㎝の層が幾層も重なる整地層（36）、室町～江戸時代初めの整地層（46～52）、鎌倉時代の層（62）で、現地表下約1.0ｍで明黄橙色砂礫の地山となる。地山面の標高は約87.5ｍである。遺構検出は、北発掘区では23・24層上面（上層）と地山上面（下層）で、南発掘区では地山上面で行った。

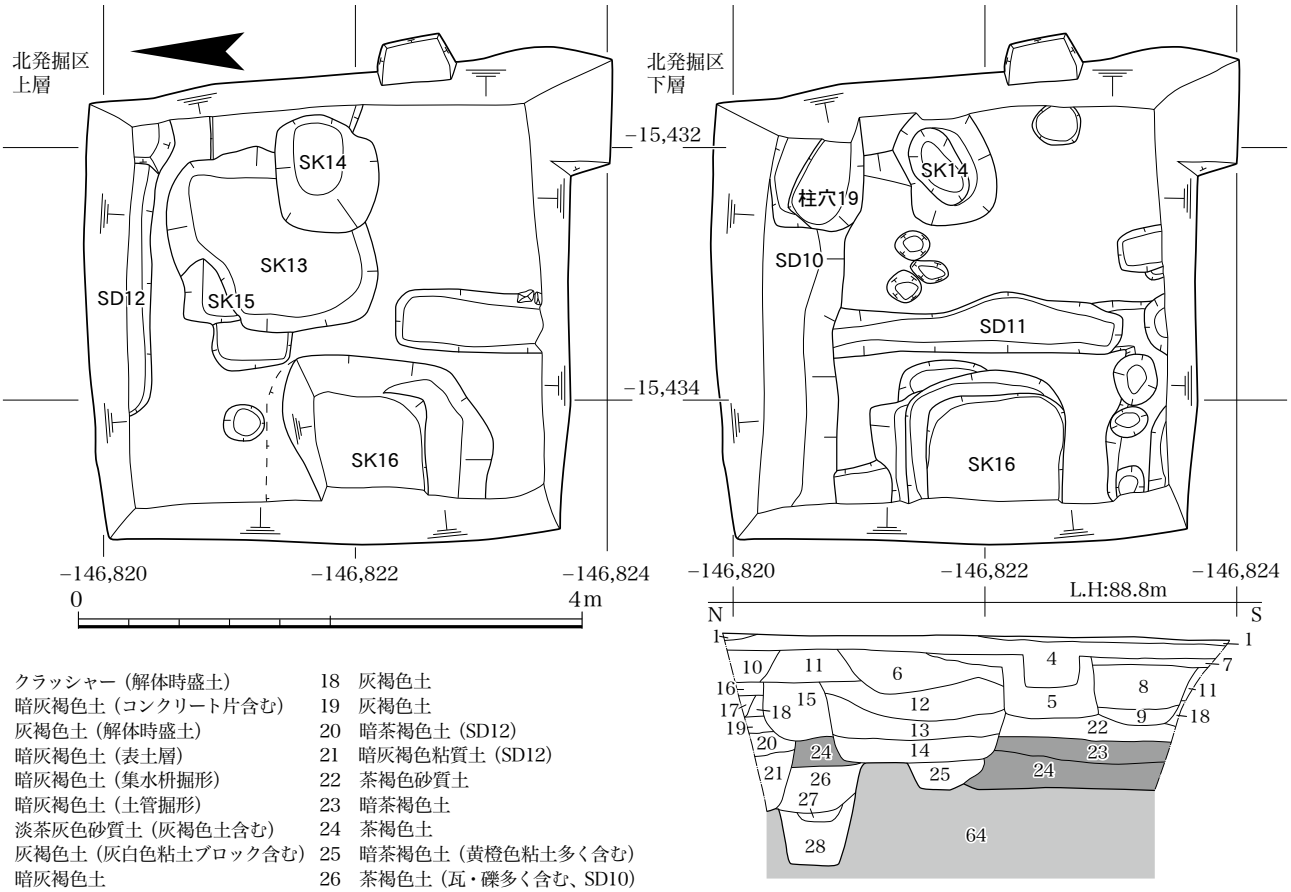
Ⅲ　検出遺構

鎌倉～江戸時代の各時期の土坑、柱穴があるが、元興寺の東塔と南面築地塀に関する遺構はなかった。遺構の詳細は一覧表にまとめ、発掘区ごとに主要なものを記す。

北発掘区　土坑4基、溝2条、柱穴1がある。

ＳＤ10･11　ＳＤ10は発掘区北端の東西方向の溝で、南岸のみ確認した。敷地最奥部にあり、現在の宅地境から南へ1.2ｍ南側にある。後述する東西溝ＳＤ12もほぼ同位置にあり、位置関係から宅地境の溝と考えられる。15世紀末頃の土器が少量出土した。ＳＤ11はＳＤ10に接続する浅い溝である。

ＳＤ12　ＳＤ10とほぼ同位置にある東西方向の溝



1　クラッシャー（解体時盛土）
2　暗灰褐色土（コンクリート片含む）
3　灰褐色土（解体時盛土）
4　暗灰褐色土（表土層）
5　暗灰褐色土（集水枡掘形）
6　暗灰褐色土（土管掘形）
7　淡茶灰色砂質土（灰褐色土含む）
8　灰褐色土（灰白色粘土ブロック含む）
9　暗灰褐色土
10　灰褐色土（瓦・礫含む）
11　暗灰褐色土
12　暗茶灰褐色粘質土
13　灰褐色粘質土
14　暗灰褐色粘質土
15　暗茶灰褐色土
16　淡灰褐色土
17　暗灰褐色土（礫多く含む）
18　灰褐色土
19　灰褐色土
20　暗茶褐色土（SD12）
21　暗灰褐色粘質土（SD12）
22　茶褐色砂質土
23　暗茶褐色土
24　茶褐色土
25　暗茶褐色土（黄橙色粘土多く含む）
26　茶褐色土（瓦・礫多く含む、SD10）
27　暗茶褐色粘質土（SD10）
28　明茶褐色粘質土（柱穴19）
29　灰褐色土（黄褐色粘土ブロック含む）
30　暗灰褐色土（黄褐色粘土ブロック含む）
31　灰褐色土
32　暗灰色土（黄褐色粘土ブロック含む）
33　暗灰褐色土（炭多く含む）
34　暗茶褐色土
35　暗茶褐色粘質土（礫・炭含む）
36　整地土　（薄い茶褐色土・灰褐色土の互層）
37　灰褐色土（黄褐色粘土ブロック多く含む）
38　暗灰色粘質土（黄褐色粘土ブロック多く含む）
39　暗茶褐色土（焼土・炭・瓦多く含む）
40　暗茶褐色土（黄褐色粘土ブロック含む）
41　暗茶褐色土
（焼土・炭・礫含む、SK17）
42　暗茶褐色粘質土
（黄褐色土含む）
43　灰褐色粘質土
（炭含む）

ＧＧ第64次調査　発掘区遺構平面図・土層図1（1/60）

で、南岸のみ確認した。室町時代後半～江戸時代初めの整地層（23・24）上面から掘り込まれる。ＳＤ10を踏襲した宅地境の溝と考えられる。16世紀末～17世紀初めの土器が出土した。

ＳＫ13～16　いずれも上層で検出した土坑で、時期は17世紀前半（ＳＫ13～15）と、18世紀（ＳＫ16）である。ＳＫ14からは土器とともに遺物整理箱半分足らず（約5.6kg）の鉄滓が出土している。

柱穴19　東西約0.9ｍ以上、南北約0.7ｍ、深さ約0.8ｍの平面隅丸方形掘形の柱穴で、重複関係からＳＤ10より古い。平面形態から古代のものとも考えられるが、出土土器がなく時期不明。組み合う柱穴もない。

南発掘区　土坑10基以上、溝２条、小柱穴がある。

ＳＫ03　発掘区北端の土坑で、南側の肩のみ検出した。発掘区北側と東西側につづき平面形は不明である。瓦類が184点（16.2kg）、鉄滓が43点（約6.7kg）出土した。13世紀中頃のものである。

ＳＫ04　土師器皿を廃棄した平面円形の土坑である。皿は完形のものが多く、12個体以上確認できる。皿は無秩序な状態で出土しており、埋納された様子はない。13世紀末頃のものである。

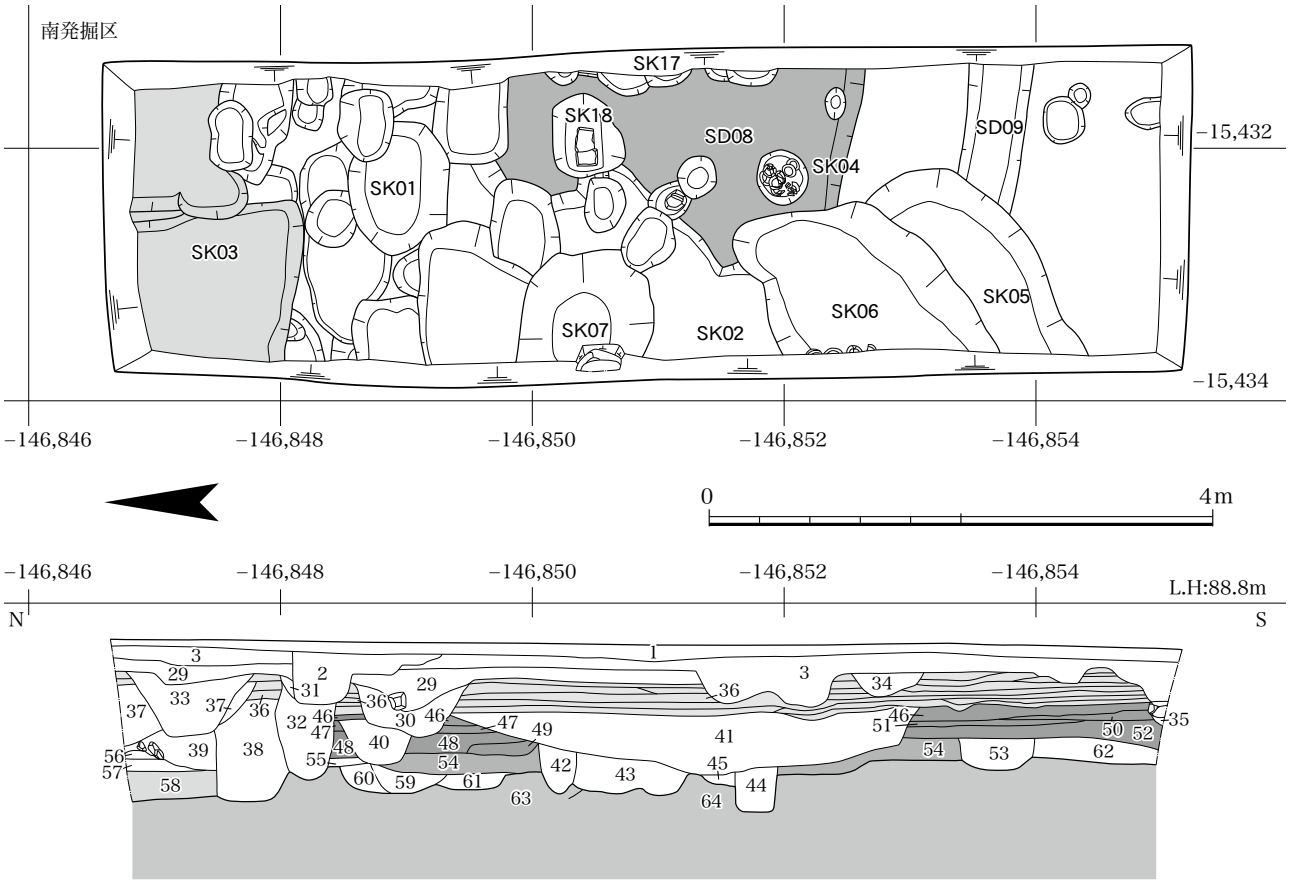
ＳＫ05・06　平面楕円形と考えられる土坑で、発掘区西側に続く。重複関係からＳＫ05が古いものの、出土土器には型式差が認められず、ほぼ同時期のものと考えられる。いずれも土師器の皿が多量に出土した。13世紀末頃のものである。

ＳＫ07　ＳＫ05・06と同様の土坑だが、出土土器にはやや新しい様相がある。13世紀末頃のものである。

ＳＤ08　東西方向の溝で、北側の肩は後世の遺構と重複し失われている。暗灰色粘土で埋まり、15世紀前半～16世紀の土器が出土した。

ＳＤ09　東西方向の溝で、重複関係からＳＤ08より新しく、室町～江戸時代初めの整地層に覆われる。出土遺物には古い時代の混入品が多く、詳細な時期は不明。

ＳＫ17　発掘区東壁沿いの土坑で、大半が発掘区外東側にある。埋土は焼土・炭を多く含み、坩堝・鉄滓が



44　灰褐色粘質土
45　淡灰褐色土
46　暗茶褐色土
47　暗茶褐色土（焼土層）
48　暗茶褐色粘土（黄褐色土含む）
49　暗灰褐色砂質土
50　灰褐色土
51　明黄褐色砂質土
52　灰褐色粘質土（瓦・礫多く含む）
53　暗灰色砂質土（ＳＫ09）
54　暗灰色粘土（ＳＫ08）
55　灰色粘土
56　暗茶灰色粘土（黄褐色粘土含む）
57　灰色粘土
58　暗灰色粘土（瓦・礫含む、ＳＫ03）
59　灰褐色土
60　暗茶褐色粘質土
61　淡灰褐色粘質土
62　淡灰褐色粘質土
63　明黄橙色粘土
64　明黄橙色砂礫

整地層　江戸時代中頃～後半
整地層　室町時代後半～江戸時代初め

ＧＧ第64次調査　発掘区遺構平面図・土層図２（1/60）

北発掘区下層全景（南から）

北発掘区下層全景（北西から）

ＧＧ第64次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主な出土遺物	備考
ＳＫ01	楕円形	東西 1.1× 南北 0.8	1.5 以上	13 世紀前半	土師器皿・羽釜、瓦器椀、丸瓦、平瓦、塼、鉄滓	南発掘区
ＳＫ02	楕円形？	東西 0.9 以上 × 南北 0.9 以上	0.6	13 世紀前半？	土師器皿、丸瓦、平瓦	南発掘区
ＳＫ03		東西 2.5 以上 × 南北 1.3 以上	0.3	13 世紀中頃	土師器皿・羽釜、瓦器椀、瓦質土器浅鉢、須恵器鉢、国産陶器（常滑産甕）、軒平瓦（型式不明）、丸瓦、平瓦、砥石、鉄滓	南発掘区
ＳＫ04	円形	径 0.4	0.3	13 世紀末	土師器皿・羽釜、軒丸瓦（平安時代以降巴文）、	南発掘区
ＳＫ05	円形？	東西 0.8× 南北 0.4 以上	0.7	13 世紀末	土師器皿・羽釜、瓦器椀、瓦質土器鉢類、須恵器鉢・甕、国産陶器（常滑産甕・備前産甕）、丸瓦、平瓦、砥石、鞴羽口、鉄滓	南発掘区
ＳＫ06	楕円形？	短径 1.5× 長径 2.1 以上	0.3	13 世紀末	土師器皿・羽釜、瓦器椀、須恵器甕、国産陶器（東海産甕・鉢）、軒丸瓦（6201A）、軒平瓦（平安時代以降均整唐草文）丸瓦、平瓦、鉄滓	南発掘区
ＳＫ07	隅丸長方形	東西 1.1× 南北 1.9	0.4	13 世紀末	土師器皿・羽釜、瓦器椀、瓦質土器浅鉢、須恵器鉢、国産陶器（常滑産甕）、白磁皿、軒丸瓦（平安時代以降三巴文）、丸瓦、平瓦、砥石、鉄滓	南発掘区
ＳＤ08	東西方向	幅 4.7～5.0× 長さ 2.3 以上	0.25	15～16 世紀	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・鉢類、国産陶器（常滑産甕、備前産擂鉢・甕、信楽産擂鉢、瀬戸美濃産皿）、青磁碗、軒丸瓦（6201A ？・平安時代以降巴文）、丸瓦、平瓦、砥石、坩堝、鉄滓、骨	南発掘区
ＳＤ09	東西方向	幅 0.4 以上 × 長さ 2.3 以上	0.25	16 世紀以降	土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢類、丸瓦、平瓦、鉄滓	南発掘区
ＳＤ10	東西方向	幅 0.4 以上 × 長さ 3.0 以上	0.4	15 世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・捏鉢・鉢類・羽釜、国産陶器（常滑産甕、備前産甕）、青磁碗、白磁皿、軒丸瓦（6201Ab）、丸瓦、平瓦、塼、鉄滓	北発掘区　下層
ＳＤ11	南北方向	幅 0.3～0.5× 長さ 2.6 以上	0.1			北発掘区　下層
ＳＤ12	東西方向	幅 0.2 以上 × 長さ 2.7 以上	0.7	17 世紀前半	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・鉢類・壷、国産陶器（肥前産椀・皿、備前産甕、信楽産擂鉢、丹波産擂鉢）、青花碗、丸瓦、平瓦、鉄滓	北発掘区　上層
ＳＫ13	隅丸長方形	東西 1.5× 南北 1.7	0.2	17 世紀前半	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・鉢類・羽釜、国産陶器（肥前産椀、瀬戸美濃産椀・皿）、国産磁器（肥前産碗）、青磁碗、丸瓦、平瓦、円盤形土製品、砥石、鉄滓	北発掘区　上層
ＳＫ14	隅丸長方形	東西 0.9× 南北 0.8	0.4	17 世紀前半	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・捏鉢・鉢類・壷、国産陶器（肥前産椀・皿、信楽産擂鉢、瀬戸美濃産椀）、国産磁器（肥前産碗）、瓦製土管、丸瓦、平瓦、砥石、鞴羽口、鉄滓	北発掘区　上層
ＳＫ15	隅丸長方形	東西 0.5× 南北 0.6	0.1	17 世紀前半	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・鉢類、国産陶器（肥前産椀）、国産磁器（肥前産碗）、丸瓦	北発掘区　上層
ＳＫ16	隅丸長方形	東西 21.2 以上 × 南北 1.5	0.8	18 世紀	土師器皿・羽釜・蓋、瓦質土器擂鉢・鉢類、国産陶器（常滑産甕）、国産磁器（肥前産碗）、丸瓦、平瓦、銅銭（熙寧元寶）	北発掘区　上層
ＳＫ17	不明	東西 0.2 以上 × 南北 3.7 以上	0.45	18 世紀？	土師器皿・羽釜・蓋、瓦質土器鉢類・捏鉢、国産陶器（軟質施釉陶器）、平瓦、坩堝、鉄滓	南発掘区
ＳＫ18	不整長方形	東西 0.7× 南北 0.85	0.2	17 世紀以降	土師器皿・羽釜・蓋、瓦質土器鉢類、塼	南発掘区
柱穴 19	隅丸長方形	東西 0.9 以上 × 南北 0.7	0.8	不明	丸瓦、平瓦	北発掘区　下層、柱抜き取り痕跡あり、ＳＤ10より古

南発掘区全景（南から）

南発掘区全景（北から）

少量出土した。18 世紀後半頃のものである。

ＳＫ 18　平面隅丸方形掘形の底に、磚の破片を置く土坑で、何らかの礎石とも考えられる。

Ⅳ　出土遺物

土器類が遺物整理箱７箱、瓦類が９箱、銅銭５点、鉄釘、銅製針、銅片、坩堝、鞴羽口、鉄滓２箱、砥石 15 点等がある。各遺構出土のものは一覧表に記す。以下、ＳＫ 06 とＳＤ 10 出土土器について報告する。

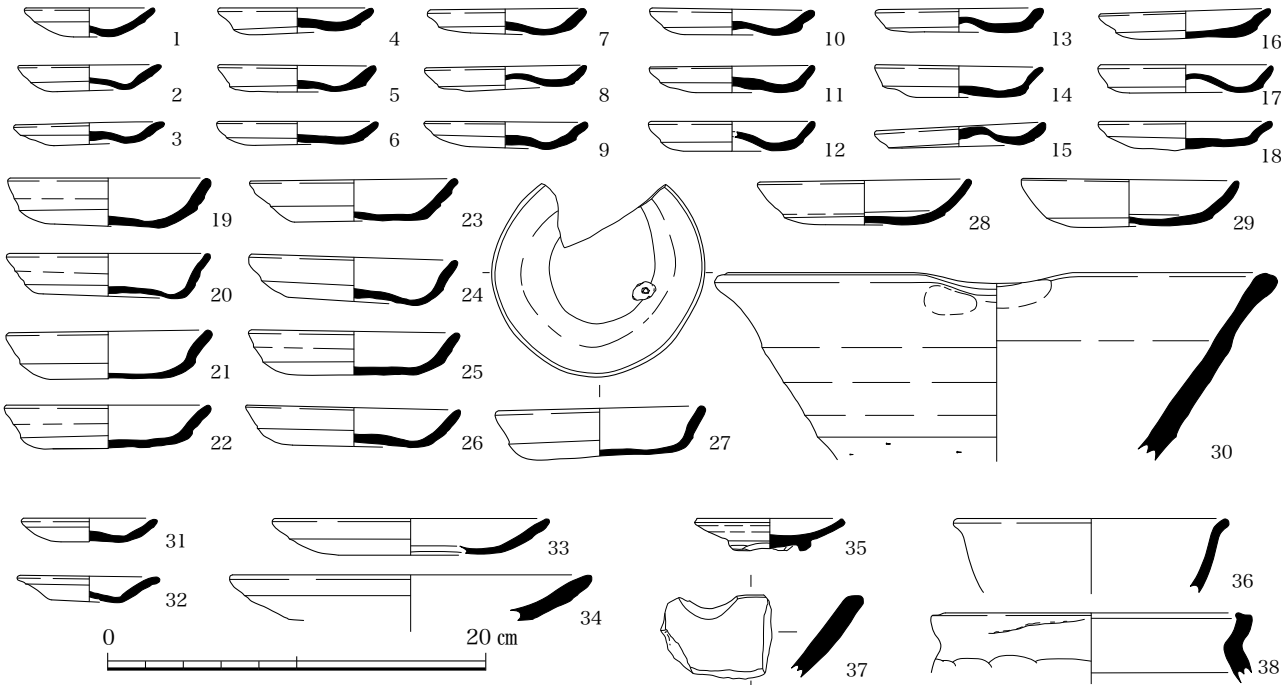
ＳＫ 06 からは、982 点の土器類、44 点（5.496kg）の瓦類、８点（0.84kg）の鉄滓が出土している。土器類の内訳は出土土器組成表に記す。土師器皿の出土比率が高い。土師器皿は、胎土の色調から白色系（１）・橙色系（２～ 27）・黄橙色系（28・29）のものの３つに分けられる。白色系の１は、胎土・形態等から京都系のものと考えられる。口径が 6.9㎝で、底部は上げ底状の「へそ皿」である。橙色系の皿は、口径が８㎝代の小皿（１～ 18）と、11㎝前後の大皿（19 ～ 27）の大小２種類に分けられる。小皿は底部外面中央を指で押さえてやや上げ底状にするものが多い。大皿は口縁部の器壁が厚く、底部はそれに比べやや薄い。口縁部はヨコナデ調整で、一部には外面を上下２回に分けヨコナデ調整するもの（二段ナデ調整）がある。27 は底部を焼成後に１カ所穿孔する。黄橙色系の皿は、橙色系のものに比べ底部と口縁部境の屈曲が緩やかで丸みがある。口縁部はやや内湾気で、器壁は均質であり、全体的に丁寧な作りの印象をうける。

瓦器椀はすべて小片で、図化できるものはない。また古い型式のものも含まれており、出土量は無いに均しい。

須恵器甕は東播系のもの。東海系鉢（30）は口縁部外面と内面に灰がかかる。内面は使用のため平滑である。

ＳＫ 06 出土土器は、森下・立石編年[1]の奈良Ⅲ期初頭の市ＧＧ第 31 次調査ＳＫ 03 出土土器に比べ、土師器皿の法量がやや大きく、奈良産の白土器が供伴していない点から、１型式前の奈良Ⅱ期末の 13 世紀末頃に位置付けられる。京都系の土師器皿は小森・上村編年[2]のⅦ期中頃と考えられ、その年代は 13 世紀末から 14 世紀中頃と各説あるが、いずれも南都の年代観とはややずれがある。これらの土器は、南都と京都との土器編年の並行関係と年代を考える上で貴重な資料である。

ＳＤ 10 からは、61 点の土器、198 点（16.161kg）の瓦類、５点（0.64kg）の鉄滓が出土している。出土土器の種類は遺構一覧表に記す。土師器が全体の約６割を占め、その半数以上が羽釜である。土師器皿は、赤土器の器形を引き継ぎやや砂を含む淡黄色系の胎土のもの



ＧＧ第64次調査　出土土器（ＳＫ06；１～30、ＳＤ10；31～38　1/4）

（31・32）と、精良な灰白色系の胎土のもの（33・34）とがある。34の内面全面には煤が付着しており、油煙採取用の土器の可能性がある。羽釜（38）は大和Ⅰ型羽釜である。瓦質土器擂鉢（37）は、口縁端部上面にやや平坦面を作る。白磁皿（35）は、輪高台に５カ所の抉りをいれ、全面施釉後に高台の畳付部の釉を掻き取る。見込み部には５カ所の重ね焼きの跡がある。青磁碗（36）は龍泉窯系のもの。これらの土器は、土師器羽釜・瓦質土器擂鉢の形態から、15世紀末頃のものと考えられる。

ＧＧ第64次調査　ＳＫ06　出土土器組成表

種　類	器　種	出土点数	出土比率（%）
土師器	皿	941	96.51
	（橙色系）	932	95.59
	（黄橙色系）	6	0.62
	（白色系）	3	0.31
	羽釜	11	1.13
	不明	4	0.41
	小　計	956	98.05
瓦器	椀	8	0.82
	小椀	1	0.10
	小　計	9	0.92
須恵器	甕	1	0.10
東海系陶器	鉢	5	0.51
	甕	4	0.41
	小　計	9	0.92
合　計		975	100.00

Ⅴ　調査所見

今回の発掘調査では、元興寺の東塔と南面築地塀に関する遺構は確認できなかったが、鎌倉時代以降の各時期の遺構・遺物を確認し、薬師堂町の変遷を考える上で貴重な資料が得られた。

南発掘区では、13世紀前半～中頃から遺構が増加し、以後量の多少はあるものの、各時代の遺構・遺物が確認できる。東塔院内には、中世以降に観音堂が築かれ、中門観音として信仰を集めている。この観音堂の造営は、13世紀前半頃と推定され、調査地の遺構の増加時期と重なる。観音堂の造営を契機となって、周辺の土地利用に変化が起こったとも考えられよう。その後の変遷は不明なものの、江戸時代以降は、当時の何層もの整地土のありかたや、北発掘区の調査成果から、南側の道路に面した宅地の居住部分であったと考えられる。

北発掘区では、室町時代の東西方向の溝と、江戸時代の土坑のみが検出された。発掘区北端の溝ＳＤ10は、敷地境界に掘られた溝と考えられ、調査地とその北側の東塔の境が、15世紀末頃には確定したことがわかる。東塔の修理記事（長禄三年1459年・文明九年1487年）がこの頃に見られることから、これらが境界画定の契機かもしれない。16世紀後半頃には約0.6ｍ盛土されて同じ位置にＳＤ12が掘られるが、17世紀前半には埋没する。発掘区内の江戸時代の土坑は、塵芥処理用と考えられ、当時の宅地の裏側の様相を示していよう。

なお、元興寺東塔は安政六年（1859年）に焼失しているが、発掘区内では焼土層や廃瓦層等の火災に伴う痕跡は、一切検出していない。　（中島和彦）

1）森下惠介・立石堅志　「大和北部における中近世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財センター紀要　1986』　奈良市教育委員会1986

2）小森俊寛・上村憲章　「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『京都市埋蔵文化財研究所　研究紀要　第３号』京都市埋蔵文化財研究所1996

28. 紀寺推定地の調査　第１次

事 業 名	事務所・店舗付き共同住宅新築	調 査 期 間	平成19年５月28日～６月４日
届出者名	個人	調 査 面 積	37㎡
調 査 地	奈良市紀寺東口町675-１	調査担当者	安井宣也

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京五条七坊十三坪の中央部北寄りで、紀寺推定地の南東部にあたる。紀寺推定地内では今までに試掘調査や小規模な確認調査が散発的に実施されている。今回の調査は、推定地南東部の様相の確認を主な目的として実施した。

Ⅱ　基本層序

造成土（厚さ 1.6 m）、耕作土層（厚さ 0.2 m）、床土層（厚さ 0.1 m）の下で黄褐色礫混じり粘土質シルトの地山上面となる。奈良時代の遺構面は地山上面（標高 92.8 m）である。遺構検出は地山上面で行った。

Ⅲ　検出遺構

奈良時代の建物か塀の一部とみられる柱穴Ｐ１・２と、それより時期が下る耕作溝がある。

柱穴Ｐ１には柱抜取痕跡が残っており、そこから８世紀の瓦片が出土した。

Ⅳ　出土遺物

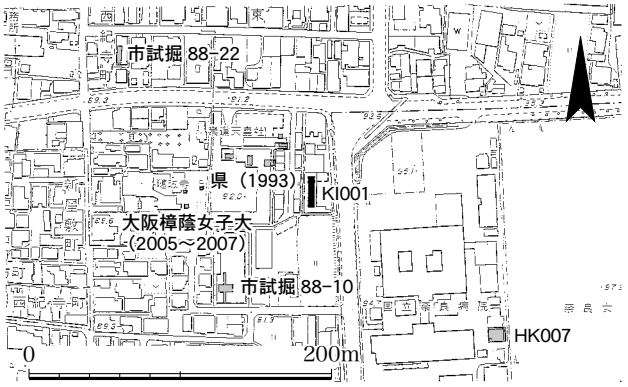
土器と瓦がそれぞれ遺物整理箱１箱分出土した。

土器には、柱穴や耕作溝の埋土から出土した８世紀の土師器杯・須恵器甕、耕作溝の埋土や地山上面から出土した 12 ～ 13 世紀の瓦器椀、14 ～ 15 世紀の土師器羽釜等がある。瓦には、発掘区の南端で確認した柱穴の柱抜取痕跡等から出土した８世紀の丸・平瓦片がある。いずれも小片である。

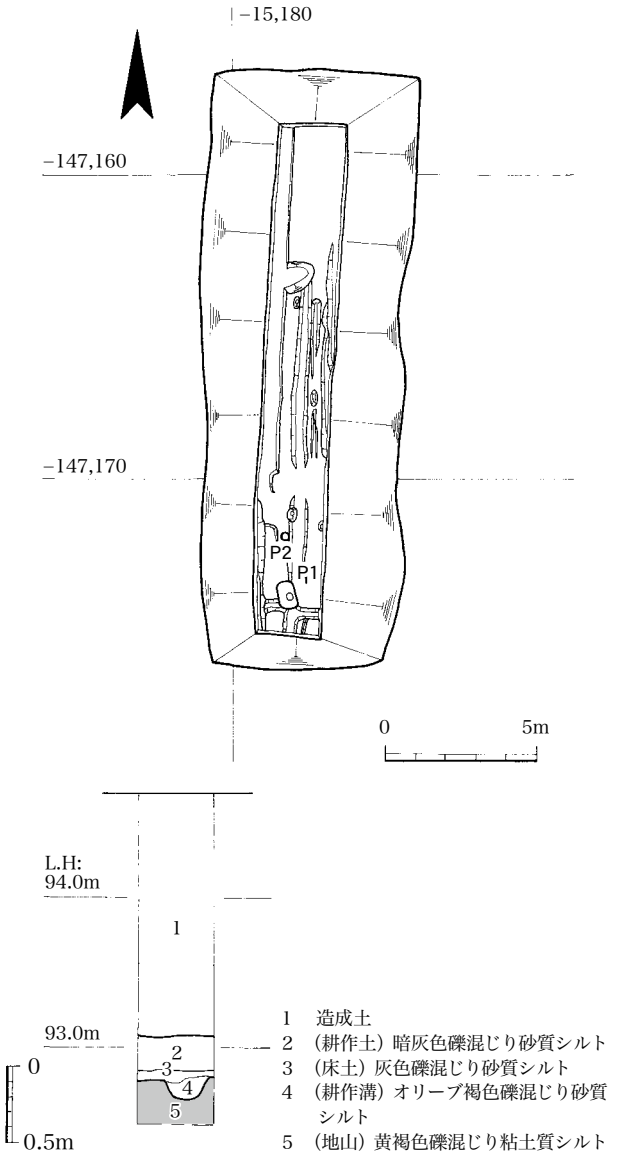
Ⅴ　調査所見

奈良時代の建物か塀の一部とみられる柱穴が認められたことから、宅地として利用されていたことが推察できる。　（安井宣也）

発掘区全景（南東から）



ＫＩ第１次調査　発掘区位置図（１/5,000）



ＫＩ第１次発掘区　遺構平面図（１/250）・土層模式図（１/50）

29. 南紀寺遺跡の調査　第５次

事 業 名	宅地造成	調 査 期 間	平成19年11月21日～12月５日
届出者名	株式会社　プロ・ホーム創	調 査 面 積	200㎡
調 査 地	奈良市南紀寺町二丁目334-１	調査担当者	大窪淳司

Ⅰ　はじめに

調査地は古墳時代の集落遺跡である南紀寺遺跡の北西部で、能登川の南岸に面する。地形的には能登川扇状地の扇央部にあたり、東から西に向かって緩やかに下る。

調査地の東方約 60 ～ 200 mのところで実施した第１・２・４次調査では、古墳時代中期の石積みで護岸された濠、島状の方形区画、井泉、溝と古墳時代後期～飛鳥時代の掘立柱建物・塀、溝が検出されている。また、南方約 300 mのところで実施した第３次調査では、古墳時代中期～飛鳥時代の竪穴建物、掘立柱建物・塀、溝、土坑と奈良時代の溝が検出されている。さらに、すぐ東隣で実施した市試掘 06-14 次調査において古墳時代の溝状遺構の一部が確認されたことから、今回の調査地でも古墳時代を主とする遺構の存在が予想された。

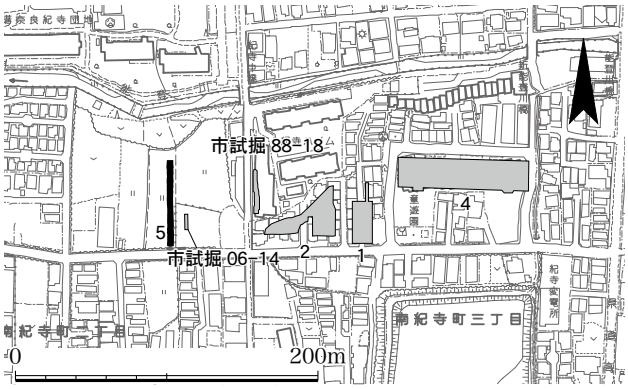
Ⅱ　基本層序

北半部では現在の耕作土である暗灰色砂質シルト層の直下、現地表下約 0.2 mで橙色砂質シルトの地山上面となるが、南半部では耕作土の下に床土の暗黄色砂質シルト層、旧水田床土の灰色砂質シルト層・暗灰黄色砂質シルト層があり、現地表下 0.5 ～ 0.7 mで黄色シルト質中粒砂の地山上面となる。発掘区北半部は水田造成に伴い削平を受けていると推察される。

地山上面は古墳時代の遺構面で、この面で遺構検出を行った。その標高は、95.3 ～ 95.9 mで北から南へ向かって緩やかに下る。

Ⅲ　検出遺構

古墳時代中期前葉の溝・土坑、中期後葉～後期の掘立柱建物４棟、掘立柱列６条を検出した。このうち、掘立柱建物・柱列の概要についは表にまとめた。



ＭＫ第5次調査　発掘区位置図（1/5,000）

発掘区全景（南西から）

ＳＤ 11　発掘区北部で検出した幅 1.5 ～ 3.0 mの溝で、溝の中軸が東に対し約 30° 北に振れる。深さは 0.3 ～ 0.5 mで北東から南西へ向かって深くなる。埋土は

ＭＫ第5次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	主軸方向	規模	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備考
		桁行（間）×梁行（間）	（m）	（m）	桁行	梁行	
ＳＡ01	北東（E20°1′00″N）	2以上	2.4以上		1.2等間		
ＳＡ02	東北東（E10°55′00″N）	3以上	3.6以上		1.2等間		
ＳＡ03	北西（N21°53′00″W）	3以上	4.4以上		北から1.5－1.2－1.7		ＳＡ02より新
ＳＡ04	北北西（N11°21′00″W）	2以上	3.9		1.3等間		
ＳＡ05	北北東（N４°34′00″W）	3以上	4.5		1.5等間		６世紀前半の土器が出土
ＳＡ06	北西（W25°3′00″N）	3以上	2.4以上		0.8等間		
ＳＢ07	東北東（E14°8′00″N）	2×1以上	1.3以上	3.3	1.3	1.65等間	
ＳＢ08	東北東（E15°14′00″N）	2×1以上	1.3以上	2.6	1.3	1.3等間	ＳＤ01より新
ＳＢ09	東北東（E６°59′00″N）	2×1以上	1.3以上	3.0	1.3	1.5等間	ＳＤ01より新
ＳＢ10	北東（E19°47′00″N）	2×1以上	1.5以上	3.4	1.5	1.7等間	ＳＤ02・ＳＫ01より新、６世紀後半の土器が出土

基本的には褐灰色砂質シルトであるが、溝の中央および北東部ではこの下層に淡褐灰色砂質シルト、灰色炭混じり砂質シルトの２層がある。直径0.1～0.2ｍの礫を多く含んでおり、古墳時代中期前葉～中葉の土器が出土した。重複関係からＳＢ08・09より古い。

ＳＤ12　発掘区中央部で検出した幅1.2～1.6ｍ、深さ0.3～0.4ｍの東西溝である。埋土は直径0.1～0.2ｍの礫を多く含み、古墳時代中期中～後葉の土器が多数出土した。重複関係からＳＫ14、ＳＢ10より古い。

ＳＤ13　発掘区南端で検出した幅1.5ｍ以上、深さ0.5ｍ以上の溝である。埋土は上から第１層：淡黄灰色砂質粘土混シルト（炭粒含）、第２層：灰色砂質粘土混シルト(炭粒含)、第３層：灰色細礫混粗砂、第４層：黒褐色砂質粘土混腐植質シルトの４層からなり、第１・２層から古墳時代中期前葉の土師器が出土した。いずれも水成堆積層で、北東から南西へ水が流れていたと推察される。

なお、第１層の直上では直径0.1～0.3ｍの亜円礫が列をなしており、溝の埋没後に設けられた石敷とみることもできる。

ＳＫ14　発掘区中央で検出した長辺約2.2ｍ、短辺約1.5ｍ、深さ約0.1ｍの不整形土坑で、重複関係からＳＤ12より新しい。埋土から古墳時代後期前葉の土器と炭化物、焼土が出土した。土坑の壁・底面は焼けておらず、土坑内およびこの付近で火が焚かれた形跡はない。

ＳＸ15　発掘区南部で検出した東西3.0ｍ以上、南北約9.0ｍ、深さ0.1～0.2ｍの土坑状の凹みであり、重複する他の土坑より古い。埋土は灰色砂質シルトで、古墳時代のものと思われる土師器の細片が出土した。

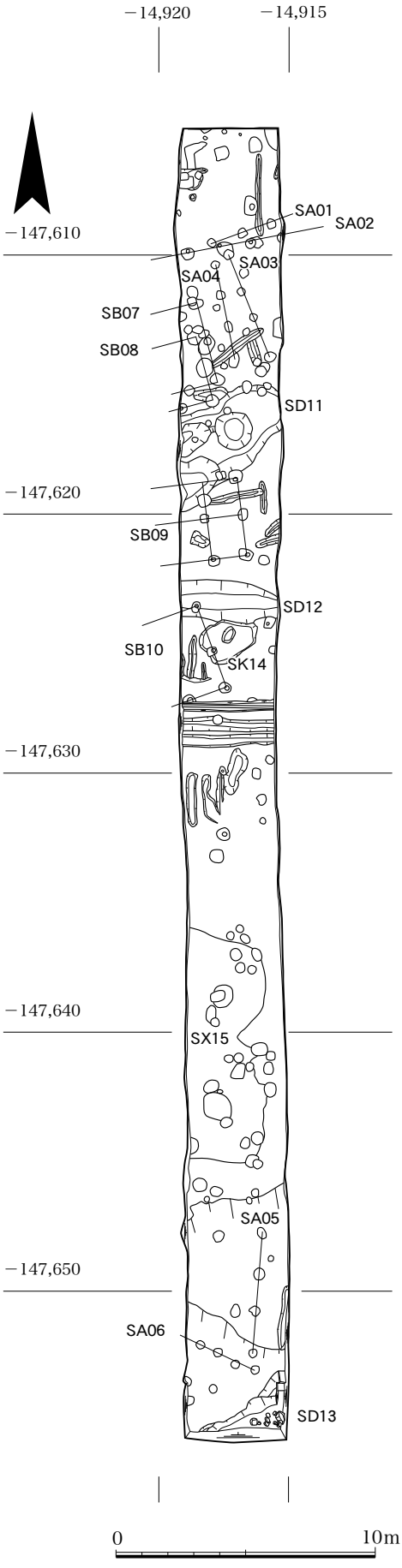
Ⅳ　出土遺物

５世紀前半～６世紀後半の土師器・須恵器等が遺物整理箱で８箱分出土した。以下、主要なものについて報告する。

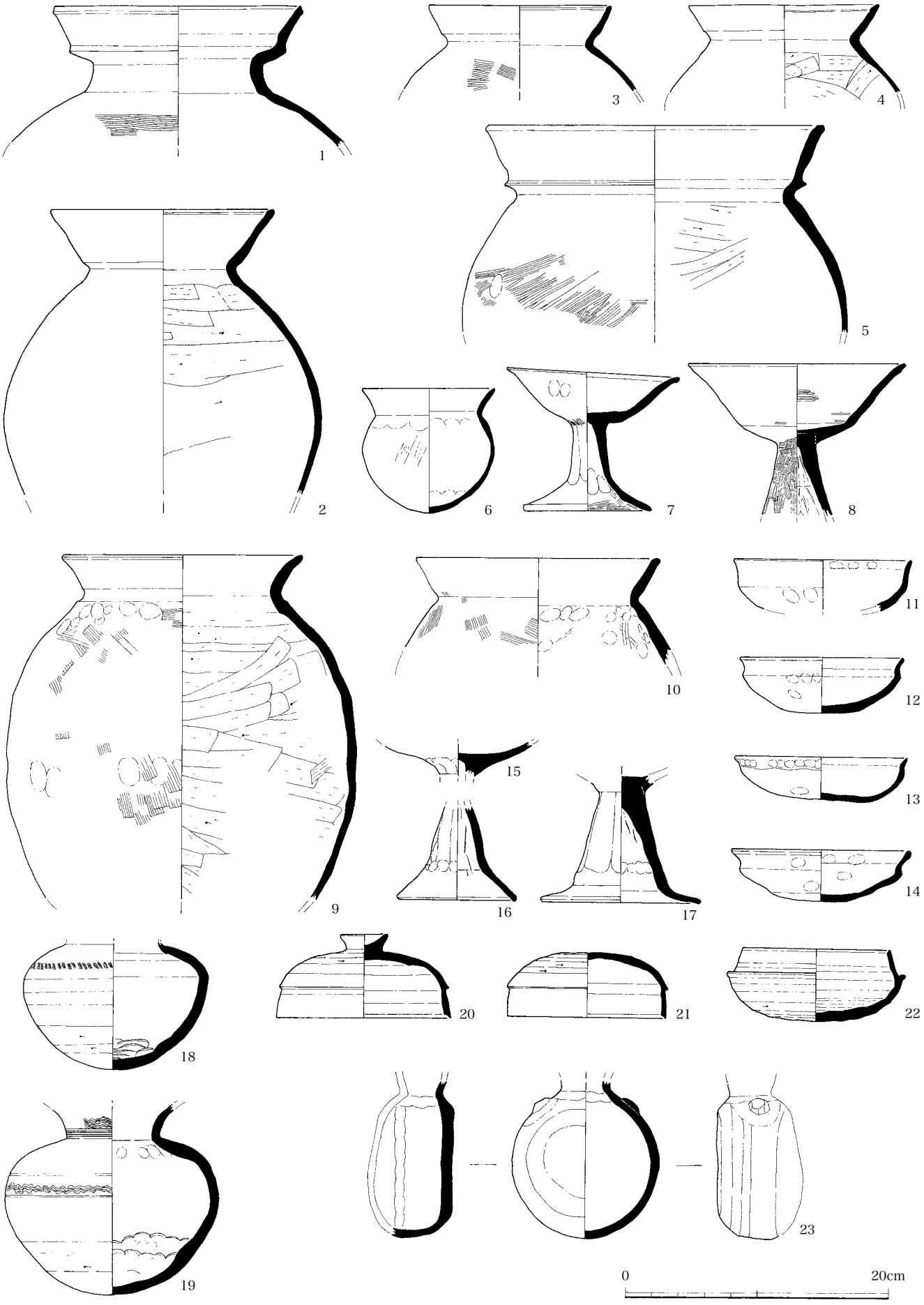
溝ＳＤ13出土土器　５世紀前半の土師器壷（１・２）・甕（３～５）・小型丸底壷（６）・高杯（７・８）がある。

１は二重口縁壷で、口径18.5㎝、残存高10.7㎝。口縁～頸部の内・外面にはナデ調整、肩部外面に横方向のハケメ調整が施される。２は短頸壷で、口径16.8㎝、体部最大径24.0㎝、残存高21.6㎝。口縁端部の内面が肥厚する。口縁部内・外面及び体部外面にナデ調整、体部内面に横方向のケズリ調整が施される。

３・４は布留式甕で、口縁端部の内面が肥厚する。３は口径13.8㎝、残存高6.4㎝。口縁端部は丸みを帯びる。口縁～頸部の内・外面にはナデ調整、肩部外面に横方向のハケメ調整が施される。４は口径14.1㎝、残存高6.7㎝。口縁端部は内傾する。口縁部内・外面にナデ調整、



ＭＫ第5次調査　発掘区遺構平面図（1/250）



ＭＫ第5次調査　出土土器（1/4、１～８：ＳＤ13、９～13・15～22：ＳＤ12、14：ＳＫ14、23：ＳＢ10柱穴）

体部内面に横方向のケズリ成形が施される。５は山陰系の甕で、口縁部と頸部の境界に稜がある。口径 25.6㎝、体部最大径 29.1㎝、残存高 15.7㎝。口縁部内・外面と肩部外面にナデ調整、体部外面に斜め方向のハケメ調整、肩部以下の内面に横方向のケズリ調整が施される。

６の小型丸底壷は口径・体部最大径とも 10.0㎝、器高 9.5㎝。器面全体にナデ調整が施される。体部外面にかすかなハケメ調整痕が、肩部の内・外面及び底部内面にかすかな指頭圧痕が残る。

７の高杯は、口径 13.0㎝、杯部高 4.1㎝、器高 10.6㎝。杯部は口縁部と体部の境界に稜が無く、口縁端部が外反する。脚部との接続部付近にハケメ調整が施される。脚軸部外面には面取りが、脚裾部内面にはハケメ調整が施される。８の高杯は、口径 16.3㎝、杯部高 6.0㎝、残存高 11.6㎝。杯部は口縁部と体部の境界にかすかな稜があり、内・外面とも横方向のミガキ調整が施される。脚軸部の外面には細かなハケメ調整が施され、内面には成形の際の絞り目がみられる。

これらは、布留式の新しい段階の様相を示す。

溝ＳＤ 12 出土土器　５世紀後半の土師器甕（９・10）・杯（11 ～ 13）・高杯（15 ～ 17）・甑、須恵器壷（18・19）・杯蓋（20・21）・杯身（22）・高杯がある。

土師器甕には、口縁端部が外反するもの（９）とそうでないもの（10）がある。９は、口径 17.8㎝、体部最大径 26.5㎝、残存高 26.1㎝。口縁部は内・外面ともナデ調整が施される。体部外面はハケメ調整で、上位は斜め方向、下位は縦方向に施される。同内面は横方向のケズリ調整が施される。10 は、口径 18.4㎝、残存高 8.0㎝。口縁部は内・外面ともナデ調整が施される。肩部の外面は主に斜め方向のハケメ調整が施され、内面はハケメ調整痕と指頭圧痕がかすかに残る。

土師器杯には、口縁端部が外反するもの（11）と、口縁部が外反するもの（12・13）があり、後者には深手のもの（12）と浅手のもの（13）がある。いずれも内・外面にナデ調整が施され、主に外面に指頭圧痕が残る。11 は口径 13.4㎝、残存高 3.8㎝。12 は口径 12.4㎝、器高 4.2㎝。13 は口径 12.9㎝、器高 3.2㎝。

土師器高杯には、６世紀にもみられる杯部が浅い椀状のもの（15・16）や布留式と同様のもの（17）がある。前者は杯部外面の脚部との接続部分に指頭圧痕が残り、脚軸部外面に面取りが施される。

これらの土師器は、布留式直後の様相を示す。

18 は須恵器短頸壷で、体部最大径 14.1㎝、残存高 9.7㎝。肩部外面に櫛描き列点文を巡らす。体部下半以下の外面にケズリ調整痕が、底部内面に当て具による成形痕が残る。19 は須恵器広口壷か𤭯で、体部最大径 16.2㎝、残存高 14.4㎝。頸部外面には櫛描き文による文様帯が、体部中央の外面には２条の凹線の間に櫛描き文を施す文様帯がある。底部内面に当て具による成形痕が残る。

須恵器蓋には、有蓋高杯蓋（20）と杯蓋（21）がある。20 は口径 13.0㎝、器高 6.4㎝。21 は口径 11.9㎝、器高 4.9㎝。ともに天井部は丸みを帯び、体部との境界は稜をなす。口縁端部内面は一段低い段をなす。天井部の上半にケズリ調整を施す。22 の須恵器蓋杯は口径 11.0㎝、器高 5.5㎝。立ち上がり部は少し内傾し、口縁端部内面は一段低い段をなす。蓋受け部は平坦で、立ち上がり部と接する部分は一段低くなる。底部外面にケズリ調整を施す。

これらの須恵器は、田辺編年のＴＫ 23 型式に属する。

その他出土土器　14 の土師器杯は、土坑ＳＫ 14 から田辺編年ＭＴ 15 ～ＴＫ 10 型式の須恵器蓋杯とともに出土した。口径 13.4㎝、器高 3.9㎝。前述の溝ＳＤ 12 から出土した土師器杯（12）と同タイプであるが、口縁部が強く外反する。

23 の須恵器提瓶は、掘立柱建物ＳＢ 10 の柱穴埋土から出土した。体部最大幅 11.2㎝、残存高 11.8㎝。左右の肩部にボタン状の把手が付く。体部の背面の外面にはケズリ調整痕がみられ、体部の側面と腹面の接合部及び体部と頸部の接合部の内面には指頭圧痕が残る。田辺編年のＴＫ 43 型式に属する。

Ⅴ　調査所見

今回の調査で、古墳時代中期前葉～後葉の溝、中期後葉～後期後葉の掘立柱建物・柱列等を確認したことから、南紀寺遺跡の北西部にも古墳時代中～後期の集落に関連する遺構が高い密度で存在することがわかった。

溝ＳＤ 13 の第１層上面で列をなしていた亜円礫は、溝埋没後に設けられた石敷の可能性もあり、第１・２・４次調査で検出した石積みで護岸された濠との関連が考えられる。

能登川をはさんですぐ北側には古墳時代の集落遺跡の東紀寺遺跡があり、これまでの調査で古墳時代中期後葉の小古墳や古墳時代後期の掘立柱建物・溝が確認され、旧河川から古墳時代前期後葉の土器・鍛冶関連遺物や古墳時代中期後葉の土器・木製品が出土している。遺跡の位置関係や検出遺構・出土遺物の時期と様相を勘案すれば、今回確認した遺構は、東紀寺遺跡との関連についても考える必要がある。

（大窪淳司・安井宣也）

30. 平成 19 年度実施小規模調査一覧

調査次数	遺　跡　名	調査地	調査期間	調査面積	届出者・通知者／事業内容	届出受理番号
ＴＫＪ -1	東九条平城跡	東九条町 200-1	H 19.6.15	20㎡	（株）ベルコ／集会場建設	H 19：3298
	調査結果：現地表下 3.6 m（標高 58.7 m）で地山を確認。調査地は谷の中で、15 世紀以降の旧河川北岸を東南部で検出。基礎掘削時に立会調査。					
―	〔あやめ池（下池）〕	あやめ池北一丁目 1432-6	H 19.11.15 ～ 29	37㎡	近畿日本鉄道（株）／区画整理	H 19：3276
	調査結果：2007-5 次試掘調査の結果「あやめ下池遺跡」として遺跡登録し、調査を実施した結果、近年の撹乱で、遺跡でないことが判明し、遺跡登録を抹消した。調査後工事着手。					

31. 平成 19 年度実施試掘調査一覧

調査次数	遺　跡　名	調　査　地	調査期間	調査面積	届出者・通知者／事業内容	届出受理番号
2007-1	右京三条四坊十四・十五坪	宝来四丁目 976-1、988-3	H 19.4.9	19㎡	（株）柿の葉ずしヤマト／店舗新築	H 18：3426
	調査結果：盛土面下 2.2m（標高 81.1m）で奈良時代の遺構面と時期不明の溝を確認。基礎掘削時に立会調査。					
2007-2	左京五条二坊十六坪	四条大路南町 578 他	H 19.6.28	17㎡	個人／共同住宅新築	H 19：3056
	調査結果：水田面下 0.7 ～ 0.9 m（標高 57.6 ～ 57.8 m）で奈良時代の遺構面と柱穴を確認。本年度に本調査（ＨＪ第 589 次）を実施した。→本年報にて概要報告。					
2007-3	左京三条五坊十六坪・二条大路	芝辻町四丁目 3-2	H 19.7.6	25㎡	たかつじ商事／ホテル新築	H 18：3409
	調査結果：盛土面下 2.2m（標高 63.1m）で佐保川の後背湿地の粘土層、同 3.0m（標高 62.3m）で旧河道の砂礫層を確認。基礎掘削時に立会調査。					
2007-4	左京三条五坊一坪・二条大路	芝辻町一丁目 6-18	H 19.7.12	10㎡	（宗）霊法会／講堂　新築	H 19：3079
	調査結果：盛土面下 1.2 m（標高 67.1 m）で奈良時代の遺構面、同 1.6 m（標高 66.7 m）で弥生時代後期の土器を含む旧河道の堆積層を確認。基礎掘削時に立会調査。					
2007-5	〔あやめ池（下池）〕	あやめ池北一丁目 9 番地 1 号他	H 19.7.30 ～ 8.11	505㎡	近鉄造園土木（株）／土地区画整理	H 16：4006
	調査結果：池西辺で池の堆積層、同南辺で大阪層群の地山上面を確認。後者で時期不明の土坑を確認、後日確認調査を実施。確認調査については、上記「30. 平成 19 年度実施小規模調査一覧」を参照。					
2007-6	右京三条四坊五坪	宝来三丁目 747 番 1	H 19.10.18	27㎡	個人／共同住宅　新築	H 19：3246
	調査結果：水田面下 0.3 ～ 0.4 m（標高 81.8 ～ 82.0 m）で奈良時代の遺構面と室町時代の溝、時期不明の土坑を確認。本発掘調査（ＨＪ 601 次）→本年報にて概要報告。					
2007-7	右京北辺二坊六坪	西大寺新町二丁目 96-1、98-1	H 19.12.18	20㎡	三和住宅（株）／共同住宅新築	H 19：3318
	調査結果：盛土面下 1.3 m（標高 72.4 m）で奈良時代の遺構面を確認。基礎掘削時に立会調査。					
2007-8	左京五条一坊十六坪・東一坊大路、(県遺跡地図５Ｃ -67)	柏木町 572-4、581	H 20.2.25	30㎡	個人／店舗新築	H 19：3427
	調査結果：現地表下 2.2 m（標高 57.6 m）で奈良時代の遺構面と東一坊大路西側溝を確認。基礎掘削時に立会調査。					
2007-9	左京二条七坊十五坪、奈良町遺跡	今小路町 1-1 他	H 20.2.27	43㎡	（株）日本エスコン／マンション新築	H 19：3441
	調査結果：現地表下 0.2 mで鎌倉時代以降の整地層を、同 1.0 mで奈良時代の遺構面を確認。本発掘調査（ＨＪ 605 次）→次年度以降に報告予定。					

32. 平成 19 年度実施工事立会一覧

（1）平成 19 年度文化財保護法第 93 条 1 、第 94 条 1 の埋蔵文化財届出書。通知に伴う工事立会

番号	届出・通知受理番号	遺跡	届出（通知）地	届出・通知者	事業内容	現況	日付	立会結果
1	H18.3360	右京五条四坊坊間東小路	平松三丁目 449-24、462-14、951	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.4.2	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、地山、土器細片含む暗褐色土の包含層確認。
2	H18.3372	左京六条四坊十三坪	大安寺一丁目 1222 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H19.4.2	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、盛土内。
3	H18.3429	左京二条三坊八坪	法華寺町 346-2	個人	宅地造成	水田	H19.4.2	ＧＬ－ 0.8m まで掘削、盛土内。
4	H18.3423	左京三条五坊十六坪、奈良町遺跡	芝辻町 858-47	オーエスハウジング（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.4.3	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
5	H18.3347	左京四条四坊二坪・東四坊大路	三条添川町 216-3	東新住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.4.4	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
6	H18.3241	南紀寺遺跡	南紀寺町三丁目 142-25	（株）フォレストホーム	分譲住宅新築	宅地	H19.4.5	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
7	H18.3404	奈良町遺跡	高畑町 654-10、654-11、654-7、-8、-9、の一部	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.4.9	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
8	H17.3279	西大寺旧境内	西大寺野神町二丁目 1784 番地 1 の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H19.4.9	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
9	H18.3407	右京三坊五条大路	五条三丁目 759-1 の一部	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.4.10	ＧＬ－ 0.2m まで掘削、盛土内。
10	H18.3095	右京北辺坊四坊八坪	西大寺赤田町一丁目 823 番 7	個人	個人住宅新築	宅地	H19.4.10	ＧＬ－ 0.2m まで掘削、盛土内。
11	H18.3353	右京三坊四坪・二条大路	近鉄西大寺土地区画整理事業区域内 42 街区 1 画地	（株）読売新聞	店舗新築	宅地	H19.4.11	ＧＬ－ 1ｍ まで掘削、盛土内。
12	H18.3363	左京六条一坊十五坪	柏木町 451-2、484-7、-10 ～ -16	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.4.11	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
13	H18.3300	左京四条四坊十三坪	大森町西町 13-16	奈良民主商工会	事務所新築	宅地	H19.4.12	ＧＬ－ 1.55m まで掘削、地山確認。
14	H18.3434	元興寺旧境内	元興寺町 40 番 3、41 番、42 番 1、42 番 2、43 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H19.4.12	ＧＬ－ 0.59m まで掘削、盛土内。
15	H18.3383	西大寺旧境内	西大寺野神町一丁目 595-1	個人	個人住宅新築	宅地	H19.4.12	ＧＬ－ 0.37m まで掘削、地山確認。
16	H18.3361	元興寺旧境内	薬師堂町 39 番	個人	個人住宅新築	宅地	H19.4.13	ＧＬ－ 0.5m まで掘削、盛土内。
17	H18.3426	右京三条四坊十四・十五坪	宝来四丁目 976-1、988-3	（株）柿の葉ずしヤマト	店舗新築	宅地	H19.4.16	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、盛土内。
							H19.5.7	ＧＬ－ 1.8m まで掘削、水田床土内。
18	H18.3395	南紀寺遺跡	南紀寺町三丁目 162-3 ～ 174-27	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.4.16	ＧＬ－ 0.6m まで掘削、盛土内。
							H19.4.18	土層確認できず。
							H19.4.20	ＧＬ－ 0.8 ～ 1m まで掘削､旧耕作土確認。
							H19.4.23	ＧＬ－ 0.8m まで掘削、旧水田床土内。
							H19.4.24	ＧＬ－ 0.7 ～ 0.8m まで掘削、盛土内。
							H19.4.27	ＧＬ－ 0.7 ～ 0.8m まで掘削、盛土内。
							H19.5.2	ＧＬ－ 1 ～ 1.6m まで掘削､地山確認できず。
19	H18.3412	左京七坊二条大路、奈良町遺跡	鍋屋町 42	個人	個人住宅新築	宅地	H19.4.17	ＧＬ－ 0.4m まで掘削､遺構面､遺物確認。
20	H18.3242	南紀寺遺跡	南紀寺町三丁目 142-17	（株）フォレストホーム	分譲住宅新築	宅地	H19.4.17	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、盛土内。
21	H18.3249	左京一条四坊九坪	法蓮町 1928 番 6	個人	個人住宅新築	宅地	H19.4.17	ＧＬ－ 1.3 ～ 1.5m まで掘削、盛土内、ＧＬ－ 0.3m まで掘削、地山確認。
22	H18.3440	右京六条一坊一坪	六条町 263 番 4	個人	個人住宅新築	宅地	H19.4.23	ＧＬ－ 0.9m まで掘削、盛土内、盛土下で旧水田耕作土確認。
23	H18.3291	左京一条六坊七坪	法蓮町 1340-3	個人	個人住宅新築	宅地	H19.4.23	ＧＬ－ 0.35 まで掘削、盛土内。
24	H18.3435	南市推定地	紀寺町 806 番 1、805 番 1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H19.4.23	ＧＬ－ 0.8 ～ 0.9m まで掘削、盛土内。
25	H18.3430	右京四条一坊八坪	四条大路四丁目 49-1	個人	個人住宅新築	宅地	H19.4.24	ＧＬ－ 0.1m まで掘削、盛土内。
26	H18.3410	右京三坊四条大路	平松二丁目 223-5	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.4.25	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
27	H18.3131	左京八条二坊一坪	杏町 386 番他	奈良市長	第 11 号市営住宅建替事業	宅地	H19.4.26	ＧＬ－ 2.0 ｍまで掘削、ＧＬ－ 1.8 ～ 1.9m で奈良時代の遺構面確認。
28	H18.3439	左京二条四坊十五坪・東四坊大路	法蓮町 341 ～ 238-21	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.5.2	ＧＬ－ 1.2m まで掘削、埋土内。
29							H19.5.8	ＧＬ－ 0.9m まで掘削、盛土内。
30	H18.3415	右京六条四坊五坪	六条三丁目 1093 番 6、1095 番 3 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H19.5.7	ＧＬ－ 0.2m まで掘削、盛土内。
31	H18.3336	右京北辺二坊八坪	西大寺新町二丁目 111 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H19.5.8	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、盛土内。
32	H18.3463	西大寺旧境内	若葉台三丁目 1883-13	個人	個人住宅新築	宅地	H19.5.9	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
33	H18.3332	左京三条五坊十五坪・東五坊大路、奈良町遺跡	油阪町 382-13 ～ 427	大阪ガス（株）	ガス管敷設	宅地	H19.5.9	ＧＬ－ 0.7m まで掘削、盛土内。
							H19.5.10	ＧＬ－ 0.7m まで掘削、地山確認。
							H19.5.11	ＧＬ－ 0.7m まで掘削、盛土内。
34	H18.3416	元興寺旧境内	川之上町 8 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H19.5.10	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
35	H18.3420	右京七条二坊三坪	七条東町 184-1	コスモ石油（株）	店舗新築	畑地	H19.5.11	ＧＬ－ 2.0m まで掘削、遺物包含層確認。
							H19.5.18	ＧＬ－ 4.0m まで掘削、地山と中世の粘土採掘坑を確認。

平成 19 年度実施工事立会一覧

番号	届出・通知受理番号	遺跡	届出（通知）地	届出・通知者	事業内容	現況	日付	立会結果
36	H19.3023	左京一条三坊四坪・東二坊大路	法華寺町 1238-8	個人	共同住宅新築	宅地	H19.5.12	ＧＬ－ 1.0m まで掘削、ＧＬ－ 0.8 mで地山と奈良時代以降の溝・土坑を確認。
37	H18.3425	左京五条五坊八坪	大森町 55-1	平山観光（株）	店舗新築	宅地	H19.5.14	ＧＬ－ 1.7m まで掘削、ＧＬ－ 1.4m で奈良時代の遺構面と小土坑を確認。
38	H18.3396	右京五条条間路・右京五条四坊十一坪	平松四丁目 396-32	個人	個人住宅新築	宅地	H19.5.14	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
39	H18.3033	東紀寺遺跡	東紀寺町二丁目 721-107	個人	個人住宅新築	宅地	H19.5.15	ＧＬ－ 0.7m まで掘削、盛土内。
40	H17.3410	左京三条五坊六坪	大宮町一丁目 34-1 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H19.5.15	ＧＬ－ 1.6m まで掘削、旧河道内。
41	H18.3417	西大寺旧境内	西大寺本町 2-16 ～ 3-3	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.5.15	ＧＬ－ 1.3m まで掘削、盛土内。
							H19.6.26	ＧＬ－ 1.5m まで掘削、地山確認。
42	H18.3418	左京五条六坊九坪、奈良町遺跡	南城戸町 42 番、43 番 1、43 番 2	（株車屋	宅地造成	宅地	H19.5.17	ＧＬ＋ 1 ～ 1.3m まで盛土、その後－ 1.0m 以上掘削、盛土内。
43	H18.3460	右京四坊六条大路	六条西四丁目 1-24	（株）開成	分譲住宅新築	宅地	H19.5.17	ＧＬ－ 0.5m まで掘削、地山確認。
44	H18.3003	六条遺跡散布地	六条西三丁目 1480-11、1480-12、1480-13	総合地所（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.5.18	ＧＬ－ 0.8m まで掘削、地山確認。
							H19.5.24	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、地山確認。
							H19.6.13	ＧＬ－ 1.2m まで掘削、地山確認。
45	H18.3289	右京六条四坊十四坪、六条山東遺跡	六条西三丁目 1480-10、15、19、20	総合地所（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.5.18	ＧＬ－ 1.5m まで掘削、地山確認。
46	H18.3009	右京六条西三坊坊間路	六条一丁目 693-6、693-7	個人	個人住宅新築	宅地	H19.5.18	ＧＬ－ 1.8m まで掘削、地山確認。
47	H18.3459	西大寺旧境内	若葉台三丁目 1931 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H19.5.21	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、地山確認。
48	H19.3047	左京四条四坊一坪	三条添川町 110-2	個人	個人住宅新築	宅地	H19.5.21	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
49	H19.3041	左京七条四坊十二坪	東九条町 1014-76	個人	個人住宅新築	宅地	H19.5.28	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
50	H18.3442	右京八条四坊九坪	七条西町一丁目 609 番 52、609 番 117	個人	個人住宅新築	宅地	H19.5.29	ＧＬ－ 0.7m まで掘削、盛土内。
51	H19.3030	遺物散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-21	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.5.29	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、盛土内。
52	H19.3053	奈良町遺跡	高畑町 734、762-3	個人	個人住宅新築	宅地	H19.6.1	工事先行、ＧＬ－ 0.8m まで掘削、地山確認。
53	H19.3014	左京五条五坊十六坪	大森町 16-9、16-11	個人	個人住宅新築	宅地	H19.6.4	ＧＬ－ 1.5m まで掘削、地山確認。
54	H19.3029	右京四条四坊八坪	宝来町三丁目 190-1、191-1 の各一部	個人	診療所付共同住宅新築	宅地	H19.6.4	ＧＬ－ 1.9m まで掘削、地山確認。
55	H18.3317	左京三条一坊十一・十四坪・東一坊坊間路	三条大路二丁目地内	奈良市長	下水道工事	道路	H19.6.4	ＧＬ－ 1.6m まで掘削、盛土内。
							H19.6.5	ＧＬ－ 1.1m まで掘削、旧耕土床土内。
							H19.7.5	ＧＬ－ 3.2m まで掘削、旧耕土床土内、溝・池状の堆積の一部か？
56	H18.3364	左京二条七坊十三坪、奈良町遺跡	北半田東町 9 番、10 番 2、11 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H19.6.5	ＧＬ－ 0.2m まで掘削、盛土内。
57	H18.3424	左京五条三坊十六坪	恋の窪一丁目 624-1、624-9	恋の窪一丁目自治会長	自治会館新築	宅地	H19.6.6	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
58	H18.3371	左京四条五坊十三坪	杉ヶ中町 6 番地 4	個人	個人住宅新築	宅地	H19.6.7	ＧＬ－ 1.0m まで掘削、旧耕作土内。
59	H19.3034	新薬師寺旧境内	高畑町 581 番 5 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H19.6.7	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、盛土内。
60	H19.3088	奈良町遺跡	高畑町 1365	（宗）不空院	個人住宅新築	宅地	H19.6.8	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、盛土内。
61	H18.3438	左京一条六坊一坪	法蓮町 922-7、923-7	個人	個人住宅新築	宅地	H19.6.8	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、盛土内。
62	H19.3028	左京三坊二条大路	芝辻町四丁目 13-10 ～法華寺町 241-1	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.6.8	ＧＬ－ 1.5m まで掘削、盛土内。
							H19.6.12	ＧＬ－ 0.8m まで掘削、地山確認。
63	H19.3036	阪原角田遺跡	阪原町 1769	個人	個人住宅新築	宅地	H19.6.11	ＧＬ－ 0.2m まで掘削、地山確認。
64	H18.3348	左京二条三坊三坪	法華寺町 213 番 1	（株）エヌ・ティ・ティ ドコモ関西	携帯電話用無線中継基置局設置	宅地	H19.6.12	ＧＬ－ 1.0m まで掘削、盛土内。
65	H19.3048	左京五条二坊二坪・東一坊大路	柏木町 529-1 の一部	（株）日本中央住販	事務所新築	宅地	H19.6.13	ＧＬ－ 0.4 ～ 0.5m まで掘削、盛土内。
							H19.9.3	ＧＬ－ 2.0m まで掘削、旧耕土内。
66	H19.3089	左京五条五坊一坪	三条本町～大森町地内	奈良市水道局	水道工事	道路	H19.6.13	ＧＬ－ 1.75m まで掘削、盛土内。
							H19.7.4	ＧＬ－ 1.7m まで掘削、地山確認。
67	H19.3058	右京六条三坊六坪	六条一丁目 721 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H19.6.14	ＧＬ－ 0.29m まで掘削、盛土内。
68	H19.3025	右京五条三坊二坪	五条一丁目 451-27 の一部	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.6.14	ＧＬ－ 0.7m まで掘削、盛土内。
69	H19.3026	右京五条三坊二坪	五条一丁目 451-27 の一部	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.6.14	ＧＬ－ 0.7m まで掘削、盛土内。
70	H19.3074	遺物散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-48	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.6.15	ＧＬ－ 0.5m まで掘削、地山確認。
71	H12.3145	左京五条四坊十六坪	大森西町内	ＪＲ奈良駅周辺開発事務所	区画整理事業	工事用地	H19.6.17	ＧＬ－ 0.5m まで掘削、盛土内。
		左京五条四坊十坪	大森町内		水路整備工事	水田	H19.8.9	ＧＬ－ 0.45m まで掘削、GL-0.4m で地山確認　東西溝数条・土坑 3 を検出。
		左京五条四坊十坪					H19.8.10	ＧＬ－ 0.55m まで掘削、地山確認、奈良時代の土器出土。
		左京五条四坊十・十五坪					H19.8.17	ＧＬ－ 0.4m ～ 0.6m まで掘削、地山確認、柱穴検出、奈良時代の土師器・須恵器の小片あり。
		左京五条四坊十五坪					H19.8.18	ＧＬ－ 0.2 ～ 0.4m まで掘削､地山確認、遺構・遺構面あり。

番号	届出・通知受理番号	遺跡	届出（通知）地	届出・通知者	事業内容	現況	日付	立会結果
72	H19.3224	右京二条二坊八坪	西大寺国見町一丁目 2137 番 53、2196 番 4	ハウス興産（株）	事務所新築	宅地	H19.6.18	ＧＬ－ 1.7 mまで掘削、地山確認。
73	H19.3002	左京九条三坊六坪	西九条町四丁目 1 番地 1	（株）エヌ・ティ・ティ ドコモ関西	携帯電話基置局設置	宅地	H19.6.19	ＧＬ－ 0.7m まで掘削、盛土内。
74	H19.3059	左京一条五坊五坪	法蓮町 795-1	個人	個人住宅新築	宅地	H19.6.19	ＧＬ－ 0.25m まで掘削、盛土内。
75	H19.3018	南紀寺遺跡	鹿野園町 911 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H19.6.20	ＧＬ－ 0.15m まで掘削、盛土内。
76	H19.3069	右京七条四坊十四坪	六条西四丁目 880-7	個人	個人住宅新築	宅地	H19.6.20	ＧＬ－ 0.2m まで掘削、盛土内。
77	H19.3049	元興寺旧境内、奈良町遺跡	納院町 13 番 1、13 番 2 の一部	（株）日本エフト	宅地造成	宅地	H19.6.21	ＧＬ－ 1.7m まで掘削、地山確認。
78	H18.3394	左京二条五坊六坪	法蓮町 39-4	個人	共同住宅新築	宅地	H19.6.22	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、地山確認。
79	H19.3052	高塚遺跡	薗生町 1982 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H19.6.22	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、地山確認。
80	H18.3325	左京八条四坊三坪・東三坊大路	東九条町 497-2 ～ 552-12	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.6.18	ＧＬ－ 1.0m まで掘削、盛土内。
							H19.6.19	ＧＬ－ 0.8m まで掘削、既掘坑内。
							H19.6.25	ＧＬ－ 0.8m まで掘削、耕作土内。
81	H19.3004	左京五条四坊三坪	大安寺七丁目 738 番・739 番合併、741 番地	個人	個人住宅新築	宅地	H19.6.25	ＧＬ－ 0.15m まで掘削、井戸、19 世紀前半の遺物を含む土坑確認。
82	H19.3071	左京一条四坊十二坪	法蓮町 578 番 1	（株）ヒガワコーポレーション	青空駐車場造成	荒蕪地	H19.6.25	ＧＬ－ 1.0m まで掘削、0.6m 下で地山確認。
83	H19.3042	左京三条二坊三・四坪	三条大路一丁目 584-46 ～ 602-4	奈良市長	下水道	道路	H19.6.25	ＧＬ－ 1.0m まで掘削、既設管掘形内。
							H19.6.28	ＧＬ－ 1.6m まで掘削、既設管掘形内。
84	H19.3083	遺跡散布地（県遺跡地図 5A-20）	秋篠町 1546-7	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.6.27	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、盛土内。
85	H18.3411	奈良町遺跡	高畑町 745 番 1、2	個人	個人住宅新築	宅地	H19.6.28	ＧＬ－ 0.2m まで掘削、表土内。
86	H19.3121	右京二条二坊四坪	二条大路南五丁目 265 番 2	横領水利組合	溜池整備	ため池	H19.6.29	ＧＬ－ 0.6m まで掘削、秋篠川または三条池内の堆積土。
87	H19.3076	遺跡散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-15	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.7.2	ＧＬ－ 0.85m まで掘削、地山確認。
88	H19.3017	右京一条西一坊大路	若葉台三丁目 1843 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H19.7.2	ＧＬ－ 0.6m まで掘削、盛土内。
89	H19.3128	左京一条五坊八坪	法蓮町 930-12	個人	個人住宅新築	宅地	H19.7.2	ＧＬ－ 0.4 ～ 0.5m まで掘削、盛土内。
90	H19.3040	左京四条一坊十五坪東三坊坊間東小路	四条大路二丁目 867-1、867-3	個人	駐車場造成	畑地	H19.7.5	ＧＬ－ 0.85m まで掘削、地山確認。
91	H19.3087	遺跡散布地（県遺跡地図 5A-20）	秋篠町 1546-10	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.7.9	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
92	H19.3086	左京二条七坊十一坪	川久保町 10-10	（株）日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H19.7.10	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、地山確認。
93	H19.3122	左京一条五坊六坪	法蓮町 752-8、9、11、12	個人	個人住宅新築	宅地	H19.7.12	ＧＬ－ 0.45m まで掘削、旧水田土内。
94	H19.3081	右京六条三坊二坪	六条一丁目 554	個人	個人住宅新築	宅地	H19.7.17	ＧＬ－ 0.1 ～ 0.4m まで掘削、盛土内。
95	H18.3245	右京七条二坊十三坪	七条一丁目 242-1	個人	共同住宅新築	宅地	H19.7.19	ＧＬ－ 0.5m まで掘削、盛土内。
96	H19.3051	左京五条三坪・六坪（佐伯院跡）	西木辻町 111	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.7.20	ＧＬ－ 1.2m まで掘削、盛土内。
97	H19.3099	左京東一坊五条大路	柏木町 480-1	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.7.23	ＧＬ－ 1.5m まで掘削、盛土内。
98	H19.3112	佐紀盾列古墳群	山陵町 348 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H19.7.23	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、地山確認。
99	H19.3027	右京四条三坊十四坪	平松一丁目 862 番、863 番、107 番 1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H19.7.23	ＧＬ－ 0.2m まで掘削、地山・遺構面確認。
100	H19.3140	左京七条二坊一坪	八条五丁目 438-8	（株）モリタ住建	分譲住宅新築	宅地	H19.7.25	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
101	H19.3117	左京二条七坊一坪（広上王宅跡）	北川端町 7	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.7.25	ＧＬ－ 0.6m まで掘削、盛土内。
102	H19.3120	遺物散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-44	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.7.25	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
103	H19.3080	右京北辺二坊八坪	秋篠早月町 215-12	個人	賃貸住宅新築	宅地	H19.7.27	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、盛土内。
104	H19.3095	左京七条四坊五坪	東九条町 1014-56	個人	個人住宅新築	宅地	H19.7.27	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
105	H19.3119	遺物散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-39	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.7.27	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
106	H18.3382	左京四条四坊十三坪	三条本町 1121 番	（株）開成	マンション新築	宅地	H19.7.30	ＧＬ－ 3.0m まで掘削､土層確認できず。
107	H9.3298	東九条平城跡	東九条町 200-1	（株）ベルコ	店舗・集会場建設	宅地	H19.7.31	ＧＬ－ 2.0m まで掘削､旧水田耕作土内。
							H19.8.10	ＧＬ－ 4.0m まで掘削、堆積土内。
108	H19.3115	右京五条四坊五坪	五条三丁目 867 番 1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H19.8.1	ＧＬ－ 0.95m まで掘削、地山確認。
							H19.8.31	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、地山確認。
109	H19.3097	右京三条西一坊大路	三条大路五丁目 185-4	個人	店舗新築	宅地	H19.8.2	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、盛土内。
110	H19.3141	新薬師寺旧境内	高畑町 581-1	個人	個人住宅新築	宅地	H19.8.2	ＧＬ－ 0.25m まで掘削、盛土内。
111	H19.3123	遺跡散布地（県遺跡地図 5A-20）	秋篠町 1546-6	三和住宅（株）	個人住宅新築	宅地	H19.8.3	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
112	H19.3072	左京五条二坊十二坪・二条大路、奈良町遺跡	船橋町 1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H19.8.3	ＧＬ－ 0.6m まで掘削、盛土内。
113	H19.3012	左京二条東一坊坊間路	四条大路二丁目 852-1、-2 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H19.8.3	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。

平成 19 年度実施工事立会一覧

番号	届出・通知受理番号	遺跡	届出（通知）地	届出・通知者	事業内容	現況	日付	立会結果
114	H19.3082	右京五条四坊五坪	五条三丁目 868-9	個人	個人住宅新築	宅地	H19.8.6	GL－ 1.2m まで掘削、0.3 m下で地山確認。
115	H19.3127	右京四条一坊八坪	四条大路四丁目 49-3	個人	事務所新築	青空駐車場	H19.8.6	GL－ 0.2m まで掘削、盛土内。
116	H19.3113	左京九条三坊十六坪	東九条町 369-2、370-1	個人	個人住宅新築	宅地	H19.8.7	GL－ 0.7m まで掘削、盛土内。
117	H19.3114	右京一条二坊十一坪	西大寺栄町 2317-10	個人	共同住宅新築	宅地	H19.8.7	GL－ 0.3m まで掘削、盛土内。
118	H19.3068	右京四条二坊二坪	四条大路五丁目 6-1	都跡小学校	防火水槽埋設	校庭	H19.8.7	GL－ 2.5m まで掘削、地山確認。
119	H19.3077	左京二条四坊七坪	法蓮町 184-12	個人	個人住宅新築	宅地	H19.8.8	GL－ 0.15m まで掘削、盛土内。
120	H19.3024	左京八条三坊二坪	西九条町一丁目 1-9	個人	個人住宅新築	宅地	H19.8.9	GL－ 0.4m まで掘削、盛土内。
121	H19.3153	左京三条東一坊坊間路	三条大路二丁目 529 番 8、529 番 9	（有）寿上商事	店舗新築	宅地	H19.8.17	GL－ 0.8m まで掘削、盛土内。
122	H19.3162	池田遺跡	池田町 340 番 1、340 番 2	新日本不動販売（株）	青空駐車場造成	水田	H19.8.20	GL－ 1.2m まで掘削、0.8 m下で地山確認。
123	H19.3134	左京三条三坊六坪	菅原町 21-1	個人	共同住宅改築	宅地	H19.8.20	GL－ 0.3m まで掘削、盛土内。
124	H19.3129	遺物散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-18	個人	個人住宅新築	宅地	H19.8.22	GL－ 0.4 ～ 0.9m まで掘削､地山確認。
125	H19.3156	遺物散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-20	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.8.22	GL－ 0.4 ～ 0.9m まで掘削､地山確認。
126	H19.3179	紀寺跡	紀寺町 658-6	（株）日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H19.8.22	GL－ 0.2m まで掘削、盛土内。
127	H18.3409	左京三条三坊十六坪・二条大路	芝辻町四丁目 3-2	たかつじ商事（株）	ホテル新築	宅地	H19.8.22	GL－ 2.5m まで掘削、佐保川の後背湿地堆積層、河川堆積層を確認。
128	H19.3240	南紀寺遺跡	南紀寺町三丁目 142-26	（株）フォレストホーム	分譲住宅新築	宅地	H19.8.22	GL－ 0.4m まで掘削、盛土内。
129	H19.3173	右京五条三坊八坪	五条一丁目 481 番 31	個人	個人住宅新築	宅地	H19.8.27	GL－ 0.3m まで掘削、地山確認。
130	H19.3090	元興寺旧境内、奈良町遺跡	東寺林町 25 番 3、25 番 1 の一部、25 番 4 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H19.8.27	GL－ 0.3m まで掘削、盛土内。
131	H19.3154	遺跡散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-46	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.8.28	GL－ 0.3m まで掘削、盛土内。
132	H19.3118	左京三条四坊十五坪	大宮町五丁目 1-19 ～ 1-10	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.9.3	GL－ 1.1m まで掘削、遺構面の可能性あり。
133	H19.3163	右京二条三坊七坪、菅原東遺跡	青野町 23-4	個人	個人住宅新築	宅地	H19.9.3	GL－ 0.5m まで掘削、盛土内。
134	H19.3159	左京二条五坊十五坪	法蓮町 986 番 8	個人	個人住宅新築	宅地	H19.9.5	GL－ 0.3m まで掘削、盛土内。
135	H19.3215	左京一条五坊八坪	法蓮町 930-9	パナホーム（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.9.6	GL－ 0.4m まで掘削、盛土内。
136	H19.3216	左京一条五坊八坪	法蓮町 930-10	パナホーム（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.9.6	GL－ 0.4m まで掘削、盛土内。
137	H19.3190	左京一条五坊八坪	法蓮町 930-11	個人	個人住宅新築	宅地	H19.9.6	GL－ 0.4m まで掘削、盛土内。
138	H19.3217	左京一条五坊八坪	法蓮町 930-15	パナホーム（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.9.6	GL－ 0.4m まで掘削、盛土内。
139	H19.3218	左京一条五坊八坪	法蓮町 930-16	パナホーム（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.9.6	GL－ 0.4m まで掘削、盛土内。
140	H19.3219	左京一条五坊八坪	法蓮町 930-17	パナホーム（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.9.6	GL－ 0.4m まで掘削、盛土内。
141	H19.3178	紀寺跡	紀寺町 658-11	（株）日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H19.9.7	GL－ 0.2m まで掘削、盛土内。
142	H19.3109	左京二条七坊六坪、奈良町遺跡	半田突抜町 2 ～ 4-3	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.9.7	GL－ 0.8m まで掘削、地山確認。
							H19.9.12	GL－ 0.6～1.25m まで掘削､地山確認。
143	H19.3098	左京四条二坊十二坪（田村第跡）	四条大路一丁目 1000 番 176	パナホーム（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.9.10	GL－ 0.35m まで掘削、盛土内。
144	H19.3226	左京四条三坊十六坪	三条添川町 121-1	個人	駐車場造成	水田	H19.9.10	GL－ 0.3m まで掘削、耕土内。
145	H19.3166	遺物散布地（県遺跡地図 5A-20）	秋篠町 1546-11	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.9.11	GL－ 0.4m まで掘削、盛土内。
146	H19.3170	左京四条一坊十六坪	四条大路二丁目 2-34 ～ 35	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.9.11	GL－ 0.8m ～ 1.35m まで掘削、地山確認。
							H19.9.13	GL－ 0.1m まで掘削、盛土・一部水田土の堆積確認。
							H19.9.14	GL－ 1.2m まで掘削、地山確認。
147	H19.3168	左京一条東二坊大路	法華寺町 1260-1 ～ 1133-1	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.9.11	GL－ 1.0m まで掘削、地山確認。
148	H19.3165	右京六条三坊九坪	六条一丁目 664-5	個人	個人住宅新築	宅地	H19.9.13	GL－ 0.5m まで掘削、遺構面の可能性あり。
149	H19.3236	右京六条三坊八坪 六条条間北小路	大安寺西三丁目 206 番の一部	オーエスハウジング（株）	宅地造成	宅地	H19.9.14	GL－ 1.8m まで掘削、水田耕土内。
150	H19.3187	左京一条七坊二坪、奈良町遺跡	多門町 26 番地	個人	個人住宅新築	宅地	H19.9.18	GL－ 0.45m まで掘削、盛土内。
151	H19.3180	西大寺旧境内	西大寺新池町 1736-5、1736-9	個人	個人住宅新築	宅地	H19.9.18	GL－ 0.3m まで掘削、盛土内。
152	H19.3245	左京五条二坊十坪	四条大路南町 420-17	個人	個人住宅新築	宅地	H19.9.18	GL－ 0.4m まで掘削、盛土内。
153	H19.3204	白毫寺遺跡	白毫寺町 572-1	個人	個人住宅新築	宅地	H19.9.19	GL－ 0.3m まで掘削、盛土内。
154	H19.3212	左京四条四坊七坪	三条添川町 226-13	個人	店舗新築	宅地	H19.9.20	GL－ 0.35m まで掘削、盛土内。

番号	届出・通知受理番号	遺跡	届出（通知）地	届出・通知者	事業内容	現況	日付	立会結果
155	H19.3092	黄金塚古墳	田中町地内	奈良市水道局	水道工事	道路	H19.9.19・21・26	GL－0.2 ～ 0.3m まで掘削、黄褐色砂質シルト層内。
156	H19.3185	左京六条三坊十六坪	大安寺三丁目 114-6	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.9.21	GL－0.4 ～ 0.5m まで掘削、盛土内。
157	H19.3186		大安寺三丁目 114-7					
158	H19.3161	右京三条三坊七坪、菅原東遺跡	近鉄西大寺土地区画整理事業地区 59 街区 5、6 画地	個人	個人住宅新築	宅地	H19.9.21	GL－0.4 ～ 0.6m まで掘削、盛土内。
159	H19.3089	左京五条五坊一坪	三条本町～大森町地内	奈良市水道局	水道工事	道路	H19.9.25	GL－1.3m まで掘削、地山確認。
160	H18.3304	左京三条六坊十一坪、奈良町遺跡	小西町 21-1 ほか	近畿日本鉄道（株）	店舗建設	駐輪場	H19.9.25	GL－0.8m まで掘削、橙灰色砂質ｼﾙﾄ層内、近代の井戸確認，
							H19.10.12	GL－1.5m まで掘削、地山確認、13 世紀中頃の土坑・時期不明の柱穴検出。
161	H19.3193	右京四条四坊十三坪	平松五丁目 648 番 3	個人	個人住宅新築	水田	H19.9.26	GL－0.2m まで掘削、GL-0.1m で地山　遺構確認、縄目叩きの平瓦出土。
162	H19.3145	左京四条六坊十五坪、奈良町遺跡	光明院町 21-1	個人	個人住宅新築	宅地	H19.9.27	GL－0.4m まで掘削、盛土内。
163	H19.3205	朱雀大路	四条大路三丁目 3	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.9.27	GL－0.8m まで掘削、耕作土内。
164	H19.3135	般若寺	般若寺町 19 ～ 125	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.9.27	GL－0.9m まで掘削、盛土内。
							H19.9.28	GL－0.8m まで掘削、盛土内。
							H19.10.1	GL－0.8m まで掘削、地山確認。
165	H19.3005	右京一条二坊一・八坪・平城宮跡	二条町一丁目 1-41-1 ～佐紀西町 3535	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.9.27	GL－0.6m まで掘削、地山確認。
							H19.9.28	GL－0.9m まで掘削、地山確認。
							H19.10.1	GL－1.2m まで掘削､河川堆積層確認。
166	H19.3175	左京七条四坊十一坪	東九条町 1155-2	個人	個人住宅新築	宅地	H19.9.28	GL－0.3 ～ 0.6m まで掘削、盛土内。
167	H19.3177	左京一坊五条大路	柏木町 248	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.9.28	GL－1.6m まで掘削、地山確認。
168	H19.3142	遺跡散布地（県遺跡地図 5 A -20）	押熊町 689-12	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.9.28	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
169	H19.3200	右京二条西一坊大路	二条町三丁目 90-45	個人	個人住宅新築	宅地	H19.10.1	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
170	H19.3151	左京二条六坊十坪	法蓮町 1073-1	個人	個人住宅新築	宅地	H19.10.1	GL－0.8m まで掘削、盛土内。
171	H19.3126	左京五条一坊十坪	柏木町 629-4、643、627-3、627-4	個人	個人住宅新築	宅地	H19.10.1	GL－0.1 ～ 0.3m まで掘削、水田床土内。
172	H19.3228	左京一条五坊二坪	法蓮町 735-5	個人	個人住宅新築	宅地	H19.10.2	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
173	H19.3198	朱雀大路	三条大路三丁目 457-1、-3、-4、456-1	（株）T＆K	共同住宅新築	宅地	H19.10.2	GL－0.4m まで掘削、盛土内。
174	H19.3079	左京三条五坊一坪・二条大路	芝辻町一丁目 6-18	宗教法人霊法会	講堂新築	宅地	H19.10.2	GL－1.0m まで掘削、灰色砂質土内。
175	H19.3249	左京七条二坊一坪	八条五丁目 438-4	（株）モリタ住建	分譲住宅新築	宅地	H19.10.4	GL－0.2m まで掘削、盛土内。
176	H19.3209	遺物散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-16	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.10.5	GL－0.6m まで掘削、青灰色シルト質砂層内。
177	H19.3032	左京三条六坊九坪、奈良町遺跡	坊屋敷町 34-1	個人	個人住宅新築	宅地	H19.10.5	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
178	H19.3403	元興寺旧境内	南市町 16-1	個人	店舗付共同住宅新築	宅地	H19.10.5	GL－0.8 ～ 1.0m まで掘削､GL－0.5m で地山、土坑確認。
							19.10.30	GL－0.3m まで掘削、地山確認。
179	H19.3210	遺物散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-32	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.10.9	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
180	H19.3152	左京三坊一条南大路	法華寺町 1351 番地	奈良市長	校門、玄関の舗装工、自転車置場、倉庫新設	学校用地・歩道	H19.10.10	GL－0.6m まで掘削、灰色砂質粘土検出。
							H19.10.29	GL－0.9m まで掘削、盛土内。
							H19.11.12	GL－1.0 ～ 1.8m まで掘削､水田床土･盛土内。
181	H19.3174	左京二条三坊一坪・東二坊大路	法華寺町 368 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H19.10.10	GL－0.4m まで掘削、盛土内。
182	H19.3155	右京七条二坊十三坪	七条一丁目 4-17 ～ 21	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.10.12	GL－0.9m まで掘削、耕作土内。
183	H19.3238	右京四条一坊十四坪	四条大路五丁目 104-3	個人	賃貸住宅新築	資材置場	H19.10.12	GL－0.2m まで掘削、盛土内。
184	H19.3160	六条山東遺跡	六条西三丁目 1533-4、1562-5	特定非営利活動法人 かかしの会	軽作業場付住宅新築	宅地	H19.10.12	掘削なし。
185	H19.3260	左京四条三坊二坪	三条栄町 645 番地 5	個人	個人住宅新築	宅地	H19.10.15	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
186	H19.3189	右京北辺四坊八坪	西大寺赤田町一丁目 5 番 21 号	個人	個人住宅新築	宅地	H19.10.15	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
187	H19.3207	紀寺跡	紀寺町 912-3	個人	個人住宅新築	宅地	H19.10.15	GL－0.9m まで掘削、0.8m 下で地山確認。
188	H19.3143	新薬師寺旧境内、奈良町遺跡	高畑町 1328-1､-4	個人	個人住宅新築	宅地	H19.10.18	GL－0.7m まで掘削、盛土内。
189	H19.3220	左京四条四坊四坪	大森西町 205-7、204-5	個人	個人住宅新築	宅地	H19.10.22	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
190	H19.3164	左京三条一坊六坪	三条大路三丁目 1-12 ～ 3-21	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H 19.10.23 ～ 24	GL－0.8 ～ 1.2m まで掘削、盛土内。
191	H19.3280	左京二条四坊一坪	法蓮町 397-14	㈱シティホーム	分譲住宅新築	宅地	H19.10.24	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
192	H19.3244	左京東七坊大路、奈良町遺跡	紀寺町 1043 番 3 他	個人	個人住宅新築	宅地	H19.10.26	GL－0.2m まで掘削、盛土内。
193	H19.3091	奈良町遺跡	高畑 810	個人	個人住宅新築	宅地	H19.10.29	GL－0.3 ～ 0.4m まで掘削、盛土内。

平成 19 年度実施工事立会一覧

番号	届出・通知受理番号	遺跡	届出（通知）地	届出・通知者	事業内容	現況	日付	立会結果
194	H19.3203	左京二条六坊五坪、奈良町遺跡	内侍原町 31-3	個人	個人住宅新築	宅地	H19.10.29	GL－0.2m まで掘削、地山確認。
195	H19.3184	左京七条三坊十坪	七条一丁目 733-9	社会福祉法人こまどり会	ケアホーム新築	宅地	H19.10.29	GL－1.2m まで掘削、盛土内。
196	H19.3271	左京七条二坊一坪	八条五丁目 438-1	㈱モリタ住建	分譲住宅新築	宅地	H19.10.29	GL－0.2m まで掘削、盛土内。
197	H19.3272		八条五丁目 438-5					
198	H19.3273		八条五丁目 438-6					
199	H19.3274		八条五丁目 438-7					
200	H19.3241	南紀寺遺跡	南紀寺町四丁目 133 番 9	個人	個人住宅新築	宅地	H19.10.30	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
201	H19.3084	左京五条五坊六坪	西木辻町 69-1	個人	共同住宅新築	宅地	H19.10.30	GL－0.9m まで掘削、盛土内。
202	H19.3313	左京六条二坊七坪	八条町 355-4 ほか 11 筆	新英自動車（株）	道路敷設	道路	H19.11.1	GL－0.5m まで掘削、盛土内。
							H19.11.2	GL－4.7m まで掘削、4.15m 下で地山確認。
203	H19.3224	右京北辺二坊八坪	秋篠早月町 215-9	個人	個人住宅新築	宅地	H19.11.2	GL－0.1m まで掘削、盛土内。
204	H19.3278	左京四条二坊十二坪	四条大路一丁目 1000 番 9	個人	個人住宅新築	宅地	H19.11.5	GL－0.4m まで掘削、盛土内。
205	H19.3254	遺物散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-27	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.11.6	GL－0.3m まで掘削、地山確認。
206	H19.3197	左京七条二坊十二坪	七条東町 259	個人	駐車場造成	水田	H19.11.7	GL－0.2 ～ 0.3m まで掘削、水田床土内。
207	H19.3265	右京六条四坊十四坪・西四坊大路	六条西三丁目 1480-6、-7	総合地所（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.11.8	GL－1.0m まで掘削、地山確認。
							H19.11.27	GL－1.2m まで掘削、地山確認。
208	H19.3243	左京二条四坊五坪	芝辻町三丁目 7-12 ～ 8-37	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H 19.11.8 ～ 9	GL－0.7m まで掘削、盛土内。
							H19.11.20	GL－0.75m まで掘削、盛土内。
							H19.11.26	GL－1.0m まで掘削、旧水田床土内。
209	H19.3223	左京五条二坊十二坪	大安寺西一丁目 356-7	個人	個人住宅新築	宅地	H19.11.9	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
210	H19.3286	左京五条二坊八坪	四条大路南町 482-17	個人	個人住宅新築	宅地	H19.11.9	GL－0.4m まで掘削、盛土内。
211	H19.3321	西大寺旧境内	若葉台三丁目 1968 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H19.11.12	GL－0.3 ～ 0.4m まで掘削､地山確認。
212	H19.3199	阿弥陀山寺跡	敷島町一丁目 509 番地 18 号	個人	個人住宅新築	宅地	H19.11.12	GL－0.4m まで掘削、盛土内。
213	H19.3227	左京九条四坊八坪	東九条町 286-3、286-5、305-2	個人	共同住宅新築	宅地	H19.11.12	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
214	H19.3146	左京一坊四条間北小路	四条大路二丁目 829 番 1	個人	共同住宅新築	宅地	H19.11.12	GL－1.3m まで掘削、1.0m 下で地山確認。
215	H19.3281	遺物散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-17	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.11.14	GL－0.25 ～ 0.85m まで掘削、地山？確認
216	H19.3252	左京六坊二条条間路	法蓮南二丁目 1073-3 他	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.11.15	GL－1.3m まで掘削、暗茶褐色土内。
217	H19.3250	左京三条二坊十二坪	三条大路一丁目 659-3 ほか 2 筆	（株）出光興産	給油所新築	宅地	H19.11.15	GL－2.1m で遺物包含層・地山確認、東西溝検出（条坊関連遺構の可能性あり）。
218	H19.3295	南紀寺遺跡	南紀寺町三丁目 281-7、281-8	個人	個人住宅新築	宅地	H19.11.15	GL－0.9m まで掘削、盛土内。
219	H19.3335	左京八条四坊十二坪	東九条町 644-1、645-1	個人	青空駐車場造成	水田	H19.11.16	GL－0.5m まで掘削、旧床土内。
220	H19.3320	阿弥陀山寺跡	敷島町一丁目 531-3、531-22	（株）さやか	宅地造成	宅地	H19.11.19	GL－0.8 ～ 5.0m まで掘削､地山確認。
221	H19.3259	右京六条四坊十六坪	六条西一丁目 1537 番 393	個人	個人住宅新築	宅地	H19.11.20	GL－0.2m まで掘削、盛土内。
222	H19.3231	右京三条三坊十二坪	宝来二丁目 809-4	個人	共同住宅新築	畑地	H19.11.21	GL－0.25 ～ 0.3m まで掘削、盛土内。
223	H19.3261	左京三条二坊六坪	三条大路一丁目 645 番 19	個人	個人住宅新築	宅地	H19.11.26	GL－0.4m まで掘削、盛土内。
224	H19.3251	右京四条一坊十一坪	四条大路五丁目 201-1、199-4 の一部	個人	個人住宅新築	水田	H19.11.27	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
225	H19.3312	右京三条三条七坪、菅原東遺跡	菅原町 102-4、290-4	（株）朝日屋	分譲住宅新築	宅地	H19.11.29	GL－0.5m まで掘削、盛土内。
226	H19.3290	右京五条三坊三坪	五条二丁目 603-5	個人	個人住宅新築	宅地	H19.11.30	GL－0.1 ～ 0.5m まで掘削、盛土内。
227	H19.3361	薬師寺旧境内	西の京町 228 番地	（宗）薬師寺	宗教施設新築	寺院境内	H19.12.3	GL－1.2m まで掘削、盛土内。
228	H19.3239	奈良町遺跡	紀寺町 998-1、998-2	個人	個人住宅新築	宅地	H19.12.3	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
229	H19.3353	左京二条三坊八坪	法蓮町 346-3	個人	個人住宅新築	宅地	H19.12.4	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
230	H19.3299	左京八条四坊十一坪	東九条町 622-6	個人	事務所新築	水田	H19.12.4	GL－0.5m まで掘削、水田耕土内。
231	H19.3148	右京五条四坊十坪	平松四丁目 508 番 24	個人	個人住宅新築	宅地	H19.12.5	GL－0.3m まで掘削、GL－0.1m で地山確認。
232	H19.3339	朱雀大路	柏木町 211-1、211-4	個人	畑地造成	水田	H19.12.7	GL－0.3m まで掘削、水田床土内。
233	H19.3255	右京二条西三坊坊間西小路	近鉄西大寺駅南土地区画整理事業 21 街区 4-2	個人	共同住宅新築	宅地	H19.12.10	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
234	H19.3287	遺物散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-26	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.12.10	GL－0.3m まで掘削、青灰白色粘土層内。
235	H19.3237	左京四条六坊三坪、奈良町遺跡	柳町 1	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.12.11	GL－0.8 ～ 1.2m まで掘削、盛土内。
236	H19.3262	右京八条四坊八坪	七条西町一丁目 609-18	個人	個人住宅新築	宅地	H19.12.12	GL－0.55m まで掘削、地山確認。
237	H19.3288	遺物散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-45	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.12.12	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
238	H19.3078	左京四条東六坊坊間路、奈良町遺跡	小川町 4-356	個人	個人住宅新築	宅地	H19.12.12	GL－1.2m まで掘削、盛土内。工事中発見された石造物 3 点持ち帰り。

番号	届出・通知受理番号	遺跡	届出（通知）地	届出・通知者	事業内容	現況	日付	立会結果
239	H19.3355	右京六条西四坊大路	六条西三丁目 1481-54	個人	個人住宅新築	宅地	H19.12.14	GL－0.3m まで掘削、地山確認。
240	H19.3158	古市城跡	古市町 2037-2	プレステ（株）	宅地造成	荒蕪地	H19.12.14	GL－0.5m まで掘削、地山確認。
241	H19.3206	右京一条西三坊坊間東小路	西大寺本町 5-10	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路宅地	H19.12.18	GL－1.0 ～ 1.5m まで掘削、遺構面・地山確認。
242	H19.3340	右京五条四坊五坪	五条三丁目 867 番 7	個人	個人住宅新築	宅地	H19.12.19	GL－0.4m まで掘削、地山確認。
243	H19.3147	朱雀大路	四条大路三丁目 4-37 ～ 38	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H19.12.19	GL－1.5m まで掘削、遺構面・出土遺物あり。
244	H19.3332	左京三条六坊十坪・東六坊坊間路、奈良町遺跡	内侍原町 2-1、-2、-3、-5、-6	（株）中京銀行	店舗新築	宅地	H19.12.20	GL－0.8m まで掘削、明治以降の出土遺物あり。
245	H19.3305	左京六条三坊八坪	大安寺西三丁目 206-4	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.12.20	GL－0.4m まで掘削、盛土内。
246	H19.3306	左京六条三坊八坪	大安寺西三丁目 206-5	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.12.20	GL－0.4m まで掘削、盛土内。
247	H19.3346	左京三条五坊九坪	奈良市芝町 11-78	（株）新日本ハウス	分譲住宅新築	宅地	H19.12.20	GL－0.4m まで掘削、盛土内。
248	H19.3347	西大寺旧境内	西大寺野神町 1797-1、1798-1 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H19.12.21	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
249	H19.3303	左京六条三坊八坪	大安寺西三丁目 206-2	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.12.25	GL－0.1m まで掘削、盛土内。
250	H19.3304	左京六条三坊八坪	大安寺西三丁目 206-3	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H19.12.25	GL－0.1m まで掘削、盛土内。
251	H19.3289	左京一条五坊八坪	法蓮町 926-15	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.7	GL－1.0m まで掘削、旧河川の堆積土内。
252	H19.3379	左京二条東四坊大路	法蓮町 328-28	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.7	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
253	H19.3308	左京九条四坊八坪	東九条町 286 番 6	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.7	GL－0.2m まで掘削、盛土内。
254	H19.3361	左京二条七坊四坪、奈良町遺跡	半田横町 8、9-2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.8	GL－0.3m まで掘削、地山確認。
255	H19.3298	左京一条四坊九坪	法蓮町 1964 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.8	GL－0.3m まで掘削、地山確認。
256	H19.3388	左京四条一坊八坪	四条大路三丁目 932-1、932-2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.10	掘削なし。
							H20.1.15	GL－0.2m まで掘削、盛土内。
257	H19.3338	左京四条六坊五坪、奈良町遺跡	小太郎町 19-12	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.10	GL－0.4 ～ 0.5m まで掘削、盛土内。
258	H19.3367	左京八条二坊十二坪	東九条町 640-4	（株）山義建設	倉庫建設	宅地	H20.1.11	GL－1.1m まで掘削、旧水田耕土内。
259	H19.3328	左京四条五・十二坪	三条大宮町～大森西町地内	奈良市水道局	水道工事	道路	H20.1.11	GL－1.4m まで掘削、地山確認、GL－1.2m で遺構面確認。
260	H19.3314	紀寺跡、奈良町遺跡	紀寺町 658-5	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.15	GL－0.2 ～ 0.4m まで掘削、盛土内。
261	H19.3183	右京一条三坊一坪・西三坊一条条間北小路	西大寺本町 211-3	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.15	GL－0.4 ～ 0.7m まで掘削、旧水田床土・盛土内。
262	H19.3341	右京六条三坊六坪	六条一丁目 722 番 1、724 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.15	GL－0.1m まで掘削、盛土内。
263	H19.3370	左京四条一坊八坪・三条大路	三条大路二丁目～三丁目地先、四条大路二丁目～三丁目地先（国道 308 号・市道中部 246 号）	西日本電信電話（株）	電話試掘工事	道路	H20.1.16	GL－1.8m まで掘削、土層見られず。
264	H19.3130	右京三条四坊十一坪	宝来四丁目 916 番の一部他	大和情報サービス（株）	店舗新築	水田	H20.1.16	GL－2.1m まで掘削、盛土内。
265	H19.3221	右京二条四坊一坪	西大寺芝町二丁目 2057-3	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.17	GL－0.4m まで掘削、盛土内。
266	H19.3431	左京四条四坊三坪	三条栄町　他	奈良市長	下水管埋設	道路	H20.1.17	GL－2.7m まで掘削、盛土内。
							H20.1.18	GL－2.3m まで掘削、盛土内。
							H20.1.21	GL－2.5m まで掘削、盛土内。
							H20.1.29	GL－2.7m まで掘削、GL－1.9m で地山確認。
							H20.2.14	GL－2.5m まで掘削、盛土内。
277	H19.3369	遺物散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-11	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H20.1.18	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
278	H19.3363	西大寺旧境内	西大寺新田町 2562-1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.21	GL－0.1m まで掘削、盛土内。
279	H19.3319	左京二条七坊一坪	北川端町 7 ～法蓮町 1220	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H20.1.21	GL－0.6m まで掘削、盛土内。
280	H19.3350	左京八条四坊十五坪	東九条町 674-1 の一部	個人	賃貸住宅新築	青空駐車場	H20.1.21	GL－0.2 ～ 0.3m まで掘削、盛土内。
281	H19.3372	左京二条五坊四坪	芝辻三丁目 67-3 ほか 7 筆	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.22	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
282	H19.3021	右京五条三坊四坪	五条二丁目 594-1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.22	GL－0.3m まで掘削、地山確認。
283	H19.3380	遺物散布地（県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-19	三和住宅（株）	分譲住宅新築	宅地	H20.1.22	GL－0.5m まで掘削、地山確認。
284	H19.3402	右京二条四坊十五坪	若葉台四丁目 242-7	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.22	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
285	H19.3264	旧柳生藩陣屋敷跡	柳生町地内	奈良市長	下水管埋設	道路	H20.1.24	GL－1.7m まで掘削、地山確認。
							H20.1.28	GL－1.25m まで掘削、地山確認。
286	H19.3257	右京六条三坊一坪・五条大路・西三坊坊間東小路	六条一丁目 6-14 ～ 10-7	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H20.1.25	GL－0.8m まで掘削、地山確認。
287	H19.3301	右京四条四坊九坪・三条大路	宝来四丁目 231 番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.25	GL－0.3m まで掘削、盛土内。
288	H19.3325	左京八条四坊十一坪	東九条町 681 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.28	GL－0.1m まで掘削、盛土内。
289	H19.3383	左京五条二坊十坪	大安寺町 572-4	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.28	GL－0.2m まで掘削、盛土内。

平成 19 年度実施工事立会一覧

番号	届出・通知受理番号	遺跡	届出（通知）地	届出・通知者	事業内容	現況	日付	立会結果
290	H19.3329	左京四条四坊三・五坪・東三坊大路	三条添川町～三条桧町地内	奈良市長	下水管埋設	道路	H20.1.28	ＧＬ－ 1.2m まで掘削、旧水田耕土内。
291	H19.3387	左京四条五坊十三坪	杉ヶ町 9-2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.28	ＧＬ－ 0.35m まで掘削、土層確認出来ず。
292	H19.3310	右京北辺三坊七坪	西大寺北町 466-2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.29	ＧＬ－ 0.3m まで掘削､GL-0.1m で地山、溝・柱穴・土坑確認。
293	H19.3300	左京五条六坊十五坪、奈良町遺跡	東木辻町 26 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.29	ＧＬ－ 0.2m まで掘削、盛土内。
294	H19.3432	左京五条五坊十六坪	大森町 10-3	（株）フィールド	個人住宅新築	宅地	H20.1.29	ＧＬ－ 1.0m まで掘削、水田床土内。
295	H19.3345	右京四条一坊九坪	四条大路五丁目 429-1、429-3	個人	個人住宅新築	宅地	H20.1.30	ＧＬ－ 0.85m まで掘削、盛土内。
296	H19.3424	左京四条二坊十五坪（田村第跡）	四条大路一丁目 764 番 4	資生堂開発（株）	個人住宅新築	宅地	H20.1.31	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
297	H19.3415	左京四条三坊八坪・三条大路	三条栄町・三条大路一丁目地内	奈良市長	下水管埋設	道路	H20.1.31	ＧＬ－ 1.7m まで掘削、旧水田耕土内。
							H20.2.27	ＧＬ－ 2.1m まで掘削、地山確認。
298	H19.3293	右京四条五坊十五坪	三条町 579-2 ～三条今井町 593-30	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H20.2.4	ＧＬ－ 1.2m まで掘削、盛土内。
299	H19.3429	左京三条五坊九坪、奈良町遺跡	芝辻町 11-77	（株）新日本ハウス	分譲住宅新築	宅地	H20.2.5	ＧＬ－ 0.2m まで掘削、盛土内。
300	H19.3368	左京六条三坊八坪	大安寺西三丁目 205 番 3	ＫＤＤＩ（株）	携帯電話基地局設置	宅地	H20.2.5	ＧＬ－ 0.9m まで掘削、地山の可能性あり。
301	H19.3374	矢田原遺跡	矢田原町 1220	奈良市長	道路工事	道路	H20.2.5	ＧＬ－ 2.0m まで掘削、盛土内。
302	H19.3356	松林苑跡	歌姫町地内　国有水路敷地内（1485 番地先）	奈良市長	河川改修	山林	H20.2.6	ＧＬ－ 0.2m まで掘削、腐植土層内。
303	H19.3351	右京一条西三坊坊間東小路	西大寺本町 5-8	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H20.2.6	ＧＬ－ 0.9 ～ 1.0m まで掘削、盛土内。
304	H19.3334	右京五条三坊八坪	五条一丁目 481 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H20.2.7	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
305	H19.3349	右京三条三坊十六坪、菅原寺跡	菅原町 436-1、437-1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.2.8	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
306	H19.3376	左京九条二坊八坪・二坊坊間西小路	西九条町三丁目 8 番 23	個人	個人住宅新築	宅地	H20.2.8	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、盛土内。
307	H19.3167	右京二条西三坊坊間東小路	青野町 22-2	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H20.2.8	ＧＬ－ 1.5m まで掘削、旧耕作土内。
308	H19.3410	左京一条三坊八坪	法華寺町 1309 番 1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.2.12	ＧＬ－ 0.2m まで掘削、盛土内。
309	H19.3413	左京一坊八条条間路	杏町 288 番 1	（有）日出産業	産廃収集保管施設	宅地	H20.2.12	ＧＬ－ 0.9m まで掘削、地山確認、奈良・平安時代の瓦が多く出土。
310	H19.3411	左京四条六坊二坪、奈良町遺跡	奥子守町 5-1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.2.12	ＧＬ－ 0.6m まで掘削、地山確認、遺構面あり。
311	H19.3434	右京二条四坊十五坪	若葉台四丁目 277-4	個人	個人住宅新築	宅地	H20.2.14	ＧＬ－ 0.6m まで掘削、盛土内
312	H19.3423	右京二条四坊十五坪	若葉台四丁目 242-9	個人	個人住宅新築	宅地	H20.2.14	ＧＬ－ 0.8m まで掘削、盛土内。
313	H19.3457	左京三条三坊四坪	大宮町七丁目 1-57	（株）ケイ・キャット	試験掘削	宅地	H20.2.18	ＧＬ－ 0.7m まで掘削、盛土内。
314	H19.3375	西大寺旧境内	西大寺新町 2566-1 ～ 2566-10、2566-13	（株）相光	分譲住宅新築・一指定道路建設	宅地	H20.2.18	ＧＬ－ 1.0m まで掘削、盛土内。
315	H19.3365	右京五条三坊四坪・西二坊大路	五条町二丁目 3-14 ～ 5-5	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H20.2.18	ＧＬ－ 0.7m まで掘削、盛土内。
316	H19.3412	西大寺旧境内	西大寺新町 8-18	個人	個人住宅新築	宅地	H20.2.18	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、盛土内。
317	H19.3322	菅原遺跡	菅原町地内（新池）	奈良市長	ため池整備工事	ため池	H20.2.18	ＧＬ－ 1.6m まで掘削、地山確認。
							H20.2.19	
318	H19.3400	左京東一坊三条条間路	三条大路三丁目地内	奈良市長	下水道工事	道路	H20.2.20	ＧＬ－ 2.0m まで掘削、盛土内。
319	H19.3398	右京五条大路・西一坊大路	西ノ京町 170、171	個人	個人住宅新築	宅地	H20.2.21	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、盛土内。
320	H19.3393	左京三条四坊五坪	大宮三丁目 179-4	（株）西組	駐車場造成	宅地	H20.2.25	ＧＬ－ 0.2 ～ 0.7m まで掘削､地山確認。
321	H19.3420	左京四条四坊五・十二坪	大森町・三条大宮町地内	奈良市長	下水道工事	道路	H20.2.29	ＧＬ－ 2.9m まで掘削、暗青灰色シルト層内。
322	H19.3409	右京北辺四坊八坪・北辺京極路	西大寺赤田町一丁目 823 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H20.3.3	ＧＬ－ 0.2 ～ 0.7m まで掘削、盛土内。
323	H19.3396	西大寺旧境内	西大寺新池町 1827 番 5、1825 番 9	個人	個人住宅新築	宅地	H20.3.3	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、地山確認
324	H19.3348	左京四条二坊十三坪（田村第跡）	四条大路一丁目 1000 番 97	個人	個人住宅新築	宅地	H20.3.3	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
325	H19.3357	古市町遺物散布地（県遺跡地図 8B-261）	古市町地内	奈良市長	U型側溝据付	水田・道路	H20.3.4	ＧＬ－ 0.5m まで掘削、灰褐色土内。
326	H19.3416	左京東一坊三条大路・四条一坊八・九坪	三条大路二丁目～四条大路三丁目地内	奈良市長	下水道工事	道路	H20.3.4	ＧＬ－ 2.0m まで掘削、1.8 m下で土器の小片 1 点、地山確認
							H20.3.5	ＧＬ－ 2.0m まで掘削、1.8 m下で地山確認
							H20.3.6	
							H20.3.11	ＧＬ－ 1.8m まで掘削､土層確認出来ず。
							H20.3.12	ＧＬ－ 1.8m まで掘削、灰色砂確認。

番号	届出・通知受理番号	遺跡	届出（通知）地	届出・通知者	事業内容	現況	日付	立会結果
327	H19.3442	左京五条五坊六坪、遺物散布地（県遺跡地図５Ｄ-80）	大安寺六丁目 797-2	（株）奈良内田安全硝子店	工場兼用個人住宅新築	宅地	H20.3.5	ＧＬ－ 1.0m まで掘削、盛土内。
328	H19.3131	左京四条六坊十二坪、奈良町遺跡	南城戸町 66-1	個人	個人住宅増築	宅地	H20.3.11	ＧＬ－ 0.5 ～ 1.2m まで掘削、盛土内。
329	H19.3407	左京二条六坊九・十六坪	法蓮町 1198-1	個人	個人住宅増築	宅地	H20.3.11	ＧＬ－ 0.5m まで掘削、盛土内。
330	H19.3292	元興寺旧境内、奈良町遺跡	鵲町地内	（宗）元興寺	下水道工事	道路	H20.3.11	ＧＬ－ 0.8m まで掘削、盛土内。
331	H19.3446	左京八条三坊二坪	西九条町一丁目３番 13	個人	共同住宅新築	宅地	H20.3.12	ＧＬ－ 0.5m まで掘削、盛土内。
							H20.3.26	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
332	H19.3302	右京四条三坊十坪	平松一丁目 20 番 1、13 番 4	個人	個人住宅新築	宅地	H20.3.12	工事先行、ＧＬ－ 0.3 ～ 0.4m まで掘削、盛土内。
333	H19.3282	左京四条五坊十四坪・四条六坊三・六坪	杉ヶ町～北風呂町地内	奈良市長	下水道工事	道路	H20.3.14	ＧＬ－ 1.0m まで掘削、地山・時期不明の土坑の一部確認。
334	H19.3172	西大寺旧境内	西大寺国見町一丁目 2196-1	近畿日本鉄道（株）	駅舎増築	駅舎	H20.3.15	ＧＬ－ 1.5m まで掘削、粘土層を確認。
335	H19.3364	広大寺池遺跡	今市町 837-4	奈良市長	Ｕ型水路工	水路	H20.3.17	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、地山確認。
336	H19.3408	右京五条四坊五坪・五条大路	五条三丁目 867 番８	個人	個人住宅新築	宅地	H20.3.17	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、地山確認。
337	H19.3456	奈良町遺跡	中辻町 32 番１	個人	宅地造成工事	駐輪場	H20.3.18	ＧＬ－ 1.5m まで掘削、地山確認。
338	H19.3426	左京八条四坊十一坪	東九条町 683 番地、684 番地	個人	共同住宅新築	宅地	H20.3.18	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、盛土内。
339	H19.3285	西大寺旧境内	若葉台三丁目 1880-1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.3.19	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
340	H19.3462	右京二条三坊八坪	西大寺芝町一丁目 2105-18	個人	個人住宅新築	宅地	H20.3.21	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
341	H19.3137	左京二条四坊十五坪	法蓮町 344-5 ～ 344-17	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H20.3.24	ＧＬ－ 1.1m まで掘削、旧水田耕土内。
342	H19.3448	左京三条二坊十三坪	三条大路一丁目地内	奈良市長	下水道工事	道路	H20.3.24	ＧＬ－ 1.1m まで掘削、旧水田床土内。
343	H19.3428	西大寺旧境内	西大寺小坊町 302 番１	個人	個人住宅新築	宅地	H20.3.25	ＧＬ－ 0.2 ～ 0.3m まで掘削、盛土内。
344	H19.3470	右京四坊二条条間路	疋田町一丁目８番、１番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.3.25	ＧＬ－ 0.4m まで掘削、旧水田耕土内。
345	H19.3139	左京四条六坊十二坪、奈良町遺跡	北風呂町 37-1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.3.26	ＧＬ－ 1.5m まで掘削、盛土内？
346	H19.3451	左京九条二坊八坪	西九条町三丁目 2-17	個人	個人住宅新築	宅地	H20.3.26	ＧＬ－ 0.2m まで掘削、盛土内。
347	H19.3437	左京四条四坊一坪	三条添川町 96-6 の一部、98-1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.3.27	ＧＬ－ 0.2 ～ 0.6m まで掘削、盛土内。
348	H19.3436	左京四条四坊一坪	三条添川町 96-6 の一部、97-6	個人	個人住宅新築	宅地	H20.3.27	ＧＬ－ 0.3m まで掘削、盛土内。
349	H19.3136	左京二条五坊一坪	法蓮町 328	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H20.3.27	ＧＬ－ 0.7 ～ 0.8m まで掘削、青灰白色砂質層。
350	H19.3138	左京二条五坊一坪	法蓮町 724 ～ 328	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	H20.3.28	ＧＬ－ 0.6m まで掘削、0.1m 下で水成堆積層確認。
351	H19.3438	南紀寺遺跡	南紀寺町三丁目 62-17	個人	個人住宅新築	宅地	H20.3.31	ＧＬ－ 0.2 ～ 0.3m まで掘削、盛土内。
352	H19.3283	右京四条三坊十六坪	宝来二丁目 141 番地１	個人	個人住宅新築	宅地	H20.3.31	ＧＬ－ 0.2m まで掘削、盛土内。

（２）平成 19 年文化財保護法第 125 条の１の現状変更に伴う工事立会

※当該年度は実施なし。

第　2　章　　自然科学分析報告

奈良市教育委員会では、発掘調査の成果をより総合性の高い確実なものとするために、遺跡や遺物の肉眼観察では把握できない事象について、自然科学分析を活用している。

これまでに行ってきた主な自然科学分析は、下記の通りである。

1　環境の指標性が高く、生活資源となっている植物を主とした生物遺体の同定

2　年代の手がかりとなる遺物が含まれない地層や遺構の年代を比定するために行う、試料の含有放射線量から年代値を求める年代測定（例：放射性炭素年代測定、ＴＬ年代測定）や、年代の指標性が高い広域火山灰（例：ＡＴ火山灰、ＡＨ火山灰）の同定

3　遺物に付着したり土壌に含まれたりする有機物や化学物質、あるいは土器の胎土や地質に含まれる鉱物の成分を同定する理化学分析（例：蛍光Ｘ線分析）

平成 19 年度は、下記の自然科学分析を実施した。

①	平城京第 579 次調査	弥生時代の柱材の放射性炭素年代測定（ＡＭＳ） 縄文時代の土坑埋土・奈良時代溝埋土の花粉分析
②	平城京第 581 次調査	縄文時代の旧河川から採取した流木の放射性炭素年代測定（ＡＭＳ）
③	大安寺西遺跡・平城京第 589 次調査	古墳時代の溝ＳＤ 01 埋土の花粉分析
④	平城京第 593 次調査	古墳時代の導水溝埋土の花粉分析

本書には②～④と、前年度までの調査で実施したが未報告であった下記の自然科学分析の成果とをあわせて報告する。①については、次年度以降に報告する。

⑤	柏木遺跡・平城京第 338 次調査 (平成７・８年度)	弥生時代の自然流路ＳＤ 02 埋土の花粉分析・樹種同定 弥生時代の方形周溝墓６号墓の周溝埋土の花粉分析
⑥	芝辻遺跡・平城京第 375 次調査 (平成９年度)	弥生時代の河川 01 内埋土の花粉分析・種実同定 河川 01 内の井堰ＳＸ 02 の部材の樹種同定 水田跡の可能性がある堆積物の花粉・植物珪酸体分析
⑦	奈良山第 51 号窯 (平成 18 年度)	奈良時代の瓦窯の窯体に用いられた瓦塼・焼土のＴＬ年代測定

このうち⑤・⑥については、調査地が前述の③・④及び縄文時代中～後期・弥生時代前期の旧河道埋土や奈良時代の溝埋土の花粉分析の成果が報告されている橿原考古学研究所の調査地[1)]と比較的近く、これらの成果を総合すれば、調査地一帯の縄文時代中期から奈良時代にかけての植生の変遷に関する考察が可能になるため、今回報告することにした。

なお、⑤･⑥の発掘調査報告は平成９年度概報（第２分冊）、⑦の発掘調査報告は平成 18 年度年報に掲載している。文中の遺構番号及び⑥の層番号は、発掘調査報告と対応する。

1）奈良県立橿原考古学研究所 『平城京左京五条二坊十五・十六坪』 2006
金原正明 「平城京左京五条二坊十五・十六坪における自然科学分析」（上記報告書に所収）

1．柏木遺跡・平城京第 338 次調査の植物遺体分析

Ⅰ　はじめに

柏木遺跡・平城京第 338 次調査では、弥生時代の溝ＳＤ 02 と方形周溝墓６号墓の花粉分析および出土材の同定を行い、植生と環境の復元を行った。

Ⅱ　花粉分析

（1）試料

試料は、溝ＳＤ 02 の土層断面で採取した 10 点（上位からⅠ - 1、Ⅰ - 2、Ⅰ - 3、Ⅰ - 4、Ⅰ - 5、Ⅰ - 6、Ⅰ - 7、Ⅰ - 8、Ⅰ - 9、Ⅰ -10)、方形周溝墓６号墓の周溝埋土の土層断面から採取した 12 点(上位から II- 0、II- 1、II- 2、II- 3、II- 4、II- 5、II- 6、II- 7、II- 8、II- 9、II-10、II-11）の計 22 点である（図１）。

（2） 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

i）5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

ii）水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

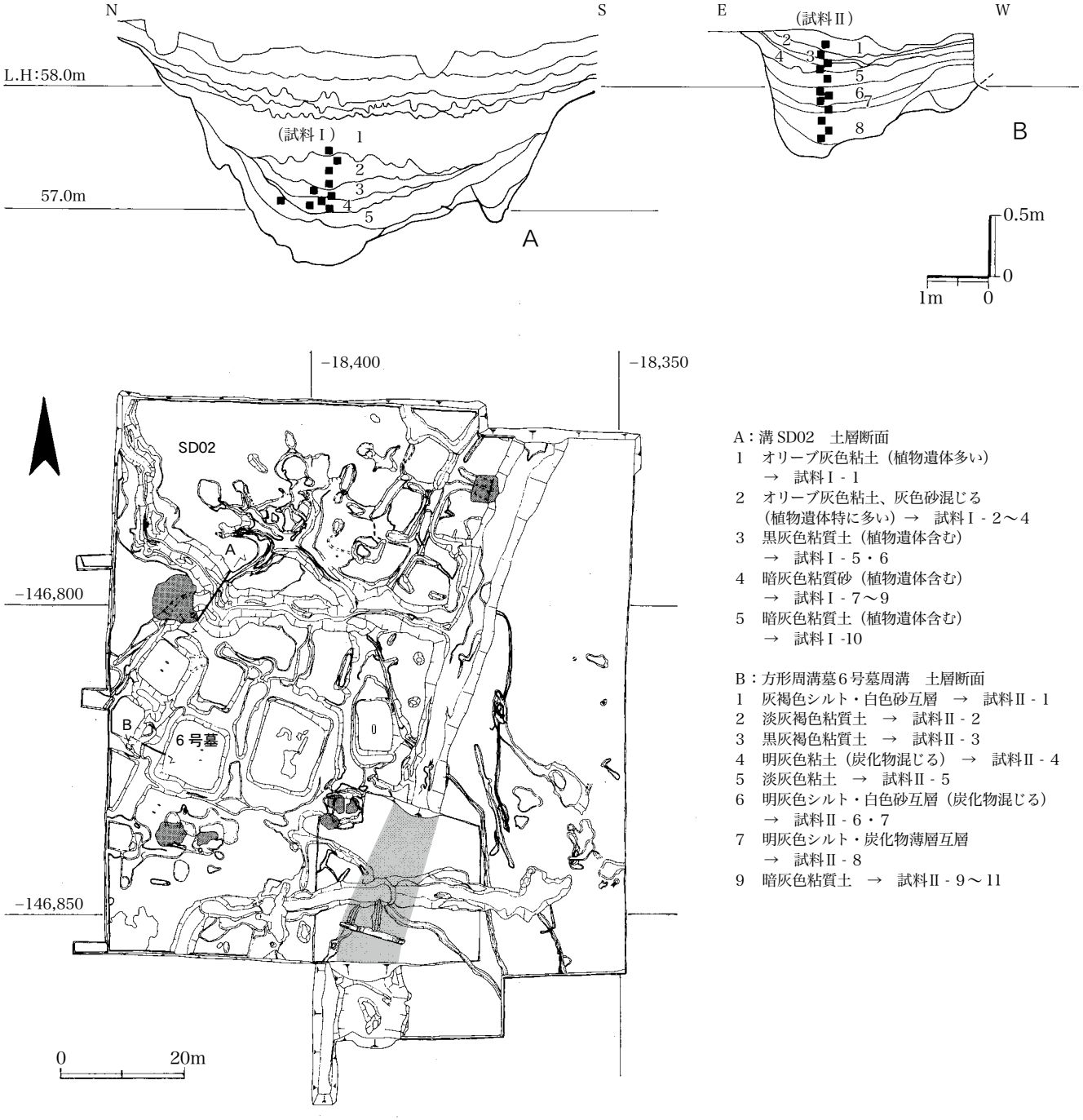


図１　試料採取位置図（平面：1/1,000・原図は旧座標、断面：縦 1/50・横 1/100）

iii）25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
iv）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
v）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
vi）沈渣に石炭素フクシンを加えて染色を行い、グリセルンゼリーで注入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、２分間）の後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行った。花粉の固定は、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、固体変化や類似種があることからイネ属型とした。

（３） 結果

1） 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 33、樹木花粉と草本花粉を含むもの４、草本花粉 26、シダ植物胞子 12 形態の計 75 である。これらの学名と和名および粒数を表１・

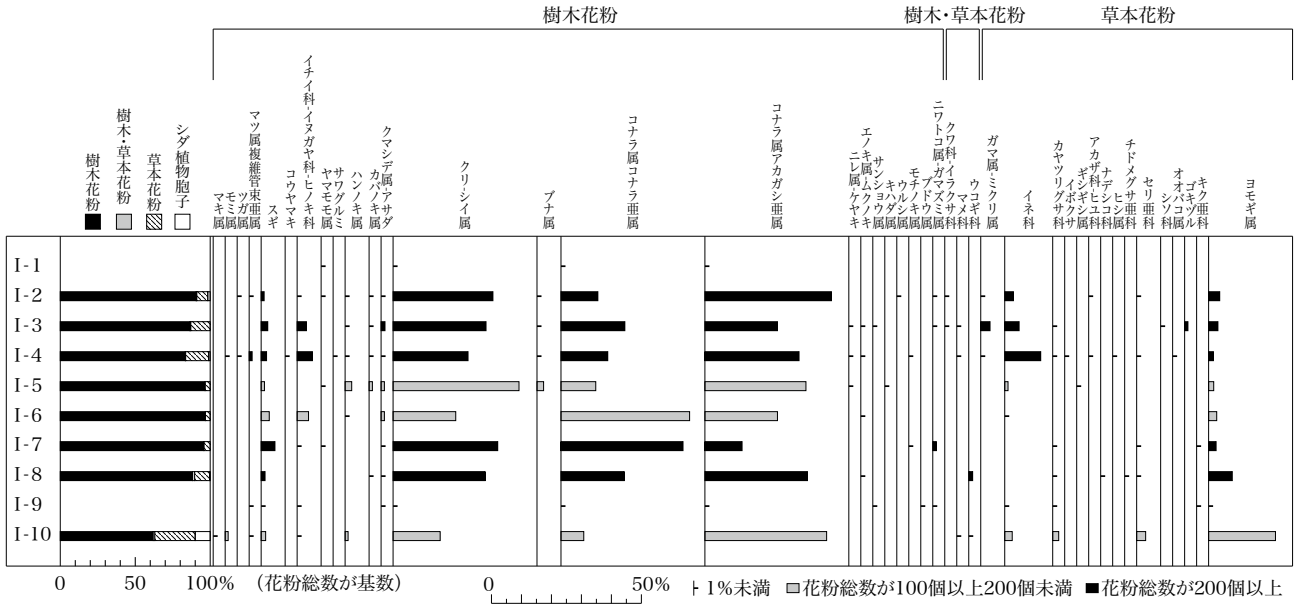


図２　溝ＳＤ02　花粉ダイアグラム

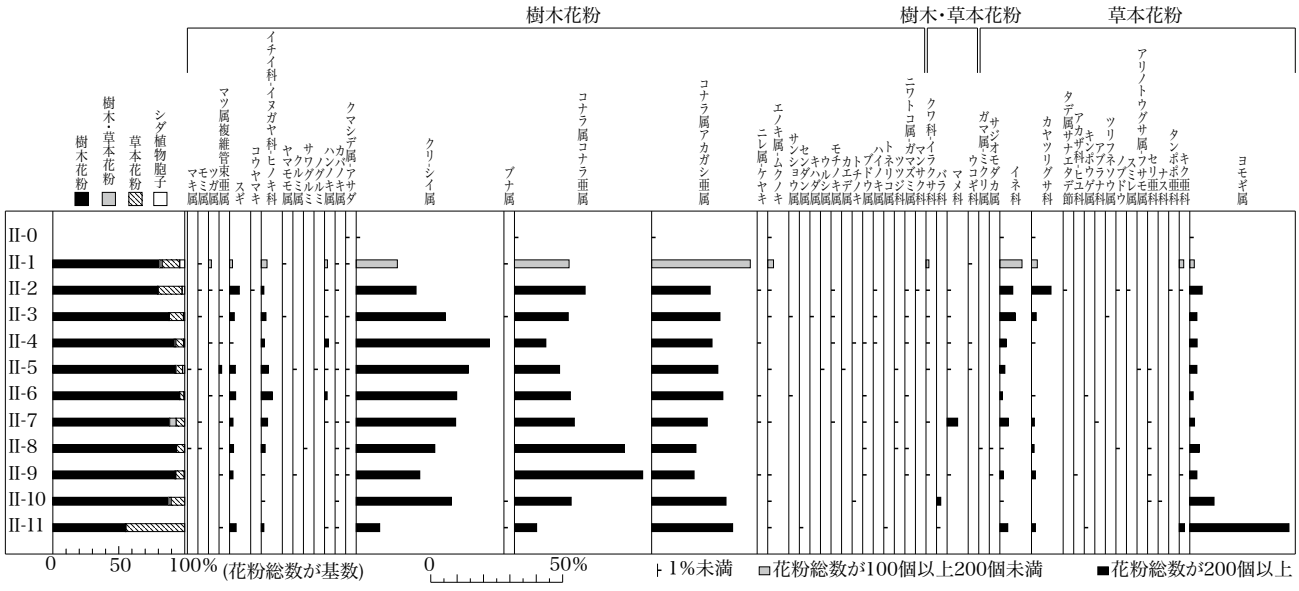
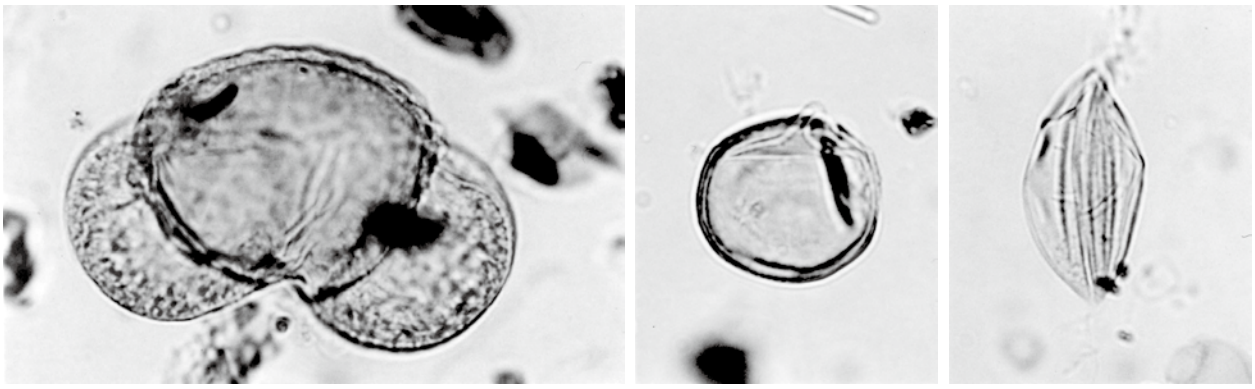
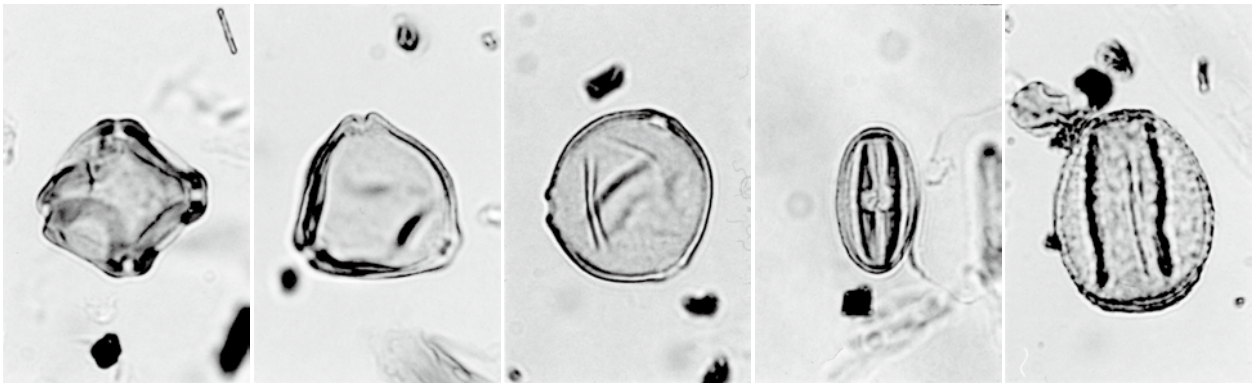


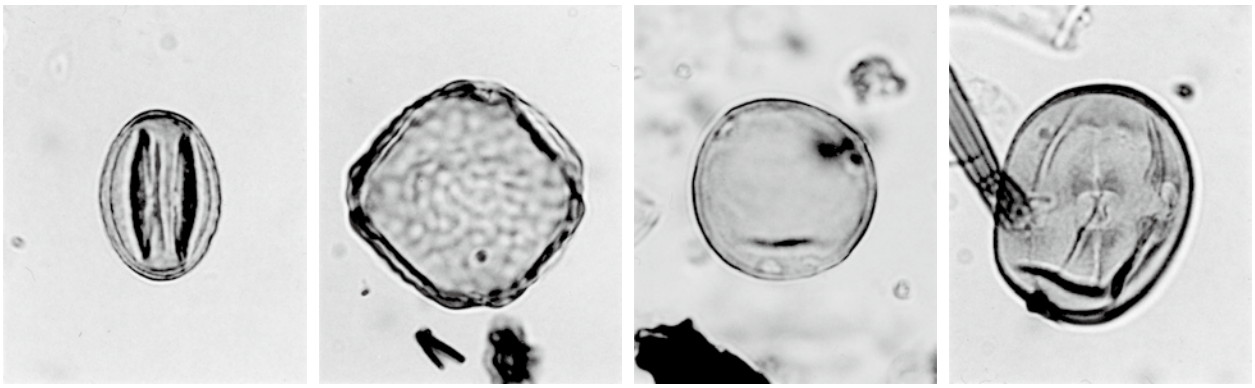
図３　方形周溝墓６号墓周溝花粉ダイアグラム



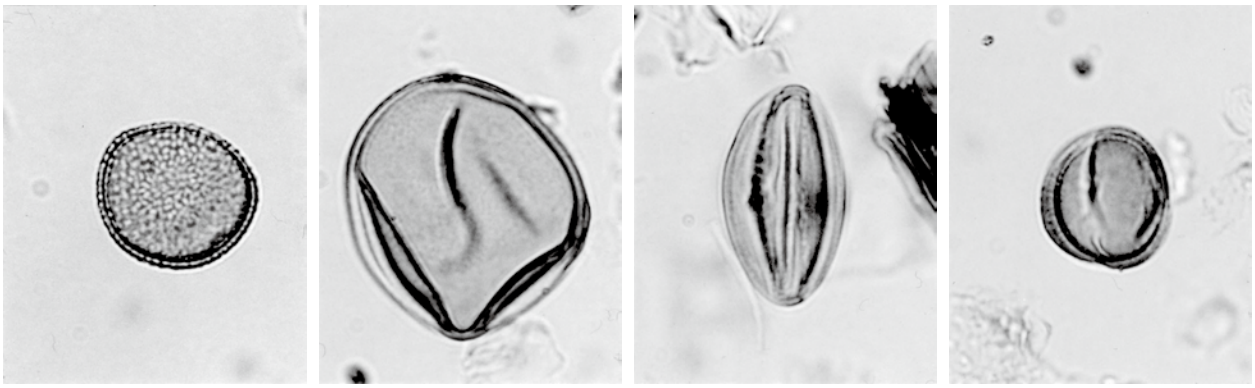
1　マツ属複維管束亜属　　2　スギ　　3　イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科



4　ハンノキ属　　5　カバノキ属　　6　クマシデ属－アサダ　　7　シイ属　　8　コナラ属コナラ亜属



9　コナラ属アカガシ亜属　　10 ニレ属-ケヤキ　　11 エノキ属-ムクノキ　　12　マメ科



13　ガマ属-ミクリ属　　14　イネ属型　　15　ゴキヅル　　16　ヨモギ属

10μm

図４　柏木遺跡・平城京第 338 次調査の花粉

表１　溝ＳＤ02　花粉分析結果

分類群		溝ＳＤ02									
学名	和名	Ⅰ-1	Ⅰ-2	Ⅰ-3	Ⅰ-4	Ⅰ-5	Ⅰ-6	Ⅰ-7	Ⅰ-8	Ⅰ-9	Ⅰ-10
Arboreal　pollen	樹木花粉										
Podocarpus	マキ属										1
Abies	モミ属				2						2
Tsuga	ツガ属		1		1						
Pinus　subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属		2		5					3	1
Cryptomeria　japonica	スギ		4	12	9	2	5	11	3	2	3
Sciadopitys　verticillata	コウヤマキ				1						
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科		2	17	26		7	2		1	1
Myrica	ヤマモモ属	1	1			1		1			
Pterocarya　rhoifolia	サワグルミ				1						
Alnus	ハンノキ属		1	2	4	4	1				2
Betula	カバノキ属		3	5	4	2			1		
Carpinus-Ostrya　japonica	クマシデ属 - アサダ		1	7	1	2	2	1	1	1	
Castanea　crenata-Castanopsis	クリ - シイ属	2	136	169	127	76	38	84	70	6	31
Fagus	ブナ属		1	2	1	4					
Quercus　subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	1	50	116	79	21	78	98	48	2	15
Quercus　subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	6	172	132	159	61	44	30	78	14	80
Ulmus-Zelkova　serrata	ニレ属 - ケヤキ			3	4	1					
Celtis-Aphananthe　aspera	エノキ属 - ムクノキ			3	2		1		1		
Zanthoxylum	サンショウ属			1						1	
Phellodendron	キハダ属					1					
Rhus	ウルシ属		1								
Ilex	モチノキ属				1			1			
Vitis	ブドウ属									1	
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属 - ガマズミ属		1	2				3		1	
Arboreal・Nonarboreal　pollen	樹木・草本花粉										
Moraceae-Urticaceae	クワ科 - イラクサ科		1	1							
Leguminosae	マメ科			2	1						1
Araliaceae	ウコギ科								3		1
Nonarboreal　pollen	草本花粉										
Typha-Sparganium	ガマ属 - ミクリ属		1	17	2						
Gramineae	イネ科		12	26	61	2	1			2	5
Oryza　type	イネ属型			1	1						
Cyperaceae	カヤツリグサ科			3	2			1	2	1	4
Aneilema　keisak	イボクサ				1						
Rumex	ギシギシ属					1					
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科 - ヒユ科		1		1						
Caryophyllaceae	ナデシコ科								1		
Trapa	ヒシ属				1						
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科								1		
Apioideae	セリ亜科		2		1			2	1		6
Labiatae	シソ科			1							
Plantago	オオバコ属				1						
Actinostemma　lobatum	ゴキヅル			6							
Asteroideae	キク亜科							1		1	
Artemisia	ヨモギ属		15	17	8	3	5	6	18	2	44
Fern　spore	シダ植物胞子										
Monolate　type　spore	単条溝胞子	1	4		4				1	3	19
Trilate　type　spore	三条溝胞子		3		1						3
Arboreal　pollen	樹木花粉	10	376	471	427	175	176	231	202	32	136
Arboreal・Nonarboreal　pollen	樹木・草本花粉	0	1	3	1	0	0	0	3	0	2
Nonarboreal　pollen	草本花粉	0	31	71	79	6	6	10	23	6	59
Total　pollen	花粉総数	10	408	545	507	181	182	241	228	38	197
Unknown　pollen	未同定花粉	1	5	2	2	4	1	1	3	1	2
Fern　spore	シダ植物胞子	1	7	0	5	0	0	0	1	3	22
Helminth　eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion　rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

表２　方形周溝墓６号墓周溝　花粉分析結果

分類群		方形周溝墓６号墓　周溝											
学名	和名	Ⅱ-0	Ⅱ-1	Ⅱ-2	Ⅱ-3	Ⅱ-4	Ⅱ-5	Ⅱ-6	Ⅱ-7	Ⅱ-8	Ⅱ-9	Ⅱ-10	Ⅱ-11
Arboreal　pollen	樹木花粉												
Podocarpus	マキ属						1			1			
Abies	モミ属		1	2	1		1		3	1			
Tsuga	ツガ属		2	1		1		1					
Pinus　subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属			2	1	2	4	1	1	1	1		1
Cryptomeria　japonica	スギ		2	15	6	2	9	7	5	7	7		5
Sciadopitys　verticillata	コウヤマキ			1							7		
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科		4	4	6	4	11	13	9	7	3	2	2
Myrica	ヤマモモ属		4		1								
Juglans	クルミ属						1				1		
Pterocarya　rhoifolia	サワグルミ									1			
Platycarya　strobilacea	ノグルミ						1						
Alnus	ハンノキ属		2	3	3	5	3	3	1				1
Betula	カバノキ属		1	1		1	2		2	2	2	2	1
Carpinus-Ostrya　japonica	クマシデ属 - アサダ	2	1		1		1	1	1	2	2		
Castanea　crenata-Castanopsis	クリ - シイ属	19	28	92	111	165	176	117	143	142	126	114	18
Fagus	ブナ属		1		1							1	1
Quercus　subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	21	37	109	67	39	71	65	86	199	254	68	17
Quercus　subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	31	67	90	85	75	104	83	80	80	84	89	62
Ulmus-Zelkova　serrata	ニレ属 - ケヤキ			1		1		2	1		1		
Celtis-Aphananthe　aspera	エノキ属 - ムクノキ	1	4	1	3		2		1		1	1	1
Zanthoxylum	サンショウ属				1			1					
Melia	センダン属												1
Phellodendron	キハダ属				1								
Rhus	ウルシ属						1						
Ilex	モチノキ属			2	1	1			1				
Acer	カエデ属						1						
Aesculus　turbinata	トチノキ					1						1	
Vitis	ブドウ属					1		2	1	1	1		
Symplocos	ハイノキ属			1	1	2							
Fraxinus	トネリコ属												1
Ericaceae	ツツジ科						1		1	1			
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属 - ガマズミ属			3	1	3		1		3	3		
Hamameridaceae	マンサク科			1									
Arboreal・Nonarboreal　pollen	樹木・草本花粉												
Moraceae-Urticaceae	クワ科 - イラクサ科		2	1	1	2	1		3		2		
Rosaceae	バラ科											5	1
Leguminosae	マメ科			1	1	1	1		15		1		
Araliaceae	ウコギ科		1			1	1						
Nonarboreal　pollen	草本花粉												
Typha-Sparganium	ガマ属 - ミクリ属									1			
Alisma	サジオモダカ属									1	1		
Gramineae	イネ科	5	15	20	19	8	8	3	12	2	7	2	6
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	4	30	6	3		2	4	5	8		3
Polygonum　sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節			1									
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科 - ヒユ科										1		
Ranunculus	キンポウゲ属							1					1
Cruciferae	アブラナ科								1				
Impatiens	ツリフネソウ属				1								
Ampelopsis　brevipedunculata	ノブドウ			1						1			
Viola	スミレ属			1									
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属 - フサモ属						1						
Apioideae	セリ亜科						1		1	1	1	1	
Solanaceae	ナス科											1	
Lactucoideae	タンポポ亜科			1									
Asteroideae	キク亜科		3	2						1	2		4
Artemisia	ヨモギ属	2	3	19	9	9	11	4	7	17	14	29	76
Fern　spore	シダ植物胞子												
Monolate　type　spore	単条溝胞子	8	7	2		1	1			1	1		
Trilate　type　spore	三条溝胞子			6	3	1	6	2			1		
Arboreal　pollen	樹木花粉	74	151	329	291	303	390	297	336	448	486	278	111
Arboreal・Nonarboreal　pollen	樹木・草本花粉	0	3	2	2	4	3	0	18	0	3	5	1
Nonarboreal　pollen	草本花粉	8	25	75	35	20	21	10	25	29	34	33	90
Total　pollen	花粉総数	82	179	406	328	327	414	307	379	477	523	316	202
Unknown　pollen	未同定花粉	5	4	6	6	7	10	4	8	8	4	2	1
Fern　spore	シダ植物胞子	8	7	8	3	2	7	2	0	1	2	0	0
Helminth　eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion　rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

２に示し、主要な分類群を写真（図４）に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属 - アサダ、クリ - シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属 - ケヤキ、エノキ属 - ムクノキ、サンショウ属、センダン属、キハダ属、ウルシ属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、ハイノキ属、トネリコ属、ツツジ科、ニワトコ属 - ガマズミ属、マンサク科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科 - イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属 - ミクリ属、サジオモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科 - ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、ノブドウ、スミレ属、ヒシ属、アリノトウグサ属 - フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、ナス科、オオバコ属、ゴギヅル、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

２） 花粉群集の特徴

溝ＳＤ 02　埋土（図 2）

最下部のⅠ -10 では、樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が優占し、クリ - シイ属、コナラ属コナラ亜属が伴われる。草本花粉ではヨモギ属の出現率がやや高く、イネ科、カヤツリグサ科、セリ亜科が伴われる。Ⅰ - ５～８では、樹木花粉の占める割合が約 90% と高くなり、コナラ属コナラ亜属、クリーシイ属がやや増加し、コナラ属アカガシ亜科と伴に出現率が高い。草本花粉は低率であり、主にヨモギ属が出現する。Ⅰ - １～３では、イネ科が微増し草本花粉の占める割合がやや増加するが、樹木花粉が 80% 以上割合を占める。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、クリ - シイ属が優占する。

方形周溝墓６号墓　周溝埋土（図 3）

最下部の II-11 では樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が優先し、コナラ属コナラ亜属、クリ - シイ属が伴われる。草本花粉ではヨモギ属の出現率が高い。II- ８～ 10 ではヨモギ属が低率になり、コナラ属コナラ亜属とクリ - シイ属が増加し、コナラ属コナラ亜属はピークを示す。II- ７～４ではコナラ属コナラ亜属が減少し、クリ - シイ属が増加しピークを示す。II- １～３ではクリ - シイ属が減少し、イネ科とカヤツリグサ科を主に草本花粉が微増する。

表３　溝ＳＤ 02 出土自然木の樹種同定結果

試　料	樹　種（和　名／学　名）
溝ＳＤ 02	
試料　1	コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
試料　2	コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
試料　3	コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
試料　4	コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
試料　5	コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
試料　6	コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*

Ⅲ　樹種同定

（１） 試料

試料は、溝ＳＤ 02 から出土した６点の自然木である。

（２） 方法

カミソリを用いて、新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）の切片を採取し、生物顕微鏡によって 60 ～ 600 倍で観察を行った。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(3) 結果

結果は表３に示し、以下に特徴を記す。

コナラ属アカガシ亜属

Quercus subgen.*Cyclobalanopsis* ブナ科

横断面：中型から大型の道管が、１～数列幅で年倫界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものからなる。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平状細胞と大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上から形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ 30m、径 1.5m 以上達する。

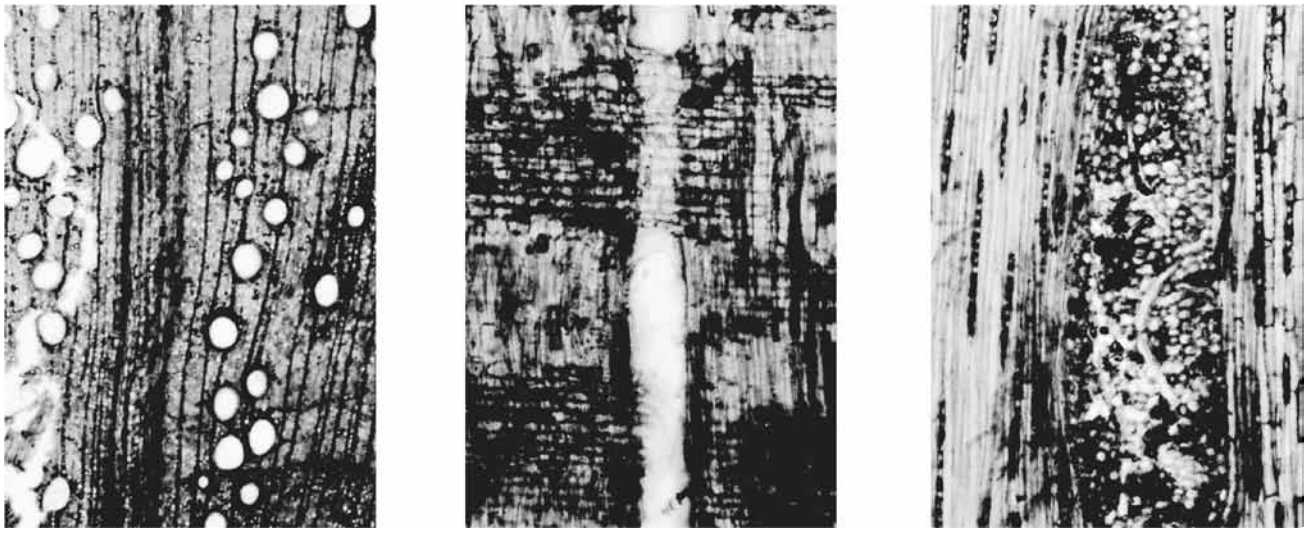


図５　溝ＳＤ 02 出土自然木の断面

材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

Ⅳ　柏木遺跡・平城京第 338 次調査地における弥生時代の植生と環境

溝ＳＤ 02 埋土と方形周溝墓６号墓の周溝埋土の花粉群集の変遷は大きく一致する。最下部において、ヨモギ属が多く、コナラ属アカガシ亜属が優占する。

溝ＳＤ 02 埋土の最下部の時期と方形周溝墓６号墓が造られた当初は、乾燥した肌地を好むヨモギ属が繁茂し、方形周溝墓の築造によって二次的に草本のヨモギ属が分布する。周囲はカシ（コナラ属アカガシ亜属）を主とする照葉樹林が分布していた。

溝ＳＤ 02 埋土と方形周溝墓６号墓の周溝埋土の中部の時期には、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）、シイ類（クリ - シイ属、ここでは生態上シイ属とみなされる）が増加し、これらが二次林要素の性格ももつため、ヨモギ属の繁茂していた地域がコナラやシイの二次林に遷移したと考えられる。このことから、方形周溝墓群は二次林化が促進したと推定される。草本花粉は少なく、周囲は森林の多い状態であったと推定される。溝ＳＤ 02 から出土した自然木はコナラ属アカガシ亜属であり、流路周辺の適潤なところにはカシが分布し、ナラ類やシイ類は乾燥したところに分布していたと推定される。

上部では、イネ科が微増し、地域的に人の活動が活発になり、人為環境を好む人里植物ないし耕地雑草を含むイネ科が増加したと考えられる。

Ⅴ　まとめ

溝ＳＤ 02 と方形周溝墓６号墓の周溝の花粉分析と樹種同定の結果、方形周溝墓群が造られた当初は、ヨモギ属が繁茂し、次にナラ類やシイ類の二次林へと遷移する。周辺は基本的にカシを主とする照葉樹林が多く分布していたとみなされる。これらの状況からこの周辺が継続的に土地利用されたとは考えにくく、方形周溝墓群の築造時に一時的に開発され、その後放棄された可能性がもたれる。上部ではイネ科がやや増加し、人間生活が活発になったと推定される。

（参考文献）
中村純（1973）花粉分析．古今院書，pp.82-110.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第 10 巻古代資料　研究の方法，角川書店，pp.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，p.60
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，p.91
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza　sativa）を中心として．第四紀研究，13，pp.187-193.
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第 10 号，pp.21-30.
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹林の細胞．木材の構造，文永堂出版，pp.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹林の細胞．木材の構造，文永堂出版，pp.49-100.

（環境考古研究会　金原正明・金原正子）

2．芝辻遺跡・平城京第 375 次調査の自然科学分析

Ⅰ　はじめに

芝辻遺跡・平城京第 375 次調査では、弥生時代中期の河川 01 と井堰ＳＸ 02 が検出された。川辺には水田跡の可能性のある面的に広がる堆積物が分布していた。ここでは、堆積物の花粉分析および植物珪酸体（プラント・オパール）分析および井堰ＳＸ 02 の周辺に集積する種実（大型植物遺体）の同定を行い、水田の可能性および植生復元を検討し、井堰ＳＸ 02 を構成する木材の樹種同定を加え、当時の植生復元を検討する。

Ⅱ　試料と層序について

試料採取は水田跡の可能性のある堆積物を含む調査区の西壁で行い、垂直に６点の採取を行った。他に井堰ＳＸ 02 下部に堆積する堆積物を採取した。西壁では上位からＥ層（試料①）は砂、Ｇ層（試料②）はシルト混じり砂、Ｈ層（試料③）は砂混じりシルト、ａ層（試料④）、ｂ層（試料⑤）、ｃ層（試料⑥）は粘土である。ａ層は有機物が多く黒褐色を呈し、ｂ層は灰褐色、ｃ層に還元による青灰色へと漸移する。Ｅ層とＧ層は上部からの塊状・柱状の集積構造が入る。ａ層は腐植の集積の可能性があり、土壌層と考えられる。ａ層の上面は水田遺構の可能性をもたれている面と同層準である。他の１点は、井堰ＳＸ 02 下部の黒褐色粘土である。これら計７試料を花粉分析および植物珪酸体分析に用いた。

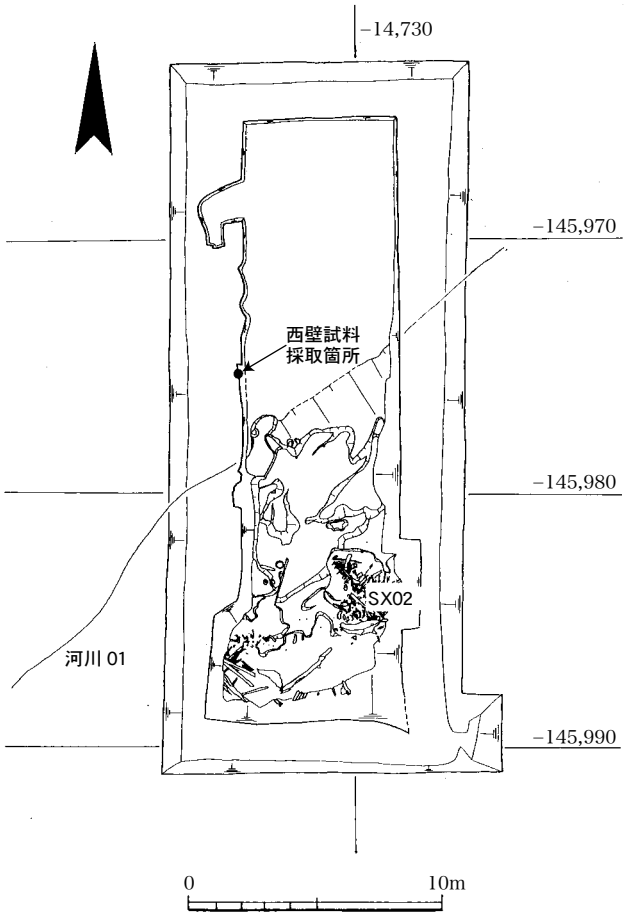


図１　試料採取位置図（1/300、原図は旧座標）

種実（大型植物）遺体は井堰ＳＸ 02 の周辺に集積した試料である。樹種同定試料は、井堰ＳＸ 02 を構成する材である（図１）。

Ⅲ　花粉分析

（1）　方法

花粉粒の分離抽出は、以下の順で物理化学処理を施して行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加え 15 分間湯煎する。
２）水洗した後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法を用いて砂粒の除去を行う。
３）25％フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置する。
４）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。
５）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行う、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、１分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

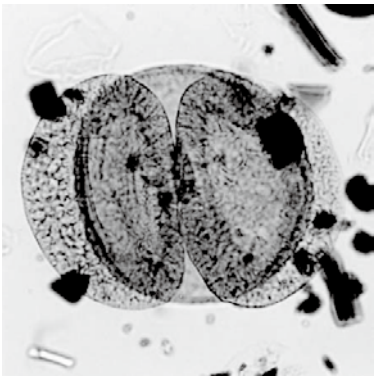
検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行った。同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群にした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、固体変化や類似種があることからイネ属型とした。

（2）結果

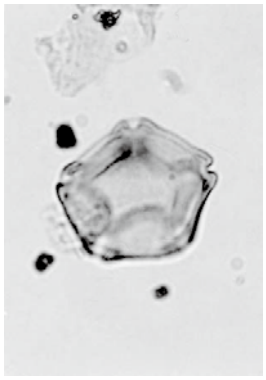
出現した分類群は、樹木花粉 24、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉 14、シダ植物胞子２形態の計 41 である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、主要な分類群を写真（図２）に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、


1 モミ属

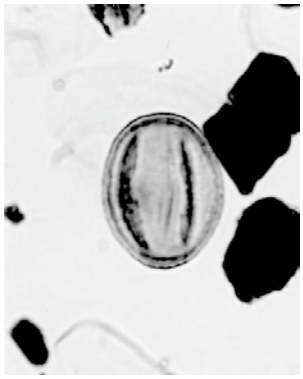
2　スギ


3　ハンノキ属

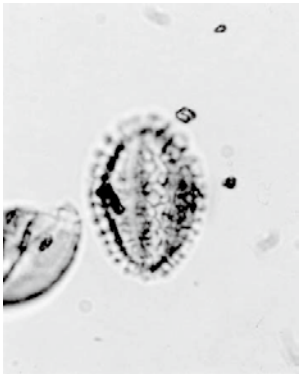
4　クリ-シイ属

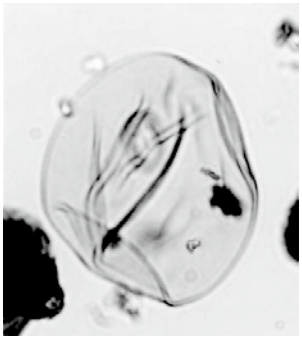
90μm

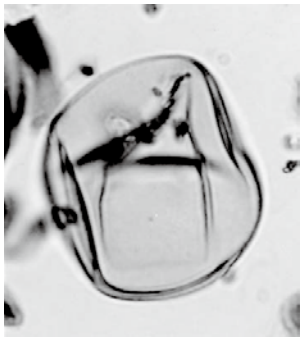
5　コナラ属コナラ亜属

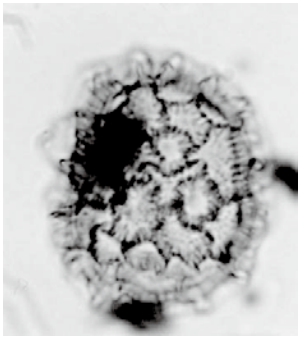

6　コナラ属アカガシ亜属

7　エノキ属-ムクノキ


8　サンショウ属

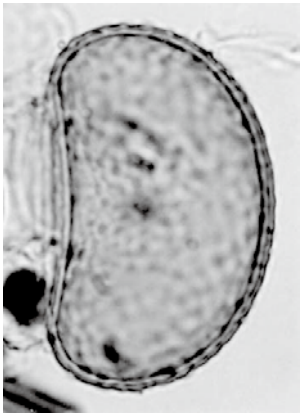

9 イネ属型

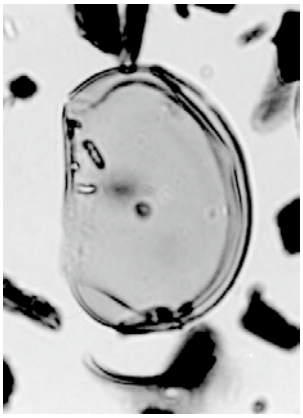

10 イネ属型

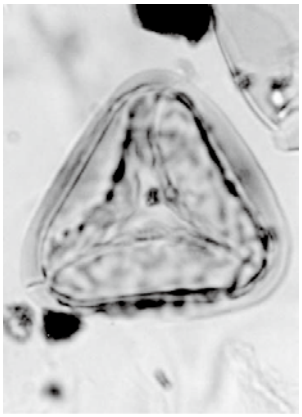

11 タデ属サナエタデ節

12 ナデシコ科

13 ヨモギ属


14 シダ植物単条溝胞子


15 シダ植物単条溝胞子


16 シダ植物三条溝胞子

45μm

図２　芝辻遺跡・平城京第 375 次調査の花粉

表 1　芝辻遺跡・平城京第 375 次調査における花粉分析結果

分類群		西壁						井堰 S X 02
学名	和名	1	2	3	4	5	6	下部
Arboreal　pollen	樹木花粉							
Podocarpus	マキ属			1				
Abies	モミ属			6	4			3
Tsuga	ツガ属			8				3
Pinus　subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属			2	4	2		6
Cryptomeria　japonica	スギ			4	6	5	1	13
Sciadopitys　verticillata	コウヤマキ	1	1	1	1	2		2
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科				3	3	1	9
Juglans	クルミ属			1				
Pterocarya　rhoifolia	サワグルミ		2	1	1			
Alnus	ハンノキ属		1	1	1			
Betula	カバノキ属			1		1		1
Carpinus-Ostrya　japonica	クマシデ属 - アサダ			1	1	1	1	6
Castanea　crenata-Castanopsis	クリ - シイ属		4	67	53	38	3	54
Fagus	ブナ属			1				
Quercus　subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	1	10	17	21	5	1	25
Quercus　subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属		43	193	89	46	7	82
Ulmus-Zelkova　serrata	ニレ属 - ケヤキ				7	1		4
Celtis-Aphananthe　aspera	エノキ属 - ムクノキ			1	4			3
Zanthoxylum	サンショウ属			1				
Ilex	モチノキ属							1
Aesculus　turbinata	トチノキ			2				1
Elaeagnus	グミ属			1				
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属 - ガマズミ属			1	2			
Arboreal・Nonarboreal　pollen	樹木・草本花粉							
Moraceae-Urticaceae	クワ科 - イラクサ科			2	4	7		
Nonarboreal　pollen	草本花粉							
Sagittaria	オモダカ属							1
Gramineae	イネ科		5	46	62	9	4	50
Oryza　type	イネ属型			9	1			4
Cyperaceae	カヤツリグサ科		1	1	20	9		19
Polygonum　sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節			1		1		1
Fagopyrum	ソバ属							1
Caryophyllaceae	ナデシコ科			2		1		1
Cruciferae	アブラナ科					1		
Ampelopsis　brevipedunculata	ノブドウ			1				1
Apioideae	セリ亜科			1	2	1		1
Lactucoideae	タンポポ亜科					1		2
Asteroideae	キク亜科		1		2	2		4
Artemisia	ヨモギ属		3	5	34	21	2	49
Fern　spore	シダ植物胞子							
Monolate　type　spore	単条溝胞子	1	26	22	85	43	4	312
Trilate　type　spore	三条溝胞子		13	8	12	7		15
Arboreal　pollen	樹木花粉	2	61	311	197	104	14	213
Arboreal・Nonarboreal　pollen	樹木・草本花粉	0	0	2	4	7	0	0
Nonarboreal　pollen	草本花粉	0	10	66	121	46	6	134
Total　pollen	花粉総数	2	71	379	322	157	20	347
Unknown　pollen	未同定花粉	0	0	0	1	1	1	3
Fern　spore	シダ植物胞子	1	39	30	97	50	4	327
Helminth　eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

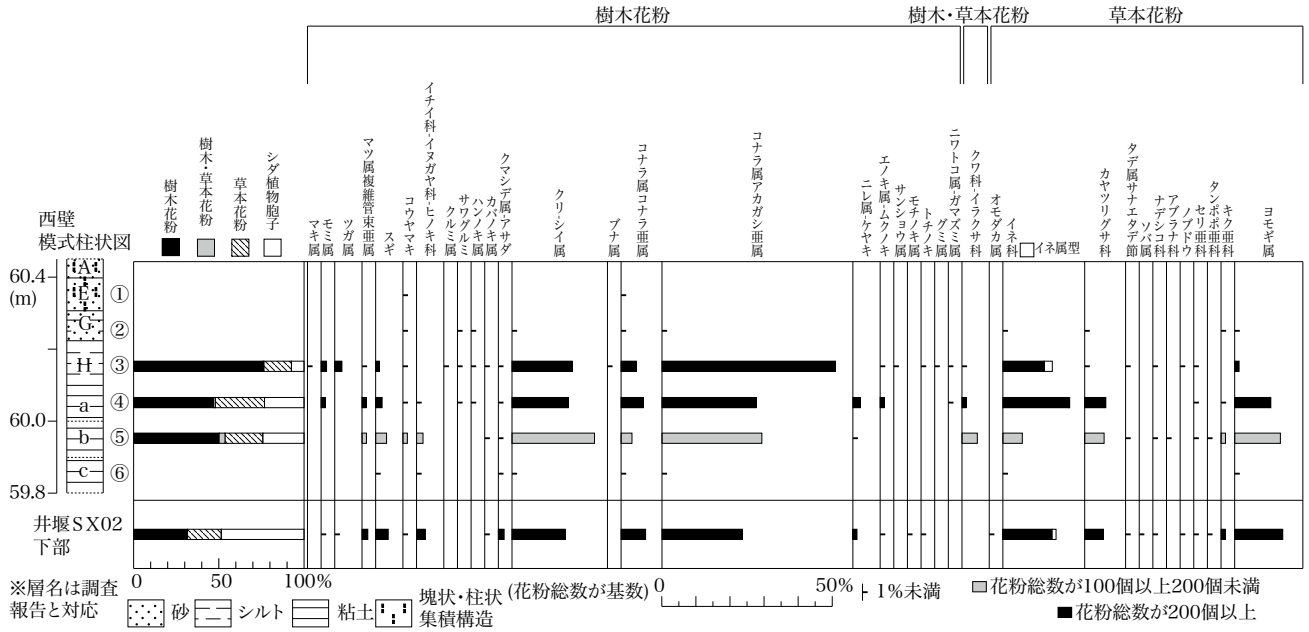


図３　芝辻遺跡・平城京第 375 次調査の花粉ダイアグラム

クマシデ属 - アサダ、クリ - シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属 - ケヤキ、エノキ属 - ムクノキ、サンショウ属、モチノキ属、トチノキ、グミ属、ニワトコ属 - ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科 - イラクサ科

〔草本花粉〕

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、タデ属イタドリ節、ソバ属、ナデシコ科、アブラナ科、ノブドウ、セリ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（３）　花粉群集の特徴と推定される植生と環境

１）　西壁（図３）

H層（試料③）、a層（試料④）、b層（試料⑤）から比較的多くの花粉が検出された。樹木花粉の占める割合が草本花粉およびシダ植物胞子より高く、コナラ属アカガシ亜属、クリ - シイ属が優占する。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属の出現率がやや高く、カヤツリグサ科などが伴われる。試料③からはイネ属型が検出される。

以上からみて、周辺は比較的森林の多い環境であったと推定される。クリ - シイ属は生態上からシイ属とみなされ、シイとカシを主とする照葉樹林が分布していたとみなされる。周囲はイネ科、ヨモギ属の草本の生育する日当たりのよい林縁のような環境であったと考えられる。ヨモギ属がやや多く、乾燥した環境が推定される。H層（試料③）からイネ属型が検出され、この層準の時期に稲作が行われていたことが示唆される。森林が多いことから、広範囲の水田の分布は推定しがたい。また、水湿地草本が伴われず、乾田の可能性がもたれる。シダ植物は林床などに生育していたと考えられる。

２）　井堰ＳＸ02 下部（図３）

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高いが、シダ植物胞子の占める割合が最も高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、クリ - シイ属が優占し、草本花粉ではイネ属型を含むイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科の出現率が比較的高い。他に栽培植物のソバ属が検出される。

周辺はシイやカシを主とする照葉樹林が比較的多く分布していたと推定される。堆積地ないし周囲では水田が営まれていたと考えられる。西壁のH層（試料③）とほぼ同じ植生が推定され、ヨモギ属もやや多く周辺は比較的乾燥した環境が広がっていたと推定される。

Ⅳ　植物珪酸体分析

（１）方法

以下の物理化学処理を施し、植物珪酸体の分析を行った。

１）試料を秤量した、過酸化水素水を加える。

２）湯煎しつつ放置し、有機質の除去を行う。

３）水洗した後、ピペッティングにより 1/100 ｇ量（試料に対して）をカバーグラスに滴下する。

４）ホットプレート上で乾燥させ、マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

検鏡と計数は 1/100 量のプレパラート全面を光学顕微鏡で走査して行い、イネ科の葉身と葉鞘の機動細胞珪酸体等を同定し計数を行った。

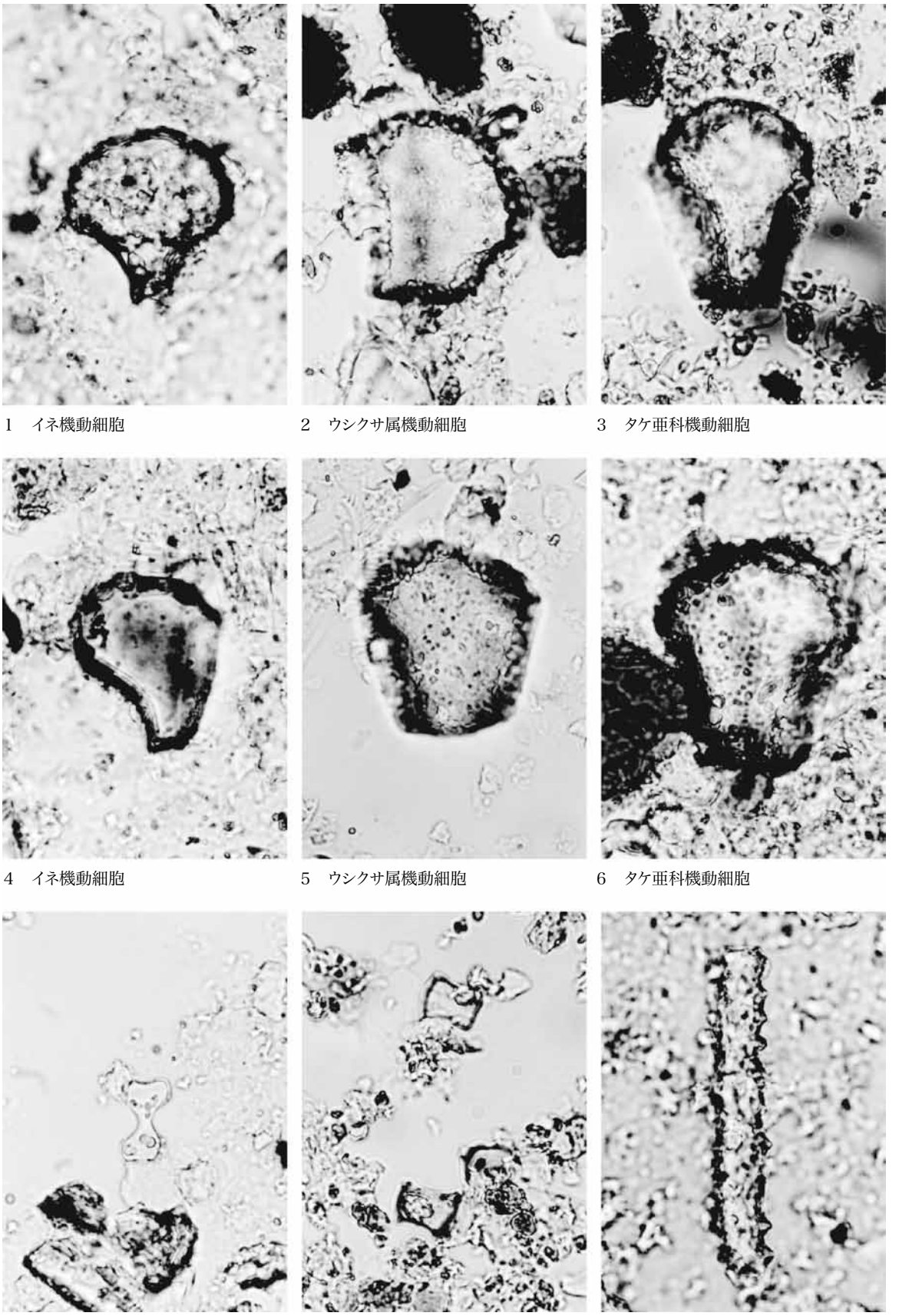


図４　芝辻遺跡・平城京第 375 次調査の植物珪酸体

表２　芝辻遺跡・平城京第 375 次調査の植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100 個 /g）

分類群		西壁						S X 02
		1	2	3	4	5	6	下部
イネ科機動細胞珪酸体								
イネ	*Oryza　sativa*	8	1					29
ヨシ属	*Phragmites*							
ウシクサ属	*Andropogoneae*	49	45	60	117	168	47	210
タケ亜科	Bambusoideae	42	57	59	90	321	55	323
未分類等	*unknown*	32	27	29	64	82	25	198
イネ科短細胞珪酸体								
イネ	*Oryza　sativa*							
ヨシ属	*Phragmites*							
ススキ属	*Miscanthus*	2	6	1	25	1		128
タケ亜科	Bambusoideae	9	19	18	396	120	31	2068
未分類等	*unknown*	2	2	1	17	5	1	160
イネ科機動細胞珪酸体数		131	130	148	271	571	127	760
イネ科短細胞珪酸体数		13	27	20	438	126	32	2356
イネ科珪酸体総数		144	157	168	709	697	159	3116
表皮毛起源								3
棒状珪酸体		7	23	6	46	42	37	211
不明		2	7	6	29	25	12	30
樹木起源								1
海面骨針								4

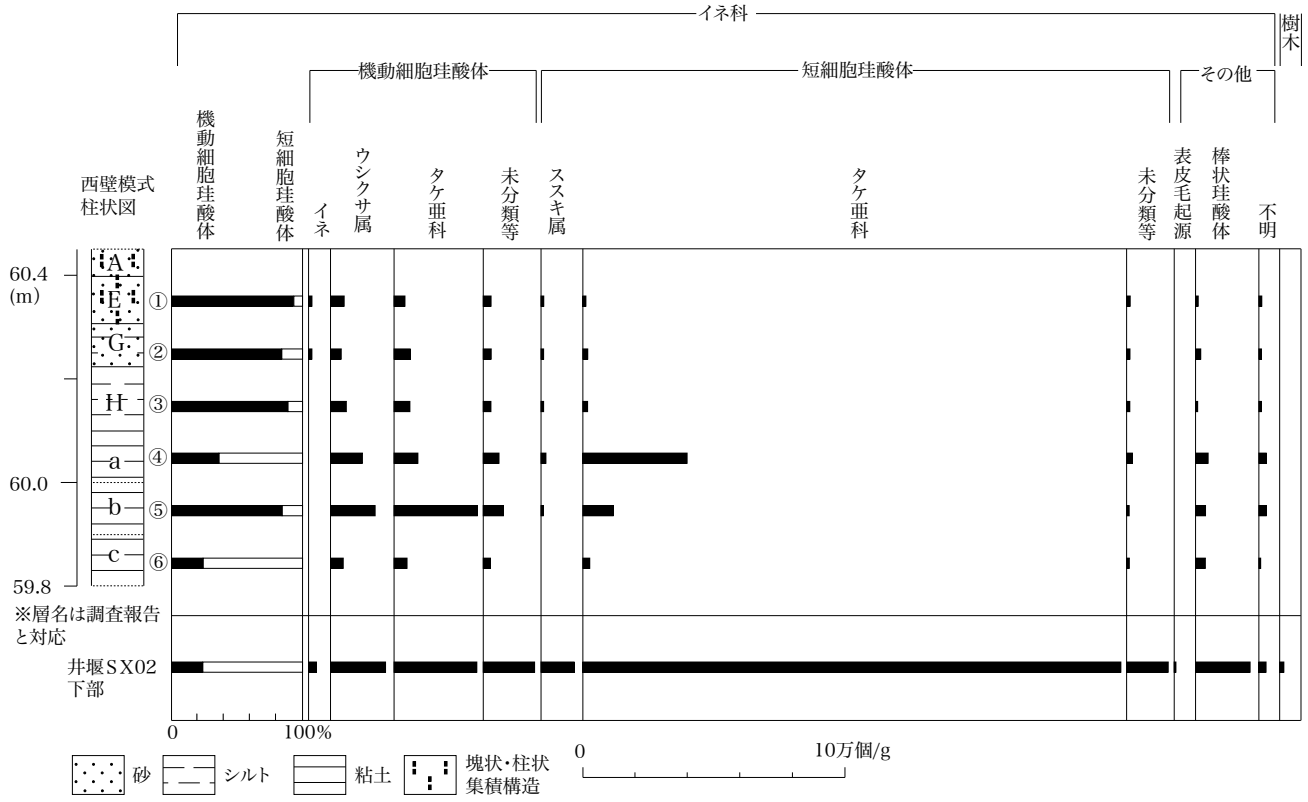


図５　芝辻遺跡・平城京第 375 次調査の植物珪酸体ダイアグラム

（2） 結果

分析の結果、イネ、ウシクサ属、タケ亜科の起動細胞珪酸体、イネ、ススキ属、タケ亜科の短細胞珪酸体が検出された（表2、図4・5）。

1） 西壁

E層（試料①）、G層（試料②）からイネの機動細胞珪酸体が検出されたが、密度が極めて低い。機動細胞珪酸体ではウシクサ属とタケ亜科は各試料とも比較的密度が高い。短細胞珪酸体はタケ亜科が各試料ともやや多く下部では特に多い。

2） 井堰ＳＸ02下部

機動細胞珪酸体ではウシクサ属とタケ亜科が多く、イネが伴われる。短細胞珪酸体ではタケ亜科が極めて多い。

（3） 稲作の可能性と植生・環境

1） 西壁

イネは、E層（試料①）、G層（試料②）からの低密度の検出であり、上層からの混ざり込みの可能性もあり、堆積地で水田が営まれていたとは判断できない。

タケ亜属とウシクサ属の密度は高く、周囲にこれらのイネ科が生育していたと考えられる。タケ亜科は周辺の森林の林床に生育していたものと考えられる。どの層準からもヨシ属が検出されず、タケ亜科やウシクサ属の生育する乾燥した環境が推定される。水田も地下水位の低い表面水型土壌の乾田であった可能性が示唆される。

2） 井堰ＳＸ02下部

特にタケ亜科の密度が高く、周囲の森林の林床に生育していたものが反映されたとみなされる。小型である短細胞珪酸体が多いのは水流による淘汰であると考えられる。

Ⅴ 種実（大型植物遺体）同定

河川01内の井堰ＳＸ02付近に集積していた種実および葉である。

（1）方法

肉眼および実体顕微鏡で観察を行い、形態的特徴および現生標本との対比で同定を行い計数した。

（2） 結果（表3）

1）種実類

オニグルミ、イチイガシ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属、モモ、トチノキ、ムクロジ、エゴノキ、ハクウンボクが同定された。

以上において、コナラ属で保存がよいものはイチイガシまたはコナラ属アカガシ亜属と同定できるが、殻斗がはずれ堅果のみのものはコナラ属の階級の同定にとどまるものが多い。コナラ属の堅果は多量である。

2） 葉

表3 河川01の大型植物遺体同定結果

分類群（和名 / 学名）		部位	個数
種実類			
オニグルミ	*Juglans ailanthifolia Carr.*	核	6
イチイガシ	*Quercus gilva Blume*	堅果	4
		殻斗	5
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	堅果	5
		殻斗	10
コナラ属	*Quercus*	堅果	200＋
モモ	*Prunus persica* Batsch.	核	3
トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume	種子	3
		果皮	1
ムクロジ	*Sapindus mukuross* Gaertn.	種子	1
エゴノキ	*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.	種子	2
ハクウンボク	*Styrax obassia* Sieb. et Zucc.	種子	1
フジ	*Wisteria brachybotrys* Sieb. e Zucc.	豆果	2
葉			
イチイガシ	*Quercus gilva* Blume		多数

葉は多量にあるが、保存がよく同定できるものはいずれもイチイガシである。

（3） 特徴と植生

種実遺体は、コナラ属の同定にとどまるものが多いが、イチイガシを主体にしていると考えられる。イチイガシは低地の照葉樹林の主要構成要素であり、自然度が高い。オニグルミとトチノキは落葉樹で冷涼要素とみられがちだが、照葉樹林の沢沿いの湿潤地に普通に生育する。ムクロジ、エゴノキ、ハクウンボクも河辺に生育する。これらの種実類からみて、周囲はイチイガシを主とする自然度の高い照葉樹林が分布していたと推定される。なお、イチイガシとオニグルミはそのまま食用となり、トチノキは渋抜きを行えば優良な食物になる。

Ⅵ 樹種同定

（1） 試料と方法

河川01内の井堰ＳＸ02を構成する材を任意に構成し、カミソリによって木口、柾目、板目の各切片を作り、生物顕微鏡を用いて同定を行った。同定結果は、同定レベルによって、種、節、亜属、属、導管配列型で示した。

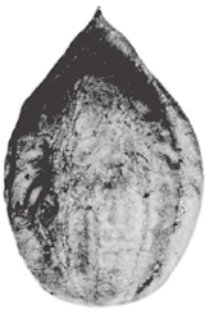
井堰ＳＸ02はA、B、C、Dの順に4度構築され、それ以後の杭類があり、結果表は構築順に示した。

（2） 結果

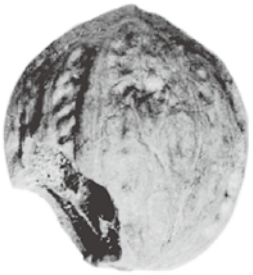
結果は、試料、和名樹種、学名を表にして示す。Aではコナラ属クヌギ節が多く、Bではヤナギ属、Cではツブラジイなど種類がやや多く、Dではムクロジが多い。他の杭類はツブラジイなどシイ属が多く、コナラ属アカガシ亜属などがある（図6、表4）。

（3） 樹種の特徴

同定された樹種は、ツブライジイ、シイ属、コナラ属クヌギ節、コナラ属アカガシ亜属、ムクロジ、ヤナギ属がやや多く、他にコナラ属コナラ節、サカキ、モミ属、ヒノキなどであった。ツブラジイおよびシイ属、コナラ



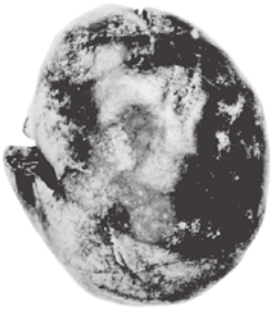
1　オニグルミ核　1.0cm



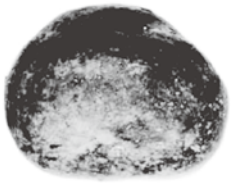
2　オニグルミ核　1.0cm

3　モモ核　1.0cm

4　モモ核　1.0cm



5　トチノキ種子　1.0cm

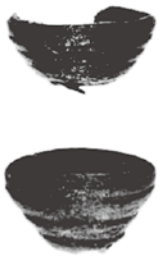


6　トチノキ種子　1.0cm

7　トチノキ果皮　1.0cm

8　ムクロジ種子　1.0cm

9　イチイガシ果実　1.0cm



10　イチイガシ殻斗　1.0cm

11　イチイガシ果実　1.0cm

12　フジ属豆果　1.0cm

13　エゴノキ種子　1.0cm

14　ハクウンボク種子　1.0cm

15　コナラ属果実　1.0cm

図6　芝辻遺跡・平城京第375次調査　河川01の種実

表４　井堰ＳＸ02構成材の樹種

試料		樹種（和名／学名）	
A杭	W230	ヤナギ属	*Salix*
A矢板	W199	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
A矢板	W201	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*
A矢板	W210	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*
A矢板	W234	コナラ属コナラ節	*Quercus* sect. *Prinus*
A矢板	W242	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
A矢板	W252	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
A矢板	W253	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*
A横木	W238	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*
A	W220	ヤナギ属	*Salix*
A	W240	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*
B杭	W 81	切除不可	
B杭	W 83	ヤナギ属	*Salix*
B杭	W 92	ヤナギ属	*Salix*
B杭	W 98	ヤナギ属	*Salix*
B杭	W109	切除不可	
B杭	W114	ヤナギ属	*Salix*
B横木	W 96	切除不可	
C矢板	W 21	切除不可	
C矢板	W 22	ムクロジ	*Sapindus mukorossi* Gaertn.
C矢板	W 47	ツブラジイ	*Castanopsis cuspidata* Schottky
C矢板	W 50	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
C矢板	W 52	切除不可	
C矢板	W 54	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*
C矢板	W 55	ツブラジイ	*Castanopsis cuspidata* Schottky
C矢板	W 57	切除不可	
C矢板	W 59	ヤマザクラ	*Prunus sargentii* Rehd. *jamasakura* Ohwi
D杭	W 15	ムクロジ	*Sapindus mukorossi* Gaertn.
D杭	W 16	切除不可	
D杭	W 17	ムクロジ	*Sapindus mukorossi* Gaertn.
D杭？	W 20	ムクロジ	*Sapindus mukorossi* Gaertn.
D杭	W 17	ムクロジ	*Sapindus mukorossi* Gaertn.
杭	W 60	ツブラジイ	*Castanopsis cuspidata* Schottky
丸杭	W 70	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
枝	W 80	ヤナギ属	*Salix*
杭	W 90	シイ属	*Castanopsis*
杭	W100	シイ属	*Castanopsis*
杭	W120	サカキ	*Cleyera japonica* Thunb.
杭	W137	ツブラジイ	*Castanopsis cuspidata* Schottky
杭	W140	シイ属	*Castanopsis*
杭	W162	ツブラジイ	*Castanopsis cuspidata* Schottky
杭	W171	シイ属	*Castanopsis*
杭	W193	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
杭？	W 10	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
横木？	W 30	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
杭・枝？	W 40	散孔材	diffuse-porous wood
流木？	W250	コナラ属コナラ節	*Quercus* sect. *Prinus*
流された矢板？	W260	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*
	W110	モミ属	*Abies*
	W151	ツブラジイ	*Castanopsis cuspidata* Schottky
	W182	ツブラジイ	*Castanopsis cuspidata* Schottky

属アカガシ亜属、サカキは照葉樹林の主要構成要素の高木である。コナラ属クヌギ節やコナラ属コナラ節は乾燥したところに生育し、二次林の性格ももつ。ムクロジとヤナギ属は低湿を好み河辺に生育する。モミ属とヒノキは照葉樹林の微弱な要素として混在して生育する。なお、シイ類やモミ属保存性の悪い材で水質にもあまり強くなく、井堰の部材の使用には不向きである。以上から、井堰ＳＸ02の材は周囲の照葉樹林ないし、河辺の樹木などから任意に採取されたものとみなされる。

A、B、C、Dにおいては、それぞれの時期において同じ樹種を使う傾向はあるが、時期が異なると異なる樹種が使われ、また井堰に適する水湿に耐える材を特に選択しているわけでもない。同時期に切り出した樹木を単に使ったと考えられる。また、材の特徴としては、枝材もあるが、多くは年輪の比較的大きな樹幹から割って作られた材であり、やや手間をかけて井堰の部材を作ったと考えられる。

Ⅶ　まとめ

(1)　H層（試料③）、a層（試料④）、b層（試料⑤）および井堰ＳＸ02下部からイネ属型花粉、E層（試料①）、G層（試料②）および井堰ＳＸ02下部からイネの機動細胞珪酸体が検出されたが、低率ないし低密度であり、周囲に比較的狭範囲の水田が分布していたと推定される。

(2)　周囲の植生は、イチイガシなどのアカガシ亜属とシイ属主とする照葉樹木が分布し、林床にはタケ亜科が生育していたと考えられる。河辺には湿潤地を好むオニグルミ、トチノキ、ムクロジ、エゴノキ、ヤナギ属が生育していた。

(3)　イネ以外の栽培植物としては、モモが検出された。なお、イチイガシなどのカシ類、シイ類、オニグルミ、トチノキは優良な植物になる。

(参考文献)
中村純（1973）花粉分析．古今書院，pp.82-110.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，pp.248-262.
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（0ryza　Sativa）を中心として．第四紀研究，13，pp.187-193.
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，pp.21-30.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標　本と定量分析法－，9：pp.15-29.
藤原宏志　(1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa　L.）生産総量の推定－，考古学と自然科学，12：pp.29-41.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－，考古学と自然科学，17：pp.73-85.
近藤練三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，pp.31-64.
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹林の細胞．木材の構造，文永堂出版，pp.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹林の細胞．木材の構造，文永堂出版，pp.49-100.
南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，東京大学出版会，pp.276-283.
粉川昭平（1988）穀物以外の食物食．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣出版株式会社，pp.112-115.

（環境考古研究会　金原正明・金原正子）

3．平城京第581次調査の放射性炭素年代測定

Ⅰ　はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の^{14}C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により^{14}C年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、平城京第581次調査地の旧河川から出土した木材を対象として、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築年代について検討した。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc.の協力を得た。

Ⅱ　試料と方法

測定試料は、調査区西壁の灰色細砂層より出土した木材1点である。放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

1）蒸留水中で細かく粉砕後、超音波および煮沸により洗浄

2）塩酸（HCl）により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム（NaOH）により二次的に混入した有機酸を除去

3）再び塩酸（HCl）で洗浄後、アルカリによって中和

4）定温乾燥機内で80℃で乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデトロン加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表1にまとめた。

Ⅲ　結果

年代測定の結果を表2に示す。

Ⅳ　所見

平城京第581次調査地の旧河川から出土した木材について、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定を行った。その結果、5280±50年BP（2σの暦年代でBC 4250～3980年）の年代値が得られた。

(参考文献)
Paula J Reimer et al.,（2004）IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, pp.1029-1058.
尾嵜大真（2005）INTCAL98 から IntCal04 へ．学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア№3－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－, pp.14-15.
中村俊夫(1999)放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院, pp.1-36.

（株式会社　古環境研究所）

表1　測定試料及び処理

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
№1	西壁灰色細砂層	木材	酸－アルカリ－酸洗浄	AMS

※AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

表2　測定結果

試料名	測定№ (Beta-)	^{14}C年代[1] (年BP)	δ^{13}C[2] (‰)	補正^{14}C年代[3] (年BP)	暦年代（西暦）[4]
№1	239309	5300±50	−26.2	5280±50	交点：cal BC 4050 1σ：cal BC 4230～4190, cal BC 4170～4040, cal BC 4010～4000 2σ：cal BC 4250～3980

1）^{14}C年代測定値
試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（AD 1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は国際的慣例によりLibbyの5568年を使用した（実際の半減期は5730年）。

2）δ^{13}C測定値
試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値
δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ^{13}C値を-25（‰）に標準化することによって得られる年代である。

4）暦年代 Calendar Age
^{14}C年代測定値を実際の年代値（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正する必要がある。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線であるIntCal04ではBC 24050年までの換算が可能である（樹木年輪データはBC 10450年まで）。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）と2σ（95%確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

4．大安寺西遺跡・平城京第 589 次調査の花粉分析

Ⅰ　はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

Ⅱ　試料

分析試料は、古墳時代の溝ＳＤ01 埋土から採取された上層（褐灰色砂質シルト（炭・土器片含む））の試料№1と試料№2の２点、下層（暗褐灰色砂質シルト（土器片含む））の試料№3と試料№4の２点の計４点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図(図１)に示す。

Ⅲ　方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）　0.5%リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎
2）　水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
3）　25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
4）　水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す
5）　再び氷酢酸を加えて水洗処理
6）　沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
7）　検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (-) で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

Ⅳ　結果

（1）　分類群

出現した分類群は、樹木花粉 19、樹木花粉と草本花粉を含むもの３、草本花粉 14、シダ植物胞子２形態の計 38 である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図１に示す。主要な分類群は顕微鏡写真(図２)を示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科、ハンノキ属、カバノ

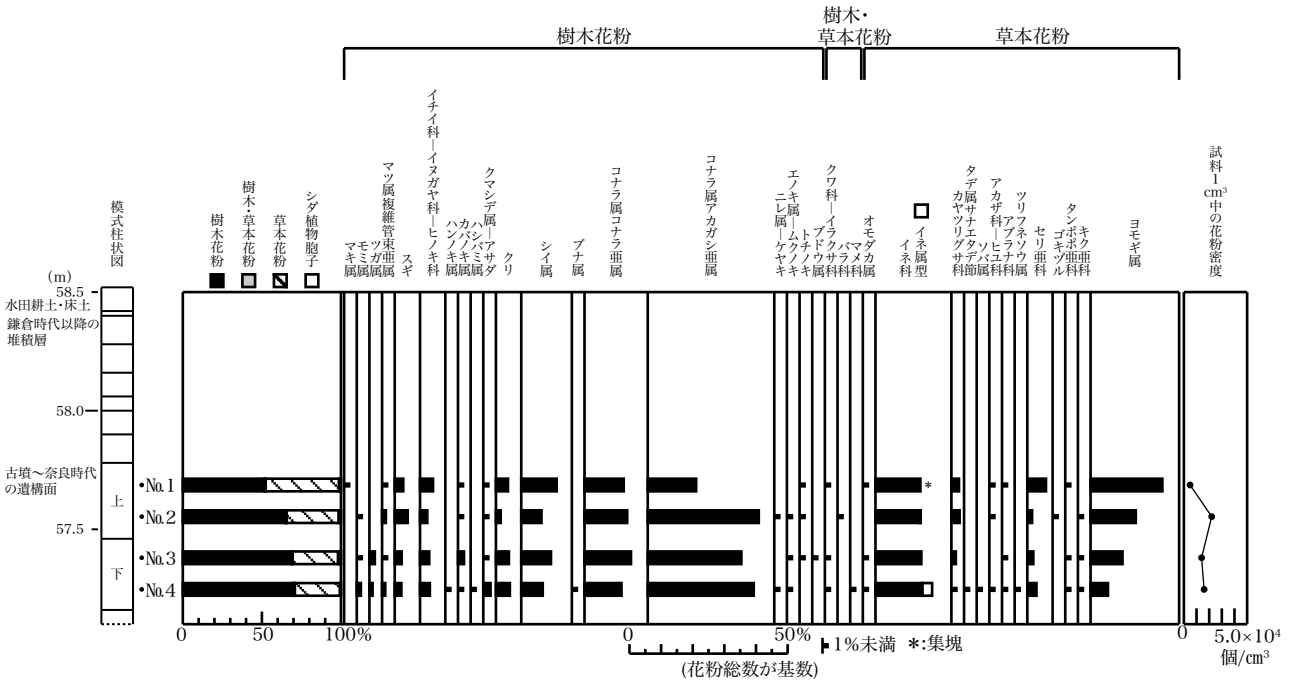


図１　大安寺西遺跡・平城京第 589 次調査　溝ＳＤ01 の花粉ダイアグラム

表１　大安寺西遺跡・平城京第 589 次調査　溝ＳＤ 01 の花粉分析結果

分類群		溝ＳＤ 01 埋土			
		上層		下層	
学名	和名	No.１	No.２	No.３	No.４
Arboreal　pollen	樹木花粉				
Podocarpus	マキ属	1			
Abies	モミ属		1	3	5
Tsuga	ツガ属			7	4
Pinus　subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	2	4	3	4
Cryptomeria　japonica	スギ	9	14	9	8
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科	14	8	12	12
Alnus	ハンノキ属				1
Betula	カバノキ属	2	1	8	2
Corylus	ハシバミ属				1
Carpinus-Ostrya　japonica	クマシデ属 - アサダ	3	2	3	9
Castanea　crenata	クリ	13	5	17	17
Castanopsis	シイ属	38	22	39	26
Fagus	ブナ属				2
Quercus　subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	42	46	61	45
Quercus　subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	52	120	123	129
Ulmus-Zelkova　serrata	ニレ属 - ケヤキ		1		3
Celtis-Aphananthe　aspera	エノキ属 - ムクノキ		1	2	3
Aesculus　turbinata	トチノキ	1	1	2	
Vitis	ブドウ属			2	
Arboreal・Nonarboreal　pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科 - イラクサ科	3		2	1
Rosaceae	バラ科		1		
Leguminosae	マメ科				2
Nonarboreal　pollen	草本花粉				
Sagittaria	オモダカ属	2		2	1
Gramineae	イネ科	48＊	48	60	57
Oryza　type	イネ属型		1		12
Cyperaceae	カヤツリグサ科	8	9	6	2
Polygonum　sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節				1
Fagopyrum	ソバ属				1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科 - ヒユ科	2	1		1
Cruciferae	アブラナ科	1		1	1
Impatiens	ツリフネソウ属				2
Apioideae	セリ亜科	20	5	8	11
Actinostemma　lobatum	ゴキヅル		1		
Lactucoideae	タンポポ亜科	1		2	1
Asteroideae	キク亜科		1	1	1
Artemisia	ヨモギ属	77	49	42	21
Fern　spore	シダ植物胞子				
Monolate　type　spore	単条溝胞子	3	4	7	2
Trilate　type　spore	三条溝胞子	1	1	1	
Arboreal　pollen	樹木花粉	177	226	291	271
Arboreal・Nonarboreal　pollen	樹木・草本花粉	3	1	2	3
Nonarboreal　pollen	草本花粉	159	115	122	112
Total　pollen	花粉総数	339	342	415	386
Pollen　frequencies　of　1cm^3	試料 1cm^3 中の花粉密度	4.9 $\times10^3$	2.2 $\times10^4$	1.4 $\times10^4$	1.6 $\times10^4$
Unknown　pollen	未同定花粉	18	9	15	19
Fern　spore	シダ植物胞子	4	5	8	2
Helminth　eggs	寄生虫卵	(−)	(−)	(−)	(−)
Digestion　rimeins	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)	(−)
Charcoal　fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(−)	(+)

＊：集塊

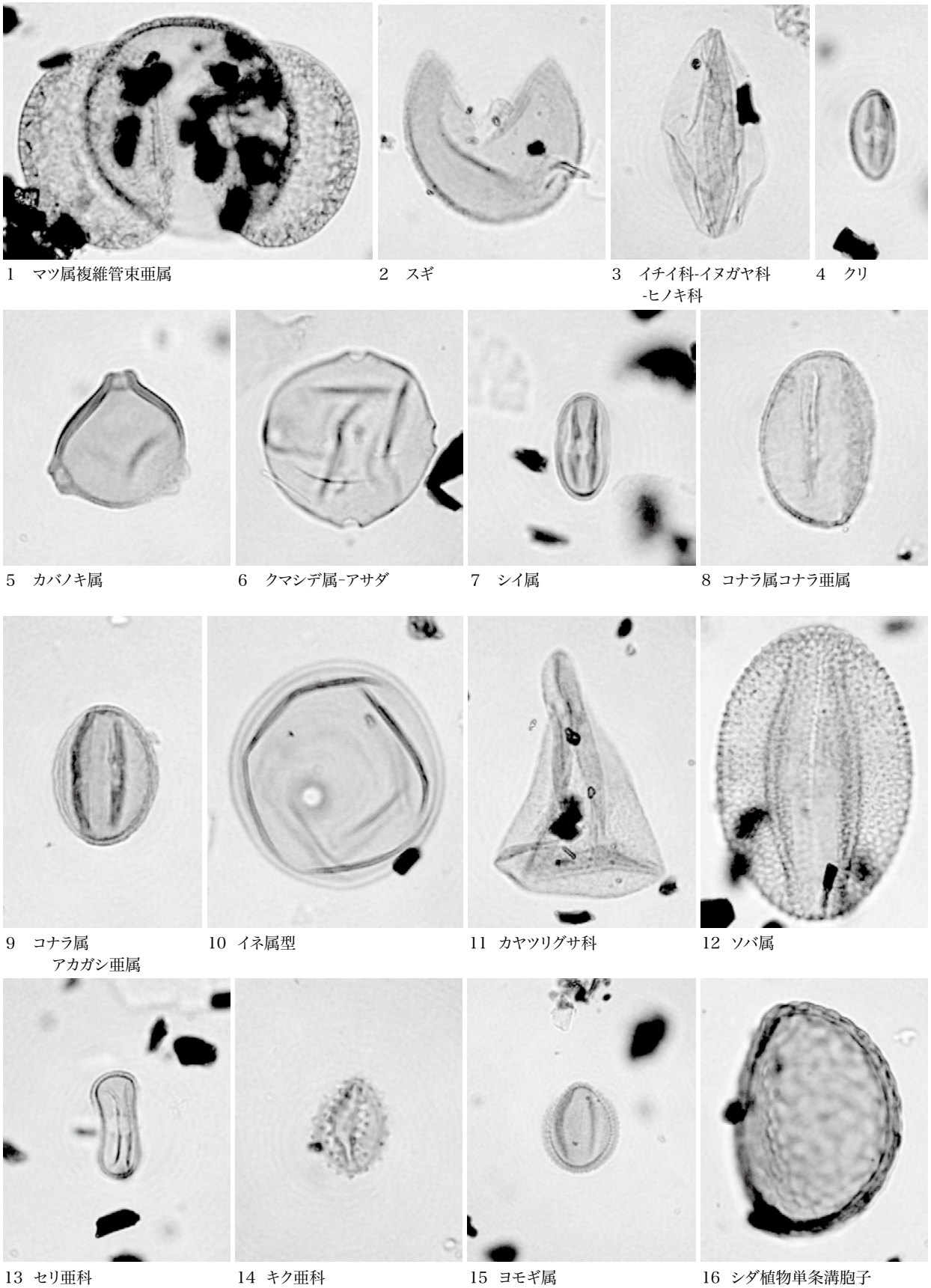


図２　大安寺西遺跡・平城京第 589 次調査　溝ＳＤ 01 の花粉

キ属、ハシバミ属、クマシデ属 - アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属 - ケヤキ、エノキ属 - ムクノキ、トチノキ、ブドウ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科 - イラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科 - ヒユ科、アブラナ科、ツリフネソウ属、セリ亜科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（2） 花粉群集の特徴

古墳時代の溝ＳＤ01埋土（上層、下層）における花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

下層（試料№.４、試料№.３）、上層（試料№.２、試料№.１）ともに密度はやや低く、花粉の出現傾向は類似する。樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属を主に、コナラ属コナラ亜属、シイ属、クリ、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科、スギなどが出現する。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属、セリ亜科などが低率に出現する。下層の試料№.４ではソバ属が検出された。上位に向かいヨモギ属は増加し、試料№.１ではコナラ属アカガシ亜属は半減する。

Ⅴ　花粉分析から推定される植生と環境

溝ＳＤ01の周辺には、コナラ属アカガシ亜属（カシ類）を主にシイ属などを構成要素とする照葉樹林が分布し、コナラ属コナラ亜属（ナラ類）の落葉広葉樹、スギ、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科などの針葉樹も生育していた。周辺は森林が比較的多かったとみられる。

草本はイネ科、ヨモギ属が分布するが、最下部の下層試料№.４の層準では、イネ属型が出現し、近隣に水田の分布が示唆される。上部に向かいヨモギ属が増加し、やや乾燥した裸地が拡大する。

（参考文献）
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，pp.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，p.60
中村純（1973）花粉分析．古今書院，pp.82-110.
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13,pp.187-193.
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，pp.21-30.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集,p.91

（株式会社　古環境研究所）

5．平城京第593次調査の花粉分析

Ⅰ　はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

Ⅱ　試料

分析試料は、下層調査区西寄りで確認された古墳時代前期の旧河川Ｂに接続する導水溝の埋土から採取された、５層（オリーブ灰色シルトと灰色砂の互層（木屑多し））の試料１と６層（オリーブ灰色シルトと灰色砂の互層（木屑溜り））の試料２の計２点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

Ⅲ　方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1） 試料から1 cm^3 を採量
2） 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
3） 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
4） 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
5） 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す
6） 再び氷酢酸を加えて水洗処理
7） 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
8） 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および

種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (-) で結んで示す。イネ属については､中村 (1974, 1977) を参考にして、現生標本の表面模様･大きさ･孔･表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

Ⅳ　結果

（1） 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 23、樹木花粉と草本花粉を含むもの 4、草本花粉 20、シダ植物胞子 2 形態の計 49 である。これらの学名と和名および粒数を表 1 に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図 1 に示す。主要な分類群は顕微鏡写真(図 2) に示した。また寄生虫卵についても観察した結果、2 分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属 - アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属 - ケヤキ､エノキ属 - ムクノキ､モチノキ属､トチノキ、ブドウ属､ツバキ属､グミ属､モクセイ科､スイカズラ属。

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科 - イラクサ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属 - ガマズミ属

〔草本花粉〕

サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、アカザ科 - ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、ノブドウ、セリ亜科、ナス科、ゴキヅル、キキョウ属 - ツルニンジン属、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵

（2） 花粉群集の特徴

下層調査区の導水溝（6 層（試料 2）､5 層（試料 1））において、下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。(図 1）

1） 6 層（試料 2）

樹木花粉が約 75％を占める。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属を主にコナラ属コナラ亜属、シイ属、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科、スギなどが出現する。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む)、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが低率に出現する。

2） 5 層（試料 1）

樹木花粉が約 60％になり、樹木・草本花粉を含むクワ科 - イラクサ科が増加する。草本花粉ではアブラナ科、オモダカ属、ミズアオイ属が出現する。回虫卵、鞭虫卵がわずかに検出された。

Ⅴ　花粉分析から推定される植生と環境

下層調査区の導水溝において、下位より花粉群集の特徴から植生の復元を行う。

1） 6 層（試料 2）

周辺には、コナラ属アカガシ亜属を中心にシイ属で構成される照葉樹林が分布し、他にコナラ属コナラ亜属も分布

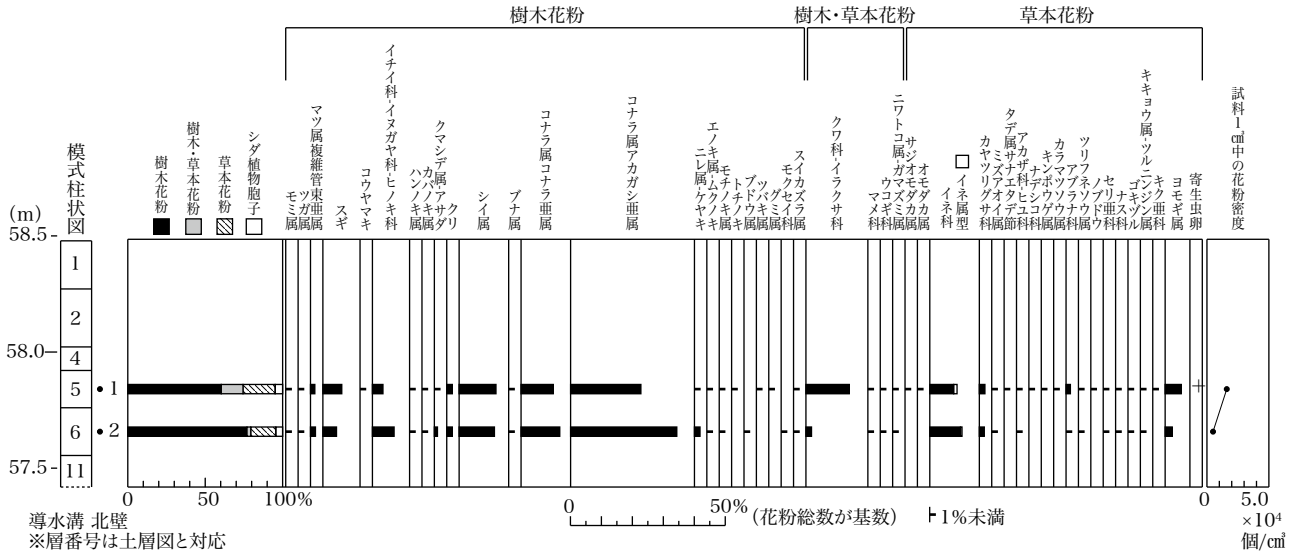


図 1　平城京第 593 次調査　導水溝における花粉ダイアグラム

表1　平城京第593次調査　導水溝における花粉分析結果

分類群		導水溝 北壁	
学名	和名	5層（1）	6層（2）
Arboreal pollen	樹木花粉		
Abies	モミ属	4	3
Tsuga	ツガ属	1	3
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	6	6
Cryptomeria japonica	スギ	27	17
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ	1	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	15	27
Alnus	ハンノキ属	1	1
Betula	カバノキ属	2	1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	4	4
Castanea crenata	クリ	8	7
Castanopsis	シイ属	53	44
Fagus	ブナ属	3	2
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	46	48
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	101	132
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	2	7
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	2	1
Ilex	モチノキ属	2	2
Aesculus turbinata	トチノキ	1	
Vitis	ブドウ属		3
Camellia	ツバキ属	1	
Elaeagnus	グミ属	1	
Oleaceae	モクセイ科		1
Lonicera	スイカズラ属	2	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	62	7
Leguminosae	マメ科	1	1
Araliaceae	ウコギ科	1	1
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属	1	1
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Alisma	サジオモダカ属	1	
Sagittaria	オモダカ属	1	
Gramineae	イネ科	34	38
Oryza type	イネ属型	5	2
Cyperaceae	カヤツリグサ科	8	6
Monochoria	ミズアオイ属	1	1
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	3	1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	
Ranunculus	キンポウゲ属	1	
Thalictrum	カラマツソウ属	1	
Cruciferae	アブラナ科	6	2
Impatiens	ツリフネソウ属	2	1
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ	3	
Apioideae	セリ亜科	2	2
Solanaceae	ナス科	1	1
Actinostemma lobatum	ゴキヅル	1	1
Platycodon-Codonopsis	キキョウ属-ツルニンジン属	1	1
Asteroideae	キク亜科	1	
Artemisia	ヨモギ属	23	9
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	17	14
Trilate type spore	三条溝胞子	5	4
Arboreal pollen	樹木花粉	282	310
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	65	10
Nonarboreal pollen	草本花粉	97	65
Total pollen	花粉総数	444	385
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	1.6 ×10^4	4.9 ×10^3
Unknown pollen	未同定花粉	14	14
Fern spore	シダ植物胞子	22	14
Helminth eggs	寄生虫卵		18
Ascaris lumbricoides	回虫卵	4	
Trichuris trichiura	鞭虫卵	1	
Total	計	5	
Helminth eggs frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の寄生虫卵密度	5.0 ×10	
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)	(−)

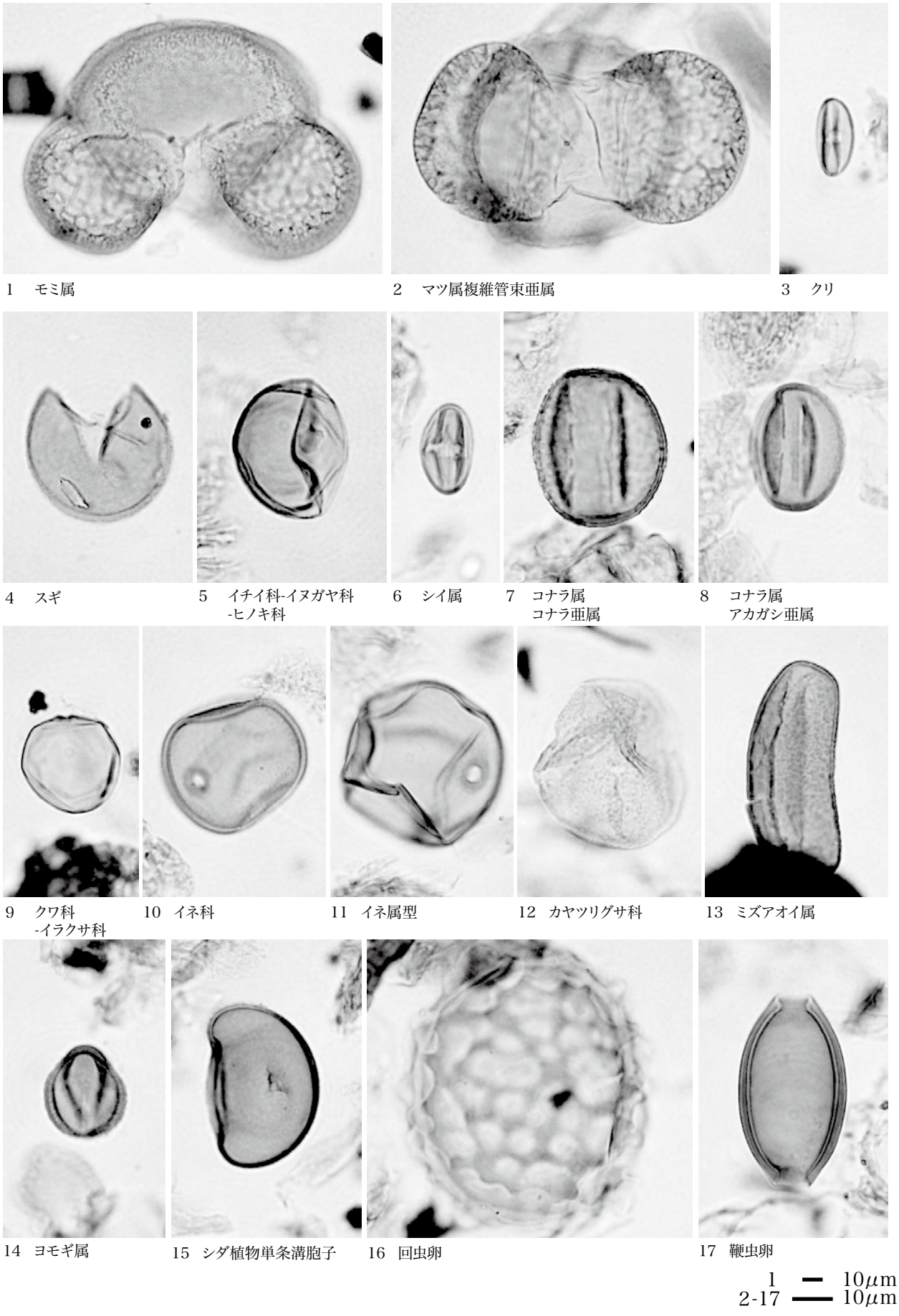


図2　平城京第593次調査　導水溝の花粉

していた。コナラ属コナラ亜属はコナラやクヌギの二次林要素が考えられる。やや遠方にはスギ、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科の針葉樹も生育していたと思われる。南北溝周囲にはイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科の草本が生育していたと考えられる。イネ属型がわずかに検出され、周囲には広域ではないが水田も分布していた。

2)　5層（試料1）

クワ科 - イラクサ科が増加する。花粉形態から荒地や路傍に生育するカナムグラに近似し、本層準の時期にはより人為改変地が拡大したと推定される。イネ属型がやや増加し、水田の拡大が示唆される。また寄生虫卵も生活汚染程度に出現し、生活域が近接していたとみられる。

Ⅵ　まとめ

下層調査区の発掘区西寄りで確認された、古墳時代前期の旧河川Bに接続する導水溝で花粉分析を行った。

導水溝周辺は比較的森林が多く、コナラ属アカガシ亜属を中心にシイ属の照葉樹林が主要に分布し、コナラ属コナラ亜属（コナラやクヌギ）の二次林も分布していた。溝の周辺には、イネ科が主に分布するが、6層（試料2）から5層（試料1）にかけて変化し、クワ科－イラクサ科（カナムグラなど）が増加し、5層では水田が微増した。寄生虫卵も検出され、生活域が近接していた。

以上にことから、本遺跡周辺では6層から5層の時期に人為環境が拡大し、集落域や水田が拡大を開始したと推定された。

(参考文献)
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，pp.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，p.60
中村純（1967）花粉分析．古今書院，pp.82-110.
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究 ,13,pp.187-193.
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，pp.21-30.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集, p.91

（株式会社　古環境研究所）

6．奈良山第51号窯の熱ルミネッセンス年代測定

Ⅰ　はじめに

瓦窯の窯材（焼土）と窯材として転用された瓦を試料として熱ルミネッセンス(ＴＬ)法による年代測定を行った。測定の目的として、瓦窯の操業年代を推定すること、および窯材として転用された瓦が51号瓦窯の操業以前に他の瓦窯で焼成されたものであるかを推定することを念頭に置いた。

Ⅱ　試料および試料処理

採取した試料は瓦片3点及び窯床と窯壁の焼土各1ブロックである。

瓦は、窯奥で窯壁の材料として転用された瓦3点である。そのうち2点の瓦は、それぞれ壁面に平行に2分割して窯壁の内側部分をＲＴ207-1 及び ＲＴ208-1、外側部分をＲＴ207-0 及び RT208 - 0とした。もう1点の瓦は内側と外側部分を区別せずに、その一部を測定試料とした（試料名；ＲＴ207 - 2）。瓦は、暗室内で超硬カッターを用いて表面層を約1mm除去した後、アルミ板で挟み万力を用いて徐々に圧力を加えながら粉砕して胎土の鉱物を分離した。

窯の焚き口付近の床と窯奥の壁は、いずれも赤色化した部分をブロック状で採取して持ち帰り、暗室内で表面を約2mm削って除去した後に、その内側の厚さ約10mmを削り取って、瓦の場合と同様に鉱物を分離して試料とした。試料名は床をＫＬＮＦ、壁をＫＬＮＷとした。

粉砕した試料は、標準篩で75～150μmに粒度分けした後、10％過酸化水素水で16時間処理を行って有機物を除去した。洗浄した後、50℃の恒温槽で乾燥し、20％塩酸で60分間処理して炭酸塩鉱物を溶解除去した。これを洗浄後、50℃の恒温槽で乾燥させ、フランツ型マグネティックセパレーターで非磁性鉱物と磁性鉱物に分離した。分離した非磁性鉱物を20％フッ酸で90分間処理して、石英以外の鉱物を除去すると同時に石英表面をエッチングした。洗浄後、50℃の恒温槽で乾燥させ、200メッシュの標準篩にかけて粒径75 μm以上の試料を測定試料とした。

Ⅲ　測定と解析

（1）　蓄積線量

上述の処理を行った試料は、DAYBREAK社製1150ＴＬ/ＯＳＬ測定装置を用いて、付加線量法で測定を行った。付加線量は5,10,15,20,30 Gyとし、Co-60線源で照射した。測定は1試料皿あたり5mgとして、各線量毎に5試料皿を用意した。測定に当たっては昇温速度を10℃/secとして、最高温度500℃まで、窒素雰囲気で、検出波長は380～550nmで測定した。

等価線量（ED）の解析を直線回帰で行ったので、ス

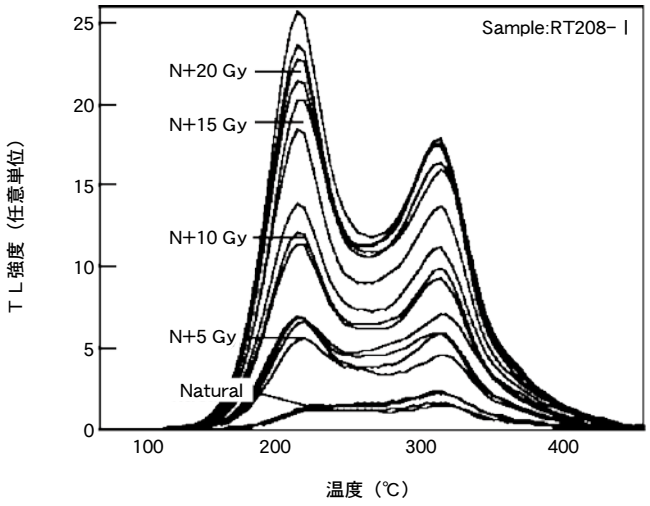


図１　ＴＬグローブカーブの測定例（瓦ＲＴ 208-1）

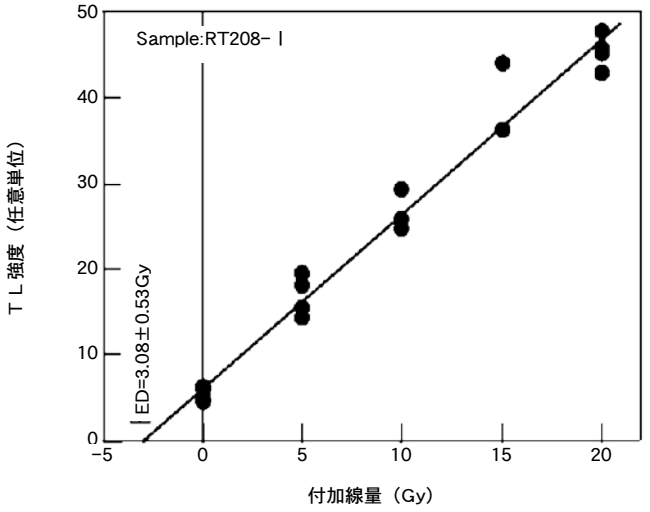


図２　等価線量（ＥＤ）の解析例（瓦ＲＴ 208-1）

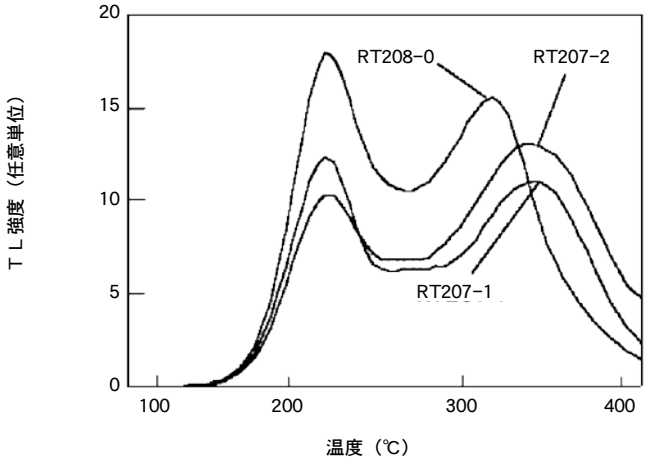


図３　瓦のグローカーブの形状とピーク温度

プラリニアリティ補正（ＳＰＲ）の測定を実施した。スプラリニアリティ補正測定では、電気炉で 350℃、30 分間アニールした試料に１，３，５，10，20，30 Gy を照射して等価線量測定と同じ条件で測定した。蓄積線量は等価線量とスプラリニアリティ補正値の和である。

図１はＲＴ 208- Ⅰについて等価線量の測定データ（グローカーブ）を例として示したものである。

（２）　年間線量（線量率）

蓄積線量は表面をエッチングした粒径 75 μm 以上の石英粒子を測定試料として評価したので、年間線量はβ線とγ線および宇宙線の各年間線量の和である。

年間線量の評価はβ線とγ線＋宇宙線に分けて直接測定した。β線は処理前の粉末試料をプレス成形した２枚の円盤（直径 50 mm）の間にα線を遮蔽するポリエチレンシートを介して線量計素子粉末（$CaSO_4$:Tm）を薄く拡げて、厚さ 15 cm の鉛箱内に３週間おいた後、線量計素子のＴＬ強度から年間線量に換算した。γ線＋宇宙線は、５個の線量計素子カプセルを封入した銅パイプ（長さ 50 cm、肉厚 1 mm）を 51 号瓦窯の窯壁に３週間放置した後、β線の場合と同様に線量計素子のＴＬ強度から年間線量に換算した。

Ⅳ　結果と考察

図２に直線回帰による等価線量の解析例を示す。スプラリニアリティ補正測定データの解析も図２と同様に行った。すべての試料の測定結果とＴＬ年代を表に示す。グローカーブのばらつきが比較的大きいためＴＬ年代は 10%以上の誤差を含む。

窯の内側に近い部分と外側の部分を別々の測定した瓦はいずれも外側の方が古いＴＬ年代値を示している（中央値で比較すれば、ＲＴ 207 は 80 年の差、ＲＴ 208 は 50 年の差がある）。ＴＬ年代は高温（約 400 ～ 500℃以上）で被熱した最終年代を示すので、相対的に被熱温度が低い外側のＴＬ年代が古いという結果から窯材として使われた瓦が 51 号瓦窯より 50 ～ 80 年ほど古い瓦窯で焼成された瓦である、という解釈も可能である。しかし、いずれの瓦もグローカーブのばらつきが比較的大きく、それに伴ってＴＬ年代の誤差も大きいので、外側のＴＬ年代が内側のＴＬ年代より古いと断定することには躊躇せざるを得ない。また、瓦の内側と外側の測定データはグローカーブの形状とＴＬ強度に差が無いこと、窯壁の焼土のＴＬ年代が誤差の範囲内で瓦の外側と同様の年代を示すことも 51 号瓦窯より数 10 年古い瓦窯で焼成された瓦を 51 号瓦窯の窯材に転用した、と断定することを躊躇させる理由の一つである。

図３は、３つの瓦（ＲＴ 207、ＲＴ 207-2 およびＲＴ 208）のグローカーブを同じ温度軸で比較したものである。グローカーブの形状とピーク一に着目すると、ＲＴ 207 と RT207-2 が殆ど同じであるのに対して、ＲＴ 208 は２つのピークに挟まれた鞍部の形状が異なり、また、２つめのピーク温度が低い。このことからＲＴ 208 の原料粘土は他の２つの瓦の原料粘土と異なると考えられる。従って、51 号瓦窯の壁を構築するに当たっては少なくとも原料粘土が異なる２種類の瓦を転用したことが分かる。

51 号瓦窯の最終操業年代は全試料のＴＬ年代の平均値である、1250±70 年前（西暦 760±70 年）、と推定される。

（奈良教育大学　長友恒人・青木智史）

表　測定結果とＴＬ年代

試料	蓄積線量（Gy）	年間線量（mGy/y）	ＴＬ年代（年前）	西暦（年）
ＲＴ207-1	4.58±0.99	3.75±0.29	1220±280	790
ＲＴ207-0	4.89±0.67	3.75±0.29	1300±210	710
ＲＴ207-2	4.56±0.36	3.69±0.28	1240±140	770
ＲＴ208-1	4.20±0.29	3.59±0.29	1170±120	840
ＲＴ208-0	4.37±0.35	3.59±0.29	1220±140	790
ＫＬＮＷ	4.23±0.29	3.32±0.28	1270±150	740
ＫＬＮＦ	4.22±0.29	3.24±0.30	1300±150	710

第　3　章　　平成 19 年度保存活用事業報告

平成 19（2007）年度埋蔵文化財保存活用事業報告

1．展示

A　常設展示

対　　象：一般
会　　期：平成 19 年 4 月 2 日 (月) ～ 11 月 2 日 (金)
　　平成 20 年 1 月 4 日 (金) ～ 3 月 31 日 (月)
　　(206 日間)
場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室
趣　　旨：奈良市の歴史を埋蔵文化財の展示を通じて知ってもらう。
内　　容：旧石器時代～江戸時代の各時代の埋蔵文化財を遺跡ごとに展示。
観覧者数：990 名

B　第 25 回平城京展「並びたつ大塔 – 大安寺塔跡の発掘調査 –」の開催

対　　象：一般
会　　期：平成 19 年 11 月 5 日 (月) ～ 12 月 26 日 (水)
　　(実質開館日 50 日間)
場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室及びロビー
趣　　旨：平成 13 年度から継続して実施してきた大安寺の東西塔の発掘調査成果を紹介。保存処理の終了した風鐸や水煙、出土軒瓦など出土遺物・パネルを展示。
観覧者数：672 名
そ の 他：・案内を「しみんだより」11 月号に掲載。
　　・奈良市役所のホームページに掲載。
　　・宣伝用のポスター・チラシを配布。
　　・展示解説のパンフレットの作成。
　　・事前に報道機関に資料を配布。
　　・埋蔵文化財講演会を実施。
　　11 月 17 日（土）13：00 ～ 16:00
　　参加者 54 名
会　　場：埋蔵文化財調査センター講座室
　　・松浦五輪美「大安寺塔跡の発掘調査」
　　・中井　公「大安寺西塔の創建をめぐって」
　　・小沢　毅「百済大寺から大官大寺へ」

C　発掘調査速報展示（2 回）の開催

対　　象：一般
場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー
趣　　旨：平成 18 年度（夏季）・19 年度（春季）にどのような発掘調査を行い、どのような成果があったかを展示によって知ってもらう。

①夏季速報展示

会　　期：平成 19 年 7 月 10 日(月)～ 8 月 31 日(木)
　　(39 日間)
内　　容：・平城京跡（左京五条四坊十五・十六坪）の発掘調査
　　主な展示遺物 – 縄文土器・石器
　　・平城京跡（左京八条三坊二坪）の発掘調査
　　主な展示遺物 – 江戸時代土器・陶磁器
　　・水間遺跡の発掘調査
　　主な展示遺物 – 飛鳥時代と奈良時代の土器
観覧者数：310 名
そ の 他：・案内を「しみんだより」7 月号に掲載。
　　・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。
　　・展示リーフレットを作成。
　　・事前に報道機関に資料配布。

②春季速報展示

会　　期：平成 20 年 3 月 3 日 (月) ～ 3 月 28 日 (金)
　　(20 日間)
内　　容：・平城京跡（左京五条四坊十五・十六坪）の発掘調査
　　主な展示遺物 – 奈良時代須恵器・銭貨
　　・西大寺旧境内の発掘調査
　　主な展示遺物 – 奈良時代須恵器、鎌倉時代土師器・瓦質土器
観覧者数：236 名
そ の 他：・案内を「しみんだより」3 月号に掲載。
　　・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。
　　・展示リーフレットを作成。
　　・事前に報道機関に資料配布。
　　・埋蔵文化財調査センターＨＰで広報。

埋蔵文化財講演会

年間観覧者数　　1,675 名(256 日間)。累計:13,284 名。月平均 139 名。

月別、男女別、居住地別、年齢別は表 1 のとおり。

表 1
月別：

4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
153	46	47	140	184	70	37	532	153	19	43	251

居住地別：

奈良市内	奈良県内	近畿圏内	近畿圏外
347	81	56	21

男女別：

男	女
1208	467

学生：

学生
207

年齢別：

～9 歳	10 ～ 19 歳	20 ～ 29 歳	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳	60 ～ 69 歳	70 歳～
9	147	21	27	42	62	120	84

2．発掘調査現場・施設見学の受け入れ

A　発掘調査現場の見学

(1)

対　　象：大阪府豊能郡能勢町教育委員会
期　　日：平成 19 年 11 月 16 日（金）
場　　所：平城京跡発掘調査現場（奈良市大森町）

B　埋蔵文化財調査センター施設見学

(1)

対　　象：大安寺西小学校生徒　114 名
期　　日：平成 19 年 4 月 26 日（木）

(2)

対　　象：大安寺西小学校生徒
期　　日：平成 19 年 11 月 6 日（火）

(3)

対　　象：放送大学　奈良歴史クラブ　15 名
期　　日：平成 19 年 11 月 29 日（木）

3．講演会・教室の開催

A「埋蔵文化財発掘調査報告会」の開催

対　　象：一般
会　　場：埋蔵文化財調査センター講座室
内　　容：平成 19 年度に埋蔵文化財調査センターが行った主な発掘調査の報告を行う。
・安井宣也「帯解黄金塚古墳の発掘調査」
・秋山成人「西大寺旧境内の発掘調査」
・大原　瞳「平城京跡（左京五条四坊十五坪）の発掘調査」
・宮崎正裕「平城京跡（左京五条四坊十坪）の発掘調査」
趣　　旨：平成 19 年度に実施した調査内容を、職員が写真映像・図を使用しながら説明することによって、どのような発掘調査を行い、どのような成果があったかを知ってもらう。
参加者数：43 名
そ の 他：・募集案内を「しみんだより」2 月号に掲載。
・埋蔵文化財調査センター HP で広報。

埋蔵文化財発掘調査報告会

親子考古学体験　出土遺物洗浄作業

B「夏休み親子考古学体験」

対　　象：小学生の児童とその保護者
期　　日：平成 19 年 8 月 22 日・23 日各 1 回
　　各午後 1 ：30 ～ 3 :00
内　　容：埋蔵文化財調査センターの業務を紹介。
　　A . 瓦の拓本をとる。
　　B . 瓦を洗浄する。
会　　場：A . 埋蔵文化財調査センター　講座室
　　B . 埋蔵文化財調査センター　洗浄室
趣　　旨：古代の瓦について知ってもらい、発掘調査の遺物整理作業の一部である、瓦の洗浄・拓本を体験してもらうことによって、奈良市の歴史にふれてもらう。

4．体験学習・実習の受け入れ

A　博物館実習の受け入れ

対　　象：追手門学院大学　2 名
期　　日：平成 19 年 10 月 29 日～ 11 月 2 日の 5 日間
内　　容：第 25 回平城京展の展示設営
　　パーソナルコンピュータを使用したポスター・パンフレットの作り方

B　高校体験学習の受け入れ

(1)
対　　象：一条高校生徒 1 年生 42 名
期　　日：平成 19 年 9 月 18 日
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：遺物の洗浄・注記・拓本

(2)
対　　象：一条高校生徒 2 年生 39 名
期　　日：平成 19 年 10 月 4 日
場　　所：平城京跡発掘調査現場（奈良市大森町）
内　　容：発掘調査の体験学習

(3)
対　　象：奈良高校生徒 2 年生 1 名
期　　日：平成 19 年 8 月 27 日・28 日の 2 日間
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：講義、遺物の洗浄、発掘調査の体験

C　中学校職場体験の受け入れ

(1)
対　　象：少年指導センター　2 学年　女子生徒 1 名
期　　日：平成 19 年 7 月 11 日～ 13 日の 3 日間
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：遺物洗浄・注記作業・拓本

(2)
対　　象：伏見中学校　2 学年　男子生徒 3 名
期　　日：平成 19 年 7 月 30 日～ 8 月 1 日の 3 日間
場　　所：埋蔵文化財調査センター
　　平城京跡発掘調査現場
内　　容：遺物洗浄・注記作業・発掘調査体験

(3)
対　　象：春日中学校　2 学年　男子生徒 3 名
期　　日：平成 19 年 9 月 11 日～ 13 日の 3 日間
場　　所：埋蔵文化財調査センター・田中家住宅・平城京跡発掘調査現場
内　　容：遺物洗浄・注記作業・民具整理・清掃
　　発掘調査体験

(4)
対　　象：田原中学校　2 学年　男子生徒 5 名
期　　日：平成 19 年 10 月 5 日～ 7 日の 3 日間
場　　所：埋蔵文化財調査センター
　　平城京跡発掘調査現場
内　　容：遺物洗浄作業・注記作業・古文書整理作業・発掘調査体験

博物館実習

高校体験学習

(5)

対　　象：登美ヶ丘中学校　男子生徒５名
期　　日：平成 19 年 11 月８・９日の２日間
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：遺物洗浄作業・注記作業・古文書整理作業

(6)

対　　象：少年指導センター　男子生徒１名
期　　日：平成 20 年１月 23 日～ 25 日の３日間
場　　所：埋蔵文化財調査センター平城京跡発掘調査現場
内　　容：遺物洗浄作業・注記作業・発掘調査体験

５．職員の講師等派遣

A　奈良文化財同好会（任意団体）総会

期　　日：平成 19 年５月 23 日（水）
場　　所：中部公民館（奈良市上三条町）
内　　容：奈良町遺跡の発掘調査の成果について

B　奈良市一条高校人文科「総合文化研究」授業

期　　日：平成 19 年 11 月 11 日（火）・13 日（木）
場　　所：奈良市立一条高校 (奈良市法華寺町)
派遣人数：２名
内　　容：考古学概論

C　平成 19 年度奈良県市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会「発掘調査報告会」

期　　日：平成 20 年３月１日（土）
場　　所：天理市かがやきプラザ (天理市守目堂町)
派遣人数：１名
内　　容：帯解黄金塚古墳の発掘調査

D（財）奈良市生涯学習財団平城公民館主催事業

「イチから学ぶ”発掘調査”」

期　　日：平成 20 年３月５日（水）
場　　所：埋蔵文化財調査センター講座室（奈良市大安寺西二丁目）
派遣人数：１名
内　　容：埋蔵文化財調査センターの施設見学と埋蔵文化財の活用について

６．水間の里　奈良市東部郷土資料室設置

内　　容：旧水間小学校（奈良市）に奈良市東部地域で行われてきた発掘調査の成果について、出土遺物やパネルで紹介する展示室を設けることとなり、遺物の展示やパネルの設置作業を行うとともに、展示室や展示遺跡、展示遺物を紹介するパンフレットを作成した。

７．埋蔵文化財調査センター保管遺物・写真等の貸出、ほか

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物、写真等の貸出・提供・掲載許可を行った。また、学術研究に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

A　遺物等の貸出　８件（表２の通り）
B　写真等の貸出・提供・掲載許可８件（表３の通り）
C　学術研究に関わる資料閲覧　４件（表４の通り）

中学校職場体験

奈良市東部郷土資料室展示作業

表２

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1	東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	H19．４．１～H20．３.31	平城京跡出土木簡（模造品）10 点（礫進上木簡１点、月借銭申請木簡１点、豹皮分銭付札１点、渋皮御田侍奴画指木簡１点、北宮封緘木簡１点、衛府進塩付札１点、緑布付札１点、槐花進上木簡１点、造酒司符１点、瓦進上木簡１点）、分銅（模造品）１点（平城京跡第 167 次調査出土）
2	奈良県立橿原考古学研究所付属博物館	速報展『大和を掘る』−2006 年度に展示	H19．７.10～H19．９.21	奈良町遺跡（平城京左京三条六坊十坪）出土土器 34 点（赤膚焼６点、瀬戸美濃産陶器３点、肥前産磁器３点、三田焼１点、土師器 21 点）、蓮華唐草紋軒平瓦拓本（西大寺旧境内第 10 次調査出土品）
3	大阪府立弥生文化博物館	平成 19 年度夏季企画展「計る・量る・測る−度量衡の歴史展」に展示	H19．７.10～H19．９.21	壷形分銅１点（平城京左京九条一坊二坪出土品）、「四合」墨書土器（平城京左京五条四坊七・九・十坪出土品）、「三合一夕」墨書土器（平城京右京五条一坊十五坪出土品）
4	葛城市歴史博物館	第８回特別展『相撲展』に展示	H19.9.19～H19.12.7	墨書土器４点（平城京左京二条二坊十二坪出土品）
5	財団法人元興寺文化財研究所	秋季特別展「発掘された木の記憶−見る眼と伝える技術−」に展示	H19.9.28～H19.11.22	人形 14 点（平城京左京一条三坊十三坪出土品）
6	帝塚山大学付属博物館	特別展示「都の緑釉瓦」に展示	H19.10.15～H19.11.30	緑釉軒平瓦２点（平城京左京二条二坊十二坪出土品）、三彩丸瓦１点（平城京左京二条二坊十二坪出土品）、三彩平瓦５点（平城京右京二条三坊十坪、右京二条三坊三坪、左京二条二坊十二坪出土品）、三彩垂木先瓦５点（史跡大安寺旧境内出土品）、緑釉塼１点（右京二条三坊十坪出土品）
7	奈良大学博物館	2007 年度冬季企画展「黄泉国へのいざない〜奈良市歌姫町赤井谷３号横穴の調査〜」に展示	H19.12.21～H20.4.25	陶棺２組（狐塚横穴群３号横穴出土品１組、敷島町出土陶棺１組）、狐塚横穴群３号横穴出土土器６点（須恵器４点、土師器２点）
8	大阪府立弥生文化博物館	平成 19 年度冬季特別展「発掘された日本列島 2007（地域展）発掘された大阪 2007−水都大阪の国際交流史」に展示	H20.1.7～H20.3.21	唐三彩７点（史跡大安寺旧境内出土品、平城京右京一条南大路出土品、平城京左京七条二坊六坪出土品、平城京右京五条一坊十五坪出土品、平城京右京二条二坊十二坪出土品、平城京右京二条三坊四坪出土品）、平城京左京三条四坊十一坪出土白釉硯１点、奈良三彩３点（平城京右京二条三坊十坪出土品、東市跡推定地出土品）

表３

	申請日	申請機関	目的	内容	その他
1	H19．５．１	奈良女子大学	21 世紀 COE プログラム『古代日本形成の特質解明の研究教育活動拠点』における平城京跡の遺構・景観復原研究に使用	近鉄大和西大寺駅南土地区画整理事業に係る発掘調査での空中撮影遺構図 97 枚	貸出
2	H19．６．４	株式会社岩波書店	村上隆著『金･銀･銅の日本史』に掲載	元興寺旧境内第 48 次調査出土蛭藻金写真１点	貸出、掲載許可
3	H19．６．７	香芝市二上山博物館	香芝市二上山博物館シンポジウム『邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬と大和』資料集に掲載	三条遺跡出土の弥生土器写真１点	貸出、掲載許可
4	H19.10.31	木簡学会	『木簡研究』第 29 号に掲載	平城京左京四条二坊三坪出土木簡 11 点、平城京左京五条四坊九・十六坪出土木簡１点、平城京左京二条七坊十五坪・奈良町遺跡出土木簡３点、左京三条六坊十坪・奈良町遺跡出土木簡１点	掲載許可
5	H19.12.14	株式会社美術出版	『ヨコガク世界史』に掲載	大安寺杉山古墳出土家形埴輪写真１点	掲載許可
6	H20.1.12	熊本県立大学	「日本の住まいの源流を探る」に掲載	『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和 54 年度「平城京左京五条二坊十四坪の調査」建物配置図	掲載許可
7	H20.1.21	財団法人法政大学出版局	秋田裕毅著『井戸』に掲載	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 11 年度「左京一条三坊十三坪の調査　第 440 次」井戸ＳＥ 12 井戸枠細部写真１点、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成７年度「平城京右京二条三坊三坪　第 310 次」ＳＥ 510 写真１点	貸出、掲載許可
8	H20．２.18	奈良市立大安寺小学校	校内に写真パネルを展示	大安寺杉山古墳全景写真１点、大安寺西塔跡出土軒瓦・水煙・風鐸各写真１点、大安寺杉山２号瓦窯全景写真１点、大安寺杉山古墳出土家形埴輪写真１点、大安寺旧境内全景写真１点	貸出

表４

	閲覧日	申請者	目的	閲覧資料名
1	H19．５.11	元興寺文化財研究所職員	個人研究	平城京第 89 次・176 次・228 次・258 次調査出土土器
2	H19．５.19	元興寺文化財研究所職員	個人研究	平城京第 89 次・97 次・559 次出土土器
3	H19．７．３	香芝市教育委員会職員	発掘調査出土資料との実物照合	平城京出土軒瓦
4	H19.11.21	奈良教育大学	講義での見学	ベンショ塚古墳出土甲冑

第　4　章　　紀要

平城京左京一条三坊五坪の井戸と出土土器

池田裕英

Ⅰ　平城京左京一条三坊五坪（市ＨＪ第520次）の調査

平成16年度に奈良市法華寺町で実施した市ＨＪ第520次調査では、削平された古墳を検出し、佐紀古墳群に関する新たな知見を得た。この法華寺垣内古墳は全長110ｍ程度の前方後円墳に復原でき、出土した埴輪などから５世紀中頃に位置づけることができる。この調査の概要は『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成16年度』に報告しているが、出土遺物についてほとんどふれることができなかったため、出土した埴輪は『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成18年度』に「法華寺垣内古墳とその埴輪」として出土資料の紹介をおこなった。

この調査では、古墳以外にも奈良～平安時代の掘立柱建物や土坑、石敷遺構、井戸、鎌倉時代の掘立柱建物、井戸などを検出した。特に奈良～平安時代の井戸からは良好な土器資料が出土していることから、ここでその井戸と出土土器の紹介をしておきたい。

この市ＨＪ第520次調査を行った場所は、平城京の条坊復原では左京一条三坊四・五坪にあたる。この調査は宅地造成に伴う事前の発掘調査で、開発予定地のうち道路や調整池になる部分に５つの発掘区を設けて実施したものである（図１）。

今回紹介する井戸ＳＥ05とそこから出土した土器は、敷地南東隅部に設けた第１発掘区で検出した（写真１・図３）。この発掘区では、掘立柱建物・掘立柱列等を検出したが、柱穴は多数みつかったものの、建物・塀としてまとまるものは少ない。埋土から瓦器が出土した柱穴もあり、平安～鎌倉時代の建物もある。これらの遺構の他、古墳の葺石や周濠を利用したと思われる石敷や溝状の遺構も検出している。これらの遺構からは奈良時代～平安時代初頭の土器が出土しており、その頃の遺構であることはわかるが、性格は不明である。

井戸は発掘区南端付近で検出し、古墳の周濠を埋め立てた整地土を掘り込んで作られている（写真２）。周濠は、埋土やそこから出土した遺物等からみて、平城京造営に伴いこの辺りを造成する際に古墳の墳丘の土を削って埋め立てられたと考えている。

井戸の西側には、東西2.8m、南北約５ｍの範囲に石敷がある（図２）。石敷は西から東に向かって緩やかに下る。この調査では、他の２箇所の発掘区で古墳の葺石を検出している。その箇所での墳丘葺石の角度と比べて、この石敷の傾斜が緩やかであることや基底石と思われる

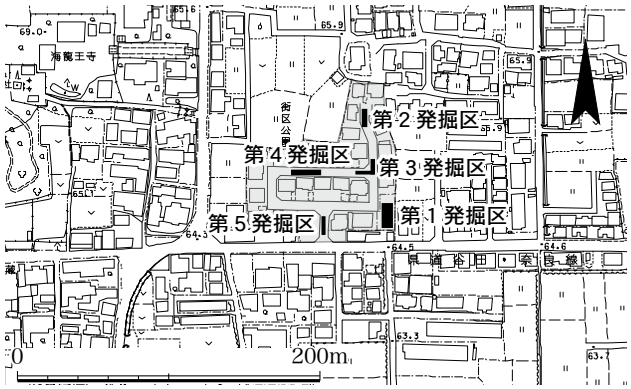
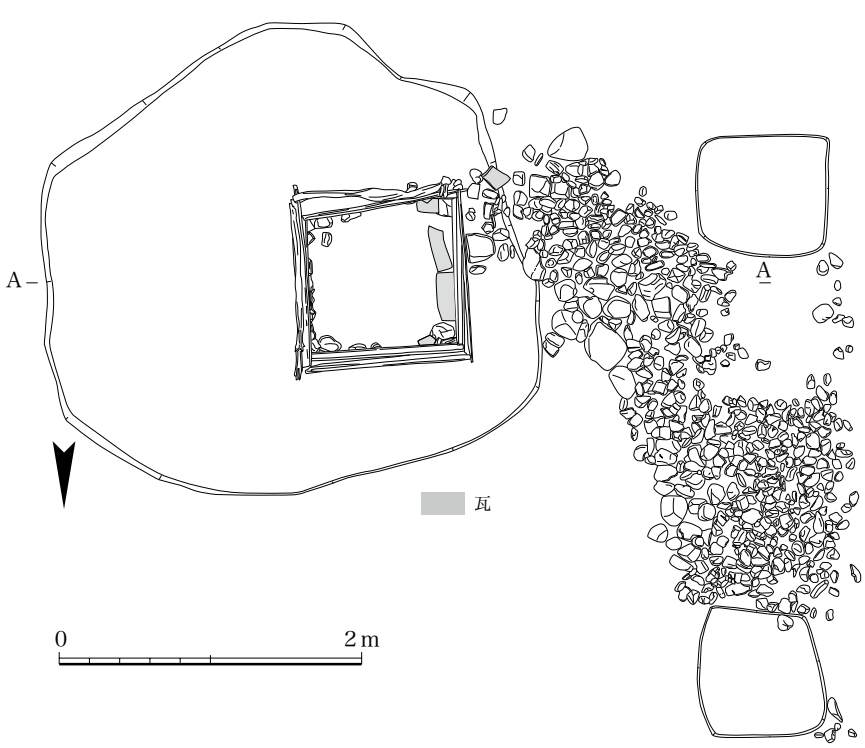


図１　ＨＪ第520次調査 発掘区位置図（1/5,000）

写真１　第１発掘区全景（北から）

写真２　井戸ＳＥ05と石敷遺構（西北から）

石がないことから、この箇所は古墳の葺石を置き直し、何らかの目的で井戸が作られる以前に古墳の周濠と葺石を利用した遺構があったと考えている。周濠埋土・石敷覆土の珪藻・花粉分析をおこなった結果、遺構は湿った土壌環境で、滞水はしておらず湿地のような状態であったことがわかった。石敷上や周濠埋土からは埴輪とともに奈良時代～平安時代の土器、陶器、軒瓦、鞴の羽口、坩堝といった遺物が出土した。井戸の掘形は石敷を壊して掘られているが、掘形断面の観察で上段の井戸枠の西



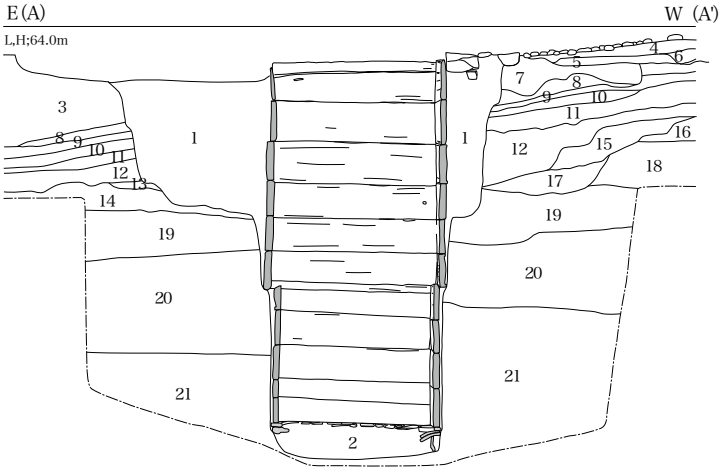


図2　井戸ＳＥ05平面・立面図（1/50）

図3　第1発掘区平面図（1/200）

1　暗灰黒色土・灰色粘質土混合土
2　灰色砂
3　青灰色粘土
4　灰褐色砂質土・青灰色土混合土
5　灰褐色砂質土
6　灰黒色粘土・灰褐色土混合土
7　青灰色土・灰褐色土混合土
8　黒色腐植土
9　暗黒灰色土
10　暗茶黒色土
11　黒色土
12　黒色粘質土
13　暗灰緑色土
14　青灰色砂質土
15　暗黒灰色土
16　暗灰緑色土
17　灰緑色粘質土
18　青灰色粘土
19　灰緑色粗砂
20　灰緑色土・橙黄色土混合土
21　暗灰緑色砂質土

に接する位置にある石・塼がいずれも水平にあったことから、人為的におかれたものと判断し、一時期、井戸と石敷とは併存していたと考えている。また、井戸の西側に一辺約1ｍの柱掘形を南北に２つ（柱間３ｍ）検出している。これより東側に柱掘形がないことから、掘立柱建物の北東隅と考えている。柱掘形からは小片の土器が出土したのみで詳細な時期は不明であるが、石敷を壊して掘られていることもあり、井戸と併存していた可能性もある。

Ⅱ　井戸ＳＥ05について

井戸の掘形は東西3.2ｍ、南北3.1ｍの不整円形で、断面形は２段掘りになっており、上部はやや広めに、下部はそれより狭まり枠材をほぼ収めることができる程度の大きさに掘られている。深さは2.6mである。

井戸枠は掘形の西に寄った位置に据えられている。枠材の一部に断面が山形をした材が使われており、後述のように屋根材とみられる（写真３）。井戸枠は上下２段になっており、いずれも横板を井籠組で正方形に組んでいる。上段は内法一辺1.1ｍで７段（1.5ｍ）、下段は内法一辺1.0ｍで５段（0.9ｍ）が残存していた。枠材は幅0.15～0.3ｍである。掘形の底部には平瓦や石を置き、その上に横板が置かれている状態であった。

枠に用いられた板材は全部で43枚あるが、屋根材とみられる断面が山形をした材は８枚あり、上段の枠にも下段の枠にも使われていた。これらの材は長さ113～114㎝、幅23～26㎝、厚さ４～５㎝である。いずれの材にも釘穴がみられる（図４）。このような断面が山形の屋根材は、現存する建物では法隆寺五重塔の裳階の

大和葺にみられ（写真４）、遺跡からの出土例では大阪市の細工谷遺跡からの出土資料がある[1)]。細工谷例は、長さ 209.5㎝、幅 30㎝、厚さ 3.5㎝で、材質はスギである。本遺跡から出土したこの枠材は形状からみて大和葺の下板と考えられる。大和葺は板葺き屋根の一種で、板を上下に両端が重ね合わさるように置き、上板は凹部を下に向け、下板は凹部を上に向けて置く。水の流れをよくするための工夫と考えられているようである。出土材も板の上を水が流れたためか、上面は摩滅がみられるが、西３段目の材のように稜線が明瞭に残っているものもある（図４下）。山形の材を大和葺きの下板と考えてよいのであれば、これと組み合うとみられる⌓型の上板にあたる材は出土していないが、釘穴がある枠材は他にもあり（端部を削り取ったような痕はない）、このような平らな板を上板として用いていたかどうかはわからないものの、これらも屋根材であったのかもしれない。この坪にこれらの材を用いていた板屋根の建物があったのであろうか。

Ⅲ　井戸ＳＥ 05 出土土器について

掘形、井戸枠内あわせて遺物整理箱にして７箱分の遺物が出土した。土器の他、丸瓦、平瓦、軒丸瓦（6132A・6138 B・複弁６弁蓮華紋軒丸瓦（姫寺廃寺同笵））、軒平瓦（6767 A）、鞴の羽口や坩堝等の鋳造関係遺物が出土している。以下で出土した土器について記す（図５）。

（１）掘形出土土器　掘形からは遺物整理箱で４箱の土器が出土した。出土土器は土師器には杯A、皿A、椀A・C、高杯、須恵器には杯蓋、杯A・B、皿A・Bがある。破片が多く、全形や調整手法のわかるものは少ない。

土師器（１～13）

杯A（１～３）では、３が口径 17.8㎝（復原）、器高 3.6㎝で、底部外面はヘラケズリ、口縁部はヨコナデしたのちヘラミガキしている。口縁部内面には２段の斜放射状暗文が施されている。

皿A（４～７）は７が口縁部内外面をヨコナデ、６が底部外面をヘラケズリ、口縁部下半はヘラケズリののちヘラミガキ、口縁部外面から内面はヨコナデ、５が口縁部外面をヘラケズリで調整する。これらの皿Aは時期の異なるもので、６・７はやや古い様相を、４・５は新しい様相を示すものであろう。

椀A（８～11）は小破片が多いが、11 は口径が 13.2㎝に復原できる。図示したものはいずれも口縁部外面をヘラケズリするｃ手法である。

椀C（12）は摩滅のため調整は不明である。口径は 13.2㎝（復原）である。

写真３　ＳＥ 05 井戸枠北面部分（北から）

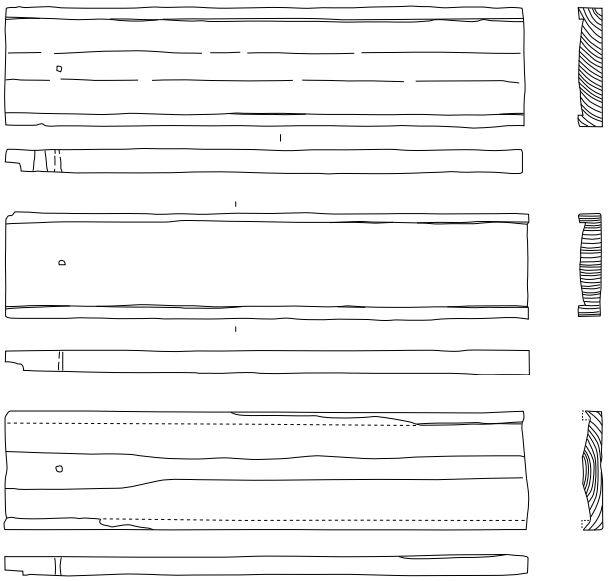


図4　井戸枠材模式図（上：北5段目・中：南4段目・下：西3段目）

写真４　法隆寺五重塔裳階大和葺

高杯（13）は皿部の口径が 16.4㎝に復原でき、９面に整えられた短い脚部が付く。皿部は口縁部外面がヘラミガキ、内面に斜放射状暗文が施されている。

須恵器（14～18）

杯蓋（14）は縁部が屈曲するA形態で、調整は内外面ともロクロナデである。口径は 18.0㎝に復原できる。

杯Bは15が口径8.6㎝、器高3.5㎝、16が口径16.6㎝に復原できる。いずれも調整は内外面ともロクロナデで、底部と口縁部の屈曲部近くに高台が付く。

皿B（17）は口径23.1㎝（復原）、器高3.8㎝、高台径19.4㎝（復原）である。高台は底部と口縁部の境からやや内側に入った位置に付く。調整は口縁部はロクロナデ、底部内面は不定方向ナデ、底部外面はロクロケズリである。

皿A（18）は口縁端部を内側に肥厚させる。口径は26.2㎝（復原）である。底部外面はロクロケズリののちロクロナデを施している。内面に火襷がみられる。

掘形から出土した土器は、平城宮土器Ⅱ・Ⅲの特徴を示すものもあるが、土師器の形態や調整手法などからみて8世紀末～9世紀初頭のものと思われ、井戸が構築された時期もその頃と考えられる。

（2）枠内出土土器　枠内から出土した土器は、土師器には杯蓋、杯A・B、皿A、椀A、甕、羽釜、竈、須恵器には杯蓋、杯A・B、皿A、椀、壷蓋、壷A・M、

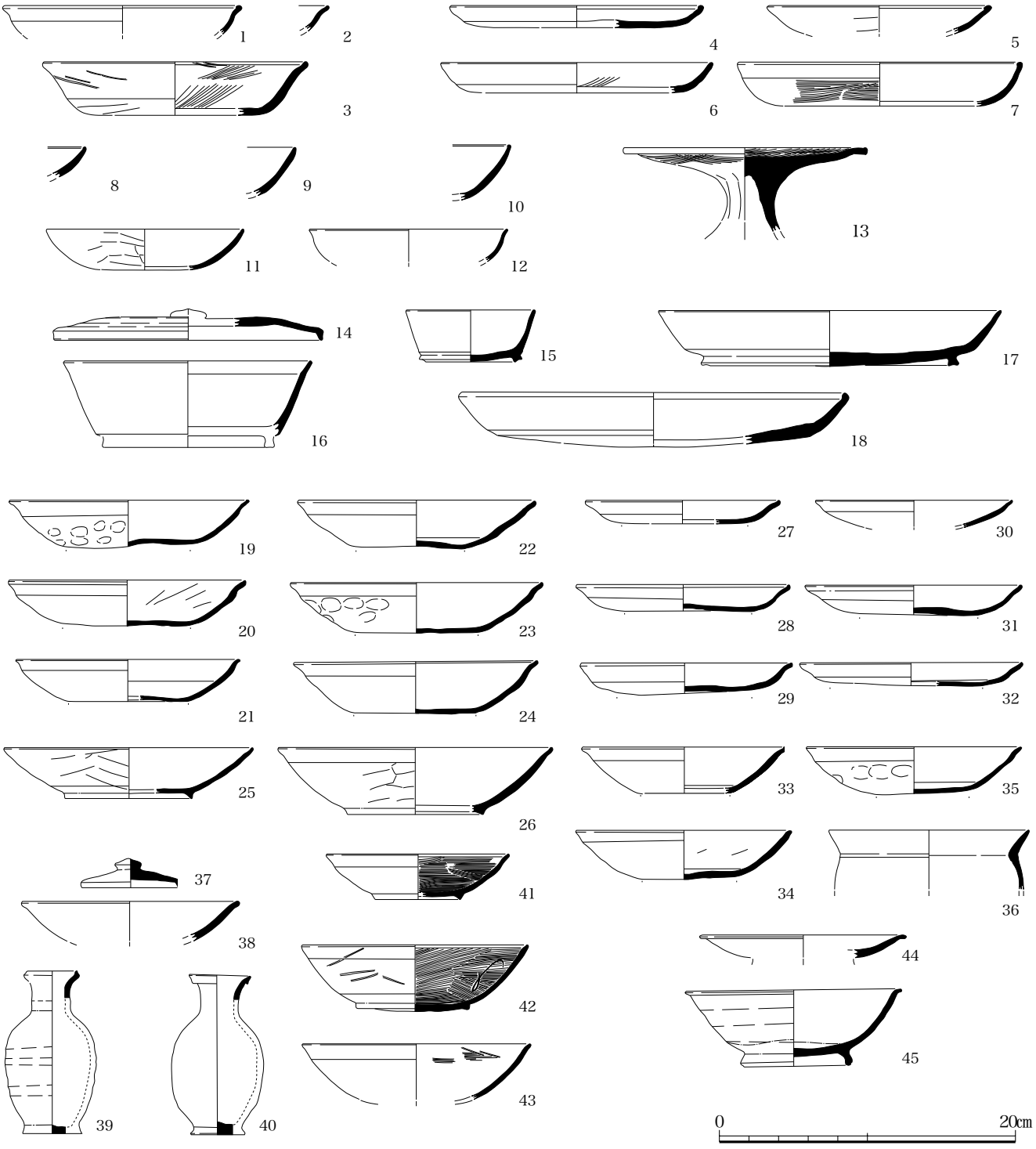


図5　井戸SE05掘形（1～18）・枠内（19～45）出土土器（1/4）

甕、黒色土器には杯、椀、緑釉陶器皿、灰釉陶器椀、製塩土器がある。破片数で228片で、その内訳は表１のとおりである。比率でみると須恵器の比率が高いが、これは甕の破片数が多いことによるもので、杯・皿・椀の食器類でみると表３のように土師器が６割を占め、黒色土器、須恵器が約２割づつとなっている。

土師器（19 ～ 36）

杯Ａ（19 ～ 24）の口縁端部の形態には内側に小さく肥厚させたものと、丸くおさめたものとがみられる。口径でみると 15.0㎝（21）のものと 15.9㎝（20）～ 16.9㎝(23) のものとの二群がある。器高は 2.9㎝(21) ～ 3.5㎝（24）である。調整は口縁部を強くヨコナデするｅ手法のもの、口縁部下半にユビオサエによる指頭圧痕が明瞭に認められるものが多い。20 の口縁部内面には斜め方向の工具痕が、底部内面には板状工具によるとみられるハケ目のような工具痕が残る。これ以外のほとんどのものは内面の調整は口縁部がヨコナデ、底部が不定方向ナデである。

杯Ｂ（25・26）は外面をヘラケズリで調整している。高台は接地面が尖り気味の逆三角形のような断面形状である。25 は口径 16.6㎝（復原）、器高 3.5㎝、26 は口径 18.5㎝（復原）、器高 4.5㎝である。他の杯・皿・椀と比べると、口縁部のヨコナデはそれほど強くない。

皿Ａ（27 ～ 32）には杯Ａと同じように口縁部を内側に肥厚させたものとまるくおさめたものとがみられる。口径 13.0㎝ (27) ～ 13.2㎝ (30) のものと 14.3㎝ (28) ～ 14.9㎝（32）の二群にわけることができるようである。器高は 1.6㎝（27）～ 2.0㎝（31）である。外面の調整は口縁部をつよくヨコナデし、口縁部下半はナデを加えているのみで、部分的にユビオサエによる指頭圧痕がみられる。形態は幅の広い平らな底部に口縁部が斜め上方に立ち上がるものであるが、30 は底部と口縁部の境がやや不明瞭で、他の皿とは異なる形態である。

椀Ａ (33 ～ 35) は口径 13.7㎝ (33) ～ 14.4㎝ (34・35)、器高 3.1㎝（33・35）～ 3.3㎝（34）である。いずれも口縁部をつよくヨコナデしている。35 の外面の口縁部下半にはユビオサエによる指頭圧痕が残り、34 の内面にはコテのようなものを使用したと思われる工具痕がみられる。

杯Ａ・皿Ａ・椀Ａは内面にヨコナデが明瞭に残り、それをみると、土器を正位置に置いたと仮定した場合、腕を時計方向に回していることがわかる。

36 は土師器甕である。口縁部をヨコナデするが、体部以下は摩滅が激しく調整は不明である。

須恵器（37 ～ 40）

37 は壷蓋である。外面には暗灰緑色の自然釉がかかる。調整はロクロナデである。口径 6.5㎝、器高 1.9㎝である。尾張産と考えられる。

38 は杯もしくは椀の口縁部である。口径は 14.6㎝(復原）で、調整はロクロナデである。口縁部上半に重ね焼きの痕跡がみられる。

壷Ｍ（39・40）はいずれも平高台で外面に糸切り痕がみられる。口縁部は上半が外反し、39 は端部を上方へつまみあげているが、40 は端部下半を下方に引きだしている。口縁部､体部内外面とも調整はロクロナデである。

黒色土器（41 ～ 43）

いずれも内面に炭素を吸着させる黒色土器Ａ類であるが、炭素の吸着は口縁部外面にまで及んでいる。41・42 は高台が付くが、43 は不明である。42 は内外面ともヘラミガキを施しているが、外面のヘラミガキは粗い。内面に螺旋状のヘラミガキを加えている。他の２点は外面の摩滅が激しく調整は不明である。口径・器高は、41 が 12.2㎝（復原)･3.1㎝、42 が 15.2㎝･4.5㎝、43 が 15.3㎝（復原）である。

表１　ＳＥ 05 枠内出土土器の構成

種類	器種	破片数	比率(%)
土師器	杯蓋	1	1.1
	杯A	13	14.5
	杯B	2	2.2
	皿A	13	14.5
	椀A	10	11.1
	杯ヵ皿	10	11.1
	杯ヵ椀	8	8.9
	甕	17	18.9
	羽釜	1	1.1
	竈	1	1.1
	製塩土器	3	3.3
	不明	11	12.2
小計		90	100
須恵器	杯蓋	6	5.1
	杯A	1	0.8
	杯B	1	0.8
	杯AヵB	2	1.7
	皿A	1	0.8
	杯ヵ皿	5	4.2
	杯Bヵ皿B	2	1.7
	壷蓋	1	0.8
	壷M	2	1.7
	甕	94	79
	不明	4	3.4
小計		119	100
黒色土器	杯ヵ椀	2	11.8
	椀B	4	23.5
	椀	11	64.7
小計		17	100
緑釉陶器	皿	1	100
小計		1	100
灰釉陶器	椀	1	100
小計		1	100
合計		228	100

表２　種別ごとの構成

種別	破片数	比率 (%)
土師器	90	39.5
須恵器	119	52.2
黒色土器	17	7.5
緑釉陶器	1	0.4
灰釉陶器	1	0.4
合計	228	100

表３　食器類の構成

種別	破片数	比率 (%)
土師器	57	60.6
須恵器	18	19.1
黒色土器	17	18.1
緑釉陶器	1	1.1
灰釉陶器	1	1.1
合計	94	100

緑釉陶器（44）

皿である。高台付近から下部を欠損しているが、高台が付いた痕跡は残っている。調整は外面がロクロケズリ、内面はヘラミガキが施されている。口径は14.0㎝(復原)である。京都産であろう。

灰釉陶器（45）

椀である。口径14.5㎝、器高5.2㎝、高台径7.5㎝で、底部外面をロクロケズリしている。内外面ともハケ塗りにより施釉されている。美濃産と考えられる。

Ⅳ　土器の時期や特徴に関する考察

ここまで個々の土器について概述してきたが、以下で枠内出土の土器群の時期や特徴についてみていくこととしたい。それにあたって最も有用なのは土師器食器類であろう。

杯Bを除くと、外面をヘラケズリするc手法で調整しているものはほとんどなく、口縁部を強くヨコナデするe手法の土器が多数をしめる。

食器類の法量は、以下のように

杯AⅠ	口径15.9～16.9㎝	器高3.1～3.5㎝
杯AⅡ	口径15.0㎝	器高2.9㎝
杯BⅠ	口径18.5㎝	器高4.5㎝
杯BⅡ	口径16.6㎝	器高3.5㎝
皿AⅠ	口径14.3～14.9㎝	器高1.6～2.1㎝
皿AⅡ	口径13.0～13.2㎝	器高1.6㎝
椀A	口径13.7～14.4㎝	器高3.1～3.3㎝

となっている。法量分布（図6）をみると、杯・皿では大・小二群の法量分化をみてとることができる。また、形態の違いという点から杯・皿・椀の図を重ねあわせてみたのが図7である。皿は器高が低いので杯・椀とは明瞭に区別することができる（←位置）。杯と椀とは、法量が近似するものでも底部から口縁部への立ち上がりの位置が異なっていることをみてとることができ（▲位置）、形態でも杯・皿・椀を分けることはできるようである。参考として、これを数値化して示したのが表4である。出土点数が決して多くはないので量的な問題はあろうかと思われるが、径高指数[2]をみると、杯A・椀Aは19～23の範囲の数値を示すが、皿Aは10～15となっており、これによって杯・椀と皿とを分けることができそうである。また、杯と椀とについては底径を測り、外傾指数[3]を用いた。底径を測る際、底部と口縁部との境の区切りについては、本土器群では土器や実測図から立ち上がり部をみてとることが比較的明瞭と思われるが、あわせて土器の外傾線の傾きの変化量を計り、それが大きく変化し始める箇所を求めた[4]。そうすると、杯Aとしたものが45～53の、椀Aとしたものが43.1～43.8の数値となった。ただし、図5・表4でもこの中間に位置するようなものもみられ（図5-22）この時期以降、杯と椀との法量の顕著な差がみられなくなってくる傾向がより強くなることもあり、その区別が難しくなるが、その特徴を示しているものであろう。

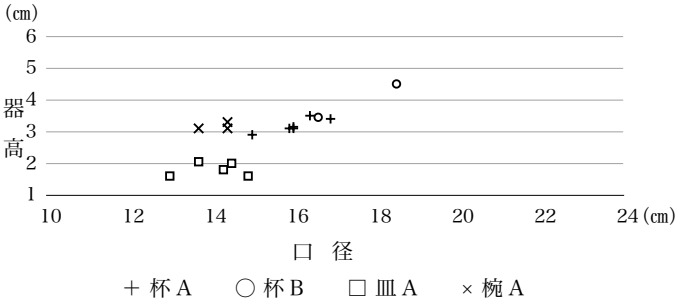


図6　SE05枠内出土土師器食器類の法量分布

表4　SE05枠内出土土師器杯・皿・椀の法量

図版番号	器種	口径*	器高*	底径*	径高指数	外傾指数
19	杯A	16.0	3.2	8.3	20.0	51.9
20	杯A	15.9	3.1	8.5	19.5	53.5
21	杯A	15.0	2.9	8.2	19.3	54.7
22	杯A	16.0	3.1	7.3	19.4	45.6
23	杯A	16.9	3.4	8.2	20.1	48.5
24	杯A	16.4	3.5	8.2	21.3	50.0
27	皿A	13.0	1.6	8.4	12.3	64.6
28	皿A	14.3	1.8	8.5	12.6	59.4
29	皿A	13.7	2.1	9.0	15.3	65.7
31	皿A	14.5	2.0	8.0	13.8	55.2
32	皿A	14.9	1.6	10.2	10.7	68.5
33	椀A	13.7	3.1	5.9	22.6	43.1
34	椀A	14.4	3.3	6.3	22.9	43.8
35	椀A	14.4	3.1	6.2	21.5	43.1

(＊単位㎝)

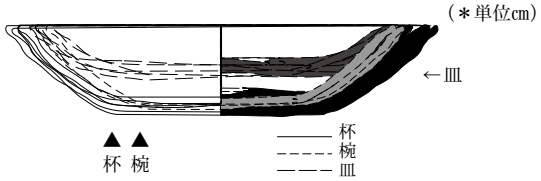


図7　杯・皿・椀の重ね合わせによる形態の比較（1/3）

この土師器と共伴した施釉陶器は、緑釉陶器が栗栖野13号窯段階で9世紀第2四半期頃[5]、灰釉陶器が美濃窯光ヶ丘1号窯式期で9世紀第4四半期頃のものと考えられる[6]。

以上のように調整手法、法量に注目し、奈良市内で調査された同じような時期の資料の中から類例を探すと、平城宮第15次調査SK1623出土土器（以下、宮SK1623と略記[7]）、東大寺西南院SE04出土土器[8]、史跡大安寺旧境内第60次調査SK05（以下、DA60–SK05と略記[9]）があげられる。これらは9世紀後半～10世紀初頭に位置づけられている資料である[10]。宮SK1623とDA60-SK05の杯・皿・椀の法量分化の様子についてはSE05の数値とともに表5に示したとお

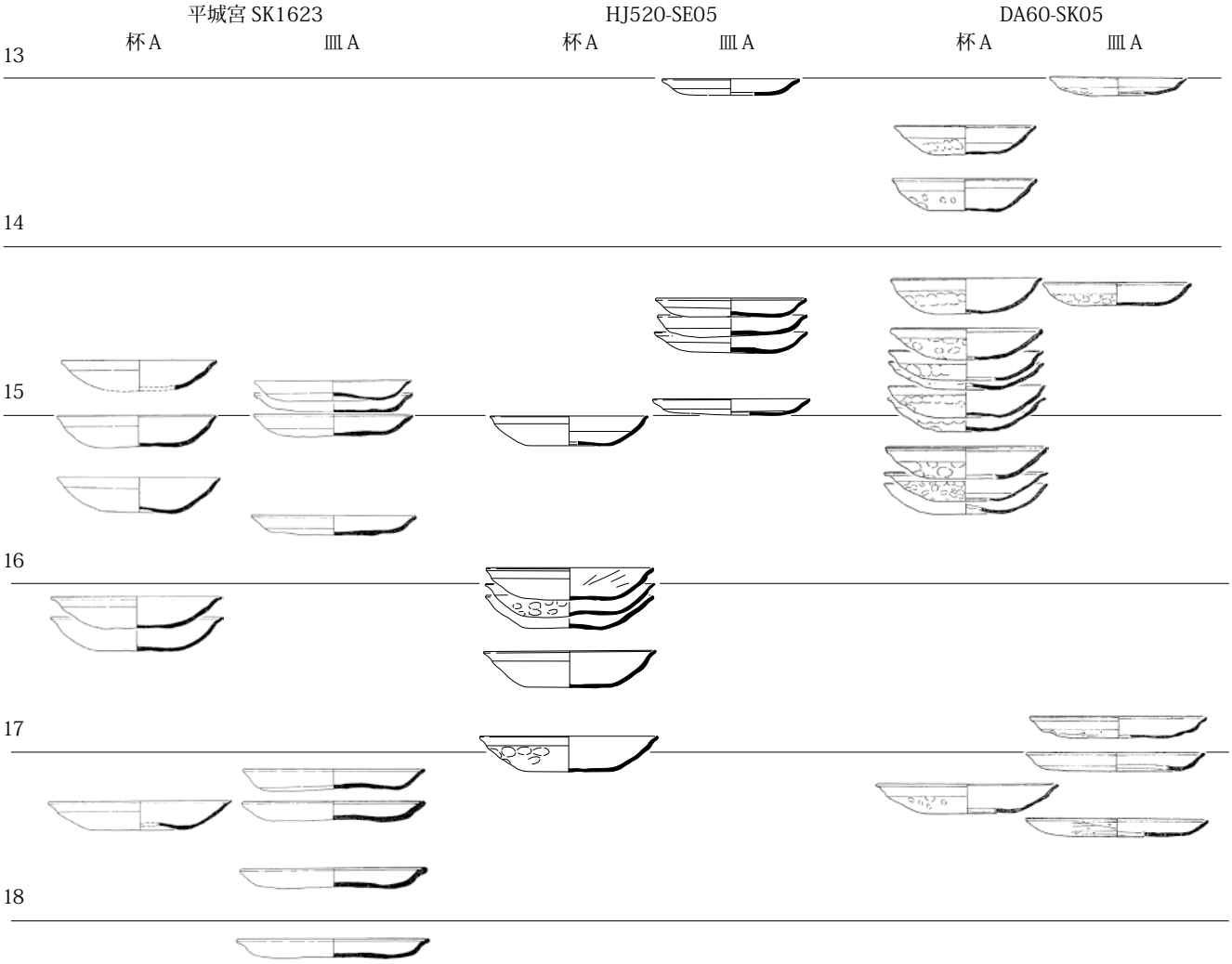


図８　宮 SK1623・HJ520-SE05・DA60-SK05 出土杯・皿の法量比較（単位㎝）

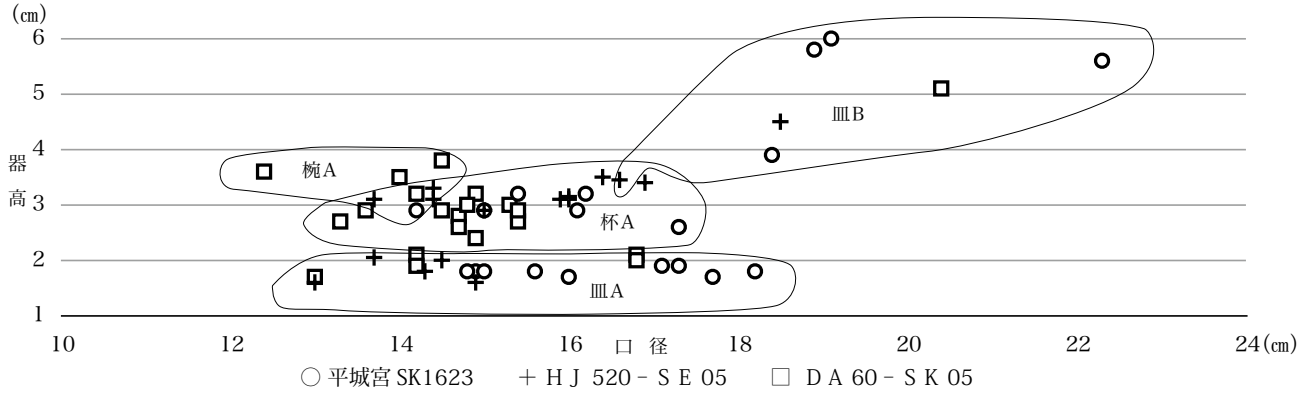


図９　宮 SK1623・HJ520-SE05・DA60-SK05 出土杯・皿・椀の法量分布

りで、これらの土器群との比較をおこなってみたい。

宮ＳＫ 1623 出土土器は、個体数で 368 個体の土器が出土しているが、その内訳は土師器 86.8%、須恵器 2.0%、黒色土器 6.2%、中国製陶磁器 0.5%、灰釉陶器 3.5%、緑釉陶器 1.0% となっている。器種では報告書によると椀Aがないが、図示されている資料をみると椀Aとしてよいと思われるものもある。これは当該期にみられる杯と椀との区別の困難な器形の土器であろう。杯Aは個体数でみると、口径 14.0 ～ 15.5㎝の杯ＡⅡと 13 ～ 14㎝のＡⅢが多くを占める。皿Ａは口径 17 ～ 18㎝台の皿ＡⅠと 14 ～ 15㎝台のＡⅡとがみられるがＡⅡが主体となっている。調整は多くがｅ手法で、e-c 手法のものが少量出土している。灰釉陶器は尾張産の K-90 号窯式のものが共伴している。

ＤＡ 60-ＳＫ 05 出土土器には、土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・青磁・白磁が出土しており、比率は不明であるが、この順で多いようで、食器類のほとんどが土師器である。土師器杯A・皿Aは、とも

表５　各遺構出土の杯・皿・椀の法量

	宮SK1623	HJ520-SE05	DA60-SK05
杯ＡⅠ	16～17	15.9～16.9	17.0～17.3
Ⅱ	14.0～15.5	15.0	16.0～16.6
Ⅲ	13～14		14.0～15.4
Ⅳ			12.2～13.4
皿ＡⅠ	16.8		18.2
Ⅱ	14.6～15.3	14.3～14.9	16.2～17.3
Ⅲ			13.6～15.6
Ⅳ			11.4～12.8
椀ＡⅠ		13.7～14.4	13.6～14.2
Ⅱ			12.4～14.2

に口径が17～18㎝台のやや大きいものが出土しているが、量的に多いのは15～16㎝台のものである。また、器厚がうすく口縁部も開き気味で、口縁部のヨコナデが強いものもみられる。調整手法は杯・皿・椀ともｅ手法のものが主体であるが、皿Ａの17㎝台のものにe-c手法を用いている一群がある。椀Ａはｅ手法である。共伴した灰釉陶器はK-90号窯式のものとK-14号窯式のものとがあるが、前者が多い。

奈良時代後半から平安時代前半にかけての土師器食器類の変化は、基本的には法量が縮小し口径の大きいものが減少していく、調整手法の簡略化が進み器厚が徐々に薄くなっていく方向性にあるといってよいであろう。杯と椀とは法量からも形態の区別が困難となり、口縁部の開きが強くなってくる傾向がみられる。これらの点から上記の資料をみると、ＨＪ520-ＳＥ05枠内出土土器は図８で示したように法量をみても宮ＳＫ1623とＤＡ60-ＳＫ05との中間的な要素があると考える。ＨＪ520-ＳＥ05とＤＡ60-ＳＫ05とを比べたとき、杯・皿に口径の縮小化がみられることや杯と椀との形態の区別が困難なもの、杯・皿の器壁がより薄いもの、口縁部のヨコナデがより強いものがＤＡ60-ＳＫ05出土土器により多くみられることなどもその理由である。そうすると、このＨＪ520-ＳＥ05枠内出土土器は９世紀後半～末頃の年代が与えられると考える。掘形出土土器が８世紀末～９世紀初頭と考えているので、井戸が使用された期間は約100年間となろうか。

ＳＥ05出土土器には、宮ＳＫ1623・東大寺西南院ＳＥ04・ＤＡ60-ＳＫ05にみられる口径が16～17㎝台の皿Ａがない。また、緑釉陶器の皿はこの時期の土器群と共伴している緑釉陶器と比べると、口縁端部がやや厚いなどの点から古い様相を示しているものと思われ、緑釉陶器の使われ方が他の遺構出土のものと違っていたとも考えられる。宮ＳＫ1623が平城宮という宮殿、ＤＡ60-ＳＫ05が寺院で使用された土器群であることを考えると、これらの点は使用された機関・施設などの違いを考慮する必要があるのかもしれない。

Ⅴ　おわりに

この調査をおこなった場所は平城宮から東に約500m程のところで、宮からもそう遠くない。この付近では左京一条四坊の調査で検出した東三坊大路の側溝（ＳＤ650）から９世紀後半～10世紀初頭の土器[11]が、左京一条三坊十三坪の井戸枠内から９世紀中頃～10世紀前半の土器が混在して出土している[12]。古代の大和–山城を結ぶコナベ越えといわれる当時の幹線道路にも近い。そういう場所で平安時代の井戸や石敷遺構を検出し、新たな土器資料を加えることができたことは、長岡京遷都以降における平城宮東方の佐紀・佐保といった地域の土地利用を考えるうえでも興味深いことと考える。

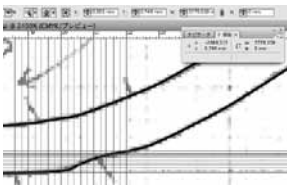
註）

1）李　陽浩・岡村勝行「「百済尼寺」の屋根材か？」（財）大阪市文化財協会『葦火』第70号　1997

2）器高 / 口径 ×100 で計算。

3）器高 / 底径 ×100 で計算。なおこの用語について、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅱ』1962で、口縁の外傾度を示す指数として外傾指数を用いているが（P90・91）、算出するに際して「口縁の外傾度を示す指数は口径乃至器高に対する底径の比率によるのが理想的だが、底部と口縁部の境界が不明瞭だから、できるだけ底に近くへら削りの影響をあまりうけないと考えられる器高1/3の高さにおける距離を底径に代用した。」とある。本稿では底径を測り、数値を求めたことから「外傾指数」の用語を用いることとした。なお、本来必要であろう検定は行っていない。

4）底部と口縁部の境界を区切るに際して、外形線を底部中心から２㎜ごとに高さの変化量を計測し、変化量が大きく変わり始めた位置を境界とした。これにはadobe Illustratorを使用し、下図のようにグリッドとガイドを使って数値を読み取った。



5）高橋照彦「平安京近郊の緑釉陶器生産」古代の土器研究会第７回シンポジウム『古代の土器研究　平安時代の緑釉陶器–生産地の様相を中心に–』古代の土器研究会　2003

6）齋藤孝正「東海地方の施釉陶器生産–猿投窯を中心に–」古代の土器研究会第３回シンポジウム『古代の土器研究　律令的土器様式の西・東３　施釉陶器–』古代の土器研究会　1994

7）奈良国立文化財研究所　奈良国立文化財研究所学報第42冊『平城宮発掘調査報告ＸⅡ』1985

8）奈良国立文化財研究所『昭和54年度　平城宮跡発掘調査部概報』1980

9）奈良市教育委員会「１　史跡大安寺旧境内の調査　（１）僧房跡　西太房の調査　第60次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成５年度』1994

10）三好美穂「南都における平安時代前半期の土器様相–土師器の供膳形態を中心とした編年試案–」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1995』奈良市教育委員会1996

11）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』1975

12）奈良市教育委員会「4.平城京左京一条三坊十三坪の調査　第440次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成11年度』2001

印刷・製本仕様データ

表　　紙：アートポストカード 220kg・マット pp 加工
見 返 し：白色上質紙 110kg
巻頭図版：特アート紙 135kg
本　　文：白色マットコート紙 90kg
本文ﾌｫﾝﾄ：ヒラギノ明朝体
製　　本：左開き・糸かがり綴じ

© 2010 by the Nara Municipal Board of Education
No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報
平成19（2007）年度

ISSN 1882-9775

印　刷　平成22（2010）年3月16日

発　行　平成22（2010）年3月26日

編　集　奈良市埋蔵文化財調査センター
630-8135 奈良市大安寺西二丁目 281 番地
TEL　0742-33-1821
FAX　0742-33-1822
URL　http://www.city.nara.nara.jp/
E-mail maizoubunka@city.nara.lg.jp

発　行　奈良市教育委員会
630-8580 奈良市二条大路南一丁目１－１
TEL　0742-34-1111（代）

印　刷　実業印刷　株式会社
630-8144 奈良市東九条町 6-4

この冊子は、300 部作成し、1 部当たりの印刷経費は 2,520 円です。

ISSN 1882-9775

ANNUAL RESERCH REPORT

OF

ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA

2007

CONTENTS

Ⅰ PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS IN NARA CITY AREA IN 2007.

Ⅱ REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL SCIENCE .

Ⅲ REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT FOR ARCHAEOLOGICAL SITES AND MATERIALS IN 2007.

Ⅳ BULLETIN OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCHCENTER OF NARA CITY.

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION,

2010

ANNUAL RESEARCH REPORT

OF

ARCHEOLOGY IN NARA CITY AREA

2007

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION , 2010